
I Sーインフィニット・ストラトスー三種のISを操る者

岩田

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS—インフィニット・ストラトス—三種のISを操る者

【Nコード】

N0819V

【作者名】

岩田

【あらすじ】

どこにもいる普通の男だった自分……だが、あの事故から、左腕に謎のリストバンドがあり、それから俺は妙な感覚だった。

そして危険に瀕した時、左腕のリストバンドが光り輝き、光が晴れた時、俺はISを身に纏っていた……。

そして、ISをめぐる戦いが始まる……

※色々とオリジナル要素を含みますが、原作とアニメ版のストーリーを取り入れています。

そしてダンボール戦機のネタがちらほら入っています。

アドバイスや感想を募集します！

S t o r y 1 I Sを使う者（前書き）

（修正）

Story 1 ISを使う者

インフィニット・ストラトス・・・通称「IS」

女性にしか反応しないといわれる世界最強のパワードスーツ。

その為、男女のバランスが大きく変わり、今では女性のほうが優位である。

しかし、ISは女性にしか反応しない、というのが常識であったが、つい最近、世界で初めて、一人の男性がISを使用した、ということが起きた。

・・・・・・・・・・・・・・・・

そして、その事態が起きて、数日後のこと・・・

ここは、とある都市部・・・。

そこの歩道を、一人の少年が歩いていた。

「はぁ・・・何でまた店がつぶれなきゃいけないんだ・・・これで4度目だぜ・・・。」

と、ため息をついて、愚痴った。

その少年は、少し青みがかった黒い髪をして、瞳の色は少し黒っぽい茶色であったが、右目には、黒い眼帯をしていた。

体格は細身だが、腕は結構がっちりとしていた。

そして、左腕には、白いリストバンドをしていたが、外見はどうも機械っぽく、外側を向いている面には、黒、オレンジ、青のクリアパーツがあった。

（これじゃ・・・今月は厳しいな・・・。次はどこに行くか・・・。）

と、考えながら、歩いていった・・・

その少年が歩いている反対側の歩道に、二人の女性が歩いていた。

「・・・しかし・・・今日は暑いですね・・・。」

と、緑の髪をして、眼鏡をかけた結構巨乳の女性が言った。

「・・・そうだな・・・。」

と、黒い髪をした女性はさらりと受け流した。

「ん？」

すると、黒い髪の女性が向こう側の歩道にいた少年を見た。

「どうしましたか？ 織斑先生？」

「・・・・・・・・いや・・・・・・・・なんでもない・・・・・・・・。」

と、織斑先生は再び歩き出した。

少年はしばらく歩いていき、デパートの横で立ち止まった。

「・・・・・・・・気晴らしに、景色でも見るかな・・。」

と、少年はデパートに入っていった。

そして、少年はデパートの屋上に出ると、そのまま端の手すりにもたれかかった。

（さて・・・・・・・・じっちゃんには・・・・・・・・どう言おうかな・・・・・・・・。）

と、空を見ながら、言い訳を考えていた・・・・

その姿を、遠くで見ている人がいた。

それは、さっき向こう側の歩道にいた女性二人であった。

「・・・織斑先生・・・どうしてあの男の子についていったんですか？」

「・・・少し気になるところがあるので・・・しばらく様子を見る。」

「・・・はあ・・・。」

と、微妙に理解できない様子であった。

すると・・・

「ちょっと！ベビーカーが！」

「！！！」

と、織斑先生が気付いた時には、ベビーカーが勝手に進んでいた。

デパートの屋上が傾いているからだ。その先は手すりがあるが、その衝突時の衝撃で、中の赤ん坊はデパートの屋上から放り出されてしまう。

「いかん！」

と、とっさに飛び出したが、距離的に間に合わない。

そして、ベビーカーは手すりに衝突すると、中の赤ん坊が屋上から

放り出されてしまった。

その瞬間、赤ん坊を追うように誰かが飛び出した。

「!!」

それは、あの少年であった。

少年は放り出された赤ん坊をキャッチし、その先にあったバルーンのロープの中間につかまった。

だが、少年の重さによって、バルーンは落ちていき、それによって少年はデパートの壁に一直線だった。

そして、少年はデパートの壁に強く衝突した。

「ぐはッ！」

とっさに頭からは行かないように避けたが、右腕に直撃し、その衝撃で頭も強く打ってしまった。

「ううう・・・」

頭に受けた衝撃で、気を失いかけていた。

「あいつ・・・なんて無茶を・・・。」

織斑先生は屋上から、その一部始終を見ていた。

「ど、どうしましょう!?!」

と、慌てる山田先生。

「山田!・・・急いでISを装着しろ!」

「えっ!?!・・・で、でも、ISは下に置いていきましたよ!?!」

「急いで取りに行け!?!」

「は、はい!?!」

と、急いで走っていった・・・

(・・・もう・・・限界だ・・・)

そして、限界を超えて、少年の手はロープを離してしまった。

それによって、少年はそのまま落ちていった。

(・・・やっぱり・・・こういう・・・おちか・・・助けたはいいが・・・つくづく運がないな・・・俺って・・・)

そして、宙で少年は背を地面に向けた。

(せめて・・・赤ん坊だけでも・・・助ける!・・・ごめん・・・じっちゃん・・・それと・・・もう一度・・・会いたかったな・・・)

・・・神夜・・・。

と、目を閉じ、覚悟を決めた・・・。

しかし、ずっと目を閉じてても、何も感じなかった。

(???)

少年は不思議に思い、目を開けると、不思議なことが起きていた。

周りに景色の動きが、異常なまでに遅くなっていた。

まるでスロー映像でも見ているかのようにだった。

(一体・・・何が?)

(・・・死ぬな・・・)

(!?)

(お前は死んではならない・・・)

(誰だ!?)

(・・・俺はここだ・・・)

と、少年は前を見ると、そこに3体の影が居た。

その形は、まるで機械のようであった。

右の影は、かなりごつい形状で、額に鋭く尖った刃の形の角があり、うっすらと青い色が見えた。

左の影は、右とは対照的に、すらりとした形状で、背中から四つの翼が見え、色は白く、うっすらとオレンジが見えた。

そして、中心の影は、左右の比べると、似たところがいくつかあり、色は黒く、両前腕に三本の棒があった。

その三体の影は、いくつか共通したところも持っていた。

（何だ・・・お前たちは・・・）

（・・・我々は・・・お前の力だ・・・）

（・・・力？・・・）

（・・・最強の力・・・「IS」だ。）

（IS！？・・・お前たちが・・・俺の？）

（そうだ・・・レイ・ラングレン。）

（・・・だが、俺はISなんか・・・いや、どうして俺が！？）

（お前の左腕のものは何だ？）

(・・・これは・・・そういえば・・・)

少年・・・レイの左腕には、白いリストバンドをしていた。

(・・・あの事故の後から・・・あったもの・・・)

(・・・理解したのであれば・・・今こそ我らの力を・・・使う時だ。)

(お前たちの・・・力・・・)

(・・・唱えろ・・・我が名を・・・)

(な、我が名をって・・・名前は・・・)

(・・・我の名は・・・ファントム・・・「ゲシュペンスト・ファントム」・・・)

(・・・ファントム・・・)

(・・・唱えろ・・・我を！)

(・・・こい！ファントム！！！)

すると、左腕のリストバンドが光り輝いた。

「！?・・・なんだ!？」

すると、落ちている途中で、レイの周りに光の玉ができた。

そして、光の玉が一気に晴れ、そこから黒い機体が現れた。

「あれは！・・・」

それは、黒き色をして、肩は外側に伸び、背中には二つの大きな翼があり、その基部の上に、白い中型の銃が装着され、両前腕にそれぞれ三本の棒があり、頭の目に当たる部分には、緑色のバイザーがあった。

変化直後に、ファントムが飛び上がり、一気にデパートの屋上を越えた。

そして、ファントムはゆっくりと屋上に着地した。

「・・・・・・」

そして、レイは下のほうを見ると、腕の中には、泣いてはいるが、赤ん坊は怪我一つなかった。

すると、赤ん坊の母親が慌てて寄ってきた。

「大丈夫ですよ、奥さん・・・。赤ん坊は無事です。」

と、レイはひざを着いて、母親に赤ん坊を渡した。

「ありがとうございます！！・・・本当にありがとうございます！！」

と、必死にお礼を言った。

と、レイは立ち上がった。

（・・・！？・・・なんだ・・・。ここから離れろ？）

レイは一瞬理解できなかったが、すぐにファントムが浮かび上がり、デパートの屋上から飛んでいった。

「・・・・・・・・・・」

と、織斑先生はポケットから通信機を取り出した。

「山田・・・」

「織斑先生・・・準備は一応できましたけど・・・事態は解決したように見えましたけど・・・」

「今すぐ、デパートから離れたISを追え！」

「えっ！？・・・は、はい！」

と、デパートの下で、ISを装着した山田先生は、すぐに飛び上がり、ファントムを追った。

その頃、レイは市街地の上空を飛んでいた。

「・・・ISか・・・俺も・・・使えたのか・・・つい最近、世界で始めて男性がISを動かした・・・って、報道されたばかりだつて言うのに・・・俺はその二人目か・・・。」

と、独り言のように言っていると、異変が起きた。

「!?!?・・・なんだ!?!?・・・頭の中に・・・データが・・・」

いきなりのことで、レイはと惑っていたが・・・

「わかる・・・分かるぞ!?!?・・・こいつの動かし方・・・知識が!?!?」

すると、目の前のモニターに「後方より一機のISが接近中」と出てきた。

「!?!?」

と、後ろを見ると、ISを装着して、追跡する山田先生がいた。

「ISが追っている!?!?・・・まあ、そりゃ・・・追うかな・・・。男がISを使っているところと、たぶん自分のISを持っているからかな・・・。だが、捕まりたくはないね。」

と、レイはファントムのスピードを上げた。

「織斑先生……ISが速度を上げましたけど……」

『……恐らく警戒しているのだろう……。とにかく、それを逃がすなよ。』

「……分かりました。」

と、スピードを上げ、ファントムに迫った。

「そのIS……止まってください！」

と、ファントムに向け、呼びかけた。

「何だ？……何か叫んでいるようだけど……。よく聞こえない……。」

レイは山田先生の呼びかけに気付いているが、その内容は聞こえていなかった。

「……。とにかく、逃げるか。」

と、更にスピードを上げた。

「……。返事がない……。どうしようか……。織斑先生……。」

『……とりあえず、呼び続けて、追いつける。場合によっては攻撃を許可する。』

「……はい。」

と、更にスピードを上げ、ファントムに迫った。

「くっ！……しつこいな……。ならば！」

と、レイは高度を下げ、市街地の間を駆けていった。

その後を追うように、山田先生も追った。

レイはまるで始めて起動させたとは思えない動きをして、市街地の間をダイナミックに駆け抜けていった。

山田先生も、後を追っているが、必死に追っている様子であった。

「い、意外と動きますよ！？織斑先生！」

『……ならば、今から増援で教師部隊を送る。追いつめる場所に追いつめ。』

「わ、分かりました！」

そして、市街地の間を駆け抜けていき、ファントムを追った。

（このままじゃ……。仕方が無い。海に出るか！）

と、レイは海がある方向にビルの間を駆けていき、港へいった。

そして、ファントムは港から海へと出た。

「織斑先生！ ISが海に出ました！」

『そこなら、市街地に被害はないな・・・ならば、攻撃を許可する。』

「了解！」

と、両手にサブマシンガンを召喚し、ファントムに狙いをつけた。

「な、何！？」

すると、センサーの警報が鳴り、モニターに「警告！ 後方のISよりロックされました」と出た。

レイはとっさに回避行動を取ると、後方から弾が降ってきた。

「な、何で攻撃をして来るんだ！？」

と、愚痴りながら、弾を避け続けた。

そして、一部の弾がファントムの背面に当たった。

「くう！」

少し衝撃が来て、モニターの「シールドエネルギー」が少し減った。

「やられっぱなしは性に合わないんだよ！・・・何か武器は・・・」

すると、モニターに、武器が映った。

それは、背中に装着されている武器であった。

「・・・『グランショットガン』？・・・銃か・・・よし！」

そして、少し進んで、一気に背面を向いた。

「!!」

山田先生はいきなりのことに、一瞬と惑った。

直後、ファントムが背中の二つの武器を手に取り、それを向けてきた。

「・・・！？ロックされた!？」

顔の目の前のモニターに「警告! 前方のISにロックされました」と出た。

そして、ファントムが攻撃してきた。

「!!」

山田先生はとっさに弾を回避した。

「くらえ！くらえ！」

と、連続でショットガンを連射した。

撃つたびに、銃先端下部のリロードバーが自動で前後に動いた。

相手は素早い動きで攻撃を避けながら、サブマシンガンで攻撃してきた。

レイも相手の攻撃を避けながら、ショットガンで攻撃した。

そして、ようやく相手に弾が命中した。

「やった！ようやく一発！」

と、すぐに攻撃しようとしたが、ガキン・・・と鈍い音になった。

「!?!」

すると、モニターに「弾切れ」と出てきた。

「くッ！」

レイはショットガンを元の位置に戻し、相手の攻撃を避けた。

そうしている内に、海を大きく迂回しながら、元の港に戻っていた。

「くそ!どうすれば……?」

すると、新たに武器が移った。

それは、透明の黄色い刀身を持った剣であった。

「・・・『グランプラズマカッター』・・・剣か・・・なら俺の性に合っている!」

と、レイは両腕の上の段の棒を抜き取ると、先端の赤いパーツが後ろに倒れ、その中の黒いパーツが前に行き、そこから透明の黄色の幅の広い刀身が出てきた。

「うおおおお!!」

そして、プラズマカッターを構え、レイは山田先生に向かって行った。

「!!」

ファントムが向かってきて、山田先生はとっさに回避行動を取った。

レイはメッタメッタにプラズマカッターを振り回し、山田先生はそれを避けるのにやっとだった。

「うおりゃ!!」

と、左手のプラズマカッターが山田先生のISの装甲をかすめた。

「くッ！かすめたか！・・・・・・？」

と、さらに追撃をかけようとする、ISのセンサーが何かを捉えた。

モニターに「2時方向から複数のISが接近中」と出た。

「！」

モニターを二時方向に拡大すると、5体のISが接近して来ていた。

「五体か・・・・さすがに分が悪いか・・・・」

と、両手に持つプラズマカッターを元の位置に戻し、素早く左のほうへ飛んでいった。

「あっ！」

山田先生はとっさに追いかけたが、ファントムが海の中へ潜っていた。

すると、ファントムが潜ったところで、山田先生が止まった。

「えっ！？・・・どういこと！？」

と、戸惑っている様子であった。

『どうした山田？』

「すみません……。ISを見失いました。」

『見失っただと？……ということだ？』

「さっきまで捉えていたのですが……。海に入った途端、機体反応・
・いえ、姿すら見えなくなりました。」

『何だと！？……確かめたのか？』

「はい……。」

『……………』

「どうでしょうか？」

『ISの搜索は教師部隊に任せる。お前は一旦戻れ。』

「……分かりました。」

と、山田先生は港のほうへ向かっていった……

S t o r y 1 I Sを使う者（後書き）

初めてではありませんが、これからよろしく願います。

Story 2 決意

そして・・・港から少し離れた倉庫・・・

「ふう・・・何とか撒いたみたいだな。」

と、あそこから逃げたレイが倉庫の壁にもたれかかった。

レイは海に潜った瞬間に、ファントムのステルスシステムを起動させ、そのまま海中を進んで行き、この倉庫の陰に隠れ、ISを収納した。

「・・・しかし・・・あの『事故』の後に付いている・・・これがISだったなんて・・・にわかに信じられんな・・・使った後で言うのもなんだけど・・・。」

と、半分独り言を言った。

「・・・さてと・・・家に帰るとするか・・・。」

と、レイはそこから離れ、家へと向かった・・・

同じ頃・・・

町より少し離れたところに道に、一台の大型トラックが止まっていた。

中では、ISの整備がされ、その奥で、パソコンのモニターを見る織斑先生と、山田先生がいた。

「……たいした動きだ……。まるで慣れているかのようだ。」

「……………」

「……それで、さっきも聞いたが、本当にあのISの反応をロストしたのか？」

「はい。海に潜られた途端に、反応が消え、更に姿も消えました……。。」

（…………ISのハイパーセンサーでも、反応と姿を捉えることができない……。かなり高性能のステルスを使ったのか……。）

と、考えながら、モニターに映るファントムを見た。

（それに、通常のISと異なり、全身装甲、武器も常に出した状態、肩の浮遊ユニットもない……。一見すれば旧式に見えるが、動きは第三世代と同等だな……）

山田先生のISのレコードビデオを見ながら、推測した。

それと同時に・・・レイは家に到着した。

レイの家は、他の建物と比べると、結構古く、ボロボロであった。

「ただいま。」

と、家の戸を開け、家に入った。

「おっ！・・・帰ったか・・・。」

すると、家の奥から、一人の老人が出てきた。

結構年が行っているみたいで、頭はすっかりハゲて、若干薄毛があるくらいだった。

その顔には、優しい表情であった。

「しかし・・・帰ってくるのが早いということは・・・まさか・・・」

「・・・そのまさかだよ・・・じっちゃん。」

と、ため息をついて、答えた。

「なんと・・・これで4回目だぞ!？・・・はあ・・・お前さんは不幸なことばかりだな・・・。」

「いつものことさ……もう慣れているよ……。はい、これが今月分。」

と、ポケットから、お金が入った封筒を渡した。

「……じゃが、給料は店が潰れても、貰うと言うことばかりは、悪運が強いな……。」

「……じゃが、また新しいバイトを探さないとな……。」

給料が入った封筒を貰った。

「そうなんだよ。探すのが大変なんだ……。何せ安すぎるのは生活に不安があるし、高いには何か危ないから……。などなど……。」

「……すまん……。わしが少し若かったら、お前さんに苦労を掛けずにすんだのに……。」

「……じっちゃん。」

「……まあ、明日から頑張れ……。さてと、夕飯の支度をしないとな。」

「分かった。俺がやっておくよ。」

と、レイはじっちゃんと家の奥へいった。

「ところで……頭の怪我は何じゃ？」

「……帰る途中で、こけてしまったんだ……。」

「・・・とことん・・・不幸じゃのう・・・。」

そして、所戻って大型トラック・・・

「山田・・・ISは発見できたか？」

「いいえ・・・教師部隊で全面搜索しているのですが・・・発見できません。」

「そうか・・・なら、引き続き搜索を続けるように通達しろ。」

「はい・・・。」

そして、キーボードでメッセージを打ち込み、教師部隊に伝達した。

「・・・しかし、どうしてそこまであのISを追うのですか？」

「・・・見逃せないからだ。」

「え？」

「・・・あのISを使っていたのは・・・男だからだ。」

「ええ！？・・・で、でも、つい最近、織斑先生の弟さんが、ISを使ったばかりだって言うのに・・・もう・・・」

「・・・それに、やつは自分のISを持っていた・・・。その為、学園側としても、男であり、自分のISを持っているやつを見過ごせないのだ。」

「・・・・・・・・そう・・・・ですよね・・・・。弟さんも・・・・そうでしたもの・・・・。」

ISには、『専用機』と呼ばれるものがある。ISのコアはかなり少なく、その貴重なコアは、各国、及び特殊な研究機関に僅かながら引き渡される。

しかも、専用機は各国代表にしか持つことができない・・・・。しかし、レイは自分のISを持っていた・・・。

そして、言うまでもないが、ISは女性にしか反応しない・・・・しかし、それでも織斑先生の弟と、レイはISを動かしている。それは特殊なことで、かなり貴重である。

それを踏まえ、レイが貴重な存在であることは間違いない。

ISを動かし、自分のISを持っている・・・・これを逃すわけにも行かないと言うのも分かる。

「・・・・・・・・でも・・・・仮に見つけた後は・・・・どうするのですか？」

「・・・・・・・・もし、やつがいいのであれば・・・・やつを『IS学園』に入れようと考えている。」

「あ、IS学園にですか!?!・・・・し、しかし、もう入学式まで一週間しかないんですよ!?!」

「・・・もしもの話だ・・・。だが、いいと言うのであれば、学園初の異例だな。」

「・・・・・・・・」

「・・・とにかく、今は探るのが先だな。」

「・・・はい。」

と、センサーを見て、ISの反応を調べた・・・

同じ頃、レイの家では・・・

家では、夕食の時間であった。

狭い台所の隣にある狭いリビングで、レイとじっちゃんは夕食を食べていた。

「もぐもぐ・・・・・・・・うむ、うまい！今日のご飯はうまいぞ！」

「そ、そうかな・・・。」

と、照れくさそうに言った。

「・・・しかし・・・わしが若ければなあ・・・稼いだ金で、お前さんをうまいところへ連れて行けるのに・・・わしが老いばれなばかりで・・・」

と、泣いているかの様子で、語った。

「・・・いいんだよ・・・。」

「・・・あつ・・・そうだ、今日の昼の速報を見たか！」

「えっ・・・見てないけど・・・。」

「すごいぞ・・・なんと、デパートから落ちた赤ん坊を助けるために、一人の少年が飛び降りて、バルーンのロープに捕まったらしいが、その直後にデパートの壁にぶつかっただけみたいじゃ。」

「・・・・・・。」

「それでな、しばらくして少年がロープを放してしまって、その瞬間、少年が光に包まれてな、その中から黒い機体が出てきたそうじゃ。」

「・・・へえ・・・。」

「そいつは助けた赤ん坊を母親に渡したら、どこかへ飛んで行ってしまったらしい・・・。」

しかし、つい最近世界で始めて男がISを起動させたって言うニュースが流れたばかりだと言うのに・・・すごいな・・・。」

「・・・そう・・・だね。」

「・・・なんじゃ・・・あんまりすごそうに思っていないな・・・。」

「いや! 思っているよ! あのISを使える男がまだ他にいたなんて・・・ハハハ・・・。」

「そうか・・・そうじゃろうな・・・はっはっはっは!」

「ハハハハ・・・（それが俺だって言うのは言えねえよな・・・。）」

「はっはっはっは・・・!」

すると、さっきまで笑っていたじっちゃんが、急に笑うのをやめ、立ち上がった。

「・・・? どうしたの?」

「静かに!」

と、口に指を当て、シー、といった。

そして、ゆっくりと歩いていき、窓を覗いた。

すると、何かが動いたのが見えた。

「!?! いかん!! レイ、伏せろ!!!」

「えっ!?!」

と、急に走り出し、レイのも元へ駆け寄った。

その直後、外から銃弾が飛んできて、窓を破り、飛んできた。

そんな中で、じっちゃんはレイを掴み、床に伏せた。

「くっ……じっちゃん……今のは!？」

「……ちっ!……斉藤組が押し寄せて来よったわい！」

「さ、斉藤組!?!……でも、何で今頃!?!」

「分かんが……狙いはわしじやろうな……ここから逃げるぞい!」

と、レイを立たせ、壁に立てかけてあった猟銃を手に取り、裏口から出た。

そして、表へ出ると、銃弾が飛んできた。

「おっと!!!」

じっちゃんは見かけによらず、素早い動きで、銃弾を避け、電柱の陰に入った。

そして、猟銃で反撃した。

「くそ! あやつらめ……今頃わしを狙ってきてなんになるんじや!!!」

と、猟銃を撃ちまくった。

「レイ！ここはわしに任せろ！お前さんはここから逃げるんじゃない！」

「な、何を言っているんだ！？じっちゃんを置いて行けるわけないだろう！！」

と、反論するが・・・

「このままでは、どっちもやられる！急げ！」

と、レイは後ろへと突き飛ばした。

「うわぁ！！」

レイは後ろに突き飛ばされ、背中から地面に叩きつけられた。

「ぐわぁ！！」

と、じっちゃんの声がして、レイがとっさに立ち上がると、じっちゃんが右腕から血を流して倒れていた。

「じっちゃん！！」

「に・・・逃げるんじゃない・・・レイ・・・お前さんだけでも・・・行くんじゃない！」

「！！」

すると、前には、何人かが接近してきて、銃を構えた。

「!! やめろおおお!!!!」

と、レイはとっさに前へ走り出し、じっちゃんの前に出た。

その直後、銃から弾が発射された。

「ファントム!!」

すると、左腕のリストバンドが光り輝いた。

「!! これは!!」

「どうした!!」

どうやら、こちらは反応をキャッチしたみたいだ。

「あのISの反応を確認しました!!」

「本当か!! 場所は!？」

「ここからそう遠くではありません・・・しかも、そこで発砲事件が発生しています!」

「何だと!?!? 今すぐお前もISで出撃しろ! 教師部隊には私

が連絡する！」

「はい！」

「う・・・ううう・・・！！？」

じっちゃんが目を開けると、目の前には、ファントムを纏ったレイが立っていた。

「！！！」

弾はISのシールドによって、装甲に触れる前に、弾は防がれ、地面に落ちた。

「うおおおお！！！」

と、背中に装着してあるショットガンを取り出し、前の敵に向け、発砲した。

弾は地面に当たり、砂煙を上げた。

「つかまって！」

と、レイはじっちゃんを抱え上げ、飛び立った。

「まさか・・・昼のニュースは・・・お前だったのか!？」

「今は話している暇はない!とにかく逃げよう!」

と、そのまま飛んでいった。

斉藤組は、体勢を立て直していた。

「くそ!・・・あのじじい・・・あんなものを持っていたのか!」

「・・・ならば、あれを使うしかあるまい。」

「何だと!?・・・もうあれを使うのか!？」

「今使わず、いつ使うと言うのだ?」

「・・・それは・・・そうだが、あれはようやく取引で手に入れたものだぞ・・・もし破損したら・・・。」

「・・・その心配はない・・・どうせ素人だろう・・・やれ!」

と、後方にあるトラックのコンテナが開き、そこから、黒いISが出てきて、ファントムを猛スピードで追いかけた。

「これで・・・あのじいさんを葬れるな・・・。」

「……いやぁ……それはできないと思うぞ……」

「何? ……!!!!」

と、男が後ろを向くと、そこには降りてくるISの部隊がいた……。

暗闇の空を、ファントムが飛んでいた。

「……大丈夫なの……じっちゃん?」

「……ああ……じゃが……お前がISを使えるとは……」

「……俺も……思っていなかった……けど……!!」

すると、ISのセンサーが何かを捉え、警報が鳴った。

そして、モニターに「未確認のISが後方より接近中!」と表示された。

レイが後ろを向くと、一体のISが接近していた。

ISは黒いボディーをしており、両手が鉤爪のような形で、紅いバ
イザーのようなものと、不気味に紅く光る二つの目を持っていた。
背中にも紅い光があり、計六つの紅い光が不気味に光っていた。

「何だあれ!?!」

すると、そのISが両手の中心にある銃口から、弾を放ってきた。

「くっ!」

レイはとっさに回避した。

「あいつめ!」

と、そのまま下へ下り、コンテナ置き場に行った。

「じっちゃんはここに!・・・あれは俺が何とかする!」

そして、じっちゃんをコンテナの陰へ置き、レイは黒いISに向か
って行った。

「でりゃあああ!!!」

レイは左腕にあるグランプラズマカッターを取り出し、ISに向か
って行った。

そして、プラズマカッターを振り下ろしたが、ISは右の鉤爪で受
け止めた。

「くっ!」

ISはそのまま押し返し、左手の銃で攻撃してきた。

弾はファントムのシールドに直撃し、衝撃が起きた。

「ぐわぁ!!」

それによって、ファントムは地面へと落ちていったが、レイはとつさに体勢を立て直し、何とか着地した。

それに続き、ISも下りていき、ファントムの前に立った。

それによって、ISの姿がはっきりと見えた。

頭部は縦長く、そこにバイザーとその上に二つ目があり、チューブのようなものが口当たりであり、背中から、二つのカメラがあった。胴体には、肋骨のようなデザインがあり、足は逆関節と、人型とは少しかけ離れた姿をしていた。

「くそっ！」

と、レイはプラズマカッターを振り回したが、ISは素早い動きで避けていった。

そして、ISは右の鉤爪を中央に寄せ、クロー状態でファントムを殴りつけた。

「くっ！」

ファントムはそのまま後ろへと下がっていった。

そして、ISは左手の鉤爪を中央に寄せ、両手をクロー状態にして構えた。

「な、何てやつだ……だが、負けるわけには……?」

すると、モニターに何かが表示された。

「完全フィッティング完了……ファントム……アビリティー発動」
と表示されると、レイ自身にも異変が起きた。

（何だ……さっきよりも、体とファントムが馴染んでいる……それに……これは……）

すると、モニターに「アビリティー……必殺ファンクション」と出た。

「必殺ファンクション?……なんだか分からないけど……必殺技なら、あいつに一撃食らわせてやる!!」

と、グランプラズマカッターの柄を両手で持った。

すると、ISもクローをファントムに向け、向かってきた。

「行くぞ!! 必殺ファンクション!!」

「アタックファンクション!! ソードスラッシュ!!」

そして、ファントムは地面を強く蹴り、ISに勢いよく飛んでいった。

「うおおおおお!!」

そして、ファントムはグランプラズマカッターを振り上げ、強く振り下ろした。

ISは、右のクローを前に突き出したが、振り下ろされたグランプラズマカッターによって、切り裂かれ、そして胴体を大きく切り裂いた。

その衝撃によって、ISはコンテナに強く叩きつけられ、そのまま紅いカメラの光が消え、機能を停止した。

すると、胴体に切り裂かれた箇所から、機械の部品が見えた。

「・・・無人機・・・だったのか・・・。」

そして、レイは真っ直ぐに立ち、グランプラズマカッターを下に下ろした直後、センサーが何かを捉えた。

「!!」

レイはとっさに上を見ると、複数のISが下りてきていた。

「しまった!・・・こいつに気を取られていた!」

と、グランプラズマカッターを上に向け、背中からグランショットガンを左手に持った。

「待ってください!」

すると、そのＩＳの部隊の中から、山田先生のＩＳが下りてきた。

「私たちはあなたを捕らえに来たわけではありません。」

「・・・何・・・だと？」

「そういうことだ・・・。」

すると、コンテナの間の通路から、織斑先生が来た。

「だから、武器を下ろせ。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

しかし、レイは武器を下ろそうとはしなかった。

（・・・相当警戒しているか・・・まあ、仕方が無いか。）

「・・・・・・・・・・。」

レイは辺りを見回し、武器を向けていた。

（・・・こんなところで・・・俺は・・・）

「・・・レイ・・・そやつらは敵ではないようだ。」

と、コンテナの陰から、じっちゃんがふらつきながら来た。

「・・・・・・・・・・」

「だから・・・武器を下ろせ・・・」

「・・・・・・・・・・分かった・・・」

と、グランプラズマカッターの刀身が消えて、レイはグランショットガンを背中に戻し、グランプラズマカッターを左腕に戻すと、ISを解除した。

そして、ISは量子変換され、レイの左腕に戻った。

それによって、ISが消え、レイは一瞬宙に浮き、地面に降りた。

「・・・・・・・・・・」

（・・・本当に・・・男の子だ・・・）

（・・・やっぱり・・・あの時の男か・・・）

と、それぞれ考えていた。

「・・・これから・・・どうするのですか・・・」

「・・・とりあえず・・・ここで話すのは何だろうから、お前の家で話そう。」

「・・・自分の・・・家にですか？・・・しかし・・・あそこは・・・」

「その心配なら要りません。先ほど教師部隊で制圧しておきました。」

」

と、山田先生が補足した。

「・・・それは・・・どうも。」

「・・・では・・・行こうか。」

そして、そのままコンテナの間を通っていった。

しかし、コンテナの壁で機能停止していたISは、いつの間にか消えていた・・・

そして、所変わってレイの家・・・

中には、レイ、じっちゃん、山田先生、織斑先生がいた。

山田先生は、床に敷いている座布団に座っているじっちゃんの手当てをしていた。

「・・・あの・・・じっちゃんの怪我はどうなんですか？」

と、レイは山田先生に聞いた。

「銃弾が擦れただけですから、大丈夫ですよ。」

「そうですか・・・よかった・・・。」

と、レイは一安心した。

「・・・・・・・・さて・・・本題に入る前に、自己紹介でもしておこう・・・・・・・・。」

私はIS学園の教師をしている『織斑千冬』だ・・・。」

と、織斑先生は自己紹介した。

「私は同じくIS学園の教師をしている『山田真耶』といいます。」

「・・・・・・・・そういえば、あの時のあなたの動き凄かったですよ。」

「そ、そうですか・・・あなたも、初めてにしては凄かったですよ？」

「そう・・・ですか?・・・・・・・・それに織斑千冬?・・・・・・・・もしかして・・・・・・・・あのIS世界大会優勝した・・・・・・・・織斑千冬ですか?」

「そうだ・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・驚いたな・・・・・・・・。」

「お前は?」

「・・・レイ・ラングレン・・・といいます。」

「レイ・ラングレンか……。それで、あなたは？」

と、織斑先生はじっちゃんに聞いてきた。

「・・・わしは『小林健造』じゃ。」

「・・・？名字が違う？どうしてですか？」

と、山田先生は不思議そうに聞いてきた。

「・・・わしはレイの育ての親という立場でう・・・。」

「育ての親？・・・ではレイ君の両親は？」

「・・・今はどこに居るかは・・・分らん。」

「えっ?! ということですか?!」

「・・・レイの両親は・・・ISの技術者と聞いている。」

「えっ？」

「それで、何か危険な研究を強いられておってな、レイを生んで少
して、わしのところに預け、毎日逃げならの生活をしているそう
じゃ。」

「・・・それから、何も連絡はないのか？」

と、今度は織斑先生が聞いてきた。

「・・・ああ。それに、両親の写真すら家になくてな・・・レイは両親の顔すら知らないんじゃない？」

「・・・・・・・・・・」

「じゃが、唯一分かるのは両親の名字だけじゃ。だから、レイの名字は両親のじゃ。」

「・・・・・・・・そうか・・・」

と、何か同感的な感じがあつたように見えた。

「・・・・・・・・さて・・・ここから本題・・・と行きたいが、もう一つ聞きたいことがある。」

「聞きたいこと？」

「・・・そのISを・・・どこで手に入れた？」

「・・・・・・・・なんていうか・・・俺も、正直分からないんです。」

「分からない・・・だど？」

「はっきりとしては・・・あの『事故』の後に、自分が気付いた時、これがあったんです。」

と、左腕の待機状態の I S を見せた。

「あの事故？」

「・・・二年前に起きた・・・太平洋に旅客機が墜落した・・・あの事故です。」

「・・・あの旅客機墜落事故か・・・だが、なぜあれが関係しているんだ？」

「・・・それは・・・あの事故で唯一の生存者・・・それが自分です。」

「な、何だと！？あの生存者が・・・お前だったのか！？」

と、織斑先生は驚き、レイはうなずいた。

二年前・・・太平洋上を飛んでいた旅客機が、突如墜落して、機体が粉々に粉砕したという大惨事が起きた。

乗員乗客は全員死亡・・・それが学者の答えだったが・・・その後、唯一の生存者出たのであった・・・それがレイである。

墜落原因は今も不明である。

「自分は、あの時、アメリカに行く途中でした・・・。墜落する少し前に、自分はトイレに行っていました・・・。しかし、トイレから出た直後に、突然旅客機が墜落したのです。」

「それで？」

「自分は墜落している途中で、そのまま後ろの貨物室に飛ばされた

のです。・・・そして、旅客機は海に墜落したのです。」

「・・・・・・・・・・」

「少しして自分は気がつきました。」

「ど、どんなようすでしたか？」

と、山田先生が恐る恐る聞いてきた。

「・・・・・・・・機体の天井が破れ、半身海の水が浸かっていました。飛ばされた時にコンテナに強く頭を打っていましたので、また気を失いました。」

「・・・・・・・・・・。」

「そして、再び目が覚めたときには、自分は病院の集中治療室にいました。・・・そして、左腕に何か違和感があつて、見てみたら、これがあつた・・・・・・・・ということですよ。」

「・・・・・・・・そうか・・・そんなことがあつたんだな・・・。」

「・・・でも、思い出してみれば、気を失う直前に、目の前に三体の影がありました。」

「影？」

「はい。そのうち中央にいたのは・・・ファントムと似ていました。」

「・・・ファントム・・・それがお前のISの名前か？」

「ええ。」

「でも、もう二体はどうなったんですか？」

と、山田先生が聞いてきた。

「・・・それは・・・よく分かりません。」

「・・・そうですか・・・。」

「・・・これで、どうですか？」

「・・・大体のことは分かった・・・。さて、ここからが本題だ・・・もしお前がよければ・・・IS学園に入ってみないか？」

「あ、IS学園・・・にですか？」

「ああ・・・もちろん、強制ではないが・・・どうだ？」

「・・・・・・。」

レイはしばらく考えた。

IS学園・・・レイにも興味はある・・・入ってみよう・・・とも思う・・・。

しかし、もし自分が入れば、じっちゃんはどうなる・・・

「レイ・・・入ってみたらどうだ？」

と、レイが考えている間に、健造が言い出した。

「えっ!?!・・・で、でも・・・」

「わしのことは気にするな・・・。」

「でも、もしやつらがまた来たら・・・」

「その心配は要らん。」

と、織斑先生が言った。

「健造殿の身の安全は、我々が保障しよう。」

「・・・・・・」

「・・・それに、お前には、学校に通ってほしかったんじゃ・・・。」

「えっ?」

「・・・お前さんは中学で、どんな難関高校に入れるぐらいの学力と実力があつたと言うのに、わしの為に高校に行かず、バイトをして生活費を稼いでくれた。それはそれで嬉しかった・・・だが、お前と同年代の高校生を見ているとな・・・わしは悲しんじゃ・・・」

と、健造は涙を流した。

「だから・・・お前さんはIS学園に行くんじゃ・・・それがわしからのお願いじゃ!」

と、健造は頭を下げた。

「・・・・・・・・・・。」

レイは何も言えなかった・・・

「・・・・・・・・じっちゃん・・・・・・・・そんな気持ちだったなんて・・・・・・・・気付かなかった・・・・・・・・。」

そして、レイはしばらく黙り込んだ・・・。

「・・・・・・・・決めました・・・」

と、レイは織斑先生のほうを向いた。

「・・・・・・・・IS学園に・・・・行きます！」

「・・・・・・・・そうか・・・・・・・・。分かった。」

と、織斑先生は立ち上がった。

「では、明日迎えを送ろう・・・・・・・・。だが、入学式まであと一週間だ・・・・。今から入学の手続きをするのは学園初の異例だが、手続きをして、お前が学園に入れるのは。入学式の後日だ。」

「そ、そんなに掛かるものですか？」

「お前の場合特殊だ。何せお前のISを調べるほか、模擬テストをする必要があるからな。」

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・模擬テストと言うのは、ISの模擬戦のことだ。」

と織斑先生は補足した。

「あ・・・・・・そうですか・・・・・・」

「そういうことだ・・・・・・明日まで荷物をまとめておくのだぞ。」

「・・・・・・はい。分かりました。」

と、織斑先生は家を出ろうとした。

その後を、山田先生も追った。

「で、では・・・・・・また明日・・・・・・会いましょう・・・・・・。」

と、二人は家を出たのであった。

そして、新しい明日が・・・始まろうとしていた・・・

Story2 決意（後書き）

作品内では、ダンボール戦機のネタがちよこちよこ入ってきます。ちなみに、ゲシュペンスト・ファントムは、元と装備が異なっている仕様です。

今のところ、ヒロインは決まっていない……。

オリヒロでも出そうと思っているけど……どうせなら他のヒロインもありかな……。

Story 3 俺ともう一人以外はクラスメイト全員女

そして、レイは健造に別れを告げ、織斑先生と山田先生と、IS学園のラボに向かって、色々と調べられた。

そんな中で、驚くべきことが判明した。

今はまだ完全機動に至っていないが、他にも二体のISが同じ個体に入っていることが判明した。

その為、同じ待機状態で、3体のISが内蔵されていることになる。さらに、いくつかプロテクトが掛かっているが、多数の共通武装と、専用武装と、特殊アビリティがあった。

そして、学園の入るための手続きをして、一日遅れの入学を待つのであった・・・

そして、一週間が過ぎた・・・

ここはIS学園・・・

そこの一年一組。

「では、SHRを始めます。」

と、教卓に山田先生が立っていた。

目の前には、生徒たちが席に座っていた。

一人を除いて、全員女子であった。

その一人が、世界で初めてISを動かした男子……『織斑一夏』である。

「まず一つとして、昨日言いました生徒が今日来ましたので、紹介します。

……では、入ってきて下さい！」

と、教室の戸が開き、IS学園の制服を身に纏ったレイが入ってきた。

すると、一部を除き、女子陣がどよめいた。

そして、レイは教卓の横で止まり、前を向いた。

「……一日遅れで入学しました……レイ・ラングレンです。これからよろしくお願いします。」

と、何か余計な一言を言って、レイは自己紹介した。

「きゃああ！！男子がもう一人入ってきた！！」

「眼帯男子だ！！」

「かっこいい！！」

と、一部を除き、ほとんどの女子が叫んだ。

「では、ラングレン君はあそこの席です。」

と、山田先生が指した方へ、レイは歩いていった。

そこは窓側で、後ろから三番目の席であった。

レイは席にかけた。

「ラングレン君は、少し特殊な事情でIS学園に入ってきましたが、みんな仲良くして下さい。」

そして、女子のほとんどは「はい！」と返事をした・・・。

そして、SHRが終わり、休み時間・・・

レイの席の周りには、女子が群がっていた。

「ねえねえ・・・ラングレン君もISが使えるから学園に入ったの？」

と、茜色のショートヘアをした女子が聞いてきた。

「・・・まあ・・・そんなところだな・・・」

「どういうこと？」

「山田先生も言っていただろ・・・俺は特殊な事情で学園に入っただんだ。」

「ふーん・・・。でも、ラングレン君・・・それって・・・」

と、レイの左腕にある待機状態のISを指した。

「ああ・・・これか・・・。確かに、ISだ。」

ええええ！！！！・・・と、周りの女子が叫んだ。

「もしかして、ラングレン君って、学園に入る前に、どっかでISを貰っていたの?!」

「・・・そんなところかな・・・」

と、きつぱりと言った。

「そ、そんな簡単に言うものかな・・・」

「・・・・・・・・。」

と、レイは何か悩んでいた。

そして、レイは立ち上がって、ある者の所に行った。

それは、織斑一夏であった。

「君が織斑一夏・・・・だな？」

「・・・・ああ。そうだぜ。」

「君のことは、ニュースで見たよ。」

「そうか・・・・結構知られていたんだな・・・・。」

「・・・・そういうことだ・・・・・・改めて、レイ・ラングレンだ・・・・よろしく。」

「・・・・織斑一夏だ・・・・よろしくな。」

と、二人は握手した。

そうして、時間は夕方になり、生徒は学園内の寮に戻っていった。

そして、レイは寮の通路を通っていた。

「ええと・・・ここ・・・だよな？」

と、手に持つメモを見ながら、ドアの上にある札を見た。

そこには、メモに書かれてある『666』と同じ数字であった。

「666番室か・・・しかし・・・めっちゃ縁起が悪い数字だな・・・」

と、どこぞの不幸数字の事を言いながら、ポケットから666号室の鍵を取り出し、ドアの鍵を開けて、中に入った。

部屋の中は、ベッドが二つあり、テレビが壁にひとつ、部屋は3階にあり、窓からは、海が大きく見えていた。
入ってすぐ横に、シャワールームがあった。

「ふう・・・」

と、片方のベッドに荷物を置き、荷物から、ノートパソコンを取り出した。

だが、それはレイのものではなく、学園側から渡されたものであった。

何せ、ISが三体も同じところにあるということは、今までにないことであり、何より男子がISを使っていると言う時点で、稀な例であるから、特別にノートパソコンが渡され、一ヶ月に一度に各データを送ると言うのがノートパソコンを使用する条件である。

そして、レイは壁側の机にかけ、ノートパソコンを開いて、データを入力した。

「さて……これからどうなるのやらか……。」

と、今後のことを考え、ISを使ったときの感覚を細かく書いた。

そして、翌日……

レイは結局一睡もせず、データを書き込んでいて、終わったのが午前五時半であった。

そして、大きなあくびをして、部屋を出た。

向かったのは、寮内の食堂であった。

朝食時間と言うこともあり、生徒達が朝食をとっていた。

レイはカウンターに行き、そばを頼んで、少し待った。

辺りを見て、座れるところを探していると、そばができて、レイは受け取って、空いている席に向かった。

空いている席に座り、そばを食べ始めた。

そして、辺りを見てみると、一夏を発見した。

その隣には、一人の女子がいた。

髪は背中まで伸ばしており、根元で結んでおり、ポニーテールであった。

胸は年齢の割には大きいような？・・・まあそんなことはともかく、何やら一夏に怒りを向けているかのようにだった。

（・・・あれが・・・一夏が言っていた・・・篠ノ之・箒・・・か・・・だが、何か怒っているような気がするな・・・何でだ？）

と、頭の中で色々と考えながら、そばを食べていった・・・。

朝食を終えて、レイは教室に行き、自分の席に着いた。

そこからしばらくの間に、生徒たちが入って行き、そしてSHRの始まりのチャイムが鳴った途端、山田先生が教室に駆け込んできた。

「遅くなりました!」

と、教卓に着くと、息を整えていた。

そんな時に、織斑先生が入ってきた。

「全く……では、SHRを始める……。……まず最初に、一つ決めることがある。」

(……)

「再来週、学園で行われる『クラス対抗戦』の代表を決めなければならぬ……」

(クラス対抗戦か……)

「はいっ。織斑君を推薦します!」

「私はラングレン君を推薦します!」

「あっ、私も!」

と、自分と一夏を女子達が推薦してきた。

「なぬ!？」

レイは予想外なことを言われて驚いた……大体予想できていたけど……

「お、俺もかよ!？」

一夏も、驚いていた様子……。

「二人もか……では、他に推薦するものは居るか？」

「異議ありですわ!」

と、二つ横の席から、誰かが異議を掛けてきた。

「なぜ代表者が私ではなく、男子のですか! 實力から見れば、この『セシリア・オルコット』が代表になるのが決まりですわ!」

と、その女子……セシリアは怒りを表し、異論を唱えていた。

「物珍しいからと、極東の猿などに任せるなど、笑止千万ですわ!」

少し意味が違うような……と、言うことはともかく、レイは少しむっとした。

「實力からして、この私が代表に相応しいのですわ!」

言っていくごとに、どんどんヒートアップしているように見えた。

「大体、文化として、後進的な国に暮らさないといけないと言うこと自体、私には苦痛で・・・」

カチンっ

「イギリスだって大してお国自慢ないだろう。世界一まずい料理で何年覇者だよ」

と、きれた一夏がイギリスの悪いところを言った・・・。

(・・・言ってしまったな・・・禁句を・・・)

と、レイは皮肉的なことを考えていた。

「なっ・・・!？」

セシリアはその発言を聞いて、顔が見る見るうちに赤くなっていった。

「あ、あなた・・・私の祖国を侮辱するのですか!？」

もはや怒り・・・ではなく、激昂に足しているだろう・・・。

「決闘ですわ!」

と、セシリアは一夏にびしっと指を指した。

「・・・いいだ・・・」

「いや・・・その役目は俺がする。」

と、一夏が言い切る前に、レイが割り込んできた。

「なっ、お前・・・」

「あそこまで言われると、黙っているわけには行かないな・・・。」

「ほう・・・この私に織斑さんの代わりに決闘を受けると言うのですか？ラングレンさん・・・イギリス代表候補生の私に・・・。」

「ああ。」

「いいでしょう・・・一体どこで手に入れた中古品の専用機を持つあなたと戦っても。」

「・・・言ってくれるな・・・イギリスの人は高飛車なやつが多いんだな。」

と、レイとセシリアはにらみ合い、火花を散らした。

「・・・そこまでだ・・・喧嘩なら後でやれ。」

と、織斑先生が仲介に入った。

「・・・分かりました。」

そして、二人は席に着いた。

「・・・それと、織斑も代表生の候補に入っている・・・。だが、今は学園に予備のISがない・・・その為、お前には専用機が与えられることになった。」

「?」

一夏は分からなかったが、周りの女子陣が、ざわついた。

「専用機を?! しかも一年の時から?!」

「え・・・と、専用機って?」

一夏はまだ分かっていない様子・・・

「教科書六ページを読め!」

と、織斑先生は一夏の頭を出席簿で叩いた。

「は、はい・・・えっと・・・」

長いので省略・・・

「つまりはそういうことだ・・・。本来ならIS専用機は国家・・・もしくは企業の所属にしか与えられない・・・。だが、お前は状況が状況だ・・・データ収集を目的として、与えられることになった・・・これで分かったか?」

「はい・・・大体・・・」

「織斑先生。ラングレン君もその一環で専用機があるのですか？」

と、茜色のショートヘアーの女子が聞いてきた。

「……そんなところだ……」

本当のことは言わず、一夏と同じ理由とした。

（……専用機か……そんなにすごいものなんだな……。）

と、レイは改めて専用機の凄さを実感した……。

そして、時間が過ぎて、レイは寮の自室にいた。

それまで、セシリアからぐちぐちと言われていたので、解放感があった。

「はぁ……なぜあそこまで言う必要があるんだ……。しかも中古品って何だよ……。」

と、愚痴りながら、レイはノートパソコンにデータを打ち込んだ。

そして、レイはとあるデータを開いた・・・。

それは、ISのデータであった。

「ブルー・ティアーズ・・・第三世代型ISで、射撃戦仕様か・・・」

と、セシリアのISを見ているが、本来なら、こういうデータは閲覧できないようになっていたが・・・。

「学園側からは感知されないハッキングをする・・・そういうことは俺にしかできないけど・・・。」

レイはどうやらかなりのハッカーのようである・・・。

（・・・しかも、遠隔操作武器『ビット』もあるのか・・・だが、近接戦にはあまり対応していない・・・か。）

そして、戦う時の動き方を考えた。

「しかし・・・これがISの基本形態か・・・」

レイのファントムは、基本、『全身装甲』と呼ばれる形態であるが、本来ならISには一部装甲はない。

しかし、ないわけではないが、すべて展開する必要がないのだ。

なぜなら、ISには『シールド・エネルギー』と呼ばれるバリアがあるのだ、中の人安全なのだ。

「・・・・・・・・」

すると、レイは左腕の待機状態のISの表面を開き、ノートパソコンにケーブルを繋ぎ、その反対側をISにも繋げた。

そして、IS内のデータを見た。

最初に表示されたのは、三つのデータであった。

中央には、ファントムであり、その他は黒いシルエットになっていた。

その下には、何か数字があった。

特に、右側のものは、数が少なくなっている。

（・・・あと少しか・・・戦闘中で解除するしかないか・・・だが、それまで時間稼ぎするには・・・）

と、他のデータを開いた。

そこは、武装に関するデータであり、ファントムの武装もあったが、他の武装は最初と同じシルエットになっていた。

その内、二つが解除されていた。

（・・・たったこれだけか・・・少し厳しいな・・・『アーベント』解除まで持てばいいが・・・）

戦いに心配があるが、レイには策があった。

「・・・『ナハト』は・・・まだ解除に時間がかかるか・・・

アーベントに賭けるしかないか・・・。」

そして、ノートパソコンを閉じ、そのままベッドに寝転んだ。

「明日から・・・動きを磨かないとな・・・。」

そして、そのまま眠りに着いた・・・。

S t o r y 3 俺ともう一人以外はクラスメイト全員女（後書き）

レイの他二体のI Sがどのような形で登場するのに期待しましょう・・。

しかし、セシリアの性格ってこんな感じだっけ・・・

Story 4 クラス代表決定戦！

そうして、一週間が経ち、セシリアとの決闘の日である。

レイは学園内のISアリーナのピットにいた。

そこには、一夏と箒がいた。

レイはISスーツと呼ばれるものを着ていた。

基本ISを装着時には、これを着ることがほとんどである。
ISからの電気信号を感じるためだからだと言う。

「いよいよか……。」

「そうだな…….だけど、どうして俺の代わりに決闘を引き受けたんだ？」

「…….気まぐれさ。」

「えっ?!」

一夏は理解できなかった様子……

「・・・たったそれだけで・・・」

と、箸は呆れ半分だった。

「まあ・・・そういうことだ・・・でも、あそこまで馬鹿にされて、黙ってはいられなかった・・・それもある。」

「・・・そうか・・・」

「・・・それと、お前の専用機は、今日来るんだろう？」

「ああ。確かそうだったはず・・・。」

「もし戦うことになった時は、よろしく。」

「・・・ああ。」

そして、レイは少し前に行き、左腕のISに手を当てた。

「こい！ファントム！」

すると、左腕のISから、光が出て、レイを包み込んだ。

そしてしばらくすると、光が晴れ、ファントムを身に纏ったレイがいた。

「これが・・・レイのISか・・・」

一夏は興味津々だった。

「……『全身装甲』か……。それに肩の浮遊ユニットもない……他のISといくつか違うな……」

箒はファントムの外見を見て、色々と違い点を言った。

「こいつは色々特殊なのさ……。じゃあ、行ってくるぜ。」

と、ファントムはピットのカタパルトに足を置き、そして発進した。

飛ぶと同時に背中の中翼を開き、空を飛んだ。

すると、既にセシリアは自分のISを身に纏い、待っていた。

全体のカラーは深い青で、他も青系の色でまとめられていた。

後ろ腰には、複数のビットが装備され、手には自身のISと同じく
らいの長さのスナイパーライフルを持っている。

常にISは浮いた状態なので、自身より大きな武器を扱うのは珍しくない。

「あら……。逃げずに来たんですね。」

「俺の辞書に『逃げる』と言う言葉はない。」

「そう……。でも、チャンスをあげますわ」。

「チャンス？」

基本ファントムは全身装甲なので、顔は見えないが、声から疑問的な感じだった。

「私が勝つのは目に見えていますわ……。だから、今から降参してもいいでしょ？」

「・・・そういうのは、チャンスとは言わないな。」

「そう・・・残念ですわ・・・なら！」

すると、セシリアはライフルを構え、狙いをつけると同時に、ファントムのモニターに「警告！ 敵I Sが射撃体勢に移行。」と出た。

「お別れですわ！！」

「くっ！」

そして、セシリアはライフルのトリガーを引き、攻撃してきて、レイはとっさに回避した。

そのままファントムのスピードを上げ、セシリアの攻撃を避け続けた。

「さあ、踊りなさい！ この私とブルー・ティアーズが奏でる円舞曲で！」

「何て精密射撃だ・・・さすがは代表候補生・・・だが！」

レイはファントムの背中のグランショットガンを両手に持ち、セシリアに向け攻撃した。

セシリアは弾を避け続けながらも、ライフルで攻撃してきた。

その一部がファントムの肩に直撃し、衝撃が起きた。

「くっ！」

すると「左肩に直撃。損傷軽微。」と出て、シールドエネルギーの数値が少し下がった。

レイは命中率を上げるため、セシリアに接近しながら、グランショットガンを放った。

「無駄ですわ！そんな近距離型のライフルでは！」

と、背中からビットを二基射出してきた。

同時にビットからエネルギー弾が発射された。

その攻撃の一部がファントムに直撃するも、レイは何とか避けた。

その間に、ビットに攻撃をかけたが、ビットは素早く避けた。

「・・・そういうことか・・・」

と、レイはセシリアを見ながら、ビットの動きを見ていた。

すると、ビット二基がレイの後ろを取った。

「貰いましたわ！」

「・・・そこだ！」

すると、レイは右のグランショットガンをビットではなく、セシリアに向け攻撃した。

「!!」

セシリアはとっさに避けた。

すると、ビットが攻撃態勢のはずだが、攻撃してこない。

そして、レイは左腕をビットに向け、攻撃し、撃ち落とした。

「な、なぜですの?!・・・あなたは右が見えないはず・・・」

「・・・眼帯をしているから・・・見えないと思ったか・・・」

「!?!」

「それに、お前はビットを動かしている間は、動くことができない、そして集中している。だから、いきなり来られた攻撃はあわてて避けようとするから、ビットは動きを止めた。」

「・・・ま、まさか・・・こんな短時間でブルー・ティアーズの特性を見抜いたのですか!?!」

「そういうことだ。」

そして、そのままセシリアに向かっていきながら、グランショットガンを放った。

「くっ！」

その攻撃はセシリアに大半が命中した。

しかし、攻撃していくうちに、ショットガンから鈍い音がした。

「!? しまった！」

すると、モニターに「弾切れ」と出た。

レイはとっさに下がり、ショットガンを背中に収めた。

「弾切れとは、迂闊ですわ！」

と、右手のスナイパーライフルで砲撃した。

「くっ！」

レイはとっさに左腕のグランプラズマカッターを抜き放ち、同時に黄色の透明の幅広い刀身が現れ、セシリアのライフルのエネルギー弾を防いだ。

「中距離仕様の私に近接戦闘を挑んでくるなんて・・・笑止ですわ！」

と、ライフルを構え、攻撃した。

「そうじゃないさ！」

すると、レイは急に降下し、地面に下りると同時にグランプラズマカッターを地面に突き刺した。

そして、エネルギー弾を防いだ。

「行くぞ！」

すると、レイはファントムの両腕の右下の棒を取り出した。

その直後、先端横に、内側に湾曲した黄色い透明の刀身が現れた。

「行け！ グランプラズマサイス！」

そして、グランプラズマサイスを投げた。

ブーメランのように勢いよく回転し、セシリアに向かって行った。

「そんな原始的な武器で！」

と、ライフルで攻撃したが、グランプラズマサイスはエネルギー弾を回転で弾いた。

「なっ!？」

予想外なことで、セシリアは驚き、回避しようとしたが、もう遅かった。

プラズマサイスはブルー・ティアーズに直撃し、そのまま前へ進んで行き、大きく迂回すると、後ろ腰のビットも切り裂き、破壊した。

「!！」

そして、グランプラズマサイスはファントムの手元に戻った。

「もう一丁！」

すると、今度はプラズマサイスの柄頭同士を繋げ、その状態で再び投げた。

「そう何度も同じ手は食らいませんわ！」

と、スナイパーライフルの出力を上げ、向かってくるグランプラズマサイスに放った。

しかし、直撃直前に、グランプラズマサイスが二つに分かれ、弾を避けた。

「!!」

また驚くことが起き、セシリアはさつきより驚いた。

しかし、その間に、プラズマサイスが迂回し、セシリアの両側から向かってきた。

「あっ！」

気付いた時にはもう遅かった。

グランプラズマサイスは直撃寸前で刀身が消え、そのままセシリアにぶつかると同時にプラズマサイスの先端と柄頭が接続し、セシリアを捕らえた。

「な、これは!？」

プラズマサイスに捕まれ、身動きが取れない状態であった。

「行くぞ！」

すると、ファントムの胸辺りの出っ張った部分が開き、エネルギーが充填し始めた。

「ニュートロン・ブラスター！」

そして、開いた箇所にあった銃口から、強力なビームが発射された。

「!!！」

セシリアは何とか動いたが、ビームはブルー・ティアーズの左肩の浮遊ユニットをかすめた。

「・・・ちっ！かわしたか・・・」

そして、セシリアを捕らえていたプラズマサイスが離れ、ファントムの手元に戻り、レイはもとの場所に戻した。

「・・・・・・・・・・」

状況を見ると、こっちはもう射撃武器はない。さっきの武器はチャージに時間がかかるため、使用できない。

近接戦闘では少し分が悪い。まだ相手のビットも残っている。

「・・・・・・・・・・」

そして、レイはあのデータを見ると、片方はもうあと少しだった。

(・・・突っ込むか・・・)

と、レイはそのままセシリアに向かって行った・・・

そんな様子を、ピットのモニター室で、山田先生と、織斑先生が見ていた。

「凄いですね・・・初めてでオルコットさんと対等に戦えるなんて・・・」

「さすがは、お前とともに戦っただけはあるな・・・」

「・・・そうですね・・・でも、さっきまでと動きが違う？」

モニターには、さっきまでとは異なり、レイは攻撃をかけていたが、近接武器しか残っていないため、接近戦に持ち込もうとしているが、セシリアはライフルで牽制していた。

「待っているのだろう・・・あれを使うために・・・」

「・・・やはり・・・あれを・・・」

と、山田先生の前の画面には、レイのISのデータがあった。

調べた際に、データをコピーし、状況を確認できるようにしていた。

(さて・・・どこまで持ちこたえられるか・・・)

そして、所戻ってISアリーナ・・・

レイは右手にグランプラズマカッターを持って、セシリアに接近しようとしているが、セシリアは残ったビットと、スナイパーライフルで牽制し、近寄せなかった。

「まずい・・・これ以上削られたら・・・」

レイはセシリアが放ったエネルギー弾をプラズマカッターで切り払い、回避していた。

「これで終わりですわ!」

と、スナイパーライフルを放ち、遅れて両腰にあるミサイルを発射した。

そして、ライフルの弾がファントムの左足に直撃し、バランスが崩れた。

「しまっ!?!」

しかし、気付いた時には、ミサイルが直撃し、爆発した。

そうして、爆煙が晴れると、ファントムは動きを止めていた。

「あら・・・あの攻撃に耐えるなんて・・・そうとう頑丈なISなのですね・・・」

「・・・ふっ・・・ありがとよ。」

「えっ？」

「さっきの攻撃で・・・ようやく解除できた・・・」

すると、モニターにあるあのデータが、解除されていた。

「な、何を・・・」

「こういう事さ・・・フォームチェンジ！・・・『アーベント』
』

すると、ファントムが光に包まれた。

「くっ！」

膨大な光にセシリアは目を庇った。

そして、セシリアは目を庇っていた腕をのけると……………

「なっ?!」

そこには、白いISがいた……………

さっきまでのファントムと異なり、機体色が黒から白に変わっており、各所にはオレンジのラインがあった。

さらに、各形状が異なっており、左腕には、三つの砲身が伸びており、背中には白い翼が四つあり、それを展開した。

頭部の形状も大きく変わっており、耳の部分は羽のイメージがあり、額のカラーは黒で、その中央に緑色のセンサーらしきものがあり、目の部分はファントムとは異なり、バイザーではなく、ツインアイになっていた。

しかし、脚部と胴体は、ファントムと少し共通の形状であった。

「まさか……………あなた、今まで初期設定で戦っていたのですか!?!」

「違うな……………ようやく解除された俺の二つ目のIS……『ヴァイスリッター・アーベント』だ。」

「ふ、二つ目のIS?!……………あなたISを交換したのですか!?!」

「外見は変わっているが……………シールドエネルギーとエネルギー残量は共通だな。」

と、モニターのシールドエネルギーとエネルギー残量はファントムのときと変わっていない。

「だが・・・機体ステータスは・・・大きく違う!」

そして、レイはセシリアに向かって行った。

「・・・ヴァイスリッター・アーベント・・・」

「ふっ・・・ようやく解除したか・・・」

すると、ISのデータが更新された。

「これは・・・」

「・・・結構の数でシステムと武装が解除されたか・・・やはりISの解除が大きく関連しているのか・・・」

「どうなるのでしょうか・・・この戦い・・・」

「・・・レイの勝ちだな・・・性能はアーベントのほうが上だ。」

と、織斑先生はそう予想した。

レイは左腕のビームガンで、セシリアに攻撃をかけた。

「くっ!」

セシリアなら普通なら避けられた攻撃も、アーベントの前では避けることすらできなかった。

「さっきまでと性能が違う?!・・・このブルー・ティアーズの射撃性能を上回っている!?!」

「そういうことさ・・・。さて、そろそろ終わりにするか。」

と、右手から、かなり長い武器が現れた。

それは、アーベントと同じぐらいの長さを持つ武器であった。先端には銃口が上下にあった。

「パルチザン・ランチャー!」

そして、レイはランチャーをセシリアに向け、下の銃口からビームを発射した。

「!?!」

セシリアはとっさに避けたが、ビームはブルー・ティアーズのスナイパーライフルを撃ち抜いた。

「しまっ!」

セシリアはとっさにライフルを捨てると、ライフルはその直後に爆発した。

「くっ・・・よくも!」

と、セシリアは両腰のミサイルを発射した。

「甘いな。」

と、今度は上の銃口から、実体弾を発射した。

そして、片方のミサイルに直撃すると、弾が大きく爆発し、もう片方のミサイルを誘爆した。

「!？」

「これで終わりだ・・・必殺ファンクション！」

「アタックファンクション!! ライズショット!!!!」

そして、アーベントがセシリアに急接近した。

セシリアは近接ブレードを出したが、既に遅く、アーベントは目の前にいた。

「!!」

そして、レイはセシリアを蹴り上げ、そのままパルチザン・ランチャーを連射した。

「きやああああ!!」

そして、ブルー・ティアーズのシールドエネルギーがゼロになった。

「試合終了・・・勝者・・・レイ・ラングレン。」

そして、セシリアはゆっくりとアリーナの地面に着地した。

「ま・・・負けた・・・エリートである・・・私が・・・」

すると、隣にアーベントが着地した。

「・・・別にいいだろう・・・そんなこだわり・・・」

「・・・」

セシリアはゆっくり顔を上げた。

そこには、アーベントの顔の部分を収容し、レイの顔が見えるようになっていた。

「俺は楽しい試合ができてよかったと思うぞ？」

「・・・あなたなんか・・・私の気持ちは・・・」

「・・・まあ、分からんでもないな。」

「え？」

「・・・人それぞれさ・・・どう思うかはお前次第だが・・・俺は、楽しめてよかったと思う。」

と、笑顔で言った。

「・・・・・・・・」

すると、セシリアは顔を赤らめた。

「じゃあ、また後で・・・。」

と、レイはセシリアにそう言い、ピットに戻った・・・。

そして、レイはピッドに戻ると、ISを解除した。

すると、一夏が来た。

「凄いな・・・あんなに強いのか・・・」

「それほどないさ・・・」

「ほう・・・謙遜か・・・」

すると、織斑先生と、山田先生が来た。

「織斑先生・・・」

「二つ目のISを、ようやく起動できたみたいだな。」

「ええ。苦勞はしました。」

「そうか．．．しかし、続けて悪いが、今度は一夏の相手になつてもらう。」

「一夏の？．．．ということは．．．」

「はい。織斑君の専用機が先ほど到着しました．．．。」

すると、ピット奥にあるエレベーターから、一体のISが現れた。

「織斑君の専用機．．．『白式』です！」

白いボディのIS．．．白式は、かがんだ状態で待機していた。

「これが．．．。」

そして、一夏は白式に触れた。

「．．．．．．．．．．」

すると、しばらく黙った。

「どうしましたか？」

「．．．分かる．．．あの時と同じだ．．．」

「．．．では、レイは先にアリーナに行け、一夏はすぐに装着しろ。」

「分かりました。」

「お、おう。」

そして、レイは再度ISを展開し、アリーナに向かった。

レイはファントムの状態で、アリーナの中央にいた。

しかし、ファントムの装備がさっきと少し異なっていた。

背中には、さっきよりも武器が増えている？

コンテナのようなパーツの中に、武器が収められていると言う感じであった。

「しかし・・・さっきのダメージは無視できないか・・・まあ、ハ
ンデという感じで戦うか。」

と、まるで仁王立ちの感じで待っていると、ピットから白式を纏った一夏が来た。

「来たか・・・。」

そして、一夏はレイの前まで来た。

「遅かったな。」

「少し装着に手間取ってな・・・だが、問題ない。」

「そうか・・・。だが、手加減はしないぞ。」

そして、右手から、武器を呼び出した。

それは、新しく使用できたもので、自身の腕より少し長い銃身を持ち、先端の銃口の上下にカバーパーツがあり、その武器の中心の上にスコープがあった。

「行くぞ！」

そして、レイは新しい武器・メガ・ビームライフルを一夏に向けて発砲した。

「くっ！」

一夏はとっさに避けた。

そして、そのままビームライフルを連射した。

「いつまで避け続けられるかな！」

そう言っているうちに、一発が一夏に直撃した。

「うわぁ！」

当たった衝撃で、白式が揺れた。

「くそ！・・・武器はないのか。」

そして、調べると、「近接ブレード」と出た。

「剣一本かよ・・・まあ素手よりマシか・・・行くぞ！」

と、一夏はブレードを呼び出し、レイに向かって行った。

そして、レイはメガ・ビームライフルを収容すると、背中新しい武器を取り出した。

コンテナ内のところは、三枚の刃があるが、中心辺りに回転するための機構のようなものがある？

「少しばかり新武器のテストに付き合ってもらうぞ。」

と、取り出した武器が展開し、三枚の刃が前と左右の向きに展開した。

もう片方も同じように展開した。

「なっ!？」

「行け！グランスラッシュリッパー！」

と、両手に持つスラッシュリッパーをブーメランのように投げた。

そして、スラッシュリッパーは白式に直撃し、そのまま後ろへ進んでいくと、更に後ろから追撃をかけていった。

「ぐわああ！」

一夏は衝撃でバランスを崩してしまった。

そして、戻ってくるグランスラッシュリッパーをレイは受け取った。

「・・・ラングレン君・・・織斑君と初めて戦うのに最初っから猛攻を・・・」

山田先生と織斑先生は、再びピットのモニター室にいた。

そこには、箒の姿もあった。

「・・・あいつ・・・手加減しているな・・・」

「え？」

「見た目は激しいように見えるが、ダメージが薄いところしか狙っていない。」

「でも、どうして？」

「・・・フィッティングを待っているのだろう・・・」

「・・・『最適化』をですか？」

「あの状態では完全な力を発揮できない・・・だから、あいつは力を解放した一次移行を待っているのだろう。」

「・・・・・・・・・・。」

「一夏・・・。」

箒はモニターに映る幼馴染の姿を見て・・・心配そうに見た。

「ぐわああ！」

一夏はスラッシュリッパーの攻撃を受け、後ろに下がった。

そして、もう後ろには下がることができない。

レイは再び戻ってきたスラッシュリッパーを受け取った。

「・・・ここまでだな・・・。」

と、胸の出っ張った部分を展開し、銃口が現れた。

「ニュートロン・ブラスター！」

そして、銃口から大きなビームが発射された。

「くっ！」

そして、一夏はそのままその攻撃をまともに受けてしまった。

それによって、大きな爆発が起きた。

「一夏っ！」

箒はその様子を見て、思わず声を上げた。

「・・・ふっ・・・」

すると、織斑先生は鼻で笑った。

「機体に救われたな・・・馬鹿者が・・・」

「・・・。。。」

そして、爆煙が晴れると、そこには白式の真の姿があった。

特に、肩の浮遊ユニットが展開しているようであり、その他様々な箇所が変化していた。

「・・・！？・・・これは？」

モニターには「フォーマットとフィッティングが終了しました」と出ていた。

「ふっ……ようやくか……。」

と、グランスラッシュリッパーをたたみ、背中に戻すと、両腕のグランプラズマカッターを抜き取った。

「……よく分からねえけど……これでこいつは俺の専用機になったってことか……。」

「そういうことだ。」

と、レイはグランプラズマカッターの後ろ同士を接続し、柄を伸ばすと、刀身がさらに大きく伸びた。

「さて……真の姿になった白式の力は、どれほどのものか……試させてもらう！」

そして、長くなった柄を両手で持ち、刀身先端を一夏に向けた。

そして、白式の手には、さっきのブレードが変化したものになっていた。

「これは……『雪片式型』？……千冬姉のISの武器の名前じゃないか……。まあいいか」

そして、一夏はそれを構えた。

すると、刀身が展開し、ビームの刃が出てきた。

「行くぜ！レイ！」

「望むところだ！」

そして、両者は一気に接近した。

「必殺ファンクション！」

「アタックファンクション！パワースラッシュー！」

そして、レイは大剣並の大きさになったプラズマカッターを振り上げ、そのまま振り下ろした。

「うおおおお！！」

一夏も雪片二型を振り上げた。

そして、両者の剣が交えた瞬間、グランプラズマカッターの刀身が割れた。

「何！？」

そして、そのまま一夏の攻撃が来て、レイはとっさに体をそらしたが、ビームの刃が機体をかすめた。

「くっ！」

レイはそのままバク転のように後ろに下がった。

「かすめただけかよ・・・」

一夏は悔しそうにしていた。

「・・・なんて威力だ・・・。」

すると、ファントムのシールドエネルギーが凄く下がり、危険粹に達した。

「もう一丁!」

と、向かおうとした瞬間、ブザーがなった。

「試合終了・・・勝者・・・レイ・ラングレン。」

「え?」

「・・・。。。」

「何で?」

一夏はわけが分からなかった・・・。

「全く・・・あそこまで持ち上げておいて・・・あれは何だ・・・大馬鹿者。」

と、ピットに戻ると、まず最初にそれだった。

「武器の特性を理解しないまま使うからこうなるんだ……。明日からは暇な時はISの訓練に励め。」

「……………はい。」

その様子を、レイは見ていた。

（……………シールドエネルギーを用いて、一撃必殺の攻撃を可能にした……。だが、失敗すれば自身にも危険がある……。諸刃の剣だな……。）

と、さっきまでの戦闘を思い出し、分析した。

白式は、今は一夏の右腕にリストバンドとして、待機状態になっていた。

どうもほぼ自分と同じ待機状態で、居心地が悪かった。

そして、自分の待機状態のISを見ると、三つのクリアパーツの内、二つが明るくなっていた。

（……………あと少しか……。）

そして、レイはそのまま寮へと戻っていった……………。

そして、くたびれたレイは、部屋に入ると、すぐにベッドに飛び込

んだ。

「はぁ・・・疲れた・・・。」

何せ二連戦であつたため、体力は大きく消耗した。

「・・・しかし・・・記入データが増えたな・・・。」

どうせ後で新しく出たものを書かなければならないので、今日も徹夜と覚悟した。

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

そして、レイはしばらく考え、制服に着替えて、また部屋を出た。

そして、翌朝・・・

S H Rで、ありえないことが起きた。

「では、クラス代表は・・・織斑君に決定しました。」

と、山田先生は嬉々として喋っている。

そしてクラスの女子も盛り上がっていた。

一夏は何のことか分からなかった。

「先生。質問いいですか。」

と、一夏は手を挙げた。

「何でしょうか？」

「俺昨日試合に負けたはずですが・・・何ですか？」

基本試合・・・というよりは、テスト最中であつたが、代表候補はレイに決まったが、一夏も一応候補に入っているので、候補決定戦の第二ラウンドという形であつた。

「それは・・・ラングレン君が辞退したからです。」

「え？」

「そういうことだ。」

と、レイは答えた。

「何でだ？代表はお前が適しているはずだろ？」

「・・・俺はそんな面倒なことはしたくないんだ・・・とい
うのは冗談で、お前の今後の成長に期待して、代表を譲ったんだ。」

「・・・・・・・・。」

一夏は呆然とした。

「ラングレン君・・・男らしい！」

と、一部の女子が言った。

「今後よろしくな・・・クラス代表・・・織斑一夏。」

と、手を向けていった。

「と、言うわけだ・・・代表は織斑一夏。異存はないな。」

クラスは一夏以外「はい」と返事をした・・・。

S t o r y 4 クラス代表決定戦！（後書き）

アーベントの必殺フアンクションは・・・本当なら片手銃のものですが・・・まあ、片手で扱っているから、問題はないと思う。

Story 5 転校生はセカンド幼なじみ

そして、しばらく経った日・・・

俺のクラスは学園内のグラウンドにいた。

「では、これよりISの基本的な飛行操縦を実践してもらおう。織斑、オルコット、ラングレン、お前たちが手本を見せてみる。」

と、織斑先生はご指名で俺たちを呼んだ。

（飛行ならば・・・アーベントが丁度いいな。）

と、レイは左腕のリストバンドを前に出した。

（こい・・・アーベント！）

すると、リストバンドから光が出て、レイを包み込んだ。

そして、光が晴れた時には、レイは白いボディーをしたアーベントを身に纏っていた。

隣では、セシリアがISを展開していたが、一夏はなぜか遅れていた。

「遅いぞ織斑・・・熟練したIS操縦者なら一秒とかからないぞ。」

「は、はい・・・。」

と、せかせかとして、ようやくISを展開できた。

同時にセシリアも自身のISを展開した。

どうやら俺が破壊したビットは完全に修復されているみたいだ。

「よし、飛べ」

そして、レイは翼を展開し、一気に飛び上がった。

同時にセシリアも飛び上がったが、一夏はなにやらひよろひよると上に上がっていった。

「何をやっている。スペック上お前の白式の方が上なのだぞ」

と、相変わらずきついことを言うな・・・この人・・・。

まあ、それはともかく、三人は同じ高さまで来た。

「うーん。どうしたものかな・・・。」

「一夏さん・・・イメージは所詮イメージなのですわ。自分がやりやすい方法ですれば簡単でしょ？」

「そうだな・・・。」

「そうかな・・・」

「三人とも、今度波及効果をやって見せろ。目標は地面より十センチだ」

「分かりました。」

そして、レイとセシリアは今度は一気に急降下した。

「ちょっ！待ってくれよ！」

一夏はとっさに追いかけた。

そして、急降下したレイとセシリアは、地面すれすれで急停止した。

しかし、後ろでは、一夏が墜落した。

「はぁ・・・」

レイは後ろを向いて、そのまま歩いた。

ISが歩く・・・というのは、あまり想像しない・・・なぜなら、ほとんど宙を浮いた状態がISであるが、レイのISは一部機構が異なり、通常より地上戦を想定したところがある。

特にファントムは地上戦を取り入られており、アーベントはISと同じように空中戦を主に行う仕様である。

「お前は隕石にでもなりたいのか？」

と、皮肉的なことを一夏に言った。

「うう・・・そんなことはない。」

と、一夏は穴から這い出てきた。

「馬鹿者。誰が地面に激突しろといった。グラウンドに穴を開けてどうする。」

「すみません。」

と、一夏は説教を受けていた。

「全く、昨日私が教えてやっただろうが。」

と、箒も一夏に吹っかけていた。

「・・・悪い・・・」

と、一夏は箒に謝った。

「まあいい。次に武装を展開してみろ。」

「はい。」

と、レイはパルチザン・ランチャーを呼び出した。

「よし・・・次に織斑」

「は、はい。」

と、一夏は手に力を入れた。

(・・・来い！)

すると、右手に雪片二型が出現した。

(よし・・・何とか確実に出せるようになった。)

「遅い。0，5秒で出せるようにしろ」

本当に、この人弟には厳しいな・・・。

「次、オルコット」

「はい。」

と、セシリアの手から光の粒子が出て、スナイパーライフルが出現した。

一夏より少し早く展開できた。

「さすがだな代表候補生。・・・だが、そのポーズはやめろ。銃身を横に向けて誰を撃つ気だ」

「で、ですが、これはイメージを固めるのに・・・」

「直せ」

「・・・・・・・・分かりました。」

織斑先生は一睨みで黙らせた・・・さすがだ・・・

「それと、レイも同じだ。銃身を上に向けどうする気だ」

「・・・ええと・・・、直します・・・」

「・・・それでいい。・・・セシリア、近接武器を出せ」

「は、はい！」

と、半分驚いた様子で、セシリアはライフルを収納し、新たに展開しようとした。

しかし、中々出てこない。

「何をしている」

「は、はいもうすぐ・・・ええい！『インターセプター』！」

と、ようやく手にブレードが出てきた。

ちなみに、今さっきのは、初心者がやる方法らしい・・・

「そんなに遅くて、実戦では相手に待ってもらうのか」

「い、いえ。実戦ではちゃんと早く出します」

「・・・ちゃんと出せるようにしろ」

「・・・はい」

「レイ。お前も近接武器を出してみろ」

「・・・その・・・今のところアーベントには近接武器は・・・」

「・・・なら、ファントムに変わって、出して見せろ。」

「ファントムは・・・内臓式です」

「・・・・・・」

と、織斑先生は唸った。

「・・・まあいいだろう・・・。織斑、グラウンドの穴は直しておけよ」

「は・・・はい・・・。」

と、グラウンドの穴を一夏は塞いでいった・・・。

そして、しばらくして、レイは自室に戻って、ISのデータ確認を

した。

すると、新たに武器が開放されていた。

「・・・なるほど・・・これは凄い・・・。」

そして、もう一つデータを見た。

それは、あのデータであった。

ファントム、アーベントと出ており、左は未だにシルエットのままであった。

その下の数字は、結構減っていたが、まだ解除できない。

「あと少しか・・・解除できれば・・・。」

すると、ドアのノックが聞こえた。

「?・・・誰だ?」

レイはパソコンを閉じ、ドアのほうへ行った。

「誰だ?」

「あっ・・・レイさん・・・。」

この声は・・・どうやらセシリアのようだ。

レイはドアを開けた。

「何のようだ？」

「ええと・・・今から食堂に行きますので、ご一緒にどうですか？」

「・・・ああ。もうその時間か・・・。いいよ」

と、レイは一旦鍵を取りに行き、部屋を出た。

そして、鍵を閉めて、セシリアと一緒に歩いていった。

「それにしても、気が利くな・・・。呼んでくれなかったらたぶん遅くまで気付いてなかったと思う」

「そ、そうでしたの・・・。それは偶然でしたね」

と、何か落ち着かない様子だった。

そういえば、ここ最近セシリアの態度が変わっていると思った。最初は結構きついところがあり、ツンツンのところがあった。しかし、今はそんなところがなく、むしろデレデレなところが多くなった。

そして、とても気が利いていると感じていた。

セシリアは隣でレイを見ていた。

レイの右側に居り、そこからレイの顔を覗いた。

レイは絶対右目の眼帯は外さないの、セシリアが居る方向では、

眼帯しか見えない。

(・・・レイさん・・・)

と、セシリアはレイの腕を見て、しがみつこうとしたが、レイは腕を上げた。

「あっ」

「腕にはしがみつかせないぞ」

と、まるで読んでいたかのように、回避した。

(うう・・・勘が鋭い・・・)

そして、セシリアは黙ってついていくことにした。

そうして、翌日・・・

教室では、ある話題があった。

「ねえねえ、織斑君、ラングレン君、隣のクラスに転校生が来たって話し聞いた」

「転校生？」

レイは少し疑問的に言ったが、学園なので転校生が来るのはおかしくない。

「こんな時期にか？」

「何だって中国代表だって」

「中国代表か」

「あら、わたくしの存在を今頃危ぶんでの転入かしら」

と、セシリアはお決まりの腰に手を当てるポーズをした。

「だが、このクラスに入ってくるわけではないのだろう・・・騒ぐほどじゃあるまい」

と、さっき自分の席に行ったはずの箒がいつの間にかこっちに来ていた。

「賑やかになっていく・・・専用機持ちが増えていくのは」

「何ですか？」

「違う相手と戦えるからさ。だから、楽しめるのさ」

「そういうものか？」

「・・・一夏はそう言っている暇はないだろう。来月にはクラス対抗戦があるのに、まだ動きがよくないだろう」

「そうだぞ。」

と、箒がレイの後で言った。

「仕方が無い・・・俺が特別に訓練に付き合ってやる」

「え？いいのか？」

「色々と削らないといけないがな」

何を削るんだ？

「だが、ほとんど実戦的な訓練だ。覚悟している」

「ええ・・・」

「わ、私も手伝うぞ！」

「わ、わたくしもですわ」

と、セシリアと箒も言った。

「まあ優勝すれば、フリーパスが貰えるからな。がんばれ」

「そうそう。そうすればクラスみんなが幸せになるんだよ」

と、クラスの女子が言った。

「それに、専用機持ちはここと四組しかない・・・楽勝・・・のはずだ」

何やら自身がない発言だな・・・

「――その情報は古いよ!」

と、教室の入り口から、声がして、見てみると、一人の少女がいた。

顔には幼い感じがして、髪は茶色のツインテールで、少し身長は低かった。

制服はカスタム自由らしく、少女の制服は肩の部分を露出してあった。

「二組も専用機持ちが代表になったの・・・そう簡単には勝てないわよ」

と、何かかっこつけてそう言っている

「鈴?・・・お、お前・・・鈴か?」

「そうよ。中国代表候補生、凰鈴音。今日は宣戦布告に来たってわけ」

「・・・お前・・・何かっこ付けてんだ? 似合わないぞ」

「なあ！なんてこと言うのよ、あんた！」

と、動揺して答えていた。

すると、後ろから誰かに出席簿で叩かれた。

「早く自分の教室に戻れ。SHRの時間だぞ」

「ち、千冬さん・・・」

「織斑先生だ・・・それに邪魔だ」

「は、はい」

と、鈴は避けた。

「一夏！後で来るから、逃げないでよ！」

と、そのまま二組に猛ダッシュした。

そして、織斑先生の登場で、みんなは席に着いた。

そして、仕官は昼食の時間になり、レイは食堂で食事していた。

ちなみに、メニューはうどんであった。

レイ一人で座っている席の前では、一夏と、箒、セシリアが言い争いをしていた。

授業中で、山田先生に五回注意され、織斑先生に3回叩かれた。

（集中できないのか・・・あの二人・・・それとも、さっきの鈴つてやつのことを気にしていたのか？）

と、考えながらも、麺をすすった。

「待っていたわよ！一夏！」

すると、いきなり誰かが一夏のいる席に接近した。

「またあいつか」

それは、さっき来た鈴であった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

レイはただ黙っていた・・・向こう側も・・・

レイが座っている席の向かい側には、なぜか鈴が座っていた。

さっきまで言い争いをしており、あーだ、こーだ、としていた。

そして、鈴は怒ったのか、席を立て、食器をカウンターにも戻すと、なぜかこっちに来た・・・そして今に至る。

「何でこっちに来たんだ」

「・・・別に・・・関係ないでしょ」

「俺は相談とかそういうのは苦手だぞ・・・知っているだろう」

「そ、相談とか・・・そんなことないし、知っている」

「・・・久しぶりだな」

「・・・!・・・」

「一年ぶりかな」

「・・・うん」

と、鈴は曖昧に答えた。

「・・・あんた・・・大丈夫だったの・・・」

「何が」

「・・・あの事故よ・・・あんただけ生き残ったあの事故よ」

「ああ、あれか。なんともなかったよ」

「・・・そう・・・でも、何であんたも一夏のようにISを持っているのよ」

「・・・俺にも分からん」

「はあ？わからないって・・・」

「いつのまにかあった・・・というのが答えだ」

「・・・あんたって、昔から大雑把よね・・・」

「変わらないほうがいいこともある」

「・・・そりゃ・・・そうだけど・・・それより、ISを持っているなら、あんたの腕はどうなのよ」

「俺の腕か？・・・一組の中じゃ、俺が強い・・・」

「あんたが？・・・でも間違ってもない・・・けど、何であんたはクラスの代表じゃないのよ」

「・・・あいつに・・・賭けているのさ」

と、視線の先には、こっちを不思議そうに見ている・・・いや、自然と鈴と会話しているのを不思議に思う一夏がいた。

「あいつに？・・・でも、何で？」

「隠れた才能・・・って言うのがあるからな。まだあいつは全然だが・・・いつか花が開花する・・・俺はそう思っている」

「・・・変わったね・・・そこは・・・」

「悪いか？」

「・・・いや・・・悪いわけじゃないけど・・・いいほうだよ」

「・・・そうか」

と、レイは立ち上がって、食器をカウンターに返し、再び鈴の元に行った。

「それと、放課後あいつはアリーナで訓練するから、気遣ってもいいじゃないか？」

「え？」

そして、レイは食堂を出た・・・

そして、放課後のISアリーナ・・・

そこでは、レイと一夏がいた。

ちなみに、箒とセシリアはまだ来ていない。

「嘘の情報を流しておいて正解だったな・・・」

「・・・あの時不自然に言っていたのはこの為か・・・」

「そういうことだ・・・。一夏、ISを展開しろ」

「お、おう」

そして、両者はISを展開した。

レイはファントムのほうを展開した。

しかし、ファントムの左手には、何やら見覚えのないものが握られていた。

持つところと、その下は湾曲しており、茶色のパーツがあった。

そして、その茶色の部分をファントムの腰に装着し、柄を掴んだ。

「武器の展開もしろ」

「あ、ああ」

一夏は雪片式型を展開した。

そして、レイは腰のパーツを引っ張ると、茶色のところだけ止まり、そこから銀色の刀身が現れた。

新たに使用できた武器・・・シシオウブレードである。

レイはシシオウブレードを構えた。

「お前は最初から突っ込んで行く癖がある・・・。まあそれも悪くはないが、それでは返り討ちを受けるのが落ちだ」

「・・・・・・・・」

「だから、細かな動きを心がけろ・・・。無駄のない動きでな」

「む、無駄のないって・・・」

「行くぞ！」

そして、レイは急接近した。

「おわあ!?!」

一夏はとっさにブレードでシシオウブレードの斬撃を防いだ。

「いい反応だ。・・・だが・・・」

レイは力任せで一夏を押し返した。

「実戦ではそうはいかない・・・。その為に、反射神経を鍛える」

「は、反射神経を?・・・でもどうやって・・・」

すると、ファントムが光に包まれ、そしてアーベントに変わった。

「アーベントのスピードで、どこからでも攻撃を仕掛ける。それをすべて受け止めて見せろ！」

そして、アーベントは猛スピードで正面から来た。

「くっ」

一夏は防御体勢に入ったが、アーベントは突然消えた。

「なっ!？」

「遅い！」

すると、左からアーベントが来て、シシオウブレードの一撃を受けてしまった。

「ぐわぁ！」

一夏はその衝撃で横に二、三步動いた。

「今のは本気じゃないぞ・・・あれくらい止めて見せろ」

「止めて見せろって・・・無茶言うなよ」

「無茶は言うさ。・・・まあ、やつの動きはここまで早くはないが、持っただけでも損はない」

「・・・やっつて？」

「・・・鈴だ」

「鈴？」

「あいつのISは、ここまで早いわけじゃない・・・。だが、近接戦闘でこれを持っていたら不意打ちにも対応できる」

「・・・なあ」

「何だ」

「何で鈴のことを知っているんだ？ 昼の食堂だって、自然に会話もしているし・・・知り合いなのか？」

「・・・そうだ」

「そうだったのか・・・」

「あいつと出会ったのは、三年前だ・・・。夜の帰り道で、あいつが怪我をして動けないところを見つけて、俺があいつを家までおぶって送ったんだ。その時に、あいつの父親さんと仲がよくなっって、次の日から、バイトと言う形で、親父さんの店で働くことになったんだ」

「・・・でも、俺お前と会ったことないぞ？」

「そりゃそうだ。俺は厨房に居たんだ。客席側じゃ見えないところの」

「そりゃ・・・見えないか・・・」

「でもって、生活費を稼ぐことができたんだが・・・親の都合で、鈴は祖国に帰っていったんだ」

「・・・・・・・・・・」

「あいつ・・・俺も一緒に来るように言っていたんだが・・・俺はじっちゃんのためにも生活費を稼がないといけないから、あいつとは別れたんだ。」

「・・・・・・・・そうだったのか・・・」

「まあ、昔話はこちらまでだ・・・。一夏、今度は本気で行くぞ、受け止めて見せろ！」

そして、レイは一夏に向かって行った・・・

そして、訓練は一時間続いた。

「・・・・・・・・ここまでだな・・・」

と、レイはISを解除した。

「はぁ・・・はぁ・・・しんどい・・・」

一夏は地面に倒れて休んでいた。

「・・・受け止めたのが五回か・・・。上出来だ」

「そ、そうなのか・・・」

「これは射撃武器でも応用できるから、後は自分で調整しろ・・・いいな」

「ああ・・・。分かった・・・」

そして、レイはピットに向かった。

そして、レイはアリーナの更衣室にいた。

レイはタオルで汗を拭いていた。

「ふう・・・」

汗を拭くと、レイはISスーツの上を脱いで、ロッカーの中にあるシャツを着た。

すると、誰かが入ってきたのを感じた。

レイは入り口のほうを向くと、スポーツドリンクを持った鈴がいた。

「・・・鈴」

「これ・・・喉が渴いているかと思って持ってきた」

と、持っていたスポーツドリンクをレイに投げて渡した。

「ありがとう」

礼を言って、レイはスポーツドリンクを飲んだ。

「ひとついい？」

「何だ」

「何で眼帯なんか着けているの・・・。前は着けていなかったのに・
・」

「・・・わけがあるのさ・・・」

「・・・一体何の？」

「・・・見せたくないものを、お前は見せるのか」

「うっ」

「・・・それと同じ事さ・・・。それと、一夏はもう少しすれば来るだろう。その時に気を利かせたらどうだ」

と、喋りながらも、制服に着替え終わっていた。

「・・・そのつもりだけど・・・何であいつなんか気遣っているの・・・」

「・・・・・・・・似ているからだ・・・・・・・・。昔の俺に・・・・」

「・・・・・・・・・・はぁ・・・・・・・・その言い方・・・・・・・・とっても年寄りくさいよ・・・・・・・・」

「ふっ・・・・・・・・苦勞する人は、そうなりやすいのさ」

と、鈴とすれ違う際に肩をポンと叩いて、更衣室を出た。

そして、レイは寮の自室に戻った。

そうして、パソコンを開いて、データを開いた。

それは、鈴のISであった。

（第三世代型のIS・・・・『甲龍』か・・・・。近接戦闘に分があり、特殊兵装として、両肩の浮遊ユニットにある『衝撃砲』は、衝撃による攻撃で、弾は元より砲身すらない。しかし、並みの操縦者では回避できるかできないか・・・・か。近接戦闘ならともかく、射撃戦では分が悪いな・・・・。白式には射撃部はおろか、後付装備すらない・・・・）

これも、レイ独自のハッキングをして得られたデータであった。

「・・・・・・・・・・」

そして、しばらく考えていると・・・

「入るよ!」

と、ドアを蹴り破って、鈴が入ってきた。

「な、何だあ!??」

レイはいきなりのこととで相当驚くも、ノートパソコンはちゃんと閉じた。

入り口には、かなり煮えたぎったように怒っている鈴がいた。

「な、何だよ・・・鈴・・・って、ドア壊したのか!??」

見れば、明らかに鍵諸共破壊されていた。

「・・・それは・・・謝るけど・・・」

明らかに怒りを隠せていない様子・・・

「・・・何があったんだ・・・」

「・・・・・・・・・・」

鈴は黙った。

「……何もないのに、ドアを壊しに来たのか」

「……そういうわけじゃ……ないけど……」

「……ふう……まあい。少し話を聞こう」

と、レイは鈴をベッドに座らせた。

「……一夏と喧嘩したのか……」

「……」

「凶星か……」

と、言いながらも、レイは机下の冷蔵庫から、缶ジュースを取り出した。

片方のサイダーを鈴に投げ渡した。

鈴は慌てて受け取った。

「あいつ……昔からいい加減なのよ……何が約束を覚えているだ？……全然意味が違うのよ！」

と、サイダーを開けると、豪快に飲んだ。

レイも手に持つコーラの蓋を開け、一口飲んだ。

「……一応覚えているのだろう……約束は……」

「・・・内容は覚えてい居るけど・・・その答えが違うのよ!ただ飯食わせるために酢豚を作るんじゃないのよ・・・」

「・・・じゃあ・・・何のためだ?」

「うつ・・・そ、それは・・・」

「・・・そういうことか・・・」

「な、何よ・・・何が分かったって言うのよ」

「・・・お前・・・こういう関係になって、酢豚を作るって言ったのか?」

と、レイはコーラを置いて、両手でハートの形を作った。

「なっ!そ、そ、そ、そんなわけないじゃないの!」

明らかに大きく動揺している。

「ふっ、冗談だ・・・」

と、コーラを取り、飲んだ。

「ふ、ふざけないでよ」

「・・・すまんな・・・。少し言い過ぎたな」

「・・・」

「まあ、納得がいかないのであれば、待ってみればどうだ」

「待つ？」

「わざと無視するんだよ。そしてあいつの動きを見る・・・」

「・・・・・・」

「それでも気が晴れないのであれば、クラス対抗戦で当てたらどうだ」

「クラス対抗戦で？何で・・・」

「一回戦目の相手は・・・一組・・・つまり一夏だ」

「え？そうなの？」

「ああ。・・・もしものことだが、考えておけ」

「・・・考えておくよ・・・」

そして、鈴は飲み干したサイダーの缶をゴミ箱に捨てて、部屋を出ろうとしていた。

すると、出口前で止まった。

「・・・レイ・・・」

「何だ」

「・・・ジュースありがとう・・・それと、ドア壊してごめん」

そして、鈴は部屋を出て行った。

「ふう・・・行ったか・・・しかし・・・」

と、レイは壊れたドアを見て、頭を抱えた。

「どうすっかな・・・先生に言うのは何か気が引けるし・・・仕方が無いか・・・」

と、レイは歪んだドアを、強引に元の形に戻し、壊れた鍵を外し、ちゃんと動くかを確かめた。

そして、外側から見て、ドアの状態を見た。

「・・・目立たない・・・よし」

そして、ドアを閉めると、ちゃんと一次ロックはかかるので、よかったと思う・・・

「でも、ばれていないのも、何か不自然だよな・・・。。。。まいっか」

そして、レイはノートパソコンを開き、続きを見るのであった・・・

S t o r y 5 転校生はセカンド幼なじみ（後書き）

レイと鈴は、ちよつとした仲という設定です。

ちなみに、ヒロインは・・・一応決まりましたが・・・まだ秘密です・・・。

Story 6 決戦！クラス対抗戦（リーグマッチ）

そうして、数週間が経ち、クラス対抗戦当日……

ISアリーナには、たくさんの生徒たちが来ており、席は満席、通路にも人だかりができていた。

そのアリーナ内では、白式を身に纏う一夏と、甲龍を身に纏う鈴の姿があった。

甲龍は、両肩の浮遊ユニットに鋭いスパイクがあり、そこに一つずつ銃口があった。

そして、両者は一定の距離になるまで近付いた。

「一夏、今から謝れば、痛めつけるレベルを下げていいわよ」

と、鈴は最後の警告……というようなことを言った。

「雀の涙ぐらいだろう。そんなのいらねえよ。全力で来い」

「……一応言っておくけど、ISの絶対防御は完全じゃないのよ。シールドエネルギーを突破する攻撃力があれば、本体にダメージを与えられる」

「……………」

『それでは、試合開始してください』

その瞬間、鈴が先に攻めてきた。

だが、一夏は、冷静に鈴の攻撃を防いだ。

「へえ……最初の一撃を受け止めるなんて……。やるじゃないの……でも！」

すると、鈴は力任せで一夏を弾き飛ばした。

（……ここでレイの訓練が役に立った……後で礼を言わないとな」

と、一夏は考えるも、すぐに鈴が攻めてきた。

「くっ！」

一夏はとっさに下がり、距離をとった。

「甘い！」

すると、浮遊ユニットの銃口が光った直後、一夏が吹き飛ばされた。

「ぐわあ！」

一夏は吹き飛ばされるも何とか体勢を立て直した。

「今のは牽制よ！」

すると、さらに銃口が光り、一夏がまた吹き飛ばされた。

「くっ！」

今度は力を入れていたので、何とか体勢は維持できた。

（まずい・・・一気にこんなに食らうなんて・・・）

その様子を、レイは客席から見ていた。

手にはなぜかスルメがあり、それを食べながら、レイは見ていた。

隣にはセシリアと箒がいた。

（・・・最初のあれは何とかマスターしていたな・・・一夏。だが、鈴の衝撃砲はあそこまで厄介なものか・・・。確かに弾が見えない・・・。だが、発射までの時間が少しある・・・その間に起きる異変はISのハイパーセンサーで感知できるが、少し遅いから、あてにはできない・・・か）

と、頭の中で分析しながら、スルメを食べていた。

（一夏・・・あれで勝負を賭ける気か・・・まあ、それが有効な手段だから・・・）

そして、一夏は鈴の放つ衝撃砲の攻撃を避けていた。

「やるじゃないの。衝撃砲は弾が見えないのが特徴なのに・・・」

と、結構余裕があるように見えた。

（ああも弾が見えない・・・。しかも砲身すらないとなれば、制限なしでどこにでも撃てるというのが厄介だ・・・どうする・・・。）
そして、一夏はここまでやってきた訓練を思い出し、それをやっていくしかないと決めた。

「鈴」

「何よ？」

「本気で行くからな」

と、雪片式型を構えた。

「な、なによ・・・そんなこと、当たり前じゃないの・・・。と、とにかくっ、格の違いって言うのを見せてやる！」

と、手に持つ両刃青竜刀をバトンのように回し、構えなおした。

一夏には、切り札として、「瞬時加速」を最近身につけた。

急な加速で、一気に敵の懐に入って、雪片式型を叩き込む。

しかし、それは大きな賭けであり、イグニッションブーストが失敗すれば、もう相手には通用しない。しかも、雪片式型を使うため、エネルギーはほとんど尽きる。

つまり、チャンスは一回・・・ということになる。

「うおおおおお！！」

そして、一夏は一気に鈴に向かって行った。

ズドオオオオンッ！！！！

「!？」

すると、一夏の剣が触れる直前に、大きな衝撃が起きた。

それは、鈴の衝撃砲ではなく、アリーナの遮断シールドを貫通して入ってきた衝撃であった。

アリーナ中央に、何かが来て、煙を上げていた。

それによって、観戦席側はパニックに陥っていた。

「まずいですわ。レイさん、早く避難を・・・ってあれ？」

セシリアは隣いるはずのレイに声をかけたが、いつの間にかレイの姿がなかった。

「い、いつの間に……」

「セシリア、今は急ぐぞ!」

「わ、分かりましたわ……」

そして、セシリアと箒はその場を離れた……。

「い、一体何が!?!」

すると、鈴から通信が入った。

『一夏、試合は中止よ!すぐにピットに戻って!』

「な、何を言って……」

すると、ISのハイパーセンサーが何かを捉え、「ステージ中央に熱源探知。所属不明のISと断定。ロックされています。」と出た。

「なっ!」

『一夏、早く!』

「お前はどうするんだ!」

「あたしが時間稼ぐから、その間に逃げるのよ！」

「女を置いて逃げるわけ無いだろう！」

「しょうがないでしょ！あんた弱いんだから！」

「うっ・・・」

「あたしだって、最後までやりあうつもりは無いわよ、しばらくすれば、先生たちが来て、事態を収拾・・・」

「危ない！」

と、一夏は鈴を抱えた直後、煙の中からビームが飛んできた。

「ビーム！？・・・しかもセシリアのよりも出力が上だ・・・」

「ちょっと！離さないよ！」

と、一夏の腕の中で、鈴が暴れていた。

「ちよっ！暴れんな！」

「大体どこ触って・・・」

「！危ない！」

すると、またビームが飛んできた。

それによって、煙が晴れた。

「な、何なんだ・・・あれは・・・」

そこにいたのは、異形のISだった。

全体の色は黒っぽい紫で、各ラインには紫があった。頭の額には大きな角があり、その横にも二つ角があり、まるで兜のようだった。胴体には丸い半透明のパーツがあった。両腕には、大きな銃口を持った大砲を腕の側面につけており、さっきの攻撃はその大砲からであろう。そして、両手にも、側面についているものより口径は小さいが、それでも大きなバズーカを持っていた。

しかも、ISは『全身装甲』であった。

レイのISも全身装甲だが、目の前の機体は完全に機械のような感じであった。

頭部のセンサーには、アーベントと同じツインアイであった。

「・・・お前・・・何者だ」

と、一夏は謎のISに問いかけた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

しかし、その侵入者は何も答えなかった。

『織斑君！ 凰さん！ 今すぐにアリーナを脱出してください！ すぐに先生たちがISで制圧に向かいますから！』

と、山田先生から通信が入った。

「・・・いや。俺たちが先生たちが来るまで食い止めます。いいな、鈴？」

「だ、誰に言ってるのよ・・・。それよりも離さないよ！」

「おっと、悪い。」

と、一夏は鈴を話した。

『お、織斑君！？だ、だめですよ！もし生徒になにかあったら・・・』

しかし、通信は途中で途切れた・・・。なぜなら敵ISがこっちに向かってきた。

「どうやら向こうもやる気満々みたいね」

「みたいだな」

「私が衝撃砲で援護するから、一夏は突っ込んで！・・・それしか武器は無いんでしょう？」

「その通りだ！・・・行くぞ！」

そして、二人は一気にISに向かって行った。

「もしもし！？織斑君、聞いていますの！？凰さんも聞いています

!？」

山田先生はいつも以上に慌てていた。

「あいつらがやるといっているんだ・・・やらせてやれ・・・。」

「お、織斑先生!？なにをのんきなことを言っているんですか!？」

「まあ落ち着け・・・とりあえず。コーヒーでも飲もうではないか」

と、織斑先生はコーヒーを入れたが、なぜかそこにあった塩を入れた。

「・・・あの・・・それ塩ですけど・・・。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

織斑先生はスプーンを元の容器に戻した。

「何でここに塩があるんだ」

「さ、さあ・・・で、でも、大きく『塩』と書いていますけど・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「あっ!やっぱり弟さんが心配なんですね!だからこんなミス・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

と、何かまずい雰囲気になり山田先生は話を逸らそうとした。

「あ、あのですね・・・」

「山田先生・・・どうぞ」

「え!？・・・あの・・・それ塩が入っていますけど・・・」

「どうぞ」

と、ずいっと塩入り（中量）コーヒーを山田先生は涙目になりながらも受け取った。

「い、いただきます・・・」

「熱いので、一気に飲むといい・・・」

悪魔だ・・・

「ところで、お前たちはここにいるのは分かるが・・・レイはどうした?」

と、後ろを向くと、そこには避難したセシリアと箒の姿があった。

「それが・・・気付いた時にはいませんでした・・・」

「・・・」

そして、織斑先生はモニターのほうを向いた。

(あいつ……やらかす気か……)

そして、所戻ってアリーナ……

ISが大砲からビームを発射し、鈴を狙った。

鈴はとっさに避け、衝撃砲を放った。

しかし、ISも見かけによらず素早い動きで回避した。

「くそ！ 図体がでかくせにすばしっこいね！」

一夏も後方から攻撃を掛けたが、ISは素早く動き、ビーム砲で攻撃した。

「く、くそ！」

一夏はとっさに避けた。

「でりゃああ！」

その間に鈴が後ろから切りかかったが、ISは肩の突起物で受け止めた。

「なっ！」

そして、その状態のまま、ISが左手のバズーカを鈴に向けた。

「鈴！」

すると、何かが勢いよく回転しながら、ISに向かってきた。

ISはそれに気付き、鈴を弾き飛ばして回避しようとしたが、その向かってきた一つがISの左手に持つバズーカを切り裂いた。

ISはとっさに切り裂かれたバズーカを離れた直後、バズーカは爆発した。

「あの武器は！」

そして、回転するそれは、アリーナの壁のところに向かっていき、すると何もないはずなのに急に止まった。

と、いうよりは、何かに受け止められた。

すると、そこに、黒い機体が現れた。

それは、ステルスを展開していたファントムであった。

「相変わらず、後先考えずに突っ込んでいくな・・・。鈴」

レイはグランスラッシュリッパーを背中のコテナに収納し、一夏と鈴と合流した。

「う、うるさいわね……。それより、何であんなところに居たのさ！ いるんだったらさっさと来てよ！」

「……すまなかったな……。少しばかり時間が掛かったからな」

「時間？」

「ゲートを開けるのに時間が掛かったのさ。ほらあそこの」

レイが指した方向には、アリーナの壁にあるドアが開いていた。

「あ、あんなところから……。でも、あそこだったらすぐに開くだろう」

「……。どうやらやつが、色々とシステムに干渉していたみたいだ」

「……。どうということ？」

鈴は少しわけが分からない様子……

「……。今すべての扉のロックが掛かっている上、遮断シールドの警戒レベルが4だ」

「それって……」

「今アリーナにはほとんどの生徒が閉じ込められている……。その上、外からの救援は来れない」

「……………」

「……まあ、あいつは俺たちが倒さないといけないってことだな」

と、背中からグランショットガンを取り出し、ISに向かっていくと同時に攻撃した。

「……そうだよな……。なら、行くぞ、鈴！」

「い、言われなくても分かっているわよ！」

と、一夏と鈴もレイに続いた。

レイはショットガンを連射し、ISに次々と当てていった。

ISは片方のバズーカを失ってか、攻撃回数が減っている。

そして、攻撃していくうちに、ショットガンから鈍い音がした。

「……弾切れか……。だが、以前とは違うんだよね」

と、ショットガンを中央少し左から展開すると、中から空薬莖が排出され、直後に両腰からショットガンの弾が飛んできて、グランショットガンの中に装填されると、レイはグランショットガンを閉じた。

そして、再度攻撃を再開した。

ISは煩わしいかのように、両腕のキャノンを放った。

レイは軽く避けると、後ろから鈴が来て、衝撃砲を放った。

だが、ISは左手で見えないはずの衝撃砲の弾を弾いた。

その間に、一夏が右から急接近し、雪片式型を振り上げた。

「うおりゃ！」

そして、振り下ろしたが、素早い動きでISは足で一夏を蹴り返した。

「くっ！こいつ！・・・」

そして、レイがグランプラズマカッターを手に持ち、ISに向かって行った。

「でりゃああ！」

と、グランプラズマカッターを横に振ったが、ISは地面を蹴り、高くジャンプした。

「それが狙いさ・・・必殺ファンクション！」

「アタックファンクション！！・・・ソニックストーム！！」

そして、両手に持つグランプラズマカッターを勢いよく切り払うと、刀身から衝撃刃が飛び出し、ISに直撃した。

ISはバランスを崩し、そのまま地面に落ちた。

「やったか!？」

だが、煙の中からISはキャノンを放った。

「くっ！」

レイはとっさに避け、一旦下がり、一夏と鈴と合流した。

「くっ・・・中々やるじゃない・・・あいつ・・・」

「・・・ああ。あんなに大きいのに、素早く動けるなんて・・・」

「・・・・・・」

すると、レイは何かを考えた。

「どうしたの？」

鈴が聞いてきた。

「・・・・・・・・妙だな・・・」

「・・・・・・・・何が？」

「・・・あいつ・・・俺たちが話している間は襲ってこない・・・」

「・・・そういえば・・・なんでだ？」

「・・・興味があるかのような・・・」

「……………何で私たちの会話に興味なんか……」

「……機械だから……俺たちの会話に興味を示しているのだろう」

「……………？ISは機械だけど……」

「……そこじゃない……。あれが『無人機』だったら、そうだろうな」

「む、無人機って、ISは人が乗っていないと動かないじゃん」

「……そうだろうな……。だが、やつの動きが機械っぽいと思わないのか？」

「……………そういえば……」

「無人機か……。それだったら、全力で攻撃ができる……。ってことか？」

「そういうことだ……」

そして、レイは、モニターにあのデータを表示した。

「……………一か八かだな……」

「え？」

と、鈴が聞こうとした瞬間、レイが飛び出した。

その後、ISが砲撃を再開した。

レイはその砲撃を回避して行った。

「うおおお!!」

すると、レイはどこの特撮ヒーローの如く、キックをISの顔面に当てた。

「「へっ!?!」」

一夏と鈴の声が重なった。

しかし、ISはそのままレイを左手でフェントムの足をつかみ、投げ飛ばし、キャノンを放った。

その攻撃が、ファントムに直撃し、そのまま後ろのアリーナの壁に叩きつけられた。

そして、ISがまたキャノンをレイに向け放った。

ビームはファントムと壁に当たり、砂煙が上がった。

「な、何がしたいわけ!?!...あいつ...」

「.....」

すると、ISが再びこっちを向いた。

「鈴・・・ISにあれ以上レイに攻撃を掛けさせるな！引き離すぞ！」

「わ、分かっているわよ！」

そして、二人はISに向かって行った。

しかし、その直後、砂煙から、光が出てきた。

「な、何！？」

『二人とも・・・下がれ！』

と、レイからの通信が来て、二人はISから横に離れた。

その直後、煙から無数の玉が飛んできた。

ISは後ろを向いていたため、回避が間に合わず、無数に向かってくる玉をもろに受けた。

直撃直後に、玉が爆発した。

「な、何が・・・」

そして、レイがいるところの砂煙が晴れると、そこには、『青い機体』がいた。

それは、ファントム、アーベントと異なった姿で、全体の色はブルーで、各所に白と黒があり、点々と黄色があった。

その姿は他の二体と異なり、ずっしりとした姿で、両肩はさっきの玉を発射した後なのか、ハッチが開いていた。

左腕には、五つの銃口を持つ『五連チェーンガン』と、シールドがあった。

右腕には、鋭く尖った杭の後ろに、リボルバー式の弾倉があり、全部で六つあり、その口径は結構大きい武器『リボルビング・ブレイカー』。

頭部の額には、鋭く尖った刃の角があり、後ろに伸びる耳があり、アーベントに似た顔をしており、アーベントと同じツインアイで、その色は赤だった。

しかし、よく見ると、脚部は他二体と似ていた。

「な．．何なの．．それ!？」

鈴は驚いている様子．．．

「．．．これこそ．．．三つ目のIS．．．『アルトアイゼン・ナハト』だ」

「アルト．．アイゼン．．．」

「まさか．．．さっきのあれは．．．それを起動させるためのことだったの．．．」

「．．．ああ。少し強引な手だったが．．．これで俺はすべての力を使える」

そして、数歩前に出た。

「さっきまでのお返しだ．．．覚悟しろ!」

そして、レイはISに向かって突進していった・・・

「・・・アルトアイゼン・・・ナハト・・・」

山田先生は、レイの三つ目のISの名を言った・・・。

「ふっ・・・ようやくすべてのISを開放したか・・・。それで、データはどうなっている」

「はい・・・少し待ってください・・・」

そして、山田先生はレイのISのデータを開いた。

すると、かなりの数のデータが更新されていた。

「すごい・・・。専用武装と共通武装がほとんど解除されています」

「・・・すべて解除したことで、ほとんどの武器を解除できたか・・・」

「・・・しかし、機体の専用アビリティと、いくつか武器がまだ解除されていません・・・」

「・・・そうか・・・」

そして、織斑先生は、モニターを見るのだった・・・

そして、レイはISに向かっていきながら、五連チェーンガンで攻撃した。

弾はISの各所に当たり、ISもキャノンを放った。

だが、ビームはナハトの装甲に直撃したが、ナハトは微動だにせず、ビームを弾いた。

「な、何て頑丈なの」

鈴は、ナハトの頑丈さに驚いた。

「うおおおお！」

そして、レイはブレイカーを構え、ISに向かって行った。

その突進は、アーベントのように速いと言うものではなく、物凄い勢いという感じの速さだった。

そして、ブレイカーの杭がISの腹の手前のシールドエネルギーに直撃した。

「全弾叩き込む！」

そして、ブレイカーの弾倉の弾が爆発し、杭を強く押し、ISに強い衝撃を与え、それを次々と叩き込んでいった。

そして、六発目を叩き込むと、ISが後ろに飛んで行き、アリーナの壁に叩きつけられた。

その直後に、レイはブレイカーの弾倉を内側に展開し、空莖莖を排出し、左手で後ろから予備のカートリッジを取り出し、弾を弾倉に入れ、弾層を閉じた。

「な、何て威力なの・・・」

そして、ISが立ち上がると、杭を叩き込まれた部分から、機械の部品が露出していた。

「・・・やっぱり、無人機だったのか・・・」

「ふっ・・・なら、手加減はいらないな。行くぞ！」

そして、レイは再度ISに向かって行った。

ISはキャノンを左右同時に発射したが、ビームはナハトの装甲には通じない。

そして、ナハト後方から、鈴が飛び出し、衝撃砲を放った。

衝撃砲の弾はISの胴体に直撃し、その直後に一夏が飛び出した。

既に『零落白夜』を発動していた。

「うおおおお!!」

そして、『瞬間加速』をかけ、ISの右腕を切り落とした。

だが、その直後に、ISが左腕で一夏を殴りつけた。

「ぐわあ!!」

一夏は地面に叩き付けられ、ISが左腕のキャノンを一夏に突きつけた。

「くっ!!」

しかし、直後に突進してきたナハトがISを押して行った。

そして、頭の角をISに切りつけた。

「くらえ!!」

角を切りつけた直後に、ブレイカーを再度突き刺した。

そして、次々と四発叩きつけた。

「必殺ファンクション!!」

「アタックファンクション!・・・スマッシュブレイカー!!」

すると、ブレイカーの弾倉が激しく回転し、火花を散らして、弾が

あるところで止まった。

そして、さっきまでよりさらに強い衝撃がISの腹に叩きつけられ、その衝撃は腹を貫通し、反対側から爆発が起きた。

「・・・どんな装甲でも・・・打ち貫くのみ！」

そして、ISをそのまま下ろし、後ろを向き歩いていった。
すると、一夏と鈴が近付いてきた。

「やったな、レイ」

「ああ。結構手ごわかったな」

「でも、私がいたから・・・勝てたのよね」

と、何か自慢げに鈴は言っていた。

「・・・・・・・・・・」

「ちょっと！何よその目は！」

「・・・まあ今はいいだろう。・・・・・・・・」

すると、通信が入ってきた。

『ご苦労だったな、ラングレン』

「織斑先生・・・」

『ようやく三体のISを起動できたな。これで色々と分かれればいいんだが・・・』

「・・・そうですね・・・」

『・・・しかし・・・ISをあそこまで破壊する必要はないだろう。おかげでコアは・・・』

「・・・大丈夫ですよ」

『何?』

「やつのコアには攻撃を与えていません。駆動系を破壊して、動きを止めただけで、頭部のデータバンクも破損はしていません」

『・・・ふっ・・・抜け目がないな。まあいいだろう』

「ありがとうございます・・・!!」

「警告! 敵ISが攻撃態勢に入りました!」

レイはとっさに振り向くと、ISが半身を少し上げた状態で、左腕のキャノンを展開して、最大出力で鈴を狙っていた。

「まずい!」

そして、ISが最大出力で放ち、ビームが鈴に向かって行った。

「!!」

すると、その間に一夏が割り込んできた。

「うおおおお!!」

そして、キャノンのビームを雪片式型で防いだが、すべては受け止めれず、後ろに飛ばされた。

「くそっ!」

レイは一気にISに向かっていき、ブレイカーをISの顔面に突き刺し、最後の一発を叩きつけた・・・

しばらくして・・・

レイは学園の保健室の前で織斑先生と話をしていた。

「すみません……。どうやらやつのデータバンクが残っているだけで、動けたようです・・・」

「・・・それで、とっさにデータバンクを破壊したのか」

「・・・はい。あれ以上、被害が出ないための判断です・・・」

「・・・まあ、いいだろう・・・。コアだけでも残っているのなら、幸いだ」

「・・・それで、一夏の状態は？」

「・・・致命的な怪我は追っていないが、全身打撲だ」

「・・・そうですか・・・」

「・・・とりあえず、よくやったな」

と、織斑先生は軽くレイの肩を叩いて、保健室に入った・・・

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

そして、レイは保健室の扉となりにもたれかかった。

「・・・そんなに心配なら、入ってやったらどうだ」

と、誰もいない・・・いや、保健室のすぐ近くの柱に誰かがいて、びくつ、とした。

「き、気付いていたのか・・・」

と、柱から出てきたのは、箒だった。

「バレバレだ。あんなに挙動不審で柱から覗いていたら。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

すると、なぜか箒は顔が赤くなった。

「まあ、どうするかは、お前の勝手だがな・・・」

と、レイはそのまま歩いていった・・・

そして、レイは寮へ行く途中で、鈴の姿を見た。

どうやら遠くから一夏の姿を見ている様子だった。

「何してんだ？」

と、聞くと、鈴が座っているにもかかわらず、レイの頭まで飛び上がった。

「れ、レイ・・・な、なんでもないわよ・・・」

と、鈴はおどおどとしていた。

「・・・そうか？・・・俺から見れば、一夏を見ているように見えたが？」

「うっ・・・」

「・・・心配なら行ってやれよ・・・セカンド幼馴染」

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・な、何よ・・・・簡単に行けるわけ・・・・ないよ・・・・」

と、なぜか勢いが無くなった。

「・・・・行かないと、色々と思うぞ」

「・・・・・・・・分かったわよ・・・・」

そして、鈴は保健室まで走っていった。

「・・・・・・・・それでいいんだ」

と、レイもその後を気付かれないように追った。

「・・・・・・・・・・」

何だ？・・・・何か人の気配を感じるぞ？・・・・しかも近くに。

「・・・・・・・・一夏」

「鈴？」

「っ!？」

一夏が目を開けると、鈴の顔が鼻先三センチという近さにあった。

「・・・・・・・・何してんの、お前」

「おっ、おっ、おっ、起きていたの!？」

「お前の声で起きたんだよ。それで、どうした？何をそんなに焦っているんだ？」

「あっ、焦ってなんかないわよ!勝手に決め付けないでよ馬鹿!」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

一夏は顔が引きつった。

「・・そういえば、試合無効になったんだな」

「まあ、そりゃそうだよ」

と、鈴は近くにあったイスに座った。

「あ」

「な、何」

「試合の決着どうする。次の再試合決まっていななんだよな」

「そんなことなら、もういいわよ」

「え？ どうして」

「い、いいからいいのよ！」

と、鈴は無理やり押し通した。

「鈴」

「なによ」

その、なんだ……。悪かったよ……。色々と。すまん」

と、一夏は頭を下げると、鈴は少し驚いた様子だった。

「ま、まあ、あたしもムキになっていたし……。いいわよ、もう」

と、鈴は許してくれた。

「あ。思い出した」

と、一夏は鈴との約束を思い出した。

「正確には『料理が上達したら、毎日私の酢豚を食べてくれる？』
だっけ？ で、どうよ？ 上達したのか？」

「・・・う、うん」

「なあ、ふと思ったんだが、その約束って違う意味なのか？俺はてっきりただ飯を食わせてくれるんだとばかり思っていたんだが・・・」

「ち、違わない！違わないわよ！？誰かに食べ手もらった料理って上達するじゃない！？だから、そう、だから！」

と、鈴はいきなり立ち上がった。

「確かにそうだな。いや、もしかしたら『毎日味噌汁を・・・』とかの噺家と思ってさ。違うんならいいけど。深読みしすぎたな、俺」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「鈴？」

「へえっ！？そ、そうね！深読みしすぎたんじゃない！？あは、あはははは！」

と、鈴はなぜか笑い出した。

「こっちに戻ってきてことは、また店やるのか？鈴の親父さんの料理ってうまいもんな。また食べたいぜ」

「あ・・・・・・・・。その店は・・・・・・・・しないんだ」

「え？何で？」

「あたしの両親・・・離婚しちゃったからさ・・・」

「え？」

「あたしが国に帰ることになったのも、そのせいなんだよね」

「・・・・・・・・そうだったのか・・・」

「一応、母さんの方の親権なのよ。ほら、今ってどこでも女の方が立場が上だし、待遇もいいしね。だから・・・」

明るく話していると、また声のトーンが下がった。

「父さんとは、一年以上会っていないの。たぶん、元気だと思うけど」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「家族って、難しいよね」

「・・・・・・・・なあ鈴」

「ん、なに？」

「今度どっかに遊びにいくか」

「え！？それって、そのデー――」

「五反田も呼ぼうぜ。久しぶりに三人で集まるか」

「・・・・・・・・行かない」

と、明るかったのが、一気に不機嫌になった。

「あ、あんたと二人つきりっていうなら行ってあげても・・・・・・・・」

「二人つきりなら・・・・か。こだわるな・・」

「なっ!?!」

すると、保健室の扉を開け、レイが入ってきた。

「おっ、レイか・・・・」

「どうだ。体の調子は」

「・・・・まあ、少しはよくなったよ」

「そうか・・」

「・・・・ところで、手に持っている物って、何だ?」

レイの左手には、風呂敷に包まれた何かがあった。

「箒からの差し入れだそうだ。さっき廊下であって『一夏に渡してくれ』と言っていたぞ」

「箒が?」

「ああ。」

と、レイはベッド隣にある台に置いた。

「……さて、俺は寮に戻るとするか……」

と、レイが後ろを向くと……

「あつ。待って！」

と、鈴が呼び止めた。

「……その、色々と言ってくれて……ありがとう」

「……俺の言った通りになっただろ。まあ、俺は相談事は苦手だが……相談に乗るのはできるから……」

「じゃあな」と言って、レイは保健室から出た……

そして、ここは学園内のIS研究所

そこで、織斑先生と山田先生が、破損したあのISを調べていた。

「・・・ラングレン君が言っていた通りです・・・。どうやら無人機のようにです・・・。しかも未知の技術が使われています」

「・・・そうか」

窓の向こうには、頭部を破壊され、胴体に風穴が開いたISが転がっていた。

「それで、他はどうなんだ」

「駆動系を大きく破損しているため、修復は不可能。ラングレン君が頭部を破壊したため、データは取り出すことができませんでした。」

「そうか・・・。それで、コアは」

「それが、登録されていないものでした」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「これからどうしましょうか」

「・・・・とりあえず、すべてが分かるまで、こいつを調べてくれ」

「分かりました」

そして、織斑先生はその部屋を出た・・・

S t o r y 6 決戦！クラス対抗戦（リーグマッチ）（後書き）

本当なら、襲撃者は違いますが、オリジナル展開という形にしました。

形状イメージとしては、「ジ・エンペラー」です。装備は色々異なりますが、今回のプロトタイプという設定です。

Story ボーイ・ミーツ・ボーイ

ここは、学園外にある大きなとある病院……

「いやぁ……悪いの……わざわざ貴重な学園の休みに見舞いに来てくれて」

「いいんだよ。じっちゃんが何も変わっていないくて」

レイは病院に入院している健造の見舞いに来ていた。

今日はIS学園の貴重な休日であり、（ちなみに日曜日が休み）学園の生徒にとっては休みたい日でもある。

「それで、どうじゃ？学園生活は？」

「……まあ、いいところだよ。色々と友達もできたし、前バイトしていた中華料理店の経営者の娘の鈴と再会したし、充実しているよ」

「そうか……。それはよかったのう」

「まあ、ISのことでは色々大変だけど……」

「ふむ……」

すると、病室に誰かが入ってきた。

「・・・あの・・・」

と、レイは呼ばれて、振り向くと、少し驚いた。

そこにいたには、一人の女性であった。

年はレイと同じくらいで、髪の色は黒であるが、少し赤が混じっており、髪の長さは背中までであり、髪は根元で簪で止めてあった。胸は、年齢に少し似合わないほどに、大きなもので、今来ている服も少しきつそうだった。

「・・・お、お前・・・神夜か!？」

「はい・・・お久しぶりです・・・レイさん」

と、神夜はレイに挨拶した。

「おお、神夜か・・・久しぶりじゃのう」

「はい・・・健造さんも元気そうで何よりです」

彼女の名前は『楠部・神夜』・・・有名な楠部家の令嬢であり、俺の幼馴染である。

神夜の親父さんと健造は長い付き合いの友人で、俺と神夜はよく小さい頃一緒に遊んでいた。

しかし、最近は彼女と出会う機会が少なくなったため、会うのは2

年ぶりぐらいだ。

「しかし、神夜……。どうやってここにじっちゃんが入院しているって分かったんだ？」

「それはですね……。私が直接調べたからです」

「……。直接調べたのか……。この病院内すべて探して……」

「はい。結構大変でしたけど……」

「……………」

「お主も……。相変わらずじゃのう……」

「そうですか？」

「……。まあ、それはともかく、またあえて嬉しいな」

「はい。私もまた会えて嬉しいこと極まりないです」

「そうか……。おっと！ いけない。バスの時間だ。じっちゃん、また来るよ。神夜、また今度ゆっくり話そうな！」

と、レイは急いで病室を出た。

「あっ」

神夜は止めようとしたが、遅かった。

「・・・・・・・・・・」

神夜はシュンとした。

「・・・残念じゃったのう。レイも忙しいんじゃ」

「・・・どうしてですか？」

「レイはIS学園の生徒で。今レイが急いで向かったバスはIS学園行きの唯一のバスなんじゃ」

「ええ！？レイさん・・・IS学園に通っているのですか！？」

「おうそうじゃ。ISがあると同時に使えるから、IS学園に入る事になったんじゃ」

「・・・・・・・・レイさんも・・・ISが使えたんですね・・・」

と、神夜は少し驚いていた。

「・・・・・・・・神夜も、IS学園に入る気はないのか？」

「・・・・・・・・私は・・・・・・・・」

「途中で学校を転入することはできるじゃろう。・・・それに、最近試作型のISの製作をしているそうじゃのう」

「・・・・・・・・それは、そうですけど・・・・・・・・」

「・・・・・・・・努力をすれば、何とかなるじゃろう？・・・それに、お主

が持っておる剣術の腕を使えば、かなりの強さを誇るじやろう」

「・・・・・・・・・・」

「まあ、考えてみるのじやな」

「・・・・・・・・はい・・・・。では、これで」

と、神夜は病室を出た・・・・。

そして、レイはIS学園に戻り、寮の自分の部屋に戻り、ベッドに寝転んでいた。

「・・・・・・・・・・」

レイは左腕の服の袖を引くと、そこにはIS待機状態の白いリストバンド（というよりは腕輪に見える）があった。

その向きを変えると、三つの色をした丸いクリアパーツがあった。

一つ目は黒、二つ目はオレンジ、三つ目は青であった。
以前までは暗かったが、今ではすべて明るい色になっていた。
そのリストバンドの中に、三つのISが入っている

それぞれ「ゲシュペンスト・ファントム」、「ヴァイスリッター・アーベント」、「アルトアイゼン・ナハト」と言う名前があり、それぞれの性能は異なるが、シールドエネルギーは共通であるため、一つのISでもある。

しかし、ISにはそんなことはありえないことなので、研究対象にされているため、毎日データを記録しないといけない。

（すべて使用できるようになったけど・・・逆に大変なんだよね・・・）

今では三つ分のISのデータを記録しないといけなくなっているのだ。

「・・・腹が減った」

と、「ぐうぐう」と腹の虫が鳴り、レイは部屋を出た。

「おお・・・レイだあ」

と、部屋を出た瞬間、のそりとしたしゃべり声が聞こえた。

声がしたほうを向くと、そこに一人の女子がいた。

眠そうな顔をしており、夜と言うこともあり、パジャマを着ていた。
しかし、そのパジャマがまたダボダボなもので、フードにはまっす

ぐな耳があつたが、垂れ下がっており、制服の時もそうだが、なぜか袖が以上に長く、手はいつも袖の中に隠れている。それに、パジャマの色が黄色と言うこともあり、まっすぐな耳ということもあり、どこぞの電気ねずみを思い出す。

「よお、のほほ」

と、彼女のあだ名を呼んだが、正直な話、彼女の本名は知らないが、のほほんさん（仮）と言うあだ名があるが、俺は略して呼んでいる。

「今から食堂に行くところなんだ。レイもいくの？」

しゃべり方もゆっくりで、力が抜けている……。しかし、それが人気を集めているのだろう……。いわゆる「ゆるキャラ」だ。

「ああ。今からいくところだ」

「じゃあ、一緒に行こうか」

と、レイの隣をのほほんさん（仮）が歩いていった。

そして、食堂に行くと、何やら女子の集まりがあつた。

何やら結構盛り上がっている様子だった。

レイはカウンターでラーメンを頼んで、その集まりの話に耳を立て

た。

「ねえ聞いた？」

「聞いた聞いた！」

「え、何の話？」

「だから、あの織斑君とラングレン君の話よ」

「いい話？悪い話？」

「最上級にいい話」

「聞く！」

「まあまあ落ち着きなさい。いい？絶対これは女子にしか教えちゃダメよ？女の子だけの話なんだから。実はね、今月の学年末のトーナメントで……」

と、レイはそのひそひそ話を聞いていた。

しかし、レイがいたところは、その集団がいるところより、結構離れていた。

レイ曰く自称「地獄耳」だそうだ。

「……………」

レイはその会話を聞いて、何かを感じていた。

そんな時に、ラーメンができ、レイは受け取ると、近くの席に座った。

ちなみに、のほほんさん（仮）は、途中どこかに行ってしまった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

そして、レイは何かを考えながら、ラーメンを食べた。

ちなみに、レイは麺類の料理が好物なので、食堂ではほとんど麺類である。

（学年別トーナメントで優勝したら何だ？・・・それに一夏と俺の名前があったからな・・・。まあ、大体おおよその予想はできるけど・・・）

と、ほぼ答えに近い形でそれを考え出した。

（今月の学年別トーナメントか・・・まあ、俺も出るけど・・・どうなるのかな・・・ここじゃ色々と起きているからな・・・）

クラス対抗戦では謎のISの襲撃があり、その戦闘に関わった俺と鈴、一夏は他言無用の契約書を書かされた。

それほど、かなり極秘なことなんだろうなと思った。

興味があるので、ハッキングして調べようとしたが、それほど極秘なものには、何か仕掛けがあるだろうな、と思い止まった。

「……まあいっか」

と、細かいことは気にせず、ラーメンを食べた。

そして翌日……

教室では、いつものように騒いでいた。

レイはとても眠そうな感じであった。

何せ、遅くまでISのデータの書き込みをしていたのであった。

ちなみに以前より1，5倍かかっていた。

（あんなに項目があったなんて……前より更に多くなった。）

レイはまじめなので、基本ほったらかすことはない……。が、それが仇となって、寝不足が多いのだ。

そんな時に、山田先生と織斑先生が入ってきた。

同時に生徒はすぐに席に礼儀正しく座った。

「では、SHRを始める……。山田先生、一つ報告を」

「は、はい。今日は一つ大きなお知らせがあります。なんと、このクラスに転校生が一人来ました！」

すると、教室中に声が響いた。

そして、教室の扉が開いた。

「失礼します」

と、女子たちの騒ぎが止まった。なぜなら、入ってきたのは男子だから。

そして、男子は教卓の隣まで歩いて、生徒のほうを向いた。

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。不慣れなところがあると思いますが、よろしく願います」

と、その男子……。シャルルは自己紹介した。

「だ、男子？」

「はい。この学園に僕と同じ境遇の方がいると聞いて本国より転入をしてきました」

人懐っこそうな顔で、中性的な顔立ちで、髪は濃い金髪で、それを首の後ろで丁寧に束ねていた。

体つきはスマートで、俗に言う「貴公子」と言う名が似合っている。

「きやああああ!! 男子がまた一人増えた!」

「しかも美形!」

と、教室中に女子の声が響き渡った。

「・・・自己紹介はこれでいいだろう・・・。この後、二組と合同でISの模擬戦を行う。各自着替えて第二グラウンドに集合だ・・・。それと、織斑とラングレンはデュノアの面倒を見てやれ。同じ男子だろう」

と、織斑先生と山田先生は教室を出た。

そして、レイと一夏は席を立ち上がった。

「君が織斑君?それと、ラングレン君?初めまして・・・僕は・・・」
「

「細かな自己紹介は後だ、とりあえずアリーナの更衣室に行くぞ。
急がないと遅れる羽目になるぞ」

と、レイは言葉をさえぎり、教室を出た。

「とりあえず急ごうか。遅れたらやばいことになるから」

と、一夏はシャルルの手を取り、急いで教室を出た。

すると、シャルルはさっきと比べると、何か落ち着きがない様子・・・

そして、女子たちの襲撃を避けて、何とかアリーナの更衣室に到着した。

「なあ、今言うのは何だけど、お互い少し自己紹介でもしようぜ」

「・・・まあ、いいだろう」

「うん。そうだね」

「俺は織斑一夏・・・。一夏って呼んでくれ」

「レイ・ラングレンだ・・・レイと呼んでくれ」

「僕はシャルル・デュノア・・・僕のことはシャルルでいいよ」

「まあ、そこまでだな・・・。とりあえず急ぐぞ」

と、レイは一気に制服を脱いだ。

既にISスーツは下に着込んでいたようだ。

「お、お前ずるいぞ！下に着込んでいたなんて！」

「事前の準備ってやつさ。じゃあ先に行っているぞ」

と、レイは更衣室を出た。

「俺たちも急ぐぞ」

と、一夏は制服のボタンを一気に外し、ベンチに投げるとTシャツを一気に脱いだ。

「わぁ!?!」

すると、シャルルは手で顔を覆った。

「?どうした。急がないと遅れるぞ?」

「う、うん……。分かって居るから……。あ、あっち向いていてね……」

「????いやまあ……。人の着替えをじろじろと見る気はないけど……。って、シャルルはじろじろ見ているな」

「み、見てないから!」

「……。まあ、本当に急げよ。初日で遅れたらシャレに……。いや、あの人はシャレにしてくれんぞ」

と言って、一夏は着替えた。

「……………」

すると、何か視線を感じ、振り向くと、チョコチョコとシャルルが見ており、一夏が振り向くと、すぐに顔を壁のほうに向け、ISスーツのジッパーを上げた」

「……着替えるの早いな……。なんかコツでもあるのか?」

「え？・・・いや、何にも・・・。それより一夏はまだ着替えてないの？」

「あ、まだだったな・・・」

と、一夏は急いで着替えた・・・

そして、一夏は急いで第二グラウンドに向かったが・・・結局遅れた。

「では、本日から格闘及び射撃を含む実戦訓練を開始する」

「はい！」

人数が多いと言うこともあり、気合が入っていた。

「今日は戦闘を実演してもらうちょうど活力があふれんばかりの十代女子もいることだしな——凰！オルコット！」

「な、なぜ私まで！？」

「専用機持ちはすぐに始められるからだ。いいから前に出る」

と、セシリアと鈴はしぶしぶと前に出た。

「・・・お前ら、少しはやる気を出せ。——あいつにいいところを見せられるぞ?」

「・・・?」

「やはりここはイギリス代表候補生のセシリア・オルコットの出番ですわね!」

「まあ実力の違いって言うのを見せ付けるいい機会よね!専用機持ちの!」

と、なぜか二人は急にやる気を出した。

「ところで、相手は誰ですか?」

「・・・そうだな・・・お前たちなら、ラングレン一人で十分だ」

(何だと!?)

「えっ?・・・レイさん一人ですか?」

「ああ。こいつは一人でIS二体分の戦いができる」

(・・・二人分って・・・まあ、『本当』のことだけど・・・)

「……まあいいですわ！あの時のリベンジと言う形で戦わせてもらいますわ！」

（……まだ根に持っていたのか……）

「丁度いいわ！あんたと一度戦ってみたかったのよね！」

（……なんだか……結構目の敵にされているのか……俺……）

そして、鈴とセシリアは専用機を展開した。

「……はぁ……。来い！ナハト！」

そして、レイが光に包まれ、晴れた時にはアルトアイゼン・ナハトが現れた。

「準備はいいのですか？」

「……いや。まだだ」

「……何をする気なの」

「こういうことさ……。アーベント、AIを起動と同時に、装甲展開！」

すると、ナハトの隣に、光が現れ、そこからヴァイスリッター・アーベントが現れた。

しかし、レイはナハトのほうを展開している。

「なっ!?!・・・何でISを同時展開できるの!?!」

鈴は相当驚いている様子・・・

「つい最近できるようになった。俺のISには独自のAIが搭載されている。だから、俺なしでも独自の判断で戦闘を行うことができる」

「そ、そんなIS・・・聞いたことはありませんわ」

「そりゃ・・・これしかないみたいだからな」

クラス対抗戦のときに現れたISもそんな感じであったが、レイのはそれとはまるで違うものであった。

「で、でも、そんなもんで私たちを倒せると思っているの!」

と、鈴は衝撃砲を放った。

しかし、レイは回避もせず、そのまま受けた。

ナハトは衝撃砲を受けてなお、微動だにしなかった。

「なっ!?!・・・そこまで頑丈なの!?!」

その間にセシリアが飛び立ち、同時にアーベントがパルチザン・ランチャーを展開し、セシリアに向け放った。

「くう!」

セシリアは回避したが、弾はセシリアに直撃した。

そして、レイは物凄い勢いで鈴に向かって行った。

「一度それ見ているんだから！」

そして、青竜刀を手にして、ナハトに向かって行った。

「でりゃあああ！」

鈴は青竜刀を振り下ろしたが、レイはナハトのシールドで防いでいた。

「くっ！ まだまだ！」

と、鈴はさらに青竜刀を振り払い、シールドをずらした。

「もらった！」

そして、鈴は青竜刀を振り下ろしたが、レイはナハトの角で受け止めた。

「なっ！？」

「・・・伊達や酔狂でこんな頭をしているわけではない」

そして、レイはブレイカーを鈴に叩きつけた。

「ぐわあ!?!」

そして、たった一発で鈴は吹き飛ばされた。

同時にアーベントがセシリアに向け、パルチザン・ランチャーを一斉発射し、吹き飛ばした。

「わああ!」

そして、二人は背中同士でぶつかり、地面に落ちた。

「「ぐわあ!?!」」

そして、二人はぐったりとして、レイが近づいてきた。

「・・・どうだ?」

そして、ナハトとアーベントが並んだ。

「くう・・・こんなに強かったのね・・・あんたって・・・」

「AIと侮っていた私が愚かでした・・・」

と、二人は正直に負けを認めた様子・・・

「ふっ・・・さすがだ・・・しかし、次の相手には、どうかな」

「え?」

すると、上空から、何かが飛んできた。

しかし、なにかよろよろと危なげな飛び方をしていた。

「どいて下さい!!」

そして、それは山田先生のように、そのまま地面に墜落した。

「……………」

レイは呆然と見て、アーベントを収納し、ファントムへとチェンジした。

そして、山田先生が穴から這い出てきた。

「……すみません……こんなことをして……」

と、謝りながら、立ち上がった。

「では、山田先生と模擬戦を行ってもらおう。異論はないな」

「は、はい……。では、よろしくお願いします」

「……では、行きます!」

そして、山田先生は両手にアサルトマシンガンとハンドガンを持ち、レイに向け攻撃した。

「くっ!」

レイはとっさに横に跳び、グランショットガンを取り出し、連射した。

山田先生はレイとは反対の方向に跳び、跳びながらアサルトマシンガンとハンドガンを発射した。

それと同時に、レイも跳びながらグランショットガンを発射した。

弾は機体をかすめていき、両者は地面に着地すると、上空へと飛んだ。

レイはグランショットガンを背中に戻し、グランスラッシュリッパ―を投げた。

山田先生はアサルトマシンガンでグランスラッシュリッパ―に攻撃したが、スラッシュリッパ―が突然向きを変えた。

「!!」

そして、スラッシュリッパ―は山田先生のISに直撃し、そのまま大きく迂回し、レイの元に戻った。

「い、今の動きは・・・」

そして、レイはグランスラッシュリッパ―をたたんで、背中に戻すと、両腕からグランプラズマカタールを取り出し、山田先生に向かって行った。

「でりゃああ!」

レイはグランプラズマカッターを振り下ろしたが、山田先生は軽く回避した。

「まだだ！」

すると、レイは左手のグランプラズマカッターを横に振り払い、山田先生のISに切りつけた。

「!!」

それによって、山田先生はバランスを崩した。

「うおおおお！」

そして、レイは急旋回し、プラズマカッターを振り下ろした。

「っ!？」

しかし、山田先生に当たる直前で、ファントムが急に動きを止めた。

「!？」

すると、ファントムはそのまま地面に落ちていった。

「え!？・・・ラングレン君!？」

山田先生は何が起きているか全く分からなかった。

「!!」

そして、ファントムは地面すれすれで体勢を立て直し、地面に着地した。

「はぁ・・・はぁ・・・くっ・・・」

すると、レイは何か苦しそうにしていた。

そして、山田先生が下りてきた。

「・・・だ、大丈夫ですか？」

「・・・は、はい・・・。大丈夫です・・・」

そして、レイはファントムを解除した。

「・・・」

織斑先生はその様子を黙って見ていた。

レイは眼帯をしている右目のほうを押さえていた。

痛みの根源はそこようである。

「・・・大丈夫なのか」

「・・・はい・・・。大丈夫です・・・」

そして、痛みが引いたのか、レイは押さえていた手を下ろした。

「・・・なら・・・いい」

そして、アクシデントはあったが、授業は再開された・・・。

そして、放課後・・・レイは寮へと向かっていた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

レイはまだ痛みがあるのか、右目を押さえていた。

他のみんなから心配されていたが、レイは痛みについて、何も語らなかった。

「・・・・・・・・気のせいだ・・・」

そして、寮へと入っていった。

そして、自分の部屋がある通路を歩いていくと、部屋の前に、なぜか織斑先生の姿があった。

そして、こっちに気付いたのか、睨んできた。

「……まずい……」

レイの額から、冷や汗が出ていた……

「……で、どういうことか説明してもらおうか」

「……はい」

レイと織斑先生は、レイの部屋に入って、怒っている様子で織斑先生は聞いてきた。

それは、ドアが妙にひしゃげていることと、部屋の中の床が陥没していることと、壁がへこんでいることと、窓が割れていることであつた。

窓は紙が張られ、テープで隙間を埋めていた。

「ドアはなぜあんなことになっているんだ」

「……それは……ちょっとした理由がありまして……その……」

・
」

「・・・・・・・・まあいい。では床が陥没しているのは」

「ええ・・・と、自分がこの部屋に来て、しばらくしたときに、自分があの上に乗った時に突然陥没したんです・・・・。それ以降座布団で隠していました」

見れば、陥没した床近くに、座布団が敷かれていた。

「・・・壁のへこみは」

「・・・足元にあった空き缶を踏んで、そのまま後ろにこけて、後頭部が当たってあんなふうになりました」

「・・・お前は石頭か・・・」

「はい」

「・・・・・・・・まあいい。最後に、窓はなぜあんなことになっているんだ」

「・・・・・・・・鳩が突っ込んできました」

「・・・鳩・・・だと」

「・・・はい。その鳩は死んでしまったので、窓の下に見える木の根元に埋めました」

と、織斑先生が窓から下の木の根元を見ると、そこに割り箸一本が

立っており、土が盛り上がっていた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・こういうことですが・・・・・・・・」

「・・・・・・・・とことん、運が無いな・・・・お前」

「生まれつきです」

「・・・・・・・・とにかく、この部屋は修理するようにした。だから、お前はしばらく誰かの部屋にでも泊まらせてもらえ」

「・・・・・・・・居候ですか・・・・・・・・」

「それと、別の部屋を手配しておくから、それが決まるまで待っておけ」

「新しく移動ですか？」

「そういうことだ」

と、織斑先生は部屋を出た。

（・・・・・・・・あそこしかないよな・・・・）

と、レイの行く部屋は一つしかなかった・・・

「と、言うわけだ。しばらくの間、世話になるぜ」

「・・・・・・・・・・」

と、レイが来たのは・・・一夏の部屋であった。

「何で俺の部屋なんだよ！」

「まあそんな硬いこと言うなよ。お前には色々と教えてやっただろ？その恩返しって言う形で泊まらせてくれよ」

「・・・・・・・・・・」

「それとも、俺に女子に部屋に行って『泊まらせて下さい』って言わせるつもりか」

と、レイは皮肉的なことを言った。

まあ、今の時代、男子が女子に部屋に泊まりにいくと言うことは命知らずもいいところだ。

「ああもう！分かったよ。泊まってもいいが、もう寝る場所は無いぞ」

部屋は以前まで箒と一緒にであったが、つい最近部屋替わりになり、

そして新しくシャルルが新しいルームメイトになった。

「大丈夫だ。こんなこともあるかと、ここに来る前に家から敷布団を持ってきた」

と、見ればレイの背中には荷物と、敷布団があった。

「し、敷布団って・・・古いぞ」

「まあ気にするな」

と、レイは部屋の中に入っていく、部屋の奥に敷布団を置いた。

「とりあえず、ここで寝るぜ」

「・・・まあ、そこならいいか」

そして、荷物を敷布団の横に置くと、敷布団を敷いた。

「へえ・・・これが日本古来の寝るものなんだ」

と、興味津々で、シャルルが聞いてきた。

「ああ。」

「こういうのはじめて見たな・・・」

「そうか・・・」

そして、この場の雰囲気も和んだ・・・

そして、翌日……

「……………今日も……皆さんに嬉しいお知らせです……また新しい転校生です」

と、教室の入り口から、一人の少女が入ってきた。

「え？二日連続で転校生って……ありえるの……」

女子たちも、驚いている様子……

そりゃそうだ。何せ、転校生が二日連続で来ると言うのは異例中の異例だ。

「……………」

少女は何も言わなかったが、後ろの電子黒板には『ラウラ・ボーデ ヴィツヒ』と出ていた。

それが少女の名前だろう……。

髪は白に近い銀で、背中まで伸ばしていたが、どうも伸ばしっぱなしと言う感じであった。

左目には、黒い眼帯をしているが、レイの眼帯とはタイプが違う。

レイの眼帯は帯のようなもので、目だけではなく、斜め線上を覆う形であるが、ラウラのは目だけを覆う形であった。

右目は赤であり、冷徹な感じがあった。

背丈は低く、女子の中では低い部類だろう。

姿とオーラからして、明らかに「軍人」という感じであった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ラウラは口を閉ざしたままであった。

「・・・ラウラ、挨拶ぐらいしろ」

「・・・はい。教官」

と、織斑先生が言うと、ようやく口を開いた。

「ここでは教官と呼ぶな。もう私は教官ではないし、ここではお前は一般生徒だ。私の事は織斑先生と呼べ」

「了解しました」

（・・・・・・・・教官？・・・どういことだ・・・）

レイは少し疑問に思った。

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

生徒たちに沈黙が続き、ラウラはまた口を閉じた。

「あ、あの・・・終わりですか？」

と、山田先生が恐る恐る聞いてきた。

「以上だ」

と、即答だった。

そして、一夏と目が合うと・・・

「! 貴様が・・・」

すると、一夏のところに行くと・・・

バシンッ!

と、一夏に容赦ない平手打ちをした。

「・・・・・・・・」

「う？」

「・・・・・・・・」

「貴様があの人の弟など、私は認めない」

(・・・どういことだ?)

「いきなり何しやがる！」

「ふん・・・」

そして、そのまま一夏の前から去った。

すると、レイを見つけると睨みつけてきた。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

そして、ラウラは空いた席についた。

(・・・あいつ・・・何かありそうだな・・・)

と、レイはまたハッキングして、調べようと思った・・・

S t o r y ボーイ・ミーツ・ボーイ（後書き）

今回から、ヒロインが登場。

しかし、メインは誰かはまだ秘密です。

Story8 ルームメイトはブロード貴公子（ジェントル）

そして、数日経ち、土曜日・・・

午前中に授業があり、午後は自由時間であった。

自由時間と言うことで、ほとんどの生徒が全開になったアリーナを使用する。

そこで、一夏とシャルルは模擬戦を行って、レクチャーを受けていた。

「ええとね、一夏がセシリアさんや凰さんに勝てないのは、単純に射撃武器の特性を把握していないからだよ」

「そ、そうなのか？一応分かっているつもりだったんだが・・・」

「そういう分かっているつもりが一番いけないんだよ。だから勘で動いて、動きを読まれるから、僕と間合いが詰めなかったんだよ」

「うう・・・。確かにイグニッション・ブーストも読まれていたしな・・・」

「一夏の機体は格闘オンリーだから、射撃武器の特性を把握しないと対戦では勝てないよ。」

それに、『瞬間加速』も直線だから、反応できなくても、軌道予測で攻撃できちゃうからね」

「直線か・・・」

「あつ、でも瞬間加速中は無理やり軌道を変えるのはやめたほうがいいよ。空気抵抗や圧力で負荷がかかって、最悪の場合骨折はするからね」

「なるほどな・・・」

と、一夏はうなずいた。

「ふん。私のアドバイスを聞かないからだ」

「あんなに分かりやすく教えてやったのに、なによ」

「わたくしの理路整然とした説明の何が不満だと言うのかしら」

と、後ろで箒、鈴、セシリアは不満げに愚痴っていた。

「そういえば、レイはどこに行ったのかな」

「さあ。さっきまで姿は見えていたんだがな・・・」

一夏とシャルルはレイと一緒に来ていたのだが、なぜか姿が見えない。

ちなみに、ここ第三アリーナは結構過密な状態であるが、それは学

園で三人しかいない男子目当てに、女子たちが集まっているのだ。

「ところで、一夏の白式にはイコライザがないんだよね？」

「ああ。何回か調べてもらったんだけど、拡張領域が空いていないらしい。だから量子変換は無理だって言われた」

「たぶんだけど、それってワンオフ・アビリティーに容量を浸かっているからだよ」

「ワンオフ・アビリティー……って何だっけ」

「その名の通り、『唯一仕様の特殊才能』だよ。各ISが操縦者と最高状態の相性になった時に自然発生する能力のこと」

「あっ、そうか」

「でも、それは第二形態になった時に発動するものだけど、発現しないのが圧倒的に多いんだ。それ以外の特殊能力を複数の人間が使えるようにしたのが第三世代型なんだ。セシリアさんのブルー・テイアーズや、凰さんの衝撃砲もそうだよ」

「そうなのか。白式の唯一の特殊才能は『零落白夜』かな」

「多分そうだと思う」

「うーん。でもレイのISはワンオフ・アビリティーを発動しているのかな？何か特殊な能力がありそうなんだが……」

「さあ……。でも、IS三体が同じところに収納されていること自

体たぶんありえないことだと思っし、何よりそれぞれに専用の特
殊能力があるって言う話だし。色々と分からないことばかりなんだよ」

「ふーん。でも、何でそこまで知っているんだ？」

「レイがね、暇な時によく教えてくれたの。特に『必殺フ
ァンクシヨンの事も言っていたの』」

「必殺ファンクシヨンか……。そういえばあいつ、戦闘中にそ
んなことを言っていたな。その直後に物凄い攻撃を繰り出したんだ
よな」

「そうなんだ」

「しかも、それぞれのISに専用の技まであるみたいだし、それに
同時に展開もできるって言うのがまた凄いよな」

「そうだよね。僕もびっくりしたな。しかも無人の状態はAIの自
己判断で動いているっていうのに、あんなに強いんだもん」

「でも、何であいつのISは全部『全身装甲』だろうか」

「僕も思っただよね。普通なら必要ないんだけど……」

「うーん。でも、当の本人に聞こうにも、いないんじゃない……」

「そうだね……」

「ねえ、ちょっとアレ……」

「ウソっ、ドイツの第三世代型だ」

「まだ本国でトライアル段階だって聞いたけど……」

すると、他の女子たちが騒ぎ出し、一夏とシャルルが上を見ると、そこに転校生のラウラがいた。

彼女は自身のISを身に纏っていた。

「おい」

と、ISの開放回線で声が飛んでくる。

「……なんだよ」

一夏は気が進まないが、返事はした。

「貴様も専用機持ちだそうだな。なら話が早い。私と戦え」

「……いやだ。理由がねえよ」

「貴様には無くても、私にはある」

「……」

一夏はラウラの理由はなんとなく分かっていた。

「貴様がいなければ教官が大会二連覇の偉業はなしえただろうことは容易に想像できる。」

だから、私は貴様を——貴様の存在を認めない」

「・・・・・・・・・・」

（・・・・そういうことか・・・）

「・・・・また今度な」

「ふん。ならば——戦わざるを得ないようにしてやる！」

と、右肩のキャノンを放った。

「!!」

すると、シャルルが間に入った。

しかし、弾が中央に来た時、突然真っ二つになった。

「!!」

そして、爆発すると、爆風が何かに遮られた。

すると、「そこ」に色が浮かび上がってきた。

それは、漆黒のボディーをした幻・・・・ゲシュペンスト・ファントムが現れた。

「あれは・・・・」

一夏が姿を確認すると、ファントムは大剣モードにしたグランプラ

ズマカッターの剣先をラウラに向けた。

「こんな狭いところでそんな大火力武器を使用するとは……。ド
イツの人は沸点が低いようだな」

「・・・お前は・・・レイ・ラングレン・・・か」

「・・・俺のことを知っているのか」

「ああ。憎むほどな」

「・・・・・・・・・・」

『その生徒！何をやっている！クラスと出席番号を言え！』

と、騒ぎを聞きつけたのか、担当の先生が来た。

「・・・ちつ。邪魔が入ったか」

と、ラウラはISを解除し、そのままアリーナを出て行った。

「・・・・・・・・・・」

レイは黙ったまま、グランプズマカッターを元の位置に戻した。

そして、一夏の元に行った。

「大丈夫か」

「あ、ああ。大丈夫だけど・・・お前今までどこに居たんだよ」

「・・・ここに入るときに、ラウラの姿を見てな、何かするだろう
と思って、ファントムのステルスで隠れていた」

「か、隠れていたって・・・」

「でも、それ凄いよ。ISのハイパーセンサーにも反応がなかった
んだよ。そこまで完璧なステルスがあったなんて・・・」

と、シャルルは興味津々な様子。

「まあこいつは色々特殊なもので、特定の条件化でしか発動でき
ないんだ」

「へえ・・・それでも凄いよ」

「・・・そうかな・・・まあいいや。それより、一夏はもうちょ
っと射撃武器の特性を
知ったほうがいいな」

「って、聞いていたのかよ」

「ああ。すぐ隣でな」

（ええ・・・。全く気がつかなかった・・・）

「とにかく、シャルル。一夏に射撃武器を使わせてみたらどうだ」

「うーん。それもいいね」

「じゃあ決まりだな。後は頼む」

と、レイはISを解除し、アリーナを出て行こうとしていた。

「あれ？もういいの」

「ああ。やることあるんだ」

「そっか。じゃあな」

「また後で」

と、レイは手を振って、アリーナを出た。

そして、着替え終わったレイは、寮へと向かっていた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

すると、レイは途中で立ち止まった。

「・・・・なぜそこまで俺を付け狙うんだ・・・・ラウラ」

と、レイは振り向くと、そこにラウラの姿があった。

「気付いていたか・・・まあ、お前だったら、このくらい簡単なことだ」

「・・・どういことだ」

「・・・今は関係ない。それより、明日の夕方、第二アリーナに
来い」

「第二アリーナだと」

「そこで勝負だ。拒否は許さん」

「・・・勝負だと・・・。なぜだ」

「答える必要はない」

「・・・・・・」

レイはしばらく考え・・・

「・・・いいだろう。その勝負受けた」

「・・・必ず来い」

と、ラウラは寮へといった・・・

(・・・ラウラ・・・やつは一体・・・)

レイは少し考え、寮へと向かった・・・

そして、今レイは居候なので、一夏の部屋に入った。

「はぁ・・・」

とため息をついていると、水の音がした。

（・・・誰かがシャワーを浴びているのか？・・・シャルルかな）

と、上着を脱いで、ノートパソコンを取り出し、席に座ると、画面を開いて、データの打ち込みをした。

（・・・そういえば、昨日ボディークリームが切れていたな・・・届けてやるか）

と、棚から予備のボディークリームを取り出し、シャワールームに向かった。

シャワールームは脱衣所と区切られているので、そこで声をかけたらしいだろう。

そして、ドアを開けて入った。

すると、向こうからドアの開ける音がした。

シャルルも探しに来たのだろう・・・。

「丁度よかった。シャルル、これ新しい・・・」

「れ、レイ・・・？」

「へ？」

そこにいたのは、見たことがない女子だった。

なぜ分かったかと言うと、胸があるからだ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

レイは黙ったままだった。

すると、部屋のドアが開く音がした。

「ただいま・・・・・・・・」

「い、い、いち・・・・か？」

「へ？」

と、その現場に一夏も遭遇した。

「え・・・・・・・・ええ・・・と・・・・これ、新しいボディースープ・・・・」

「う・・・・・・・・うん・・・」

と、女子はレイからボディースープを受け取った。

「い．．行こうか．．。一夏．．。」

「あ、ああ．．」

と、レイと一夏はギクシャクとした動きで脱衣所を出て、扉を閉めた。

「．．．．．」

「．．．．．」

二人は顔を合わせると、そのまままたギクシャクとした動きで、部屋奥へと歩いていった。

そして、しばらくして．．．

「．．何だったんだ．．あれ．．。」

「．．俺にも．．分からん」

と、まだ混乱気味であった。

「あれ．．．シャルル．．なのか．．」

「．．た、たぶん．．」

ガチャッ

すると、シャワールームのドアが開き、その音に二人はビクっとした。

「あ、上がったよ」

と、声を聞いて、それはシャルルだと言うのを確かめた。

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

そして、二人はゆっくりと振り向くと・・・・・・・・そこには、女子がいた。

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

かれこれ三十分近く、三人は黙ったままだった。

「あー、その」

と、一夏が声をかけると、シャルルはビクツとした。

「お、お茶でも飲むか」

「う、うん。もらおうかな・・・」

「レイも・・・いるか」

「あ、ああ。もらおう・・・」

レイはまだ少し混乱気味な様子・・・。

一夏はお湯を沸かしている間に、急須にお茶の葉を入れて、コップを置いた。

お湯が沸いて、急須にお湯を入れて、コップに注いだ。

「・・・ほい、レイ」

と、一夏はまずレイに渡した。

「すまないな・・・」

そして、次に一夏はシャルルに渡した。

「もう・・・大丈夫だろう。ほい。」

「あ、ありがとーきゃっ」

と、一夏の指が当たり、シャルルは手を引っ込めたため、コップが落ちて、一夏は何かキャッチするも、その反動で熱いお茶が一夏の手にこぼれた。

「あちちっ！水っ、水っ」

と、一夏はとっさに水道があるところに行き、蛇口を全開にして、水を出して、手を冷やした。

「ご、ごめん！大丈夫？」

と、シャルルが心配そうに寄ってきた。

「ま、まあ、たぶん。すぐに冷やしたしヤケドにはならないだろう」

「ちょ、ちょっと見せて。……ああ、赤くなっている。ゴメンね」

と、シャルルはお茶がかかった場所を痛々しげな表情で見つめる。

「すぐ氷もらってくるね！」

「待て待て。その格好で外に出るのはマズイだろ。後で自分で取ってくる」

「でも――」

（・・まあ、それが正解だな。今のシャルルは体のラインがくつきりだ。外に出たら即バレだ）

と、ようやくいつものレイに戻った。

「それより、その．．．なんだ。さっきから胸が、な。当たっているんだが．．．」

「!?!」

シャルルは自分の体勢に気づき、飛び退くように下がった。

「．．．心配しているのに．．．一夏のえっち．．」

「なっ!?!」

「．．．．．」

レイはその様子をお茶を飲みながら見ていた。

「ふう．．．。ここまで冷やしたら大丈夫だろう。じゃあ、まあ、改めて．．．」

「聞こうかな」

「う、うん」

レイと一夏は疑問を聞くことにした。

「何で男の振りなんかしていたんだ?」

「それは、その……実家のほうからそうしろって言われて……」

「うん？実家っていうと、デュノア社の――」

「そう。僕の父がその社長。その人から直接の命令なんだ」

「……」

レイは、何か嫌な感じを感じていた。

「命令って……親だろう？何でそんな――」

「僕はね、一夏。愛人の子なんだ」

「!!」

「……」

一夏は絶句し、レイは顔が引きつった。

「引き取られたのは二年前。ちょうどお母さんが亡くなったときにね、父の部下がやってきたの。それで色々と検査をする過程でIS適応が高いことが分かって、非公式ではあったけどデュノア社のテストパイロットをやることになってね」

シャルルは話したくないであろう内容を健気に喋っていた。しかし、レイはその様子を見ていられないという様子であった。

「父に会ったのは二回くらい。会話は数回くらいかな。普段は別邸で生活しているんだけど、一度だけ本邸に呼ばれてね。あの時はひどかったなあ。本妻の人に殴られたよ。」

『泥棒猫の娘が！』ってね。参るよね。母さんもちっとくらい教えてくれたら、あんなに戸惑わなかったのにね」

と、愛想笑いを繋げるシャルルだったが、その声はかわいていてちつとも笑ってはいなかった。

「それから少し経って、デュノア社は経営危機に陥ったの」

「え？だってデュノア社って量産機ISのシェアが世界で第三位だろ？」

「そうだけど、結局リヴァイブは第二世代型なんだよ。ISの開発っていうのはものすごくお金がかかるんだ。ほとんどの企業は国からの支援があってやっと成り立っているところばかりなんだよ。それで、フランスは欧州連合の統合防衛計画『イグニッション・プラン』から除名されているからね。第三世代型の開発は急務なの。国防のためもあるけど、資本力で負ける国が最初のアドバンテージを取れないと悲惨なことになるんだよ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「話を戻すね。それで、デュノア社でも第三世代型の開発をしていたんだけど、元々遅れての第二世代型最後発だからね。圧倒的にデータも時間も不足していて、なかなか形にならなかったんだよ。それで、政府からの通達で予算を大幅カットされたの。そして、次のトライアルで選ばれなかったら場合は援助を全面カット、その上でISの開発許可も剥奪するって流れになったの」

「・・・事のあらすじは分かった。だが、それがなぜ男装に繋がるんだ」

と、レイは若干怒りが混じった声で聞いてきた。

「簡単だよ。注目を浴びるための広告塔。それに――」

「同じ男子なら日本で登場した特異ケースと接触しやすい。可能であればその使用機体と本人のデータを取れるだろう・・・ってね」

「・・・それはつまり・・・」

「そう、白式と、特殊なISでもあるレイのファントム、アーベント、ナハトのデータを盗んで来いって言われているんだよ。僕は、あの人にね」

（・・・ただ利用する・・・か。IS適応がたまたまあった、それを使おうと・・・そんな感情しかないのだろう・・・）

と、レイはシャルルの話を聞いて、答えを導いた。

しかし、その答えにレイは怒りを覚えた。

「とまあ、そんなところかな。でも一夏とレイにばれちゃったし、きっと僕は本国に呼び戻されるだろうね。デュノア社は、まあ・・・潰れるか他企業の傘下に入るか、どのみち今までのようにはいかないだろうけど、僕にはどうでもいいことかな」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

一夏とレイは、黙っていた。

「ああ、なんか話していたら楽になったよ。聞いてくれてありがとう。それと、今まで嘘についてゴメン」

と、深々と頭を下げるシャルルを、一夏は肩を掴み、顔を上げさせた。

「いいのか、それで」

「え・・・・・・・・？」

「それでいいのか・いいはずがないだろ。親が何だっていうんだ。どうして親だからってだけで子供の自由を奪う権利がある。おかしいだろう、そんなものは!」

「い、一夏・・・・・・・・？」

「親がいないと子供は生まれない。そりゃそうだよ。でも、だからって、親が子供に何をしてもいいなんて、そんな馬鹿なことがあるか! 生き方を選ぶ権利は誰にだってあるはずだ。それを、親なんか邪魔されるなんて無いはずだ!」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「ど、どうしたの? 一夏、変だよ?」

「あ、ああ……悪い。つい熱くなってしまった」

「いいけど……本当にどうしたの？」

「俺は――俺と千冬姉は両親に捨てられたから」

「あ……」

「……」

レイは今思った。一夏の資料にあった「両親不在」ということを……。

「その……ゴメン」

「気にしないでいい。俺の家族は千冬姉だけだから、別に両親に何て今さら会いたいとも思わない。それより、シャルルはどうするんだよ？」

「どうって……時間の問題じゃないかな。フランス政府もことの真相を知ったら黙っていないだろうし、僕は代表候補生からおろされて、よくて牢屋とかじゃないかな」

「……それでいいのか」

と、黙っていたレイが聞いてきた。

「良いも悪いもないよ。僕に選ぶ権利がないから、仕方が無いよ」

「・・・・・・・・だったら、ここにいろ」

「え？」

「特記事項第二一、本学園における生徒はその在学中におけるありとあらゆる国家・組織・団体に帰属しない。本人の同意がない場合、それらの外的介入は原則として許可されないものとする」

と、一夏は暗記していたテキストを言った。

「――つまり、この学園にいれば、少なくとも三年間は大丈夫だろう？それだけの時間があれば何とかなる方法をだって見つけられる。別に急ぐ必要だってないだろう」

「一夏」

「ん？なんだ？」

「よく覚えられたね。特記事項って五十五個もあるのに」

「・・・・・・・・勤勉なんだよ、俺は」

「そうだね。ふふっ」

と、シャルルはやっと笑った。

「・・・・・・・・答えは、まだ先ってことだな」

「ああ。とにかく決めるのはシャルルなんだから、考えてくれ」

「うん。そうするよ」

「・・・これで、まだ希望はあるな。シャルル」

「うん。」

そして、雰囲気は少し明るくなった。

コンコン。

「「「!?!」」」

「一夏さん、レイさん、いらっしゃいます?夕食をまだとられていないようですけど、体の具合でも悪いのですか?」

いきなりのノックと呼び声に、レイと一夏とシャルルは揃って身をすくませる。

「入りますわよ?」

「まずい!いくらセシリアでも分かってしまうぞ!」

「ど、どうしよう?」

「と、とりあえず隠れろ」

と、ぼそぼそと小声でやりとりした。

「わ、分かったよ。とりあえず身を潜めて——」

「だあっ！なんでクローゼットなんだよっ。ベッドベッド！布団の中なら大丈夫だ！」

「あ、ああっ、そうか！」

「急げ！」

と、ばたばたとあわただしく動くレイ＆一夏＆シャルル。

ガチャ。とドアが開く音がした。

「よ、よおセシリア！なんだ？どうした？」

「……何をしていますの？」

絵的には、ベッドに飛び込んだシャルルの上から布団をかける形で一夏が乗っかっている。

レイはベッドの隣で膝立ちしてシャルルを見ているという形であった。

「い、いや、シャルルがなんだか風っぽいついていうから、布団をかけてやったんだ。それだけだぞ、ははは……」

「……日本では病人の上に覆い被さる治療法でもあるのかしら？」

「・・・・・・・・・・」

「と、とにかく、あれだ。シャルルは具合が悪いからしばらく寝るって。夕食はいらないみたいだし、仕方ないから俺一人で行こうって話をしていたんだ」

「そ、そうそう」

布団の中でくぐもったシャルルの声がした。

『もうちょっと調子が悪いようにしろ』

と、レイがセシリアには聞こえない程度で言った。

「い、ごほっ、ごほっ」

（うわぁ・・・・・・・・わざとらしい・・・・・・・・これじゃばれる・・・・）

と、レイは半分諦めかけた。

「あ、あら、そうですか？では、わたくしもちょうど夕食はまだですし、ご一緒しましょう。ええ、ええ。珍しい偶然もあったものです」

どうやら騙せた様子。

「ごごほっ。そ、それじゃあごゆっくり」

「お、おう」

「じゃあデュノアさんお大事に。さあ、一夏さん、参りましょう」

すると、セシリアは一夏の腕を取った。

「レイさんもうですか」

「ああ・・・すまないなセシリア。シャルルを見ていないと。もしかしたら具合が更に悪くなるかもしれないから、俺は後で行くよ」

「そうですか・・・。ではお先に・・・」

と、一夏とセシリアは部屋を出て行った。

「・・・はあ・・・行ったか・・・」

と、レイがため息を付くと、シャルルが布団から出てきた。

「・・・ありがとう・・・」

「礼はいいよ」

「・・・ねえ、レイ」

「なんだ」

「……話……聞いてくれる？」

「話？でも何の」

「……うん。さっきも言っていたけど、ここを出た後……どうするか……」

「……」

「……一夏の言葉は嬉しかった……。でも、答えが見つからなかったら……って考えると、自信をなくしてしまう……」

「……そんなことは、ないさ」

「え？」

「シャルルなら、きっと答えを導き出せるだろう」

「……レイ」

「……もし、答えが見つからず、そのまま学園を卒業した時は……その……俺が匿ってやるよ」

「え？」

「……ふっ……。もしもの話さ。でも、本当に見つからなかったら、俺が何とかするよ」

「……ありがとう。レイ」

「・・・・・・・・シャルルなら、何とかできるさ」

と、二人の仲は結構いい感じになった・・・・・・・・

同時刻・・・・・・・・第二アリーナ・・・・・・・・

そこのピットに、ラウラが立っていた。

「あの人の存在が・・・・・・・・その強さが、私の目標であり、存在理由・・・・・・・・」

そして、ラウラは左目を覆う眼帯を外した。

そこには、右の瞳とは違う、金色に輝く瞳があった。

「織斑一夏――。教官に汚点を残させた張本人・・・・・・・・排除する・どのような手段をつかってでも・・・・・・・・」

ラウラは心にそう誓う。

「・・・だが、その前に・・・レイ・ラングレン。お前は必ず排除する。私の存在意義にかけても！」

そして、ラウラはその場を去っていった・・・

S t o r y 8 ルームメイトはブロンド貴公子（ジェントル）（後書き）

レイとラウラの関係は次回で明らかになります。

Story 黒き亡霊VS黒い雨

そして、翌日の昼・・・

レイは寮の屋上の影で、ノートパソコンを開き、データを見ていた。それは、ラウラのISに関するものであった。

（『シュヴァルツェア・レーゲン』・・・ドイツの第三世代型のIS。まだ試作段階ということで、通常のISより性能、拡張容量、機能が大きく異なり、大火力でもある。近接戦闘では両腕に内蔵されているビームカッター、及び両肩の浮遊ユニットに搭載されているワイヤーブレード。砲撃戦だけではなく、格闘戦でも強さを発揮するか・・・。さらに特殊能力として、停止結界・・・通称『AIC』を持ち、標的を完全に停止させるが、その効果範囲は限られるか。だが、さすがにまだトライアル中と言うこともあって、データはまだ非公開が多いな・・・）

すると、誰かが来るのを感じ、レイはデータを閉じて、自身のISのデータを開いた。

そして、扉を開いて来たのは、織斑先生であった。

「織斑先生・・・」

基本日曜日が学園の休みであるが、ほとんどの生徒は学園にいることが多い。

しかし、学園教師には休みはほとんどないので、寮に現れてもおかしくはない。

「ここにいたか・・・ラングレン」

「・・・ちょっと、部屋では気分が乗らないので、気分を変えて屋上でデータの確認と打ち込みをしていました」

「そうか。一つ話がある」

「話？」

「今日の夕方・・・第二アリーナでラウラと勝負をするらしいな」

「・・・はい。そうですが、なぜ知っているのですか？」

「あいつが言っていたからな。だから、夕方の第二アリーナを使用してもいい」

「・・・それは・・・どうも」

「ついでに、第二アリーナには誰も近付かないように、言いかけておいた」

「・・・なぜそこまで・・・」

「あいつの要望だからだ」

「ラウラが？」

「二対一の真剣勝負でやりたいそうだ。だから、誰も入れたくない
そうだ」

「……本当に真剣勝負をする気なのか……あいつは」

「そのようだな。やつは本気だ」

「……」

「……それと、ボーデヴィツヒには言っていないが、アリーナの
モニタールームでお前たちの戦いは見ているからな」

「……」

そして、レイは立ち上がり、屋内へ入っていった。

「……聞き忘れていたが……。お前、何か不審なことをして
いないか」

と、織斑先生はレイが階段を下りる前に、聞いてきた。

「……いいえ。」

と、レイはそのまま階段を下りていった……。

そして、時間は夕方……

レイはアリーナの更衣室でISスーツに着替え、アリーナ内に入っていた。

既にラウラがアリーナ内で待っていた。

「……………」

そして、レイはラウラより少しはなれて所まで来た。

「来たか……レイ・ラングレン」

「…………ラウラ・ボーデヴィツヒ……」

そして、両者はしばらく睨み合った。

「こうしてまで俺と戦う理由は何だ。なぜそこまで俺を狙う」

「……教えてもやらんことはない……。だが――」

そして、ラウラはISを展開した。

「この『シュヴァルツェア・レーゲン』に勝てたらな」

「・・・・・・・・・・」

そして、レイもファントムを展開した。

「なら、話は早い」

と、レイは両腕からグランプラズマカッターを取り出し、刀身を展開し、構えた。

ラウラも両腕からビームカッターを展開した。

「行くぞ！」

そして、両者は同時に飛び出した。

「うおおおお！」

「はああああ！」

そして、両者の剣が交わり、衝撃が起きた。

「始まったか」

織斑先生はアリーナのモニタールームで、二人の戦いを見ていた。

「・・・さて、どっちが勝つか・・・」

と、コーヒーを飲みながら、どっちが勝つか予想した・・・

「くっ！」

レイはとっさに左のグランプラズマカッターを立て、ラウラのカッターを防いだ。

そして、レイはラウラのカッターを弾き、右のグランプラズマカッターを振り払ったが、ラウラは左のカッターで防いだ。

「ふん」

ラウラはそのままレイを弾き飛ばし、右肩のキャノンで攻撃した。

「くっ！」

レイはとっさに動き、キャノンの砲撃を避けていった。

そして、キャノンの砲撃を避けながら、レイはラウラに向かって行った。

「でりゃああ！」

そして、キャノンの一発がファントムに向かって行っただが、レイはギリギリのタイミングで弾を切り裂いた。

「!！」

「うおおお!!！」

そして、レイはラウラに向かって行っただ。

「・・・ふっ」

すると、ラウラが右手を突き出した。

その直後、手の平からシールドのようなものが出てきて、ファントムはラウラの目の前で止まった。

「な、何!？」

レイは一瞬動けないことに戸惑ったが、すぐにこれが何かを思い出した。

「・・・・・・・・え・・・A I C・・・か・・・」

「ほう。よく知っているじゃないか。いくらお前でも停止結界の前では手も足も出まい」

そして、キャノンの銃口をファントムに向けた。

「!・・・まだまだ!」

すると、ファントムの背中にあるコンテナが変化し、そこに長方形の二つのコンテナが現れた。

そして、コンテナのハッチが開き、そこから多数のミサイルが反対側に発射された。

「ふん。どこを狙って・・・!」

すると、ミサイルは大きく迂回して、多方向からラウラに向かって行った。

「くっ!」

すると、ラウラの右手がずれると、ファントムは動き出して、レイはとっさに後ろに下がった直後に、ラウラにミサイルが直撃し、爆発した。

「やったか!？」

しかし、爆煙から、キャノンの弾が飛んできた。

「!」

レイは回避は間に合わないと瞬時に思い、グランプラズマカッターを二つ接続し、大剣モードにして、剣先をとっさに地面に突き刺し、防御体勢に入った。

そして、弾がグランプラズマカッターの刀身に直撃し、強い衝撃と爆発が起きた。

「ぐう！」

衝撃でファントムは少し後ろに下がった。

そして、爆煙が晴れると、ラウラのシュヴァルツェア・レーゲンが現れた。

「くっ……。考えたな。弾道型ミサイルでAICの効果範囲外から攻撃をかけるとは……」

「……………」

レイはグランプラズマカッターを構えなおした。

ちなみに、グランプラズマカッターの刀身を形成しているのは、もちろんエネルギーであるが、大剣モード時にかなり強固な物質に変換する。

かなり強固だが、これを破壊したのは、一夏の白式の「零落白夜」のみである。

「…………ふっ……。そうだ……」

「…………？」

「…………そうでないとな……。お前は！」

と、両肩の浮遊ユニットから、ワイヤーブレードを射出した。

「くっ！」

レイはグランプラズマカッターを地面に突き刺し、両腕からグランプラズマサイズを取り出し、投擲した。

そして、プラズマサイズはブレードワイヤーに直撃し、ワイヤーは軌道を変え、地面に突き刺さり、プラズマサイズも地面に突き刺さった。

「ちっ！」

ラウラはとっさにワイヤーを戻し、ビームカッターを出して、レイに向かって行った。

レイは背中のグランスラッシュリッパーを取り出した。

「いけ！グランスラッシュリッパー！」

そして、レイはスラッシュリッパーをラウラに向け投擲した。

「ふん。無駄だ！」

と、ラウラは右手を突き出した。

そして、グランスラッシュリッパーが『一つ』止められた。

「何！？・・・！まさか」

すると、右からもう一つのスラッシュリッパーが飛んできて、ラウ

ラに直撃した。

「ぐわぁ！」

それによって、ラウラが右手がずれてしまい、止めていたスラッシュリッパーがラウラに直撃した。

「ぐう！」

そして、グランスラッシュリッパーはレイの元に戻り、キャッチした。

「くっ・・・調子に乗るな！」

と、再びブレードワイヤーを射出した。

「くっ！」

レイはとっさにグランスラッシュリッパーを投げようとしたが、ワイヤーのほうが早く、ファントムの両腕に絡み付いてきた。

「しまった！」

レイは何とかワイヤーを離そうとしたが、ワイヤーの絡む力が強く、シュヴァルツェア・レーゲンのパワーも結構強いいため、離せなかった。

「終わりだ！」

と、ラウラはワイヤーを引き寄せた。

「くっ！」

レイは抵抗したが、引き寄せるパワーも強いいため、徐々に近付いていった。

そして、右肩のキャノンをファントムに向けた。

「!!」

「くらえ！」

そして、キャノンの銃口から火が噴き、弾がファントムに直撃し、爆発した。

「・・・・・・・・」

織斑先生は、その様子を見ていたが、何か考えていた。

そして、ラウラはワイヤーを戻し、キャノンを上げた。

「・・・ふっ・・・他愛もないな・・・。所詮は旧世代の代物・・・。やはり私のほうが最強だったな・・・。」

と、ラウラは成し遂げたという感じであった。

「これで・・・私は・・・。・・・！」

すると、爆煙が晴れると、ファントムが立っていた。・・・しかもほぼ無傷で・・・。

「ば、馬鹿な・・・。あれをくらって立ってられるやつなど！」

ラウラは動揺していた。

「・・・ふっ・・・。とっさにグランスラッシュリッパを盾にして正解だったな。あのまま攻撃を受けていたら、恐らく機体はただではすまなかっただろうな・・・。」

と、ファントムは手に持っていたスラッシュリッパの持ち手を捨てると、その足元には、グランスラッシュリッパの残骸が落ちていた。

「くっ・・・。この、死に損ないが！」

と、ラウラはレイに向かっていくと同時に、『瞬間加速』をかけ、急接近した。

「・・・甘いな」

すると、レイはその場からラウラに向かってジャンプした。

「!?!」

そして、レイは目の前まで来たラウラのシュヴァルツェア・レーゲンの両肩の浮遊ユニットに手をかけ、そのまま逆立ちをするように、真上にいった。

「何!?!」

「・・・・・・・・・・」

そして、そのまま落ちながら、レイはラウラの背面に蹴りを入れた。

「ぐう!」

ラウラはそのまま前へと飛ばされて、バランスを崩した。

レイは蹴りを入れたと同時に、後ろに下がっていき、地面に着地した。

「くう・・・この!」

ラウラはとっさに立ち上がり、キャノンを構えた。

「やらせん!」

すると、ファントムの両足の側面にコンテナを展開し、そこから両方で六つのニードルが発射された。

そして、ニードルはラウラのキャノンに直撃し、爆散した。

「くっ！」

ラウラはキャノンの爆発の衝撃で、顔をしかめた。

そして、レイはラウラに向かっていくと同時に、右手にコンバットナイフを展開し、ラウラに突きつけた。

「!!」

しかし、ナイフはラウラの目の前で止まった。

「・・・・・・・・」

そして、レイはナイフを引き、収納した。

「・・・・・・・・どういうつもりだ・・・」

「・・・・・・・・ここで決着を付けても、面白くない」

「何？」

「決着は、学年別トーナメントで付けよう・・・」

「・・・・・・・・」

「・・・まあ、気に入らないだろうが・・・いいだろう」

と、レイは後ろを向き、歩いていった。

「……知りたくないのか……。私がお前を狙う理由を……」

「……今はいい……。そう思っただことだ」

「…….…….」

「……だが、大体の予想は付く……。お前が俺を狙う理由……」

「……何？」

「……憎いのだろ。俺があ『称号』を得たことに……」

「…….!!」

ラウラは少し驚いている様子……

「……だが、これだけは言っておく。今のままでは、俺には勝てないぞ」

「な、何だと!？」

「……いや。それ以前に、一夏にも勝てないぞ」

「なっ!……ふ、ふざけるな!私があんなやつに負けるというのか!」

「そうだ。」

「・・・！」

「・・・力こそがすべて……。それがお前の考えだろうが、それは強いのではない」

「・・・何・・・？」

「力を求める者の行く先は・・・破滅だ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「そのような考えじゃ、一夏にも勝てない」

「・・・くっ！・・・そんなでたらめを信用するか！私は私のやり方でお前と織斑一夏にも勝ってみせる。トーナメントで待っている！」

と、ラウラはそのまま後ろを向き、アリーナを出た。

「・・・確かに、お前のやり方では、勝てないだろうな・・・。
一夏には・・・」

と、織斑先生はその様子を見ていた。

「私のようになりたいようだが、それはできないぞ……。今のお前では……」

そして、織斑先生は席を立て、モニタールームを出た。

「……………」

レイは着替え終わって、寮へと向かっていた。

(…………ラウラ……。あいつもあの『施設』の出身か……………)

レイはさっきのことを考えていた。

(…………俺がいるから、あの『称号』を自分は得られなかった……。というところか)

レイは大体答えに近付いていた。

(…………正直なところ…………思い出したくなかった……。あの施設のことは…………)

どうやら、その『施設』に、トラウマのようなものを感じている様子……

そして、レイは部屋に向かっていると、一夏とシャルルが歩いていた。

「あつ。レイ」

「シャルルに、一夏か。どこに行くんだ？」

「ああ。今から食堂に行くんだが、レイはどうする？」

「・・・そうだな・・・。ちょうどいいや。俺も行く」

と、レイは一夏とシャルルにそのままついていった・・・。

そして、食堂に入り、それぞれメニューを選んで、待っていた。

「そういや、レイは午前中何していたんだ」

「・・・寮にいたが、特に何もしていない」

「そうだったのか」

「・・・何かあったのか？」

「それが、午前中に第一アリーナでセシリアとラウラが模擬戦を行ったんだ」

「あの二人が？」

「ああ。俺もその現場に遇って、シャルルと協力してラウラと戦って、セシリアを助けたはいいけど、セシリアには少し怪我を負って、そのISはひどい損傷を受けて、今度の学年別トーナメントに出られなくなっただよ」

「・・・そうか」

「まあ、最終的に千冬姉が止めに入って、事は終わったんだけど、トーナメント終了まで、私闘は禁止ってことになったんだ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「どうしたんだ？」

「・・・いや、なんでもない」

すると、三人が頼んだ料理ができて、カウンターに出た。

「おっ。来た来た」

そして、一夏とシャルルとレイはそれぞれ頼んだ料理を受け取って、空いている席に座った。

すると、食堂の入り口から、何かが迫ってくる音がした。

「・・・何だ？」

その音は、どんどん大きくなっていく。

「織斑君！」

「デュノア君！」

「ラングレン君！」

そして、食堂の入り口から、大人数の女子が押しかけてきた。

「な、何だ!？」

そして、一瞬にしてレイ達は女子に囲まれた。

「な、な、なんだなんだ!？」

「ど、どうしたの、みんな・・・。ちょ、ちょっと落ち着いて」

「「「これ!」「」「」

と、レイ達に女子が渡したのは学園の緊急告知の申込書であった。

「これは・・・」

「・・・『今度の学年別トーナメントでは、より実戦的な模擬戦を行うために、二人一組での参加だったが、変更により三人一組での参加を必須とする・・・もし組ができなかった場合、抽選によって選ばれる。締め切りは・・・』」

「ああそこはいいからっ、とにかく!」

と、女子一同が手を差し伸べてきた。

「私と組んで織斑君!」

「私と組んでデュノア君!」

「私と組んでラングレン君!」

どうやら、その組み合わせとして、なぜ変更になったかは定かではないが、俺たちと組もうと女子たちが押し寄せてきたということみたいだ。

「い、いいよ!俺はシャルルとレイと組むから!」

と、一夏が言うと、女子たちはあっさりと退いていった。

「まあ、そういうなら・・・」

「ほかの女子と組まれるよりはいいし・・・」

「男子同士もいい絵になるしね・・・」

と、帰りながら独り言を言って行った・・・。

「・・・まあ、とりあえず・・・だな」

「うん・・・」

「・・・とりあえず、飯を食って、部屋で話し合いをするか・・・」

と、三人は小声で話し、飯を食べた・・・。

そして、一夏とシャルルとレイは部屋に戻っていた。

「しかし、俺たちと組むと言ったのは驚きだな。まあ、それが一番だが・・・」

「・・・まあ、とっさだったけど、シャルルの事情を知っているのはこの三人だけだろう」

「うん・・・。そうだね」

「でも、それをとっさに言えるのは、普通じゃできないことだな」

「そ、そうかな。俺はサポートをただけなんだがな・・・」

「そんなことはないよ。レイの言う通り、あの時に自然に言えるのは普通じゃできないことだよ」

「つまり、お前が根から優しいから、できることなんだ」

「そ、そうかな・・・」

「・・・自身を持てよ」

「お、おう」

「それより、そろそろ着替えるか」

「ああ。そうだな。じゃあ、俺たちは外に行っておくか」

「え？どうして」

「そりゃ、俺たちがいると着替えれないだろう？」

「いや、僕は気にしないけど・・・」

「それ以前に、俺たちが着替えにくい」

「でも・・・、男子同士なのに外に出るなんて、怪しまれると思うけど・・・」

「・・・それも・・・そうだな」

「じゃあ、俺とレイは洗面所で着替えるか」

「いいって！僕は気にしないから」

と、シャルルは強く言って、レイと一夏は少したじろぐ。

「・・・分かった・・・。それぞれ後ろ向きで着替えようか」

「それなら、いいぜ」

「僕もいいよ」

と、三人は後ろを向き、着替え始めた・・・。

そして、時間は過ぎ、学年別トーナメント当日・・・

アリーナの更衣室には、一夏、シャルル、レイがいた。

「しかし、こりゃすごいな・・・」

と、一夏は更衣室のモニターから、会場の様子を見ていた。

「三年生はスカウト、二年生は一年間の成果を確認するために様々な人が来るみたい。一年生はほとんど関係ないけど、チェックはあるみたい」

「ふーん。ごくろうなことだな」

「そうだな。まあ、色々俺は見られるだろうな」

「あつ、そうか。レイのISを見るためにIS研究所の職員が来るって話していたね」

「ああ。それと、織斑先生から、トーナメント中はISのチェンジはするなって言われているからな。だから、今回のファントムは特別仕様だ」

「特別仕様？」

と、シャルルが聞いてきた。

「最近新しく使用できるようになったファントムの『後付装備』の『ストライク・ウェポンパック』と、『ガンナー・ウェポンパック』の装備品の一部を装備したファントムだ」

「へえ。だから朝早くからISの調整をしていたんだね」

「ああ」

「それにしても、色々大変だな」

「そうだな。今回は特殊だから、従来のやり方が使用できない。だから上級生たちが朝早くから抽選くじを作っていたそうだな」

「でも、そろそろだよな」

「そうだな。しかし、一年のAブロックの最初の一組目は運がいいよな」

「・・・確かにそうだな」

「・・・どうということ？」

と、シャルルが一夏に聞いてきた。

「待ち時間を気にしなくてもいいだろ。そこは熱いのが肝心なんだ。出たところ勝負、思い切りのよさで行きたいだろ」

「ふふっ、そうかもね。僕だったら一番最初に手の内をさらすことになるから、ちょっと考えがマイナスに入っていたかも」

「まあ、考えは色々だな・・・。おっ、どうやら決まったみたいだな」

すると、モニターがトーナメント表に変わった。

三人はその対戦表をじっくりと見ていると・・・

「「「——え？」」」

対戦表には、一回戦目にはレイ、一夏、シャルルの組で、相手が、
抽選によって決まった相手で、その組み合わせは、ラウラ、箒、鈴
の三人だった・・・。

S t o r y 黒き亡霊VS黒い雨（後書き）

・・・今回はぐだぐたな気がする・・・。
ちなみに、今回はオリジナルの展開です。

Story10 ファインド・アウト・マイ・マインド前編

そして、アリーナ内・・・

一夏、シャルル、レイの組は西側にいた。

一方、ラウラ、箒、鈴の組は東側にいた。

レイはファントムを展開していたが、以前とはまるで異なる装備であつた。

背中には、グランスラッシュリッパーの代わりに、砲身がやや短いキャノンを装備していた。両肩には下に伸びる角ばったシールドを装備し、両腕には通常と同じ装備で、両足には前回の戦いで使用した「ニードルミサイル」のコンテナを今回は展開した状態である。

それぞれの後付装備の一部を装備した特別仕様のファントムであつた。

「一回戦目で当たるとは。待つ手間が省けたと言うものだ」

「そりゃああなたによりだ。こっちも同じ気持ちだぜ」

そして、試合開始まで、5、4、3、2、1。・・・試合開始のブザーが鳴った。

「叩きのめす!」

と、一夏とラウラは同時に言った。

「うおおおおお!!」

一夏はブザーが鳴ったと同時にイグニッションブーストを発動し、ラウラに向かって行った。

「ふっ・・・」

そして、ラウラは右手を前に出し、A I Cを起動させ、一夏を止めた。

「くっ・・・」

一夏は身動きが取れなかった。

「開始と同時に先制攻撃か。分かりやすいな」

「・・・そりやどうも。以心伝心で何よりだ」

「だったら私が次に何をするかも分かるだろ」

と、右肩のキャノンのリボルバー式の弾倉が動き、銃口が一夏に向いた。

しかし、一夏はあわてなかった。

すると、後方からシャルルが飛びだし、アサルトカノン《ガラム》をキャノンに向け攻撃した。

「ちっ・・・」

弾丸はキャノンの砲身に当たり、弾丸は一夏には当たらず、空を切った。

ラウラはとっさに後ろに下がった。

「逃がさない！」

シャルルはそのまま追撃したが、その間に打鉄を纏った箒が現れた。

「私を忘れてもらっては困る」

そして、箒はシャルルに向かって行った。

その後方から鈴も向かってきた。

「こっちも忘れるなよ！」

と、レイが一夏の後方から飛び出し、鈴へと向かって行き、甲龍の両肩を掴んだ。

そして、スラスターの出力を上げ、そのまま押していった。

その直後に一夏が箒に向かっていった。

そして、一夏と箒のブレードが交わり、火花を散らす。

その間に、レイと鈴は他四人と少し離れてところで戦っていた。

「いけえ！」

鈴は両肩の浮遊ユニットの衝撃砲を連続で放ったが、レイは次々と回避し、右手にマグナ・ビームライフル、左手にM90マシンガンを展開した。

「弾道は読めるぞ」

と、レイはマグナ・ビームライフルのトリガーを引き、弾丸は鈴に直撃した。

「くっ！」

鈴は回避しながら、青竜刀を展開し、レイに向かって行った。

レイも鈴に向かっていき、右肩のシールドを前に向けた。

そして、鈴の青竜刀を受け止めた。

「あの時の戦いの借りを返してやる！」

「・・・ふん。そりゃごくろうなことだな」

と、レイは左手のM90マシンガンの銃口を鈴に向け、トリガーを引いた。

「!!」

鈴が気付いた時には、銃口から火が噴き甲竜に直撃し、シールドエネルギーを削っていかれた。

「くっ!」

鈴は青竜刀を強引に振り、その反動で後ろに下がった。

「簡単に勝てると思うな」

と、レイは両手の武器を鈴に向けた。

ラウラは左右にビームカッターを振り、一夏はブレードで防いだが、次々と攻撃が来て、押されだした。

「数の差で私のほうが有利だな」

「たかが二倍じゃねえか!」

と言ってみたものも、ラウラの実力は化け物じみている。

『シャルル、無事か？』

『一夏こそ。すぐにサポートに入るからね』

『いや、いい。このまま例の作戦で行こう』

『……分かった』

と、ラウラのワイヤーブレードの射程外に出て、こっちに向かってきた箒に向かって攻撃した。

「相手が一夏じゃなくてゴメンね」

「なっ！？ばかにするな！」

箒は怒鳴るものも、シャルルの攻撃をシールドやブレードで防いだ。

「貴様の武器はそのブレードのみ。近接戦闘でしかダメージは与えられない」

と、ラウラはビームカッター＋ワイヤーブレードによる波状攻撃をかけてくる。

しかし、距離をとればあのキャノンに狙われる。

（だが、意地でもくらいつく！）

一夏は雪片式型を握り締め、ラウラの攻撃を受け流していった。

そして、レイは背中のキャノンを展開し、鈴に向け砲撃した。

「くっ！」

鈴はとっさに回避したが、レイの正確無比な射撃で動きが鈍っており、飛んでくる二つの弾丸のうち一つが鈴に直撃した。

「うわああ！」

鈴は直撃の衝撃でバランスを崩してしまった。

「行くぞ」

と、レイは鈴に向かって跳び、左腕を構えた。

すると、左腕のグランプラズマカッターとグランプラズマサイスの柄から電気が走った。

「プラズマステークセット！」

鈴は体勢を立て直すも、既にレイは目の前にいた。

レイは直後に甲龍の左肩を掴んだ。

「ジェットマグナム！」

そして、電気が走っている柄を鈴に叩きつけると、柄の先端から衝撃が三回出た。

「うわああ!？」

そして、鈴はそのまま後ろへと飛ばされ、壁に叩きつけられた。

「ぐっ!？・・・」

そして、甲龍のシールドエネルギーが尽きた。

「まず一つ・・・」

と、レイはすぐにラウラのところに向かって行くと同時に、右手にスナイパーライフルのイグゼキューションを展開し、ラウラに向けて砲撃した。

「!!」

ラウラは攻撃に気付き、とっさに後ろに下がった。

しかし、弾丸はラウラではなく、ワイヤーブレードのワイヤーを切り、白式に絡み付いていたワイヤーが解けた。

そして、立ち上がろうとする一夏をシャルルが来て、手伝った。

「待たせたな」

「お待たせ」

と、レイは一夏の前に下り、左手にアサルトA R 3を展開し、イグゼキューションーと同時にラウラに向け砲撃した。

シャルルもショットガンとマシンガンを展開して、ラウラに向け攻撃した。

「助かったぜレイ」

「いいってことよ」

「鈴はどうした？」

「見ての通りだ」

見れば、鈴は壁際でぐったりと座っていた。

「シャルル。箒は？」

「お休み中」

箒はI Sが損傷甚大になり、動けなくなり、悔しそうにひざを着いていた。

「さすがだな。——それじゃ俺はこれで決める！」

と、一夏は白式の出力を上げ「零落白夜」を発動した。

レイはイグゼキューションとアサルトAR3を収納し、代わりに両腕からグランプラズマカッターを取り出し、刀身を展開して、ラウラに向かって行った。

ラウラはワイヤーブレードをレイに向け射出したが、レイはギリギリのタイミングで避け、グランプラズマカッターを振り上げて、ワイヤーを一気に二つ切断した。

「ちっ。やるな。『イレギュラー』が。だが！」

ラウラは右肩のキャノンで砲撃したが、レイ右肩のシールドを角度を付けて前に出し、弾丸を弾いた。

その直後にグランプラズマカッターの後ろを繋ぎ、「大剣モード」にして、向かって行った。

「くっ・・・」

すると、左から一夏が向かってきた。

「うおおおお！」

「ふっ。無駄なことだ」

と、ラウラは右手を突き出し、AICによって向かってきた一夏の動きを止めた。

「この停止結界の前では——」

「……忘れたか? ……俺たちは・『三人』だぜ」

「!?!」

すると、一夏の後ろから、シャルルとレイが飛び出し、至近距離でショットガンを六発と、キャノンを三発叩き込んだ。その直後にキャノンは爆散した。

「くっ!」

ラウラは爆発の衝撃で、後ろに下がった。

「やっぱりな。思ったとおりだぜ」

(さすがだ。A I Cは、標的に集中して発動しないと、効果を持続できない)

と、一夏の隣をレイが進んで行き、なぜかグランプラズマカッターを地面に突き刺して、ラウラに向かって行った。

「くっ!」

ラウラは残ったワイヤーブレードをすべて射出した。

しかし、レイは両足のニードルミサイルを発射し、ワイヤーブレードの先端に当てると、同時に爆発した。

「!?!」

爆発で前が煙によって遮られた。

そして、その煙から一夏が突っ込んできて、雪片式型を振り上げた。

「うおおおお!!」

だが、ラウラに直撃直前に、エネルギーが切れて、エネルギー刃が消失した。

「くっ!しまった!」

「残念だったな」

と、ラウラは両手にビームカッターを展開していた。

「限界までシールドを消耗しては、もう戦えまい!」

と、ビームカッターを振り上げ、一夏に向かっていった。

「くっ!」

だが、直撃瞬間に一夏は右から誰かに押され、横に吹っ飛ばされた。

「うわぁ!?!」

それは、レイであり、ラウラのビームカッターを左肩のシールドで受け止めた。

「くっ……。貴様……」

「悪いな……。この勝負……。もらった」

「何!？」

そして、レイはシールドでラウラを弾くと、両手にインパクトナックルと呼ばれる拳による格闘攻撃を行う武器を展開した。

「必殺ファンクション！」

「アタックファンクション！ガトリングバレット!!」

そして、ファントムは物凄い勢いでラウラにインパクトナックルで殴っていった。

「ぐう！」

ラウラはA I Cを起動させる暇もなく、攻撃を腕で防ぐのがやっとだった。

「でりゃあ！」

そして、レイは最後の一撃でラウラを地面に叩きつけた。

「ぐわあ!？」

ラウラは地面に叩きつけられたが、すぐに体勢を立て直した。

「くっ……。こんなことで……」

すると、左側から、超高速で突撃してくる影があった。

それは、イグニッションブーストを発動したシャルルであった。

「なっ！イグニッションブーストだと！？そんなデータはなかったぞ！？」

ラウラの顔にようやく狼狽した顔が浮かんた。事前に見たデータにはなかったから、驚いているのだろう。——知らなかったのはこっちも同じだった。

「今始めて使ったからね」

「な、なに・・・？まさか、この戦いで覚えたと言うのか！？」

（こんな短時間で覚えるとは・・・。本当に毎回驚かされるよ・・・シャルルには）

と、レイもシャルルの器用さには驚いた。

「——だが、私の停止結界の前では無力！」

と、A I Cを使用する体勢に入った。

しかし、その直後にラウラは背面から斬撃を受け、動きを止めた。

「！？」

そして、後ろを見ると、大剣モードのグランプラズマカッターを構えた一夏の姿があった。

「あれはレイのグランプラズマカッター・・・。そうか、あそこに突

き刺していたのは、零落白夜が使えなくなった一夏のためだったんだ」

「くっ・・・この、死に損ないが！」

と、ラウラは一夏に向かって行った。

「おりゃあ！」

そして、一夏はグランプリズマカッターを振り上げ、ラウラを弾き返した。

「くっ!?! まだこんな力を残していたのか!?!」

「見かけによらず、こいつは扱いやすいんだよ」

「くう・・・このっ！」

ラウラは更に向かって行ったが、その前にレイが降り立ち、ラウラの前に立ちはだかった。

「!?!」

「そうしてられる暇があるかな」

すると、ファントムの右腕は光り、そしてラウラは現れたものを見て、顔が青ざめた。

それは、ナハトの象徴であり、最強の武器・・・「リボルビング・ブレイカー」であった。

「大型のシールドピアーズ!？」

ラウラの顔は必死の形相であった。

しかし、ラウラは突撃している最中であつたため、急には止まれなかった。

「貫け！」

そして、レイはブレイカーを向かってくるラウラの腹部に三発叩きつけた。

「!？」

その一撃でラウラの顔が引きつり、そのまま後ろに飛ばされた。

「・・・さすがに硬いな」

「ぐう・・・貴様！」

「どこを見ているの」

「!？」

すると、後ろからシャルルが向かってきていた。

「この距離なら、外さない」

そして、左腕にあったシールドが弾け飛び、そこからブレイカーと

似た武装が現れた。

「また『盾殺し』……！」

ラウラはさっきの攻撃を思い出し、さらに焦りが出てきた。

そして、シャルルの一撃はラウラの腹部に叩きこまれた。

「ぐわあ!?!」

そして、ラウラのISのシールドエネルギーがごっそりと削られ、その衝撃で後ろに吹き飛ばされ、壁に叩きつけられた。

しかし、シャルルの「グレー・スケール」は、レイのリボルビング・ブレイカーと同じリボルバー式の弾倉を持っている。

「でりやああ!!」

それにより、まだ攻撃を可能とし、攻撃の連射を可能とした。

そして、シャルルはそのままラウラの腹部に、グレー・スケールを更に叩きつけた。

それにより、ISの強制解除の予兆が見えた……

だが、異変が起きた……

（負けられない……。私は……。負けるわけにはいかない……。）

ラウラ・ボーデヴィツヒ。それが私の名前であり、識別上の記号である。

一番最初につけられた記号は……。遺伝子強化試験体C-0037

人工合成された遺伝子から作られ、鉄の子宮から生まれた。

——暗い。暗い闇の中に私はいた。

ただ戦いのために作られ、生まれ、育てられ、鍛えられた。

それによって、私は施設内で最高クラスの力を記録した……。

しかし、私は最強ではなかった。

その者の名は……。レイ・ラングレン……。

直接は会っていないが、その男は遺伝子強化を施していないのにもかかわらず、生まれながらにして天才的な才能を持ち、私よりも実力が上で、施設最強の存在であった。

そして、本来なら私に与えられるはずだった最強の『称号』を、あの男が得たのだった。

私は嫉妬した……。

だが、しばらくしてその男は危険分子として判断され、施設から追放された。

私はつかの間の喜びを感じた。

今度は私がその『称号』を得ることができるからと思ったからだ。

——だが、私は『称号』を得ることができなかった。

なぜなら、その『称号』は一人しか持つことが許されない。

つまり、あの男が生きている限り、私はその『称号』を得ることができないのだ。

そして、私は誓った……。いつかその男を倒し、私が最強だと言うことを証明するために……

だが、それからして、世界最強の兵器……ISが現れたことで、世界は一変した。

ISの適合率を高めるために、私の左目にナノマシンの移植が施された。

だが、ナノマシンは制御不能となり、常に稼動状態になってしまった……。

それによって、ISの訓練で私は遅れをとってしまった。

そして、私には出来損ないの『烙印』が押されたのだった……

だが、失意と絶望に満ちていた私に前に、あの人が現れた。

その人の言葉を忠実に聞くことで、私は強くなっていった。

そして、私は再び最強の座に付いた。

そんな時に、私はその人に聞いた。

「どうしてそこまで強いのですか？ どうすれば強くなれますか？」

そして、その後に見せたその人の顔に、少し心にちくりと来た……。

「私には弟がいる」

「弟……ですか？」

「ああ。あいつを見ていると、分かる時がある。強さがなんだかを・その先に何があるのかを」

「……よく分かりません」

「今はそれでいい。いつか分かる時がくるだろう」

と、優しく、気恥ずかしいようなその表情を見て、私は……

（違う。あなたはそんな顔をする人ではない。凛々しく、堂々としているのがあなたなのに……）

私は、その人にそんな顔にさせる存在……。その人の弟の存在を認めない。認めるわけにはいかない……。だから……

敗北させると決めたのだ。あれを、あの男を、私の力で完膚無きまでに叩き伏せると……

そして、私からあの称号を奪ったあの男も倒す。そして、それを得る。

（力が……欲しい……）

そして、体の奥から、何かが蠢いた。

それは私にこう言い掛けた。

『願うか？……ならば、汝、力を欲するか？……』

言うまでもない。それを得られるのならば、空っぽの私のすべてをくれてやる。

だから、よこせ……。比類無き最強を……。唯一無比の絶対を……。私によこせ！

Damage Level……D
Mind Condition……Uplift
Certification……Clear.

《Valkyrie Trace System》……boot.

「ううう……。うわああああああ!!!!」

突然、ラウラが身を裂かんばかりの絶叫を発した。

その直後にシュヴァルツエア・レーゲンから電流が発せられ、シャルルは吹き飛ばされた。

「な、何!?!」

「これは!?!」

S t o r y 1 0 ファインド・アウト・マイ・マインド前編（後書き）

今回は前編と後編に分けました。

たぶん結構長くなるから。

ちなみに、今回のファントムの装備は、ダンボール戦機の武器や、ゲシュペンストMKー？改のバリエーション装備をイメージしたものです。

Story11 ファインド・アウト・マイ・マインド後編

その様子を、アリーナの通路の影から、一人の男性が見ていた。

（・・・あれは・・・まさか・・・）

すると、男性はポケットから、ケータイのような端末を出した。

そして、それを開くと、四角の大きな画面が出てきて、ケータイにしては多いボタンを押した。

「いけ。ハンター」

すると、後ろから、狼のような姿をした小型ロボットが飛び出し、アリーナ内へと入っていった。

そして、アリーナ内では、ラウラが謎の現象を起こしていた。

ISから電流が発せられていた。

「なっ!?!」

すると、ラウラのISが変形し始めた。

いや、変形という生易しいものではなく、ほぼ液化化して、ラウラを覆い始めた。

「一体・・・何が・・・?」

「警告! 敵ISがVTシステム発動!」

「VTシステム?・・・」

レイはよく分からなかったが、尋常でない状況だということは分かっていた。

「一夏。グランプラズマカッターを」

「お、おう!」

一夏も状況を飲み込めずにいたが、手にしていたグランプラズマカッターをレイに返した。

「シャルル、一夏のサポートを頼む」

「分かった」

そして、三人は臨戦態勢に入った。

すると、一度黒い塊と化したISは、徐々に形を形成していった。

人の形をして、その右手には、あるものが形成されていった。

「あれは・・・雪片式型!？」

一夏は見間違はずが無い。それは紛れもなく、黒い雪片式型であり、まるで複写したかのように同じであった。

「・・・・・・・・!」

一夏は雪片式型を握り締め、中段に構えた。

その瞬間、黒いISが一瞬で白式の懐に入り、雪片式型を弾いた。

「!!!」

そして、ISはそのまま振り下ろし、白式の左腕をかすり、シールドエネルギーが無いため、そこから血が噴出し、白式が強制解除された。

「————がどうした・・・」

しかし、一夏にはそんなことはどうでもよかった。

「それがどうしたあつ!!」

そして、一夏は怒りを露にして、黒いISに向かって行った。

「うおおおお!!」

しかし、その目の前をファントムが遮った。

「!?!」

「この馬鹿野郎!死にたいのか!」

と、その場で回転し、一夏を蹴り飛ばした。

「ぐはっ!?!」

そして、一夏はそのまま後ろに飛ばされ、後ろで待っていた打鉄装備の箒が受け止めた。

「な、何をしやがる!」

と、一夏は打鉄の腕の中で暴れた。

「死ぬ気か一夏!」

と、箒は必死に止めていた。

「くっ!」

レイはISの斬撃を止めたが、少しずつ押されていった。

「さっきまでとパワーが違う……。くそ!」

そして、レイはグランプラズマカッターを強引で振り払い、後ろに下がった。

しかし、ISがすぐさまレイに向かってきた。

「何!？」

そして、ISがブレードを振り下ろし、ファントムの左肩のシールドの基部を根元から切り落とした。

「くっ!なんて切れ味だ」

レイはとっさにグランプラズマカッターを構えなおし、再びISに向き切り払った。

ISはブレードで斬撃を受け止めた。

「反応速度まで……。どこまでチート性能だ」

そして、両者は激しい切り合いに入った。

「どけよ箒! 邪魔をするんならお前でも……」

「いい加減にしろ! 一夏!」

と、箒は一夏の頬を強く平打ちして、一夏は横に吹っ飛んだ。

「一体なんだと言うんだ。分かるように説明しろ」

「・・・あれは、千冬姉のデータだ。それをあいつはまねしやがって・・・」

「どうすると言うんだ。白式のエネルギーはもう無いんだぞ。それでどう戦う気だ」

「ぐっ・・・」

箒の言っていることは正論だ。白式には武装はおろか、装甲すら展開できるエネルギーも残っていない。

そして、前を見ると、黒いISと、レイが必死になって戦っていた。

見れば、左肩のシールドは基部の根元から切られ、機体各所にはISによって切り刻まれており、特に胴体の出っ張りの部分は大きく切り裂かれていた。

「お前がしなくても、今はレイが時間を稼いでいる。そして、先生たちが来て、事態を収拾してくれる」

「・・・わざわざ危険なところに行かなくてもいい、か？」

「そうだ」

「・・・違うぜ箒。全然違う。これは俺がやらないといけないじゃない。これは俺がやりたいからやるんだ」

「だが、どうすると言うんだ！どのみちエネルギーは……」

「……エネルギーが無いんなら、持って来ればいいんだよ」

と、シャルルが来て、リヴァイブからコードを出した。

「リヴァイブのコア・バイパスを開放。エネルギーの流出を許可する」

そして、シャルルはコードを白式に繋げ、エネルギーを移した。

「約束して。必ず勝つって」

「おう。負けたら男じゃないぜ」

「ふっ。……じゃあ負けたら明日から女子の制服で通ってもらおうかな」

「げっ……」

「うっ……。い、いいぜ」

「……そういうことだから、レイ。少しでも時間を稼いで」

『ああ。分かった……。だが、早くしてくれ』

「分かっているよ」

そして、シャルルはエネルギーの移行を急いだ。

「くっ！」

レイは黒いISの一撃を防いだが、グランプラズマカッターの刀身に、少しひびが入りだしていた。

（このままじゃ持たない……。だが、もう少し……。もう少しだけ、持ちこたえてくれ……。ファントム……！）

「—————」

すると、まるで返事をしたかのようにファントムが唸りを上げた。

「うおおおおお！」

そして、レイはそのまま強引にグランプラズマカッターを振り、ISを弾き返した。

「必殺ファンクション！」

「アタックファンクション！ライトニングスラッシュ！」

レイはグランプラズマカッターを回転させると、刀身にエネルギーが纏った。

「くらえっ！」

そして、レイはそのままグランプラスマカッターを振り払い、刀身からエネルギー刃が飛ばされ、ISに直撃し、爆発した。

「どうだ！」

だが、煙が晴れる前にISが飛び出してきた。

「!!」

そして、ISはブレードを振り上げた。

「ぐわああ！」

ブレードはファントムの頭部を切り裂き、その衝撃でファントムは後ろに飛ばされた。

「ぐっ!？」

そして、地面に背中を叩きつけられ、息が一瞬詰まった。

ISはそのままレイにゆっくりと向かっていた。

「ぐう……。どこまでチート染みているんだ……。だが、時間は稼いだぞ……」

と、切り裂かれた頭部の隙間から、レイの顔が覗き、その顔は成し遂げたという感じであった。

「ああ。これで十分だ」

と、ファントムの前に、一夏が歩いて出てきた。

その右腕には、局部集中展開した白式の腕があり、その手には雪片式型が握られていた。

黒いISはそれに気付いたかのように顔を上げた。

「いくぜ、偽者野郎。……零落白夜……発動！」

そして、一夏に零落白夜発動時のオーラが纏い、一夏は深く息を吐くと、雪片式型の刀身が展開し、エネルギー刃が現れた。

それと同時に、ISが一気に一夏に向かっていき、ブレードを振り下ろした。

だが、その直後に一夏の後ろから何かが飛んできて、ブレードごと右腕に突き刺さった。

それは、ファントムのグランプラズマカッターであり、後ろでは半身を起こして投擲体勢で止まったファントムの姿があった。

「でええい！」

そして、一夏は雪片式型を一気に縦に振り下ろした。

一瞬時間が止まったかのような感じがして、黒いISは盾に割れ、そこから気を失う寸前であらうラウラと目が合った。……。眼帯が外れて出てきた左目の金色の瞳と。。。

それはなんだかひどく弱っている。捨てられた子犬のような眼差しに俺は見えた。助けて欲しいと、言っているように見えた。

そして、一夏は力を失って倒れるラウラを優しく抱きかかえた。

・・・お前は、どうして強くあろうとする？ どうして強い？

強くねえよ。俺は、全く強くない

なぜ・・・そういえるのだ？ あれだけ強いのに、どうして強くないといえる・・・

・・・でも、もし俺が強いつていうのなら、それは――

――それは・・・・・・・・？

強くなりたいから、強いしさ

――。

それに、強くなったら、やってみたいことがあるんだよ

――やってみたいこと・・・・・・・・？

誰かを守ってみたい。自分のすべてを使って、ただ誰かのために戦ってみたい

——それは、まるで……あの人のようだ……

そうだな。だから、お前も守ってやるよ。ラウラ・ボーデヴィツヒ

「う、あ………」

ぼやっとした光を天井から降ってくるのを感じ、ラウラは目を覚ました。

「気がついたか」

と、そばには織斑先生がイスに座っていた。

「……私は……。一体……何があったのですか……」

「……一応重要案件である上、機密事項だが……。VTシステムを知っているな」

「……ヴァルキリー・トレース・システム……」

「そうだ。どの国家、組織、企業で使用はおろか、研究、開発が禁止にされているものだ。だが、そのシステムが、お前のISに積まれている」

「・・・・・・・・・・」

「操縦者の精神状態、機体の蓄積ダメージ、そして何より操縦者の意思・・・・・・・・いや、願望か。それらが揃うことで発動するようになっていたようだ」

それを聞き、ラウラはシートを握り締めた。

「・・・私が・・・望んだからですね・・・」

「ラウラ・ボーデヴィツヒ」

「は、はい」

「・・・お前は誰だ」

「・・・私は・・・」

「・・・誰でもないのならちょうどいい。お前はこれからラウラ・ボーデヴィツヒになるがいい。何、時間は山のようにあるぞ。何せ三年間はこの学園に在籍しなければならいからな。その後も、まあ死ぬまで時間はある。たっぷり悩めよ、小娘」

と、言って、織斑先生は席を立ち、保健室を出ろうとしていた。

「ああ。それから、お前は私にはなれないぞ」

と、振り向いてはニヤリとして、保健室を出た。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ラウラは呆然としていた。

（・・・自分で考えて・・・行動しろ・・・か・・・）

すると、保健室のドアが開く音がして、ラウラはそこを見ると、レイが入ってきた。

「・・・・・・・・どうやら、元気そうだな」

「・・・・・・・・レイ・・・」

と、ラウラは今まで名前と言わなかったレイの名前を言った。

あの時の戦闘時に負ったのか、頭には包帯が巻かれていた。

そして、レイはラウラの左目を見た。

「・・・何を・・・見ている・・・。おかしいか・・・」

「・・・いや・・・。俺とお前は似ているな・・・」

「・・・何・・・？　どういうことだ」

「・・・・・・・・・・本当なら、他人には見せたくないんだが・・・」

と、レイは両手を頭の後ろにやり、眼帯の付け根を外して、眼帯は外した。

「!!」

ラウラはそこにあったものを見て、驚いた。

レイの右目にあったもの……。それはラウラの左目と酷似した、金色の瞳であった。

「そ、それは……。なぜ、お前が……」

「……。二年前の、あの事故に遭う前までは、こんなことになっていなかった」

「……。二年前の……事故だと?」

「知っているだろう。二年前に起きた旅客機墜落事故を」

「……。あの大事故……。だが、それとお前が何の関係があるというんだ」

「……。その事故での唯一の生存者……。それが俺だ」

と、レイは再び眼帯を付けた。

「何だと……。お前が……。その生存者というのか……」

「ああ。その事故の後、俺は病室で目覚めた。そんな時に、右目に

何か違和感を感じて、鏡で見ると、右目がこうなっていた」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「医師の話じゃ、特に人体に影響は無いと言っているが、なぜ変化したかは不明」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・まあ、それはいいとして。・・・結局どうだったか」

「・・・・・・・・それは・・・」

「力と実力は確かに凄いが、それだけでは、強いとは言わないぞ」

「・・・・・・・・・・」

「・・なぜ織斑先生があんなに強いのか、分かるか」

「・・・・・・・・・・」

「それは、誰かを守りたいという気持ちだ」

「・・・誰かを・・・守る・・・」

「織斑先生は、たった一人の家族であり、弟である一夏を守りたい・
・。だから、強いのだ」

「・・・・・・・・・・」

「人は、誰かを守りたいと思ったときに、力を発揮するものだよ。一夏も、姉を守りたい……。まあ、守る必要は無いと思うけど、仲間を守りたいと思っているから、強いのだ」

「……私は……」

「……まあ、お前にもそういうものができたのなら、たぶん本当の強さを持つだろう。」

だが、今のままじゃお前は何も変わらないぞ」

と、レイは保健室を出ろうとしていた。

「そんなことを言われても……。私には……」

「……まあ、そう簡単にはできないだろうが、手始めに……。好きな人を見てみたらどうだ」

と、レイは首だけを向いて、そう告げた。

「え？」

「ふっ。冗談だ。だが、そう思えるのなら、お前は変わらないうぞ」と言っ、レイは保健室を出た。

ラウラはその後もずっと見ていた。

（……なんだろう……。この感じ……。まるで、教官を前にしているようだ……。か、か、かっかしい……）

すると、ラウラの顔が赤くなった・・・

そして同時刻、学園の外・・・

海岸線で一人の男性が歩いていた。

それは、ISアリーナの通路にいた男性であった。

右肩には、さっきアリーナ内に侵入した狼型の小型ロボットが乗っていた。

逆関節の脚部を持ち、背中にはスパイク状にパーツが突き出ており、猫背に見える。

右手には、銃身が長いスナイパーライフルを持っていた。

男性は、手にしている端末を見ていた。

そこには、さっきまでの戦闘が映っていた。

（まさか、VTシステムが水面下で作られていたとは・・・。一体やつらは何を企んでいる・・・。）

そして、画面を切ると、今度はボタンを押していった。

「・・・・・・・・・・」

すると、今度は端末を耳に当てた。

どうやら携帯電話でもあるようだ。

「・・・・ハーケン。任務の依頼だ」

『おっ。あんたから来るのは珍しいな。内容は？』

「・・・・ドイツのとあるＩＳ研究施設の調査をして欲しい。できれば早くだ」

『あの施設ですか・・・・。あそこの調査となれば、かなりの大物ということですか』

「・・・・そんなところだ。報酬はいつも通りに渡す」

『了解した。いい情報を持って帰るぜ』

と、電話が切れた。

そして、男性は端末を切ると、ポケットに入れた。

「・・・・・・・・・・」

そして、男性はＩＳ学園のほうを向いた。

（・・・——は、似るもんだな・・・レイ・・・）

と、男性はそのままどこかへ行ってしまった・・・

そして、時間は過ぎて、夜の食堂・・・

食堂のとある席に、一夏とシャルル、レイが座り、夕食をとっていた。

あの戦闘の後、教師たちから色々事情聴取されて、今の時間まで続いた。

「結局トーナメントは中止だった」

「ふーん。まあ、あんなことになれば、中止は当然か・・・」

「でも、いくつか個人データを取りたいから、一回戦は全部やるそうだよ」

「ふーん。でも、俺たちにはあまり関係ないよな」

「そうだな」

と、レイはそう言いながらも味噌ラーメンを食べていた。

あいかわらず、麺類が好きのようだ。

すると、少し離れたところで、女子たちが集まっていた。

しかし、どうも浮かない顔であった。

「・・・優勝・・・チャンス・・・消え・・・」

「交際・・・無効・・・」

「・・・わあああああああ！」

と、どたばたと走り去っていった。

「なんだ？」

「さあ・・・」

一夏とシャルルはちんぷんかんぷんだったが、レイは気にする様子は無かった。

「・・・・・・」

すると、女子たちが走り去った後に、呆然と箒が立ちつくしていた。

一夏はその様子を見て、近くによっていった。

「なあ箒。先月の約束だが・・・」

「ぴくっ」

「付き合っているぞ」

「――。――、なに？」

「だから、付き合っているって……おわっ!？」

すると、箒は自分より大きい一夏を締め上げた。

「ほ、ほ、本当、か？ 本当に、本当に、本当なのだな!？」

と、そのままぶんぶんと一夏を振った。

「お、おう」

「な、なぜだ？ り、理由を聞こうではないか……」

と、一夏を離すと、ゴホンと咳払いして、聞いてきた。

「そりゃ幼馴染の頼みだから。付き合うさ」

「そ、そうか！」

「買い物くらい」

すると、直後に一夏は箒に一発強烈な鉄拳を頬に受けた。

「ぐへっ!？」

「そんなんだろうと思った！」

と、箒は思いっきり足を上げ、一夏のみぞに思いっきり蹴りを入れた。

「ぐほっ!？」

「ふんっ！」

そして、箒はそのままその場を立ち去った。

ちなみに、余計なことだが、あれだけ足を上げていると、たぶん一夏には見えたと思う・・・。

「一夏ってわざとやっているんじゃないかなあって思うときがあるんだよねえ」

「同感だな」

と、いつの間にかシャルルとレイが近くに居た。

「ど、どういう意味だ・・・」

「「さあね」」

と、シャルルとレイの声が重なった。

「ここに居ましたか。織斑君、デュノア君、ラングレン君」

と、食堂に山田先生が入ってきた。

「山田先生」

「今日は大変でしたね。ラングレン君は大丈夫ですか？」

「ええ。大丈夫ですよ。かすり傷で済みましたから」

「そうですか。・・・では、今日は三人に朗報です」

「朗報？」

「今日から新しい施設が解禁されました」

「それって・・・」

「男子の、大浴場です！」

「はああ。やっぱり風呂はいいな」

と、一夏は大浴場で、風呂に入っていた。

「ああ。やっぱりシャワーより風呂がいいな」

と、その近くにレイも居た。

「・・・でもさ、レイ・・・」

「なんだ？」

「・・・風呂でも、眼帯は外さないのか」

レイは風呂に入っても、眼帯は外さないようである。

「・・・見せたくないものがあって、それをわざわざ見せるか？」

「うつ・・・そりゃ・・・まあ、そうだな」

「しかし、こんなに大きな浴場を見たのは初めてだな」

「そうなのか？」

「ああ。バイトで旅館に居た時でも、こんなに大きい浴場じゃなかったんだよ」

「へえ・・・。本当にこの学園って、色々とスケールがでかいな」

「まったくだな」

と、雰囲気は明るくなった。

カラカラカラ・・・

すると、脱衣所の扉が開く音がして、一夏とレイは「？」と浮かんだ。

そして、ゆっくりと後ろを向くと、そこには裸のシャルルが居た。

「お、お邪魔します・・・」

「なっ！？しゃ、シャルル！？」

と、一夏はパニくり、レイは後ろに倒れた。

「あ、あんまり見ないで・・・。二人のえっち」

「す、すまない！」

と、一夏は一瞬で後ろを向き、レイも上がると同時に後ろを向いた。

「ど、ど、どうした！？どうしてここに？いや確かに入浴は勧めたけど、それは俺たちが入らない場合であってな——なぜどうして、やってきたよシャルルさん？」

一夏はほとんど混乱状態で、レイは顔は見えなかったが、たぶん一夏以上に混乱していると思う。

「ぼ、僕が一緒だと・・・イヤ・・・？」

「いやけしてそういうわけではないが・・・」

「・・・やっぱり、その、お風呂に入ってみようかなって。——め、迷惑なら上がるよ？」

「い、いやいや、上がるなら俺が上がる。もう堪能したし、な、レイ！」

「あ、ああ。そ、そうだな・・・」

と、レイはキャラが変わったかのように答えていた。

「ま、待って！」

と、シャルルに強く止められ、二人は止まった。

「あ、その、話があるんだ。大事なことから、二人に聞いて欲しい・・・」

「・・・わ、分かった・・・」

「あ、ああ・・・」

と、一夏とレイは一度浮かした腰を再び湯船に付けたが、なぜか二人は近くにいた。

そして、シャルルも湯船に浸かった。

「その・・・前に言っていたこと、なんだけど」

「前っていうと・・・あれか。学園に残るって話か？」

と、少し落ち着きだしたレイが、聞いてきた。

「そ、そう。それ。僕ね、ここにいようと思う」

「・・・そうなのか」

「うん。そ、それに・・・」

と、シャルルは二人に近付いた。

「!?!」

「!?!」

そして、シャルルは後ろから二人を抱きしめた。

「一夏がここにいろって言ってくれたから。そして、レイが僕のために励ましの言葉を言ってくれたから、僕はここにいたいと思えるんだよ」

「そ、そうか・・・」

「・・・」

「それと、レイ、一夏」

「なんだ？」

「僕の話は、シャルロットと呼んで。二人とか三人の時だけでいいから」

「それって・・・」

「そう。僕の名前。本当のお母さんから貰った名前なの」

「そうか・・・」

「分かった。シャルロット」

そして、その雰囲気は、和やかになっていった・・・

「・・・・・・・・ええと……。今日は・・・転校生の紹介を・・・します・・・」

と、翌日になって、山田先生はいつもの元気は無く、なんか衝撃は事を聞いたかのようにだった。

「といっても、もう紹介が済んでいるとか、これからするのか・・・
まあ・・・」

と、何かよくわからず、それは他の生徒も同じな様子。

ちなみに、朝のSHRに、シャルル・・・もとい、シャルロットの姿はない。

それと、ラウラの姿もない。まあ、昨日のことだから、多分休んでいるのだろう。

「では・・・入ってきてください・・・」

「失礼します」

と、どっかで聞いたような声がした。

「シャルロット・デュノアです。みなさん、改めまして、よろしく願います」

と、男子制服ではなく、女子の制服を着ていた。

「ええ・・・と。デュノア君は・・・デュノアさん・・・ということでした」

「・・・はっ？」

箒は何が何だがさっぱりな様子であった。

「え？じゃあデュノア君って、女だったの？」

「おかしいと思った。美少年じゃなくて美少女だったわけね」

「って織斑君、ラングレン君！同室だから知らないってわけないよね！？」

「ちょっと待って。昨日男子が大浴場を使ったよね!？」

と、この一言で教室中が騒ぎ出した。

(・・・まずいな……。これは…………)

と、レイに額には少し汗が出ていた。

すると、教室の入り口が吹き飛び、大きな音がした。

「一夏あっ!!!!」

そこには物凄い怒りを露にした鈴がI Sを装着した状態で入ってきた。

「死ねええっ!!!!」

そして、両肩の衝撃砲を一夏に向け放った。

「うわああ!俺死ぬ!絶対死ぬ!!」

そして、衝撃砲が発射された…………。

「…………って、あれ?…………俺死んでない…………?」

そして、前を見ると、そこにはラウラが居り、鈴の衝撃砲をA I Cで防いでいた。

Story 1 ファインド・アウト・マイ・マインド後編（後書き）

そういえば、ムゲフロのキャラクターが少ないな・・・。

まあでも、あれって人間じゃないのがほとんどだよな・・・人間キ

ヤラが珍しいぐらい。（後は機械が多い。）

ちなみに、ラウラは最初は嫌いなキャラだったのですが、デレてから、好きになった。

Story 12 乙女の心は晴れのち曇り

そして、とあるところ・・・

そこでは、キーボードの叩く音が絶えず響いていた。

そこには、一人の女性がいた。

すると、彼女の携帯の着信音が鳴った。

そして、頭にあったウサギの耳を模したカチュウシヤがピンと立った。

「おっ。この着信音は・・・」

と、イスのそばにあった携帯を取り、耳に当てた。

「もすもす？終日？はーい、みんなのアイドル・篠ノ之束だよ」

「ぶち！」

と、夜遅くに、箒は自分の姉、束に電話をかけていたが、姉の態度に切れて、電話を切ろうとしていた。

『って、待って、箒ちゃん!』

と、束が止めて、箒は電話を切らなかった。

「……姉さん……」

『やあやあ。私のかわいい妹よ。うんうん。分かっているよ。欲しいんだよね、自分だけの専用機を』

「……!」

『もちろん用意してあるよ。最高性能にして、規格外。……その機体の名は……『紅椿』!』

「……『紅椿』……」

『近日、箒ちゃんに届けるよ』

「……え……?」

『ところで、これで用件は済んだ?』

「は、はい」

『じゃあこれで。逆探知されると色々困るから』

と、束は電話を切った。

「ふう。しかし、箒ちゃんの声を久しぶりに聞いたな。そうすると顔を見たいな」

と言っていると、イスにあるモニターが映った。

『相変わらず、妹には甘いんだな』

そこには、あの男性が映っていたが、顔半分は影で見えなかった。

「おっ。君から来るなんて。珍しいね」

「こういうこともあるさ。それより、あれを渡すのか」

「まあいいじゃん。姉がかわいい妹のために物をあげるのは」

「そのあげるものが、厄介なものだろう。あれは・・・」

「・・・『第四世代』だから？」

「ああそうだ。世界はまだ第三世代の開発段階だというのに、今第四世代を出したら、戦いの火種になりかねんぞ」

「うーん。そういうのもあるけど、ばれなきゃいいのよ」

「・・・はあ。楽天家だな・・・相変わらず、お前は」

「それは知っていることだよね。私の幼馴染さん」

「・・・それを言うな。もうそんな関係は無いってことになった

だろ」

「ああ・・・。そうだったね・・・」

「・・・それより。VTシステムを作った研究所を破壊したというのは本当か？」

「ああ。あの不細工のシステム？そうだよ。でも安心して。死傷者は出していないから」

「そういう問題じゃないだろ。本当にお前は物騒なところがあるな」

「ふふ。君も、そういうところがあるじゃん」

「・・・・・・・・」

「まあでも、君にも紅椿の調整の手伝いをして欲しいんだよ？」

「・・・はあ。まあいいだろう」

「ありがとう。お礼には君が今作っているISの製作の手伝いをするよ」

「・・・・・・・・そうだな。できればお前に手伝って欲しいな」

「じゃあ、そういうことだから、よろしくね」

「ああ」

そして、通信が終わった・・・

そして、時間は過ぎて翌日・・・

「・・・・・・・・・・」

一夏は気持ちよく、寝ていた。

だが・・・

「・・・・・・・・・・!？」

すると、隣で何かが動いた。

「わあ!？」

そして、布団をめくると、そこには寝ているラウラの姿があった。

「うわああああ!!」

そして、朝早くから叫びが響いた。

そして、レイの部屋・・・

あれから、部屋割りが決まって、レイは一夏の部屋から引越した。

そこは、以前とは違うところだったが、何せ隣の部屋には、ラウラが居り、そこにシャルロットが編入したと言う。

「・・・はあ。朝早くから元気があるな・・・」

と、レイはまた徹夜でデータ入力をして、今に至るようだ。

「・・・眠い・・・」

そして、レイは席を立て、ベッドに寝転んだ。

所戻って、一夏の部屋・・・

その時に、ラウラも目が覚めた。

「・・・なんだ・・・もう朝か」

「いつの間に入ったんだ……って！わあ！？か、隠せよばか！？」

まあ一夏が驚くのも無理は無い。なにせラウラは全裸だからだ。

「夫婦とは、包み隠さぬものと聞いたぞ。……まして、お前は私の嫁……」

と、ラウラは一夏に迫った。

「何なんだよ。この間から！」

「日本では、好きな人を『俺の嫁にする』と言う風習があるそうじゃないか」

「お、お前に間違った知識を吹き込んだのは誰なんだよ……つてうわあ！？」

一夏がラウラに指差すと、ラウラがその腕を取り、四の字固めをした。

「……お前はもう少し寝技の訓練をするべきだな」

「つ、つええ……」

と、細身のラウラのどこにこんな力があるのか、一夏は抵抗できなかった。

「寝技の訓練をしようのなら……わ、私が相手になってもやらんことは無いぞ……」

と、ラウラはなぜか顔を赤めた。

「何でそこで照れるんだよ！」

「一夏！まだ寝ているのか。入るぞ！」

と、タイミングの悪いことに、箒が入ってきた。

「全く、休みだからといって、遅くまで寝る・・・！？」

そして、箒は二人のやり取りを見てしまい、手にしていた木刀を落した。

「ほ、箒！？こ、これはお、俺は関係無いぞ！？」

と、一夏の顔は一気に青ざめた。

「不謹慎だな。夫婦のやり取りに入ってくるとは・・・」

「ふ、夫婦・・・。い、一夏・・・！」

そして。箒は再び木刀を取った。

「や、やめろ、箒！？俺は本当に関係なあってば！？」

「問答無用！！」

そして、そのまま木刀を振り下ろした。

「ぎゃあああああああ．．．．．！！！！」

そして、再び叫び．．いや、絶叫が響いた．．

「．．．はあ．．．。とことん元気だな．．．」

と、レイはさっきの絶叫で目が覚めた様子．．．。

今日は学園の休みではあるが、レイはここ最近ぐっすりと寝ていない。

なので、そのまま寝ようとしたが、まあ一夏の悲痛の絶叫で起きてしまったわけだ。

「．．．．まあ、いいか．．」

そして、レイはベッドから起きると冷蔵庫からウーロン茶を出して飲んだ。

「．．．．．」

と、レイは首を鳴らして、ウーロン茶を冷蔵庫に戻すと、ノートパソコンの画面を見た。

そこには、レイのIS三機のデータがあった。

先月のトーナメントでファントムは大きな損傷を受けて、しばらく修理しないといけなかったが、代わりの機体があるので、特に問題はなかった。

そして、最近になってファントムの修理が終わり、そしておまけに新たなデータが更新された。

しかし、実際のところレイはすべての武器のテストをやりきれているわけではなく、いまだに試したことが無いものが多い。

だが、その内いくつかは物凄いスペックの武器があり、模擬戦では使用できそうにも無いのだ。

（まあでも、臨海学校のとくにいくつか試してみるのも悪くは無いな）

と、レイはそう考えた。

コンコン・・・

すると、ドアのノックが聞こえ、レイは扉の前まで来た。

「・・・・・・・・」

そして、覗き窓から覗くと、そこにはラウラと、さっきの絶叫の元か、ボロボロの一夏がいた。

「・・・・・・・・」

そして、レイは扉を開けた。

「おはようございます。隊長」

と、ラウラは礼儀正しく気を付けをして敬礼した。

「・・ラウラ。その呼び方はやめろと言ったはずだぞ」

「はい。確かに聞きましたが、私はやめません」

「・・・・・・・・はぁ・・」

レイは呆れてため息を付いた。

ラウラはどういうわけか、レイのことを『隊長』と呼ぶようになった。

呼ぶようになったのは、ラウラが一夏を嫁宣言したその日からであった。

レイはやめろと言っているのだが、ラウラはやめようとはしない。しかも、それから毎日のように夜に来ては、朝はこうして起こしに来る。

「それで、何の用だ？」

「はい。今から食堂に向かいますので、隊長もご一緒にどうですか？」

「・・・・。いいだろう。俺も今から行こうと思っていたから」

と、レイは部屋を出ると、ドアの鍵を閉めて、ラウラと一夏と共に食堂に向かった。

そして食堂・・・

レイとラウラ、一夏は空いた席に着くと、朝飯を食べた。

ラウラはパンとコーンスープで、一夏は味噌汁とご飯と納豆で、レイはそうめんであった。

「・・・しかし、レイって本当に麺類好きだよな。俺が見た限りじゃほとんどだな」

「そうだな・・・。だが悪いかな？」

「い、いや。悪くは無いけど・・・」

「・・・まあいいだろう。それより、あの叫びはなんだったんだ」

「うっ・・・。そ、それは・・・」

「まあ大体予想はできる。寝ていたら、隣にラウラがいて、その直後に箒が来て、木刀で襲われた・・・。というところかな」

「げっ・・・。何で正確に合ってたんだよ」

「ふっ。勘だ」

「さすが隊長。勘でそこまで正確に当てるとは、さすがです」

と、ラウラは尊敬の眼差しで見ていた。

「・・・・・・・・・・」

レイは正直嬉しいわけではなさそうだ。

すると、食堂に一人生徒が入ってきた。

「おっ、シャルロットだ。おーい」

と、レイは気付いて、シャルロットを呼んだ。

「あっ、レイ」

と、シャルロットは気付いて、朝ごはんを取ると、レイの隣に座った。

「そういえば、シャルロットがこんな時間まで寝ているって珍しいな」

「う、うん。二度寝しちゃって」

「そうか。いい夢でも見たのか？」

と、シャルロットの顔が赤くなった。

「い、いや。そ、そういうわけじゃないよ!？」

と、シャルロットは全面否定した。

しかし、動揺しているので全く説得力は無い。

「ふっ。冗談だ」

と、レイが言うと、シャルロットはぷくーと頬を膨らせた。

「うう・・・」

「・・・ちよつと冗談が過ぎたな。すまんかった」

「あ。・・・い、いいよ」

「・・・ありがとう」

と、やり取りをしていると、ラウラが席を立て、食器をカウンタ
ーに返して、再びこっちに来た。

「では、お先に失礼します」

と、言って、ラウラは食堂を出た。

「・・・ラウラって、変わったよね。一夏に対する態度はもちろん、
レイに対する態度も大きく変わったよね」

「ああ。でも変わりすぎだ」

「そうだな。でも、前よりマシなほうだ」

「うーん。まあ、あの時と比べれば・・・なあ」

と、一夏はどうも苦い顔をした。

「まあそれはともかく。今日はどうする？」

と、ラウラの話題を払って、レイは別の話題に変えた。

「うーん。そうだな・・・。来週ある臨海学校の準備のために町に行って品物を揃えに行くか？」

「うーん。そうだね。僕も色々と準備しないといけないし。レイはどうするの？」

「俺も行くか。まあ買うものは少ないが、色々と見たいものもあるしな」

「じゃあ決まりだな。今から準備して行くか」

「僕もそれでいいよ」

「俺もいいぜ」

そして、三人は席を立って、食器をカウンターに返して、食堂を出た。

しばらくして、レイとシャルロットと一夏は寮の前に集まっていた。
服装は全員制服であった。

「じゃあ行くか」

「うん」

「ああ」

と、三人は歩いていった……。

その後を、こそこそと追跡している二つの影があった。

一人はツインテールの髪をして、もう一人は、ブロンドヘアであった。

つまり、鈴とセシリアであった。

「・・・何で三人なのかな」

「・・・さあ・・・」

と、二人の様子はあまりいいものじゃなさそうだった・・・。

「・・・追ってみようか」

「・・・そうですわね」

そして、そのまま追跡を続けた・・・

しばらくして、三人は電車に乗って、デパート内にある駅に到着した。

「着いたな」

「ああ」

「・・・そうだね」

と、シャルロットはなぜか最初と比べると機嫌が悪い。

「どうしたんだよ、シャルロット」

「ん」

と、シャルロットはレイと一夏に手を差し出した。

「何だ？」

「……」

「手を繋いで」

「……ああ。そういうことか。ほい」

と、一夏は手を繋ぎ、レイは黙ったまま手を繋いだ。

「はぐれたら、大変だからな」

「……う、うん」

「……」

そして、三人は手を繋いで、デパートに入っていた……

その様子を、自動販売機の陰から鈴とセシリアが見ていた。

「……ねえ」

「……なんですよ」

「……あれって手え握ってない？」

「……握っていますわね」

「……そっか。見間違いでもなんでもないんだ……。ふっ……じゃあ殺そう！」

と、鈴は右腕に甲竜を一転集中展開した。

「ほお……。楽しそうだな。では、私も交ぜさせてもらおうか」

「「!」？」

と、後ろを見ると、いつの間にかラウラがいた。

「あ、あんたっ！」

「心配するな。お前達に危害を加える気はない」

「そんなことを信じろというのですか！」

と、セシリアは鈴より強く言った。まあ仕方が無いだろう。セシリアは以前ラウラにボッコボッコにされたからである。

「そうか。ならいい」

と、ラウラはそのまま歩いていった。

「ちょ、ちょっと、どこに行くの！」

「私は嫁と隊長を追ってきた。だから、あの三人に混ざる。それだけだ」

「そういうわけにはいかないわよ。複数の敵を知るには、まず情報収集をするべきよ」

「・・・なるほど。一理あるな」

と、ラウラは簡単に納得した・・・。

そして、三人はレイ達を追跡した・・・。

レイとシャルロットと一夏はデパート内を歩いていた。

すると、レイは別の方向を向いた。

「どうしたの。レイ？」

「悪い。ちょっと用事を思い出したから、先に行ってくれ」

「・・・う、うん」

「分かった」

と、レイは一夏とシャルロットと分かれた。

そして、レイは歩いていると、店の前に子供が集まっていた。

そこでは子供たちが四角の箱の中で何かをやっていた。

その中には、小さなロボットが戦っていた。

子供たちの内二人がロボットを操っていた。

「・・・『LBX』・・・か。最近は流行っているな」

レイはそれを見て、その名前を言った。

LBX・・・それはとある会社作り出した子供の玩具である。

子供には絶大な人気を誇っていたが、その性能の故か、毎日のように人が出て、一時期販売中止になった。

しかし、それから少しして、『強化ダンボール』と呼ばれる箱が現れて、LBXはそこで戦うことができ、再び販売され、今に至る。

（俺も、一時期欲しいと思っていたな・・・でも、毎日が生きるのに必死だった頃だったから、そんな暇は無かったけどな）

と、思いながら、そこを後にして、歩いていった。

そして、しばらく歩いていると……

「おっ。久しぶりだな。レイ。」

と、声をかけられ、少しびっくりして、声がしたほうを向くと、一人の男性がいた。

身長はレイより少し高く、髪の色は銀で、顔は二十代ぐらいだろう。服装はコートのようなもので、色は黒で、いくつか赤いラインがあり、今の時期では熱そうな感じであったが、彼のファッションだそうだ。

頭にはカーボーイハットのような帽子を被っていた。

「は、ハーケンさん。・・・お、お久しぶりです」

「久しぶりだな。少し見ない間に大きくなったな」

「そりゃ。大きくなりますよ。二、三年経つと」

「そうだな」

と、ハーケンと呼ばれる男性はにやっとした。

ハーケン・ブロウニング・・・それが男性のフルネームである。少しギザな感じはして、ケチな気がするが、根は優しい人だ。じっちゃんの知り合いで、情報捜査員だという。

昔からレイに色々と教えており、体術や色々な動き方などを教えて

くると、兄貴分だった。

「しかし、何でもまた日本にいますか？まだイタリアにいるって聞きましたけど・・・」

「まあ確かにそうだが。なにせ日本でトクダネの情報を聞き入れたからな」

「トクダネの情報？」

「ああ。『あの人』から、直々に依頼されたんだ」

「『あの人』？」

「ああ。まあ正体は分からず、依頼もたまにしか無いが、報酬は高く、何より極秘の情報を提供してくれるんだ」

「へえ・・・すごい人だね」

「まあな」

「そういえば。零児さんは？」

「零児なら、別の任務があるから、今は別行動なんだ」

「へえ・・・忙しいんですね」

「まあな・・・おっと。時間が結構すぎているな」

と、ハーケンはとっさに走り出した。

すると、ハーケンは急に止まった。

「おっと。忘れるところだったぜ」

そして、レイの元に向かった。

「お前にこれを渡し忘れるところだった」

と、ハーケンは背中に背負っていた銀の小型のアタッシュケースをレイに渡した。

「これは？」

「それをあの人からお前に渡すように言われたんだ」

「俺にですか？」

「ああ。中身は秘密だが、それはいつかお前の役に立つものが入っている」

「役に立つ・・・もの」

「ここでは開けず、一人のときに開けて確認してくれ」

「は、はい」

「・・・じゃあ。またどこかで会おうぜ」

と、手を振りながら、ハーケンは歩いていった。

「……本当に、会う機会が少ない人だ。……それにしても、一体何が入っているんだ？」

と、レイはアタッシュケースを振ってみたが、何も音はしなかった。

「……まあいっか。後で見れば分かることだし」

と、レイは歩いていこうとしたが、すぐに止まった。

そして、右側を見た。

(……うーん。……そうだな……)

そして、レイはその店に入って行った……。

そして、買うものを買って、レイは一夏とシャルロットが行ったほうへ歩いていた。

すると、シャルロットが歩いてくるのを見つけた。

「おーい」

と、レイが呼ぶと、シャルロット気付いた様子。

「レイ。用は済んだの？」

「ああ。しかし、シャルロットは何で一人だ？」

「それは、織斑先生が来てね、一夏と何かを話してて、僕と追跡していた三人は山田先生に連れられて行って、今は一夏を待っているの」

「ふーん。織斑先生がねえ……。それに、あいつらはやっぱりついてきていたか」

「え？レイ……。もしかして気付いていたの？」

「薄々と気付いていた。それで、その三人は？」

「うーん。まだ水着売り場にいるかな」

「そうか……。じゃあ一夏を待つ間、カフェで時間を潰すか？」

と、レイは左側にあったカフェを指した。

「うん。そうだね」

と、シャルロットとレイはカフェに入ってしまった。

外に出ているテーブルがあるところで、空いている席に着いた。

そして、少しして中から店員が来た。

「いらっしやいませ。ご注文は？」

「ええと。私はカフェオレを一つ」

「俺はコーラを一つ」

「かしこまりました。では少し待っていてください」

と、店員は頭を下げて、店の中に入っていくた。

「・・・ところで。シャルロット」

「な、なに？」

と、レイは店員が離れて、少ししてシャルロットに聞いた。

「前から思っていたんだが・・・。俺と一夏と三人か二人のときは『シャルロットって呼んで』と言っていたが、俺はてっきりあのまま男子を貫き通すかと思っていたんだが、その次の日に女子に戻ったからさ、何でだ？」

「そ、・・・それは・・・その・・・」

「・・・まあ。言いたくないのなら、別にいいけど」

「・・・レイは気になっていたの？」

「そりゃ。気になるさ」

「そ、そう・・・。そうなんだ」

「・・・まあ、でも。シャルロットがそう決めたのなら、俺は別に異論があるわけじゃないけどな」

「・・・・・・・・・・」

「・・・でも、せっかくの呼び名が普通になったんじゃないか・・・あつ、そうだ。別の呼び名でも考えるか？」

「えっ。い、いいの？」

「ああ。シャルロットが良ければ」

「い、いいよ！全然いいよ。せっかくだし、お願いしようかな」

「そうか。・・・うーん・・・。じゃあ、『シャル』っていうのはどうだ。呼びやすいし、親しみやすいし」

「『シャル』・・・。うん。いいよ！すっごくいいよ！」

「そ、そうか。そんなに気に入ってもらえるとは思っていなかったよ」

と、レイはシャルがぐい、と接近してきたので少したじろぐ。

（シャル・・・シャルか・・・。うふふ・・・）

と、シャルは大いに喜んでいる様子。

「お待たせしました」

すると、頼んでいた飲み物が来た。

「では、ごゆっくり」

と、店員はトレイを持って、店の中に入っていった。

そして、二人はそれぞれの飲み物を飲んだ。

「ところで、そのアタツシケースは何？」

と、一口カフェオレを飲んだシャルが聞いてきた。

それは、袋の中に入っていた銀のアタツシケースである。

「ん？・・・ああ、これか。さっき古い知り合いと会って、貰ったんだ」

「へえ。でも、中身は何なの？」

「・・・俺もまだ中身は見っていない。ここでは見るなって言われているから」

「ふーん。そうなんだ。じゃあ後で見せてくれる？」

「・・・それは・・・できない。俺一人しか見てはいけないと言っていたから」

「そうなんだ・・・。じゃあいつか」

「・・・そろそろいくか？一夏も出てくる頃だと思うし」

「そうだね」

と、二人は席を立って、一旦店の中に入って、会計を済ませて、一夏がいるところへ向かった・・・

その頃・・・

ハーケンはデパートの外に居り、そのまま路地裏に入ると、ポケットから携帯電話を出し、どこかにかけた。

「・・・俺です。あれはちゃんとレイに渡しましたよ」

『ごくろうだった』

「・・・しかし、どうしてあなたがレイのことを知っていたのですか？」

『・・・それは・・・・・・・・・・・・・・・・——だからだ』

「・・・なるほど。そういうことですか。どうりでレイのことを知っているわけですね」

『・・・とにかく、例の件についての調査を頼む。その次にアメリカとイギリスから強奪されたISの調査をして欲しい』

「それに関しては、零児が調査をやっています。その件はこっちが早く掴みましたから」

『そうか。なら、詳しいことが分かったら、連絡をしてくれ。報酬はいつもより多めに渡そう』

「ありがとうございます」

と、ハーケンは携帯を切り、ポケットに入れると、そのまま路地裏に消えた・・・

Story 12 乙女の心は晴れのち曇り（後書き）

ちよくちよく出ている謎の男・・・。

ある意味重要なキャラクターだったりします。

それと、闇の皇子様、間違っているところを言ってくれてありがとうございます。
うございました。

見落としがあったようです・・・。

Story 13 海に着いたら十一時！（オーシャンズ・イレブン）

そして、時間は過ぎて、臨海学校当日・・・

初日の天候は快晴で、海水浴には絶好の日であった。

IS学園一年生は、三日間止まる旅館に到着した。

そして、旅館の女将さんに挨拶を済ませると、生徒はそれぞれ割り当てられた部屋に向かって行った。

そして、レイも自分の部屋に到着した。

「ふう・・・」

と、レイは一息ついて、窓から外を見た。

そこには、青い海が広がった景色があった。

「おおー。すごいな」

そしてレイはバックから、水着とタオルと着替えを持ってきた袋に入れた。

ちなみに、バックの中には、なにやら様々なものが入っていた。

「・・・しかし・・・。やっぱり一人は寂しいな」

部屋割りには、今年は男子がいるということなので、色々大変であり、一夏は織斑先生の部屋・・・つまり教員の部屋に泊まることになった。

レイはこうして他の生徒と同じ部屋なのだが、なぜ一人かと言うと、実際のところ事前に織斑先生から『他にいるのなら、選んでもいいぞ』といわれていたのだが、レイ曰く『変な目で見られそう』ということで、一人にしたのだが、やっぱり寂しいものだった。

レイの部屋は、どうやら他の生徒たちがいる部屋とは少し離れたところで、生徒には知らされていないところであった。

「まあ、別に一人だからこそその楽しみって言うのがあるからな」

と、バックから覗く、『それ』を見て、今夜が楽しみであった。

「さてと、行くか」

と、レイは荷物を持って、部屋を出た。

そして、水着に着替えたレイは、海にいた。

相変わらず眼帯は装着したままであるが・・・。

「おおー。海だ」

と、一夏も来た。

二人は日々体を鍛えているので、結構がっちりとした体型であった。

「久しぶりだな。海に来たのは」

「そうなのか？」

「ああ。海の家でバイトをしていたんだ」

「へえ」

「あつ。織斑君とラングレン君だ」

と、女子たちがレイ達のところに来ていた

「わあ。二人とも結構鍛えてあるね」

「ねえねえ。後でビーチバレーをしようよ」

「ああ。時間があればいいぜ」

「俺も後ならいいぞ」

と、二人は浜辺に一步を歩みだしたが、夏の暑さと砂の熱さが襲ってきた。

「「あちちち！」」

と、二人揃って足を上げた。

「・・・ふう・・・。まあ、でもこれがあって海だ」

と、砂の熱さにレイは慣れた様子。

「そ、そうだな・・・」

一夏は少しまだ熱そうにしていた。

そして、二人は準備体操をした。

「い、ち、かーっ！」

すると、後ろから、鈴が一夏に飛び乗ってきた。

「あんたって真面目ねえ。一生懸命に体操しちゃって。ほら、終わったんなら泳ぐよ」

「こらこら。お前も準備体操をしろよ。溺れても知らないぞ」

「私溺れたことないもん。前世は人魚ね・・・。たぶん」

「本当か？」

と、レイが皮肉的に聞いてきた。

「溺れたことがないから、そうなのよ」

（どういうこっちゃ）

レイはそう考えていると、鈴は一夏の体を登っていき、肩車の状態になった。

「おお。高い高い。遠くまで見えるから、ちよつとした監視塔になれるよ、一夏」

「って、俺は監視員じゃなくて監視塔かよ！」

「いいじゃん。人の役に立つんだから」

「誰が乗るんだよ……」

「んー。あたし……」

にへへっ、と笑って見せる鈴。

「じゃあ、俺は先に行っているぞ」

と、レイは一足先に海に入っていた。

「冷たっ?! 海の水は結構冷たいな……。砂の熱さに慣れていたか

らか」

と、久しぶりの海の鈴を感じながら、進んでいく。

そして、ある程度進んだら、レイは泳ぎ始めた。

そんな時、浜辺では・・・

「な、何をしていらっしゃるの!？」

と、セシリアは一夏と鈴の様子を見て、言った。

「何って、肩車。もしくは移動監視塔ごっこ」

「ごっこかよ」

「・・・い、一夏さん。私との約束をお忘れで？」

と、セシリアは抱えていたパラソルを、砂に突き刺すと、シートを広げた。

そして、うつ伏せになると、ブラの紐を外した。

「さあ、どうぞ」

「って、あんたこそ、一夏に何させる気よ」

「何って、サンオイルを塗ってもらいますの。一夏さん」

「・・・分かった・・・」

と、一夏は手にサンオイルをつけた。

「・・・・・・・・・・」

そして、オイルをつけた手をセシリアの背中に触れると・・・

「ひゃあっ！・・・い、一夏さん。サンオイルは少し手で暖めてから塗ってください」

「す、すまん。こういうの初めてなんで」

「は、初めてでしたか・・・。それでは仕方ありませんね」

「・・・あんた・・・。何嬉しそうにしているの？」

と、いつの間にか鈴がセシリアの前に来ていた。

そして、一夏はセシリアの背中にサンオイルを塗っていった。

「・・・・・・・・いい感じですよ・・・一夏さん・・・」

「せ、背中だけでいいんだよね？」

「ええ・・・。ですが、私の手の届かないところもお願いします」

「・・・・・・・・え？」

「その・・・お尻も・・・お願いします」

「ふえっ!？」

と、一夏はさすがにこれは、と言う感じで驚いた。

「はいはい。そこは私が」

と、鈴が手にサンオイルをつけて、そのまま素早くセシリアに塗りつけていった。

「ひやははっ!く、くすぐったいですわ!」

「こうして、こうして・・・。ああこども」

と、鈴はセシリアのお尻にもサンオイルを塗った。

「ひゃあ!？・・・もう、いい加減に・・・!」

と、セシリアが怒って立ち上がったが、胸に着けていたものは、下に置き去りだった。

「あっ!」

「え・・・?・・・きゃあああ!？」

「うわああ!？」

すると、一夏はセシリアの鉄拳を顔面にくらった。

「ぐわあ!？」

そして、そのまま後ろに飛ばされた。

そして、しばらくして、一夏と鈴も泳ぎ始めていた。

(たくっ、何で俺が殴られないといけないんだ)

と、殴られたことに不満があるようだ。まあ、あんなことになったのは、鈴のせいでもあるが……

「一夏、向こうのブイまで競争ね。負けたら駅前の『@クルーズ』でパフェおごんなさいよ。——よい、どん!」

「こら、卑怯だぞ! ええい、待て!」

「あははっ。ぼーっとしているのが悪いのよ!」

と、一夏は先にリードされた鈴の後を追う形になった。

(セシリアには悪いことをしたけど、今回は譲ってもらわよ)

と、鈴は考えながら、泳いでいた。

（セシリアやラウラには負けていけないんだから）

そして、鈴はそのままゴールを目指した。

「!？」

すると、突然体に痛みが走った。

（足が!？）

泳いでいるせいか、もしくは準備体操を十分にしていないからか、
どうやら鈴は左足をつった様子。

（早く・・・上がらないと!）

しかし、痛みのせいで、足がうまく動かすことができず、鈴は徐々に沈んでいく。

（た・・・助けて・・・）

すると、鈴が差し出した右手を、誰かが掴んだ。

（・・・一夏・・・?）

しかし、それはすぐに違うものだとわかった。

（この手……レイの手だ……）

水中なので、はっきりとは目の前が見えなかったが、その握られている手の感触で、レイだと分かった。

そう……。鈴は忘れない……。以前レイに助けてもらった時も、こうして手を握ってもらった。

そして、レイによって、鈴は海面に上げられると、レイは手を離し、今度は別の手が握られた。

（……今度は……一夏の手だ……）

そして、そのまま鈴は二人に浜辺まで運ばれた。

「大丈夫か、鈴!？」

「ごほっ! けほっ! ……だ、大丈夫……」

浜辺に鈴を上げると、鈴は咳き込んだ。

「災難でしたね。鈴さん」

と、セシリアが珍しく鈴を心配そうにしていた。（さっきまでの怒りはどうした）

「こうしてはいられませんわ。高月さん、旅館まで連れて行きましよう」

「分かった」

「え!?!?・・・ちょ、ちょっと!?!?」

「さあ行きましょうか」

「旅館で休めばすぐに良くなるから」

と、二人は鈴の腕を掴んでは、旅館に連れて行った。(というよりは強制連行に見えた)

「いや、私は・・・大丈夫だから!?!?・・・うわああ!一夏、助けてええ!!一夏ああああ・・・!!」

と、鈴の悲痛?な叫びが響いた・・・。

「・・・まあ・・・あんなに元気なら・・・心配ないかな・・・」

「心配はないだろう」

と、隣で立っていたレイは、本当に心配しているのかは分からない。

「・・・でも・・・。何で頭がそんなに腫れているんだ?」

見れば、レイの額には、まるでマンガでよく見るタンコブのように腫れ上がっていた。

「・・・泳いでいたら、あのブイに頭を打った」

と、レイが指した方向には、さっき一夏と鈴が泳いで競争してのゴールのブイがあった。

「あ、あれにか？・・・でも、お前は先の泳ぎだったのに・・・。それにお前だったら、あれくらい避けられるだろう」

「ああそうだ。俺も気をつけて泳いでいたが・・・、泳いでいたら、急に強い波が来て、それによってブイが急に動いて、それで頭にぶつけた」

「・・・・・・・・」

「そうして、海中でひっくり返っていたら、鈴が溺れているところを見つけたんだ」

「なるほど・・・。しかし、お前本当に運がないな・・・」

「生まれつきだ」

と、レイはさらっと流したが、本当に呆れるほどにレイの運は悪い。

例えば、二週間前では、寮に行く途中で、ソフトボール部の部員がバットで放ったボールが、レイの頭に直撃したり、その二日後には、階段を上っている最中に、上から不安定にたくさんファイルを重ねて運んでいる女子が階段を踏み間違え、そのファイルは案の定崩れ落ち、その下にいたレイはそのファイルの雪崩に巻き込まれて、階段から落ちては、その三日後には屋上で弁当を食べている時に、突風が吹き、それによって生徒が持っていた空のペットボトルが飛び、

それが頭に直撃などなど、他に様々なことが起きている。

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

と、二人は黙っている・・・・・・

「一夏、レイ。ここにいたんだ」

「おっ。シャル・・・・!？」

と、一夏が振り向くと、そこにはシャルがいたが、その隣には・・・・・・

「な、なんだ!？そのバスタオルおぼけは!？」

そこには、バスタオルをたくさん巻いた不気味な人がいた。

「ほら、出てきたら？大丈夫だから」

「だ、大丈夫かは、私が決める」

「・・・・その声はラウラか？」

レイは、その声を聞いて、ラウラだと分かった。

「た、隊長もいらっしやいましたか!？」

どうやらバスタオルで目の前すら見えない様子。

「ほーら、せっかく水着に着替えたんだから、一夏とレイにも見てもらわないと」

「ま、待て。私にも心の準備と言うものがあってな……」

「もう。そういつて全然出てきてないじゃない。僕を手伝ったんだから、見る権利はあると思うけどなあ」

「……………」

「うーん、ラウラが出てこないんなら僕も一夏とレイと遊びに行こうかな」

「な、なに？」

「うん、そうしょ、一夏、レイ、行こっ」

と、シャルは一夏とレイの手を握り、歩こうとした。

「ま、待て！ ええい、脱げばいいんだろう！」

と、ラウラはバスタオルを一気に外した。

そこには水着姿のラウラがいた。

「わ、笑いたければ、笑え……」

その水着と言うのが、黒くレースが付いたもので、まるで大人の下着のようにも見える。

髪はいつもの伸ばしっぱなしというものではなく、頭の横で結んでおり、鈴と似ている髪形だと思った。

「おかしいところなんてないよね一夏、レイ」

「ああ。ちよつと驚いたが、かわいいと思うぜ」

「そうだな。結構似合っているぞ。ラウラ」

「なっ……。そ、そうか……。私が……。か、かわいいか……」

と、ラウラは『かわいい』と言われて、顔が赤くなり、手をもじもじした。

「おっりむらくーん！ラングレンくーん」

「さっきの約束！ビーチバレーしようよ！」

「おー、レイとおりむーと対戦。ばきゅんばきゅーん」

と、さっきビーチバレーをすると約束した女子と、のほほんさんだった。

「それっ。織斑君にパス」

と、バレーボールを持っていた女子がトスをして、一夏にボールを渡し、一夏をそれをキャッチした。

「俺とシャルとラウラ……。それとレイか……。一人余るな」

「俺が抜けるよ。予備員のいう形で」

と、レイはコートを抜けた。

「これで三人か……。じゃあサーブはそっちで」

と、一夏はバレーボールを向こう側にいた（たぶん櫛灘さん）が受け取ると、目がキラんとした。

「フッフ……。七月のサマーデビルといわれたこの私の実力を、見よ！」

すると、バレーボールを高く上げると、更に自分もジャンプし、そのまま強くボールを飛ばした。

「任せて！」

と、シャルが飛び出し、バレーボールを腕で受け止め、そのまま相手側のコートに飛ばした。

そんな中で、ラウラはぼーとしていた。

「かわいい……。私がかわいい……。」

と、一夏のさっきの言葉を、繰り返して言っていた。

「ラウラ！」

と、一夏の呼び声で、ラウラははっとしたが、その時には既に遅く、バレーボールはラウラの顔面のだ真ん中に直撃し。ラウラはそのま
ま後ろに倒れた。

「だ、大丈夫か……。ラウラ？」

と、一夏が心配そうによつてきた。

「か、可愛いといわれると、私は……。私は……。う……。ふふふ……」

「ま、まだ言っていたの……。？」

「ラウラ？」

「……。……。！」

と、一夏がラウラの顔を覗き込むと、ラウラの顔がどんどん赤くな
っていった。

「うわあああああ！！！」

すると、ラウラは一気に立ち上がると、そのまま海のほうへ脱兎の
如く走り去っていった。

「……。追ったほうがいいかな？」

「……。別にいいだろう」

と、レイがコートに入ってきて来た。

「ラウラの代わりに俺が入るよ」

「そ、そうか……。じゃ、じゃあ試合再開だ」

と、一夏は気を取り直して、ビーチバレーを再開した。

そして、しばらくすると……

「ビーチバレーですか……。楽しそうですね」

と、ビーチバレーのコートに、水着姿の山田先生が来た。

「あつ。先生もどうですか？」

「ええ。織斑先生もどうですか？」

と、今度は水着姿の織斑先生が現れた。

「……………」

すると、一夏は織斑先生の水着姿に見とれた。

「わあ。織斑先生ってモデルさんみたい」

と、他の女子生徒が言っていた。

「……………」

「・・・お前が選んだ水着か？」

すると、レイがサラツと言ったことで、一夏が吹いた。

「な、何でそれを!？」

「ほう・・・。そういうことは、本当か」

「うつ・・・」

「まあ、俺はけちはつけないがな」

(今つけていただろうが!)

と、一夏は頭の中で反論した。

「・・・一夏って、織斑先生のようなタイプが好みなの？」

「なっ。何を言っているんだ!？」

「だって、私たちとは反応が全然違うんだもん」

「・・・そ、それは・・・」

「はあ・・・。ライバルが多いな。そこの織斑先生が入ってくるなんて・・・」

「ああ。千冬姉は強敵だ。油断するなよ」

「そうだな」

「……一夏……レイ……。多分勘違いしていると思う」

と、シャルはボソツと言うと、織斑先生が向こうに行き、山田先生がこっちに入ってきた。

そして、織斑先生が、強力なサーブを飛ばしてきた。

「任せろ！」

と、レイがそのサーブを受け止め、ボールは上へと上がった。

「うう……。いててて……」

と、レイはボールが当たった箇所をさすった。

そして、そのまま白熱したバトルが繰り広げられた。

その後としては、バトル中に、旅館からセシリアの追撃から逃げる鈴の姿があり、鈴がセシリアを見ていると、そのまま織斑先生と当たった。（しかも胸に……）

それに気付いた鈴とセシリアの顔は、一瞬で青ざめた。

その後、バレーボールをしたメンバーは、カキ氷屋に行き、カキ氷を食べていると、レイと一夏はなぜか早食いに挑戦し、案の定頭に

響いたのか、頭を抱えた。

そうして、みんなは楽しい時間を過ごしたのである……

その頃……

「……………」

とあるところで、その男性は、その中で寝ている、四体の機体を見ていた。

それは、姿からして、動物のような形で、一体目の形は、鳥のような形で、赤と黒の二色で構成されており、翼を休めるかのように、翼は垂れ下がって、頭も下がっていた。

二体目は、姿からして、架空の生き物「ドラゴン」のような形で、色は青系で構成されており、尻尾の先端には鋭く尖ったブレードがあり、体を丸め、羽も垂れ下がり、床に寝ていた。

三体目は、姿からして、「トラ」のような形で、黒と白の二色で構成されており、鋭い爪をした手を枕代わりにして、寝ていた。

四体目は、姿からして、「カメ」のような形で、オレンジと茶色の二色で構成されており、甲羅の間の線は黒があり、その上には、二つのキャノンを背負っており、今は手足を引っ込めていた。

それぞれ「鳥」「龍」「虎」「亀」の姿を模した機体である。

（とりあえず。こいつらは完成した……。後は……）

と、男性は近くにあったイスを取り、座った。

「・・・・・・・・・・」

すると、男性はポケットからあの端末を取り出し、それを開くとどこにかけた。

「・・・・・・・・・・」

そして、しばらく耳に当てると……

「……俺だ。ハーケン」

『あなたですか、マスター。何の用ですか？』

「……俺が前言った件についてだが……。何か分かったか？」

『例の件についてですが、まだ何も分かっていないのですが……。』

「……そうか」

『しかし、零児の情報によれば、アメリカとイギリスからISが強奪された件についてですが……。例の『組織』がやったことが判明しました』

「……。そうか……。あの組織が動き出したか」

『まだ完全とはいきませんが、しかし、本格的に動き出すのも時間の問題でしょう』

「そうだな……。こっちも準備は進めている」

『それと、その組織が、別のあの『組織』と手を組んだと言う、未確認の情報が入ってきたのですが……。どうでしょうか？』

「……。俺も分らん。だが、その組織も危険性がある。調査を続行しろ」

『OK。マスター』

と、通信が切れた。

（……。さてと……。これからが大変だな……）

と、男性は今後起きそうなことを予測した……

（束はやっぱりあれを持っていくのか……。本当に何もなければいいんだが……）

と、男性はすこし不安に思うのだった……。

Story 14 その境界線の上に立ち（シン・レッド・ライン）前編

そして、時間は過ぎて、七時半……。一年全員は、大宴会場で夕食をとっていた。

「うん、うまい！昼も夜も刺身が出る何て豪勢だな」

「そうだね。ほんと、IS学園って羽振りがいいよ」

「ああ」

と、一夏の隣にシャルで、その隣にレイがいた。

ここの旅館では、どうやら食事の際には、『浴衣着用』というのが決まりらしく、全員浴衣を着ていた。

そして、一夏は刺身の横に置かれている本わさを少し取り、刺身と一緒に食べた。

「うまい！さすが本わさだ」

「本わさ？」

「シャルは知らないのか。本物のわさびをおろしたやつを本わさっていうんだ」

「え？じゃあ刺身定食にのっているのって・・・」

「ああそれは練りわさ。えーと、原料はワサビダイコンとセイヨウワサビとかいうやつだったかな。着色したり、合成したりして見た目と色を似せてあるやつ」

「へえ・・・」

と、シャルはうなずくと、本わさの山を箸でとって食べた？

「・・・っておい！」

「っ—————！！！」

案の定、シャルは鼻を押さえ、涙目になる。

「だ、大丈夫か？」

「・・・ら、らいひょうぶ・・・。・・・で、でも・・・風味があつて・・・おいひい・・・よ？」

と、笑顔を返したが、いまいち決まっていなかった。

「どこまで優等生なんだ・・・ほれ」

と、一夏がお茶を渡すと、シャルは一気に飲み干した。

「・・・・・・・・・・」

と、一夏はレイのほうを見ると、レイは静かに刺身をゆつくりと食べていた。

しかし、その食べ方は、どことなく嬉しそうに食べているように見える。

「なあ。レイって刺身が好物なのか？何かゆつくり食べているな」

「・・・好物と言うよりは、久しぶりに食べるから、大事に食べているんだ」

「久しぶりに食べるんだ・・・どのくらい？」

「・・・二、三年ぶりだ」

「え・・・？・・・二、三年ぶり！？」

「ああ。刺身と言う豪華な食材を買う暇なんかなかったんだ」

「いや。学食で刺身定食があっただろう」

「気付かなかった」

「えええ・・・」

と、一夏は呆れた。

まあ確かにレイは食堂では、ほとんど麺類のメニューしか頼んでおらず、たまにカツどんやチャーハンなどのメニューは食べているが、気付かないほうもどうかと思う。

「まあでも、久しぶりに食べる刺身も、うまいがな」

と、レイはどんどん料理を食べていった。

「ふう〜、さっぱりした」

「・・・ああ。そうだな」

と、温泉の脱衣所から、一夏とレイが出てきた。

夕食の後に、男子の入浴時間であったので、二人は一旦着替えを取りに行き、入浴時間ぎりぎりまで入っていた。

海を一望できる露天風呂を広々と使ったので、爽快感があった。

ちなみに、温泉に入る際に、床に石鹸が落ちていて、レイはそれをうっかり踏んだために、豪快にすべり、そのまま温泉にダイブという形で入浴した。

「レイは今から部屋に戻るのか？」

「ああ。他に何もすることがないからな」

「そっか。じゃあな」

と、一夏とレイは手を振って、それぞれの部屋に向かった・・・

そして、レイはしばらく旅館の通路を歩き、ようやく自分の部屋についた。

「と・・・遠いな・・・。それに・・・」

すると、レイは頭を押さえた。

「何で金ダライが天井から落ちてくるんだ。古すぎるぞ」

それは、部屋に向かう途中、突然上から金ダライが落ちてきて、頭に直撃した。

何で落ちてきたかと言うと、その通路の壁に、注意書きの紙が張ってあり、内容は『雨漏り対策のために、天井に金ダライが設置されていますが、落ちてくることが多分あるかもしれないので、注意して下さい』と書かれていた。

ちなみに、タライの中に水は一滴とも入っていなかった。

「はぁ・・・。まあいいや」

と、レイは部屋の中央に置かれた机に向かい、座布団に座ると、バックから何かを取り出した・・・

その頃・・・

（・・・うーん・・・。レイは確かにここを通ったよね・・・）

と、そう考えているのは、シャルであった。

（うう・・・。何でここは他より薄暗いんだろう・・・。見にくいな・・・）

と、足元を確認しながら、ゆっくりと進んでいた。

「・・・・・・・・・・？」

すると、シャルは床にあるものを見つけた・・・。

近付いて見ると、それは、金ダライだった。

（・・・何これ・・・？）

シャルは不自然に置かれている金ダライを見て、「？」と出た。

ちなみに、それはさっきレイの頭上に直撃した金ダライである。

「・・・まあ・・・いいかな」

と、シャルが進みだすと・・・

ぎしっ……

「!」

と、床の板と板の間がこすれる音がして、シャルはビク、とした。

「……な、何だ……。驚いた……」

と、シャルは安堵した……。

しかし……

……がーん!

「ふげっ!?!」

と、シャルの頭上に、また金ダライが落ちてきた。

その衝撃で、シャルの頭が下がった。

「ううう……」

シャルは痛みのあまり、頭を押さえた。

そして、床では音を立てて金ダライが回っていた。

「な……何なの……。もしかして、レイもこれ受けたのかな……」

と、さつき置いてあった金ダライを見て、呟いた。

（・・・とにかく・・・先に進もうかな・・・）

と、シャルは警戒しながら、進んでいった。

そんな時に、レイは机の上で、何かをしていた。

「・・・・・・・・・・」

その視線の先には、一体の小型ロボットがあった。

カラーリングは、紺色で、少し白があり、首には赤いマフラーのよう
うなものがあった。

形状は人の形をしており、普通の形状で、頭にはヘッドギアのよう
なものがあり、肘と膝には、カッターのような刃物が付いていた。

レイは手にしているピンセットと、ドライバーで、そのロボットを
いじっていた。

（これが・・・ハーケンさんが言っていた『あの人』の贈り物か・
・・・でも、何でこれを送ってきたんだ？）

と、レイが疑問に思っていた。

これを貰って、自分の部屋で空けたときには、正直驚いた。

中身はこれが完成体で入っており、説明書と、このコントローラと思われる端末……「CCM」と、この武器と思われるパーツが入っていた。

説明書によれば『コードネームは「ジライヤ」。偵察任務に適したLBXで、カメラには、暗いところを鮮明に見ることができるナイトビジョン、熱を感知する、サマービジョン、と呼ばれる三種類の特殊センサーを搭載し、高性能のセンサーを搭載、高感度マイクを持ち、遠くにいても特定の音をだけを聞くことができる。さらにコンピュータに侵入できるハッキングツールを有し、情報を盗むことができる。機体の装甲も通常のLBXを上回る硬度を持っている。フレームは「ナイトF」と呼ばれるものであるが「ストライダーF」並みの機動力を有している。機体の足には、物音をなくすための特殊素材が使われており、走っても足音はせず、しかも壁や天井に引っ付くことができる。武装にはナイフの「コンバットナイフ」と、特殊弾を撃つ「ハンターライフル」と「オートマチックガン」であり、その時の戦闘次第で装備変更を行えることができる。

（中々の性能だ。俺にとってはかなり興味がある）

そして、調整を終えて、各パーツを付け直し、道具を横にあった道具箱に入れ、バックの中に入れると、レイは手にCCMを持ち、画面を開いた。

「……こうかな？」

と、レイは説明書を見ながら、ボタンを押すと、ジライヤのメインカメラが光り、ゆっくりと立ち上がった。

「へえ……。こんな感じで動くんだな……。ほい」

と、ボタンを押すと、ジライヤが歩き出した。

「次は……」

今度は連続で押すと、ジライヤが机の上を走り出した。

忍び足のような走り方で、足とは全くしない。

「本当に音がしないな……。関節モーターの音もあんまりしない……。じゃあ次は……」

と、レイは素早く連続で押すと、ジライヤはその場で連続でバク転をした。

「すごい……。こんなにすごいのか……」

と、レイは感動して、ボタンをいくつか押すと、ジライヤがジャンプし、レイの肩に着地した。

「こりゃすごいな……。情報収集に使える」

そして、レイはCCMを閉じると、ジライヤと一緒にバックに入れた。

（……しかし……。一体何者なんだろうか。ハーケンさんが言う『あの人』って。こんなにすごいものを作るから、相当すごい人なんだな……。）

と、ジライヤを作った人に、尊敬感を覚えた。

こんこん・・・

と、扉からノックが聞こえた。

「はいはい」

と、レイは立ち上がり、扉を開けた。

「こ、こんばんは・・・。レイ」

扉を開けると、そこにはシャルがいた。

「シャルか。どうしたんだ？」

「うん。・・・その・・・暇だから話したいなあって思って、来たの」

「そうか・・・。まあいいけど、どうやってここが分かった？」

「それは・・・レイがこっちに行くところを見たから」

「ああそうか。・・・ところで、行く途中で、何かなかったか？」

「え？・・・。そういえば、何か金属の何かが床にあってね、その後それが上から落ちてきたかな」

「・・・やっぱり・・・」

「・・・そう言っているって事は・・・やっぱりあれってレイが打った後なんだね・・・」

「まあそういうことだな。まあそんなことはいいや。とりあえず、入れよ」

「う、うん。お邪魔します・・・」

と、シャルはゆっくりと、部屋の中に入っていた。

「レイって、一人なの？」

「ああ。まあ『寂しいなら誰かを選んでもいいぞ』って織斑先生が言っていたけど、別に寂しいわけじゃないから、選ばなかったけど」

「・・・そ、そうなんだ・・・」

「・・・まあでも、いざと言うときになったら、寂しいもんだな」

「・・・・・・」

「・・・ところで、何を話すんだ？」

「え？・・・あ・・・ええと、レイは何かしていたの？」

「・・・いや、特に何もしていない」

「そ、そうなんだ・・・」

と、何か残念そうにしていた・・・。なんでだ？

すると、シャルの右手首にあるブレスレットが光った。

「・・・それ・・・気に入ってくれたんだ」

「う、うん。まあね・・・」

と、シャルは嬉しそうだった。

「そんなに気に入ってもらうと、安いやつにしたのが何か悪いな」

「いや、いいんだよ。レイはお金の余裕があまりないんでしょ？」

「・・・うーん。まあ前までそうだったが・・・」

「前まで？」

「・・・そういえば、言っていなかったな。学園に入った際に、学園の研究所に、俺のISの毎日得たデータを毎日提出することを条件に、少し支援金がくるようになったんだ」

「へえ・・・やっぱり男子だから？」

「うーん。まあそれもあるけど。俺の場合、ISを三体持って、それを同時に使用でき、尚且つ同時に展開できることかな」

「ああ。確かにそうだね。ISを三体も同時に所持して、それが同じところに収納されていること自体、前例がないからね」

「そうだな。でも、最近は書くことが多くなったから、睡眠があま

り取れていないんだよなあ・・・」

「そうなんだ・・・。大変だね」

「まあな。・・・そういえば、シャルって毎日それ付けているよな」

と、レイが指したところには、少しくたびれた腕時計があった。

「ああ。これ？・・・僕にとって一番大切なものの・・・お母さんから貰った、ただ一つの時計なの・・・」

「・・・そうか・・・」

「・・・あれ？」

と、シャルがその時計をじっと見た。

「どうした？」

「・・・針が・・・止まっている・・・」

「え？」

と、レイがシャルの腕時計を覗き込んだ。

すると、シャルの顔が赤くなった。

「・・・ちょっと貸してくれないか？」

「え？・・・い、いいけど・・・」

と、シャルは、腕時計を外し、レイに渡した。

「・・・・・・・・・・」

そして、しばらく見ていた。

「・・・レイ？」

「・・・中を見たほうがいいな」

「え？・・・それって・・・」

「ちょっと蓋を開けてみる。心配はないさ。俺は前に時計屋でバイトをしていた時に腕時計の修理法を学んだから。結構腕には自信があるんだ」

「そ、そうなんだ・・・じゃあ・・・見てくれる？」

「ああ。任せておけ」

と、レイは一旦腕時計を置くと、バックからさっきの道具箱を取り出した。

（道具箱！？）

と、シャルは心の中で驚いた。

レイは道具箱を開けると、中にはずらりと様々な道具が並んでいた。

そして、レイはそこから先が薄いマイナスドライバーみたいなものと、先が極細のピンセット二本と、筒状でゴム付いているものを取り出した。

レイはその筒状のものを左目に付けると、ゴムで耳の後ろに引っ掛けた。

そして、レイはマイナスドライバーみたいなものを持ち、腕時計の裏を慎重に開けた。

（時計に傷が付かないように、慎重にしている・・・）

と、シャルはレイが氣遣っていることに気付いた。

そして、少しして、腕時計の裏の蓋が開き、中の歯車等のパーツが現れた。

「・・・・・・・・・・」

と、レイは黙ったまま、マイナスドライバーを置き、ピンセット二本を持った。

そして、上を向いていた筒状のものを下に下ろすと、先端にはレンズがあり、それで腕時計の中を覗き、ピンセットでいじりだした。

「・・・・・・・・・・」

シャルは、レイの威圧感に押されてか、何も言えなかった。

（・・・レイって・・・職人さんみたい・・・）

と、シャルは黙々と作業を続けるレイの姿に見とれた。

「・・・なあシャル」

「ふえ!？」

と、いきなり名前を呼ばれ、見とれていたシャルはうわずった声が出てしまった。

「な、なんだよ・・・。そんな声出して」

レイは少したじろいだ。

「あっ。いや、その・・・。なんでもないよ!？」

と、シャルはとっさに手を出して、ぶんぶん振った。

「・・・まあ、ないならいいけど・・・。時計の針が止まっていた原因が分かった」

「ほ、ほんと」

「ああ。どうやら歯車の軸に注されているグリスが切れている事と、小さな埃が引っかかっているみたいだ」

「そうなの？」

「そうだ。まあこのくらいすぐ直せる」

と、レイは道具箱から液体状のグリスが入った入れ物を取り出し、一旦横に置くと、ピンセットで歯車の間に挟まっている埃を取り出し、埃をすべて取り除くと、グリスを片方のピンセットの先端につけて、もう片方のピンセットで歯車を外し、その穴の中にグリスをつけたピンセットをつけて、再び歯車を元に位置に戻した。

「さてと、どうかな・・・」

と、レイは左目に付けたレンズを開けると腕時計の蓋を閉じて、横のピンで、今の時間に調整し、針を動かした。

すると、さっきまで止まっていた時計の針が動き出した。

「う、動いた」

「直ったみたいだな」

と、レイは時計をシャルに返した。

「ありがとう。レイ」

と、シャルはとても嬉しそうだった。

「どういたしまして」

と、レイはレンズを外し、道具を道具箱に収納し、バックの中に入れた。

「よほど大事なもののなんだな」

「え？わかるの？」

「ああ。いつもしているから、皮の裏の部分が大きく擦れているからな」

「・・・うん。これをしているとね、お母さんが傍にいるような感じがするの。だから、ほとんど毎日しているの」

「・・・そうか・・・」

「・・・本当にレイって、何でもできるね・・・。羨ましいよ・・・」

「何でも・・・か・・・」

すると、レイは何かしゅんとした。

「・・・ええと・・・。なにか触れちゃいけないところだった？」

「いや。いいんだ。・・・だけど・・・」

「だけど？」

「・・・俺でも、できないことはあるさ・・・」

「できないこと？」

「ああ。それは、ほとんどの人なら、できることなんだ。・・・でも、俺と、一部の人には、できないんだ」

「・・・それって？」

「・・・。。————だ」

「・・・え・・・？」

「・・・ふっ。冗談さ。・・・さてと・・・」

と、レイは立ち上がり、バックから数枚の束になった用紙を取り出した。

「それは？」

「ああ。織斑先生に調べごとをしてくれと前にいわれていたから、最近調べ終わって今日の夜に渡そうと思っていたんだ。今から行くが、シャルはどうだ？」

「うーん。・・・じゃあ僕も行くよ」

「そうか・・・じゃあ行こうか」

と、レイは用紙を持って、シャルと一緒に部屋を出た。

そして、しばらく旅館の通路を歩いた。

「・・・しかし、こんなに遠いんだな・・・。俺の部屋って・・・」

「・・・そうだね。少し遠いかな」

と、歩いているうちに、織斑先生と一夏が泊まる部屋に近付いた。

「・・・ん？」

「・・・あれ？」

と、二人が見たものは、その部屋の扉に、耳をつける、箒、セシリア、鈴、ラウラの姿があった。

「何やってんだ？あいつら」

「・・・さあ・・・」

まだ二人は遠くに居り、まだ四人はこっちに気付いていない様子。

そして、そのまま近付いていくと・・・

どんっ！

「」「」「へぶっ!?!」「」「」

と、四人は扉に殴られたかのように、後ろに倒れ、十代女子とあるまじき声が漏れた。

そして、扉が開くと、織斑先生が出てきた。

「何をしているか。馬鹿共が」

と、逃げようとする鈴と箒の首根っこを掴み、その間に逃げようとするセシリアとラウラは浴衣の裾を踏んで止めた。

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

二人は呆然として、そのまま歩いていった。

「何やってんだ？」

「れ、レイ・・・・」

「レイさん」

「レイ・・それにシャルロット・・」

「た、隊長・・・・」

と、織斑先生に捕まった四人は鈴、セシリア、箒、ラウラの順で、レイに見つかり、顔を赤くした。

「何だ。お前も覗きに來たのか？」

「いいえ。そんなことは・・。織斑先生から言われたことを調べて

おきました」

「そうか……。で、デュノアは」

「あ、私はレイと一緒に来ただけですから・・」

「・・そうか……。ちょうどいい、みんな入れ」

「「「「えっ?」「」「」」」

「.....」

そして、織斑先生から解放された四人と、レイとシャルは、恐る恐る織斑先生の部屋に入っていた。

中には、一夏も居り、今部屋は密集していた。

「それで、これが調べたものです」

「ごくろうだった」

と、織斑先生はレイから用紙の束を受け取った。

「ところで、一体何を調べていたの?」

と、シャルが聞いてきた。

「.....まあ、IS関係のデータ」

「へえ。でも何でレイだけ？」

「・・・それは・・・」

「まあ、罪滅ぼしというものだな」

「「「「「え？」「」「」「」」」」」

と、六人は驚いた。

「なにせ、ラングレンは学園のコンピューターにハッキングをかけて、データを見ていたからな」

と、織斑先生が言うと、レイは「うっ」とたじろいだ。

「が、学園のコンピューターにハッキングして入ったの！？」

「で、でも、学園のコンピューターのセキュリティーは、世界で一番強固だと聞きましたけど！？」

「ああそうだ。データ流出を防ぐために、学園のセキュリティーは世界で最も強固なセキュリティーコンピューターを使用しているが、その強固なセキュリティーを破って尚、探知されなかったのも、正直私も驚いた」

「す・・・すげえ・・・」

「本当のところなら、停学処分なのだが、まああのセキュリティーを破るハッカーを、見逃すのもなんだろうと思い、その力を発揮し

て、様々なコンピューターにハッキングして、その中を調べることを条件に、このことは他の教師には言っていない。つまり、今のところこの事実には私しか知らない」

と、織斑先生はすらっと言っているが、レイの額には若干冷や汗が出ていた。

「で、でも、停学処分を受けていないだけでも、すごいよ……。で、でも、その調べた内容って……。もしかして……」

「……。それは……。お前たちでも言えない。学園でも極秘な内容なんだ」

「そ、そうなんだ……」

「そういうことだ。それを他の者に流して、それが発覚した場合、学園側の監視と、行動制限をかける罰があるからな。注意するんだな」

「……。は、はい」

「……。まあいい。とりあえず一夏、ラングレン。何か飲み物を買って来い」

「あ、ああ」

「……。分かりました」

と、二人は、飲み物を買いに、部屋を出た。

そして、二人が出て少しして・・織斑先生は切り出した。

「さて・・・肝心の話でもするか」

と、織斑先生は、冷蔵庫から、ビールを取り出し、それをあけると、豪快に飲んだ。

-
-
-
-
-
-

-
-
-
-
-
-

•
•
•
•
•
•

•
•
•
•
•
•

•
•
•
•
•
•

と、五人は目の前の光景に、啞然とした。

特に、ラウラはさつきから瞬きを繰り返した。

「・・・まあそんな目で見るな。私だって、こういうものは飲む」

「・・・いやあ。そういう意味ではないんですけど・・・」

「今は・・・仕事中では・・・」

と、シャル、箒の順で言った。

「まあ硬いことを言うな」

と、織斑先生はそのままビールを飲んだ。

「・・・それより・・・。本題だ。・・・お前たちはあいつのどこがいんだ」

「・・・・・・」

「・・・・・・」

「・・・・・・」

「・・・・・・」

「・・・・・・」

と、五人は黙った・・・。

「まあ、あいつは役に立つぞ。家事も料理も中々。おまけにマッサージもうまい。付き合える女は得だな」

と、残ったビールを飲み干した。

「どうだ。欲しいか」

「」「」「くれるんですか！」「」「」

「やるかバカ」

ええ・・・と、心の中で突っ込む女子一同・・・。

「女なら、奪うくらいの気持ちで行かないでどうする。しっかり自分を磨けよ、小娘共」

と、織斑先生は二本目のビールを取りにいった。

「それと、これはお前たちには恐らく関係ないと思うが・・・」

と、織斑先生は二本目のビールを手に持ち、さっき居たところに座り、缶を開けて、ビールを飲んだ。

「お前たちから見て、ラングレンはどう思う」

と織斑先生が聞いてくると、女子一同は「え？」と心の中で思った。

「そうだな・・・。まずは篠ノ之」

「えっ・・・。え、ええと・・・。私から見れば・・・その、強いと思います・・・。私より剣術の腕がいいみたいですし・・・」

と、箒は言うが、実は臨海学校の二週間前に、レイと箒はISで勝負をしていた。

なぜ勝負になったかは定かではないが、勝負は箒が最初は圧倒していたが、最後の局面で、ブレードを弾き飛ばされ、そのまま必殺フアクションで決められた。

「ほう。まあ、確かにあいつは剣の扱いはうまいな。・・・次はオルコット」

「・・・あ、はい。・・・レイさんは・・・その、わたくしより、射撃の腕は上ですし・・・。もうちょっとクラスに協力したほうがいいと思います」

と、セシリアは言うが、レイはあまりクラスのみんなと協力してい

るところはあまり見られないことがある。

「ほう。じゃあそう言っておくか」

「いえ！い、言わなくていいです！」

と、セシリアはあわてて詰め寄った。

「ふっ。冗談さ。・次、凰」

「・・・ええと・・・。たまに私の相談を聞いてくれるし・・・悩んでいたら、たまに声をかけてくれるかな・・・」

と、鈴は言うが、確かにレイは以前鈴の相談を聞いており、本当にたまにレイは悩んでいる鈴に声をかけてやることもある。

「ふーん。あいつはそうには見えないがな・・・。まあいい。じゃあ次、デュノア」

「は、はい。・・・その・・・なんていうか・・・。優しいと思います。本当に・・・」

と、シャルは赤くなって言うが、本当のことは言わなかった・・・

「・・・あいつは一夏ほどじゃないが、優しいぞ」

「そ、それは・・・分かるんですけど・・・その・・・なんていうか・・・」

「・・・もういい。これ以上は長くなるだろう」

「・・・は、はい・・・」

と、シャルは本当のことを言えばよかったと少し後悔した。

「最後に、ボーデヴィツヒ」

「は、はい・・・。その・・・私にとっては・・・憧れの存在です」

「憧れねえ・・・。私の次にか？」

「・・・いえ・・・。教官と同じぐらいです」

「・・・ほう・・・。私と同じくらいか・・・。お前も変わったな」

「え？」

「ふっ。悪い意味ではない。いい意味でだ」

「・・・・・・」

「まあこんなところか・・・。前二人はあいつのISでの腕で、他三人はあいつのことか・・・。まああいつは確かに強いだろう。一組では最強クラスだし、他のクラスの代表と戦っても、勝つだろう」

と、織斑先生はビールを飲む。

「あいつは頭もいい。期末考査では上位に入っているし、ISの知識も豊富だ。だが、あいつはパニックになりやすい」

と言うと、シャルとラウラは「ああ・・・」と思った。

レイはいつも冷静で策士でもあるが、ある時になるとキャラが変わるほどにパニックになり、混乱することがある。（主に恥ずかしい時に遭遇した時）

ちなみに、ラウラが納得した理由は、ラウラが一夏を嫁宣言して、少し経ったときに、大浴場に入浴中にラウラが入ってきた。

その時にも、レイはキャラが変わるほどパニックになったらしい。

「・・・まあ、お前たちはどう思うかは勝手だが、あいつと付き合うのは難しいだろうな。せいぜい頑張れ」

そして、織斑先生は残ったビールを飲み干した・・・・・・

Story 14 その境界線の上に立ち（シン・レッド・ライン）前編（後書き

タグの通り、LBXも本編には出て、「ジライヤ」は後に重要な役割を持っています。

ちなみに、今回は古いギャグを入れてみた・・・。

Story 15 **その境界線の上に立ち（シン・レッド・ライン）** **後編**

そして、次の日……

「ふわあああ」

と、一夏は大きなあくびをして、旅館の通路を歩いていた。

そこは壁がない、吹き抜けの通路であり、朝日が差し、海風が気持ちいい。

「……ん？」

一夏が歩いていると、地面を凝視する箒の姿があった。

「どうしたんだ箒？」

「……」

箒は何も答えなかったが、その視線の先には……ウサギの耳？を模したものが地面から生えている感じであり。前に紙があり、「引っ張って下さい」と書かれていた。

「……なあ……。これってもしかして……」

「私は知らん」

と、箒は立ち上がると、そのままどこかにいった。

「・・・・・・・・・・」

と、一夏はしばらく考えていると・・・

「どうしましたの？」

と、セシリアが来た。

「・・・いや・・・。ちょっとな・・・」

と、一夏は通路を下りると、そのウサギの耳を掴み、そして強く引っ張った。

「うわぁ！」

一夏は強く引っ張ったので、その余った力で後ろに倒れた。

しかし、ウサギの耳の根元には、何もなかった。

「・・・・・・・・・・？」

すると、空から、物凄い勢いで落ちてきた。

そして、それが地面に衝突し、砂煙を上げた。

「うわぁぁぁ！」

「きゃあああ！」

二人はとっさに砂煙から目を庇った。

その落ちてきたものというのが・・・にんじんだった。

しかも、その形と言うのが、いわゆるイラストで描かれたにんじんだった。

「あっはっは！引っ掛かったね。いっくん！」

と、にんじんが縦に割れると、そこから笑いと共に現れたのは、天才科学者・・・篠ノ之束である。

「お、お久しぶりです・・・束さん」

「うんうん、おひさ。ところで、箒ちゃんはどこかな？」

「ええと・・・」

「まあ、私が開発したこの箒ちゃん探知機ですぐ見つかるから。じやあまた後でね！」

と、手には頭になっているウサギの耳と同じ形のダウジングロッドを振りながら、走っていった。

しかも異常に足が早く、一瞬で見えなくなった。

「い、一夏さん・・・今の方は？」

「・・・篠ノ之束・・・。箒の姉さんだ」

「えっ!？」

セシリアは、まさかの事を聞き、驚いた。

そして、合宿二日目は丸一日ISの訓練と、専用機持ちは各国から送られる追加装備をテストするのが目的である。

そうやって、俺達専用機持ちの面々は、崖で囲まれた海岸にいた。

他の生徒は別のところで訓練を行い、専用機持ちはこうして別の場所での装備のテストを行う。

でもって、織斑先生に、レイ、一夏、セシリア、鈴、シャル、ラウラ、そしてなぜか箒の姿があった。

「では、専用機持ちは全員揃ったな」

「ちょっと待ってください。箒は専用機を持っていませんよ」

と、鈴は当然疑問に思っていた。

「そ、それは・・・」

「それについては、私から説明しよう……。実は・・・」

「やつほおおおお!!」

と、どっかで聞いた声が響き、声がしたほうを見ると、崖を駆け下りる東の姿があった。

って、崖はほぼ垂直だっていうのに、駆け下りるって、ありえねえ・・・

「ちーちゃん! 会いたかったよ! さあ再会のしるしにハグしようよ。ぶへっ!」

と、東は織斑先生に飛び込んだが、織斑先生は空中で東の顔をアイアンクローの如く掴んだ。って、指がめり込んでいる・・・

「うるさいぞ東」

「うぬぬ、相変わらず容赦がないアイアンクローだね」

と、織斑先生のアイアンクローから東は逃れた。指がめり込んでいたのに逃れるとは、ただもんじゃないな。

そして、東は岩陰に隠れた箒を見つけた。

「やあやあ久しぶりだね。箒ちゃん」

「・・・お、お久しぶりです・・・」

やっぱ二人は仲が悪いんだな・・・。久しぶりの再会で反応が微妙・・・。

「見ない内に大きくなったね。特におっぱいとかが・・・」

ごんっ！

「・・・殴りますよ？」

と、箒は木刀で束の頭を叩きつけた。って、どこから出した！？

「うええん。殴ってから言ったあ！」

と、木刀で殴られて尚、ほぼ無傷とは、本当にありえねえ・・・。
血が大量に出るはずだが・・・

「束。自己紹介ぐらいしろ。生徒が困っているだろう」

「ええ・・・。めんどくさいな・・・。はろー。天才科学者、篠ノ之束だよ。ブイッブイッ」

「し、篠ノ之束って・・・」

「ISの開発者にして、天才科学者の！？」

と、シャル、ラウラは驚いた。そりゃ驚くな。

「ところで、あれは持ってきたのか」

「もっちゃん！では、みな上を見よ！」

と、束が空を指し、全員その先を見ると、空から物凄い勢いで落ちてくる物体があった。

そして、その物体は勢いよく落ちてきたにも関わらず、地面にはまったく変化はなく、衝撃波がない……。ってどうなってんだ？

形状は、銀色の角ばったもので、変わった形のコンテナという感じだ。

そして、それが開き、中から現れたのは……

「じゃじゃーん！これぞ箒ちゃんの専用機こと『紅椿』！全स्पેツクが現行のISを上回る、束さんお手製のISだよ！」

そこには、紅い色をした、ISがあった。

ISは束の言葉に反応してか、動作アームで外に出てきた。

「さあさあ！箒ちゃん。早速フィッティングを開始しようか」

「……では、お願いします」

と、箒が紅椿の前に来ると、装甲が展開し、操縦者を受け入れる形になり、乗りやすいようにひざを着いた。

そして、箒がISを装着すると、束は空中に投影型のディスプレイ

を出し、データ入力をした。・・・しかし、データ打ち込みの速さが物凄く早い・・・。

「箒ちゃんのデータはある程度先行して入れてあるけど、それに最新の数値に更新するからね」

と言いつつも、手の早さは変わっていない。

「は、早い・・・」

と、レイは手の早さに唖然とした。自分でもこんなに早くない。

「んー、ふ、ふ、ふふー♪箒ちゃん、また剣の腕前があがったねえ。筋肉の付き方を見ればわかるよ。やあやあ、お姉ちゃんは鼻が高いな」

「・・・・・・・・・・」

「えへへ、無視されちった。――はい、フィッティング終了。さすがは私、超早いね」

と、言いつつも、束はデータをすべて打ち込んだ。

「後は自動処理に任せればいいよ」

と言うと、束さんは、レイのほうを向いた。

「ちょっと遅いけど、久しぶりだね、レイ君」

「・・・・お、お久しぶりです・・・・」

と、レイは少し引き気味で答えた。

「ちょ、ちょっと!?! あんた、篠ノ之博士って知り合いなの!?!」

と、鈴は驚いて言うと、他のメンバーも驚いている。そりゃまあ驚くだろうな・・・。

「・・・知り合いじゃない。前に一回突然会っただけだ」

「まあそうだね。一回しか会ってないけど、私はとても印象に残っているよ」

(俺って・・・。印象に残ることなんかしたっけ?)

「ほう・・・。他人嫌いなお前が一回会っただけで印象に残るというと、相当印象強いことをしたんだな?」

と、織斑先生はいたずらの笑みを浮かべ、レイに聞いてきた。

「い、いえ! 自分はそんなことは・・・そんな・・・ことは・・・」

すると、あの時のことをはっきりと思い出したのか、レイの顔が見る見るうちに赤くなっていった。

「まあまあ。思春期の男の子にとっては、あれを受けたらとっても恥ずかしいよね」

と、東さんがそう言うと、女子人が詰め寄った。

「ちょっと！一体何があったのよ！」

「そ、そうですわ！教えてください！」

「何があったの！」

「何をしたのですか！隊長！」

「い、いや・俺は・・・その・・・ただ・・・あ、あの時は・・・」

レイは、どうやらさっき思い出したことによって、頭の中は混乱している様子・・・

「ちょ、ちょっと待ってくれ！」

と、レイは言うど、何回も深呼吸をして、気持ちを整えた。

「・・・あれは・・・三年前のことだ・・・俺が山で食材を採るために、山に登っていたときだ」

「それで？」

と、鈴はとも機嫌が悪く、刺々しかった。

「俺が登っている途中で、突然空から何かが落ちてきたんだ。それで、俺はそれに巻き込まれた」

「その後は？」

セシリアも鈴と同様な状態だった。

「それから、少しして気が付いたんだ。その時に、束さんと出会った」

「まあそこまでのいいとして、その後何があったのかな？」

と、シャルは笑顔のまま聞いてきたが、顔には血管マークが浮き上がっていた。

「・・・でも、それが・・・それが・・・」

すると、またレイの顔が赤くなり、口が止まった

「ちょっと！本当に何があったのよ！」

と、鈴は怒鳴ってきた。

「・・・気が付いたら・・・束さんの胸が・・・目の前にあった・・・」

「」「はぁ！？」「」

と、四人は霊に更に詰め寄った。

「こ、これ以上思い出さないでくれ・・・」

と、レイにはあまりにも恥ずかしい出来事だったらしい・・・

「まあ、あれはただの事故なんだよ。にんじんロケットが操作不能になって、そのまま山に激突し、その衝撃でロケットが開いて、私

はそのまま投げ出され、衝撃で気を失ったのよね。胸に何か当たっていたのは気を失う前に感じたんだけど……。気付いたら、レイ君を下敷きにしていたの」

と、東さんは恥ずかしいわけではなさそうだ。俺はめっちゃ恥ずかしいんだが……。

「そんなことがあったのか……。つくづくお前は迷惑なことが多いな」

「いやぁ……。あれは偶々。さすがにあれは悪いと思って、レイ君に深く謝って、そのまま退散したんだよ」

「……それで印象強く残るものかね……」

と、織斑先生は半分ため息名感じで息を吐いた。

「まあ、私は印象に残っているから……。まあ話はここまでにして、もう処理は完了したね。じゃあ箒ちゃん、紅椿を動かしてみてよ。思い通りに動くから」

「……………ええ。では試させてもらいます」

と、紅椿に繋がれていたケーブルが外されると、箒は目を閉じると、紅椿が物凄い勢いで飛翔した。

「うわぁ!?!」

一夏はその衝撃でたじろいだだが、上を見ると、箒がいた。

「どう？ 箒ちゃんが思っている以上に動くでしょう」

「え、ええ。まあ」

「じゃあ次は刀を使ってみてよ。右が『雨月』で、左が『空裂』だから」

と、束さんがいうと、箒は刀を抜き放った。

その刀身が、太陽の光で光り輝いた。

「・・・行くぞ・・・。雨月！」

と、雨月を振るうと、刀身からエネルギー刃が飛び出し、雲を切り裂いた。

「おお・・・」

箒も、この性能に驚いた。

「す、すごい・・・。あんなに威力が高いなんて・・・」

と、鈴は紅椿の性能に驚いた。

「そ、そうだな。かなり早いな」

「そりゃまあ、この束さんが作ったISだもん。あれくらいは当然なこと。・・・ところで、レイ君のISのデータを取らせてくれる？」

後で見たいから」

「え？・・・ま、まあいいですけど・・・」

「まあご心配なく。データは他に渡したりはしないから」

と、レイが心配することを東さんは先読みした。

「・・・で、では・・・」

と、レイは左腕にある待機状態のISを差し出した。

「それじゃあ・・・。とう！」

と、東さんは手にしていたコードのプラグを差し込むと、さっきのディスプレイを出し、データをコピーし始めた。

「はい、終わり。ありがとうねレイ君」

と、東さんはコードを抜くなり、無邪気な笑顔で言った。

「そ、それは・・・どういたしました・・・」

と、どうもレイは東さんだけは苦手であるようだ・・・

「た、たっ、大変です！お、お、織斑先生！」

と、レイはゆっくりと声がしたほうを向くと、そこには慌ててこっちに来る山田先生の姿があった。

しかし、その慌てっぷりは、尋常ではなかった。

「どうした？」

「こっ、こっ、これをつ！」

渡された小型の端末を見て、織斑先生の表情が曇った。

「特命任務レベルA、現時刻より対策をはじめられたし・・・」

そして、織斑先生はこっちを向いた。

「テストは中止！専用機持ちは全員集合しろ。織斑、オルコット、凰、デュノア、ボーデヴィツヒ、ラングレン、――それと篠ノ之も来い」

「はい！」

と、気合が入って返事したのは、一夏の隣に下りてきた箒だった。これで箒も専用機持ちになったというわけだ・・・

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

しかし、レイは危ない予感を感じていた・・・

「では、現在の状況を説明する」

ここは旅館の奥にある宴会用の大広間で、そこに専用機持ちの他、教師たちが集められていた。

照明が落された部屋は薄暗く、部屋の中央に大型の投影ディスプレイが浮かんでいた。

「二時間前、ハワイ沖で試験稼働中にあったアメリカ・イスラエルで共同開発した第三世代型の軍用IS『銀の福音』が制御下を離れて暴走。監視空域を離脱したという連絡を受けた」

「・・・・・・・・・・」

レイは説明を聞き、顔をしかめた。・・・ようやくレイは元の調子に戻った様子・・・

「その後、衛星による追跡の結果、福音はここから二キロ先の空域を通過することが分かった。時間にして五十分後。学園上層部からの通達により、我々がこの事態に対処することとなった」

そして、織斑先生は次のこう言った・・・

「教員は学園の訓練機を使用して空域及び海域の封鎖を行う。よって、本作戦の要は専用機持ちに担当してもらう」

・なるほど・・・つまり俺たち専用機持ちが福音と戦うってわけか・・・

「それでは作戦会議を行う、意見があるものは挙手せよ」

「はい」

早速手を挙げたのは、セシリアであった。

「目標のI Sの詳細なスペックデータを要求します」

「よからう。ただし、これは二ヶ国の最重要機密だ。もし情報が漏洩した場合、諸君には査問委員会による裁判と、最低でも二年の監視がつけられる」

「了解しました」

すると、専用機持ちと教員の前に、福音のスペックデータが表示された。

「広域殲滅を目的とした特殊射撃型・・・わたくしのI Sと同じく、オールレンジ攻撃を行えるようですね」

「攻撃と機動の両方を特化した機体ね。厄介だわ。しかもスペック上ではあたしの甲龍を上回ってるから、向こうのほうが有利・・・」

「この特殊武装が曲者って感じはするね。ちょうど本国からリヴァイブ用の防御パッケージが来てるけど、連続しての防御は難しい気がするよ」

「しかも、このデータでは格闘性能が未知数だ。持っているスキル

も分からん。偵察は行えないのですか？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

セシリア、鈴、シャル、ラウラは真剣の意見を交わしている。その最中、レイはデータをじっと見て、黙っていた。

「無理だな。この機体は現在も超音速飛行を続けている。最高速度は時速二四五〇キロを超えるとある。アプローチは一回が限界だろう」

「・・・一回きりのチャンス。それでは、一撃必殺の攻撃力を持った機体で当たるしかありませんね」

と、山田先生の言葉で、全員一夏のほうを向いた。

「え・・・・・・・・？」

「一夏、あんたの零落白夜で落すのよ」

「それしかありませんわね。ただ、問題は――――」

「どうやって一夏をそこまで運ぶか、だね。エネルギーは全部攻撃に使わないと難しいだろうから、移動をどうするか」

「しかも、目標に追いつける速度が出せるISでなければならない。超高感度ハイパーセンサーも必要だろう」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「ちよつ、ちよつと待ってくれ！俺が行くのか！？」

「「「「当然」」」」

五人の声が見事重なった。

「織斑、これは訓練ではない。実戦だ。もし覚悟がないなら、無理強いはいしない」

「————」。やります。俺がやって見せます」

「よし。それでは、作戦の具体的内容に入る。現在、この専用機持ちの中で最高速度が出せる機体はどれだ？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

すると、レイは静かに唸った。どうも悩んでいる感じだった。

「それなら、わたくしのブルー・ティアーズが。ちょうどイギリスから

強襲用高機動パッケージ『ストライク・ガンナー』が送られてきますし、超高感度ハイパーセンサーもついています」

「オルコット、超音速下での戦闘訓練時間は？」

「二〇時間です」

「ふむ……。それなら適任——」

「ちよつと待ったあ！」

と、天井の板は外し、そこから束さんが出てきた。

そして、そのまま降りると、織斑先生に駆け寄った。

「ちーちゃん、ちーちゃん。もっという作戦が私の頭の中にナウ・プリンティング！」

「出て行け、束」

「ここは断然。紅椿の出番なんだよ」

「なに？」

「これをご覧あれ！」

と、束さんが指を鳴らすと、周りにディスプレイが現れ、前にあった福音のスペックデータが、紅椿のデータに入れ替わった。

「紅椿の展開装甲を調整して……これでOK！」

（展開装甲？）

と、レイは聞いたことがない名前を聞き、首をかしげた。

「ここで説明しよう。展開装甲って言うのは、この私、束さんが作った第四世代型ISの装備なんだよ」

（第四世代！？）

今度は聞きなれない言葉を聞き、レイは首を更にかしげた。

「じゃあここで、東さん般説明をしましょう。まず、第一世代と言うのは『ISの完成』を目標にして、第二世代は『後付装備による多様化』で、第三世代は『操縦者のイメージ・インターフェイスを利用した特殊兵器の実装』……。で、第四世代と言うのが『パッケージ換装を必要としない万能機』という現在絶賛机上の空論中のもの」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

レイはまた静かに唸った。世界では第三世代の一号機が完成したばかりだと言うのに、それをすっ飛ばして第四世代って、どういうことだ？

「ちっちっちっ。東さんはそんじょそこらの天才じゃないんだよ。これくらいは三時のおやつ前なのさ」

（どういう意味やねん！）

と、レイは心の中で突っ込んだ。

「具体的には、白式の『雪片式型』にも、試験的に展開装甲が使われています」

「」「え！？」「」

さすがに、それを聞いて、一夏以外の専用機持ちは驚いた。ちなみに俺は黙ったままだ。

そうならば、白式も第四世代ということになる。

「それで、白式でうまくいったので、紅椿には全身に展開装甲を施しました」

「ちよっ、ちよっと、ちよっと待ってください！え？全身？全身が雪片式型と同じ！？それって……」

「うん。むちゃくちゃ強いね。一言で言えば最強だね」

と、織斑先生以外は黙ってしまった……

「はにゃ？あれ？何でみんななんでお通夜みたいな顔をしているの？変なの……」

いや、変などころの話ではない……。

多国が多額の資金、膨大な時間、優秀な人材を全てつぎ込んで競っている第三世代型ISの開発……。それが無意味なのだ……。

こんな……こんな馬鹿な話はない。

「……東、言っただろ。やりすぎるな、と」

「そうだった？えへへ、つつい熱中しちゃって……」

と、東さんはみんなが黙っている理由に気付いた様子……

「ああでもほら、紅椿はまだ完全体じゃないし、そんな顔をしないでよ、いっくん。いっくんが暗いと、東さんはいたずらしたくなっ

「ちやうよん」

と、一夏に向けウインクした。

「まー、あれだね。今の話は紅椿をフルスペックにしたらの話だからね。でもまあ今回の作戦をこなすくらいなら、夕食前ぐらいだよ」

（だからどういうことやねん！）

と、レイはまた心の中で突っ込んだ。

「それにしても、あれだね。海での事件と言うと、『白騎士事件』を思い出すね！」

（白騎士事件か・・・）

と、レイはその事件を思い出した・・・

『白騎士事件』・・・それを知らない人はいないだろう・・・

それは、十年前束さんがISを発表して一ヶ月が経った時である・・・。

各国のミサイル二三四一発がハッキングされ、制御不能になり、日本に向け発射された。

誰もが絶望に陥っていた時、救世主が現れた。

白き鎧を身に纏った女性が多数のミサイルの前に現れ、手にしていた剣の一振りで、二三四一発の半分を落し、離れているものには当

時はまだ試作型だった大型荷電粒子砲をいきなり空中に呼び出しては、ミサイルに向け砲撃し、結果は日本には一発たりともたどり着く前に、白騎士によってすべて落された。

そして、その白騎士の姿を捉えるために、条約無視で世界各国から偵察機が飛ばされた。

彼らの任務は「目標の分析。可能であれば捕獲。無理ならば撃滅」であった。

そして、その際に最新鋭の機体が投入されたと言う。・・・だが、まったく歯が立たなかった。

なぜならば、ISのエネルギーシールドで現行兵器では全くダメージが与えられない。

結果はISにはダメージはなく、その場に向かった戦闘機、軍艦は全て戦闘不能に陥り、白騎士は忽然と姿を消した・・・。

完璧なステルスで、レーダーにも、衛星からも、全く姿を捉えられなかった・・・。

そして、世界にISの凄さが伝わったのだ。その際に「ISは、ISでしか倒せない」と言う理論を、世界は認めた。いや、認めえざれないのだ・・・。

「でもまあ、白騎士って、結局誰だったんだろうね・・・」

「知らん」

「うーん。でもまあ、海の事故のほかに、暴走事故って言うと、『黒騎士事件』も思い出すね・・・」

「黒騎士事件？」

それは、全く聞いたことがない事件だった・・・。

「おい。それは最重要機密だぞ」

「まあ、そんなことは気にしない気にしない。どうせもう『存在しない』事件だから、教えてもいいよ」

「ど、どういう意味ですか？存在しない事件って・・・」

「うーん。じゃあ、レイ君やいっくんのために、特別に教えるよ・・・あれはねえ・・・」

そして、東さんは説明を入れた・・・

『黒騎士事件』・・・『白騎士事件』とは似て非なるそれは、『存在しない事件』とされた事件・・・

『白騎士事件』から、三年後のことである。

北アメリカのとあるIS研究所にて、その時までは史上初の無人稼動式のISが開発された。正式名称は今になっては知る術はないが、コードネームは『マスクタッシュマン』と呼ばれていたらしい。しかし、まだ当時は無人稼動式のISは、まだ小型ではなかったので、マスクタッシュマンは従来のISの二倍近くの大きさだったらしい。しかし、そのマスクタッシュマンが突然原因不明の暴走を起こし、研究所を破壊し、そのまま近くの米軍基地を破壊していったのだ。

無人稼働とはいえど、ISはISなので、軍はなす術がなく、ただ破壊を見ることができなかったのだ。再び白騎士が現れることを祈ったが、白騎士は現れることはなく、マスクタツシュマンの破壊活動は、続き、近くの町に向けられたのだった……。

その時、マスクタツシュマンの前に、新たな救世主が現れたのだ。黒き鎧をしたISが現れ、マスクタツシュマンと激闘を繰り広げた。黒騎士は、白騎士と同タイプの機体と思われがちだが、黒騎士は全く異なる姿である。黒騎士は、従来のISとは異なり『全身装甲』を施した機体で、いわば史上初の全身装甲搭載機でもあった。黒騎士は、その戦いの際に、『黒き亡霊』『赤き鋼鉄の孤狼』『白き堕天使』と呼ばれる三体のISを引き連れて、マスクタツシュマンと戦ったのだ。

そして、その戦いの結末は、黒騎士がマスクタツシュマンの駆動形を全て破壊し、機能停止にして、終わりを告げた。黒騎士もまた、白騎士と同じく、忽然と姿を消したのだ……。

それは、当時では、史上初のIS同士の戦いでもあったのだ……。その後、マスクタツシュマンは開発された場所でもある北アメリカのIS研究所に戻され、嚴重に地下深くに封印されたのだった。そして、それは極秘事項でもあるので、マスクタツシュマンに関するデータはすべて破棄され、この事件に関するデータも全て抹消されたのであった。こうして、『黒騎士事件』は、表に出ることなく、闇に葬られたのだった……。

今では、その事件を知っているのは、当時の関係者のみである……。

「まあ、こんなところだね……」

「そ、そんなことがあったんだ……」

と、レイは驚いた。史上初のIS同士の戦闘は、かなり最初期で行

われていたのだ・・・。

「・・・話を戻すぞ。・・・・・・・・束、紅椿の調整にはどのくらいかかる?」

「お、織斑先生!？」

と、驚いた声を上げたのは、セシリアであった。

専用機持ちの中で、高機動パッケージを持っているのは、自分だけだったので、作戦には当然自分が参加すると思っていたらしい。

「わ、わたくしとブルー・ティアーズなら必ず成功して見せますわ!」

「そのパッケージは量子変換してあるのか?」

「そ、それは・・・・・・・・まだですが・・・」

と、痛いところを突かれ、セシリアは小声になっていた。

「ちなみに、紅椿の調整は、七分あれば余裕だね」

「よし。では――」

「ちょっと待ってください」

と、さっきまで黙っていたレイが立ち上がった。

「・・・その作戦に。自分も加えて下さい」

「お前を？」

「はい」

「・・・だが、お前のISは紅椿のスピードに追いつくことは・・・」

「いや。追いつけるよ。ちーちゃん」

「なに？」

すると、束さんがまた指を鳴らした。

そして、紅椿のスペックデータを表示していた画面が、別のデータに入れ替わった。

それは、レイのIS・・・アーベントのデータであった。

「これは・・・？」

「あの後に、レイ君のISのデータを見てみたんだけど、そこで驚きの機能がありました」

「驚きの機能？」

と、一夏は疑問に思った。

「それは、レイ君のISにも、一部ながら展開装甲が使われていたことが判明しました」

「「「「え!?!」」」」」

と、専用機持ちは俺以外は驚いた。

「ってことは、レイのISも第四世代なんですか？」

「いや。違うよ、いっくん。レイ君のISに使われている展開装甲は、私がまだ開発途中だったころのものに、『あの人』が独自の技術で製作したものなんだよ」

「え? あの人って?」

「いい質問だね、いっくん。あの人とは、この天才束さんが唯一認める、同等、もしくはそれ以上の天才なのだ」

「ええ!?! 束さんより天才って、そんな人、聞いたことありませんよ……」

「そりゃそうだよ。だってあの方は表舞台に出たことがなく、影の人物だから」

「か、影の人物って……。それじゃまるで居るのかも分からないって感じじゃないですか」

「まあ、そう聞こえると思うけど、あの方は本当にいるよ。私その人と今でも話しているから」

「た、束さんと知り合いですか……」

「そうだよ。まあ話は逸れたけど、レイ君のアーベントの展開装甲は、機動に特化したものだから、紅椿よりも早いよ。いや、福音に追いつけるくらいはあるよ」

「ふ、福音に追いつけるって・・・」

「・・・そこまで聞ければいい。ならば、本作戦には、織斑、篠ノ之、ラングレンの三名で行う。開始は三十分後。各員準備にかかれ」そして、織斑先生が手を叩くと、教師陣はバックアップに必要な機材の設営をはじめた。

「・・・・・・」

ただ、レイは深く考えていた。

（東さんも『あの人』のことを言っていた・・・。ハーケンさんも『あの人』って言っていた。それにファントム、アーベント、ナハトも、それにハーケンさんから渡された『ジライヤ』も、あの人を作ったもの・・・。何者なんだ・・・『あの人』って・・・。どうして俺に・・・）

と、レイは深く悩むのだった・・・。

同時刻・・・北アメリカの中部・・・

黒いISが手にしていたブレード振り下ろし、前にいた機体を切り裂き、撃破した。

「・・・・・・・・・・」

そして、黒いISは、手にしていたブレードを、背中につけてある鞘に収納した。

黒い『全身装甲』に包まれたISで、背中にある赤いマントが風でなびいており、頭部には仮面のような白いパーツがあり、一箇所だけ十字に傷がついており、そこから光が出ていた。

見れば、周りにはさっき撃破した機体と同じタイプの機体の残骸が落ちていた。

「・・・やつらめ・・・。既に量産を始めていたとは・・・」

そして、耳に左手を当て、通信した。

「聞こえるか。ハーケン」

『聞こえますよ。マスター』

「ハーケン。以前頼んだ、IS学園を襲撃したISについて、何か分かったか？」

『僅かですが、何とか分かりました。どうやらやつらが製作した無人IS「プロトタイプ・エンペラー」のようです』

「・・・やはり、あのISか・・・」

『コアはどうやら未登録のものらしく、データバンクは破壊されていたので、僅かに取れたデータは断片的なものばかりです』

「そうか・・・。だが、僅かでも取れたのなら、十分だ」

『そうですか。しかし、銀の福音が先ほど暴走したとの情報を得ました』

「・・・銀の福音が・・・」

『どうしますか？一応IS学園の専用機持ちが対処することになったようですが・・・』

「・・・情報を集めろ。これはただの暴走事故とは思えんからな」

『了解。何か分かったら、連絡を入れます』

「頼む。俺はまだやる必要がある。だから後で通信を入れてくれ」

『OK。マスター』

そして、通信が切れた・・・

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

黒いISは、ただじっと立っていた。

（・・・・俺の罪は・・・・俺自身でけりをつけないといけない・・・・誰も巻き込むわけにはいかない・・・・）

そして、黒いISは地面を強く蹴り、空を猛スピードで飛んでいった・・・・

S t o r y 1 5 その境界線の上に立ち（シン・レッド・ライン）後編（後書き

篠ノ之束の性格が原作より柔らかいような……まあいつか。

Story 16 ゲット・レディ

時刻は十一時半……

一夏と箒とレイは、浜辺に居り、三人は一度目を合わせるとうなずいた。

「来い、白式」

「行くぞ、紅椿」

「アーベント」

そして、三人は光に包まれ、ISアーマーを身に纏った。

「……じゃあ箒。よろしく頼む」

「本来なら私の上に男が乗るなど、プライドが許さないが今回は特別だぞ」

作戦の性質上、移動はすべて箒に任せてあり、一夏はその上に乗る形になる。

しかし、一夏とレイは、箒に不安を感じていた。

（専用機を持ってから、この感じなんだよな……。不安だ……）

（少し浮かれすぎだな……。何も起こらなければいいが……）

今回は訓練ではない。実戦だ。なにが起こるかはわからないのだ。

「大丈夫だ。お前はちゃんと運んでやる。大船に乗っているつもりでいろ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

とにかく、こんな感じなのだ。浮かれすぎて何か起こしそうで不安なのだ。

「浮かれすぎるなよ・・・」

と、レイは箒の隣に立った。

ちなみに、今回のアーベントの装備は、通常とは異なり、追加装備が施された仕様であった。

後ろ腰にスタビライザーのようなパーツがあり、全部で六基あり、先端には銃口の様な穴があった。

手にはいつものパルチザンランチャーではなく、右手にはランチャーの一部を省略した『オクスタンランチャー』で、左手にはランチャーを小型化し、連射性能を上げた『オクスタンライフル』を装備していた。

「そういえば、いつもと装備が違うな」

「ああ。今回は福音と万全に戦えるように、アーベントの後付装備『ドラグーン・ストライカー』を装備している。・・・が、今回はいきなりだったから、ビットの数は全部じゃないから、その補充

として、この二つの武器を選んだ」

「へえ・・・」

そして、一夏は箒の上に乗った。

『織斑、篠ノ之、ラングレン。聞こえるか?』

ISのオープンチャンネルで、織斑先生の声がして、三人は返事をした。

『今回の作戦の要は一撃必殺だ。短時間での決着を心がけろ』

「了解」

「了解しました」

「織斑先生。私は状況に応じて一夏のサポートを行えばよろしいのですか?」

『そうだ。だが、お前は専用機を使い始めて実戦経験は皆無だ。突然、なにかしらの問題が起きないとは限らん』

「了解しました。できる限りで支援を行います」

と、箒は冷静に言っているが、どうも喜色弾んでいて、浮ついた様子だった・・・。

『——織斑、ラングレン』

「は、はい」

「何でしょうか」

と、織斑先生はオープンチャンネルからプライベートチャンネルで声が届いて、二人はとっさに切り替えた。

『どうも篠ノ之は浮かれているな。あの状態ではなにかをし損じるやもしれん。いざと言うときはサポートを行え』

「分かりました。ちゃんと意識します」

『それでいい。それと、ラングレンは今回二人の援護を中心に戦闘を行え。織斑はエネルギーを全て攻撃に使うから、一つ一つの攻撃が脅威だ。それと、篠ノ之はあの状態だ。できるだけ二人の援護を行え』

「了解」

『頼むぞ』

それからまた織斑先生はオープンチャンネルに切り替えた。

『では、はじめ！』

———作戦、開始。

箒は一夏を乗せたまま、一気に三百メートルまで飛翔した。

同時にレイも、一気に飛び出した。

そのスピードと言うのが物凄い。紅椿のスピードは瞬間加速……いや、それ以上の速さで、アーベントもまたそれ以上の速さで、ものの数秒で目標高度五百メートルに達した。

「暫時衛星リンク確立……情報照合完了。目標の現在位置を確認。――、一夏、レイ、一気に行くぞ！」

「お、おう！」

「了解した！」

そして、紅椿と、アーベントは更に加速し、紅椿は脚部及び背部装甲が展開し、エネルギーを噴出した。

それと同時に、アーベントの背面テスラウイングが展開し、エネルギーの翼を形成した。

それにより、紅椿とアーベントは物凄いスピードになった。

いや、アーベントは紅椿を上回るスピードで、少しずつ距離が開いていった。

（あ、あれが、アーベントの本気なのか……。でも、一体どうやって……）

「見えたぞ、一夏！」

「!!」

そして、一夏は前を見ると、そこには、超音速で飛行する『銀の福音』がいた。

その名の通り、機体色は銀色で、姿は従来のISとは異なり、『全身装甲』による機体構成で、特に背中には自身の丈ほどある大きな翼があり、どうやらそれに大型スラスターと広域射撃武器を融合した複合システムだ。

「俺が先にやつに攻撃を掛ける。一夏はその直後に攻撃をかける！」

「分かった！」

「一気に飛ばすぞ！」

そして、アーベントが先に行き、あれから更にスピードを上げ、福音に向かっていき、その直後に箒はスラスターと展開装甲の出力を上げた。

「くっえ！」

そして、レイは右のランチャーのトリガーを引き、下の銃口からエネルギー弾が発射され、福音に向かっていった。

すると、福音はそこから反転し、攻撃を避けた。

「くっ……」

レイはそのままエネルギー弾を次々と発射した。

しかし、福音は次々と攻撃を避けていった。

「やるな……。だが……」

そして、アーベントの後ろから紅椿が飛んできて、一夏は『零落白夜』を発動し、そのまま瞬間加速をかけ、復員に向かって行った。

「うおおおおお!!」

そして、光の刃が福音に触れる瞬間……

「なっ!？」

すると、福音はその場から一回転し、刃をすれすれで避けた。

「くそっ!あの翼が急加速をしているのか!？」

「一夏!離れろ!」

すると、後方からレイが叫び、両手のランチャー、ライフルで攻撃をかけた。

両方とも下の銃口から発射されるエネルギー弾で、ライフルのほうが多く連射していた。

一夏はとっさに横に動いたが、福音は攻撃を全て回避した。

「くっ。早い……。ならば、ビット!」

すると、アーベントの後ろ腰のスタビライザーが飛び出し、そのままアーベントの上に扇状に六基展開した。

「一斉射撃！」

そして、ビットからエネルギー弾が発射され、同時にランチャーで砲撃をかけた。

福音は翼による急加速で次々と避けていった。

「箒！援護を頼む！」

「任せろ！」

一夏は長引けば不利になると思い、福音に向かって行った。

「くっ！このっ……っ！」

一夏は福音に雪片式型を振るうが、福音は紙一重で回避していった。

それはまるで泳いでいるようで、踊っているように見える。

後方ではレイが福音の動きを鈍らせようと、攻撃をかけているが、福音は全く鈍る様子を見せない。

すると、福音は、スラスターの一部を翼のように展開した。

（しまった！こいつは——）

展開したその下には、砲口が現れた。

そして、そこから光の弾が発射された。

それは高密度に圧縮されたエネルギーで、ちょうど羽の形をしたそれが、数発発射され、一夏の白式に一発が突き刺さった。

「ぐう!?!」

その直後、突き刺さった羽が爆発した。

一夏は爆発の衝撃で、顔を引きつつたが、それから福音から次々と光の羽が発射され、一夏はとっさに回避した。

そのときに、レイは向かってくる光の翼を次々とランチャーとライフルとビットで落としていった。

（くそ……。何て連射性能だよ・・・）

福音からは、光の翼が発射されているが、その連射速度が早く、更に弾の数が多い。

狙いはそれほど正確ではないが、あれだけの連射速度と数だ。しかも威力が高いと、かなりの脅威だった。

「箒、左右から攻める。左は任せたぞ!」

「了解した!」

「レイは俺たちの援護を頼む!」

「分かった!」

そして、一夏と箒は回避しながら左右から福音に向かっていき、レイは後方で福音から発射される光の羽を撃ち落していった。

一夏と箒は福音に次々と攻撃をかけるが、福音にかすりもしない。背中の翼の特殊スラスタの性能の高さは以上だった。

「一夏！私が動きを止める！！」

「分かった！」

「レイ！援護を頼む！」

「任せろ！」

そして、箒とレイは福音に向かって行った。

福音は翼から光の羽を発射したが、箒は二刀流で次々と切り落とす。レイはランチャーと連動してビットを掃射し、光の羽を撃ち落していった。

「はああああ！！」

そして、箒は紅椿の機動力と展開装甲による自由自在の動きで、福音に迫っていき、腕部の展開装甲を併用しながら、ブレードで福音に攻撃をかけていった。

これには福音も防御を行った。

「隙ができたな！」

そして、箒の後ろから、アーベントが飛び出し、ランチャーの上の銃口から実体弾が発射され、福音のエネルギーシールドを突き抜け、装甲に突き刺さった。

直後、弾が爆発し、福音はバランスを崩した。

「La・・・・・・・・！」

すると、甲高いマシンボイスが鳴り、その直後、翼の装甲がすべて開いた。その数三六。しかも全方位に向け一斉発射された。

「やるなっ・・・・・・・・！だが、押し切る！！」

箒はそのまま多数飛んでくる光の羽を紙一重でかわし、迫撃をかける。

その間にレイはライフルのエネルギー弾連射とビットで光の羽を落としていった。

しかし、その一斉射撃で・・・・隙はできた。

「！！」

しかし、一夏は福音と真逆の方向に行き直下海面へと全速力で向かって行った。

「一夏！？」

「うおおおっ！」

瞬間加速によって、海面に向かっていったひとつの光の羽を切り消すことができた。

「なにをしている！？せっかくのチャンスに……………」

「船がいるんだ！」

「!?!」

レイはとっさに一夏の後ろを見ると、確かに一隻の船がいた。

それを調べるとモニターに『アンノウン』と出た。

「ちっ……。密漁船か！」

と、レイはとっさに一夏の前に行き、福音に向け砲撃を行い、牽制した。

「今はそんなところではないだろう！」

「でも、見殺しにはできない！」

すると、雪片式型のエネルギー刃が消えていき、展開装甲が閉じた。エネルギー切れだ。作戦の要であり、切り札が無くなった。

「馬鹿者！犯罪者なんてかばって……………。そんなやつらは———
！」

「箒!?!」

「ッ————!?!」

「!?!」

ほんの一瞬、ここにいる三人は、意識の中にいた。

ISの感応現象か・・・それとも何なのか・・・。

「箒そんな———そんな寂しいことは言うなよ。力を手にしたら、弱いやつのが見えなくなるなんて・・・どうしたんだよ、箒。らしくない。全然らしくないぜ」

「・・・・・・・・・・」

そして一瞬は過ぎた・・・。

「わ、私、は・・・・・・・・」

明らかに動揺をその顔に浮かべ、それを隠すように両手で覆った。その時に手放した刀が粒子となって消えたのを見て、二人はぎくりとした。

「まずい・・・・・・・・。リミット・ダウンだ!」

と、レイの声には焦りが見えた。

具現維持限界・・・つまりはエネルギー切れだ。ここはIS学園のアリーナではない。実戦だ」

「箒いいい!!」

一夏は刀を捨て、一直線に箒の元に向かっていく。最後のエネルギーを使つての瞬間移動。

すると、福音は再び一斉射撃モードに入り、今度は箒に狙いを絞っていた。

(頼む白式!・・・頼むっ!)

そして、福音が光の羽を発射するのが目に入り、次の瞬間に両者の間に入った。

「ぐああああっ!!」

一夏は箒を抱きしめると、背中に光の羽が次々と直撃し、爆ぜた。

「・・・・・・・・」

一夏は何とか箒の顔を見て、無事であることを確認して、そのまま気を失うが、最後に箒の頭を守るように抱きしめる。

「一夏っ、一夏っ、一夏あっ!!」

そして、二人はそのまま海へと落ちていった。

「・・・くそおっ!!」

レイは瞬間加速をかけ、異常なまでのスピードで福音の目の前に来ると、ランチャーとライフルを福音の腹に突きつけた。

「この距離なら、シールドは張れまい!!」

そして、そのまま連続で零距离射撃を行い、爆発を起こした。

その直前に後ろに下がるとレイはビットで攻撃をかけた。

「・・・どうだ・・・」

しかし、直後に福音は煙の中から飛び出してきた。

「なにっ!?!」

そして、手からエネルギー刃を出し、ランチャーとライフルを同時に切り落とした。

「くっ!!」

レイはとっさに武器を捨てると直後に爆発した。

煙によって、視界をさえぎられ、その直後に福音は煙を突き抜け、アーベントを蹴り飛ばした。

「ぐわあっ!?!」

それによって、レイはバランスを崩し、落ちていくが、とっさに体勢を立て直した。

しかし、もうその時には福音の姿はなかった。

「くう……。逃げられた……。」

と、レイは拳を握った。

「……。だが、それよりも……」

レイはとっさに一夏と箒が墜落した海面に向かった。

「……。……」

どうやら二人は近くにいた密漁船に引き上げられていた。

そして、レイはその密漁船に近付いた。

「仲間を引き上げてくれるのは感謝する……。だが……。」

と、レイは左腕のビームガンで密漁船の船員に向けると、船員は両手をとっさに挙げた。

「……。ここからさっさと立ち去れ！ そうすれば見逃してやる！」

そして、レイは二人を抱えると、そのまま高度を上げた。

そうして、密漁船はそのまま海域から出て行った。

「ファントム、ナハト、展開」

そして、アーベントの隣に、光が現れ、ファントムとナハトが現れた。

「頼む・・・」

そして、ファントムに一夏を持たせ、ナハトに箒を持たせ、旅館がある方向へと進んでいった。

レイは右手にイクゼキューショナーを展開した。

「ファントム。メデイカルチェックだ」

すると、ファントムは移動しながら、バイザーから光を出し、一夏の体を調べた。

「・・・・・・・・」

レイは診断結果を見て、そこから更にスピードを上げ、急いで向かって行った・・・

そして、時間は過ぎて、四時前・・・

「・・・・・・・・・・」

箒は、あれから一向に目を覚ます気配すらない一夏を見ていた。

髪を結んでいたリボンは一夏が庇った時に起きた火で、焼き切れて、髪は垂れ下がっていた。

（私のせいだ・・・・・・・・。私がしっかりしないから、一夏がこんな目に――！！）

そして、箒はスカートを握り閉める・・・。

『作戦は失敗だ。以後、状況に変化があれば招集する。それまで各自待機しろ』

レイによって連れて行かれ、浜辺について最初にそれだった・・・。

その時の箒にとっては、責められるよりも一層辛かった。

（私は・・・どうして、いつも・・・）

いつも力を手に入れると流されてしまう。

使いたくてしょうがない・・・。

わき起こる暴力への衝動を、どうしてか抑えられない瞬間がある。

（何のために修行をして――）

箒は、自分はあれから何も変わっていない……。そう感じた。

——枷。

自らの暴力を抑える、抑止力。

だが、それは非常に危うい境界線だと思い知る……。

薄い氷の如く、すぐに破れてしまう……。

（私はもう……。ISを……）

一つの決心をつけようとしたら、後ろのドアが開く音がした。

箒は振り向く気力すらなかった……。

「……まだそんなことをしているのか……」

声の主は、レイだった。

「……………」

箒は答えない……。答えることができなかった。

一夏がこうなった一部始終を見ているからだ。

「そうやって自分を責めてばかりで、それでいいのか？」

そして、レイは箒の近くまで来た。

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・一夏がこうなったのは自分の責任……。だから落ち込んでいる……。か」

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・っ！箒！」

と、レイはうなだれている箒の胸ぐらを掴むと、無理やり立たせた。

「誰だって一夏がこうなったら悲しいさ！俺だって、あの時何もできなかったことを後悔しているさ！だがな、そうやって自分だけ不幸ぶってんじゃないぞ！」

と、レイは学園生活で、初めて怒りを露にした。・・・・そう、こうして怒りを面に出すのは・・・・

「今やるべきことは何だ！今！戦わないで、どうする！」

「わ、私・・・・・・・・は、もうISは・・・・・・・・使わない・・・・・・・・」

「っ！いい加減にしろ！」

と、レイは箒の頬を殴り、支えを失った箒はそのまま床に倒れた。

「甘ったれるな！・・・・・・・・そうやって逃げてばかりいるのか！・・・・それとも、お前は・・・・・・・・」

レイの瞳には、怒りの炎がこもっており、箒の瞳を直視した。

「戦う時に戦えない臆病者か！」

その言葉で、箒の心奥に闘志がついた……。

「ど……。どうしろと言うんだ！もう敵の居場所は分からない！戦えるなら、私だって戦う！」

と、自分の意思でようやく箒は立ち上がり、その姿を見て、レイは「ふう」と息を吹いた。

「ようやくやる気になったな」

「え？」

「場所ならすぐわかる」

と、レイは外へと向かっていく。

「ま、待て」

箒はその後を追った。

そして、外に出ると、セシリア、鈴、シャル、ラウラの姿があった。

「み、みんな……」

「ラウラ。場所は分かったか？」

「はい」

そして、ラウラはI Sアーマーを左腕だけ展開し、そこからモニターを出した。

「ここから三〇キロ離れた沖合上空にて目標を確認しました。ステルスモードに入っているようですが、どうやら光学迷彩は持っていないようです。衛星からの目視で発見しました」

それ聞き、レイの顔に微笑が浮かんだ。

「さすがだ。ラウラ」

「ありがとうございます。隊長」

と、レイはうなずくと鈴の方を向いた。

「鈴はどうだ？」

「もう甲龍の攻撃特化パッケージはインストール済みよ。セシリアとシャルロットはどうなの？」

「それなら、たった今完了しましたわ」

「準備オツケーだよ。いつでもいける」

「よし」とレイは確認すると、箒のほうを向いた。

「お前はどうする？」

「私は……私は――」

と、箒は拳を握り締めたが、それはさっきの後悔ではなく、決意の表れだった。

「戦う……戦って、勝つ！ 今度こそ、負けはしない！」

「ふっ。決まりだな」

と、レイは不敵に笑う。

「じゃあ作戦会議をする今度こそ勝つぞ」

「ああ！」

そして、専用機持ちは作戦会議のため、一旦レイの部屋に向かった。

「箒」

と、レイは箒を呼び止めた。

「なんだ、レイ」

「……さっきは、すまなかったな。思いっきり殴って……」

と、レイはさっき箒を殴ったことを謝った。

箒の右の頬は、赤く腫れていた。

「いや。いいんだ。おかげで目が覚めた」

「そうか……。それならよかった」

と、レイは一安心したかのように一息ついた。

「まあ、次は福音のリベンジ戦だが、熱くなりすぎるなよ」

「ああ。分かっているさ。もうあんなことにはなったりはしない」

「……それでいい」

そして、二人は部屋に向かった……

そして、時間は過ぎて、夜十時半……

海上二〇〇メートル。そこで静止していた『銀の福音』は胎児のよう
うにうずくまっていた。

膝を抱くように丸めた体を、守るかのように背中から伸びる翼で包み込んでいる。

そして、福音に向け、二つの銃口が狙いをつけ、火を噴いた。

弾丸は超音速で福音に向かって行き、福音の頭部と腹部に直撃し、爆発した。

福音はその衝撃で後ろに飛ばされ、前を見た。

そこには、それぞれ追加装備を施した専用機持ちが飛んでいた。

さっきの砲撃は、ラウラのシュヴァルツェア・レーゲン『パンツァー・カノーニア』の八〇口径レールカノン《ブリッツ》によるものと、アーベントの『超射程狙撃ライフル』と呼ばれる大口径の実弾狙撃ライフルによるものであった。

「先制攻撃はうまくいったな」

と、中央には、ナハトを纏ったレイが居た。

ナハトは、今回空中戦の能力を上げるために、両肩に大型の『テスラウイング』と、背中のブースターパックに『フレキシブルスラスタール』を装備し、右手には『F2Wキャノン』を装備していた。

その隣には、重装備を施したファントムが居た。

両肩には追加シールドをして、背中にはグランスラッシュリッパ―

と、その上にミサイルコンテナを搭載し、右手には『フォークラスターL』と呼ばれる四連装ロケットランチャーを持ち、左手には『M90マシンガン』を持っていた。

アーベントは、さっきよりも四基ビットが両肩に追加されていた。いや、これで『ドラグーン・ストライカー』を装備したアーベント本来の姿である。

「みんな。準備はいいな？」

「ああ」

「いいですわ」

「いつでもいけるよ」

「いつでもオツケーだよ」

「いつでもいいです」

「よし……。じゃあ、派手に行くぜ！」

そして、計八機のISによる、福音の討伐戦が開始された……。

Story 16 ゲット・レディ（後書き）

アーベントの追加装備のビツトは「00」の「ケルディムガンダム G N H W / R」のライフフルビツトがモデルです。

ナハトには「アルトアイゼン・リーゼ」の一部の装備をしている感じで、ファントムはオリジナルの装備ですが、武装は「ダンボール戦機」のものと、「スパロボOG」のものです。

Story 17 雪羅

(・・・ここは・・・?)

遠くから聞こえる波の音に誘われるがままに、一夏は浜辺を歩いていた・・・。

足を進めるたびに、白い砂浜がさく、さく、と音を立てる。

「――。――♪　♪」

ふと、歌声が聞こえた。

とてもきれいで、とても元気な、その歌声。

一夏はその声がするほうへ歩いていく。

さくさく。

さくさくと。

足下の砂が軽快に鳴る。

「ラ、ラ♪　ラララ♪」

そこに、少女はいた。

波打ち際、わずかにつま先を濡らしながら、その子は踊るように歌い、謡うように躍る。

そのたびに揺れる白い髪。輝き、眩いほどの白色。

それと同じワンピースが、風に撫でられて時折ふわりと膨らんでは舞った。

（ふむ……）

一夏はその子に声をかけようとはせず、近くにあった流木に腰をかけた。

結構前からあったのか、樹皮はすっかり剥げ落ち、色も真っ白になっていた。

そして、一夏はぼーっと少女を見つめた……

レイ達が福音と遭遇したことは、もう教師たちに知られていた。

「あの子達……！」

山田先生はモニターに映るレイ達を見た。

「やはり、しでかしたか……」

「命令違反です。すぐに呼び戻しましょう！」

「……もう遅い。やつらはやる気だろう……。しばらく様子を見る」

「織斑先生！？」

山田先生は織斑先生の言葉に驚いた。

そしてレイ達は福音と戦闘を開始していた。

ラウラは八〇口径レールカノンで、福音に砲撃を続け、その後方でセシリアが『大型BTレーザーライフル』で狙撃を行い、隣でアーベントがパルチザンランチャーを構え、狙撃と同時にライフルビットを五基展開し、砲撃を行っていた。

福音は自前の急加速で回避しているが、攻撃の多さに、いくつか攻撃が当たっていた。

『!?!』

福音は背中に攻撃を受け、バランスを崩しそうになり、体勢を立て直すと同時に後ろの方を向くと、レイがF2Wキャノンを構えていた。

それを見て、福音はレイに向かって行った。

「かかったな」

すると、ナハト後方から、シャルが飛び出し、アサルトライフルで攻撃をかけた。

これにはさすがに福音は回避しきれず、シャルが放った弾丸は全て直撃した。

『…………優先順位を変更。現空域からの離脱を最優先に』

福音は翼から光の羽を全方向に放ち、次の瞬間に全スラスタを開いて強行突破を図る。

「読み通りだ。今だ、箒！」

と、レイが叫ぶと、福音の目の前の海面が膨れ上がり、爆ぜた。

そこから、紅椿と、背中に乗った甲龍だった。

「離脱する前に叩き落す！」

箒はそこから福音に突撃し、鈴は紅椿から降りると、両肩の衝撃砲と、増設された二門の衝撃砲を展開し、一斉に福音に向け放った。

『!!!』

肉薄していた紅椿が瞬時に離脱し、その後ろから衝撃砲による弾丸が一斉に降り注ぐ。

しかし、衝撃砲の弾丸はいつもの見えない弾ではなく、赤い炎を纏っていた。しかも福音に劣らない弾雨。増幅された衝撃砲———言うなれば、熱殻拡散衝撃砲と呼ぶべきものだった。

「やりましたの!?!」

「———まだよ！」

福音はあれだけの衝撃砲を受けて尚、機能停止に至っていない。

『《銀の鐘》最大稼動———開始』

福音は両腕を左右にいったいに広げ、更に翼も外側に向ける。———刹那、眩いほどの光が爆ぜ、エネルギー弾の一斉射撃がはじまった。

「くっ!!！」

「箒! 僕の後ろに！」

シャルはシールドを展開し、箒はその後ろに行った。

レイも左腕のシールドを前に出し、エネルギー弾を防いだ。

「さすがに受け続けはきついな……。だが――」

すると、レイはなにを指示するかのように、右手を動かした。

その直後、福音の左側から、ステルスを解除し、福音に向かっていくファントムの姿があった。

福音ですらファントムのステルスには気付かなかった。

ファントムは右手にある『フォークラスターⅠ』を向け、トリガーを引くと四つある砲口からミサイルが一斉に発射された。

福音は素早く後退すると、翼からエネルギー弾を発射し、ミサイルを撃ち落した。

「それだけじゃないぜ！ファントム『超多弾頭ロケット』だ！」

「アタックファンクション！超多弾頭ロケット！」

すると、ファントムは両手の武器を収納し、次に展開したのは四角形の砲身を持つバズーカで、それを両手に持つと同時に発射した。同時に背中のミサイルコンテナのハッチを開き、ミサイルを一斉発射した。

ミサイルは迂回して、さっきのミサイルについていく。

そして最初のミサイルが破裂すると、中から四発のミサイルが出てきて、更に四発のミサイルが破裂し、そこから更に四発のミサイルが発射された。

物凄い数のミサイルが福音に向かって行き、福音は『銀の鐘』を一斉射撃モードにして、ミサイルを全て撃ち落した。

しかし・・・それによって隙ができた。

「お前を落すための攻撃じゃない・・・『囧』だ」

すると、福音の後方から甲龍が接近していた。

「でりゃあああ!!」

福音は気付いたが、もう遅かった。

鈴は双天牙月を振り下ろし、福音の右翼を切断した。

「どうだ!———ぐっ!?!」

しかし、片翼を失って尚、体勢を崩した福音はすぐに立て直し、鈴の左腕に回し蹴りを叩き込む。

それによって、鈴は吹き飛ばされ、海に墜ちた。

「どこを見ている!」

『!?!』

すると、異常なまでの加速で、レイが福音に懐に入った。

ナハトの『瞬間加速』である。従来のISを凌駕する加速性能だ。

「打ち貫く！」

そして、右腕の『リボルビングブレイカー』の杭を福音の腹部に叩きつけ、攻撃を三発叩き込む。

それによって、福音は一瞬動きを止め、後ろに若干下がった。

「うおりゃあっ!!」

その後に、ナハトは少し上がり、足を上げると、そのまま福音の頭にかかと落としを掛け、福音が体勢を崩した直後に右腕に回し蹴りを叩き込む。

「今だ、箒！」

「うおおおおっ!!」

体勢を完全に崩した福音に箒が向かって行き、刀で福音の左翼を切断した。

ついに両翼を失った福音は、そのまま海へと墜ちていった。

「はっ、はあっ、はあっ………!!」

「無事か!?!」

珍しく慌てた様子でラウラが寄ってきた。

箒は乱れた息をゆっくりと落ち着けていく。

「私は・・・大丈夫だ・・・。それより、福音は――」

「・・・いや・・・まだだ・・・」

「なに!?!」

すると、福音が墜ちた海面が膨らみ、爆ぜた。

福音は体から青い電流を放出し、海面は時間が止まったかのようにへこんでいた。

「これは・・・!?! 一体なにが起きているんだ・・・?」

「!?! まずい! これは―― 『第二形態移行』だ!」

ラウラが叫ぶと、福音は顔を上げる。

そこからは、紛れもない敵意が放たれていた。

『キアアアアアア!』

すると、獣のような咆哮を発し、ラウラに向かっていく。

「なにっ!?!」

あまりに早い動きにラウラの動きが鈍った。

「ラウラ！」

すると、レイがラウラの前に立ち、直後にラウラを左腕で後ろに飛ばした。

しかし、その直後にレイは横から誰かに押し飛ばされた。

「なっ!？」

そして、福音は、ナハトを押し飛ばしたファントムを掴んだ。

「ファントム!？」

すると、福音の切断された箇所から、エネルギーの翼が生えた。

そして、そのままファントムをエネルギーの翼で包み込み、そのままエネルギー弾雨を零距离で発射した。

「ファントムッ!!」

そして、ズタズタにされたファントムはそのまま海へと墜ちていった。

「くっ! 貴様っ!」

レイは左腕のチェーングンで攻撃したが、弾は弾かれた。

「なにっ!？」

すると、福音の胸部、腹部、頭部の装甲が弾け飛び、そこからエネルギーの翼が生えてきた。

そして、一瞬の動きで、シャルの懐に入った。

「なっ!?!」

そして、福音は右腕でシャルを殴り、エネルギー弾を発射した。

「うわああっ!!」

シャルはそのまま海へと落ちていった。

「シャル! お前ええっ!!」

レイは瞬間加速をかけ、福音に突撃した。

すると、福音はナハトの両手を掴んだ。

「なに!?!」

そして、背中の翼を広げ、発射体勢に入った。

「くっ!?!...ならば、お前も道連れだ!」

すると、レイは強引で腕を下ろし、両肩のクレイモアのハッチを開いた。

そして、両者は同時に発射し、弾が直撃した瞬間、大爆発を起こした。

「ぐわあああっ!！」

爆発の衝撃で、ナハトは海へと墜ちていった。

「隊長！」

ラウラはとっさにレイの元に向かう。

その間、福音は爆発の衝撃で少し後ろに下がるが、すぐに体勢を立て直した。

「な、何ですの!?! この性能・・・軍用とはいえ、あまりにも異常な――」

さっきの高機動による射撃を行おうと、セシリアが動いた瞬間、福音が眼前に迫る。

『瞬間加速』・・・しかも両手両足の計四箇所同時による爆発加速だ。

「くっ!？」

セシリアはとっさに下がろうとしたが、その直後に真横から蹴りが叩き込まれた。

そして、福音は両翼からの一斉射撃を行い、それを受けたセシリアは攻撃を受けながら、海に墜ちた。

「私の仲間を――よくも！」

箒は急加速をかけ、復員に向かっていき、アーベントも急加速をかけ、箒を援護した。

福音は箒の攻撃を避け、瞬間加速でアーベントに向かっていき、アーベントを蹴り上げた。

直後に上昇し、アーベントにかかと落としをかけ、アーベントは海に落ちていった。

「でりゃあああっ!!」

すると。箒は福音の後ろから急加速で突撃し、ブレードを切りつけた。

福音は急旋回し、箒に殴りかかったが、箒は展開装甲を用いたアクロバットな回避を行い、迫撃をかける。

だんだん福音は押されていく。

だが、福音が瞬間加速を掛け、箒の懐に入った。

「しまっ・・・!?!」

だが、その直後に福音の横腹に杭が叩きつけられた。

「・・・あれで落としたと・・・思うなよ・・・!」

直後、後方の弾倉から爆発の衝撃で、杭が三回叩き込まれ、福音は横に吹き飛ばされた。

「・・・！ レイ！」

それは、さつき海に墜ちたナハトであった。

しかし、ナハトはさっきの爆発で、クレイモアのハッチの一部が欠損。右サイドアーマーは爆発で欠損、左肩の『テスラウイング』も半分さっきの爆発で消し飛び、ナハトの顔も爆発で半分吹き飛んで、レイの顔が見え、その破片が当たったのか、レイの額から血が流れていた。

「だ、大丈夫か！？」

「ああ・・・」

すると、福音がナハトに向かっていくが、福音に攻撃が来て、とっさに回避した。

それは、装甲がボロボロの状態のファントムと、サポートを行うラウラであった。

ファントムの手には『イグゼキューショナー』を持って、福音に砲撃を掛けた。

『！』

福音はファントムに向かおうとするが、それを阻止するものが攻撃を掛けてきた。

それは、さつき海に墜ちたアーベントで、ライフルビットをすべて

展開していた。

『ッ！！』

福音は煩わしいかのように、アーベントに向けエネルギー弾を一斉発射した。

「アーベント！」

「アタックファンクション！フルビットバスター！！」

アーベントはライフルビットを機体周囲に配置し、ランチャーを構えるとそこから一斉射撃を行った。

放たれたビームの弾雨は福音の攻撃に劣らず、福音の攻撃を全て打ち抜いた。

『！？』

福音はさすがに驚いているようだ。

「うおおおお！」

そして、箒は急加速で福音に向かっていき、渾身の一撃を加えようとしていた。

キュウウン……

「なっ！ また、エネルギー切れだど！？————ぐあっ！」

その隙を逃さず、福音は箒の首を掴んだ。

「箒！」

レイは箒を助けようとしたが、福音は背中の翼を広げ、そこからエネルギー弾を発射し、レイ達を近寄せなかった。

「くっ！」

上空に居たナハトとアーベントは回避行動を取り、海面に居たファントムとラウラは回避に専念した。

「くっ！ これでは狙えない・・・！」

「くそっ・・・！ 箒・・・！」

ざあん、ざあん・・・

波の音を聞きながら、一夏は飽きずもせず少女を見ていた。

その歌声に、何か懐かしい気がする……

(あれ……?)

ふと、気がつく、少女は歌うのをやめ、空を見ていた。

一夏は気になり、少女の元に近寄った。

「どうかしたのか？」

声を掛けるが、少女は空を見上げたまま動かない。

「呼んでる……行かなきゃ」

「え？」

隣に視線をやると、少女の姿はなかった。

——あれ？

きよろきよろと周りを見るが、人影はなかった。ただ、波の音がするだけだった。

「うーん……」

一夏はそのまま戻ろうと振り返った……

「力を欲しますか……？」

「え・・・・・・・・」

一夏は急いで振り向くと、波の中——膝下まで海に沈めた女性が立っていた。

その姿は、白く輝く甲冑を身に纏った騎士さながらの格好だった。

大きな剣を自らの前に立て、その上に両手を預けている。

その顔は目を覆うガードに隠されて、下半分しか見えない。

「力を欲しますか・・・・・・・・？ 何のために・・・・・・・・」

「ん？ んー・・・・・・・・難しい事を訊くなあ」

ざあ、ざあん、と。

波だけが俺と女性の間にある。

「・・・・・・・・そうだな。友達を——いや、仲間を守るためかな」

「仲間を・・・・・・・・」

「仲間をな。なんていうか、世の中って結構戦わないといけないだろ？ 単純な腕力だけじゃなくて、色んなことでさ。そういうときに、ほら、不条理なことってあるだろう。道理のない暴力って結構多いぜ。そういうのから、できるだけ仲間を助けたいと思う。この世界で一緒に戦う——仲間を」

「そう・・・」

女性は静かに答えてうなずいた。

「だったら、行かなきゃね」

「えっ？」

また後ろ声をかけられ、振り向くと、白いワンピースの女の子が立っていた。

人懐っこい笑み。無邪気そうな顔で、じいっと一夏を見つめている。

「ほら、ね？」

女の子は一夏の手を取って、微笑みかける。

「ああ」

とうなずいた。

そして、変化が現れた・・・。

「・・・・はっ！」

一夏は目を覚ました。

すっかり部屋は暗くなっていた。

「・・・・そうだな・・・・行かないとな」

と、一夏は布団から起き上がると、窓のほうへ歩いていく。

そして、窓を開け、一夏はそこから飛び出した。

（来い！ 白式！）

そして、一夏は光に包まれ、ISアーマーを身に纏った。

新たなる力を得た・・・・白式の新しい姿を・・・・

そして、一気にスピードを上げ、仲間たちの元に飛んでいった・・・

「ぐっ、うつ・・・・・・！」

ぎりぎりと締め上げられ、圧迫された喉から苦しげな声が漏れる。

福音の手は硬く放棄の首を掴んで離さず、背中の翼からはさつきからエネルギー弾が発射し、レイ達を近づけなかった。

そして、頭部、胸部、腹部のエネルギーの羽が箒を包みだした。

（これまでか……。情けない……。・・・）

光の翼は光を増し、一斉射撃の秒読みが始まる中、箒の頭の中にはただ一つのことだけが浮かんでいた。

——会いたい。

——一夏に、会いたい。

——すぐに会いたい。今会いたい。

——ああ、ああ、会いたい。

「いち、か……。・・・」

知らず知らず、その口からは一夏の名前を呼ぶ声が出ていた。

「一夏……。・・・」

更に光を増す翼。箒は覚悟を決めてまぶたを閉じる。

イイイインッ……。・・・！！

『!?!?』

突然、福音は箒の首から手を離した。

いきなりの出来事で混乱した箒が瞳を開けたときには、福音が強力

な荷電粒子砲による狙撃で吹き飛ぶ福音の姿であった。

（な、何が起きて・・・）

戸惑う筈の耳に届いたのは、さっきから願い思っ止まない声だった。

「俺の仲間、誰一人としてやらせねえ！」

筈の視線の先には、白く、輝きを放つ機体がある。

「あ・・・あ、あっ・・・」

じわりと目尻に涙が浮かぶ。

わずかに潤んだ視線の先には、白式第二形態・雪羅を身に纏った一夏の姿だった。

その姿を、レイは見ていた。

「白式の第二形態・・・『雪羅』・・・」

レイは残ったナハトのマスクを外し、その名を言う。

「・・・ふっ・・・」

レイは笑みを浮かべると、リボルビングブレイカーの弾倉を展開し、

空薬莢を排出すると、予備カートリッジを入れ、弾倉を閉じる。

「行くぞ……。みんな」

「ええ」

「いつでも」

「いいよ」

「はい」

と、レイの周りに、セシリア、鈴、シャル、ラウラ、ファントム、アーベントが並んだ。

「ラストスパートだ！」

そして、レイ達は福音に向かっていく。

「一夏っ、一夏なのだな！？体は、傷はっ……………！」

「大丈夫だよ」

「よかつ……………よかった……………本当に……………」

「なんだよ、泣いているのか？」

「な、泣いてなどいないっ！」

ぐしぐしと目元をぬぐう箒に、一夏は優しく頭を撫でてやる。

「心配をかけたな。もう大丈夫だ」

「し、心配などっ……」

「……ちょうどよかったかもな。これ、やるよ」

「え………？」

一夏は手にしていたものを箒に渡す。

「り、リボン………？」

「誕生日、おめでとうな」

「あっ………」

七月七日。今日が箒の誕生日。

「それ、せっかくだし使えよ」

「あ、ああ………」

「じゃあ行ってくる。レイ達が止めてくれているからな」

見れば、レイ達は福音と戦闘を行っていた。

「再戦と行くか！」

そして、一夏は福音に向かって行った。

福音は瞬間加速でアーベントに向かっていくが、アーベントは先読みしたかのように、到着直前で急上昇した。

『!?!』

アーベントは福音を避けた後、パルチザンランチャーBモードで福音の背部に攻撃をかけた。

五発放たれた弾丸は福音に背中突き刺さり、直後に爆発を起こした。

そしてアーベントに振り向こうとしたら、目の前にはファントムが立っていた。

『!?!』

手には何も持っていないが、両腕の棒には電流が流れていた。

「ジェットファントム!!」

そして、両腕を福音の両肩に叩きつけ、直後に両方同時に衝撃を叩き込む。

福音は衝撃で後ろに飛ばされ、直後に背部に砲撃を受ける。

それは、陸地に下りたラウラのシュヴァレツェア・レーゲンによるものだった。

『ッ！！』

福音はラウラに向かおうとするが、その前を一夏とレイがさえぎった。

「「くらえっ！」」

二人は同時に攻撃を行った。

レイはリボルビングブレイカーを福音の腹部に叩きつけ、一夏は新装備の『雪羅』のクロームモードで福音の胸部を切りつける。

そして、レイはブレイカーを二発叩き込み、一夏は雪片式型で福音の装甲を斬る。

二つの攻撃で、福音は後ろに下がるが、その直後に背面に攻撃を受ける。

それは、セシリアの大型BTレーザーライフルと、シャルのアサルトライフルの砲撃だった。

『ゴアアアアアア！！！』

福音は煩わしいかのように叫び、翼から全方位にエネルギー弾を一斉発射した。

「そう何度もくらうかよ！」

すると、一夏は左腕の雪羅を変形させ、シールドモードにして、エネルギー弾を防いだ。

「ようやくこいつの出番だな」

そして、レイは左上を前に出すと、シールドを展開し、エネルギーフィールドをシールド表面に張り、その状態で瞬間加速を掛け福音の攻撃を防ぎながら向かって行く。

『!?!』

福音は一斉射撃による動きで、動きが遅れ、そのままエネルギーフィールドを張ったナハトの突進を受け、後ろに飛ばされる。

「いけえ！」

そして、鈴は両肩4門の衝撃砲を一斉に放ち、同時にアーベントがライフルビットの一斉射撃を行う。

その攻撃は体勢を崩した福音に全て直撃した。

「うおおおおお!!」

そして、一夏は雪片と雪羅からエネルギー刃を出し、福音に向かっ

ていく。

（一夏が駆けつけてくれた……）

それはもう、嬉しいを飛び越えていた。

心が躍動する。熱を持って、跳ねる。

そして戦う一夏の姿を見て、何よりも強く願う。

（私は、ともに戦いたい。あの背中を守りたい！）

強く、強く願う。

それに答えるかのように、紅椿の展開装甲から、赤い光と共に黄金の光が出てきた。

「これは……！？」

ハイパーセンサーには、エネルギーが回復するのが表示され、ワンオフ・アビリティー

『絢爛舞踏』発動。展開装甲とのエネルギーバイパス構築……完了。

「絢爛舞踏……。これが……。紅椿のワンオフ・アビリティー・

・・・」

そして、箒はさっき一夏に渡されたりボンを、髪に結び、気を引き締めた。

「行くぞ！紅椿！」

箒はすぐに一夏の元に向かう。

「くっ！」

一夏は福音から放たれるエネルギー弾の回避し、避け切れなかったエネルギー弾はレイがさっき使用した防御に特化した展開装甲によるエネルギーフィールドで防いでくれた。

——エネルギー残量二〇％。予測稼働時間、三分。

「くそっ！・・・このままじゃ・・・」

「一夏！俺がこのまま突っ込む。お前は後について来い！」

「だが、それじゃお前が・・・」

「一夏！」

「箒！？お前、ダメージは——」

「大丈夫だ！それよりも、これを受け取れ！」

そして、箒の——紅椿の手が白式に触れる。

「!?!?・・・これは・・・」

すると、白式のエネルギーが回復していく。

「行くぞ！一夏！」

「あ、ああ！みんな、いくぞ！」

「」「」「おうっ!!」「」「」

そして、全員福音に向かっていく。

『状況変化。最大攻撃を掛ける』

福音は全ての翼を広げ、エネルギー弾を一斉射撃した。

「アーベント！ファントム！」

「アタックファンクション！フルビットバスター!!」

「アタックファンクション！超多弾頭ロケット!!」

そして、アーベントはパルチザンランチャーを展開して、全ライフ
ルビットからエネルギー弾が発射され、ランチャーから強力なビ
ムが発射され、ファントムの両手にあるバズーカから多弾頭ロケッ
トが発射され、同時に背中中のミサイルを出し惜しみをせず全て放

た。

ビームの弾雨とミサイルの弾雨によって、福音にエネルギー弾は全て撃ち落した。

『!?!』

「今だ、ラウラ、セシリア! 狙い撃て!」

「了解です、隊長!」

「了解ですわ!」

そして、後方に居たラウラがレールカノンで福音に向け砲撃し、隣に居たセシリアが大型B Tレーザライフルで砲撃を行う。

ラウラの攻撃が福音の頭部に直撃し、セシリアの攻撃が福音の左脚部を撃ち抜き、破壊した。

「行くぞおおお!!」

そして、レイ、一夏、箒、鈴、シャルが突撃した。

『ッ!?!』

福音は左脚部を破壊されたことによって、動きが鈍っていた。

しかし、背中の翼からエネルギー弾を発射した。

だが、レイが前に出り、エネルギーフィールドを張ったシールドで

防いでエネルギー弾を蹴散らしていく。

そして、エネルギー弾がなくなると、後ろから鈴と箒とシャルが飛び出してきた。

『!?!』

「どりゃあああ!!」

鈴は双天牙月で福音の頭部を斬る。

「たああああ!!」

鈴が避けた直後に箒が急加速を掛け、二刀流で福音の頭部の翼を切断した。

「でりゃああああ!!」

箒が避けると、今度はシャルが突撃し、左腕のシールドをパージすると、グレー・スケールを出し、福音の胸部に杭を叩きつける。

『!?!』

そして、シャルはそのまま連続で六発すべてを叩き込み、得意の『高速切替』で、両手にショットガンを展開し、福音の頭部と胸部にすべて撃ち込んだ。

その衝撃で福音が下がり『ガアアアア!!』と叫び、腹部と胸部の翼を展開し、エネルギー弾を発射した。

「くッ！」

「うおおおおお！！！」

すると、その間にナハトが入り込み、シールドで防いだ。

「レイ！」

「やらせるかあっ！！！」

そして、レイはそのまま福音に突っ込んでいき、福音のエネルギー弾の弾雨が終わった。

「これでもくらえっ！」

そして、シールドを開くと、クレイモアが内蔵されていた。

『！？』

福音が気づいたときには、もうシールドは胸部の目の前だ。

「いけえっ！」

そして、シールドからクレイモアが一斉に発射され、福音の胸部にめり込んでいき、その直後に爆発し、福音はその衝撃で後ろに下がっていく。

「行くぞ！一夏！」

「おうっ！」

そして、レイと一夏は、福音に向かっていき、レイはブレイカーの杭を腹部に叩きつけ、一夏は零落白夜を発動し、巨大なビーム刃を出した雪片を福音の胸部に突き刺す。

「押し込め！ 白式！」

「ナハト！フルブースト！」

そして、二人はブースターを全開にし、福音を下のほうへ押しつけていく。

徐々にスピードが上がって行く内に、レイは福音の腹部に二発叩き込み、一夏は雪片を更にねじ込む。

「堪えろよ、一夏！」

「ああ！」

「行くぞ！ 必殺ファンクション！」

「アタックファンクション！スマッシュブレイカー！！！」

ブレイカーの弾倉が激しく回転して、火花を散らす。

「「うおおおおお！！！」」

そして、そのまま下の小島に向かっていき、物凄い勢いで小島の浜辺に衝突し、砂煙を上げる。

その瞬間にレイはブレイカーのトリガーを引き、その直後、福音に膨大な衝撃が叩きつけられ、その衝撃で砂煙が更に舞い上がった。

「うおおおお!!」

一夏は雪片を力いっぱいで押し込み、福音は左手で一夏の首を掴んだ。

「ぐっ！」

その指は一夏の喉笛に食い込む。

「しつこいんだよ! くそがあっ!!」

そして、さっきの衝撃で前に飛ばされたレイは福音の頭部にブレイカーの杭を叩きつけると杭は頭部に突き刺さり、最後の一発を叩き込むと同時に、一夏の雪片が深く刺さり込み、福音のバイザーの反対側に映るシールドエネルギーがゼロになり、福音の手が一夏の手から離れ、地面に倒れるとエネルギーの翼が消えた。

「はあ、はあっ・・・」

「・・・はあ、はあ・・・はあ・・・」

そして、レイはその場に膝を着き、一夏は雪片を福音から抜くと、雪片を砂浜に突き刺し、杖のようにして立った。

「はあ・・・はあ・・・。や、やったな・・・」

「・・・あ、ああ・・・」

そして、二人は互いにISの拳をつけた。

すると、少しして他のメンバーが来た。

「・・・や、やったぜ・・・みんな・・・」

と、一夏は左手を挙げ、ぐっとした。

同じく、レイも立ち上がって、右手でぐっとした。

他のメンバーのISは、かなり大きな損傷をして、特にひどいのはファントムで、装甲がズタズタで、バイザーに少しひびが入って、一部の装備が無くなっていた。

この中で損傷が薄いのは、ラウラであるが、物理シールドの左側が無くなっていた。

そのほかはアーマーが欠けていたり、一部の装備が破壊されているところだ。

「さあて、と・・・。旅館に帰るとするか・・・」

「・・・まあ、待っているのは織斑先生の説教だろうがな・・・」

「・・・ふっ・・・。そうだな」

「そうですわね・・・。一体何を言われるんでしょうか・・・」

「なんか・・・。帰りたくないな・・・」

「まあでも、こういうことは起こるってことは最初っから分かっていたからね」

「まあそうだな・・・。しかし、教官の説教はあまり受けたくないな・・・。」

「・・・ふっ。全くだな・・・。」

と、レイの言葉で、その場のみんなが笑った。

いつの間にか、夜は明けて、朝日が出て夕闇の朱色の空が広がっていた・・・。

S t o r y 17 雪羅（後書き）

最後の面はアニメの方を意識しています。

Story 18 君の名は（ユア・ネーム・イズ）

「作戦完了——と言いたところだが、お前たちは独自行動により重大な違反を犯した。帰ったらすぐに反省文の提出と懲罰用の特別トレーニングを用意してやるから、そのつもりでいろ」

「……はい」

福音と激闘を繰り広げ、傷つきながらも見事勝利を収めて帰還してみりゃ、これだよ……。勘弁してくれよ……

結果的に作戦は成功したんだから、結果オーライだと思うが、織斑先生にそれは通じないだろうな……

時間は朝日が昇ってしばらく経ち、朝だ。いわば合宿三日目である。

大広間で正座をさせられてもう三〇分は経つだろう……。正直足が痺れ始め、セシリアに関しては顔色が相当悪い……。本当に正座が苦手なんだな……

「あ、あの、織斑先生。もうそろそろその辺で……。け、けが人もいますし、ね？」

「ふん……」

怒り心頭の織斑先生に対して、山田先生はさっきから救急箱を持ってきたり、水分補給パックを持ってきたりと忙しい。

「で、では、一度休憩して診断しましょうか・・・」

と、山田先生はみんなに水分補給パックを配った。

「最初にラングレン君からしましょうか・・・」

「・・・いえ。最初は女子からいいですよ」

「し、しかし・・・。この中で一番怪我が多いのはラングレン君ですよ・・・」

と言うが、まあ実際のところ、俺の額からは血が流れており、今は血は固まっている。

「大丈夫ですよ・・・」

と、断りを入れる。

「そ、そうですか・・・」

と、山田先生は引き下がったが、まだいいような感じだった。

そして、レイは水分補給パックを飲む。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

すると、織斑先生はまだ睨んでいた。

「な、なんでしょうか・・・」

「・・・しかしまあ、よくやった。全員、よく無事に帰ってきたな」

「え、あ・・・」

すると、織斑先生は照れ隠しなのか、すぐに後ろを向いた。

「・・・・・・・・」

「そんじゃあ、俺たちは一旦外で待っているか・・・」

と、レイは立ち上がって、大広間を出て、一夏もその後を追った。

「・・・・・・・・」

そして、しばらくして女子陣が終わって、レイと一夏も手当てを受けて、レイは旅館の庭が見える通路の縁側に座っていた。

（しかし・・・。なぜファントムはあんなことをしたんだ・・・。
・）

レイが疑問に思うこと・・・。それは、俺が福音の攻撃からラウラを守ろうとした途端、ファントムは俺を押し出し、自身を犠牲にして、俺を助けた・・・。

あの時のファントムはAIで独自の判断で動くようになっていたがしかし、そんなことをきにしているのではない……

（あんなことは……一回も命令していないはずだが……）

ファントムには助けるように事前に命令はしていない。まして以前にそうやって命令した覚えもない……。そもそもレイのISのAIには、そうやって危険にさらされてまで俺を助けるようにはプログラムしていない……。

（それに……あの時……）

俺がファントムに飛ばされて、ファントムを見たとき、ファントムは俺の方を見ていた。

そして、福音の翼に包まれる寸前に、手を前に出していた。

（まるで……自分の意思で判断したかのように見える……）

レイは最近ファントムにどうも少し違和感を覚えていた……。

ファントムは俺が言ったことに答えるかのように、唸りのような音を上げたり、戦闘中にファントムが敵からの攻撃を自動で避けてくれたりと、まるで俺を守るかのような行動を取ることが多くなった。

（……でも、今そう思っても答えは出ない、か……）

そうして、レイは立ち上がって、部屋に戻った。

そして、時間は過ぎて、夜の七時半……

「ねえねえ、結局どうだったの？」

「……ダメ。機密事項だから……」

「ええ……けち……。じゃあラングレン君……」

「……俺に聞いても無駄だぞ」

夕食の時間で、一部の女子陣が俺とシャルに群がっていた。

女子陣が聞こうとしているのは、間違いなく福音との戦いのことである。

もちろん、これは二ヶ国の機密事項なので、他言無用だ。

まあ聞きやすいだろうか、シャルに聞いてきたが、それは無駄なことだ。シャルは専用機持ちの中で一番責任感が強い。

それでもって俺に聞いてくるのは同じ理由だろうが、俺はそこまでお人よしじゃない。

「聞いたら聞いたで、後で自分が困ることになるんだぞ」

「うっ……。そ、それは困るかなあ……」

「だから、もうこの話は終わり。もう何も答えない」

と、シャルがこの話を終わりにした。

「……………」

レイが黙っていると、横からシャルが声をかけてきた。

「そういえば、怪我は大丈夫なの？」

「ん？……ああ大丈夫だ」

「大丈夫って言っても……。僕たちの中で一番怪我がひどいのはレイなんだよ？」

と、シャルが心配するが、まあそうなるだろうな。

額には破片で切れた少し深い傷があったので、何針か縫い、今は頭に包帯を巻いている。その次に頬にヤケドがあって、その上にガーゼを張っている。そのほか、肋骨の何本かに薄いひびが入っている。どうもブースターのリミッターを解除したナハトの異常な瞬間加速は、ISのG緩和する能力でも全て吸収できないようで、しかもそれを無理に何回も行ったため、漏れたGによって結果的に肋骨に薄いひびが入ったみたいだ。

（今後自粛しないといけないな……。じゃないと体が持たんな・・）

と、今後気をつけるように思うのだった。

ちなみに、そのほかのメンバーに関しては、多少の怪我はあるものも、さほど深いものではない。

「まあでも、俺はあんまりなんともないぜ」

「うーん……。まあレイがそういうなら・・・」

と、シャルは引き下がるが、まだ言いたそうな顔だった。

（まあでも、みんな無事で何よりだな・・・）

そして、レイは御膳を食べていった。

しばらくして、レイは自分の部屋にいた。

「ふう・・・」

レイは机の前に腰をかけると、事前に冷蔵庫から取っていたサイダ

ーを開けて飲んだ。

「・・・くう・・・。やっぱり喉が渴いたときの炭酸飲料って・・・
いつもよりうまく感じるなあ・・・。」

と、親父くさいことを言っ、サイダーを飲む。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

そして、サイダーを机に置くと、そのまま何かを考える。

（・・・しかし・・・。何か謎だらけだな・・・。束さんはあんまり言わなかったし・・・）

それは、束さんが言っていた『あの人』のことであった。

ファントム、アーベント、ナハトを開発した人物で、ジライヤを作
って、ハーケンに届けさせたのもあの人・・・。

（あの人・・・。一体何者なんだろう・・・）

と、考えていると、ドアのノックが聞こえた。

「？」

・
レイは立ち上がって、ドアの方へ歩いていって、ドアを開けると・・・

「れ、レイ・・・」

そこには、シャルが居た。

「シャルか……。どうしたんだ？」

「え、ええと……。何か話がしたいなあって思って……」

「……そうか……。じゃあ入っていいぞ」

「じゃ、じゃあ、失礼します……」

と、おどおどして、シャルは部屋に入ってきた。

レイは冷蔵庫からウーロン茶が入ったペットボトルを出して、シャルに渡した。

「あ、ありがとう……」

と、レイは座ると、シャルはレイの近くに座る。

「それで、何を話すんだ？」

「……え、ええと……」

と、シャルは目をきよろきよろして、しばらくして……

「きよ、今日は……。大変だったね……」

「……そうだな。さすがにきつかったな」

「……あ、あの時は……。ありがとう……」

「ん？ 俺なにかしたっけ？」

「ほら、最終局面で福音の攻撃から僕を守ってくれたことだよ」

「ああそれか。どういたしまして」

それは、シャルが福音に総攻撃をかけた後、反撃が来たものもレイが間に入り庇ったのだ。

「もし、あの時レイが守ってくれなかったら、多分リヴァイブは強制解除されるところだったと思う」

「そうか・・・」

「本当にレイって、仲間思いなんだね」

「・・・そ、そうかな・・・」

「そうだよ。だって僕たちのために戦ってくれるから・・・」

シャルは一旦口を止めて、少しして・・・

「・・・戦ってくれるから・・・僕たちは無事で居られるんだよ？」

「・・・そうか・・・。仲間を守るのは当然だよ」

「・・・」

すると、シャルは顔を下げた。

「シャル・・・？」

「・・・レイ」

「どう・・・」

すると、シャルはレイにゆっくりと抱きつく。

「！？・・・しゃ、シャル・・・？」

レイの顔は一気に赤くなる・・・

「・・・これは、助けてくれたお礼だよ・・・」

シャルは耳元でささやいた。顔は見なくても、微笑んでいるのだろう。

「・・・シャル・・・」

レイもそれに答えるように、シャルの髪を優しく撫でる。

その頃……

「紅椿の稼働率は絢爛舞踏を含め四二パーセントかあ。まあ、こんなところかな？」

と、紅椿のデータを見る篠ノ之束。

「んー……ん、ん」

鼻歌を奏でながら、別のディスプレイを呼び出す。

それは白式の第二形態『雪羅』の戦闘映像である。

それを見ながら束は岬の柵に腰をかけた状態でぶらぶらと足を揺らす。

「はー。それにしても白式には驚くなあ。まさか操縦者の生体再生まで可能だなんて、あるで——」

「——まるで、『白騎士』のようだな。コアナンバー〇〇一にして初の実践投入機、お前が心血注いだ一番目の機体に、な」

と、森から音もなく、織斑先生が出てきた。

「やあ、ちーちゃん」

「おう」

お互い顔は見らず、束は足をぶらぶらし、千冬はその身を木に預ける。

「ところでちーちゃん、問題です。白騎士はどこに行ったんですし、うか？」

「……白式を『しろしき』を呼べば、それが答えなんだろう？」

「ぴんぽーん。さすがちーちゃん。白騎士を乗りこなしたただけはあ
るね」

かつて白騎士と呼ばれたものはコアを残し解体され、ISの開発に大きく貢献した。その後とある研究所襲撃事件で行方不明となっていたが、いつしか『白式』に組み込まれていた。

「それにしても、不思議だよねえ。あの機体のコアは分解前に初期化したのに、なんでだろうねー。私がしたから、確実にあのコアは初期化されたはずなんだけどね」

「不思議なこともあるものだな」

確かにそれについては、わからないというのが本当のところである。

「……そうだな。たとえば話をしよう」

「へえ、ちーちゃんが。珍しいねえ」

「例えば、とある天才が一人の男子の高校受験場所を意図的に間違わせることができる。そこで使われるISを、その時だけ動

けるようにする。そうすると、本来男が使えないはずのISが使える、ということになるな」

「ん〜？でも、それだと継続的に動かないよねえ」

「そうだな。お前は、そこまで長い間同じものに手を加えることはしないからな」

「えへへ。飽きるからね」

「……で、どうなんだ？とある天才」

「どうなんだろうねー。うふふ、実のところ、白式がどうして動くのか、私にもわからないんだよねえ。いっくんはIS開発に関わっていないはずなのにね」

「ふん……。まあいい。次のたとえ話だ」

「多いねえ」

「嬉しいだろう？」

「違いないね、と返して束は千冬の話に耳を傾ける。

「とある天才が、大事な妹を晴れ舞台でデビューさせたいと考える。そこで用意するのは専用機と、そしてどこかのISの暴走事件だ」

束は答えない。そして、千冬も言葉を続ける。

「暴走事件に際して、新型の高性能機を作戦に加える。そこで天才

の妹は華々しく専用機持ちとしてデビューというわけだ」

「へえ、不思議なたとえ話だねえ。凄い天才がいたものだね」

「ああ、凄い天才がいたものだ。かつて、十二カ国の軍事コンピューターを同時にハッキングするという歴史的な大事件を自作した、天才がな」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

東は答えない。

「さて、次の話とするか・・・」

「まだたとえ話はあるの？」

「いや、お前に聞きたいことだ。まじめに答えてもらう」

「へえ・・・」

「他人嫌いのお前が、ラングレンのことを忘れずにいられるとは到底思えないのだがな・・・」

「・・・えへへ。やっぱりちーちゃんには気付かれていたか・・・」

「・・・で、どうなんだ・・・。本当のところ・・・」

「・・・レイ君のことは、ずっと前から知っていたんだよ・・・。そう。レイ君が生まれた時から・・・」

「なに？」

「でも、直接会ったのは、あの話のときだよ。まああんな初対面になるのは予想外だったけど、そのおかげでレイ君は覚えてくれたしね・・・」

「・・・・・・・・・・」

「どうして私がレイ君が生まれた時から知っているのか・・・。それはね——」

「・・・お前が言う『あの人』と、なんらかの関係があるから、だろ？」

「さっすがちーちゃん」

「・・・それで、どういう関係なんだ？」

「・・・あの人は・・・・・・・・そう。・・・レイ君のお父さんなんだよ・・・」

「なんだと・・・？」

「それで、私が何でそれを知っているのかというと、彼とは幼馴染なんだよ」

「・・・なるほど・・・。お前の幼馴染だから、知っていてもおかしくはない・・・。だが、なぜそれを隠していた」

「ふふふ・・・。彼から、口止めされていたんだよ。彼は自身の存在

を知られるわけにはいかないからって・・・」

「・・・だから、レイと関係する情報はすべて破棄していたのか・・・」

「おや？何でそれを知っているのかな？」

「レイの保護者である健造殿から聞いたからだ」

「ああ。だから健造さんのところに預けたんだね」

「・・・・・・」

「話は戻すけど、彼が存在を隠さないといけなかった理由は、とある組織から逃げるためなんだよ」

「・・・例の組織にか？」

「ちーちゃんだったら、その組織を知っているはずだね・・・。彼がその組織に追われることになったのは、彼が考えたところの研究を得るためなんだよ」

「研究？」

「でも、ちーちゃんでも、その研究の詳細は言えないけど、その研究は人類の希望なんだよ」

「人類の・・・希望・・・？」

「でも、同時に人類の絶望でもある・・・。そんな危険な研究を彼

は行っていたの」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「それを知ったその組織はその研究を手に入れようと、彼を捕らえろうとしたの。でも彼は事前にそれを知り、そのまま彼の妻と逃げることを決めたの・・・・。でもそれは、生まれたばかりのレイ君を捨てることと同じ事だったんだよ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「でも、その奥さんも逃亡中に亡くなって、彼はただ一人、ずっと逃げていたの・・・・」

「・・・・・・・・そうか・・・・。その研究の中で、レイが持つISを開発した・・・・」

「そうだけど、前まではそういうことで開発したわけじゃない・・・・。彼は組織と戦うことを決意し、彼が昔開発した第一世代型のIS『黒き亡霊』『赤き鋼鉄の孤狼』『白き堕天使』を強化・改良を施した第三世代型IS『ゲシュペンスト・ファントム』『ヴァイスリッター・アーベント』『アルトアイゼン・ナハト』を使って、組織と戦おうとした・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「でも、そんなときに、突然彼はその三機をレイ君に渡した・・・・。理由は分からないけど、それから彼は一人で戦うことにした・・・・」

「それで、どうなったのだ」

「結局、一人で何もできず、彼が作り出した技術を組織に奪われた。でも、彼は研究データを渡さないために、事前にデータを入れたカプセルを一番安全なところに保管した」

「・・・・・・・・・・」

「場所は私にも分からない……。けど、彼はその後、身を潜めて、組織と戦う準備をしているの」

「・・・・・・・・今はどうなんだ」

「彼とはたまに連絡は取っているよ……。でも……………」

「・・・・・・・・・・」

「…………ここまでだね……。私が話せるのは……………」

「…………そうか。十分だ」

「そっか……………」

そして、束は夜空を見上げた。

「ねえ、ちーちゃん。今の世界は楽しい？」

「そこそこにな」

「そうなんだ」

岬に吹き上げる風が、一度強く唸りを上げた。

「――」

その風の中で、何かをつぶやいて・・・・・・・・・・束は消えた。

忽然と。突然と。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

千冬息を吐き出して、後頭部を押し付けるように木に寄りかかる。

同時刻・・・・・・・・

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

男性はさっきの場所から離れた別の岬にいた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

その視線の先には、木材でできた十字の墓があった。

それに、ペンダントが掛けられていた。

(・・・リイル・・・)

男性は妻の名を心の中で呼び、手にしていた花束を墓の根元に置く。

「・・・・・・・・」

男性はしばらく目を閉じ、目を開け、そのまま後ろを向き歩いていた。

歩く度に、首の掛けられた銀と黒の二つのメダルが当たり、チャリンツと鳴り響く・・・。

その後に、風が辺りに鳴る・・・。

・
・
・
　　そうして、臨海学校は終わり・・・IS学園は夏休みに入った・・・

S t o r y 1 8 君の名は（ユア・ネーム・イズ）（後書き）

次回から、原作四巻の夏休み編に入ります。
そこから様々な新展開があります。

設定その一

レイ・ラングレン (17歳)

どこにでも居る普通の男子だが、デパートの屋上から落ちた赤ん坊を助けるために飛び込み、その時に左腕の腕輪がISに変化して、それから男子でありながらISを使えるようになり、その現場を目撃した織斑先生と山田先生によって、IS学園に入学することになった本作の主人公。

二年前に起きた旅客機墜落事故の唯一の生存者で、その後に左腕に腕輪があったらしい。

いつも右目には眼帯をしており、人前では外すことはない。その下には、左目の黒い瞳とは異なり、金色の瞳を持っており、事故の後にはこうなり、なぜこうなったのかは当時の医者は原因は不明だと言い、未だに分かっていない。しかも、眼帯をしているにも関わらず、右側が見えているなど、謎の部分がある。

冷静で落ち着いた雰囲気を持ち、時より激しい性格を現したりするが、根は優しい性格であり、仲間思いであるが、時よりキャラが変わるほどに、パニック＋混乱になる意外な面がある。

自身が自覚するほどの不幸体質で、バイトをしていたときはバイト先が火事になったり、倒産したりと、店先で不幸をもたらしたり、IS学園に入ってから、自身に不幸が多発することは日常茶飯事だという。

一人称は『俺』だが、目の上の者に対しては『自分』としている。

ISにおける戦闘は、一年生内では最高クラスで、基本負けたことはない。(但し、一度負けそうになったことがある)

使用IS『ゲシュペンスト・ファントム』『ヴァイスリッター・アイベント』『アルトアイゼン・ナハト』待機状態…白い腕輪

小林健造 (76歳)

レイの保護者で、育て親である。年は結構いつているものも、時より見かけのよらない動きを見せる時がある。

斉藤組と呼ばれる暴力団に命を狙われているが、今はほとんどない。現在は怪我をして病院に入院中である。

楠部神夜 (16歳)

レイの幼馴染で、楠部家の令嬢である。年に似合わないスタイルの持ち主である。健造が神夜の父親とは長い付き合いなので、小学生の時から一緒に遊んでいるが、あんまり会う機会はなかったらしい。口癖は父親譲りで「○○極まりないです」。レイに対して若干好意を寄せているが、家のほうで忙しいので、会う機会がほとんどないので、中々言えないままである。

ハーケン・ブロウニング (23歳)

レイに体術や様々なことを教えた、師匠であり、兄貴分である。

若干ギザな幹事と思われ、けちなところがあると思われがちだが、根は優しい性格である。

ISに関する情報捜査員であり、日々世界中を飛び回っているので、レイと会うのは一年に一回あるかないかである。

謎の男性とはよくコンタクトを取っている。

謎の男性 （二十代くらい？）

篠ノ之束からは「あの人」と呼ばれ、ハーケンからは「マスター」と呼ばれている謎の男性。篠ノ之束とは幼馴染で、その技術力は同等、もしくはそれ以上の天才であるが、影の人物といわれ、表舞台に立ったことはない。その正体はレイの父親であり、同時にレイが使うISを開発した人物である。現在はとある組織に追われる身であるらしく、日々点々と動いている。

彼も男性でありながらISが使えるみたいだが・・・
使用IS『黒いIS』

IS『インフィニット・ストラトス』

レイのISの場合

本来ISは一つしか持てないが、レイの場合ISを三つ持っている。しかも、レイのISのステータスはそれぞれ違うが、三つで一つのISでもあるためシールドエネルギーは共通である。そして、ISには必要がないはずの「全身装甲」の使用を前提にした設計がされて、三機のISが開放されて、初めてそれぞれのISに搭載されているAIが使用可能になり、独自の判断で戦闘を行うことができるようになった。AIは戦闘を重ねるごとに経験値が溜まり、強敵と当たる度にAIは強くなっていく仕組みになっている。そして三つのISの共通アビリティとして「必殺ファンクション」があり、

一定時間戦闘をすることで使用可能となり、強力な攻撃を行うことができ、場合によっては連続で使用可能だが、その分機体に負荷が大きく、エネルギーの消耗も高い。さらに、一定の条件を満たすことで、新たに武器や装備が追加されるというシステムがあるが、機体それぞれにあるワンオフ・アビリティだけは未だに開放されていない。そんな解明できていない部分が多く、まだまだ調査中だと言う。

ちなみに、まだ試作段階だったころの第四世代型IS装備である「展開装甲」のプロトタイプをそれぞれの性能に特化したものを装備しているが、基本第三世代型のISである。

ゲシュペンスト・ファントム

レイが初めてISを起動させた最初の機体。基本性能はオーソドックスで、中量タイプ。レイはファントムを使用することが多いのか、他のISより動きが若干いい。基本的に「ファントム」と呼ばれることが多く、機体色は黒がメインである。機体に搭載されている武装は両腕にある「グランプラスマカッター」、二本で、それを鰐の後ろ同士を繋げることで「大剣モード」になる。「グランプラスマサイズ」は四本で、柄頭同士を繋げて使用できる投擲武装で、それらの武器に内蔵されている「プラズマステーク」と胸部のエネルギーカノン「ニュートロンブラスター」と背中に装着されている「グランショットガン」であり、追加武装として投擲武器「グランスラッシュリッパー」がグランショットガンの隣に装着された。展開装甲は搭載されているが、どこにあるかは今のところ不明。必殺ファンクションは基本格闘系が多い。

ストライク・パッケージ

ファントムに新たに追加された後付装備。格闘戦に特化した装備であるが、これを単体で使用したことはないため、どういう装備内容であるかはわかっていない。

ガンナー・パッケージ

ストライク・パッケージと同じく追加した後付装備。こちらは射撃戦に特化した装備であるが、これも単体では未使用であるため、装備内容は不明である。

特別装備その一

学年別トーナメントで使用した特別装備。

レイが「ストライク」「ガンナー」の両装備のパーツを合わせて作りだしたもので、両装備の特徴を持っている。両肩にシールドを装備し、背中にグランスラッシュリッパーの代わりに砲身が短いキャノン装備し、両足の側面にニードルミサイルを装備している。手持ち武器は新たに追加された装備を使用した。

特別装備その二

銀の福音の討伐戦時に装備した特別装備。装備内容はその一とほぼ同じだが、必殺ファンクシヨン「超多弾頭ロケット」の使用を前提にしており、キャノンの代わりにグランスラッシュリッパーを装備し、その上に大型のミサイルコンテナを搭載している。両肩にはその一で装備したシールドを装備している。福音と戦うことを想定してか、その一より装備は少ない。

ヴァイスリッター・アーベント

クラス対抗戦の代表を決める戦いで一定数値が溜まり、発動したレイの第二のIS。軽量タイプで射撃戦に特化した性能で、武装も射撃武器がほとんどだが、時より格闘武器を使用することがある。基本「アーベント」と呼ばれることが多い。レイが持つ三体のISのうち、機動力が高く、後付装備なしでも超音速で飛行可能。武装は自身の丈ほどある銃身を持つ「パルチザンランチャー」と、左腕に搭載されている「三連ビームガン」と、未使用だが「プラズマカタール」がある。機体色は白がメインで、各所にオレンジのラインがあることで、夕方の意味の「アーベント」と名がついている。展開装甲は機動力に特化したもので、背中の「テスラウイング」に搭載されており、展開時には黄色の半透明の翼を展開して、スピードは更に三倍向上する。ちなみに、この際だけ高性能の「G・キャンセラー」が発動し、ナハトのように「瞬間加速」時に起きる操縦者への負担はない。

ドラグーン・ストライカー

銀の福音戦で使用したアーベント専用の後付装備。後ろ腰に四基、両サイドアーマーに一基ずつ、両肩に二基ずつで、計十基のライフルビットを装備する。しかし、福音との最初の戦闘ではまだ不完全な状態だったので、ライフルビットは六基しかなかった。この装備をして初めて必殺ファンクション「フルビットバスター」が使用可能になり、その攻撃は福音の一斉射撃に劣らないものだという。装備品はライフルビットしかないので、基本と機動力は変わっていない。

アルトアイゼン・ナハト

クラス対抗戦に日に襲撃した「プロトタイプエンペラー」との戦闘中にて発動したレイの第三のIS。重量タイプで近接戦闘に特化したISで、武装はほとんど近接武器である。他の二機と比べると攻撃力が高く、装甲も従来のISを大きく上回る強度をほこり、突撃能力は高いが、その分他の二機より扱いが難しい。夜のように青いカラーリングなので「ナハト」とあり、基本的にそう呼ばれている。武装は本機最強の武器「リボルビングブレイカー」と、左腕に搭載されている「五連チェーングアン」と隠し武器として意味合いが強い「シールドクレイモア」と、両肩に搭載されているチタン製のベアリング弾を発射する「レイヤード・クレイモア」と、頭の額についている角（伊達や酔狂でこんな頭をしているわけではない）「ダライズ・ホーン」である。どれもISに内蔵されている武装だが、ブレイカーだけは予備カートリッジがあり、計十二回攻撃が行える。本機の「瞬間加速」は従来のISのものを凌駕する性能であり、一瞬で敵の懐に入れるが、その際に常に作動しているブースターのリミッターを解除するため、尋常じゃないスピードが出て、Gを緩和するISの働きを持つてもすべてのGを緩和できないため、操縦者には負担が起きる。必殺ファンクションは今のところ『スマッシュブレイカー』しかないが、模擬戦時ではそれは使用できないほどに、強力なものらしい。どうわけか、従来のISと比べると空中戦は不得意らしく、基本地面の上を走行している。展開装甲は防御に特化し、左腕のシールドに搭載され、展開すると、その間からエネルギーフィールドを発し、シールド表面に張る。展開したまま突進攻撃ができる。

ブースター・パッケージ

銀の福音の討伐戦時に使用したナハトの後付装備。両肩にはアーベントに搭載されている「テスラウイング」の改良型を両肩の側面に搭載し、背中に追加ブースター「フレキシブル・スラスター」を装備し、ナハトが苦手とする空中戦をマシにした装備。スラスターに関する性能は上がったものも「瞬間加速」時に起きる操縦者への負荷が大きくなったしまった。

その他のIS

プロトタイプエンペラー

クラス対抗戦当日にて襲撃をした無人IS。両腕には高出力のビームキャノンを搭載し、両手にビームバズーカを持っている砲撃戦に特化したIS。見かけによらず結構素早く、それを利用したカウンターを行うことがある。その戦闘で発動したナハトの必殺ファンクション「スマッシュブレイカー」で腹部に大きな風穴を開けられたにも関わらず、動くことができ、鈴に不意打ちを行おうとしたが、一夏に防止され、ナハトのブレイカーを頭部に撃ち込まれてようやく機能を停止した。頭部を破壊したためデータは消失し、修復不能までの損傷を受けたが、搭載されているコアは未登録のものが使われていた。

黒騎士

「白騎士事件」から三年後に起きた「黒騎士事件」にて姿を現した謎のIS。

「全身装甲」を施した機体構成で、その事件で暴走した「マスクタ

「ツシュマン」と激闘を繰り広げ、勝利をもたらした。現在では黒騎士の消息は当然分かっていない。ちなみに、謎の男性が使うISは、黒騎士と似たところがあるらしいが、関連性は不明。

黒き亡霊

黒騎士が引き連れていた第一世代型IS。機体に関するデータは残ってはいないが、謎の男性が開発したもので、後に「ゲシュペント・ファントム」へと強化・改良が施された。

赤き鋼鉄の孤狼

黒騎士が引き連れていた第一世代型IS。これもデータは残っていないが、黒き亡霊と同じく謎の男性が開発し、後に「アルトアイゼン・ナハト」へと強化・改良が施された。

白き墮天使

黒騎士が引き連れていた第一世代型IS。こちらもデータは残っていないが、後者二名と同じ謎の男性が開発し、後に「ヴァイスリッター・アーベント」に強化・改良が施された。

マスクタツシュマン

「黒騎士事件」にて暴走を起こした初の無人稼動IS。従来のIS

の二倍の大きさをほこり、性能は当時最強とまで言われた。しかし原因不明の暴走を起こし、近くの米軍基地を破壊し、町にまで被害を及ぼそうとしたが、黒騎士によって駆動系を破壊され、機能停止した。その後、とある研究所の地下深くに嚴重に封印され、機体に関するデータはすべて破棄された。

事件

旅客機墜落事件

今から二年前に起きた事故で、太平洋上を飛行中の旅客機が突然墜落した。墜落原因は不明で、この事故機体は粉々になりで数百人が死亡し、唯一の生存者はレイであり、このときにレイはISを手にしたと思われる。墜落原因は不明だが、最近になって「旅客機に何かが衝突して墜落した」という学者の仮説が生まれた。その根拠は旅客機の残骸の一部に何かが衝突した痕跡が見つかり、今も調査中であるという・・・

黒騎士事件

「白騎士事件」が起きて三年後。とあるIS研究所にて開発された「マスクタッシュマン」が原因不明の暴走を起こし、近くの米軍基地を破壊する事件が起きた。その最中に「黒騎士」と呼ばれるISが現れ、マスクタッシュマンを打ち倒す。その後、機密を守るため、

この事件で起きたすべてのことを記したデータはすべて破棄され、その痕跡も全て消され、その関係者にも絶対の機密事項として口止めされ、闇の中に葬られた。今では「存在しない事件」とされ、今では知るものはほとんどいない・・・。

Story 19 それぞれの休暇 『鈴編』

ここはIS学園……。今は夏休みに入っており、ほとんどの生徒は実家に帰省している中、俺……。レイ・ラングレンは学園内にある寮の自分の部屋にいた。

「はぁ……。暇だな……」

レイはパソコンを見ながら、愚痴る。

レイは家に帰ろうとしたが、どの道暇なのは変わらない。健造の見舞いは週に二回ほど行くが、もう二回行ったので、さらに暇だった。それに家の安全はまだない。

「……。……。……。……。……。」。――

そももって、今見ているのは自身のISのデータだった。

福音との戦いで大きく損傷したファントムも完全に修復された。

「しかし……。あれから更に武器が増えたな……」

データには、福音戦を経て武器や装備が増えていた。

「……。でも、なんか凄いのが混じっている気がするな……」

追加された武装の中には、物凄いものが入っていた。

「・・・・・・・・・・」

レイはパソコンの画面を閉じると、ベッドに寝転ぶ。

「はぁ・・・・・・・・。何か起こればいいな・・・・・・・・」

と思うと、ドアからノックが聞こえた。

そして、それが暇をなくすことになった・・・・・・・・

その頃・・・・・・・・

「たっただいまぁ！」

バンッ！と自室のドアを蹴り破るぐらいに開け、ルームメイトが目を丸くし、ちようどくわえていたポテトチップスがパキッとワンテンポ遅れて軽快な音を立てる。

「お、おかえり」

と、金髪碧眼のルームメイト、ティナ・ハミルトンは何事かと何度も瞬きをしている。

「ふ、ふっ、ふっふっふ……」

「え、あの、鈴？ ついに暑さでおかしくなった？」

「そうよねー」

鈴はベッドの飛び込むと、布団を抱きしめる。

「……な、なに？ 布団を絞殺する気？」

「そうよねー」

「鈴、適当に返事してるでしょ」

「そうよねー」

そうよねー。うふふふふ。

「……はぁ。もういいわ」

と、そのまま雑誌のほうへ目をやる。

（さてと、明日の準備をしないとね！）

鈴はハイテンションで明日の準備を行うのだった。

そもそも鈴がこんなに嬉しいわけは、明日一夏と出かける約束をしたからだ。

どこにかというと、今月にできたばかりのウォーターワールドというプール施設で、チケットを手に入れるのに苦労したそうだ。

「ふう。ようやく一段落ち着きました」

と、冷房が効いた職員室で山田先生は熱いお茶をすすっていた。

さっきまで、一学期で起きた様々なことをまとめていた。

そして、次のことに頭を悩まされていた。

それは、目の前にある三枚の書類で、それは生徒の個人票だが、そこに書かれている人物が問題だった。

織斑一夏、篠ノ之箒、レイ・ラングレン

この三人は『代表候補生でないのに専用機を持っている』という困った事態だ。

一夏なら特殊な事例として持つことが許されるが、箒に関してはまずいのだ。

しかも使用ISというのが篠ノ之博士のお手製……。しかも第四世代という未知の機体。各国は力づくでも手に入れようとするだろう。

レイに関しては、一夏と同じ理由があるが、もう一つとしては『三

つのISを持ち、謎の機体』とある。本来ISは一つしか持てないが、レイは三つ所持し、さらにIS自体が登録されていないものなのだ。つまり、レイ一人で戦力としては国家軍三つ分に相当する。

IS学園はどこの国に属さないが、各国の影響力を完全に遮断するのは難しい。

（まあ、そのあたりは考えないでおきましょう）

どうせ、考えたってどうしようもない。

（さて、残りの書類も一氣に終わらせましょうか・・・）

と、山田先生は書類の山に向き直り、一枚の書類を手にした。

はらり・・・

（はらり・・・？）

すると、一枚の書類が二つに分かれた・・・いや、元々二枚くっついていたようで、そこから剥がれ落ちたのだろう。

「ああ、びっくりしました。それにしても、一体なんの書類——」

すると、山田先生は書類を見た瞬間、ビシリと固まった。

「こ、こ、これは・・・」

そして、冷房が効いているはずの職員室で、山田先生の顔には冷や汗がぼろぼろと噴出していた。

「まずいですね……。これは非常にまずい……。」

山田先生はかなり動揺して、あたりをきよろきよろした。

そして翌日……

「ん？」

「あれ？」

ウォーターワールドのゲート前で、鈴は顔見知りの人物と出会った。

それはレイであった。

外に出かけるということで、私服姿である。

半袖の青系のチェック柄のシャツを着て、青いジーンズを穿いてい

る。

眼帯は相変わらず付けているが、私服姿で見るのは初めてだろう。

「よう鈴」

「う、うん？ レイ、こんにちは」

鈴は少し疑問に思うが、レイは普通にしている。

（何でレイがここにいるの？・・・誰かと来ているのかな・・・。
まあ私は一夏とだけど！）

と、笑いを堪えきれず、ニヤニヤとして鈴はゲート前で一夏を待つ。

・・・。。

・・・。。

・・・。。

・・・。。

（だあっ遅い！何やってんのよ、あいつは！）

と、地団駄を踏んでいると、レイがこっちをちらりと見た。

（あいつはここぞの時に遅れてくるんだから・・・）

そして、イライラして携帯電話を取り出すと、その瞬間に鳴り響く。

相手はもちろん一夏である。

「もしもし！？ あんた何してるのよ！ 今どこ！？」

「いま、学校だ」

「はあ！？」

「あー、いや、そのだな、なんか山田先生から言われてな、今日白式のもともとの開発室から研究員が来るんだと。それで、データ取りをしないといけないんだと。ほら、先月第二形態になったから、データを改めて欲しいんだとさ」

「・・・・・・・・なに？」

「えーと・・・・・・・・すまん。今日はいけそうにない」

「なあっ！？」

鈴の頭の中は恐らく真っ白になっただろう・・・。

「いや、あのな？ 本当は昨日連絡しようとしたんだ。でもお前、電話に出ないし、部屋に行ったら寝ているって言われたし、なあ？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

確かに昨日は今日に備えて八時に寝た。睡眠の邪魔が入らないように携帯電話の電源は切り、ティナには緊急時以外は起こさないで欲しいと言っていた。

(・・・って、ばかあああ！こ、こっ、これが、緊急時でしょうが！！)

「というわけでだ」

「はい」

思わず間拔けな返事が出た。

「レイにチケット渡したから、一緒に楽しんでくれ」

———はい？

「はい？レイ・・・って、え？ちよつと、何？」

「あれ？レイ、そこにいないか？ゲート前に居てくれって言ったんだが」

「—————」

「もし居ないなら——あ、はい。えっと、すぐにですか？」

電話の向こうで誰かに呼ばれたらしく、一夏は一旦鈴との会話を中断する。

「わりい、鈴。すぐに行かないといけなくなった。というわけだ、じゃあ」

ぶつっ。

無情にもそれが今の鈴にとっては大きく聞こえた。

「く、くっ、くっ……」

みしみしと携帯を握り締める鈴……。

「そういうわけだな……」

と、レイが後ろから来る。

「……知っていたんなら……な、何で教えなかったの……」

「……まあそんなに怒るなよ。とりあえず中に入って、説明で
もしよう」

「……」

鈴は何も言わなかったが、瞳には相当怒りがこもっていた。

「まあそんなところだな……」

レイと鈴はウォーターランド内にある喫茶店で話をしていた。

「あーそうですか……。で、何でレイは引き受けたのさ……」

と、ナプキンで折った飛行機を飛ばすが、案の定墜ちた。

「暇だったからだ……」

「……はぁ……。たったそれだけで……」

「まあ俺も最初は考えたんだが、相手が少なくともお前だったことで引き受けたんだ」

「……え……?」

「だって、知らない女子といっても面白くないだろ」

「……ああそうですね……」

鈴はだらだらとジュースを飲む。しかしどうも少しがっかりしたように見えたのは気のせいかな?

「それで、あんたはどうするの?」

「そうだな。俺は暇つぶしができればよかったが、お前がその状態じゃな……」

「……じゃあ帰ろうかな……」

「お前がそういうなら俺もそうしよう」

と、二人が席を立つと・・・

『では！本日のメインイベント！水上ペアタッグ障害物レースは午後一時より開始いたします！』

二人は興味なかったが・・・

『優勝商品はなんと沖縄五泊六日の旅をペアでご招待！』

それを聞いた瞬間、鈴の目がキラッと光った。

（これだ・・・！）

景品の沖縄旅行。今日のことをだしにすれば、一夏はいやでも断れない。そうと決まれば・・・

『ただし、参加できるペアはカップルだけ！参加希望があるペアはフロントまで来て下さい！』

「！！」

鈴はそれを聞き、驚愕したようだった・・・

（くう……。なんちゅう条件だ……。でも景品はほしい……）

鈴はそれからしゃがむとぶつぶつと独り言を言う。

（・・・一夏だったらよかったけど・・・で、でも相手はレイだし・・・ましなほうだし・・・もしこれが弾なら景品はあきらめるけど・・・だったら・・・！）

「・・・・・・・・・・」

レイは鈴の姿をしばらく見ていた。

「おい。鈴・・・？」

すると、鈴が素早く立ち上がるとレイの腕を掴み、建物の陰に素早く入る

「レイ！水上障害物レースに出るわよ！」

「・・・な、何？」

「聞こえなかったの。レースに出るわよ」

「で、出るって・・・。お前出れないだろ。彼氏いな・・・・・・・・」

「だから、あんたが私の彼氏のふりをしなさい！」

「・・・はぁ！？」

レイは結構驚いた様子・・・

「聞こえなかったの！？あんたが私の彼氏のふりをしなさい！」

「な、なんでだよ！」

「景品を手に入れるためよ！」

「・・・・・・・・」

レイはかなり呆れた様子・・・

「お、お願い・・・レイ」

と、鈴はうるうるとレイを見つめた。

「・・・・・・・・ぐつ……。・・・だぁ！分かったよ！ふりをすりゃいいんだろ！」

「・・・・・・・・ふっふっふ・・・・・・・・。よっしゃぁ！そうと決まればエントリーね。行くわよ！」

と、鈴は走っていき、レイは「はぁ・・・」とため息をつき、鈴の後についていく・・・。

「さあ！第一回ウォーターワールド水上ペアタッグ障害物レース、開催です！」

そうして、一時を回り、障害物レースが開催された。

「さあ、みなさん！参加者たちに今一度大きな拍手を！」

観客は参加者たちに向け拍手を送り、それに答えるように参加者たちは手を振る。

・・・ただ、その中で特にどういう反応をするでもないペアがいた。
——鈴とレイのペアだ。

「・・・・・・はあ・・・・・・。なんでこうなったんだ・・・・」

レイはため息をつきながらも、準備体操を行っていた。
水着は臨海学校で着たものと同じものである。

隣では鈴が念入りに準備体操をしていた。

「そういえば、臨海学校の頃より体が引き締まっていなにか」

「な、なによ。私はきちんとした生活を送っているからよ」

「そうかね。夜遊びをしているお前がねえ」

と、レイは聞かずとも分かったかのように言う。

「優勝商品は南国の楽園・沖縄五泊六日の旅！みなさん、がんばってください！」

鈴の狙いはこれだけだ。

（いくら唐変木の一夏でも、若い男女が二人で南国の島に行けば・・・）

くっくくくと笑いを漏らす鈴。

「では！再度ルールの説明です！この五〇×五〇メートルの巨大プール！その中央の島へと渡り、フラッグを取ったペアが優勝です！なお、コースはご覧の通り円を描くように中央の島へと続いています。その途中に設置された障害は、基本的にペアでなければ抜けられないようになっていきます！ペアの協力が必須な以上、二人の相性と信頼がためされるということですね！」

鈴とレイはアナウンスを聞きながら、コースの下見をしている。

中央の島というのがなかなか厄介で、空を浮いている。・・・・・いや、もちろん強力なワイヤーで宙づりになっているだけなのだが、問題はそこではない

（泳いで渡るのは無理ね。ショートカットは・・・・）

（できないな。近道ができないようになっているみたいだな。それにプールに落ちたら再度からやり直し、か）

乗り気でなかったレイはノリノリだった。

（だけど・・・）

（そういうのは・・・）

（（参加者が一般人なら））

二人は専用機持ちで、鈴に関しては代表候補生。その能力は旧世紀の一軍隊に匹敵する。

レイに関しては代表候補生ではないが、身体能力は高く、こういうところでは力を大いに発揮できる。

「さあ！ いよいよレース開始です！ 位置について、よくい・・・」

パアンッ！ と乾いた競技用のピストルが響き、二十四名十二組のカップルが一斉に駆け出す。

「レイ！」

「分かってる！」

開始直後足払いを掛けてきた隣のペアをジャンプでかわし、一番目の島に着地する。

このレースは、なんと『妨害OK』なのだ。しかし、二人にとってはぶっちゃけ有利なほうだ。

「行くわよ！」

「ああ！」

向かってきたペアをかわしながら、足を掛けた水面に落とし、二人

は走っていく。

しかし、それで問題が生じる。

なにせ最少年に近い二人がいきなり大立ち回りである。会場の注目を一転に集め、妨害も二人に集中する。

「ああもう！うっかしい！」

「くっ！」

次々と来る妨害組みを避けるものも、先行組みのグルがいるらしく、落とされては即復活し、妨害行動を繰り返す。

「でりゃあっ！」

「おりゃあっ！」

鈴は妨害組みの内一人の腕を持ち、背負い投げをして、レイも同時に背負い投げをして、二人を重ねると、その上を蹴ってジャンプし、二番目の島に到達する。

しかし、そこでも妨害組みがいた。

「くっ！・・・これじゃきりがない！」

「そうだな・・・だが、活路はある」

二番目の島は、全て直線状で、島表面には水がまかれている。つまり、表面はとてもすべりやすいので、慎重に歩かないとこける・・・

。

……だが、今の二人にとってはそれが有利な条件だった。

「じゃあ、あれで行くわよ！」

「ああ！」

と、二人はそこから一気に走り出し、そのまま両者の肩を組む。

妨害組みも二人の進行を阻止するために、陣形を立てていた。

……だがそれは、『突進を食い止めるための陣形』だった。

「今だ！」

そして、二人はその状態のまま水で濡れている地面に足から滑り込んだ。

その勢いはかなり凄い。

「「いけえええっ！」」

そして、その状態のまま、島表面を滑っていき、足元が無防備な妨害組みをボーリングのピンのように弾き飛ばしていく。

「行くわよ！」

「おう！」

そして、二人は足を前に出し、乾いている表面に足をかけ、それによるブレーキで体を起こすと、そのままジャンプし、目の前にいた妨害組み二人の頭を踏んだ。

「俺たちを踏み台にした!?!」

そして、そのまま二人は頭を蹴り、その反動で三番目の島に着地した。

「よっしゃあっ!」

「二丁上がり!」

そして、鈴とレイは走っていく。

「こ、これは凄い!二人は高校生のカップルですが、これほどまでに連携がいいとは!」

そして、鈴とレイは三番目の島をクリアし、四番目の島も難なくクリアし、最後の五番目に島に到達する。

「ここで決着を付けてやる!」

と、トップのペアが反転し、鈴とレイに向かってくる。

しかもどっちも筋肉もりもりだった。

『ちっ!最後の最後で厄介のが出るわね!』

『ああそうだな・・・』

しかし、二人の顔にはあせりの色は浮かんではない。

『鈴。俺が事前に言ったあれでいくぞ』

『そ、それしかないみたいね』

二人はISのプライベート・チャンネルで会話し、向かっていく。

そして、トップのペアが目の前に来る直前で、レイは飛び込み、同時に鈴はジャンプすると、そのままレイの背中の上に立つと、その瞬間に鈴は再度ジャンプする。

「「なにっ!？」」

相手から見れば、飛び込んで宙を浮くレイの背中に鈴がジャンプして飛び乗って、その状態で鈴が再びジャンプして、通常より高いジャンプが決まった。

身軽な鈴はそのままトップのペアを飛び越え、それに目を奪われたトップのペアは両腕を大きく広げて飛び込んでくるレイによって、ラリアットの感じで足を払われ、そのままペア押し倒して、レイは一回転して着地すると同時に鈴はレイの目の前に着地した。

「おおおおお!!」と観客席から歓声上がる。

「ゴールは目前!」

そして、鈴がフラッグを手にする。

だが、その時である！

突然上空から何かがプールに落ちてきた。

「わぁっ!？」

鈴は驚いてフラッグを取り損ねた。

そして、次々と上空から何かがプールに落ちてきた。

「な、なんだ!？」

レイはそこをとっさに見た。

すると、落下地点に、動きがあった。

それはどんどん増えていき、赤い光が光った。

「あれは・・・?」

最初に落ちてきたものの葉、赤いボディーをして、頭部には小さい角があり、黄色の一つ目の頭部を持ち、全体の形状は細い。手には湾曲した刃を持つ剣を持っていた。

中央のやつの両隣には、中央のやつよりどっしりとした感じで、色は青、頭部の額辺りに角があり、赤い一つ目で、左のほうの手には、バズーカを持ち、右のほうの手には両手銃があった。

その後ろには、五体おり、青いやつと同じどっしりとした感じで、色は全て茶色。手にはマシンガンがあり、左腕にはシールドが装備されていた。頭部のでっぺんにアンテナのようなものがあり、赤い一つ目を持っている。

その姿はロボットのような感じ、『全身装甲』を施したISに見える。

落ちてきたものたちは辺りを見ると、手にしている武器で辺りに攻撃を掛けてきた。

その攻撃の一部がレイ達がいる島を吊るすワイヤーに直撃し、ワイヤーは切れて島は大きく傾く。

「わあああっ！」

鈴はその衝撃で島から落ちる。

「危ない！」

レイはとっさに鈴の手を掴む。

その隣ではトップだったペアが島から落ちていった。

「・・・・レイ・・・・」

「全く・・・・。しっかりしろよ・・・・」

レイはそのまま鈴を引き上げる。

「う……。私だって驚いていなかったらあんなことになっていないから」

「今はそんなこと言っている場合じゃないだろ。とにかく……」

レイは後ろを振り向くと、落ちてきたやつらは辺りに攻撃をかけ、観客たちは逃げ惑っていた。

「こいつらを何とかしないと死傷者が出かねない」

「……。ふっ。　だったらやることは一つね」

「ああ。そういうことだ。　行くぞ！」

そして、二人は同時に島から飛び出した。

「甲龍！」

「ファントム！」

レイと鈴は同時にISを呼び出し、ISアーマーを身に纏うと、やつらに向かって行った。

茶色のやつがいち早く二人に気付くと攻撃を掛けてきた。

「鈴。後ろに回れ！」

「分かった！」

鈴はレイの後ろに行くと、レイは左腕にある『グランプラズマカタール』を抜き取ると、右手首を高速回転させて、茶色のやつの攻撃を弾いていく。

「くらえっ！」

そして、鈴はレイの後ろから飛び出すと、両肩の衝撃砲を青いやつに放つ。

しかし、青いやつは見かけによらず素早い動きで避けると、手にしているバズーカで攻撃してきた。

レイはそのままつき進んで行き、向かってくるバズーカの弾を切り落とし、左手で『グランショットガン』を取り出し、茶色のやつに攻撃した。

だが、茶色のやつは左腕のシールドで防いだが、レイはそれが狙いだった。

「もらった！」

そしてレイはそのままグランプラズマカタールを振り下ろし、茶色のやつのシールドを左腕ごと両断した。

そして、左腕が落ちると、茶色のやつの胸部が切り裂かれていた。

そこから機械の部品が露出した。

「!?...無人機...?」

「ってことは、あの時のやつのお仲間・・・？」

「恐らくそうだろうな。だが、無人機だと分ければ全力で攻撃ができる」

「そうね。じゃあ遠慮なく行くよ！」

と、鈴は双天牙月を展開し、茶色のやつら向かって行く。

「うおりゃあ！」

レイはさっきのやつに向かっていると、ショットガンで至近距離射撃を茶色のやつ腹部に行い、直後にグランプラズマカッターを振り払い、真っ二つにした。

「まず一つ」

レイは次の目標に向かい、後ろでさっきのやつが爆発した。

次のやつは斧を持ち、ファントムに振り下ろしてきた。

レイはとっさにプラズマカッターで防ぐと、直後に足を上げ、斧を蹴り上げた。

「でりゃあ！」

そしてそのままプラズマカッターを振り、斜めに切り裂いた。

「二つ」

レイは前のやつを蹴り、次のやつに向かう。

次は青いやつで、両手銃でレイに攻撃を掛けてきた。

レイは避けるが、そのうち一発が左手に持つショットガンを撃ち抜いた。

「くっ！」

レイはとっさ手放すと、ショットガンは爆発した。

その間に青いやつは両手銃から斧に変えて、レイに向かってくる。

すると、レイはグランプラズマカッターを上に取り投げた。

そして、右腕の三本の棒に電流が流れる。

青いやつは異変に気付いたがもう遅かった。

「ジェットマグナム！」

そして、レイは電流が流れるそれを青いやつの胸部に叩きつけると電流と衝撃を叩き込み、青いやつの背中に突き抜けた。

撃破を確認すると、落ちてくるグランプラズマカッターをキャッチする。

その頃、鈴も茶色のやつを三体撃破したみたいだ。

「鈴！青いやつは頭部を破壊しろ！」

「なんで？」

「残りはできるだけ破壊せずに捕獲する」

「わ、分かった！」

そして鈴は衝撃砲を放ちながら青いやつに向かっていく。

青いやつはバズーカで砲撃するも、衝撃砲の見えない弾丸で破壊された。

「くらえっ！」

そして鈴は双天牙月で振り払い、青いやつの首を切断し、頭部を飛ばした。

それによって青いやつは前に倒れ、機能停止した。

すると、残った赤いやつが鈴に向かっていく。

「くっ！」

しかし、その間にレイが入り込み、赤いやつが振り下ろした剣をグランプラズマカッターで防ぐ。

「おりゃあっ！」

そしてレイはグランプラズマカッターを強引に振り、赤いやつを弾き飛ばした。

「鈴！」

直後にレイがジャンプすると、後ろでは鈴が衝撃砲を発射体勢に入っていた。

「いけえっ！」

そして衝撃砲から見えない弾丸が発射され、赤いやつの両腕を吹き飛ばす。

その直後にレイがグランプラズマカッターを投擲し、赤いやつの胸部脇に突き刺さる。

赤いやつはそのまま後ろに倒れ、機能を停止した。

「はぁ・・・はぁ・・・」

そうして、戦いは終わった・・・

「いやぁ・・・。ありがとうございました・・・。おかげで人が出さずに済みました」

しばらくして、俺と鈴はウォーターランドのオーナーから、お礼の言葉を受けていた。

幸いけが人は居らず、施設の被害も最小限に抑えられた。

「いえいえ。自分たちは当たり前のことをしただけですから」

「そうですか……。しかし、レースに出られたとは言えど、中止になっては、商品をお渡しはできませんね」

当然だが、レースは中止になり、景品は貰うことができなかった。お礼でそれを受け取ると言うのはあまりにもひいきだ。

「いいんですよ。それに空きのコンテナを提供していただいただけでもこちらとしては嬉しいのですから」

「そうですか。しかしそれではこちらが面目ありません……。なお、コンテナはお返しはしなくてもよいですよ。運ぶのが大変でしょうから」

「それはありがたいですね」

「・・・では、またのお越しをお待ちしていますよ」

「ええ。また来る時があれば・・・」

レイと鈴はオーナーに手を振って、事務所から出た。

「ふう……。今日は中々大変だったけど、楽しめたな」

「・・・うん……。そうだね」

と、鈴は若干下を向いたまま答えた。

二人のそばには、先ほど撃破した襲撃者の残骸を収容した貨物用のコンテナがあった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

鈴はしばらく考えていた。

あの時、島から落ちそうになった鈴を助けたレイの姿を思い出す。

（・・・なんだか・・・あのときを思い出すなあ……。あの時もあんなふうに助けてもらったっけ・・・）

そして、鈴は昔のことを思い出した・・・・・・・・

今から三年ちょっと前のことだ・・・

まだ鈴が中学生になって少し経った時のことである。

そのとき、鈴は暗い夜道を自転車で帰っていた。

「あーあ。こんなに遅くなっちゃった・・・」

鈴は愚痴りながら自転車をこいでいた。

昼に雨が降ったので、辺りはじめじめしていた。

「だいたいあれよ・・・。一夏があんなことをしなかったら私がこんなに遅くに帰ることになんかならなかったのに・・・」

どうも学校で何かあったらしく、不満に思っている。

「急がないと・・・」

そして、こぐスピードを上げる。

しかし、その直後に顔にじめじめした何かが当たった。

「きゃあっ!？」

鈴はとっさにそれを払ったが、それによって前を見落としていた。

スピードを上げた自転車はそのまま前にあったガードレールに衝突した。

「うわあっ!？」

鈴はその衝撃で前に放り投げられ、そのまま下に落ちる。

しかし、その瞬間に鈴は何とか右手を差し出し、ガードレールの柱を掴んだ。

「くう・・・」

そこは、かなり高いところにあったガードレールで、鈴はそのガードレールの柱に片手で掴まっていた。

「こ、こんな・・・うっ!」

鈴は右腕の痛みに顔が引きつる。見れば腕から血が出ていた。

どうやらさっき放り投げられた際にガードレールの角ですれて、怪我していた。

しかも傷が深く、右腕は引きつられて、激しい痛みが走っていた。

「・・・こ、・・・これ以上は・・・」

あまりの痛みに腕の力が抜けていき、柱から手が離れようとしていた。

ここから落ちれば、運がよければ骨折で済むだろうが、最悪の場合

死んでしまっただろう。

(・ ・ ・ 父さん ・ ・ ・ 母さん ・ ・ ・ 一夏 ・ ・ ・)

そして、柱から手が離れ、鈴は覚悟を決め、目を閉じた……。

その時、鈴の手を誰かが掴んだ。

⌈
•
•
•
•
•
•
?
⌋

鈴は目を開け、上を見上げると誰かが鈴の手を掴んでいた。

すると、雲が晴れ、月の光が辺りを照らすと、一人の少年がいた。

自分と同年代だろう少年は、鈴の手をしっかりと握り、もう片方の手でガードレールの柱に掴まっていた。

「大丈夫か？」

⌈
•
•
•
•
•
•
•
⌋

そして、少年は鈴を引き上げた。

「
・
・
・
はあ
・
・
・
はあ
・
・
・
」

鈴は引き上げられると、深呼吸をした。

そして、前を見ると、少年は腰をかけて座っていた。息を荒くしているからして、走ってこっちに来て、とっさに助けたと思われる。服装はどうやら別の中学の制服で、鈴とほぼ同じ理由でこんな時間

までいたのだろう。

「君、大丈夫か？」

「・・・う、うん・・・。あ、ありがとう・・・」

「はぁ・・・。よかった・・・」

と、少年は胸を撫で下ろすように息を吐く。

「・・・うつ！」

すると鈴は痛みあまり、顔を引くつる。

右腕から血がさつきより流れ、よく見れば足からも血が流れていた。

「あつ・・・。けがをしているじゃないか」

と、少年は怪我をしているところを見る。

「・・・これは・・・。立てるか？」

「や、やってみる・・・」

鈴はガードレールを支えにして立つが、痛みあまり座ってしまう。

「・・・これはひどいな・・・。君の家はどこだ？」

「・・・ここから左にまっすぐに進んでいけば、中華料理店がある。・・・そこがあたしの家・・・」

「・・・・・・・・ここからか・・・・・・・・。結構長いな・・・・」

すると、少年は肩にかけていたバックから、タオルを取り出し、鈴の怪我をした足に巻きつける。

「うっ・・・・」

「あっ。ごめん・・・・」

そして、タオルを巻きつけると、鈴の前にしゃがみこんだ。

「な、なんのつもり・・・・？」

「決まっているだろ。俺が君の家までおんぶして送るよ」

「い、いらないわよ・・・・。これくらいなら・・・・」

「だめだ。無理をしたら怪我が悪化するかもしれないだろ？」

「・・・・・・・・」

鈴はしばらく考えると、少年の言う通りにして、少年の背中に乗る。

少年はしっかり鈴をおぶると、鈴の自転車を持って、鈴の家まで歩いていく。

「そういえば聞いていなかったな・・・・。君の名前は・・・・？」

「え．．．？」

しばらくして、少年が聞いてきて、鈴は少し驚く。

「君の名前だよ．．．。あるだろ？」

「．．．．．『凰鈴音』．．．」

「．．．『凰鈴音』か．．。中国人か？」

「う、うん．．．」

「そっか．．．」

「．．あんたは．．．？」

「俺か？．．．『レイ・ラングレン』．．レイって呼んでくれ」

「．．レイ．．．。あんた『△△中学校』なの？」

「．．ん？ああそうだよ。鈴音は『○○中学校』か？」

「うん．．。それと、呼ぶ時は鈴でいいよ。呼びにくいだろうし」

「ああ．．。そうか。じゃあ鈴、家は後もう少しなのか？」

「うん．．。あと少し．．．」

「そうか。分かった」

そうして、レイは歩いていく・・・。

少ししてレイは鈴の家に着いて、そこで鈴の両親からはお礼を言われ、鈴を助けてくれたお礼として中華料理をただで食べさせてくれた。レイはその食べさせてくれたお礼として、そこでバイトの形で働くことにして、以後鈴と話す回数は増えていったという・・・。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

鈴は当時のことを懐かしく思い出していた。

それからしばらくレイは学校が終わった後と休日にバイトの形で働きに来て、働いた。

その合間に鈴はレイと話していた。よき相談相手だった・・・。

しかし、しばらくして鈴は中国に帰らないといけなくなった。

そして、出発当日、一家は車で出発してから、鈴は店の二件隣の建物の影にレイを発見して、レイは鈴に別れの挨拶をした。

それがあの時レイの最後の姿だった・・・。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・おい・・・。鈴・・・？」

鈴ははっとして、前を見ると、レイの顔が至近距離にあった。

「わぁっ!？」

鈴は驚いて後ろに跳び下がった。

「そ、そこまで驚かなくてもいいだろう・・・」

「ご、ごめん。か、考え事をしていたからさ・・・」

「・・・そ、そうか・・・・・・・・。まあいいか。とりあえず学園からトレーラーが来て、コンテナを乗せたしたから乗るぞ」

「わ、分かった・・・」

そして、二人はそばに待機していたトレーラーの運転席に乗り込み、トレーラーは学園に向かって行った・・・

そしてI S学園……

「……………」ということですよ」

「そうか。　しかしお前は何かと騒ぎに関わることがあるな」

レイは学園内にある研究所の格納庫におり、無人機との戦闘の詳細を織斑先生に報告した。

鈴は先に寮へと行き、今頃一夏に文句の嵐でも突きつけているのだろう。

「まあいつものことです」

「そうかねえ……。　しかし、無人機の残骸を残さず回収し、その内二体だけを破壊せず捕獲したのは上出来だ。これである程度分かるだろう」

「そうですね。　では少しの間無人機を見ておきたいのですが、よろしいですか？」

「……………まあ、特別にいいだろう」

「ありがとうございます」

レイは頭を下げて、無人機を見回った。

茶色の機体は全て撃破しているので、ボロボロの残骸でしかないが、青い機体は一体撃破したがもう一体は頭部を切り落としただけなので、機体はほとんど完全な状態で、赤い機体は両腕を飛ばされて、胴体にグランプラズマカッターが突き刺さった後があるが、撃破はされていないのでほぼ完全な状態だ。

（しかし、こいつらは何の目的で襲撃したんだ・・・）

レイは赤い機体を触りながら、戦闘のときを思い出していた。

すると、レイの手が赤い機体の胴体にあるスイッチに触れた。

「？」

すると、赤い機体の腹部から、何かが出てきた。

「何だこれ？」

レイはそれを取り出すと、それはメモリーディスクのようだ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「織斑先生」

レイはディスクを持って、織斑先生のところへ向かう。

「どうした？」

「無人機から、これが出てきました」

と、レイはディスクを織斑先生に渡した。

「これが出てきたのか」

「はい。赤い機体に触っていたら、出てきました」

「・・・そうか。これはかなり期待できそうだな・・・。ごくろうだった。お前はもう寮に帰っていいぞ」

「はい・・・」

そして、織斑先生はラボに向かい、レイは寮に向かっていく。

レイの手には、USBメモリーが握られていた・・・。

S t o r y 1 9 それぞれの休暇 『鈴編』 (後書き)

。今回現れた無人ISですが・・・特徴を見たら分かりますよね・・・

Story20 それぞれの休暇 『セシリア編』

ここはIS学園内にある生徒の寮・・・

その廊下をセシリアは歩いていた。

「・・・しかし・・・いつもここは熱いですわね・・・」

愚痴りながら歩いていると、向こうの廊下の角から知人の生徒が出てきた。

現れたのは、相変わらず眼帯を欠かさず付けるレイだった。

「よお、セシリア」

レイはセシリアを見つけると、呼んだ。

「あら。レイさん。お久しぶりですわね」

「久しぶりだな。もう実家から帰ったのか」

「ええ。先ほど到着しましたわ」

「そうか」

セシリアは夏休みに入ってから、しばらく実家があるイギリスに帰

国していた。

それから二週間半向こうにいて、今日帰ったみたいだ。

「そういえば、レイさんは実家に帰ったりはしないのですか？」

「うーん。まあ帰っても何もすることがないからな……。じつちゃんの見舞いにはいくんだけど……」

「あら？お爺様が入院されたのですか？」

「ああ。夏休みに入る少し前から入院している。どうも大怪我を負ったらしい」

「まあ大怪我を……。それは災難でしたね」

「……。そうだが……。まあでも、元気なのは変わりないんだけどね」

「そうですか……。それはよかったですわね」

「まあな」

「ところで、レイさんはどこに行かれようとしたのですか？」

「ああ。実は二日後にやることができず、その手伝いを探していて、ラウラとシャルを誘おうと思ったんだが、どうやら出かけているみたいだ」

「そうですか。しかし、一体何のお手伝いのですか？」

「まあそれだが……。とりあえずセシリア」

「何ですか？」

「……その手伝いを手伝ってくれないか」

「……え？　わ、私ですか……？」

「ああ。セシリアが入ってくれたら後二人加えればいいんだ。その二人は後で誘うが……。どうだ？」

「……え、ええと……。ま、まあレイさんが頼むと言うのなら、手伝ってもよくてよ」

と、セシリアは手を腰に掛けるお決まりのポーズを取る。しかし若干顔が赤くなっているように見えるのは気のせいかな？

「……そりゃよかった。じゃあ後二人を誘うのを手伝ってくれ」

「分かりましたわ。それで、その二人と言うのが……」

「ああ。一夏と鈴だ」

「い、一夏さんですか！？……。で、では手伝いましょう」

そして、二人は一夏と鈴を探しに行くのだった……

そんでもって、二日は過ぎて、日曜日の午前十時半……

IS学園から離れた公園の隅に、レイ達はいた。

「しかし、これがお前の言っていた手伝いか？」

一夏は出店を組み立てながら、レイに聞いてきた。

「ああ。じっちゃんの知り合いのおじさんが稼がないといけない時に怪我して、動けなくなったんだ。だから、俺がおじさんの変わりに稼ぐことになったが、ひとりじゃ大変だから、お前たちを呼んだんだ」

「……ふーん。でも、どうしてこういう組み合わせなのかしら」

と、鈴が愚痴るのも仕方がないのだろうか……。

ここにいるのは出店内をセッティングするレイと、出店内で材料を並べる鈴と、出店のカウンター上のテントを張る一夏と、出店内でパックを準備するセシリアであった。

「そうですわね……。しかしどうしてこんな組み合わせなのでしょうか……」

「そういえば珍しい組み合わせだよな……。ところでどうして箸は誘わなかったんだ？」

「手伝いはそんなに要らないんだ。まあでも、理由はそれだけじゃないんだがな……」

「え？」

「まあそんなことはいいか」

と、レイはセッティングをせつせとする。

「こら。話を逸らすな！」

「まあ気にするな。とりあえず一旦集まってくれ」

レイは手招きをして、全員集まる。

「それで、一体何を売るの？」

「見て分からないのか？ 焼きそばだ」

「や、焼きそば……」

「それを売るのですか？」

「ああ。俺が作る特製の焼きそばだ」

「まあ作るのはいいとして、あんたが作る焼きそばはおいしいの？」

「失礼だな。俺の作る焼きそばはな。俺がかつてバイトしていたところある食堂でまかないで作ったそれが後に店の看板メニューになり、その人気はテレビ取材があつたまでだぞ」

「そ、そんなに・・・!?」

「し、知っているぞ。確か物凄い列ができるほど人気だったよな」

「ああ。おかげでその時のバイト料はかなりアップしたが、しばらくしてその食堂は火事にあつたけどな」

「えええ・・・」

「まあそれはともかく、俺が焼きそばを作るから、それをパックに入れるから、一夏はパックをカウンターに運んでくれ」

「分かった」

「セシリアと鈴はカウンターにいてくれ」

「分かりましたわ」

「分かったけど・・・。何か狙ってない？」

「ん？まさか・・・。二人はお客に笑顔で出迎えてくれよ」

（やっぱり何か狙っている・・・）

「とりあえず、それで行くからな」

そして、それぞれ配置につく。

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

セシリアと鈴は、後ろから来るいい匂いに、我慢していた。

焼きそばにしては物凄くいい匂いで、食欲をそそる。

レイは手馴れた手つきで焼きそばを作っていく、それをパックに入れると、一夏がカウンターに持っていく。

「・・・うわぁ・・・・・・・・いい匂い・・・」

「そうですわねえ・・・・・・・・」

すると、その匂いに引かれてからか、最初のお客さんが来た。

「「いらっしやいませ」」

二人の声は見事に重なる。

「あ、あの・・・焼きそばを一つ・・・」

「はい。焼きそばを一つですね。四〇〇円です」

と、鈴は焼きそばを前に出し、お客からお金を貰うと、焼きそばを

渡す。

「ありがとうございました」

セシリアは飛びっきりの笑顔で、お客さんに声をかける。

お客は恥ずかしそうな感じで、その場を去った。

「・・・ねえセシリア・・・」

「何でしょうか・・・？」

「明らかに私たちを見たさに来ているように見えたけど・・・」

「そうですわね・・・」

と、二人はシュッとレイのほうを向く。

「明らかに私たちが客寄せじゃないの！」

「まあそういうな。これは二つの効果を持っているのだぞ」

「二つの効果？」

「ああ。一つはさっき言っていた通り二人を見たいがために来る。そして二つ目は買った焼きそばを試しに食べると、凄くうまいことが分かり、知人に知らせていって、口コミに繋がる・・・ってことだ」

「・・・そういうこと・・・」

「まあでも、ただ単にお前たちを手伝いに誘ったわけじゃない。読みが当たればこの後が大変なんだ」

「どういふことですか？」

「口コミが広がれば、恐らく昼ごろには多くのお客が来るだろう」

「そうなの？」

「ああ。そんなことより、来ているぞ」

「えっ？・・・あっ！」

すると、カウンターには何人かが並んでいた。

「「い、いらっしやいませ！」」

また二人の声が重なり、それから焼きそばを売っていった・・・

そして、時間は正午前・・・

「・・・はあ・・・はあ・・・。い、意外と来たわね・・・」

「そ、そうですわね・・・」

この時間までに、結構の数のお客が来て、焼きそばを売っていった。

「ふむ・・・ここまでは予想通りだな」

「そうなのか？」

「ああ。午前中に使うパックはすべて使い切った」

「ど、どういうこと？」

「持ってきた荷物のほとんど午後で使うやつだ」

「はあ！？これ全部が午後用！？」

「ああ。言っただろう。午後は忙しくなるって」

「・・・・・・・・・・」

「まあ客が来る前に、準備はある程度するぞ」

と、レイはダンボールからパックと材料を取り出した。

「あれ？パックさっきのやつと違わないか？」

見れば、パックは午前で使ったやつより少し大きい。

「午前のはお試し用だ。午後はこれを使っていくぞ」

「はぁ・・・」

「さてと・・・。焼きそばを作るか・・・」

と、レイは焼きそばをせっせと作り出した。

それから少しして、レイの読みどおり、かなりの数のお客が来て、嵐の如く忙しかった・・・

そして時間は過ぎて・・・午後四時半・・・。

出店のカウンターには『本日は終了しました』と書かれた札があった。

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」
「・・・・・・・・・・・・・・・・」

一夏、鈴、セシリアは燃え尽きたかのように、出店内にある机にうつ伏せていた。

その机で、レイはお金を数えていた。

レイはこんなことがあろうかと思い、事前に多く材料を仕入れていたので、材料不足にはならなかったが、無くなる寸前までなった……。

そのため、予想以上にお金が入った。

「ふむふむ…………結構稼いだな…………」

「…………で、どのくらい稼いだの…………？」

鈴はうつ伏せたまま聞いてきた。

夏場と言う事で、出店内は相当暑く、汗が出っ放しだった。特にレイは焼きそばを作っていたので、相当汗が出ており、首に掛けていたタオルが汗で変色していた。

「ああ。合計…………48万8000円だ」

「そ、そんなに稼いだの!？」

と、さっきまでうつ伏せていた鈴が急に起き上がった。

同時に一夏とセシリアも起き上がる。

「ああ。予想以上に稼いだからな。おじさんに必要な資金を渡しても、二十万は残るな。だから山分けするか」

「い、いいのか・・・？」

「もちろんだ。手伝ってもらったお礼はしないといけないだろ？」

「でも、山分けするってことは・・・五万円ずつ？」

「そうだな」

「やったあ！手伝った甲斐があつたもんね！」

と、さっきまでの疲れが吹っ飛んだのか、鈴は飛び跳ねる。

「まあそれより、みんな焼きそばを食べるか？腹減っているだろう？」

すると、全員の腹が一斉に鳴った。

「・・・そ、そうだね・・・。だって昼食べてないのよ！そりゃ腹が減るわよ！」

実は礼は準備のために、みんなには昼抜きでやってもらったので、ここにいる全員腹が相当減っていた。

「そりゃ悪かった」

と、レイは取っておいた焼きそばが入ったパックを机に出した。

「じゃあ、いただきます！」

鈴は焼きそばを出された途端、飛びつくように焼きそばを食べた。

「うまああいつ！」

そして焼きそばを一口食べた途端、鈴は叫んだ。

「本当にうめええ！」

隣に座っていた一夏も叫ぶ。

「本用においしいですわ」

セシリアは控えめだったが、顔は明るかった。

「そうか。そりゃよかった」

レイはその様子を見てうなづく。

「あら？ ラングレン君？」

と、後ろから声がして振り向くと、そこには山田先生がいた。

「あっ。山田先生」

山田先生はいつも学園で見る服装ではなく、私服なので新鮮に見える

た。

「どうしたのですか？こんなところで」

「実は、じっちゃんの知り合いのおじさんが怪我をしてですね、自分たちがこうして代わりにお金を稼いでいたのですよ」

「へえ偉いですね。それに、他にいるのですか？」

「ええ。一夏と鈴、セシリアがいます、あいつらには手伝ってもらったんですよ」

「そうですか……。しかしこの辺りにいい匂いがしますね」

「そりゃそうですよ。よかったら食べていきますか？」

「い、いいのですか？」

「そりゃもちろん。サービスですよ」

と、レイは中に一旦行き、焼きそばを取りに行って、山田先生に渡した。

「ありがとうございます。うわあ、いい匂い……」

そして、パックを開けて、一口食べた。

「……！　おいしい！　こんなにおいしい焼きそばは初めてですよ」

と、どんどん焼きそばを食べていく。

「ラングレン君って、こんなに料理がうまいんですね」

「まあ、それほどありませんよ。自然に身についただけですから」

「でも凄いですよ。ラングレン君もたまには自慢してもいいんですよ」

「・・・まあ、考えておきますね」

「・・・では、私はこれで。焼きそばサービスしてくれてありがとう」

そして、山田先生は歩いていった。

（・・・自慢、か・・・。まあ、たまにはいいかな・・・）

レイは少し考え、片付けに入った。

そして、時間は過ぎて午後六時・・・

「ここだ」

レイ達は住宅街を歩き、一つの住居の前に立った。

昔の日本を思わせる造りの家だった。

「ここがレイが言うおじさんの家なの？」

「ああ。前にも来たことがあるからな。じゃあ待っていてくれ」

レイは家に敷地に入っていく、インターフォンを押す。

そして、引き戸が開くと、年老いた男性がいた。

「おお。レイ君か・・・」

「お久しぶりです。おじさん」

「いやあ・・・久しぶりじゃのうレイ。元気そうじゃのう」

「おじさんも怪我はそれほどひどくなくて安心しました。これはおじさんが必要とした分の稼いだお金です」

「悪いのう。わしが怪我などしなければお前さんに迷惑を掛けなかったのに」

「いいんですよ。おじさんには助けてもらった借りがありますから」

「そうじゃったな・・・。ちょっと上がっていくか？」

「いいですよ。友達が待っていますから」

「そうか。じゃあまたのう」

「おじさんもお大事に」

そして、レイは頭を下げ、セシリア達の元に向かう。

そして、時間は過ぎて、午後八時半・・・

レイは寮の自室にいた。

「ふう・・・さっぱりした」

レイはシャワールームから出て、タオルを首に掛ける。

「・・・さてと」

と、レイは机の前にあるイスに座ると、机の上に置いてあるパソコンの隣にあるものを手に取る。

それは、ジライヤのCCMであった。

レイは画面を開くと、CCMを起動させた。

すると、レイの右肩にジライヤが下りてきた。

「お前の初仕事だ。行って来い」

そして、ジライヤは飛び上がると、天井に引っ付き、排気口に入っていく。

「さて……。ここからが慎重に行かないと……」

と、レイは画面を見ながらジライヤを操作する。

そんな頃、学園の職員室……

この時間では職員は帰っているが、二人だけ残っていた。

「悪いな。出かけたばかりで呼び戻したりして」

「いえ、いいんですよ。私も出かけてもそんなにいいものはありませんでしたし」

一部の電気がついた薄暗い職員室には、織斑先生と山田先生がいた。

「それで、事前に渡していたメモリーディスクの中身は何か分かったか」

「今のところ少しですが、ラングレン君と凰さんが遭遇して戦闘を行った無人機ですが、製造元不明の無人稼動型ISでした」

「・・・そうか・・・」

「それと、その無人ISの裏取引のデータが入っていました」

「裏取引・・・だと？」

「はい。いくつか取引先はあるのですが、その内多く取引がされているのは・・・『斉藤組』のようです」

「・・・そうか・・・。あの時拘束したのは一部のやつらだったか」

「その斉藤組はどうやら取引の中間地点みたいなもので、そこから様々なところ取引を行っているようです」

「様々なところにか・・・。斉藤組にISを提供しているやつはわからないか」

「そうですね。データには名前はありませんでした」

「・・・やはり、今後調べる必要があるな」

「このことは学園の上層部に報告するのですか？」

「そのつもりだ。だが恐らく・・・」

「恐らく？」

「……いや。今は言わないで置こう・・・」

「……？」

「とりあえず。今後はデータの解析、それと無人I Sの調査を行って欲しい」

「わかりました」

そして、会話が終わり、二人は職員室を出た。

その会話を、天井の排気口から見ていたものがあつた。

聴音収集マイクを展開したジライヤであつた。

そして、マイクを収容すると、そのまま排気口を走っていく。

そして所戻ってレイの部屋・・・

「・・・・・・・・」

レイはCCMにつなげたイヤホンから、ジライヤを通してその会話を聞いていた。

「斉藤組……。まだ活動が続いていたか・・・」

レイはイヤホンを外すと、排気口の上に立つ。

すると、排気口からジライヤが下りてきた。

ジライヤは寮の排気口を進んで行き、そこから外に出ると学園の排気口に侵入し、それから職員室に繋がる排気口に向かってきて、帰りは自動で帰ってきた。

「どうなるのやら・・・・・・・・。まあでも、少し面白くなりそうだな・・・」

そして、レイはパソコンに向き直る・・・

こんこん・・・・・・・・

席に着いた直後に、ノックが聞こえた。

「ん？」

レイは席を立つと、ドアを開ける。

そこには、セシリアがいた。

「こ、こんばんわ……。レイさん」

「セシリアか……。どうしたんだ？」

「ええと……。きよ、今日の……。その……。お礼を言いたくて・
・。」

「お礼?……。それは俺の方が言うことだと思うけど・・。」

「て、手伝いのことではありませんわ。今日渡されたバイト料のことに御礼を言いに来たのですわ」

「……。そっか……。まあここで話すのもなんだし、入ってくれ」

「そ、そうさせてもらいましょう」

そして、セシリアはレイの部屋に入る。

(……。ここが……。レイさんの部屋・・。)

セシリアはベッドの腰掛けると、レイはイスに座った。

「・・。しかし、本当にお礼が言いたいののはこっちのほうなんだがな・
・手伝ってもらったのに・・。」

「あ、あれくらいはお礼を言わなくても言いのですわ。困っている人を見たら助けるのはイギリス国民の性なのですから」

と、セシリアは珍しく食い下がる。　　って、イギリスってそうだったけ？

「・・・まあ、それはそれでいいけど・・・」

「それと、もうひとつ・・・」

「ん？」

「こ、これを渡したいのですわ・・・」

と、セシリアはポケットから、手の中に納まるくらいの箱を取り出し、レイの差し出す。

「・・・これは？」

レイは聞きながら箱を手取る。

「じ、実家に帰省した際に、お土産として買ったのですわ」

「お土産か・・・。それはありがとう」

レイはお礼を言うと、箱のふたを開ける。

そこには、銀色に輝く懐中時計が入っていた。

「おお・・・。懐中時計か」

「そうですね。我が祖国イギリスで一番人気があるものですわ」

と、セシリアは自慢げに言うが、顔が若干赤く見えるのは気のせい
か？

レイは懐中時計を取り出すと、時計についているチェーンが下に垂
れた。

「へえ……。やっぱり昔って言う感じがあっていいな……。でも作
りが凝っているな、高かっただろう？」

「そ、それは……。まあ……。五百ま……。あ、いえ。そこそこ
のお値段でしたわ」

「……。？　　そういえばセシリアの家って、お金持ちだったな」

「え、ええ……」

「まあそこそだったら普通に買えるよな……」

と、レイはさほど気にした様子はなく、懐中時計を眺める。

（……。本当のところ、五百万ドルはしたのですが……。でも、
嬉しそうでよかったですわ……）

セシリアは結果オーライとした。

「ありがたいなセシリア」

「ど、どういたしまして・・・」

そうして、レイは懐中時計をずっと眺めた・・・

S t o r y 2 1 それぞれの休暇 『シャルロット編』 (前書き)

(修正) 十後書き追加

Story 21 それぞれの休暇 『シャルロット編』

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

レイの部屋をじっと見つめる人物がいた。

じっと見つめる人・・・・・・・・シャルロットは考えていた。

（レイは・・・・・・・・いるよね・・。い、いるはず・・。）

と、深呼吸をして、ドアをノックする。

「レイ・・・・・・・・」

「だあああああ！！！！」

「!?!」

ノックした途端レイの叫び声がして、シャルは身をすくませる。

そして、ドアが開き、レイが出てきた。

「・・・・・・・・れ、レイ・・・・・・・・」

「・・・・・・・・シャル・・・・・・・・か」

「な、何があったの・・・？」

「いや・・・。いいんだ・・・。気にするな」

「う、うん・・・。分かった・・・」

そして、シャルはちらっと部屋の中を見ると、机の上には散らばったランプがあった。

（ランプタワーを作っていたんだ・・・）

レイが叫んだ理由はこれだとシャルは理解した。

「・・・ところでシャル」

「な、なにかな・・・？」

「今から出かけるのか？」

レイが聞くのもあるだろう。シャルの服装は私服で、今から出かけるという感じだ。

夏らしい白を基調としたワンピースだ。

「あ、うん。今から町に出かけようとしたの。それでレイも誘おうかなって思ったの」

「なるほど・・・」

「ど、どうかな・・・」

「ああいいぜ。暇だったからな」

「そ、そっか・・・」

「待ってくれ。すぐに準備をするから」

と、レイは一旦部屋に戻り、それから少し経って着替え終わって、部屋を出た。

「じゃあ行くか」

「うん」

そして、二人は出かけた・・・

しばらくして、二人はバスを降りて、バス停にいた。

「ここからどこに行くんだ」

「それは、ここから少し歩いていったところにあるデパートだよ」

「そうか。分かった」

そうして、二人はデパートまで歩いていく。

（レイと出かけるのって、初めてだったね・・・）

シャルは歩きながら、考えていた。

レイの服装は下に白いシャツを着て、その上に青いチェック柄のシャツを着ており、紺色のジーンズを穿いていた。

（・・・そういえば・・・）

シャルは臨海学校のことを思い出す。それは、お礼のつもりで、シャルはレイに抱きついた。そのときを思い出すだけで顔が赤くなる。

（・・・迷惑じゃなかったよね・・・でも、レイは迷惑な感じだったし・・・いやでも・・・）

と、シャルは頭の中でもんもんと考える。

「なあシャル」

「ふえっ!？」

いきなり呼ばれたので、シャルは上ずった声で答えてしまった。

「ど、どうしたんだ？」

「あ、いや、何でもないよ!？・・・と、ところで、何かな・・・?」

「いや・・・シャルはデパートで何をするのかを聞いてなかったか

ら」

「あ、それね……。新しい服を買おうと思っているの」

「新しい服か……。秋物か？」

「そうだよ。でもよくわかったね」

「大体分かるさ」

「そ、そっか……」

そして、レイは前に向き直る。

（本当に……。レイって勘が鋭いよね……。まるで予知能力があるみたい……。でも恋に関しては鈍いよね……。一夏みたい……。）

シャルは心の中でため息をつく。

そして、二人はデパートに着くと、中に入りデパート内の地図を見る。

「まず服を見てから、途中でランチ。その後に生活用品とか雑貨店で小物とか見るけど、それでいい？」

「ああそれでいいよ」

そして、二人はまず洋服店に向かうのだった。

中は夏休みと言うことで、自分たちと同じ十代の女子男子であふれていた。

「今日は多いな」

「そ、そうだね・・・」

「はぐれるなよ」

「う、うん」

と言いつつも、シャルははぐれそうになる。

「うーん・・・やっぱり手を繋いだほうがいいな」

「・・・そ、そうだね・・・」

そして、二人は手を繋ぐ、その時にシャルの顔が赤くなったような気がするのはいけいかな？

そうして、シャルが行こうとしていた洋服店に着く。

「それで、これからどうするんだ？」

「うん．．．。まずいくつか服を試着するから、レイは見てくれるかな」

「ん？．．．ああいいけど．．．。あんまり参考になるかは分からないけど」

「いいんだよ」

「そ、そうか」

そうして、二人は洋服店に入る。

「じゃあここで待っててね」

「ああ」

そして、試着室に入ったシャルはカーテンを閉じ、レイはそばにあったイスに座る。．．．
といっても靴を試しに履くときに座る腰掛だが．．．

「．．．．．」

レイは待っている間、辺りを見回す。

店内は基本女子ばかりで、その彼氏だろうと思う男子がちらほら目撃する。

「．．．．．」

そしてしばらく待つて・・・

「レイ。おまたせ」

「ん？」

レイは顔を上げると、着替え終わったシャルがいた。

白を基調としたシャツで、アクセントとして黒いネクタイをして、黒と白のチェック柄のスカートを着ていた。

「ど、どうかな・・・」

「うーん・・・。なかなか似合っている・・・。でももう少しカラフルのほうがいいかな」

「そ、そうかな・・・じゃあ次・・・」

と、シャルは次々と様々なパターンの服を試着した・・・。

「うーん・・・。それが一番似合っているよ」

「そ、そっか・・・」

そうして、いくつか着替えて、八つ目のパターンで、一番似合ったものがあった。

上はクリーム色の薄いセーターで、若干袖が長いのが特徴だ。下は

グレーで列に並んで折り目がついたスカートを穿いていた。

「見た目も機能性もいいねこれ……。ちゃんと見ていたんだね」

「そりゃそうだろう？ 似合わない服を選ぶとか、機能性が悪いものを選ぶのは悪いしな」

「・・・ありがとう」

そして、シャルは一旦試着室に入り、下の服装に着替えた。

「おまたせ」

と、シャルが試着室から出ようとした瞬間、つま先が試着室の床にこすれ、つまずいた。

「あっ！」

シャルはそのまま前に倒れていく。

「危ないっ！」

そして、レイは倒れそうになるシャルを受け止める。

「大丈夫か？」

「・・・あ、ありがとう・・・」

そして、しばらくして自分がどういう体勢なのかが分かると、顔が赤くなった。

レイはシャルをとっさに受け止めた……。つまり抱きかかえた体勢になっていた。

「ちゃんと足元を確認しろよ」

「う、うん……」

そして、レイはシャルを立たせた。するとシャルが残念そうにしたのは気のせいかな？

「と、とりあえず会計に行こう」

「あ、ああ。そうだな……」

そして、二人はカウンターに向かっていくと、さっきまでいた試着室ではなにやら人だかりができていた……

そうして時間は十二時半……

レイとシャルはオープンテラスのカフェでランチを取っていた。

「それにしても、意外と安かったな。あの服……」

「そ、そうだね……」

と、シャルはラザニアを食べなら答える。

レイはカルボナーラを食べていた。

さっき購入した服だが、意外と安かった。どうやら安売りの札が張ったあったらしく、通常より15%安かった。

（レイってたまに凄いのを当てるよね……。見た目も機能性も、しかも安いのを当てるなんて……。）

シャルはレイの見る目の凄さに凄いと思った。適当に決めていると思えば、本当のところちゃんと狙って選んでいた、というのがある。

（本当に……。レイって凄いな……。）

シャルはレイの凄さを改めて思うのだった……。

「ところで、午後はどうする？」

「そ、そうだね……。生活雑貨を見て回ろうよ。腕時計を見に行きたいな。日本製の腕時計って憧れだから」

「なるほどね……」

「レイは何か欲しいのってあるの？」

「うーん……。欲しいものか……。……特にないな」

レイはなぜか間を置いて結論を言う。

「そ、そっか・・・」

シャルはその理由を聞かずに、ラザニアを食べる。

「・・・はあ、どうすればいいのよ。まったく・・・」

と、隣では深くため息をつく二十代後半の女性がいた。

考え事をしているのか、注文したペペロンチーノは冷め切っていた。

「はあ・・・」

深々とつくため息には、深淵の色が見て取れた。

「・・・ねえ、レイ・・・」

「お節介はほどほどにな」

と、シャルが言い切る前にレイは行ったので、シャルは驚くものも、それはすぐに嬉しそうな顔になった。

「分かっていたんだ」

「まあな。それで、どうするんだ？」

「うーん。とりあえず話だけでも聞いてみようか」

そう言って、シャルは席を立つなり女性に声をかけた。

「あの・・・どうなされたのですか？」

「え？———！？」

すると女性は二人の姿を見るなり、イスを倒す勢いで立ち上がり、シャルの手を握る。

「あ、あなたたち！」

「は、はい？」

「バイトしない！？」

「「え？」」

「————というわけなのよ。急の二人辞めた・・・。と言うよりは駆け落ちしたんだけど・・・。」

「はぁ・・・」

「なるほど・・・」

「でもね、今日は超重要な日なの！本社から視察が来るし、だからお願い！今日だけアルバイトをして欲しいの！」

女性のお店というのがまた異様なものだった。

女は使用人の格好。男は執事の格好で接客する・・・いわゆるメイド（&執事）喫茶なのだ。

「それはそれでいいのですが・・・」

シャルは着替え終わって、控えめで聞いた。

「なぜ僕は執事服なのでしょうか」

「だって、ほら！メイド服より似合っているよ！」

「そ、そうですか・・・」

褒められても正直嬉しくない。

男装をすれば自分は『かっこいい男子』になるようだから。

（・・・それにしても・・・）

シャルは隣で執事服を整えて、白い手袋をするレイを見た。

シャルの着ている執事服と同じだが、レイが着ると妙に似合っていた。しかも他の服装では違和感を放つ眼帯も、執事服ではマッチしており、いつもよりかっこよく見える。

レイは普通に着ているのだろうが、どうも着こなしているようにも見える。

「それにしても、君本当に執事服が似合っているよ。今までにないぐらい」

と、女性店長はレイの執事姿を見て、褒める。

「そりゃどうも」

レイはさらりと受け流す。

しかしいつものようにしているのに、今回は二割り増しにかっこよく見えた。

「店長、早く手伝って」

フロアリーダーから、ヘルプの声がして、店長は最後の身だしなみをして、バックヤードの出口に向かう。

「あ、あのっ、一つだけ」

「ん？」

「このお店って、なんていう名前ですか？」

店長は笑みを浮かべてスカートをつまんであげ、大人びた容姿に似合わない可愛らしいお辞儀をした。

「お客様。@クルーズへようこそ」

「デュノア君、四番テーブルにコーヒーと紅茶をお願い」

「分かりました」

シャルはカウンターに出された飲み物を@マークが刻まれたトレイへ乗せる。

シャルの動きは単純な動きでも、一つ一つに気品があった。

初めてのアルバイトだと言うのに、その立ち居振る舞いには物怖じした様子はなく堂々としていて、嫌味でない。

その動きに、お客も見とれていた。

「お待たせしました。紅茶のお客様は？」

「は、はい」

自分が年上であるのかかわらず、女性は緊張した面持ちでシャルに答える。

そしてトレイに乗せた飲み物をそれぞれ女性に渡す。

「それでは、ごゆっくり。お嬢様」

と、ニコつと笑顔を見せると、女性たちの心は撃ち抜かれただろう・
・・。

そんなころ、レイはと言うと・・・

「ねえねえ。電話番号を教えてよお」

と、レイは自分より年上の若い女性に声をかけられていた。

しかし、レイは困った様子ではなかった。

「申し訳ございません。自分の電話番号は教えることはできませんね、お嬢様」

と、レイは笑みを浮かべると、女性たちはズキューン、と撃ち抜かれたかのように「きゃああ!」とばたばたした。

執事姿のレイの一つ一つの動作にかっこよさがあった。

（レイは大丈夫そうだけど・・・。僕より大変そう・・・）

レイはこういうのに慣れているのか、次に呼ばれたところも若い女性ばかりで、さっきと同じ事を言われ、レイはさっきと違い、額に手を当てて、少し困ったかのような顔をして、さっきと同じ事を言っ
て、最後は不敵な笑みを浮かべる。そして女性陣を撃破した。

（僕じゃあんなふうにはできないな・・・）

シャルの性格上、断りきれないだろう・・・

「あんなふうに言われて見たい！」

「私も！」

と、レイの人気は高まるばかりだ。

「あ、あのっ、追加注文いいですか！？できればさっきの金髪の執事さんで！」

「コーヒー下さい！眼帯の執事さんで！」

「こっちにも美少年執事をひとつ！」

「イケメン執事さんをつつ！」

その騒動はどんどん広がっていった。

レイとシャルはどう対応していいか困っていたが、店長が割り当てをして、いつもより五割り増しに増えたお客を見事にさばいていた。

その混雑が二時間続き、レイとシャルに精神的疲労が出てき始めたが、そんな時に事件は起きた。

「てめえら！動くんじゃねえぞ！！」

と、店のドアをけり破るかのように男三人が雪崩のように入ってきて、怒号を上げる。

いきなりのことで、客も一瞬分からなかったが、その直後に銃声が鳴り、悲鳴が上がる。

「きゃあああ！！」

「騒ぐんじゃねえ！静かにしろ！」

男たちの格好と言うのがジャンパーにジーパン、覆面、そして手にしているバックからは紙幣がこぼれ落ちる。

明らかに銀行強盗で、銀行を襲った逃走犯だろう。

「あー犯人たちに告ぐ、君たちは包囲されている。直ちに投降しなさい。繰り返す――」

さすがは一等地の市街地、警察の対応も迅速だ。店の外ではパトカーと防弾シールドを持った警官で包囲されていた。

「ど、どうしましょう兄貴！このままじゃ俺たち全員――」

「うろたえるんじゃねえ！俺たちには人質がいるんだ。強引な真似はできねえさ」

と、リーダー格と思しき男が子分に発破を掛ける。

「そ、そうすっね！」

さっきまで逃げ腰だった子分は威勢を取り戻す。

「へへへっ。なにせ俺たちには高い金を払って手に入れたこいつが

ありますからね」

と、子分の一人が手にしていたジャキンッ！とショットガンのポンプアクションを引き、天井に向け威嚇射撃をした。

「きやああああ！！」

「おとなしくしろ！俺たちの言うことを聞けば殺しはしない。分かったか？」

と、男たちは近くにあった席に乱暴に着く。

その様子を物陰からシャルが観察していた。

（二人はショットガン……。もう一人はサブマシンガン。リーダーはハンドガン。他にも何丁か持っている可能性がある……。とりあえずは……）

そして、辺りを見回すと、シャルはぎょつとした。

みんなが座っているのにもかかわらず、レイだけは立ったままだった。

「なんだ、お前。おとなしくしろって言うのが聞こえなかったのか？」

と、リーダーが来て、レイに銃を向けるが、レイは顔色一つ変えなかった。

「・・・・・・・・・・」

「おい！聞こえないのか！」

と、銃をレイに突きつける。

「・・・そんなもので、俺が怖気つくと思ったか」

「なんだと？ いい度胸をしているな、小僧」

と、ハンドガンのトリガーに指を掛ける。

「・・・・・・・・・・」

そんなところを見てもレイは動じなかった。

「ふん！生意気なガキだ！」

と、リーダーはトリガーを引き、銃声が鳴った。

「なっ！？」

リーダーが気付いた時には、レイは目の前にはいなかった。

「遅いな」

レイはリーダーの真後ろにいた。

「い、いつの間に・・・」

言い切る前にレイは腕でリーダーの首を絞め、そのまま体の向きを変えて、一本背負いの感覚で子分のところへ投げ飛ばす。

「どわぁ!？」

子分の一人はリーダーを受け止める形になり、そのまま後ろに倒れた。

「こ、このガキっ!」

子分の一人がサブマシンガンのトリガーを引いた。

だがその瞬間、サブマシンガンは鈍い音を立て、大きな音を立て破裂した

「ぐわぁっ!？」

子分は破裂したサブマシンガンをとっさに手放した。

レイの手にはいつの間にかリーダーから奪ったハンドガンが握られていた。

まともに狙いを付けずにしてなお、小さいサブマシンガンの銃口に弾丸を命中させた。

それから、足元にあったトレーの縁を踏み、上に上げたところでキヤッチし、そのままトレーを子分にフリスビーのように投げた。

そして、物凄い勢いで飛んでいくトレーは子分の顔面に直撃する。

「ぶっ!？」

子分はそのまま後ろに倒れ、気絶した。

「くっ! ふざけやがって!」

と、リーダーを受け止めていて倒れた子分が立ち上がり、ショットガンを構えトリガーを引いた。

だがその直後、ショットガンは破裂した。

「なにっ!？」

見れば、レイは右手に持つハンドガンでショットガンの銃口内に弾丸を入れ、発射直後だったショットガンの弾丸に銃身内で直撃し、破裂した様子。

「くそっ! ガキ一人に——」

「—— 一人じゃないんだよね」

と、子分の後ろには、美少年——もとい美少女のシャルだった。

「なっ!？」

そして、シャルはそのまま子分の首筋に鋭いチョップを入れた。

「っ!？」

自分は言葉を発することなく、そのまま気を失う。

「く、くそっ！なめやがって！」

と、リーダーが起き上がると、その瞬間に額に衝撃が走る。

見れば、レイがハンドガンを投げ、グリップがリーダーの額に直撃し、しかもその衝撃でハンドガンが暴発し、弾丸がリーダーの頭すれすれに過ぎていき、髪を切り払う。

そしてそのままリーダーも気を失う。

「・・・ふう・・・。一丁上がり」

と、レイは手をはたいた。

「まったく・・・。レイって無茶するね」

と、シャルは男三人から銃を取り上げ、テーブルの上に置く。

自分の一人が懐に一丁のハンドガンを隠していたので、それも回収した。

「なあに。強盗はバイト時代でも結構あったんだ。だから慣れているんだよ」

「そ、そうなんだ・・・」

シャルはそれを聞いて苦笑いをする。

「さてと……。マスコミに公にされる前に退散と行くか」

「そうだね」

と、レイは足元にあったトレーを拾って、カウンターに向かう。

だが、事態は一変する。

「警察に捕まってムシヨ暮らしをするぐらいなら、全て吹き飛ばしてやる！」

と、気絶していたはずのリーダーが起き上がり、コートを広げると、そこにはかなりの数のプラスチック爆弾があった。手にはその起爆装置があり、量からこの店はもちろん、この辺り一帯を吹き飛ばすぐらいの威力はあるだろう。

「……。ふん。最後まで諦めが悪いやつだ」

と、レイは手にしていたトレーを力いっぱい投擲する。

そして、トレーはリーダーの額に当てるが、それが狙いではない。
・リーダーの気を逸らすためだ。

直後にレイはテーブルに踵落としを掛け、テーブルの上にあったハンドガンを飛ばし、シャルとレイはその場を蹴って、それをキャッチすると同時にリーダーに向け数発発砲した。

弾丸はリーダーの手にある起爆装置とプラスチック爆弾を繋ぐコードと、信管だけを撃ち抜いて、そのままリーダーを押し倒す。

「「チェックメイト」」

と、二人は声を重ね、リーダーの眉間にハンドガン突きつける。

「降参する？ それとも――」

「このまま続けて両腕を飛ばされたいか？」

と、二人はジャキッ！とハンドガンの撃鉄を引く。

すると、さっきまでの気迫はなくなり、リーダーは両手を上げた。

「す、すみませんでした！もう悪いことはしません！だから、い、命だけは――！」

と、目から滝の如く涙を流して降参した。

「・・・それでよし、と」

そして、レイは再度リーダーの眉間にハンドガンのグリップで（しかもさっきより強力な一撃で）殴り、リーダーは今度こそ本当に気絶した。

しかし、あまりにも頭を殴りすぎな気が・・・

「さてと、ここで退散とするか」

「そ、そうだね」

と、二人はハンドガンを捨て、そのまま店を退散した。

「ふう……。まあ一件落着でいいかな……」

レイとシャルはあの後店長から本当のところのバイト代より多めに貰い、店を後にした。

その後事前に決めていた買い物より多めに買い物をして、多くの荷物を持っていた。

そして、二人は今店近くの公園にいた。

時間は夕方の四時半。しかし今日は早く夕日が出ており、空をオレンジ色に染めていた。

「……でも、本当にレイって凄いよ……」

「そうか？」

「そ、それは……そうだよ。だって銃であんなに精密な射撃ができて、それもほとんど狙いをつけずにやって命中させているから……本当にすごいよ……」

「・・・俺は普通にやっているだけなんだがな・・・」

「・・・だとしても、あんな危険極まりないことをやらなくても・・・」

「・・・まあ、そういう話は別の時でいいじゃないか」

「・・・でも・・・」

シャルは引き下がろうとはしない。

「・・・そういう顔をするなよ。こうするぞ」

と、レイはシャルの頬を両方からつまむ。

「・・・!？」

シャルは少し驚いている様子。

「・・・や、柔らかい・・・」

そして、レイはシャルの頬から手を離す。

「・・・」

シャルの顔が見る見るうちに赤くなる。

「・・・あっ・・・。ご、ごめん・・・。そういうつもりでやったわけじゃ・・・」

レイは悪いことをしたと思い、シャルに謝る。

「……あつ、いや……。怒っているわけじゃないけど……」

と、シャルは怒っていることを否定する。

「……いや、でも……。顔が赤くなったからさ……。てっきり怒ったんじゃないかって思ったんだが……」

「いや。本当に怒ったわけじゃないから……」

「……そ、そうか……。あ、でも……。すまなかった……」

と、レイは珍しく歯切れが悪く会話する。

「……」

「……そ、それより、喉が渴かない!？」

「……え? ……ああ……。そういえばなんか喉が渴いたな……」

「だ、だから……。ほら、あれ! あそこで何か買おうよ」

と、シャルが指差したほうには、公園内に止まっていたワゴン車があり、クレープ屋のようだ。

「クレープか。ちょうど甘いものも食べたいなって思ったからちよ
うどいいな」

「そ、そうだね。僕も甘いものが欲しかったの。冷たいものも取れていいね」

「そうだな。じゃあ行くか」

レイとシャルはクレープ屋に向かうのだった。

「すみません」

レイはクレープ屋の前に着くと、店員を呼ぶ。

「おや。お客さんか・・・」

呼ぶと店員が出てきた。

「イチゴクレープを二つ下さい」

「すまないね。クレープは最後の一個なんだ」

「え?」

「どうするかね?」

「・・・じゃあ一つ下さい」

「毎度」

と、店員は最後のクレープ生地を使って、イチゴクレープを作った。

「お待ちどう。300円だよ」

と、レイはポケットに入れている財布を取り出し、お金を支払う。

「あつ。僕が払うのに・・・」

「いいよ。これくらい」

そして、レイはクレープを受け取る。

「じゃあ行くか」

「う、うん」

そうして、レイとシャルはクレープ屋を後にした。

クレープ屋の店員は二人の姿が見えなくなったのを確認する。

「まあ実際のところまだ生地はあるけど、一つのほうが二人の雰囲気はよくなるものさ」

と、どうやら狙ったのかもしれない

「おいしい・・・」

シャルはイチゴクレープを食べていた。

レイは食わずに、シャルにクレープを渡した。

「でも、レイが食べてもいいのに・・・」

「まあそういうなよ。俺は別に食べなくてもいいから」

「で、でも・・・。何か悪いね・・・」

そう言いながらもシャルはクレープをかじる。

「まあでも、今日は楽しかったな」

「そうだね。ちよつとしたアクシデントはあったけど・・・」

「そうだな。でも俺は賑やかなほうがいいのさ・・・。強盗以外で・
」

「そうだね」

シャルはにこりとして、レイはその笑顔を見ると、少し顔が赤くな
ったかのように見えた。

時間は夜の九時半・・・

レイは寮の自室にいた。

シャルは寮に着いて、それから自室に戻った。

「はぁ・・・。今日は色々あったけど、楽しかったな」

そうして、レイはベッドに腰掛ける。

「・・・・・・・・・・」

そして、ベッドに寝転がった。

プルルルッ・・・

すると、携帯電話が鳴った。

「・・・?」

レイはベッドから起き上がると、机の上に置いてあった携帯を取り、開いて電話に出た。

「もしもし?」

『ラングレン。私だ』

「お、織斑先生・・・？」

相手は織斑先生だった。・・・て、何で番号知ってんだ？

『こんな時間にすまないが。お前に話すことがある』

「・・・？何でしょうか・・・」

『お前がこの前、無人ISから取り出したメモリーディスクのことだが・・・』

「・・・何か分かったのですか？」

『その無人ISだが・・・。どうやら裏取引がされているみたいだ』

「・・・裏取引・・・？」

『その取引の仲介人が、健造殿を狙った「斉藤組」だと言うことが判明した』

「・・・斉藤組・・・」

『その後調べてみれば、その次の取引先が判明した』

「え・・・。本当です？」

『ああ。そのため学園上層部はこのことに関わりが多いお前に、秘密裏の任務が下された』

「・・・・・・・・なんですと？」

『お前には無人ISの裏取引の阻止をしてもらい、同時に証拠を確保してもらう』

「・・・・・・・・え？ちよ、ちょっと待って下さい・・・・・・・・。じ、自分がその任務を受けるのですか？」

『本当なら生徒に任せることではないのだが・・・・・・・・。お前は経歴が経歴だ。上層部はそこに目をつけたのだろう』

「ええ・・・・・・・・。自分の経歴を調べたのですか・・・・・・・・」

『そのようだな。お前は以前潜入に関する危険な仕事を行っていたのだろう』

「・・・・・・・・その通りです・・・・・・・・」

『そういうことだ。上層部は今回の作戦は重要なことだとしている。失敗は許されない。その分お前にはそれなりの褒美があるようだ』

「・・・・・・・・はあ・・・・・・・・」

『準備はこちらである程度用意する。任務上お前は先の潜入することになるから、メンバーもこちらで選んでおく』

「・・・・・・・・それについてですが・・・・・・・・。そこは自分に任せてください」

『なに？』

「メンバーはそれほど多くなくてもいいですよ。あと一人いればいいです」

『あと一人か・・・誰にするつもりだ』

「・・・自分がそれなりの信頼を持つ人物です。この任務に最適な人物がいます」

『・・・なるほどな・・・あいつなら確かに適任だな』

「ええ。しかし、なぜ自分を選んだのですか？」

『まあ上層部が選んだのは最終決定だ。その前は私が選んでおいた』

「・・・？なぜですか？」

『お前。あのメモリーディスクを見ただろう』

「・・・え？」

『騙しても無駄だぞ。お前があの時無人ISを見回ると言う時点で怪しい』

「・・・うう・・・参りました・・・」

『まあそれで選んだと言うわけじゃないが・・・とりあえず詳細は後日言う。それまでお前は自分ができる準備をしている』

「・・・了解・・・」

そして、電話は切れた・・・。

「・・・・あの人だけ敵わないな・・・・」

レイは改めて織斑先生の恐ろしさを改めて知るのだった・・・。

そうして、しばらくして・・・・

こんこん・・・・

「失礼します。隊長・・・」

「ドアは開いている。入っていいぞ」

「では・・・」

そして、ドアを開け、ラウラは部屋に入る。

「よく来たな。ラウラ」

「隊長がお呼びになるのは珍しいですね・・・。それで、ご用件とは？」

「ラウラ・・・・。これは重要なことだ。他の者には絶対言うなよ」

「・・・・了解しました」

「よし。用件だが・・・」

そして、レイはラウラに用件を話し、今後のことも話した・・・

Story 21 それぞれの休暇 『シャルロット編』（後書き）

今回ちょっと投稿が遅れて、3話連続でした・・・。

ちなみに、今後あるイベントのときに現れる敵についてですが、原作通りにしますが、そのあとに現れるという感じにしています。

二体出現させようと思いますが、一体は決まっていますのですがもう一体がなんとなく決まっていない・・・。

なので、もう一体は何にしようかを聞きたいと思っています。

ちなみに候補としては・・・

? 暗黒騎士アキレス 「ダンボール戦機」

? ジョーカー（黒） 「ダンボール戦機」

? ハカイオー王牙（黒） 「ダンボール戦機」

? ナインボール 「アーマードコア」

? ビャッコ（黒） 「ダンボール戦機」

? I-CFFF-SERRE (ACSLのラスボス) 「アーマードコアサイレントライン」

・・・です。

多かった方で決まります。

S t o r y 2 2 それぞれの休暇？ 『ラウラ編』

そして、次の日・・・

レイとラウラは町の路地裏にいた。

「ところで隊長・・・。一体ここで何をするのですか？」

「まあ黙ってついて来い。そのうち分かる」

といって、レイは路地裏を進んでいく。

「・・・・・・・・・・」

ラウラは黙ったまま、レイについていく。

レイの服装は昨日と同じで、ラウラはIS学園の制服だった。

「ここだな・・・」

そしてレイは古びた扉の前で止まる。

「ここは・・・？」

「俺がちょっと前にここで色々と助けてもらったところさ」

そういうと、レイはドアをノックする。

「・・・合言葉は・・・」

と、お年寄りの声が返ってきた。

「――――」

と、レイは何やら言葉なのか分からない暗号のような事を言った。

「そ、その合言葉は!?!」

すると、今度は驚いたような声が返ってきた。

「俺ですよ。おじさん」

「・・・! その声は・・・!」

そして、扉が開くと、一人のお年寄りが出てきた。

「おおお・・・。れ、レイ君か・・・」

「お久しぶりです。おじさん」

「いやぁ・・・。夢ではないだろうか・・・」

と、お年よりは目をこする。

「夢ではありませんよ」

「そ、そうだな……。ところで、そこの方は？」

「ああ。俺の連れです。それより、入ってもいいでしょうか？」

「ああいいとも。ささ、入ってくれ」

そうして、レイとラウラは中に入っていく。

中はかなりボロボロで、ほこりが結構あった。

「隊長……。ここは一体……。？」

「じきに分かるさ。おじさん」

「わかつとるよ」

と、お年よりは壁によると、額縁をずらすと、そこにスイッチがあり、それを押す。

すると、隣の壁が動き出し、入り口ができた。

「こ、これは……。？」

そして、レイとお年寄りが入っていき、ラウラもその後を追う。

「こ、これは！？」

ラウラが中で見たもの……。それはかなりの数が並んだ武器の数々であった。

「おじさんは正式な武器商人なんだ。ここはその武器倉庫なのさ」

「こ、こんなに……」

「しかし、本当に揃えはいいね」

「そりゃそうとも。わしは『便利屋』とも呼ばれておるのじゃ。このくらい普通じゃよ」

「そうだった」

「……」

ラウラは会話を聞くと、そのまま武器を眺めていく。

「……しかし、あのお嬢さんは武器に興味津々だね。普通なら怖がるはずじゃが……」

「……ラウラは現役の軍人だよ」

「な、なんと。あの若さで軍人とは……」

「まあいろいろあるけど、とりあえず、鎮圧用の武器はある？」

「そりゃもちろん。こちらです」

と、壁にスイッチを押すと、右側の壁が開き、武器が出てきた。

どれも鎮圧に使われるものばかりだ。

「さすがだ」

そして、レイは鎮圧用の武器を選んでいく。

「しかし、今度は一体どんな依頼を受けたのですか？」

「受けたと言うよりは、任務を任されたって所かな」

「おや？それはどういうことですか？」

「詳細はいえないな。他言無用な件だから」

「そうですか・・・」

そして、レイはそこで閃光手榴弾や、様々な装備を選んでいった・・・

そうして、二日後の夜の十時半・・・

ここはとある港……

そこに置かれたいくつもののコンテナの一つの陰に、人影があった。

それは、黒い服装に見を包んだレイとラウラであった。

黒い軍服……と言う感じのものだった。

「織斑先生。目的地に到着しました」

『よし。お前たちはそのまま予定通り潜入しろ』

「了解」

と、レイはインカムで織斑先生と通信して、辺りを見回す。

織斑先生ほか巨教師部隊は後方で待機しており、出撃状態で待機している。

「いくぞ。ラウラ」

「了解」

そして、二人は足音をなるべく立てずに港内へ入っていく。

「……………」

そうして、レイとラウラは港の中央まで来ていた。

裏取引は港奥の倉庫で行われるらしく、そこだけ電気がついていた。しかし、その倉庫の少し離れたところで、レイとラウラは足止めをくらっていた。

『・・・見張りが二人か・・・』

『ええ。しかも場所が悪いですね。ここからすぐ出たら一発で発見されてしまいます』

『そうだな。しかし鎮圧弾で黙らせるのも無理か・・・』

『どうでしょうか・・・』

『・・・やっぱり・・・こいつの出番だな』

『え?』

二人はISのプライベート・チャンネルで会話し、レイは胸ポケットから、あの端末を取り出した。

そして、画面を開き、CCMを起動させた。

すると、レイの肩にジライヤが下りてきた。

「そ、それは・・・?」

ラウラは少し驚いている。

「なあに、ちょっとした偵察のロボットさ」

そして、ボタンをいくつか押すと、ジライヤは地面に降りてそのまま走っていく。しかも足音はほとんどなしで。

そうして、コンテナの陰に着くと見張り二人を見る。

「よし・・・」

そしてレイは操作し、ジライヤは背中に掛けていたスナイパーライフルを取り出し、前に構えた。

そして、狙いをつけて見張り二人に発砲し、弾は見張りの首に当たった。

「「!?!」」

すると、見張りが倒れ、そのまま寝てしまった。

「・・・これは？一体何が・・・」

ラウラはCCMに映るその光景に驚く。

「結構強力な睡眠弾を撃ち込んだのさ。ゾウでも丸一日寝て、人間じゃ丸二日寝る代物さ」

「・・・す、凄い・・・」

「さてと、次と」

そして、ジライヤはスナイパーライフルを背中にからうと、そのまま走っていき、倉庫の近くに着くとそのままジャンプし、倉庫の屋根に着地して、ゆっくりと上っていく。

「・・・・・・・・・・」

そして、屋根のてっぺんにつくと、その窓から中を覗く。

そこには、男性が多人数おり、何かを話していた。

レイはCCMを操作し、ジライヤの收音マイクを展開し、会話を聞く。

「・・・それで、今日はどういうものなんだ？」

『ああ。今日は新しいやつが入ったんだ』

『ほう。どんなやつだ？』

『それなんだが、どうもいつものやつと比べると結構違う箇所が多いんだ。新型と言う感じってわけじゃないんだ』

『なんだと？どういうことだそりゃ？』

『まあでも、俺たちが取引で貰っているやつと比べると、かなりの高性能機だ』

『なるほどね。「デクー」や「デクー改」、「デクーエース」より

も高性能機ってわけか』

『ああ。さらにそれらを作っている「あの組織」とは別の組織が作ったものらしい』

『なに？　どういうことだ？』

『それは俺たちも知らないんだ。だが、こいつは実戦実験を行う予定だったのに別の機体にもその実験現場を奪われた物だってよ』

『なるほど……。で、その未使用機ってことか……。』

『まあそうだが……。でも、今回使用する。あいつを始末するためにな』

『なるほど……。』

「……………」

レイはジライヤを通し、全て聞いた。

「……隊長？」

「……ラウラ……。行くぞ」

そして、レイはそのまま走っていき、ラウラはすぐに後を追う。

「よし……。何とか着いたな」

そして、見張りを倒しながらレイとラウラは何とか倉庫にたどり着く。

「ラウラは外で見張っていてくれ。俺は中に侵入してデータを盗んでいく」

「了解」

そして、レイは倉庫にゆっくりと入っていく。

「……………」

レイは忍び足でコンテナに沿って歩いていき、中を確認する。

すると、さっきまでいた男性たちがいなくなっていた。

（……………どういことだ？なぜいなくなっている……………）

そして、レイは走っていき、台に置かれていたパソコンに向かい、中を見る。

「……………!？」

そして、レイは驚いた。

「データが・・・ない？」

何度も見直すが、パソコンの中にはデータが一つも残さず消されていた。

かっち こっち かっち こっち

「・・・・・・・・？」

レイは何か変な音がするのを聞く。

そして、足元を見るとそこに驚きのものがあつた。

「・・・！？時限爆弾！？」

そこには、時計の針が動き、時間通りになると爆発するというかなり古い爆弾だった。

だが、問題はそこではない。その量だった。

「まずい！」

台の下にはかなりの数のプラスチック爆弾があり、もう時間になりそうだった。

レイは必死になって、逃げていく。

「ラウラ！」

レイは出口手前で名前を叫ぶ。

「隊長？」

ラウラはまだ何が起るのかわからなかった。

「伏せろ！」

そしてレイはそこから飛び出し、ラウラを抱きかかえた。

「!？」

その直後、倉庫が大爆発をした。

「……た、隊長……」

「……大丈夫か……ラウラ……」

レイはラウラを爆発から庇い、破片が背中に当たり痛みが走っていた。

「そ、それより……。一体何が……？」

「……どうやら……。気付かっていたようだ」

レイはゆっくりとラウラの上からのき、半身を起こす。

「どういふことですか・・・？」

「・・・やつらは気付いて、データを他の場所に移したようだ・・・。そしてそれを取りに俺たちは倉庫に侵入する・・・。それを狙って時限爆弾を仕掛けていたようだ」

「・・・・・・・・」

「見張りからの通信がなくなれば、怪しむのも当たり前か・・・。だが予想以上に早かった・・・。・・・その次は・・・」

そして、レイはとっさに起き上がると、ラウラの手を取った。

「!？」

二人が小型コンテナの陰に入った直後、銃弾がコンテナに当たった。レイはゆっくりとコンテナの上から前を見ると、コンテナの陰に兵士がおり、銃撃を行っていた。

「伏兵・・・!」

「ああ。そのようだな・・・」

そう言いながらも、レイは腰のベルトにかけていたハンドガンを取り出し、前に向け発砲する。

すると、少し離れたところで機械の音が響く。

「・・・この音は・・・クレーンの音・・・？」

ラウラが応戦しながらその音を聞く。

「・・・！まさか・・・！」

レイはある事に気付いた。

「まずい。やつら無人ISを運び出す気だ」

「・・・そ、そうか。こいつらの目的は時間稼ぎか」

「そのようだな。だったらここで時間を潰しているわけにはいかないな！」

と、レイは後ろ腰にかけていた閃光手榴弾を前に放り投げた。

そして、閃光手榴弾が破裂し、膨大な光が漏れる。

「行くぞ！」

レイとラウラは破裂する寸前でゴーグルを掛けて、光を遮断して兵の間に走っていく。

兵はどうやら暗視ゴーグルを掛けていたらしく、通常の倍近くの光を目に焼き付けられたのか、地面に倒れもがいていた。

そして、レイとラウラが到着した時には、トレーラーが発進してい

た。

「しまった！」

レイは追いかけるも、既に距離が開いているので追いつけなかった。

「くそっ・・・不覚だった・・・」

レイは拳を握るも、織斑先生に通信をした。

「織斑先生」

『どうした？』

「教師部隊を送って下さい」

『・・・何があった？』

「無人ISを乗せたトレーラーがここから逃走しました」

『なに？』

「そのため、自分とラウラでトレーラーを追撃します。それで、教師部隊で港の制圧をお願いします」

『・・・わかった。トレーラーの追撃はお前達に任せる。・・・頼んだぞ』

「了解」

そして、レイは通信を切る。

「ラウラ……。行くぞ」

「了解」

そして、二人は気を集中させる。

「ファントム……。展開！」

「来い……。シュヴァルツェア・レーゲン！」

二人の体の回りに光が纏い、服装を量子変換してISスーツに変換させてそれぞれのISアーマーを身に纏った。

「行くぞ！」

「了解！」

レイとラウラはトレーラーを追撃した。

「……。見つけた」

レイはISのハイパーセンサーでトレーラーの姿を捉えた。

トレーラーは高速道路を走っていた。

『どうしますか？隊長』

『やつらが何をしでかすか分からん……。だがこのまま市街地に入れたらこっちが不利だ。一気にけりをつけるぞ』

『了解』

レイとラウラはプライベート・チャンネルで通信をして、トレーラーに向かっていく。

だがその直後、トレーラーのコンテナから攻撃が来た。

「！」

レイはとっさに回避した。

「あれは・・・！」

コンテナのほうを見ると、コンテナ上にいくつか無人ISが出てきた。

『デクー』に『デクー改』、さらに『インビット』と呼ばれる無人ISが配置されており、レイ達に攻撃を掛けてきた。

「あいつら・・・あの時の・・・！」

レイはインビットと以前戦ったことがあるので、知っていた。

「くっ！・・・防衛用か・・・！」

ラウラはA I Cを使いながら攻撃を避けていた。

「ラウラ！このまま避けても時間の無駄だ。一気に行くぞ！」

「了解！」

そして、レイとラウラは攻撃を回避しながらも、コンテナに向かっていく。

「アーベント、ナハト。先に行け！」

レイが命じると、アーベントとナハトが展開し、そのままレイ達よりも先にトレーラーに向かっていく。

「こっちも行くぞ」

レイは右手に『イグゼキューションー』を展開し、移動しながら砲撃を開始した。

弾丸は正確無比にコンテナ上にいるデクー二機の胴体を貫き、撃破した。

「くらえっ！」

隣ではラウラが右肩のレールカノンで砲撃をして、弾丸はインビットに直撃するも、弾は弾かれた。

「くっ！・・・エネルギーシールドなしでも、なんて硬い装甲だ・・・」

インビットは弾の直撃で一瞬ぐらつくが、すぐに立て直し、単発銃で攻撃を掛けてきた。

「ラウラ！やつには強力な攻撃を掛けないと倒せない」

「ど、どうするのですか？」

「援護しろ！俺が突っ込む」

「りよ、了解！」

そして、レイは弾丸の雨の中、回避しながら両腕の『グランプラスマカッター』を抜き放ち、その二つを繋げ『大剣モード』にした。

「どりゃあっ！」

レイは一気に突っ込み、コンテナ上に着地する。

その直後、一体のインビットがファントムに向かっていく。

「隊長！」

すると、レイはその場を蹴って回転し、インビットの頭を蹴り、後ろに飛ばした。

それにより、後ろにいたデクー改やインビットを巻き込んで倒れた。

「行くぞ！必殺ファンクション！」

「アタックファンクション！ライトニングスラッシュ！」

ファントムはグランプラズマカッターにエネルギーを纏わせ右手首を高速回転させ、そして勢いよく振り払い、エネルギー波を射出する。

エネルギー波は身動きが取れなかった無人ISたちを切り裂いた。そしてその直後に爆発し、撃破した。

「よしっ！」

レイはガッツポーズを取る。

「・・・ば、馬鹿な・・・」

トレーラーの運転席ではさっきのリーダーらしき男とその子分が乗っていた。

「デクーとデクー改にインビットが・・・全滅・・・？・・・三分も経たずにか・・・」

無人ISが全滅したことに相当ショックを受けている様子・・・

「デクーはともかく……。デクー改とインビット四体が全滅……。化け物か……」

「お、親分！」

「ど、どうし……。!?」

すると、トレーラーの前に突如ナハトが下りてきて、トレーラーと激突する。

その直後、ブースター全開でトレーラーを止める。

それを見て、後方にいたアーベントがパルチザンランチャーでトレーラーのタイヤを全て撃ち抜き、トレーラーはバランスを崩し、横転する。

火花を散らすも、ナハトの推進力でトレーラーは止まった。

「く、くそっ！ここで捕まってたまるか！」

と、往生際が悪く、リーダーはノートパソコンを手に逃げようとした。

だが、アーベントはそれを逃さず、パルチザンランチャー上部の銃口より弾を発射する。

それは目標に到着直前で破裂し、ネットを展開し、リーダーを捕らえた。

「よくやったぞ。アーベント、ナハト」

と、少ししてレイとラウラが来た。

アーベントは捕虜が入ったネットを持ち上げ、ナハトはそこからノートパソコンをリーダーから押収した。

「データは入手できましたね・・・教官に報告を・・・」

「いや。その前にコンテナの中を調べるぞ。まだ何かありそうだからな」

「分かりました。では、私は辺りを見張っておきます」

「そうしてくれ。アーベントとナハトもそうしてくれ」

レイがそう言うと、アーベントとナハトはうなずいたかのように頭を少し下げる。

そしてレイはコンテナの扉を破壊し、中に入る。

「・・・・・・・・・・」

中は開きコンテナが散乱していて、どうやら無人ISはここから出て迎撃行動に移ったみたいだ。

「・・・わざわざ取引対象を使ってまで逃げようとしたのか・・・」

レイはコンテナを退かしながら奥に進む。

「・・・ん？」

進んでいくうちに、レイは奥にあるコンテナを見つける。

まだ空けられてないコンテナだった。

「・・・まだ未使用のやつがあったのか・・・」

そして、レイは近付こうとした・・・その時！

「警告！前方のコンテナにエネルギー反応を確認」

「なにっ!？」

そして、コンテナをぶち抜きビームが飛び出てきた。

「ぐわあっ!？」

レイはビームを受け後ろに飛ばされる。

「く、くそっ！」

レイはとっさにファントムの胴体の出っ張りを開き、ニュートロン
ブラスターを発射し、コンテナをぶち破り、そのまま上に飛び出た。

「隊長!？」

ラウラはコンテナから飛び出るレイの姿を見る。

「ラウラ！戦闘準備だ！」

レイはラウラの隣に着地すると、コンテナから何かが這い出てきた。

「あ、あれは……」

コンテナから出てきたものは、一体のISだった……

全体の色は黒で、姿は機械仕掛けで、全身にはスラスターが配置され、両腕は異様に太く、そこには銃口があり、両肩には腕より少し小さい銃口があった。頭には不規則にカメラアイがあり、赤く不気味に光っていた。

製造元不明のIS……『ゴーレム？』

「くっ……。会話の中にあった未使用のISはこいつのことか……！」

レイは両腕より再度グランプラズマカッターを抜き放つ。

「アーベント、ナハト！ここから離れろ！」

レイが命じると、二体はその場を離れるように飛ぶ。

「隊長、来ます！」

すると、ゴーレム？は背中中のスラスターでレイ達に向かっていき、両肩の銃口より拡散ビームを発射する。

「くっ！」

レイは両手のグランプラスマカッターを回し、ビームを弾く。

だが、ゴーレム？はそのまま突き進み、ファントムを殴る。

「ぐはっ!？」

その勢いでレイは高速道路のガードレールの背中を強く叩きつけられる。

「ぐっ・・・ど、どうということだ・・・？」

いつもならこのくらい痛みはないはずだが、今は激痛が走っていた。

「ま、まさか・・・」

レイの予想は的中した。

「敵ISより未知の妨害電波が発せられ、シールドに障害が発生」

「く、・・・こいつは対IS用のISか・・・！」

レイは痛みを堪えながら立ち上がり、グランプラスマカッターを繋げ、大剣モードにしてゴーレム？に向かっていく。

「ラウラ！注意しろ。こいつの攻撃は全て直で来るぞ！」

「な、なんですって!？」

しかし、ラウラはよそ見をして、ゴーレム？の攻撃を見落としてしまった。

「しまっ・・・」

そして、ゴーレム？の鉄拳がラウラの腹に直撃する。

「ぐはっ!？」

ラウラはそのまま後ろの飛ばされるも、直後にレイがラウラをキャッチする。

「大丈夫か、ラウラ！」

「・・・は、はい・・・。大丈夫です・・・。・・・うつ」

ラウラは殴られた箇所を押さえる。

「・・・ラウラ。やつの攻撃はあまり受けずに攻撃をしろ」

「りよ、了解・・・」

そして、レイはラウラを離すと、グランプラズマカッターを構え、ゴーレム？に向かう。

しかし、ゴーレム？は腕のビーム砲を向けて砲撃をする。

「くっ」

レイはグランプラズマカッターを盾にしながらゴーレム？に近付い

た。

「どりゃあっ！」

そしてレイはグランプラズマカッターを振り払うが、ゴーレム？は見かけによらず素早い動きで避けた。

「ちっ、すばしっこい！」

レイは左手に『アサルトAR3』を展開し、ゴーレム？に攻撃した。だが、ゴーレム？は素早く避ける。

「くそっ！」

すると、後方から弾丸が飛び、それがゴーレム？に直撃した。

「・・・ふっ。さすがだ・・・」

それは、レールカノンを構えるラウラの姿があった。

しかし、ゴーレム？はすぐに体勢を立て直し、ラウラに向かっていく。

ラウラはとっさにカノンを上に上げ、後方に下がりながらワイヤーブレードで応戦した。

「くっ。織斑先生」

レイはプライベート・チャンネルで織斑先生に通信した。

『どうした?』

「未確認のISを確認。応援を要請します」

『・・・そうしたいところだが・・・』

「・・・?何かあったのですか・・・?」

『こっちは港に残っていた無尽ISと交戦中だ。応援をよこすことはできない』

「・・・やはり残っていたのか・・・」

『そっちはデータを入手したのか』

「はい。今はナハトに持たせてここから離れさせています」

『そうか・・・。こっちもどんぱちが済み次第、そちらの援護に向かう』

「了解」

そうして通信を終え、レイはゴーレム?を追い、アサルトAR3でゴーレム?に攻撃を掛ける。

後ろを向いていたゴーレム?でもさすがに回避はできず、背中に攻撃を受ける。

「-----」

ゴーレム？はゆっくりと振り向くと、両肩の拡散ビームを放つ。

レイはとっさにグランプラズマカッターを前に出し、ビームを弾いていく。

そして、ゴーレム？は右手でレイに殴りかかってきた。

「ここだ！」

そして、レイはゴーレム？の腕が目の前に来た直前で急上昇し、攻撃をかわす。

「どりゃあっ！」

レイはそこからグランプラズマカッターを振り下ろし、ゴーレム？の腕を切断した。

「どうだ！・・・。ぐっ！？」

しかし、切断直後ゴーレム？は左手でファントムを殴る。

「隊長！」

ラウラが向かおうとすると、ゴーレム？は急にその場で旋回し、その勢いで左手で殴ろうとしていた。

「くっ！」

ラウラはとっさに上昇しようとしたが、ゴーレム？の一撃は避けら

れず、拳はラウラの右足に直撃した。

「ぐあああああっ!!」

ラウラの悲痛な叫びが聞こえ、足に激痛が走る。そしてラウラはバランスを崩し、墜落する。

「ラウラっ!」

レイは『瞬間加速』を掛け、一気にゴーレム?の懐に侵入した。

「-----」

「でりゃあああっ!!」

そしてレイはグランププラズマカッターを振り上げ、ゴーレム?の胴体を切り裂く。

「ぐはっ!?!」

だが、ゴーレム?はすぐに右足でレイを蹴り飛ばす。

「.....ふっ...」

レイはファントムを装着している時は顔が見えないが、恐らく笑みを浮かべているのだろう.....。.....勝利の笑みを.....

「-----」

すると、ゴーレム?の胴体に何かが撃ち込まれた。

それは、当たり所によってはISを一撃で倒すことができる『徹甲榴弾』であった。

ゴーレム？の視線の先には、レールカノンを構えるラウラの姿があった。

「どうだ・・・！」

「――――」

しかし、何も起きない。

「なにっ!？」

すると、ゴーレム？がラウラに向かっていく。

「うおおおっ！」

レイはその間に入り込み、グランプラズマカッターを構える。

「必殺ファンクション！」

「アタックファンクション！ギガクラッシュ！」

グランプラズマカッターにエネルギーが充填され、レイはそれを一気に振り上げる。

ゴーレム？は左腕のビーム砲をレイに向けビームを放つ。

「どりゃあああっ！！」

そして、レイはグランプラズマカッターを振り下ろし、ビームを切り裂き、そのままゴーレム？の胴体に切りつける。

その直後、胴体に埋まりこんだ徹甲榴弾が爆発した。

「—————」

そして、ゴーレム？はそのまま後ろにゆっくりと倒れていった・・・

「はぁ・・・はぁ・・・」

レイはその場に膝を着いた。

「や、やりましたね・・・。隊長・・・」

ラウラはゆっくりとレイに近付いた。

しばらくして、織斑先生率いる教師部隊が到着した。

今思えば、場所は高速道路から下りて少し進んだところの空き地だった・・・

「……しかし……お前たちだけで倒すとは……さすがだな」
織斑先生はまだISアーマーを装着したまま休んでいたレイとラウの元にいた。

「さ、さすがにきつかったですけど……。何とか倒しました……」
「うむ。それで機体はあんまり破壊していないのだろう」

「ええ……。しかし爆発が強かったので、多分一部のデータが吹っ飛んでいると思います」

「……まあ、それで済めばいいほうか……」

と、織斑先生はため息をつく……。ため息つくほどか？

「それで、データは？」

「はい……。ここにあります」

レイはファントムの右手にあったノートパソコンを織斑先生に渡す。

「……ごくろうだった……。これで大きく分かればいいが……」

と、織斑先生が前を見ると、連行される斉藤組のメンバーが見えた。

「……まあ詳細は分かり次第話す。お前たちは帰っていいぞ」

「分かりました」

そして、織斑先生は他の教師陣と合流する。

「さてと、俺たちも帰るか」

「そうですね」

と、二人はISアーマーを解除し、量子変換で元の服装に戻った。

「・・・うっ！」

すると、ラウラが地面に着地した瞬間体勢を崩した。

しかし、ラウラは地面には倒れなかった。

なぜならば、直後にレイがラウラを抱きかかえたからだ。

「・・・た、隊長・・・」

「大丈夫か・・・？」

「・・・は、はい・・・」

すると、ラウラの顔が赤くなったように見えるのは気のせいかな？

「どうしたんだ？」

「・・・ええと・・・その・・・足が・・・」

「・・・足が・・・」

すると、レイは一旦辺りを見回すが、ちょうどいいイスがなかった。

「・・・仕方がない・・・」

「え?・・・!!?」

すると、レイはラウラをお姫様抱っこのようにして抱えた。

「た、た、隊長・・・!?!」

「この辺りイスがないから、近くの公園に行こう。そこで見てみるよ」

「・・・・・・・・」

ラウラは珍しく食い下がろうとはしなかった。

そして近くの公園に着き、ベンチにラウラを座らせた。

「どこが痛いんだ?」

「・・・み、右足です・・・」

ラウラはゆっくりと靴を脱ぐが、痛いのか顔を歪める。

そして靴下を脱ぐと、足首辺りが青紫にひどく腫れていた。

(・・・あの時の攻撃で・・・)

ゴーレム？の強い攻撃がラウラの右足に直撃した。恐らくそれだろう・・・

「・・・・・・・・立てそうか？」

と、ラウラは立とうとするが、どうもあまりにも痛いのか顔が歪む。

「・・・・・・・・だめか……。これじゃ骨折まではいかなだろうが、骨にヒビが入っている可能性があるな」

と、レイは腰に付けているポーチから、包帯を取り出し、それをラウラの右足首に巻いていく。時よりラウラは痛そうにする。

「これでよし・・・」

「・・・あ、ありがとうございます・・・」

「このくらいいいよ」

と、レイは包帯を収納すると、ラウラの靴と靴下を持って、ラウラの前に座る。

「・・・・・・・・隊長・・・・？」

「その状態じゃ歩けないだろ？だから俺が寮までおぶって行くよ」

「そ、そんなことを隊長に・・・」

「ラウラ・・・無理をするな・・・。時にはこうしてもいいんだぞ」

「・・・・・・・・」

ラウラはレイの言葉で、おとなしくレイの背中に乗る。

「じゃあ掴まっているよ」

レイはラウラをおぶって、歩いていく。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ラウラはレイにおぶられながら、考えていた。

（・・・なんだろう・・・この感じ・・・。なんだが懐かしいような・・・）

レイの背中から伝わる温もり・・・。それは以前にも感じ気がする・・・

（・・・・・・・・・・・・・・・・）

そして、ラウラは思い出した……。この温もりで、かつて消されていた記憶が蘇った。

（……そうだ……。思い出した……。あの時と同じだ……）

ラウラは、そのときを思い出した……。

今から八年前のことであった……

まだラウラがああ『施設』にいた頃だ……

そしてこの頃に『ラウラ・ボーデヴィツヒ』と新たな名前……いや、記号を与えられた頃だ。

まだISの適応を高めるための処置を施していない状態だった。

「……………」

その時のラウラは、兵舎へと帰っていた。

単独訓練を終え、でこぼこした道を歩いていた。

「……早く帰らないと……」

訓練場所はいつもと違い、ラウラがいる部署と違う部署の使う訓練所の近くだったので、結構遠かった。

しかし、どうもラウラはふらふらしているように見える。

「………?」

すると、ラウラは突然倒れた。

ふらふらしていたので、足元にあった少し大きい石を踏み外したのだった。

（……身体が……熱い……?）

ラウラは身体が異様に熱いことを感じる。

ここ最近過酷な訓練が多かったので、疲れがかなり溜まっていたのだろう、それが限界を超えたのだった。

（……だめだ……）

ラウラは何とか身体を動かすが、かなり重く感じた。

（……た、助けを……呼ぶにも……通信機を持っていない……。持っけていてもここでは通信が行えない……）

助けは呼べない……。しかもここは日照りがよく、ラウラの身体をどんどん焼いていく。
それによって、身体から汗がどんどん出る。

(……。た、助けて……。)

ラウラは助けを呼ぶも、来るわけではないので、そのまま目を閉じようとした……。

だが、その直後にラウラに影が覆った。

「……………」

ラウラはゆっくりと顔を上げると、そこに一人の少年がいた。

ちょうど太陽を遮っている形なので、逆光で少年の顔は見えなかった。

「大丈夫か？」

「……………」

ラウラは答えなかった。

「……………こんなところで倒れていたら大変だぞ」

と、少年はラウラの身体を起こした。

「……………」

「・・・はぁ・・・。ありがとうぐらい言ってくれてもいいと思うが・・・？」

「・・・あ、ありがとう・・・」

「それでよし・・・」

と、少年はラウラの前で後ろ向きになってしゃがんだ。

「・・・なんのつもり・・・？」

「決まっているだろ？おんぶだよ」

「・・・必要・・・」

「ないはなしだ」

「・・・・・・」

「熱もあって、足もくじいているだろ？　じゃぁ無理はするな」

と、少年は言う。ラウラは本当のところ左足首をくじいていた。そのため歩くことも困難だった。

「・・・・・・」

ラウラは素直に少年の言うことを聞き、少年の背中に乗った。

「じゃぁ掴まっっているよ」

そして、少年は歩いていく。

「……そういえば、聞いていなかったな……。君なんて言う名前なんだい？」

「え……？」

しばらくして少年が聞いてきた。

「名前だよ……。って言ってもナンバーぐらいか……」

「……」

「まあ言いたくないのなら聞かなくていいけど」

「……ラウラ……」

「え……？」

「……ラウラ……ボーデヴィツヒ」

「ラウラ・ボーデヴィツヒか……」

「・・・最近・・・新しく貰った・・・」

「そうか・・・」

「・・・あなたは・・・？」

「・・・俺は・・・別に聞かなくてもいいよ・・・。今後会うことがないと思うから・・・」

「・・・何で・・・？」

「・・・ラウラと俺は所属部署が違うんだ。だからこうやって会うのも偶然なんだ」

「・・・それでも・・・教えて・・・」

「・・・。俺は・・・レイ・ラングレン」

「・・・レイ・・・」

「君の部署はこのまままっすぐだよね？」

「・・・うん・・・」

「分かった・・・」

そして、レイは歩いていく・・・。

それから、レイの言うとおり、会う機会はなく、さらにレイは危険分子と見なされ、施設から追放された・・・。

その後、私はレイと会ったことが発覚し、記憶操作でレイに関することを消され、代わりに植えつけられたのはレイを倒すということだった・・・。

でも、私の記憶から消えても、身体は覚えていた・・・。レイの背中から伝わる温もりを・・・。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

そして、ラウラはその記憶を思い出した。

（・・・あの時・・・隊長が来なかったら・・・私はここにいなかったかもしれない・・・。そんな命の恩人を倒そうとしたのか・・・私は・・・）

ラウラは自分が情けないと思った。

そして、自然に涙が流れた・・・

「・・・・・・・・？ どうしたんだ？」

ラウラの異変にレイは気づいた様子・・・

「・・・・・・・・なんでも・・・・・・・・ないです・・・・・・・・」

「・・・・・・・・そうか・・・」

レイは深く聞こうとはしなかったが、ラウラが泣いていることは分かっていた。

「もう少しで寮に着くからな・・・」

「・・・・・・・・――」

「え・・・？」

「・・・・・・・・もう少しだけ・・・・・・・・」

「・・・・・・・・もう少しって・・・・・・・・」

「・・・・・・・・お願い・・・・・・・・」

「・・・・・・・・分かった・・・。少し回り道で行くか」

そうしてレイは少し回り道で寮へと向かった。

（・・・レイ・・・。あなたを・・・守りたい・・・あの人のように・・・）

ラウラは、かつて自分が助けてもらったように、自分もレイを助きたい・・・そう決めたのだった・・・

S t o r y 2 2 それぞれの休暇？ 『ラウラ編』 （後書き）

・・・中々投票がないですね・・・。

まあそれが出てくる回までまだありますのでまだ続けますが・・・
それでもなかった場合こちらで決めます。

ちなみに決まっている機体というのが、『秒殺の皇帝』の異名を持つあの機体です。

Story 23 それぞれの休暇 『帯編』

「ふう・・・」

レイは昼寝から起きて、大きく背伸びをする。ちなみに時間は午後一時半・・・

あれから三日経ち、レイは学園から感謝状が送られ、報酬としてかなりの額が送られた。

・・・といって、レイには使うことはあまりないので、健造に半分近く送った。

「・・・んー、いてて・・・」

レイは肩を抑える。あの時の痛みが残っていた。

「・・・はあ・・・。ラウラはどうだったのかな・・・俺より怪我がひどかったはずだが・・・」

と、心配後と言っていると・・・

プルルルル・・・

「ん・・・？」

すると、携帯電話が鳴っていた。

「誰だろう・・・？」

レイは携帯を取り、電話に出た。

「もしもし？」

『おおーレイか！久しぶりじゃのう！』

と、鼓膜が破れるかと思うほどに大音量の声が携帯から出てきた。

「・・・じ、じっちゃん・・・。鼓膜が破れるかと思ったぞ」

『おお、すまんのう！なにせ久しぶりだったからな。それにわしのところにマネーを送ってくれたそうじゃのう』

「ああ。届いたの」

『そうじゃ。今回はかなり稼いだのう！』

「・・・報酬だよ・・・。その半分」

『なんと、これでも半分か・・・。はっはっは！凄いなお前さんは！』

「・・・それだけを言うために電話を掛けたの・・・？」

と、ため息のように息を吐く。

『おおそうじゃった。忘れるところじゃった……。実はのう、お前さんに頼みたいことがあるんじゃない』

「頼み？」

『そうじゃ。内容はというと————』

「……なるほどね……」

『ど、いうわけじゃ。今日の六時じゃぞ？』

「……はいはい……。分かりましたよ……」

そして、レイは電話を切る……

そして、時間は夜七時……

ここは篠ノ之神社……。

その名の通り、箒の実家である。

そこで、夏祭りが行われていた。

「いや・・凄いな・・さすが篠ノ之神社だ」

「そ、そうだな・・」

そこに、一夏と浴衣姿の箒が歩いていた。

祭りと言う事でそこにはたくさんの人がいて、賑やかであった。

「そういえば夏祭りに行くのは二年ぶりだな。去年は受験で忙しかったからな・・・」

「・・・・・」

「箒？」

「な、なんだっ!？」

箒はすぐそばにあった一夏の顔に驚き、とっさに後ろに下がる・・。

「こら、暴れるなよ。他の人にぶつかるぞ」

「う、うむ。すまない・・」

「で、最初はどこに行く？」

「そう、だな・・・」

と、箒は辺りを見回す振りをして、一夏をチラッと見る。

（・・・今は紛れもなく二人っきりだ・・・。学園内ではなく、プレイヤーで・・・）

と、考えていると・・・

「そういえば、箒って金魚すくい苦手だったよな」

「い、いつの話だ！いつの！」

「ん？今は違うのか」

「当然だ。いつまでも昔のままだと思うなよ」

「・・・じゃあ勝負だ。負けたら食べ物をおごるっていうのはどうだ」

「いいだろう。望むところだ」

と、腕を組み威厳を放つ箒・・・。威厳はあんまりないけど・・・

そして少し歩いていくと、目的の場所があり、一回分の料金を払う。

「あ、でも、箒浴衣だよな。大丈夫か？」

「和服の扱いには慣れている。手加減と心配は無用だ」

「そっか……。じゃあ勝負！」

「望むところ！」

そして二人のモナカが水をすくう。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

勝負はピークに達し、一夏は金魚三匹、箒も金魚三匹と同点だ。

（ここからが勝負だ……）

（・・負けるものか・・だが、モナカは限界か・・）

そう考えていると……

「あっ！」

すると、箒の器から金魚が一匹飛び出した。

それと同時に水に入れていたモナカがちぎれた。

「「あっ」」

それによって、試合終了になった……。結果は一夏の勝利。

「・・・勝った・・・」

「う、うぐぐぐ・・・」

と、箒は拳を握る。

「・・・まあ、約束は約束だから・・・。箒・・・」

「・・・わ、分かった・・・。約束だからな・・・」

そして、二人は立ち上がって、一夏は何を食べろうかと食べ物屋を探す。

「・・・?・・・この匂いは・・・」

すると、一夏は何か匂いを嗅ぎ、そのほうへ歩いていく。

「ま、待て、一夏」

そして一夏は出店の前に着いた。

「い、一夏・・・。どうしたというんだ・・・」

「いや・・・なんか前にもこない匂いを嗅いだ気がするさ」

「・・・?」

箒が見ると、そこは焼きソバ屋だった。

「確かにいい匂いはするが・・・ここでいいのか？」

「ああ。とってもおいしそうな匂いだからな」

と、二人は焼きそば屋に近づく。

「・・・あつ。いらっしやいませ」

と、店の左側から一人の女性が出てきた。

黒い髪に少し赤い髪が混じっており、根元を簪で結んでおり、背中まで伸ばしていた。

スタイルというのが簪といい勝負だった。

その者は楠部神夜だ。

「・・・あ、あの・・・焼きそばを一つ・・・」

「はい。一つですね。・・・レイさん、オーダーが入りました」

（ん？レイ・・・さん・・・？）

「おう。今出来上がったぞ・・・って？」

「お？」

「え？」

そして、店の奥で焼きそばを作っていたレイが出てきて、一夏と簪と出くわす。

「・・・よ、よう・・・。一夏、箒」

「お、おう・・・」

「あ、ああ・・・」

「・・・ええ・・・と・・・。お知り合いですか・・・？」

と、微妙な雰囲気を開くためか、神夜が言った。

「あ、そういえば神夜は会うのは初めてだったな」

と、レイは気を取り直して、焼きそばを一旦台に置いた。

「こっちは織斑一夏。ほら、最近世界で始めて男子でISを動かした」

「・・・ああ。あの織斑一夏さんですか・・・。あえて光栄です」

「は、はい・・・。あ、あなたは・・・？」

「はい。私の名前は『楠部神夜』と申します」

「・・・えっ！？楠部神夜だと！？」

すると、箒が驚いて声を上げる。

「し、知っているのか？」

「ば、ばか！知らないのか。あの有名な楠部家の令嬢だぞ！」

「な、なんだと!?!」

今度は一夏も驚く。

「す、すみませんでした!あの有名な楠部家の令嬢だということを知らなくて!」

「あ、いえ……。いいのですの・・」

「ほ、本当にすみませんでした。連れが唐変木なもので!」

いや、それは関係ないだろう・・

「ほ、本当にいいのですから」

「……しかし……。あなたとレイは……どういふ関係なのでしようか……?」

「それは――」

「俺と神夜は……幼馴染なんだ」

「「な、なんだと!?!」」

二人の声が見事に重なった。

「そ、そんなに驚くことか?」

「「驚くわ!」」

また声が重なる。

「あの楠部家の令嬢と幼馴染って凄いことだぞ」

「・・・まあ、そうだな。昔は何にも考えてなかったけど・・・確かに凄いことだな・・・」

って、どんなに気にしてなかったんだよ・・・

「・・・しかし、何でレイがここにいるんだよ」

「それか・・・俺はじっちゃんに頼まれてここにいるんだよ」

「レイの爺さんが？」

「ああ。どうもここでやる予定だった店が急に出来なくなって、俺が急遽代役と言う形になったんだ」

「へえ・・・でもどうして楠部さんもここに？」

「それは————」

「レイさんのおじい様から頼まれたのです。どうも手がいるだろうって」

「へえ・・・でもレイがここで焼きそばを作っているってことは・・・」

「ああ。俺が焼きそばを作っている」

「おおすげえ！またあの焼きそばが食えるのか！」

「まあな」

「・・・そんなにうまいのか？」

箒は怪訝そうに聞いてきた。

「そういえば箒は食べてなかったな。レイの作る焼きそばってめちゃくちゃうまいんだぜ」

「そ、そうなのか？」

「ああ。それで、買いに来たのか」

「そうだ。私が金を払う」

「おや？箒が払うとは珍しいな。勝負に負けたからおごるようになったか？」

「げっ！・・・なぜそれを・・・」

「ふーん・・・。本当なんだな」

「うつ・・・」

箒は「しまった」と小声で言った。

「まあそういうなよ。ほら、焼きそばだ」

と、レイはカウンターに焼きそばを差し出す。

「・・・ごほん・・・。それで、いくらだ？」

「・・・百五十円だ」

「なに？」

「前より安いな・・・どうしてだ？」

「まあ気にするな」

「・・・まあいいだろう。ほら」

箸は代金を差し出す。

「毎度あり」

レイは代金を受け取る。

「う、うむ・・・。ありがとう」

そして、箸は一夏と一緒に行こうとした。

「・・・待ってくれ」

と、レイが呼び止めた。

「どうしたんだ？」

「まあ少し俺がついていくかな」

と、レイは店を出る。

「え、ちょ、ちょっとレイさん?!」

神夜は困ったようにレイを呼び止める。

「大丈夫だ神夜。焼きそばはいくつか作っておいた。だから大丈夫さ」

「・・・し、しかし・・・」

「俺を信じろよ。俺が言ったことは全て当たっているだろう？」

「・・・確かにそうですが・・・」

「そういうことだ。じゃあ行こうか」

と、レイは一夏と箒と一緒に祭りを見回りに向かった。

「・・・・・・はあ・・・・・・。相変わらずですね・・・・・・レイさんは・・・」

と、神夜はため息をつく。

「しかし、祭りって言うのは賑やかでいいよな」

「そうだな……。しかし本当にうまいなこれ」

と、一夏はさつき買った焼きそばを食べる。

「……………」

そしてさつきからムスツとしているのは箒だった。どうも勝負の内容に納得がいかない様子……

「……なあ箒……」

ぎろりと箒に睨まれ、一夏はギクツとする。

「まあでも、ほら食べてみろよ」

「え……。い、いや……。いい」

「いいから食べてみろって。本当にうまいんだからこれ」

「あ、ああ……」

箒は一夏が持つ箸にある焼きそばを食べる。

「……………う、うまい……」

一瞬で箒の顔に笑顔が出た。

「だろ？」

「あ、ああ。しかし・・・レイがこんなに料理がうまいとは意外だな・・・」

「よく言われるよ」

と、いつものようにレイはさらりと流す。

ちなみに、服装は白いシャツに紺のジャージを穿き、頭に白いはちまきをつけていた。

「そういえば、レイも祭りに行くことってあったのか？」

「ああ。じっちゃんに何度か連れてもらったことがあるんだ・・・
・・・と言っても、ほとんど手伝いにだな・・・」

「・・・そ、そうなんだ・・・」

「まあでも、きついわけじゃなかったけどな・・・」

「・・・なぜだ？遊びに行くわけでもない、ただ手伝いに行くのに、なぜきつくはないといえるのだ」

「・・・まあ、いろんな人と会えるから、かな？」

「・・・なるほどね・・・なんとなく分かる気がするな・・・」

「・・・っていつでも、本当のところ祭りの食べ物でただで食べることができるからな」

「・・・そんなんだろうと思った」

と、箒は刺々しく言う。さっきの仕返しだろうか・・・

「まあそういうなよ・・・だから祭りの手伝いが嫌になることはなかったよ」

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・とりあえず、あれでもやるか？」

と、レイが指したほうには、射的屋があった。

「射的屋か・・・。そうだな。行ってみるか箒」

「・・・お、お前が言うのなら・・・別にいいぞ」

「決まりだな」

そして三人は射的屋に向かう。

「いらっしやい」

と、射的屋の主人が出迎えた。

「三人分をお願いします」

と、レイはポケットから三人分の料金を払う。

「おお。兄ちゃん太っ腹だね」

と、射的屋の主人は笑いながら射的の弾を渡す。

「別におごらなくても・・・」

「まあ気にするな」

と、レイは射的のライフルを手にすると、コルクを詰める。

（・・・狙いは・・・）

レイが見ると、そこにはいくつか商品があったが、レイは少し様子を見て獲物を獲ることにした。

「うーん・・・結構難しいな・・・」

隣では一夏が苦戦していた。

どうやら花火セットを取ろうとしているが、裏にはどう見ても倒れないように幅が広い板が敷かれている。

「・・・・・・・・」

しびれを切らしたのか、レイは装填していた弾を花火セットに向け発射する。

すると、気のせいか結構勢いよく発射され、一夏が放つ弾では少し傾くぐらいだったのが、レイの弾は花火セットの上に当たり、そのまま倒れていった。

「な、なんと！この花火セットを倒すとは・・・倒れないように・・・あつ、何でもねえ。商品を持っていけ」

と、主人は花火セットの後ろをこっそり取り、レイに渡す。

「凄いなレイ。一発で倒すなんて・・・」

「・・・まあ、ちょっとしたコツがあるんだ・・・」

「へえ・・・どういふものなんだ？」

「それは秘密だ・・・。そいつ」

と、レイは次の弾を込め、レイが狙う商品に当てる。

すると、どう見ても倒れそうにない戦車のプラモデルの大型キットをたった一発で倒した。

「な、なにっ！？それも倒すとは・・・手に入れるのに苦労したやつだからなるべく倒れない・・・いや、なんでもねえ・・・。ええい持っていけっ！」

そして、レイは主人から戦車のプラモを受け取る。

「どうも」

レイはどうも嫌み感のある笑みを浮かべる。

（しばらくしてレイの部屋に入ったらあれがあるかも・・・）

と、一夏はその後を予想するのだった・・・

「・・・・・・・・」

一方、箒はと言うと・・・・・・・・全然だった・・・。

「お前射的が下手だな・・・」

「う、うるさい！弓矢だったら必中だ！」

「それじゃ景品が壊れるだろ・・・ほら俺の弾をやるからさ」

箒は「うーん」と唸り、一夏から渡された弾を受け取る。

「だいたい構え方が変なんだよ・・・こうしてだな・・・」

「・・・・・・・・」

一夏に接近されてか、箒は顔を赤くする。

そして、次に放った弾は、少し大きいペンギンのぬいぐるみに当たり、倒れる。

「おお。そのぬいぐるみも倒すとは・・・。はっはっは！今日は大損だ！」

と、笑いながら箒にペンギンのぬいぐるみを渡す。

「・・・隣のダルマがよかったな・・・」

「え?」

「・・・な、なんでもない・・・」

そして、その後レイは残った弾で射的屋のいくつかを取った。その後射的屋の主人が泣いたのはいわずとも分かった・・・

「・・・ここだったら花火が見れそうだな」

一夏と箒とレイは篠ノ之神社の丘についた。そこは空がはっきりと見え、花火を見るのに最適だった。

「・・・それじゃ、俺はこの辺で・・・」

と、レイは一夏と箒から離れる。

「どうしてだ、レイ?」

「そろそろ神夜が困っているだろう・・・だから戻るんだよ」

「そっか・・・じゃあな。・・・あつ、焼きそばありがとうな」

「ああ」

と、レイは手を振り、獲得した商品を腕に抱えながら店に戻る。ちなみにゲットしたのは戦車のプラモはもちろん、音楽プレーヤー、家庭用ゲーム機（PS3など・・・）、携帯ゲーム機などの高額な商品をゲットしていた。・・・まあこれで射的屋の主人が泣いたのは当然だな・・・

「・・・・・・・・」

今ここは一夏と箒の二人だけだ・・・。

（・・・い、今・・・だな・・・こ、告白の・・・チャンスは・・・）

そして、箒は一夏のほうを向く。

「い、一夏・・・」

「ん？　なんだ？」

「わ、私は・・・お、お前の事が――――」

ド――――ンッ！！

「おっ。始まったな」

と、箒が言い終える前に花火が始まった。

「・・・・・・・・・・」

箒は言いそびれたので、少し悔しそうにした。

（うう……。花火に邪魔をされるとは……）

しかし、悪いのは自分だ。ためらいで告白のチャンスを逃したのだ。

しかもこの花火は百発連続で打ち上げられ、一時間以上轟音が空に上がる。

「すげえなあ・・・・・・・・」

一夏はというと箒が何を言おうとしたことを気にする様子も見せず、花火を見ていた。

（……今日は……諦めるか……）

はあ……。と、心の中でため息をつく。

しかし、花火は本当にきれいなものだった……

「きれいなものだな……」

「ああ。本当にな」

「・・・・・・・・・・」

そして、箒は一夏の腕に自分の腕を絡める。

「ん？　なんだよ？」

「このくらい許せ」

「まあ、いいけど」

一度は横を向いた一夏の顔は再び前を向き、花火を見る。

花火の光の照らされる箒の顔は赤かったが、恥ずかしそうではなく、誇らしげだった・・・

そして、しばらくしてIS学園の寮・・・

「ふう・・・。疲れたな・・・」

レイは祭りの手伝いを終え、寮に帰っていた。

景品は一応使ってもいいそうだが、レイはあんまり使う機会はないとしている。

「しかし……。これだけはゆっくりと作ろうかな」

机の上には、最初に取りつた戦車のプラモがあった。

プルルルルッ

「ん？」

すると、レイの携帯が鳴る。

「誰だろう……。？」

レイは携帯を取ると、電話に出た。

「もしもし？」

『……。わ、わたしだ……。』

「……。箒か？」

『あ、ああ……。』

「お前から掛けてくるとは珍しいな」

箒は寮には帰らず、実家のほうに泊まるそうだ。

『・・お、お礼を言おうと思ってだな・・・』

「ん？俺はお前のお礼をいうことをしたっけ．．．？」

「とぼけるな」

「ふっ。ばれていたか。」

『私が気付かなかったと思うのか』

「まあ気づくだろうと思っていただけ・・・」

『……なぜ、あの時焼きそばを売る時半額で売ったのだ……？』

「
・
・
・
気遣いだ」

『……よ、余計なお世話だ……き、氣遣いなど……』

「まあ、そう言うなよ。おかげで一夏にはいいところを見せただろ」

『あ、あれはいいところではないだろ！』

「はいはい。負けたからおごった……だろ？」

『ぐっ……。本当にお前と話していると調子が狂う……。』

「いつものことだろ」

『・・・それに、あの時店に戻ると言って、実際は私と一夏と二人っきりにしたのだろ』

「…………まあ、それでいい雰囲気になっただろ？」

『……………』

「…………で、どうだったんだ？」

『……………』

「失敗か？」

『ぐっ……………』

(凶星か…………)

『…………とりあえずだな…………。よ、余計なお世話だったが…………。
あ、ありがとう…………』

「…………どういたしまして…………」

『…………じゃあ…………。またな……………』

と、電話が切れた。

「…………素直になれば、いいのに…………」

レイは携帯を閉じた。

こんこん…………

「ん．．？」

今度はノックが聞こえた。

「誰だろう．．．」

そして、ドアを開けると．．．

「こ、こんばんは．．．れ、レイ．．．」

そこには、猫パジャマを着たシャルロットがいた。

レイはドキンっ！と心臓が飛び跳ねた。

「．．お、．．おお．．．シャル」

レイの顔が少し赤くなった。

「．．．ど、どうしたんだ．．？」

「ええと。これを私に来たの」

と、差し出されたのは大量の手紙や封筒だった。

「．．．これは．．．？」

「レイのポストに大量に入っていたけど．．．しばらく取っていなかったの？」

「・・・そういえば・・・。取っていなかったな・・・」

寮の入り口には、生徒それぞれのポストがあり、そこに手紙やその他色々と入ってくる。

「僕も見つけたときは驚いたよ・・・。届けようと夕方に行っただけでいなかったから・・・」

「・・・それで、この時間に届けたって言うわけか・・・」

「うん・・・。今度から忘れないようにね・・・」

と、シャルから大量の手紙や封筒を受け取る。

「じゃあ・・・おやすみ」

「お、おやすみ・・・」

シャルはそのまま隣にある自室に戻っていった。

「・・・・・・」

そして、レイは手紙と封筒をベッドの上にとりあえず置いた。

「・・・・・・」

レイはベッドにゆっくりと腰掛けた・・・。

「・・・か、・・・かわいかったなあ・・・」

レイはシャルの格好を思い出し、言葉が漏れる。

「・・・・・・・・」

とりあえず、レイは手紙や封筒を片っ端から見していく。

すると、一つの封筒が出てきた。

「・・・・？」

レイはそれを手にとって、見てみると・・・

「・・・・じっちゃんから・・・・・・・・？」

それは、健造から送られたものだった。

そして、レイは封筒をあけ、一通の手紙を取り出して読んだ。

「『・・・・今日は祭りの手伝いをしてくれてありがとうなレイ・・・・。お礼と言っては何だが、あるチケットを送ったぞ。何かは見てのお楽しみだ。じゃあまたな・・・・・・・・。健造』・・・・・・・・」

レイは封筒の送られた日を見ると、夕方の四時だった。

（・・・・本当に・・・・抜け目がないな・・・・）

と、レイはため息をつき、とりあえず封筒に入っているチケットを取る。

「・・・・・・・・これって・・・・？」

それは・・・・遊園地のチケットだった・・・・

そのころ・・・・

「・・・・・・・・」

男性は、格納庫内で、カップラーメンを食べながら、ISを組み上げていった。

無人ISにはISと異なり『コアスケルトン』と呼ばれる骨格が使われ、それに外装を取り付けるというものだ。

コアスケルトンには一部の装甲しか装備されていない未完成品だが、新型のISのようだ。

「……そろそろ完成させないと……。やつらが先に動きだしてしまう……」

そのコアスケルトンの隣には、さらに無人ISが組み上げられていた。

「……だが……」

男性は組み上げながらも、別のデータを開く……。

それは、何かの経過データのようだ……

「……ここまでコアが成長している……まずいな……」

そこに映っているのはISのコアの形状みたいだが……

「……レイ……」

そして、男性はISの組み上げを急ぐのだった……

S t o r y 2 3 それぞれの休暇 『帯編』 (後書き)

・ ・ ・ 本当に最近何にも書かれていない ・ ・ ・ 。
なんだかさみしい ・ ・ ・ 。

Story 24 二人の想い

「・・・じっちゃん・・・なんでこれを・・・」

レイは朝早くから健造からもらったチケットの事を聞いていた。

『なあに、お前さんは暇そうだからな。友達を連れて出かけるのも悪くないだろう』

「・・・・・・・・」

『まあそういうことじゃ。期限はあさってまでだが・・・明日に行けばいいことがありそうじゃぞ？』

「いいことって・・・」

『じゃあ、またのう』

と、健造は強引に電話を切る・・・

「・・・・・・・・」

レイは携帯を閉じると、ベッドに放り投げる。

「・・・・・・・・友達と、か・・・」

レイはベッドの腰掛けると、チケットを見る。

チケットは二枚で、明らかにペアで行けと言う健造の考えが丸見えだった。

「・・・・・・・・・・」

レイはしばらく考える・・・

（・・・シャル・・・。行ってくれるかな・・・）

レイはしばらく考えて、チケットをポケットに入れ、部屋を出て食堂に向かった。

レイは食堂でそうめんを頼み、受け取ると空いた席に着いた。

といっても、食堂は朝早くと言う事で、朝練で出ている部活生以外はほとんどいなかった。

（・・・誘って断られたら・・・いやでも・・・シャルは聞いてくれるはず・・・いやでも・・・）

レイはあのことを考えながら、そうめんを食べていると・・・

「・・・あつ。おはよう、レイ」

と、朝早く起きたシャルロットがいた。

ぶほっ！・・と、レイは驚きそうめんを吹き出しそうになったが、むせて、汁が変なところに入った・・

「だ、大丈夫・・？」

「あ、ああ・・。大丈夫だ・・」

と、レイは咳き込みながらも、少しこぼれたそうめんの汁を拭く。

シャルは拭くのを手伝って、レイと向かい側の席に座った。

「さっきはどうしたの？」

「・・・・・・・・それは・・・・・・・・ちよつと考え事をしていた」

「・・・・・・・・そうなんだ・・。レイでも僕がいるってことも気付かないほどに考え事をするんだね」

「・・・・・・・・まあ・・。俺だって・・・・考え事はするさ・・」

と、レイは笑うが、いまいち決まっていなかった。

「・・・・・・・・・・」

シャルはマーガリンを塗ったトーストを食べながら、レイを見てい

た。

(・・・レイって……。最近なんか様子がおかしいよね…………)

シャルはここ最近のレイを思い出してみた。

どうもシャルの前では歯切れが悪い時が多くなり、一段優しくなった。少し前まではそんな感じではなかった。
他の女子ではこんなことはなく、自分の前ではこうなのだ。

(……………)

シャルはそう考えていると…………

「…………なあ……シャル…………」

「ふえっ!?!」

急に呼ばれ、シャルは声が上ずってしまった。しかも口の中にはまだトーストが入っているので更に声が変わった。

「…………どうしたんだ…………?」

「あ、い、いや。なんでもないよ…………。それで、なにかな…………?」

「あ、ああ…………。あ、明日さあ…………予定は空いているか…………?」

「え…………?」

「・・・その・・・。じつちゃんから、遊園地のチケットを貰ったんだ・・・」

「レイのおじいさんから・・・?」

「あ、ああ。・・・それで・・・。・・・い、一緒に・・・行かないか・・・?」

「え・・・!??」

「・・・ど、どうかな・・・?　だ、だめか?」

「・・・・・・」

シャルは少し考えてから・・・

「・・・う、うん・・・。いいよ・・・。よ、予定が空いているから・・・」

「・・・そ、そうか・・・。じゃ、じゃあ後で話し合おう・・・」

「・・・う、うん・・・」

そうして、時間は過ぎた。

（ええええっ!??・・・。れ、レイから誘いが来るなんて・・・!）

シャルは朝食を終えてから、自室に戻っていた。若干混乱しながら・

（い、今まで誘ってきたことがないのに・・・ど、どうしてなのかな・・・？）

シャルはどうも事態をくつきりとしきれていない・・・

（・・・で、でも・・・）

シャルは頬を赤らめて、立ち止まる・・・。

（・・・）

そして、再び歩き出した・・・

そうして、翌日・・・

レイは寮の前で待っていた。

白い半そでのシャツの上に黒いグレーの白いチェック柄のシャツを着て、紺のジーンパンを穿いていた。

「ご、ごめん！遅くなって・・・」

と、シャルが急いでレイの前に来ていた。

「どうしたんだ？シャルが遅れてくるなんて・・・」

「そ、それは・・・。ね、寝坊しちゃって・・・」

「そうか・・・。それは仕方がないな・・・」

と、レイはシャルにそれ以上聞かなかった。

シャルは夏らしく、白く薄い水色のワンピースを着ていた。

「じゃあ行くか」

「うん」

そうして、二人は出かけていった・・・

学園を出て、バスを乗り継いで一時間後に、目的地の遊園地に着いた。

「ようやく着いたか・・・」

レイはバスか降りて、その後にシャルも降りた。

「ここって、つい最近できたばかりの遊園地だね」

「ああ。チケットも手に入れるのも一苦勞だって言う・・・。本当にじっちゃんはどうやって手に入れたんだか・・・」

レイは本当に健造の凄さを改めて感じるのだった。

「・・・でも、レイのおじいさんも優しいよね・・・」

「・・・まあ、そうだな・・・。とりあえず入るか」

と、レイは遊園地のゲートに向かっていく。

そして、ゲートでチケットを渡して、チケットを持っているものだけ貰うフリーパスを貰って、レイとシャルは遊園地内に入る。

中は夏休みと言う事で、かなりの客がいた。

「・・・そういえば・・・。レイって遊園地に来たことってあるの？」

「ん・・・？ ああ。小さい頃にじっちゃんに一度だけ連れてもらったことがあったな・・・。本当にそのときは楽しかったよ・・・」

「へえ・・・」

「だから遊園地に来るのは本当に久しぶりだな……。何年ぶりだか……」

と、レイは童心に戻ったかのように辺りを見回しながら遊園地内を歩く。

(……レイにも……こういうところもあるんだ……)

シャルは微笑んで、その後についていく。

そうして歩いていくと……

「最初はあれに乗るか？」

「あ、あれ……？」

レイが指した方向には、コーヒークップのあれがあった(テーブルを回転させて回るあれ)。

「まあ最初はああいうのから乗るのが定石っていうもんだろ？」

「……少し違う気が……」

「まあ細かいことは気にせず、行こう」

レイはコーヒークップのところへ向かう。

「……いつものレイ……だね……」

シャルはつぶやいてから、レイについていく。

そして、二人はコーヒーカップに乗る。

少ししてカップの台が回転し始めた。

「そういえば、このテーブルを回転させたらカップも回転するんだよね」

「ああ。そうだな」

「ふーん……」

と、シャルはゆっくりとテーブルを回し始めると、カップがゆっくりと回りだした。

「おお……。こんな感じなんだ……」

と、シャルはどんどん回転速度を上げていく。

「ちょ、ちょっと……?」

「え……?」

いつのまにか物凄い回転になり、目立っていた……

「うえ……。気持ち悪い……」

案の定、思いつき目を回した二人は近くのベンチに座るが、未だに目が回っていた。

「あ、あんなに回るものなんだね……」

「そのようだな……。まあ、以前もあんなふうにやってこうなっ
たっけ……」

そうして、回復したのが五分後だった……

めまいから回復した二人は、遊園地内を歩いていた。

「次はどこに行くの？」

「うーん……。そうだな……」

と、レイは辺りを見回す。

「おっ」

すると、レイが見つけたのはとある施設だった。

それは、コスプレをして記念撮影をするところであった。

「この際行ってみるか？」

「うーん・・・まあ僕はいいけど・・・」

「じゃあ行くか」

と、レイはそこに向かう。

シャルもその後をついていく。

レイとシャルはそこで、何の撮影を行うか迷っていた。

「うーん・・・結構シチュエーションがあるな・・・」

「そうだね・・・。こうも多いと迷っちゃうよね」

と、迷っていると・・・

「お客様・・・。もし迷っているのならば、一度試してみてはいかがでしょうか？」

と、白いひげを生やした老人が来た。どうやらこのオーナーみただい。

「試着ができるのですか？」

「ええもちろん。写真では分からないでしょうから。ささ、どうぞ」

と、レイとシャルはオーナーに連れられ、中に入っていく。

「ふーん……。結構揃っているな……」

「しかも、きれいに揃っている……」

と、レイとシャルは中で様々なシチュエーションで揃っている衣装に迷っていた。

「……まあ……。色々と試してみるか……」

「そ、そうだね……」

と、レイとシャルはそれぞれ衣装を取って、試着室に入る。

それから、レイは忍者、兵隊、警察、騎士……。などなど……
様々な衣装を着てみた……

シャルも色々と試着していった……。

それからしばらくして・・・

「うーん……。これでいいかな・・・」

と、レイはようやく衣装が決まった。

衣装というのが、西部のカーボーイと言う感じで、ぶかぶかのコートに、腰の二重のベルト、カーボーイハットと、いかにもカーボーイと言う感じだ。

（・・・なんとなくハーケンさんと被っているな・・・）

と、レイはハーケンの姿を思い出した。

「お、おまたせ・・・」

と、ようやくシャルも着替えが終わったみたいだ。

シャルもレイと同じ西部のカーボーイと言う感じの衣装だった。

同じものであれば撮影した時に違和感をなくすだろうということで、同じシチュエーションの衣装にした。

しかし、やっぱり男装をしたシャルは、美少年に見えるな……。
本人には言わないけど……

「・・・いやぁ・・・結構写りがいいな・・・」

「そ、そうだね・・・」

しばらくして、二人はランチに遊園地内のファーストフード店で食事をしながら、さっき撮影した写真を見ていた。

背景はもちろん西部の町並みで、タルのセットまであった。

タルの上に腕を掛ける形でレイとシャルが格好をつけて写っていた。

写真はいい感じであるが、ほとんどの人は『隻眼のカーボーイと相棒の美少年のカーボーイ』というシチュエーションと思うだろう・・・。

（うう・・・。。やっぱり僕ってこういう方向性なのかな・・・。）

シャルはどうも嬉しいと思うことができない・・・

「なあシャル。次はどこに行こうか・・・？」

「う、うーん・・・。そうだね・・・」

レイはチーズバーガーを食べて、シャルはフィッシュバーガーを食

べていた。

「・・・やっぱりこうも乗るものが多いと迷うな・・・」

「うん・・・。確かにそうだね・・・」

そして、二人はしばらく考えた・・・。

そうして、時間は過ぎていった・・・。

その後、二人はジェットコースターやお化け屋敷、ゴーカート、ゲームセンターなどなど、様々なところにいった・・・。

「いやぁ・・・楽しかったな・・・」

「うん」

夕方になり、空はオレンジ色に染まっていた。

「・・・ねえ、レイ」

「なんだ？」

「・・・さ、最後に、何かに乗ろうよ・・・」

「・・・うーん・・・。そうだな・・・」

レイは何に乗るか辺りを見回す。

「・・・あ、あれがいいな・・・」

「ん？」

レイはシャルが指したほうを見ると、そこには遊園地でひとときわ目立つ観覧車があった。

「そうだな・・・。あれに乗るか」

「うん」

そして二人は観覧車に向かう。

「・・・」
「・・・」

二人は観覧車に乗ると、沈黙が起きた。

ゆっくりと上がっていき、空の景色が一望できる。

「きれいだな・・・」

「う、うん・・・」

夕日はオレンジ色に染まり、一段と輝いていた。

「・・・今日は・・・楽しかったよ・・・」

「あ、ああ・・・俺も・・・久しぶりに楽しめたよ・・・」

と、どうも会話が進まない・・・

（・・・ど、どうしよう・・・い、今話さないと、機会がないかも・・・）

シャルは心の中で焦っていた。

今は二人つきりだ・・・このチャンスを逃すわけにはいかない・・・

「・・・れ、レイ・・・」

「ん・・・？」

「・・・は、話があるの・・・」

「話？」

「う、うん・・・。聞いてくれる・・・？」

「・・・あ、ああ・・・。いいけど・・・」

そして、シャルは一旦深呼吸をする・・・。

「・・・そ、その・・・へ、変なことを聞くかもしれないけど・・・
レイ・・・なんか最近・・・よ、様子が変な気がするの・・・」

「・・・え・・・？」

レイは意表を突かれた感じだった・・・

「・・・その・・・僕の前じゃ・・・他のみんなと・・・なん
ていうか・・・違う気がするの・・・」

「・・・」

レイは答えなかった・・・。なぜなら・・・凶星だからだ・・・

「・・・な、なんで・・・？」

「・・・そ、それは・・・」

レイは答えることができなかった・・・

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・いきなり・・・・・・・・べ、別の事を聞くけど・・・・・・・・。れ、レイは・・・・・・・・僕のことをどう思っているの・・・・・・・・？」

「・・・・・・・・ど、どうって・・・・・・・・」

レイは顔を赤らめ、考える。

（・・い、いきなり・・・・・・・・聞いてしまった・・・・・・・・。な、なんていうのかな・・・・・・・・）

友達、もしくは仲間・・・・・・・・。レイならそういうだろう・・

（・・・・・・・・そ、そうだね・・・・・・・・。レイって・・・・・・・・そうだから・・）

と、シャルは考えるが、その直後にレイから思いもよらない言葉を聞く。

「・・・・・・・・す、好きだよ・・・・・・・・」

「そ、そう・・・・・・・・。って、え・・・・・・・・？」

え・・・・・・・・？

シャルは一瞬頭の中が真っ白になった・・・・・。

（・・え・・・・・・・・？　い、今・・・・・・・・好きって・・・・・・・・え・・・・・・・・？・・・・・・・・聞き間違い・・・・・・・・？）

相当混乱している様子・・・

「い、いま・・・なんて言ったの・・・?」

「・・・・・・・・」

レイはまた黙る・・・。どうやらさっきは勇気を出して言った言葉だったみたいだ・・・

「・・・・・・・・なんていったの!」

シャルは思わず声上がり、勢いよく席を立つ。

しかし、それによって観覧車が揺れた。

「・・・・・・・・!?!」

それによってシャルはバランスを崩す。

「あっ!」

レイはとっさにシャルを支える。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

しかし、支えると言うよりは、抱きついたと言う感じだった・・・

「・・・・・・・・れ、レイ・・・」

「……すまない……」

「……え……?」

「俺……本当に……無責任だよな……。何も考えずに……好きだって言うって……」

「……す、好き……? ぼ、僕のことか……?」

「……」

レイは答えなかったが、もう答えは出て、シャルの顔が見る見るうちに赤くなる。

レイからこんな言葉が出てくるなんて、シャルは全く思っていなかった……

「……」

レイはまた黙る……。次に何の言葉を言えいいか迷っていた……

「……ほ、本当に……。む、無責任だよね……。こんな時まで……黙っているなんて……」

シャルの目に涙が浮かぶ。

だが、それは悲しいから泣いているのではなく、嬉しいから泣いている……

「・・・シャル・・・」

「・・・でも・・・そうやって言ってくれて・・・嬉しいよ・・・」

「・・・・・・」

レイはシャルを一段と優しく抱き、シャルも同じくする・・・

「・・・・・・」

「・・・・・・」

しばらくして、二人は黙ったまま立っていた・・・。

なぜならば、あの後バスに乗って戻っていく途中だったが、その最中に眠ってしまい、結果二人は本来降りるバス停のあとのバス停で降りることになった・・・。

I S 学園までは遠くはないが・・・タクシーでも三十分近くはかかる場所だった・・・。

「・・・と、とりあえず・・・。歩いていくか・・・」

「う、うん・・」

ここに立ったままにしても仕方がないので、二人は歩くことにした・。
。

「・・・・・・・・・・」

シャルは歩いている間、レイのほうをちらちらと見ていた。

（・・・・・・・・レイが・・ぼ、僕のが好き・・・・・・・・）

シャルはまだ信じられない様子だった・・。

つい最近までのレイの様子を思えば、好意を寄せていたことはいえる・・

「・・・・・・・・シャル・・」

「・・なに・・?」

「ちょっと休憩するか?」

あれから三十分近く歩いているので、足も疲れだした頃だった。

「・・う、うん・・」

「・・・あの公園で、一旦休憩しよう」

そして、二人は公園内に入っていく。

それから、シャルはベンチに座り、レイは自販機で飲み物を買っていた。

「・・・・・・・・・・」

「・・・シャル・・・買ってきたぞ」

と、飲み物を買ってきたレイが戻ってきた。

「あ、ありがとう・・・」

シャルはレイから渡された缶のお茶を受け取り、レイはシャルの隣に座る。

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

そしてまた沈黙の間が続く。

二人とも何を言えばいいか迷っていた。

「・・・ねえ・・・。れ、レイ・・・」

「・・・な、なんだ・・・？」

「・・・いつから・・・その・・・。ば、僕のが好きになったの・・・？」

「・・・そ、それは・・・」

レイはしばらく黙る・・・。

「・・・お、お前が・・・女の子だって分かった時・・・」

「え・・・？」

「・・・でも・・・その時はただ少し気になるぐらいだった・・・」

「・・・じゃ、じゃあ・・・いつから・・・本当に・・・す、好きになったの・・・？」

「・・・り、臨海学校の・・・あ、あの時だ・・・」

「え・・・あ、あの時・・・」

それは、臨海学校で、福音を倒したその日の夜のことだ。

シャルはお礼のつもりでレイとハグした。しかし、それがレイの好意に拍車を掛けていたみたいだ・・・

「・・・あ、あの時は・・・嬉しかった・・・へ、変な意味じゃないけど・・・」

「・・・」

「・・・でも・・・。それでも俺は・・・シャルの気持ちなんか・・・何にも分かっていなかったんだ・・・」

「そ、そんなことは・・・」

「いや・・・そうだ。俺は・・・ただの分からず屋だ・・・」

「・・・・・・」

シャルは何も言えなかった・・・

「・・・ごめんな・・・。俺・・・本当に・・・不器用だな・・・」

「・・・・・・」

「・・・なんでもできる・・・。それはシャルの言う通りさ・・・。俺は何でもできる・・・。でも・・・俺はできないことがある・・・。それは誰でもできることなんだろうな・・・」

「・・・『誰かを・・・大切に思えること・・・』」

「・・・ああ・・・。俺は最初から両親の顔を知らない・・・だから親の愛を知らない。友達とも仲良くなったことはほとんどない・・・だから、どうでもいいと思っていた・・・。だから・・・誰も大切と思えなかった・・・。どうでもいい存在としか・・・思えなかった」

「・・・・・・」

レイは自身の不幸体質から、昔から周りの人から『疫病神』『災いの元』『呪いの悪魔』と、罵られてきた……。そして学校では自身の事や両親がいないことから悪口やいじめを毎日のように受けてきた。そうして、レイは当初重度の人間不信となっていた……。

しかし、健造や神夜などの交流から、それらはほとんど解消され、打ち解けていった。

だが、まだ完全には治ってはいない……

だから、今まで誰も大切に思っていなかった……。

「……すまなかった……。本当に……」

そして、レイの左目には、涙が浮かぶ……。レイが初めて見せた……。悲しみだった……

「……！！」

そして、シャルはレイに抱きついた。

「シャル……」

レイが言い終える前に、シャルの唇が触れた。

「ッ！？」

レイはいきなりことで、驚く。

そして、シャルの唇が離れる……。

「レイ……それは……僕が……直してあげる……。だから……安心して……」

「……シャル……」

そして、二人は優しく抱き合う……。

月は二人を見守るのように光を照らす……

「―――以上が、報告です」

「うむ」

海が見えるオフィスの窓側の机に座る男性は、女性から報告を受けていた。

「しかし……ここまでやるとはな……」

男性は報告書を読み、言葉を漏らす。

報告書には、様々なことが書かれており、中にはあの無人ISのことも書かれていた。

「我々の無人ISを倒すか……。ふっ……。さすがは博士の息子だ……」

「いかがでしょうか？ 主……」

と、オフィスのソファに座っていた女性が聞いてきた。

「……まあ、これで十分なデータが入った……。それで、あれの開発は進んでいるのか？」

「ええ。既に『プロトエンペラー』のデータはインストールされ、アーマーフレームの装着は完了し、後は実働テストをするだけです」

「そうか……。それで、博士の行方は？」

「……未だに行方は掴めていません……」

「……本当に隠れるのがうまい人だ……。だが、なんとしても探し出せ。博士の持つ『あの技術』は我々の計画の要だ」

「分かっています。今も陸海空を搜索中です」

「それでいい。それで、『亡国機業』はどうなっている」

「ええ。既に準備は進めているそうです。協力もしてくれるそうですし」

「・・・そうか・・・。それはなによりだ・・・。ようやく重い腰が上がったってわけだ」

と、男性は席を立ち、外を眺める。

（・・・もう一度・・・世界を変えてみせる・・・。この病んでいる世界を・・・！）

男性は拳に力を入れる。

「・・・しかし、『あれ』はどうする気なのか？」

「・・・ああ。そうだな・・・」

「・・・あれも我々の計画に支障をきたす存在だと思いますがね・・・」
「

「・・・それは・・・やつが覚醒を行ったときこそが、頃合だ・・・」

「・・・そうでしょうかね・・・」

「・・・フィオナ君・・・。一言多い癖は直したまえ・・・。で、なければ・・・」

「・・・分かっていますよ・・・。レックス・・・」

「・・・・・・・・・・」

「・・・・では、私はこれで・・・・」

女性は立ち上がると、部屋を出た。

「・・・・・・・・ふっ・・・・。懐かしいやつを思い出すな・・・・」

男性は上を見上げて月を見る。・・・・顔にある機械部分が月の光で反射した・・・・。

S t o r y 2 4 二人の想い（後書き）

もうひとつの黒幕が登場・・・。

そして、次回からあの最強の生徒会長が登場・・・。

Story 25 生徒会長見参！

そうして、時間は過ぎて九月序盤・・・

IS学園は二学期に入り、学園生活が始まった。

そして、学園内の食堂・・・

そこでは、いつもの面々がいた。

「うーん・・・。白式はパワーアップしたのに・・・勝率は以前より悪い気がするなあ・・・」

一夏はどうも勝率が悪くなっていることに気に掛けていた。第二形態となった白式・雪羅は確かに性能は上がったが、代わりに燃費の悪さに拍車がかかっていた。

なので、鈴には燃費の差で負け、ラウラとは持久戦にて一夏が負け、箒とは前記と同じ理由で、シャルロットとは雪羅の使いすぎでエネルギー切れ、レイとは燃費や性能の以前の話で、一周の隙を突かれ、勝負はつき、唯一セシリアには勝った。しかしそれはセシリアの『ブルー・ティアーズ』はビーム兵器主体なので、エネルギーを無効

化するシールドを持っている『白式・雪羅』とは相性が悪い。

「後先考えずに戦うからだ。特に雪羅は使いすぎだ」

と、レイは向かい側の席で味噌ラーメンを食べていた。

「・・・でもなあ・・・せっかくの新装備だから、使わずだと前と一緒なんだよな・・・」

「・・・それでいいじゃん。・・・まあでもスラスタが増設されたことで変わらないけどね・・・」

鈴は右斜め向かい側の席でえびチャーハンを食べていた。

白式は第二形態になったことで、ウイングスラスターが増設され、二段階の『瞬間加速』を行えるようになり、機動力もアップしたが、その分燃費が悪いのもこれが一つ。

「お前は少し戦い方を学んだらどうだ・・・あれでは先の行動を読むのも簡単だぞ」

ラウラは隣で祖国ドイツの料理『シュニッツェル』を食べていた。

一夏は本当に動きが読みやすく、それが敗因の元らしい・・・

そんなところで、一夏は第二形態になってから負け続けた。

「・・・やっぱり今後訓練で調整しないとなあ・・・。今のままじゃ勝とうも、勝てないか・・・」

「それならば、早速私の出番だな！」

と、箒は自信気に言う。まあ確かに一夏の最初のコーチだったけ？

「何を言うのですか箒さん！一夏さんの訓練ならば、このわたくしの他ありませんわ！」

続いてセシリアが続く。一夏の二番目のコーチだったな・・・。

「何寝言を言っているのよ！私に決まっているでしょう！」

更に続いて、鈴。一夏の三番目のコーチだったな、そういえば。

「ぼ、僕もコーチだから・・・！」

またまた続いてシャルロット。一夏の四番目コーチだったけ？

「何を言うか。夫婦のパートナーであろうこの私に決まっているだろう！」

更に更に続いてラウラ。一夏の五番目のコーチだったな・・・。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

特に俺は言うことなし・・・。

そして、そのまま口論は数十分続いた・・・。

「・・・・やっぱり無駄に広いものだ・・・」

と、一夏は専用のロッカールームで、ISスーツに着替える。

そして、ISのコンソールを開いた。

（うーん・・・雪羅に割いているエネルギーが多いな・・・。これは
どうかならないのやらか・・・）

と、考えていると、突然目の前が真っ暗になった。

「だーれだ？」

と、後ろから女子の声がする。

「・・・・？」

一夏は急な出来事で一瞬思考が止まる。

「はい、時間切れ」

と、声の主は手を離し、一夏は後ろを振り向くと、見知らぬ女子生徒がいた。

その女子生徒は微笑み、それを隠すかのようにポケットからセンスを取り出し、口元で開く。

よく見れば、リボンの色は二年生を表していた。

「あ、あの・・・あなたは・・・？」

「あっ」

一夏は女子生徒が指したほうを向き、何もなく、振り返ると、扇子で頬を押される。

「引っかかった・・・」

「・・・・・・・・」

もう何がなんだか・・・

「それより、ぼー、としていいのかな？ 織斑先生に怒られるよ」

一夏はその言葉を聞くと同時に時計を見ると、授業開始から三分が経っていた。

「だああああ！！や、やばい！まずい！」

一夏はそのまま走っていった。

「遅刻した言い訳はそれだけか？」

と、アリーナに出れば、織斑先生の説教だ。

「で、ですから……。いきなり見知らぬ女子生徒がいてですね・・・」

「ほう……。お前は見知らぬ女子に会ったら授業に遅れる癖があるのか」

「い、いや！違います！」

「……。ちょうどいい。ラングレン、生徒の前で実戦演習を行え。相手はそこのバカでかまわん」

と、言うと、レイは列から出てきた。

(・・・・・・・・)

一夏は終わったと感じていた・・・

「悪いな。手加減はできない性分だ」

と、レイはISを展開する。・・・しかもナハトを展開した。

(げえ！よりによってそれかよ！?)

「いくぞ！」

と、レイは両肩のクレイモアハッチを開き、発射体勢に入った。

「ひひひひー！」

一夏はとっさに白式を展開したが、その直後にクレイモアの雨にさらされ、直後に『瞬間加速』で懐に入り込まれ、ブレイカーを六発全て（手加減して）叩き込まれた……。

アリーナには無常にもクレイモアの発射音とブレイカーの爆発音が響いたのであった……。

「……………」

レイは授業が終わると、寮に戻っていた。

その最中にISのコンソールを開き、データを見ていた。

（……ISそれぞれの経験値が次期一定値に達し、新装備が開放、か）

新たに表示されたデータには、それぞれのISの新装備であった。

中には換装装備に追加されたものもあった。

(・・・今後・・・どうなるのやら・・・)

そして、ISのコンソールを閉じ、自室に戻った・・・

そして、翌日・・・

朝のSHRと一時限目の半分を使って、全校集会が行われた。内容はもちろん今月中程にある学園祭のことだろう。

体育館内はレイと一夏以外はもちろん女子だけなので、まるで『ウオーリーを探せ』のような感じだった・・・。

「では、生徒会長から説明があります」

と、生徒会長と言う言葉で、全生徒のざわめきは一瞬で静まる。

「やあみんな。おはよう」

そして、体育館のステージに現れたのは一夏の前に現れた女子であった。

一夏ははつとし、レイはなぜか顔をしかめる。

「さてさて。今年は色々と立て込んだから挨拶がまだだったわね。私の名前は更識楯無。君たち生徒の長よ。以後、よろしく」

にっこりと頬笑みを浮かべる生徒会長こと・・・更識楯無・・・

「では、今月の一大イベント学園祭のことだけど、今回に限り特別なルールを導入するわ。その内容は――――」

すると、慣れた手つきで扇子を取り出し、横にスライドすると投影ディスプレイが表示された。

「名付けて『各部対抗織斑一夏争奪戦』！」

その投影ディスプレイに一夏の写真がてかてかと表示された。

「え・・・」

「えええええええっ!？」

その直後、冗談抜きでやかましい叫びが体育館内にこだます。

「静かに。学園祭では毎年各部活は催し物を出し、それに対して投票を行い、上位組みには特別助成金が出る仕組みだったので、それではつまらないと思い・・・」

と、更識さんは扇子で一夏を指す。　って、人目で見つけるって・・・目がいいな・・・

「織斑一夏を一位の部活に強制入部させます」

そして、再び雄叫びが上がる。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

レイはこういうわけかむすつとしていた……。というより機嫌が悪い……

(・・・・・・・・なんでこんな……。でも……)

一夏は心の中でため息をつき、前を見る。

(・・・・・・・・なんで俺だけなんだ……。？レイも入っていると思ったけど……)

一夏は疑問に思うが……。かくして各部における一夏の争奪戦が幕を開けるのであった……

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

レイはあれからどうも機嫌が悪い……。

「……………はあ……………。とりあえず……………行くか……………」

と、レイはなぜか竹刀を肩に担ぎ、歩き出す。

その頃、別の廊下では……………

「……………」

一夏は目の前のことに瞬きを繰り返す。

その視線の先には、生徒会長こと……………更識楯無がいた。

さっきまで、様々な部活の襲撃に遭うものも、それらを全て撃破した。

「……………ねえ知ってる」

「え……………？な、何を……………？」

「この学園において、生徒会長というのは……………最強の称号だということ……………」

「さ、最強……………」

すると、その直後に楯無さんの後方から女子三人が竹刀を持ってジャンプして上から襲い掛かってきた。

「あ、あぶなっ・・・・・・・・」

だがその直後に前の廊下の角から誰かが飛び出てきた。

そして、手にする竹刀で三人を同時に切り払う。

その人物が床に着地すると、遅れて襲撃者三人が床に落ちる。

そして・・・・・・・・その人物と言うのが・・・・

「なっ!?!・・・・・・・・れ、レイ!?!」

その人物はレイであった。

「あら、少し遅刻だよ」

「・・・・・・・・申し訳ございません・・・・・・・・楯無さん」

と、レイは立ち上がると、楯無さんに頭を下げる。

「・・・・・・・・どういふことだ・・・・・・・・レイ・・・・・・・・?」

「・・・・・・・・」

レイは答えない・・・・。　って、なんで睨むんだよ・・・・

「・・・・・・・・レイ君がなぜ私を助けたかという・・・・それは・・・・

レイ君は私の助手だから」

「えっ!？」

一夏は意外なことに驚く。

「な、なんで・・・？」

「・・・・・・・・」

レイはまだ答えない……。っていうかまだ機嫌が悪い……

「・・・・・・・・まあ、ここで話すのもなんだし……。生徒会室に向かいましょう」

そして、楯無さんが歩き出すと、レイはその後についていき、一夏もその後について行く。

そして、学園内にある生徒会室……

生徒会室と言う事で、けっこう高級感と言うか、威厳があった。

「・・・・・・・・」

レイは未だに機嫌が悪く、ソファ―に座ってお茶を飲んでいた。

その向かい側の席に楯無さんが座り、お茶を飲み、その隣に一夏が座る。

その近くで、二人の女子生徒がいた。

一人はリボンの色から三年生で、髪を三つ編みにして眼鏡をかけていた。

そしてもう一人と言うのが・・・以外にものほほんさん・・・

「・・・・・・・・・・」

「・・・なあ・・・レイ・・・なんでそんなに機嫌が悪いんだ・・・？」

「・・・・・・・・・・」

うわあ・・・無視・・・しかし、しつこく聞くと絶対何かが飛んできそうだから、これ以上聞かないようにした。

「・・・まあレイ君が機嫌が悪いのは・・・仕方がないことだね・・・」

「え・・・？　どういことですか？・・・というより、なんでレイが楯無さんの助手になったんですか？」

「・・・・・・・・勝負の結果だ・・・」

と、ようやくレイは口を開く。

「え．．？」

「．．．．．」

そしてまた黙る。

「レイはさあ．．．もう少しリラックスしたらどうかなあ」

と、のほほんさんはレイの後ろから抱きつく。

「．．．．．」

レイはどうも抵抗するのも面倒くさいようだ．．．

「．．．まあ、どうしてこんなことになったかは．．．レイ君が話したがないのなら、私から話してもいいわよ」

と、楯無さんは言うが、レイの機嫌が悪いのはあなたのせいでは？

「．．．あれはね——」

そして楯無さんの話が始まった．．．．

S t o r y 2 5 生徒会長見参！（後書き）

ちなみにいうと、次回では生徒会長は原作よりチートな強さになっています・・・。

Story 26 生徒会長の実力

レイが楯無さんの助手になったのは、学校が始まって数日が経った時だ・・・

「・・・・・・・・・・」

レイは学園内の第八アリーナで一人訓練をしていた。

ファントムを展開して身に纏い、左手には『シシオウブレード』が握られ、右手はその柄に添えるように置かれていた。

目の前には棒型の仮想標的があった。

「・・・・・・・・・・」

そして、ゆっくりと右手でシシオウブレードの柄を握り、足を踏みしめる。

「・・・・・・・・・・！」

そして、レイはそこから飛び出し、シシオウブレードを鞘から抜き放ち、仮想標的を切り裂き通り過ぎる。

「・・・・・・・・」

レイはシシオウブレードを回しながら鞘に収めると、仮想標的がばらばらに崩れた。

しかし、その一部に切れの甘さがあり、切れていなかった。

「・・・・だめか・・・・」

レイはシシオウブレードを収納し、データを見る。

（・・・・切る角度は正確・・・・。力もよし・・・・。だが切る時に刀身に滑りが少ない・・・・。だから切り損ないが起きた、か・・・・。これでは必殺技の完成は程遠いな・・・・。）

レイはため息をつく・・・・。

「・・・・・・・・！」

レイは何かに向かってきていることに気付き、回し蹴りで弾いた。

それは、どうやら鉄棒のようだった。

「誰だっ！」

レイは鉄棒が来たほうを見る。

「あらあら・・・・。さすがに気付くわね・・・・。」

と、第八アリーナに女子の声が響く。

「・・・・・・・・」

そして、レイは声がしたほうを向くと、アリーナのピットに一人の女子がいた。

「・・・・・・・・なっ・・・・・・・・」

レイはその女子を見て驚く。なぜならば、ISを身に纏っていた。

しかし、それに驚いているのではなく、そのISが全く見たことがないものだった。

それは、全体の装甲の面積が小さく、一部にしかないが、代わりに水のカーテンがドレスのようにつけられていた。

女子はそのままそこを飛び出して、レイの近くに下りる。

「・・・・・・・・あんたは・・・・・・・・」

「私の名前は・・・・・・・・更識楯無・・・・・・・・。IS学園の生徒会長よ。レイ・ラングレン君・・」

「・・・・・・・・生徒会長・・・・・・・・。それに俺の名前を知っている・・・・・・・・」

「それはもちろん・・・・・・・・。一年では最強クラスの強さを持つIS操縦者・・・・・・・・。そして三体のISを持つ男子・・・・・・・・」

「・・・・・・・・生徒会長が俺に何のようですか・・」

「・・・あなたに勝負を申し入れるわ」

「勝負・・・？」

「ええ。あなたのISに興味があるの。それと君に強さも見てみたいから・・・」

「・・・」

「ちなみに、知ってる？ この学園における生徒会長は・・・最強の称号だっていることを・・・」

「・・・最強の・・・称号・・・」

「そう・・・。そこで、交換条件はどう？」

「交換条件？」

「レイ君が私に勝てれば、最強の称号・・・生徒会長の座を渡すわ」

「・・・生徒会長ねえ・・・」

「でも、レイ君が私に負ければ・・・私の助手になってもらおうかな・・・」

「・・・助手・・・」

「・・・どう？ 悪い条件じゃないと思うけど・・・」

「……いいだろう……」

「……じゃあ……」

「勝負!」

そして、二人は一旦距離を取るために後ろにジャンプする。

楯無さんは右手にランスを展開し、レイは両腕よりグランプラズマカッターを抜き放つ。

(……どのぐらいの腕か……確かめる……)

レイは地面をけり、楯無さんに向かっていき、グランプラズマカッターを振り払う。

しかし、楯無さんはランスでプラズマカッターを防ぐ。

「くっ……!」

レイはすかさず左手のグランプラズマカッターも振り払う。

だが、楯無さんは瞬時に左手に『蛇腹剣』を展開し、斬撃を防ぐ。

「中々いい太刀筋ね……。とっさの判断もいい……。でも
――」

そして、ランスと剣でレイを弾く。

「ちっ……」

レイは体勢を立て直し、グランプラズマカッターを構えなおす。

「動きはまだな部分があるわね・・・」

（・・・全く隙がない・・・これは少しはめを外さない・・・）

レイはグランプラズマカッターを繋げ『大剣モード』にして、楯無さんに向かっていく。

そして、レイはプラズマカッターを左右へと切り払うが、楯無さんはそれらをランスや蛇腹剣で防いでいく。

「くっ！」

レイはそれからプラズマカッターを横になぎ払うが、楯無さんはランスで受け流す。

「あらあら・・・少し焦ってきているようね・・・」

そして、楯無さんは蛇腹剣でファントムに切りつけ、その直後にランスで胸部に突き当てる。

「ぐっ！」

レイは衝撃でそのまま後ろに下がる。

（・・・な、なんて強さだ・・・最強と言う名は伊達じゃないか・・・だが・・・）

そして、レイはグランプラズマカッターを握り直し、その場を蹴って楯無さんに向かい、同時に『瞬間加速』を掛ける。

瞬間加速で楯無さんの懐に入り、グランプラズマカッターを振り上げる。

「ふっ」

しかし、楯無さんはすぐに蛇腹剣で防いだ。

そして、右手のランスをファントムに突きつける。

「そこだ！」

するとレイは左足を上げ、楯無さんの腕のISアーマーを蹴り、動きを止める。

「・・・！」

左はグランプラズマカッターで蛇腹剣を止め、右腕はファントムの足で押さえつけた。

「いけえ！ジェットマグナム！」

そして、ステーキは二本の為、本来の三分の一の威力しかないが、この際気にしない。

レイは残った左腕の『プラズマステーキ』を楯無さんに叩きつける。

ガキンッ！

「な、なに・・・!?!」

プラズマステークが直撃寸前で、楯無さんは手首だけ回転させて、ランスを自身の前にやって、プラズマステークの間にランスを挟みこんだ。

「今のはいい作戦ね・・・。でも君がランスを蹴り上げなかったのが、ニアミスだったね。ランスを蹴り上げていれば、確実にダメーシは与えられたのに・・・」

そして、ランスを捻り、プラズマステークを強引に破壊した。

「!!」

「遅い!」

そして、ランスを胸部に突きつける。

「ぐっ・・・!」

その直後に蛇腹剣でグランプラズマカッターを弾き飛ばした。

「しまっ・・・!」

そして、そのままランスの矛先がファントムの胴体に向かってくる。

「-----」

すると、ファントムがレイの意思に反して、片手でランスの矛先を掴みとめた。

「・・・！」

楯無さんもこれには驚く。

しかし、レイが一番驚いていた。

「ファ、ファントム・・・」

なぜならば、レイはさっきの動きは動かしていない

「—————」

そしてファントムは唸りのような音を出し、ランスの矛先を横にやると、楯無さんに回し蹴りをあたえる。

「くっ・・・」

それによって楯無さんは体勢を崩し、その瞬間にファントムが胸部を展開し、ニュートロンブラスターを放つ。

しかし、楯無さんはとっさに両肩の水のカーテンで角度をつけて防いだ。

だが、それでも衝撃は吸収できず、少し後ろに下がった。

「や、やるわね・・・さすがに効いたわね・・・」

そして、楯無さんはランスを構えなおす。

「・・・・・・・・」

レイはさっきのファントムの動きに疑問を持っていた。

（・・・ファントム・・・・。いや、今はそれどころじゃない）

そして、レイは地面に突き刺さっているグランプラズマカッターを引き抜き、構える。

（・・・必殺ファンクションの一撃で何とか決めたいところだが・・・できるかどうか・・・）

レイはグランプラズマカッターの柄を握り締める。

そして、楯無さんがランスの矛先を向け一気に接近する。

「くっ・・・」

レイはプラズマカッターを斜めに構え、防御体勢に入る。

ランスはグランプラズマカッターの刀身で止められる・・・。

「まだまだ・・・」

すると、ランスに水が螺旋状に纏い始め、ドリルのように回転し始めた。

「な、なに・・・？」

刀身と水のドリルの間からは火花が散る。

「くっ・・・これでは・・・」

いくらかなりの強度を持つ大剣モードのグランプラズマカッターとはいえど、一点に集中しての攻撃はいつまでも持たない。

レイはとっさに左手にグランショットガンを持ち、楯無さんに向け放つ。

「ふっ」

すると、楯無さんは左のほうの水のカーテンを前にやる。

そして、ショットガンの弾丸は水のカーテンに止められた。

「なにっ!?!・・・ただの水じゃない・・・?」

「その通り。無数のナノマシンで構成された水なの。この通り実弾はほとんど無力化できる」

そして、弾は水に押し出され、地面に落ちる。

「くっ!」

レイはグランショットガンを背中に戻し、そのままグランプラズマカッターをずらし、水のドリル化したランスを受け流し、地面を蹴って後ろに下がる。

「いけえ!」

そしてその直後にレイはグランスラッシュリッパを投擲する。

しかし、楯無さんはランスでグランスラッシュリッパをなぎ払い、軌道が変わって、スラッシュリッパは地面に突き刺さる。

「ここだ！」

「アタックフランクション！ライトニングスラッシュ！」

ファントムは手首を高速回転させ、グランプラズマカッターを回してエネルギーを充填して、回転を止めると刀身をなぎ払い、エネルギー刃を飛ばす。

「ふっ」

すると、楯無さんはランスを突き出す。

そして、飛ばされたエネルギー刃は水のドリルが出ているランスによって削られ、消滅した。

「な、なにっ!？」

レイは必殺技が破られ、一瞬呆然とした。

その隙を楯無さんが逃すはずもなく、その場を蹴ってランスを突きつけた。

矛先はグランプラズマカッターに直撃し、透明の刀身がガラスのようにながらに砕け散った。

「し、しまったっ!？」

レイははっとした時にはすでに刀身は大半が砕け散った。

かなりに強度を持つグランプラズマカッターだが、『ライトニングスラッシュ』のように膨大なエネルギーを放出する攻撃の直後は、刀身が物凄く脆くなる弱点があった。

「遅い!」

そして、そのまま楯無さんは回し蹴りを行い、レイを吹き飛ばす。

「ぐっ!」

レイはそのまま後ろに飛ばされる。

「惜しかったわね・・・本当に・・・」

「アタックファンクション! シャークブラスト!」

楯無さんはランスを高速回転させ、ランス刀身に水のドリルが纏いそれを前へと突き出すと同時に水のドリルを射出する。

「っ!？」

レイが気付いた時には既に攻撃が目の前まで来て、その直後にファントムに直撃して爆発する。

「どわあああっ!」

そして、その衝撃でファントムはアリーナの壁に叩きつけられた。

「ぐう……。っ!？」

レイは背中を叩きつけられた衝撃で一瞬視界がぼやけ、次の瞬間には楯無さんのランスの矛先が目の前にあった。

「……。ぐっ……。」

「……。残念だったわね……。もう少しだったのに……」

そして、勝敗がついた……。結果は……。レイの負けだ……

同時に、レイがこの学園に来て、初めての敗北だろう……

「……。約束は、ちゃんと守ってもらうわよ……」

と、楯無さんは笑みを浮かべるが、明らかにいたずらが入った笑みだ。

「……。わ、分かりました……。あ、あなたの助手になります・
・。」

レイは負けを認め、敗北時の条件も飲む。

「……。ふっ……。正直でよろしい……」

そして、楯無さんはISを解除して、レイもISを解除する。

「・・・ふーん・・・」

すると、楯無さんは起き上がるレイの姿を見る。

「な、何でしょうか・・・」

「思っていたより、細身なのね・・・。てっきりごついのかと思った・・・」

「・・・・・・」

「まあそれはいいとして、助手になったからには、私の言うことは必ず守ることよ」

「・・・か、必ずって・・・」

「助手になったからには、それくらいは当然。もし私が―――つて頼んだらしないといけないのよ」

「なっ、なんですか!」

すると、レイの顔が赤くなった。・・・何を聞いたんだ・・・?

「ふふっ・・・。冗談よ。それと、放課後は私が生徒会の仕事がある時以外は、必ず私にそばにいるのよ」

「・・・うつ・・・」

「まあでも、食は共にしても、寝るときだけは離れてもいいわよ。それと、部屋には侵入したりはしないから」

「・・・・・・・・・・」

「まあこのくらいね……。今後、よろしくね」

「・・・・は、はい・・・・」

「ん？少し聞き取れなかったわね・・・」

と、楯無さんはレイの顔から数センチと言うところまで顔を近づけた。

「うつ・・・・。よ、よろしくお願いします・・・・」

「よろしい」

そして、楯無さんは歩いていき、レイは洪々と後をついていく・・・

レイにとっては、この勝負で初めての敗北だが、それは屈辱的なものではなかった。
自分が一番強いと思いがっていたわけではない。自分より上のも
のはいるといのは分かっていた。だがからこそ、今後更に強くなろ
うと思えるのだ・・・。

「————まあ、こんなところね」

そうして、話は終わった。

「・・・学校が始まってそんなことがあったのか・・・。ちっとも知らなかった・・・」

「・・・まあそうだろうな。あの時楯無さんがあのアリーナ付近封鎖していたみたいだしな」

当時、なぜか第八アリーナ付近には人がいなかった。・・・それは楯無さんが生徒会長の権限で生徒を近寄せなかったのだ。

「おかげで集中できたでしょう？」

「・・・」

レイはまた黙る・・・。しかしさっきよりは機嫌はよくなっている。

「・・・でも、生徒会長の助手って・・・なにかいいことってあるのですか？」

「・・・そりゃいいわよ・・・？何だって生徒会長の権限がほとんど使えるもの」

「ええ！？そうなんですか？」

「ええ。副生徒会長より偉いかな・・・」

「ええ」と、一夏は心の中で突っ込むのだった・・・。普通副生徒会長が偉いんじゃない・・・」

「まあでも、一夏君をどこかの部活に入れさせることを黙っていたのはさすがに悪かったな・・・って思ったから、私があなたのコーチになってあげる」

「いや・・・コーチならいっばいしますし・・・」

五人ほど・・・

「あらそう？ 私ならかなり弱いあなたをそこそこまで強くすることはできるけど・・・？」

「ええ・・・と・・・俺はそこまで弱くは・・・」

「ううん。めっちゃ弱いよ。そうだよ、レイ君」

「・・・そうですね・・・動きに無駄があり、後先考えていないし、鈍い」

「うっ・・・」

二人から弱いと言われ、レイからは毒舌が飛び、一夏は言葉が詰まる。

「まあ、一夏君が今のコーチでもいいと言うのなら、条件があるわ」

「・・・じよ、条件・・・？」

「そう、その条件をクリアすれば、これ以上は言わないわよ」

「・・・条件とは・・・？」

「・・・それはねえ————」

それは、一夏にとってはある意味好都合か・・・それとも不都合か・・・

S t o r y 2 6 生徒会長の実力（後書き）

楯無さんって、こんなにチート並に強かったかな・・・。
まあそんなでもって、次回から主人公の幼馴染がI S学園に入学して
きます。

Story 27 転校生は幼馴染

「・・・あれ・・・？」

あることにいち早く気付いたのは、シャルロットだった。

ここは学園内の第三アリーナ・・・

そこでセシリア、鈴、シャル、ラウラがISの訓練をしていた。

それはというと、アリーナにレイと一夏、そして楯無さんが来たことだ。

そして、七人は一旦合流する。

セシリアと鈴とシャルとラウラは一旦ISを解除していた。

「・・・ところで・・・。なんでここに来たわけ？」

と、鈴が聞いてくる。

「・・・そりゃ・・・こいつの訓練のため・・・ですね・・・。楯無さん」

「ええそうよ」

「・・・ところで・・・あなたは・・・？」

「・・・生徒会長の更識楯無よ・・・朝の時に顔は出したわよ」

「ああ・・・。そういえば・・・」

「・・・しかし、その生徒会長がなぜここに・・・」

「それはね・・・。一夏君のコーチになったから、教えに来たの」

「ええー!？」と、四人は叫ぶ。

「ど、どういう意味よ一夏!」

「そうですわ!なぜですの!」

と。セシリアと鈴が問い詰める。

「そ、それは・・・ま、まだ決まったわけじゃないんだ・・・」

「え・・・?どういうこと・・・」

シャルは疑問に思う。

「・・・それは――――」

「俺に勝てば、楯無さんはコーチをやらないそうだ・・・いつもの

面々でコーチをやっているということだ」

「えっ？ レイに勝てばって……それって……」

あまりにも無謀な勝負だ……。結果は目に見えている。

「もし負ければ……どうなるのだ」

ラウラは機嫌悪そうに聞く。

「……ま、負ければ……今俺についているコーチは全員解雇……。そして新しく楯無さんが付くってことになった……」

「な、なによそれ！ 一方的じゃないの！」

と、鈴はどうも怒りがこもっているようだ……

「……まあ心配しなくてもいいわよ……」

「し、心配しなくてもいいって……。相手がレイじゃ結果は見えていますよ！」

「……まあ、話しは最後まで聞いてね……」

と、扇子を取り出す。

「まあ確かにこのままじゃ一夏君が負けるのは目に見えているわ……。でも、それじゃつまらないから、特殊な条件があるの」

「と、特殊な条件……？」

「ええ。レイ君には大きなハンデを背負って戦ってもらうの」

「は、ハンデを・・・」

「まず一つに、手持ち武器の使用は一切禁止。内臓武器も胸部のものも使用禁止。まあ両腕の棒は引き抜いて使用しなければ使ってもいいわよ」

「ぶ、武器の使用禁止って・・・素手で戦えと、いうことですか？しかもファントムを使用してでの前提で・・・」

「ええ。二つ目はP I Cの使用も禁止。移動は脚部を使ったものとスラスターのみ」

「そ、そんな・・・それじゃあまりにも一方的ですわ」

条件はあまりにもシビアなものだ。I Sは本来P I Cによって浮遊状態を維持できるので、空中戦がほとんどだ。しかし、P I CがなければI Sはもちろん地面に着いた状態で、機動力も落ちる。そしてスラスターは実質上P I Cによって浮いているI Sを移動させる手段でしかなく、この状態での使用は考慮されていない。

「そうね・・・。こんな一方的な条件なら一夏君でもレイ君と対等に戦えるでしょう」

「し、しかし・・・。それでは隊長が・・・」

「ラウラ・・・」

と、レイはラウラを止める。

「隊長・・・？」

「俺なら大丈夫だ・・・」

「し、しかし・・・」

「・・・決まりね・・・。じゃあ二人は準備をしてね」

「は、はい」

「・・・了解」

そして、一夏とレイはアリーナ内へと入っていく・・・

しばらくして、二人はそれぞれISを展開してアリーナ内にいた。
レイは既に使用するISを決められているのでファントムを展開していた。

素手で戦うと言うことで、背中に装備されているグランショットガンとグランスラッシュリッパーは今回省略され、手には何も持っていない。

しかし、通常と異なる部分があった。

背中には武器の代わりに追加ブースターが装備されていた。脚部のアタッチメントには同じく追加ブースターが装備されていた。

「一夏。遠慮なくかかって来い」

「ああ。そのつもりだ」

そして、両者は足を踏みしめる。

「それでは、バトルスタート！」

楯無さんの合図と共に、先に一夏が飛び出す。

「うおおおお！」

一夏は雪片を振り上げ、そのまま振り下ろす。

「……………」

すると、レイは少し身体をずらして、斬撃をかわす。

「くっ」

一夏はすかさず追撃をかける。

しかし、レイは僅かの動きで一夏の斬撃を次々とかわしていく。

「……前よりはいい動きだ……。だが……」

そして、レイは攻撃の合間をつき、右のほうへ回し蹴りを与える。

「ぐっ・・・！」

それによって一夏は横に飛ばされるが、すぐに体勢を立て直す。

「遅い！」

しかし、レイはすぐに追撃に足蹴りを加え、直後に蹴り上げる。

「ぐっ！」

一夏はそのまま上に浮かび、体勢を崩す。

直後にレイは踵落としを白式に掛ける。

「ぐはっ！？」

そして、一夏は地面に背中を叩きつけられる。

「くっ、くそっ！」

一夏はそのまま雪片を振るうが、レイはスラスターでジャンプしてかわす。

一夏はスラスターを使って起き上がり、雪羅を展開して荷電粒子砲を放つ。

しかし、レイはブースターを使い、地上を走行して回避した。

「くっ・・・やるな・・・」

一夏は雪羅をクロードモードにしてレイに向かっていく。

「・・・す、凄い・・・。あんな不利な条件でも、あんなに戦えるなんて・・・」

シャルはレイの戦いを見て驚く。

普通なら一夏のほうが有利な条件なはずだが、レイはそれでも一夏以上の戦いを見せる。

「ふーん・・・。どうやらレイ君のISって、地上戦を考慮した設計のようね」

「え？　どういふことですか」

と、セシリアは怪訝そうに聞く。

「普通のISなら、あんな風に地上で戦闘を行えることはできない」

「・・・確かに・・・」

「それにしても・・・。レイ君って、あんなに足癖が悪いのね・・・」

見れば、ほとんど足蹴りのみで戦っている。

「それは・・・あたしたちも初めて知りました・・・」

鈴もさすがにレイが足癖の悪さには唾然とする。

「く、くそ！」

一夏は雪片を振るうが、レイは僅かな動きでかわし、左腕を振るい、白式の横腹に一撃を加える。

「ぐっ！」

絶対防御があっても、すべての衝撃を吸収できるわけではなく、一部の衝撃で一夏の顔が歪む。

そして、レイはそのまま蹴りを白式の腹に入れ、その反動で後ろに下がる。

（・・・く、くそ・・・。このままじゃエネルギー切れを起こしてしまう・・・。その前に！）

一夏は雪片を構えなおし、レイに向かっていく。

「・・・・・・・・」

レイは少し身体をずらすが・・・

「そこだっ！」

それを狙っていた一夏は荷電粒子砲を放つ。

「・・・！」

レイはさすがに意表を突かれるも、そのまま緊急回避を行う。

しかし、さすがに避けきれず、粒子ビームはファントムの左肩をかすめる。

「くらえっ！」

そして、レイに接近した一夏は雪片を振るう。

「ちっ！」

レイは少し身体を反らし、斬撃をかわすと、そのまま体を前に出し白式の両肩を掴む。

「なっ!？」

そして、そのまま勢いに乗ってファントムは上へと上がり、白式の両肩の上で逆立ちの状態になる。

「でりゃああっ！」

そしてそのまま一夏の後ろに倒れていき、その勢いで一夏の背中に蹴りを入れる。

「ぐはっ！」

一夏はその衝撃で前のめりに倒れそうになる。

「これで、終わりだ」

そして、レイは両腕のプラズマステークを叩きつけ、電流を纏わせ
てから、一夏にブースター全開で向かっていく。

「くっ！」

一夏はとっさに急旋回して、雪片を振るう。

しかし、レイは直前で地面をけり、飛び上がる。

「なっ!?!」

そして、そのまま踵落としを加える。

「ぐほっ!?!」

その間にレイは一旦後ろに下がると、両腕のステークを構える。

そして、地面を蹴り一夏に次々と拳を加える。

「はっ! せえいっ! でいっ! うおおおおおっ!」

「ぐっ！」

レイの容赦ない攻撃が白式のシールドエネルギーを削っていく。

「うおりゃっ！」

そして、レイは一夏の腕を掴むと、背負い投げを決める。

「もう一丁！」

レイは直後に一夏に回し蹴りを加え、前へと突き飛ばして、そのまま追う。

「ダブルプラスマステーク、セット！」

そして、両腕のステークに電流が纏う。

その直後、レイはファントムの『瞬間加速』をかけ、物凄い勢いで近付く。

そして、右腕のステークを叩きつける。

「ジェットファントム！」

直後に左腕のステークを叩きつける。

「ぐっ!？」

一夏は相殺できなかった衝撃で顔が歪む。

そして、ファントムが通り過ぎると、遅れて一夏が頭から落ちる。

「ふげっ!?!」

直後に白式のシールドエネルギーが尽きた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

楯無さんを除き、他のメンバーは啞然とした。

あんな条件化でも、レイは勝利した……。つまり、一夏はかなり弱い……。と、いうことになった……

「……す、すご……。レイって……。あんな不利な条件でも、あんなに戦えるの……」

鈴はさすがにこれには驚く。常識離れ過ぎるからだ……

「さ、さすがは隊長……。どんな状況でも、冷静で判断で戦っているとは……」

ラウラは以前自分でも受けたあの回避を改めて見て、改めてレイが凄いことを実感する。

「レイ……。本当に凄い……」

シャルもレイの強さを改めて確認するのだった。

「…………これじゃ、一夏君の訓練は相当厳しくしないといけないわね…………」

と、楯無さんは扇子を開き、扇ぐ。

そして、時間は過ぎて翌日…………

「ねえねえ聞いた？」

「なにを？」

と、朝から教室で女子は噂話をしていた。

例え小声で話しても、レイには聞こえている……。なぜなら地獄耳だから……

「隣のクラスにさ、転校生が来たこと」

「ええ……？こんな時期に転校生って……」

「まあありえないってことはないけど・・・それで、どんな子なの？」

「それがさ・・・。とっても有名人なの・・・」

「有名人？」

「そう。あの『楠部家』の令嬢だって」

「ええ！？あの楠部家の令嬢なの！？隣のクラスに転向した生徒って・・・」

「そうなのよ」

と、その会話を聞き、レイはどきっとする。

（な、楠部家の令嬢だと・・・！？）

レイもさすがに聞き間違いかと思った。

しかし・・・後に事実だったことを知った・・・

しばらくして、昼休み・・・

レイは屋上で昼食を取っていた。

レイには珍しく、昼食はパンだった。

(・・・少し甘みがあつたほうがいいな・・・このパン・・・)

と、食べているパンの評価をして、コーラを飲んでいると・・・

「あつ、レイさん」

と、知り合いの声がして、レイは思いっきりコーラを吹き出す。

レイはむせながら振り向くと、確かに、そこには『幼馴染』の姿があつた。

「だ、大丈夫ですか？」

そして、心配そうに・・・神夜は近寄る。

ここはIS学園・・・なので、神夜は学園の制服を身に纏つていた。

基本女子の制服と同じだが、IS学園では制服のカスタマイズはオツケー・・・なので、神夜は鈴と同じく、肩の部分が露出したデザインになっていた。

・・・しかし、相変わらず年齢に似合わないスタイルだなあ・・・って、何言ってるんだよ俺・・・まあでも、実際のところ胸は大きく、なぜかパツパツな感じだ・・・って、だからどこ見てんだよ俺・・・

「あ、ああ・・・大丈夫だ・・・」

と、レイは口を拭いて立ち上がる。

「・・・なあ・・・神夜・・・だよな？」

「そ、そうですけど・・・どうしたんですか？」

うう・・・。相変わらず天然ボケかよ・・・こいつ・・・

「・・・な、なんでIS学園に入ってきたんだ？」

「・・・ええと・・・。私も専用機持ちになりました」

なんだと？　今専用機持ちって言ったか？！

「ど、どういう意味だ？」

「ええとですね・・・。お父様の持つIS研究所で開発された弾
三世代型の試作ISのテストパイロットを任されたのですの・・・。
データ取りの一環として、ここに転校したのです」

なるほど・・・。つまりこう言うことか。神夜の親父さんが持つIS
研究所にて、試作された三世代型のISを神夜が任されて、デー
タを取るためにIS学園に編入ってことか・・・

「・・・しかし、お前IS扱えたっけ？」

「・・・実はIS学園の入る前に研究所にて打鉄で訓練をして、I
Sの操縦を学んで、それから専用機を持つようになったんです」

「なるほどね・・・しかし驚いたぞ。お前がここに転校してくるな
んて・・・」

「ふふ・・・。実はレイさんを驚かそうと、黙っていたんです」

「はぁ・・・。そうか・・・」

と、レイはため息混じりで息を吐く。

昔から神夜は天然だが、時より天然でありながらも人を導いている・・・。
なんていうか天然の策士だなぁ・・・。
すると・・・。

「あっ見て！楠部さんだ！」

と、神夜を見つけて、女子生徒がどんどん増えていく。

・・・この後、面倒なことになったのは言わずとも見えた・・・。

Story27 転校生は幼馴染（後書き）

今回レイが最後に使用した攻撃パターンは、『ジェットマグナムS』と『ジェットフロントム』を合わせた感じですよ・

Story 28 動き出す野望

その頃……

「……しかし、本当にこっちで合っているのか？」

「ええ。間違いないでござる……」

と、地面が見える山に登る二人の人影があつた……

一人はカーボーイのような格好をした男性……ハーケン・ブルウニング。

もう一人は、薄い緑の長い髪をヘッドバンドで留めている長身の女性であつた。

全身タイツ……もとい、特注のISスーツを身に纏い、スパイクがついたグローブをつけている。

「この辺りに秘密基地があるっていう情報だが……。本当に方角はあっているのか？」

「なら自分で探ればいいだろ」

と、女性は毒舌を吐く……。

「・・・はあ・・・。分かったよ・・・。お前を信じるよ・・・アシェン・・・」

「それでいい・・・」

と、女性・・・アシェンは機嫌を直したようだ・・・。

毒舌家で、たまに口調がおかしくなる・・・というのが彼女の特徴だと言う・・・

「・・・まあでも・・・来てみたはいいが・・・こうも広い気が滅入るな・・・」

と、ハーケンはため息をつく・・・

そこはかなり広い岩山で、辺り一面岩だらけだった。

「地道に探すしかないようで・・・」

「・・・ああ・・・そうだな・・・」

そして、二人は岩山を進んでいく・・・。

だがその直後、霧がかかった上のほうから、銃弾が降ってきた。

「なにっ!？」

ハーケンはとっさに横に跳び、岩の陰に隠れて、アシェンもハーケンとは反対側の方へ跳び岩の陰に隠れる。

「・・・・・・・・」

ハーケンは慎重に岩の陰から前を覗くと、そこにはデクーやデクー改がいた。

「デクーにデクー改か……。ビンゴだな……。アシェン」

「そのようですね」

「ならば、やることは一つだ！」

そして、二人は岩から一気に飛び出す。

それに気付き、デクーとデクー改は手に持つマシンガンで攻撃する。ハーケンは素早い身のこなしで攻撃を避け、腰に掛けていたあるものを織り出す。

「しばらく大人しくしている」

そして、それをデクーたちに投げた。

それはデクーの足元に着くと、その瞬間破裂し、電流が放出された。

その瞬間、デクーとデクー改はショートして、動きを止める。

「いくぞ……。コール・ゲシュペンスト！」

「来い。クノイチ式！」

そして、ハーケンの首に掛けていたペンダントが光りだし、同時にアシェンの腕輪も光りだし、二人を包む。

そして、光が晴れると、二人はISを身に纏っていた。

ハーケンが纏っているISは、レイが使っている『ゲシュペンスト・ファントム』に酷似しているが、細部が異なっている。

機体色は黒がほとんどで、各所にシルバーがあり、バイザーの色は緑ではなく、赤であった。左腕には形状は異なるが、三本の棒があった。背中には二つの翼があり、その中央にメインスラスターがあった。

機体名・・・『ゲシュペンストMK-?』

アシェンが纏うISは、『全身装甲』のISで、頭部の後ろには束ねた髪のような形のオレンジのパーツがあり、ツインアイのカメラアイを持つ。カラーリングは黄緑がメインで、少し黄色があった。腕部と脚部は、増加装甲をしたイメージであり、重装備に見える。機体名・・・『クノイチ式』

「いくぞ！アシェン」

「了解」

そして、ハーケンは両手に『メガビームライフル』と『コマンドハンドガン』を展開して、アシェンは両手に『インパクトナックル』を展開して、敵部隊に向かっていく。

敵機はようやくショートから回復し、ハーケンに攻撃を掛ける。

しかし、ハーケンは素早く避け、メガビームライフルでまず一機を撃ち抜く。

すると、ゲシュペンストの背後からデクーが斧を持って襲い掛かる。

「でえいっ！」

しかし、すかさず横からアシェンがデクーにアッパーを加える。

それによってデクーは頭部を半ば吹き飛ばされる。

そして、ハーケンはコマンドハンドガンでその一機を撃ち抜く。

「くっ……。これじゃきりがいな……」

と、ハーケンは両手の武器を一斉に放ち、デクー改を撃破する。

「それならば……。私が『あれ』を使います」

「……。あれか……。あんまり使って欲しくないが……。この
際仕方がないな……」

「では……。『コードDTD』……。発動！……。僕におまかせん
しゃい！」

と、いきなり口調が変わり、アシェンはさっきより素早い動きでデ
クーとデクー改に向かっていく。

「必殺ファンクション！」

「アタックファンクション……旋風」

そして、クノイチ式式はそのまま高速で回転し、デクーとデクー改を蹴散らしていく。

「……はぁ……これが無ければなぁ……」

と、ハーケンはメガビームライフルを収納し、次に中型の杭がある『G・インパクトステーク』を展開し、デクーに向かっていく。

デクーはサブマシンガンで攻撃するが、ハーケンは軽やかに避けていき、ステークを胴体に叩きつける。

「ふっ」

そして、ハーケンがトリガーを引くと、杭が叩きつけられ、デクーを撃破した。

それと同時に、アシエンはデクー改の胴体を貫き、撃破した。

しかし、敵の数は中々減らず、少しずつ増えていつているように見える……

「くそ……。さすがに二人じゃ厳しいか……」

ハーケンはデクーを撃破して、辺りを見回す。

すると、一機のデクー改が斧を持って、ハーケンに襲い掛かる。

「ちっ！」

ハーケンはとっさに振り向くが・・・

「はああああっ!!」

すると、デクー改の左側から、誰かがとび蹴りをかました。　って、生身でISを吹っ飛ばした!?

「・・・・・・・・ふっ・・。遅かったな・・・零児」

と、ハーケンは友の名を言う。

ゲシュペンストの前には、着地する一人の男性がいた。

ハーケンより背は高くがっしりとした体型で、髪は黒だが、前髪の一部が白い。

「すまないな・・・・。少し手間取っていたんだ・・・」

「そうか・・・・。しかし、お前が来てくれて心強い」

「任せろ。・・・来い!　Gレックス!」

すると、零児の右手首につけているリストバンドが光り出し、包み込んだ。

そして、光が晴れると、零児はISを身に纏っていた。

カラーリングは赤がメインで、ドラゴンのような頭をして、両肩には横に伸びる角があり、後ろ腰には長い尻尾があり、『飛竜』をモチーフにした姿をしていた。両手には『インパクトナックル』に棘を追加した『バーンナックル』を装備していた。

「うおおおおっ！」

そして、Gレックスは飛び上がるとバーンナックルでデクーを頭から殴り、撃破する。

その直後に後ろから迫るデクーを零児は尻尾でなぎ払い、吹き飛ばす。

それを狙い、ハーケンは左腕より『ネオ・プラズマカッター』を引き抜き、デクーを切り裂く。

「よしっ。このまま突き進むぞ」

そして、三人は無人ISを撃破しながら山を登っていく。

しかし、その行く手に二体のISが割り込む。

「なにっ」

そして、二体は手にするライフルで三人に攻撃を掛ける。

三人はとっさに攻撃を回避した。

「くそ……。待ち伏せか……。無人機にしては中々考えるな……」

・
」

「すまんが……。無人機ではないのでな」

「なに……。？」

すると、ISから通信が入る。声からして男だ。

右側の機体は、デクーの系列機体と思われるが、額には刃のように伸びる角があり、カラーリングは紫系でまとめてあり、手には『AMBライフル』を装備していた。

左側の機体は、デクーとは異なる姿をした機体で、細長い頭を持ち、灰と白の縦じまで、両肩にはピエロの顔のようなパーツがあり異様な姿をしていた。

手には『レールガン』と呼ばれるライフルを装備していた。

「……。何者だ」

「……。イノベーター第二部隊隊長……。『ピート・ペイン』だ……。ハーケン・ブロウニング」

「俺の名前を知っているとは……。俺も中々の有名人になったものだな」

「……。お前にはここで死んでもらうぞ……。我々の計画を邪魔すると言うのなら」

「ああ。そのつもりさ」

と、ハーケンは右手に『アサルトAR3』を展開し、ピートに向けて放つ。

「ふんっ。ならば行くぞ、ジェネラル」

そして、ジェネラルと呼ばれるISは、カメラアイが光り、ライフをゲシュペンストに向け放つ。

「カルディア。お前は残りをやれ」

「了解」

と、カルディアを呼ばれる女性はレールガンを構える・

「行くぞ・・・アヌビス」

そして、アシェンと零児に向け攻撃しながら向かっていく。

「くっ」

Gレックスは回避しながら構えるが、その前にクノイチ式式が出る。

「ここは任せてください。あなたは他の敵を」

「・・・ああ・・・分かった」

そして、零児はまだいるデクーの部隊に向かっていく。

「お前の相手は私だ」

と、アシェンはインパクトナックルを構え、カルディアのISに向かっていく。

アヌビスはレールガンを放つが、アシェンはクノイチ式式の機動力を生かし、弾を避けていく。

「はあああっ！」

そして、アシェンは『瞬間加速』をかけ、インパクトナックルでアップーして、アヌビスのレールガンを弾き飛ばす。

「くっ・・・！」

カルディアはとっさにブレードを展開し、アシェンの次の攻撃を防ぐ。

「・・・やるな・・・」

「貴様こそ・・・」

そして、両者は同時に離れる。

それと同時の時に、零児はデクーの部隊と交戦していた。

「必殺ファンクション！」

「アタックファンクション！ 地獄乱舞！」

そして、Gレックスは地面を蹴り、デクーの部隊に向かっていき、

直前で高速で拳を飛ばしてデクーに当てていき、最後に強力な一撃を放ち、デクーを複数撃破した。

「・・・ん？」

「警告！ 敵ISの増援が接近中！」

「増援か・・・。これ以上戦闘を続ければ・・・持たんか」

そして、零児はハーケンの元へ向かう。

「はあああっ！」

ピートはライフフル収納してから『ギガントアックス』を展開し、刃の反対側のブースターで加速し、ゲシュペンストに向かう。

「くっ！」

ハーケンはとっさに『フルタワーシールド』を左腕に展開し、攻撃を防ぐ。

「・・・さすが、というところか・・・」

そして、ピートはブースターを更に強く噴かし、ハーケンを押していく。

「・・・！」

すると、ハーケンの後方から攻撃が来て、ピートはとっさに下がる。

そしてハーケンの横にGレックスが下りる。

「ハーケン。敵の増援だ」

「・・・増援か・・・。これ以上は分が悪いか・・・」

そして、二人はその場から遠ざかろうとする。

「アシェン！撤退だ」

「・・・了解」

そして、アシェンは両足の側面からミサイルポッドを展開し、アヌビスに向け放つ。

「くっ！」

カルディアは回避のため後方に下がる。

そして、そのまま三人はそこから撤退した。

「・・・」

カルディアは追いかけてようとするが、ピートはそれを止める。

「追う必要はない。ここの防衛が我々の目的だ」

「・・・了解・・・」

そして、二人はそのまま基地に帰還した・・・

その頃別の場所では・・・

ガキンッ・・・！

甲高い金属音が辺りに響き、インビットが両断された。

その隣では遠くから何者かに狙撃され、デクー改が撃破され、更に隣ではデクーエースがX字に切り裂かれて撃破された。

「・・・・・・・・」

そして、黒いISがブレードでインビットを一刀両断にした。

しばらくして、辺りには無人ISの残骸が転がっていた・・・

その中心辺りに、四体のISが立っていた。

一体はあの黒いISで、その隣には、カラーリングにブルーをメインに白と黒がいくつかあるISで頭に大きなトサカがあり、背中には二つの翼があるISで、右手には二つの半透明の緑の刃を持つランスを持っていた。更に隣には、獣のような姿をしており、カラーリングはグレーがメインで、いくつかオレンジと白がある。足は逆関節で、手には根元に三つのカトリッジを持つスナイパーライフルを持っていた。黒いISの反対側の隣には、女性的なイメージがあるボディーで、カラーリングが赤がメインで、青形の色がいくつかあり、頭の後ろには半透明の紫のパーツがあり、後ろ腰にはサブスラスターのようなものがあり、両手には半透明の薄い青の刃を持つ逆手持ちの短剣が握られていた。

(……『オーディーン』『フェンリル』『パンドラ』……テスト段階でこれほどの性能を引き出すか……。やはり前代のデータを流用しているだけはあるな……。これならある程度の戦闘を行えば、十分だな……)

と、三機のISのデータを見ていると、通信が入る。

「……俺だ」

『マスター……』

「ハーケンか……。どうだった？」

『残念ながら、やつらの基地に侵入することができませんでした……。予想以上に防衛隊の展開が速く、戦力的に不利になり、撤退を

するしかありませんでした』

「・・・そうか・・・。やはり試し程度では・・・無理か・・・」

『・・・どうするのですか？』

「・・・とりあえず、今は時を待つしかない・・・。今から合流ポイントのデータを送る。そこで落ち合おう」

『・・・了解・・・』

そして、通信が終わる。

「・・・一筋縄じゃ・・・難しいか・・・」

そして、黒いISはそこから飛び出し、それに続いて他三機もついていき、オーデインはその際に機体を変形させ、飛行形態になって飛んで行き、その上にフェンリルが乗り、そのまま飛んで行った・・・

その頃・・・

「――以上が報告です」

「・・・やれやれ・・・。博士もやはり、焦っているようだな・・・」

と、報告を聞いたレックスは、鼻で笑う。

「・・・しかし、さすがは博士だ・・・。我々の秘密基地をこの短期間で探し当てるとは・・・。本当に驚かされる・・・」

「いかがいたしましょうか？」

「少し様子を見てみるか・・・。それより、『ジ・エンペラー』はどうだ？」

「後は最終調整を行えば、戦いに送り出せるとのことですよ」

「そうか・・・。ならば――――」

と、言いかけようとした瞬間、電話になる。

「・・・電話か・・・」

レックスは受話器を取る。

「俺だ・・・」

『・・・お久しぶりですわね・・・。レックス』

「・・・スコールか・・・何のようだ？」

『折り入って頼みたいことがあるの』

「ほう・・・『亡国機業』の幹部であろうあなたからの直々の頼みですか・・・それで、用件は・・・？」

『用件は――――』

「・・・なるほど・・・分かりました・・・では準備が済み次第、決行いたしましょう」

『それはなによりね・・・では・・・』

そして、電話が切れる・・・

「・・・全く・・・かなり大きなことを頼まれるな・・・だが・・・面白い」

「・・・では？」

「・・・ああ・・・準備を進めろ。もしものことがあれば、我々がこれを引き受ける・・・」

「・・・分かりました・・・」

そして、秘書はオフィスを出る・・・。

「・・・ふっ・・・。本当に面白い・・・。もし亡国機業のやつがこれに失敗したら、我々がそれを引き継ぐか――」

――封印されたアークゲインの奪取を・・・

Story28 動き出す野望 (後書き)

今回ムゲフロのキャラクター達がメインですね……。まあ彼らのISは作者が似合っていると思ったものになっていますが……。もし他に似合うだろうなと思うのがあれば言ってください。今回は試し乗りをしていたという感じですから。。。

Story 29 黒き武者

そして、IS学園……

土曜となった今日は、アリーナではほとんどの生徒が使用する……
のが、当たり前だった。

しかし、今日は違った……

第七アリーナでは、かなりの数の生徒が集まっていた。

それは、ある対戦を見るためだ……

アリーナ内では、二人の生徒がいた。

一人は、紅椿を身に纏う筈と、黒い色をしたISを身に纏う神夜^{かぐや}の
姿だった。

神夜のISは、カラーリングは黒がメインで、いくつか白があった。
両肩には結構長く面積があるシールドがあり、サイドアーマーも足
首より上まで伸びている。頭のデバイスは額に二本の細い角があり、
その後ろには神夜の髪とは別の長いものがあり、紅い色をしたそれ
はデバイスから伸びており、後ろ腰まで伸びていた。よく見れば『

打鉄』に似た箇所がいくつかあった。

アリーナの観戦席には、レイとシャル、ラウラ、セシリア、鈴、一夏がいた。

「ふーん……。あれが神夜のIS……」

と、鈴は神夜のISを見て分析する。

「……今回神夜はここでは初めての戦闘らしいが……。どうなるやら……」

と、レイはスルメを噛みながら、戦闘が始まるのを待つ。

「……って、鈴……。神夜とはもう名前で呼ぶ仲かよ……」

「……そりゃ、そうよ。だって同じクラスなんだし、それに名字で呼ぶと『普通に名前で呼んでもいいですよ』って言われたから」

神夜が入ったクラスは鈴と同じ二組で、鈴はいち早く知り合っていた。

「……でも、神夜さんのISって、どんな性能なんだろう？」

と、一夏は疑問に思っている。

「……見るか？」

と、レイはポケットから、携帯端末を出して、画面を開く。

「・・・これは？」

「神夜のISのデータだ」

「えっ・・・？ ISのデータって・・・どこでそんなものを・・・」

「神夜がくれたんだよ・・・。まあ全部ってわけじゃないが・・・」

「そりゃそうだな・・・」

わざわざ重要データを渡すバカはいない・・・はず・・・

「まあそれはともかく・・・。神夜のISのコードネームは『斬月』ざんげつ。神夜の親父さんが持つIS研究所にて第二世代型IS『打鉄』うちがねのデータをベースに開発された第三世代型の試作ISだそうだ」

「へえ・・・。だから『打鉄』に似ているんだ・・・」

「ああ。しかし、様々な試作品やシステムを導入して、彼女に合わせた調整をした結果、打鉄とは異なる機体になったらしい・・・」

「ふーん・・・。でも機体のポテンシャルは同じなの？」

「いや。ディフェンス型の打鉄とは異なり、斬月は格闘戦に特化したものみたいだ。神夜に合わせての調整ならば、当然といえば当然か・・・」

「格闘戦に特化した機体か・・・。しかし、あの髪の毛みたいなのは

何だ？」

と、ラウラは斬月から伸びる髪の毛のようなものに興味津々のよう
だ。

「さあな。あれに関してのデータは入っていないところから、恐ら
く試作品だろうな……。まあ戦闘でその性能を見れるかもな」

「へえ……。なんだか色々と楽しみだね」

「ああ。それと、これは神夜から聞いた話したが……。どうやら
斬月の一部には『白式』^{びやくしき}のデータが使われているらしいな」

「えっ……。？　そうなのか」

と、一夏は驚いた様子だ。

「ああ。といっても、燃費の悪さは除いてだが、スラスタ―関連や
白式の一部の機能を使っているようだ……。だから斬月の格闘戦
の能力はトップクラスだろうな」

「……。へえ……。」

よくみれば、確かに斬月には白式に酷似した箇所がいくつかあった。

「……。さしずめ……。『黒式』^{くくしき}って呼んでも違和感はないな……
」

「……。黒式……。」

白式のデータが使われているので、ある意味では白式と斬月は兄弟機にあたるだろう・・・

「でも、神夜の実力ってどうなの？」

「・・・ISの戦闘では分かんが・・・剣術に関しては凄いだろうな」

「どのくらいなんだ？」

「・・・恐らく俺と互角・・・。もしくはそれ以上・・・か」

「な、なにっ！？お前とご、互角・・・！？しかもそれ以上って場合もあるのかよ！？」

「そりゃそうだろう？楠舞家って昔から武道に長けた家で、様々の武道では人一倍ある」

「・・・・・・」

「まあ、箒は第四世代のISだ・・・。剣術に長けた神夜とどこまで張り合えるか・・・」

レイは戦闘の結果が楽しみだった・・・

「・・・しかし、意外だな・・・。初めての相手に私を選ぶとは・・・なぜですか？」

「それはですね・・・あなたのISに興味があるのもありますが、あなたの剣術の腕を拝見したいのです」

「そうですか・・・。では、手加減無しで行きます」

「私もそのつもりで行きます」

そして、箒は『雨月』『空裂』を展開し、構える。

「・・・『護式・斬冠刀』・・・召喚！」

すると、斬月の右手に、自身の丈ほどはある大剣が展開された。

「で、でか・・・?!」

箒もさすがに驚いた様子・・・

刃の形状は至ってはシンプルだが、その反対側には湾曲した刃がいくつもあり、『三日月』のような形をしていた。

「では、推して・・・参ります！」

そして、神夜から先に仕掛ける。

「くっ！」

箒は雨月で斬冠刀を防ぐが、勢いで後ろに飛ばされる。

「い、一撃が重い・・・?」

箒はISでは今までにない感覚を感じていた。

IS装着時は物の重さはほとんど感じないので、いくら大きな武器や重い武器でも軽々に操れる……。それ故、相手の武器の一撃はさほど大きくない……。はずだが……。神夜の一撃は確かに重かった……。

「はあああ！」

そして、神夜は次々に斬冠刀を振るい、箒を攻めていく。

(うっ……。やはりこれは……)

箒は確信を得る……。神夜のIS『斬月』にあるのか、もしくは斬冠刀にあるのかは定かではないが、どうやら相手にのみ、一撃が重く感じるようになっていく……。

このまま受け続ければ、腕が痺れるのも時間の問題だ……。

「ならばっ！」

と、箒は空裂と雨月を振るい、斬冠刀に当てるとその反動で後ろに下がる。

「いけえっ！」

そして、雨月を連続で振るい、多数の光波こうはを射出する。

「そう来ましたか……。ですが……」

神夜はいくつか光波を避けると、頭を横に振るい、後ろにあった紅い髪のようなものが前に出て、機体の前方に展開した。

そして、光波が紅い髪に直撃すると、光波のビームが拡散されて無力化された。

「な、なにっ!？」

これには箒も驚く(二度目)

「なっ、何なの・・・あれ・・・?」

鈴もさっきのことには驚いていた。

「・・・どうやらただの飾りじゃないようだな・・・」

「そりゃ見れば分かるわよ・・・。で、何か分かったの?」

「・・・恐らく、ビームを弾くコーティングが髪の毛一本一本に施されているのだろう」

「・・・ビームコーティングを・・・?でもそれだけじゃあんなふうに拡散には・・・」

「確かに、板の上にそのコーティングを施した状態ではビームを大幅に拡散できないだろう・・・。だが、面積は小さいだろうが別々にコーティングを施せば、細かくビームを拡散できるだろうな」

「……確かに……そうだね……」

と、シャルはレイの説明に納得する。

「……と言っても、試作品だろうから、完全な能力は発揮できないだろうな。だけど、ビームを拡散できると言うだけでも、筈は不利になるな」

紅椿の射撃武器は全部ビーム系だ。斬月の前では射撃攻撃は役に立たないだろう。

といっても、近付けば斬冠刀の猛攻を受けることになる……。

（これは興味深いな……）

レイはスルメを噛みながら、戦闘を見る。

「くっ……ここまで強いとは……」

さすがの筈でも、特殊な能力＋神夜の剣術の腕の前では苦戦を強いられていた。

ビーム攻撃はほとんど通じない……。相手の斬撃は操縦者に影響がある……。

「ならば、一気に勝負を掛ける」

と、箒は脚部の展開装甲を開き、機動力を上げて神夜に接近する。

「これがレイさんが言っていた『展開装甲』ですか……確かに見たことがない装備ですね……」

と、神夜は斬冠刀の剣先を横に向ける。

「なにを……しかし、隙を見せるのなら！」

そして、箒はスラスターを更に噴かし、神夜に接近する。

「……いきなさい……。月の子達……！」

すると、斬冠刀の湾曲した刃が刀身から全部飛び出した。

「なっ!?!」

そして、飛び出た刃は向かってくる箒に向かって行った。

箒はとっさに雨月と空裂で防ぐが、直後に左側から三日月の刃が直撃する。

「くっ!」

さらに両方から来るのを見て、箒は両腕の展開装甲を開き、それらを防ぐ。

「……さすがですね……。あれだけの月の子たちを防いでいくな

んて・・・」

と、神夜が刀身を動かすと、月型の刃は箒から離れると、斬冠刀に向かい、元に位置に戻る。

（な、何て強さだ……。さすがは楠舞家の令嬢……。剣の扱いのほかに動きまでもが私より上だ・・・）

「…………では、そろそろ終わらせていただきます」

と、神夜は斬冠刀を両手で持ち、剣先を上に向けて構える。

すると、刀身にエネルギーが纏い始めた。

「…………な、何を…………」

「…………これが、私の奥義…………『月華乱舞』！」
げっからんぶ

「！」

そして、神夜は斬冠刀を正面に向けると、左に振るい、刀身から桜色をした光波が飛び出し、その直後に右側に振るい、最後に一回転して、刀身を振るって光波を飛ばす。

そして三つの光波は箒の紅椿に高速で向かっていき、箒が避ける暇もなく全て直撃する。

「うわああああっ！！！」

そして、箒は衝撃で後ろに飛ばされ、紅椿のシールドエネルギーが

尽きた。

「・・・っ、っよっ・・・！」

鈴はその一部始終を見て、神夜の強さを知る。

「さすがだな・・・。以前見たより強さが増しているな」

と、レイはスルメを噛み切って、残りを手に持つ。

「・・・さてと、神夜に色々聞いてみるか」

と、レイは席を立つとアリーナのピットに向かう。

「ふう・・・」

神夜はピットに着くと斬月を解除して、待機状態にした。斬月の待機状態は右手首の黒いブレスレットのようだ。

「見事な戦いだっただな・・・神夜」

と、レイが少ししてピットに現れた。

「レイさん・・・」

「斬月の性能は凄いな……。俺も驚いたよ」

「そうですか……。それを聞けてよかったです」

「そうか……。」

「……。さすがね……。神夜ちゃん」

と、少しすると、ピットに楯無さんが現れた。

「あっ……。楯無さん。お久しぶりです」

「久しぶり」

「え？……。二人は知り合いなのですか？」

「ええ。更識家と楠舞家は昔から縁があるの。だから昔からの友達
ってわけ」

「はぁ……。なるほど……」

「……。レイさんと楯無さんって、どういう関係なのでしょう？」

「……。ふふふ……。それはねえ————」

「助手だ……。生徒会長の」

楯無さんが言い切る前にレイが言った。

「もう……。せっかく私から説明をしようと思ったのに……」

「あなたが余計なことを言いそうだからですよ」

「あら？　いつ私がそうだって言ったかしら？」

「あなたならやりかねません」

「……。もう……。私を疑うと、こうだぞ……」

と、楯無さんは手をわきわきと動かす。

「げっ！」

レイは一気に青ざめ、そこから脱兎の如く逃げ去る。

「逃がさないわよ！」

と、楯無さんは物凄いスピードでレイを追いかける。

その後、レイの悶え苦しむ笑いが響いたのは、数分後のことだった。
・・・

「はぁ・・・はぁ・・・は、腹が千切れるかと思った・・・」

それから数十分楯無さん得意のくすぐり攻撃を受けて、それから数分が経っても、レイの息は乱れていた。

しかも腹も腹痛とは違う痛みに襲われていた。

ちなみに、今レイは学園の会議室で、学園内の廊下に貼る学園祭のチラシを作っていた。

楯無さんの命令で、チラシを作ることになり、今はチラシに色を塗っていた。

「・・・しかし・・・多すぎだろこれ・・・」

レイの隣には、かなりの量のチラシがあり、それらを今日中に塗らないといけないのだ。

「・・・さすがに・・・気が滅入るよ・・・」

と、愚痴っていると・・・

コンコン・・・

と、ドアのノックが聞こえた。

「ん？」

レイは一旦作業をやめて、席を立てドアを開けると・・・

「や、やあ・・・レイ」

そこには、シャルの姿があった。

「シャル・・・。どうしたんだ？」

「その・・・な、何か手伝うことってないかな・・・？」

「・・・手伝ってくれるのか？」

「う、うん」

「そりゃ助かるよ！ちょうど手がいるところだったんだ」

「そ、そうなんだ・・・」

「じゃあ早速手伝ってくれ」

と、レイはシャルの手を掴むと、会議室に入れる。

「・・・・・・・・・・」

シャルは作業をしながら、レイをちらちらと見る。

真剣な表情で黙々と作業を続ける。

（・・・レイって・・・こういう作業に慣れているのかな・・・。
何だか楽しそう・・・）

レイの顔は真剣だが、どこか楽しそうな感じだ。

あれから二人の仲は親密なものになったのだが・・・レイは学園内ではその関係がばれないようにするためか、普段は普通にシャルと接しているが、こうして二人のときは一段と優しくなる。

（・・・なんだか・・・僕も楽しいかな・・・）

そして、二人は黙々と作業を続けた・・・

「ふう・・・。やっと終わった・・・」

そうして作業を続けること二時間・・・チラシをすべて塗り終えた。

「さてと・・・。後は仕上げのみ、と・・・」

レイは出来上がったチラシを半透明のファイルに入れると、印刷機のような機械にセットすると、スイッチを入れる。すると、ファイルは熱せられて、全体を熱で閉じて、半透明も透明になった。そうして出来上がったそれを最終確認のために見て、机に置く。それは『ラミネート加工』と呼ばれるもので、プラスチックのファイルで表面をコーティングする加工法だ。

「後は俺がするから、シャルは帰ってもいいぞ」

「で、でも……ここまでやったら最後までやるよ……」

「……でもな……」

「せ、せめて、最後までいてもいいかな……?」

「……まあ、いいけど……。結構時間は掛かるぞ?」

「どんなに時間が掛かってもいいよ」

と、シャルは近くにあったパイプイスに座る。

「……シャルはいいなら……。いいけど」

そんでもって、レイは作業を続けた。

「はぁ・・・やっと終わった・・・」

と、レイは息を大きく吐いた。

作業が終わったのはさらに三時間後のことだった・・・

すっかり当たりは暗くなり、時間も夜の七時半だ。

（・・・さすがにシャルは帰って————）

と、レイはさすがに帰っているだろうなと思い、振り向くと、シャルはまだいた。

「・・・シャル・・・」

シャルは眠くなっていたのか、座った状態で寝ており、よく見れば机には売店で買ったと思われるサンドイッチのパックがあった。どうやら途中で夕食にサンドイッチを買ったようだ・・・。

「・・・別に最後までいなくてもよかったのに・・・」

と、レイはシャルの傍に行く。

「シャル……。終わったぞ」

「……………」

しかし、返事はない。

「…………シャル……？」

すう…………と、寝息を立てる。

「…………もしもーし？」

と、揺さぶっても、シャルは起きない……

「…………完璧に寝ている……」

どうやらシャルはうたた寝ではなく、完全に寝ていた。

「……………」

レイは頭を搔くと、どうしようかと考える。

「どうしよう……………」

まず、ここに置いたままにはできない……。ではどうしよう？

（…………どうやって部屋まで運ぼうか……）

その一；抱っこして運ぶ。

（いや、それじゃなんかよくない気が・・・）

その二；お姫様抱っこで運ぶ。

（・・・もつとだめだ・・・勘違いを生みそうだ）

その三；おんぶで運ぶ。

（・・・それが無難、か）

そして、レイは何かシャルをおぶると、会議室を出る。

コンコン・・・

レイは寮に着くとシャルの部屋のドアをノックする。

ラウラがいるだろうと思い、来てみたのだが・・・

（・・・いないのかよ・・・）

どうやら運悪く留守のようだ。

「はぁ・・・」とレイはため息をつく、しばらく考える。

（・・・どうするかな・・・。このままおぶっていると誰かに見られそうだ・・・）

ここまで運よく誰にも見られていないが、このまま居てはじきに見つかるだろう。

（・・・置いたままにはできないから・・・仕方がない・・・しばらく俺の部屋に寝かしておくか・・・）

と、レイは隣にある自分の部屋に行き、ドアを開けて中に入る。

中に入ると、レイはシャルをベッドに寝かせて、携帯を出すトラウラに電話を掛ける。

「・・・・・・・・・・」

・・・出ない・・・

「・・・ちっ・・・。何してんだあいつ・・・」

レイは一旦電話を切り、携帯を机に置く。

「・・・仕方がない・・・シャワーでも浴びるか・・・」

そして、レイは着替えを出して、シャワールームに入る。

「ふう・・・さっぱりした・・・」

と、レイはシャワールームから出ると、タオルで頭を拭く。

タオルを取ると、レイは眼帯を外しており、金色の瞳が見えていた。

レイはイスに座ると、眼帯を机の上に置き、背伸びをする。

「あゝ・・・・・・・・。結構疲れが溜まってきたな・・・」

と、レイは普段は出さない本音を言う・・・。

シャルはまだ目を覚ます予兆は見せてない。

「困ったなあ・・・」

レイは頭を掻いて、再度携帯を開き、ラウラに電話を掛ける。

「・・・・・・・・・・」

・・・・・・・・また出ない・・・

「・・・・・・・・・・」

レイは黙ったまま電話を切る。

「・・・弱ったなあ・・・」

と、レイは振り向いて、シャルを見る。

(・・・シャルも部屋の鍵は持っているはず・・・だよな・・・)

シャルはラウラと同じルームメイトであるので、部屋の鍵は持っているはずだ・・・。

(・・・しかし・・・。どこにあるんだ?)

女子の制服と言うのは、どうも分からないところが多いな・・・。
ポケットはどこにあるんだ？

「・・・・・・・・・・」

レイはしばらく考えてから、シャルの周りを見る。

「・・・どこだ・・・?」

と、ポケットを探していると・・・。

「うーん・・・」

と、シャルが寝返りをした。

「うつ・・・」

そして、レイの顔面がシャルの胸に当たる。

そして、レイは何かもがいて、ようやくシャルの束縛から逃れた。

「ふはあっ……！」

レイは勢い余って、後ろのベッドに倒れる。

そして、レイは息を整えながら、ゆっくりと起き上がってシャルを見る。

……どうやらシャルは起きなかったようだ。

「はぁ……はぁ……助かった……」

と、レイは安堵の息を吐く。

(……しかし……)

レイはさっきのことであることを思い出してしまった……

(束さんと初めて会った時を思い出してしまった……！)

レイは束さんと衝撃的な初対面の時を思い出したようだ(顔面に巨乳が覆っていた)……。一番恥ずかしいことなので、レイの顔は真っ赤になっていた。

「……はぁでも……まあいいか……」

と、レイはベッドから起き上がると、机の上の眼帯を取ると、右目に付ける。

コンコン……

と、ドアのノックが聞こえた。

「ん？」

レイはドアのほうへ歩き、ドアを開ける。

「……こんな時間に失礼します……隊長」

と、そこにはラウラの姿があった。

「ラウラか」

「……携帯に隊長から電話があったので……。どうかされたのですか？」

「ああ。シャルが途中で寝てしまったから、部屋に戻そうとしたがお前がいらないから、電話を掛けたんだよ」

「そ、そうでしたか……。す、すみませんでした……」

「……まあいいけど……。とりあえず……」

と、レイは部屋に戻ると、シャルを抱きかかえて、ラウラに渡す。

「シャルを頼むぞ」

「分かりました」

そして、ラウラはシャルを（不安定そうに）抱きかかえて、自分の部屋に戻った。

「……もう寝よう、と」

そして、レイはドアを閉めて、部屋の電気を消してからベッドに寝転ぶと、薄い布団をかけて、目を閉じる……。

S t o r y 2 9 黒き武者（後書き）

神夜のISは・・・特徴から大体イメージは付くと思う・・・。
そんなもって、次回からレイのライバルが登場・・・。

Story30 転校生は俺のライバル

学園の寮の食堂・・・

「はああ・・・・・・・・・・」

と、一夏とレイは深いため息をつき、一夏はテーブルにうつ伏せになり、レイは両肘をテーブルに付けて頭を下げる。

あれからずっと、一夏は楯無さんの特訓を受けて、楯無さんに振り回され続けた。

特訓の時にたまにレイが相手の時があり、楯無さんからのお色気攻撃もあり、疲労のほか、精神的な疲れがあった。

レイは生徒会長の助手であるので、生徒会の手伝いをしたり、楯無さんと一夏の特訓に付き合ったり、楯無さんの命令を聞いたり（というよりこき使われている）など、楯無さん指導の下での自身の特訓などと、さすがのレイも疲労でいっぱいだった。

「・・・ふ、二人とも・・・大丈夫？」

その二人の姿を見て、シャルロットは心配そうに声をかける。

「・・・大丈夫・・・じゃないな・・・」

「ああ・・・」

「そ、そう・・・。お、お茶でも飲む？」

「ああ・・・頼む」

シャルは席を立つとお茶を取りに行く。

「・・・精神的に・・・きついよな・・・」

「ああ・・・。そうだな・・・」

二人はかなり精神的に来ているようだ。

「はい。お茶持ってきたよ」

と、シャルがお茶が入ったコップを二人に渡す。

「おう・・・。サンキュー」

「すまん・・・」

そして、二人はシャルからお茶を受け取る。

温めのお茶は今の二人にとってはちょうどよかった。

「なあシャル」

「・・・なに？」

一夏が部屋に戻って少ししてから、レイがシャルに聞いてきた。

「この後第五アリーナで訓練に付き合ってくれないか？」

「・・・訓練？」

「ああ。・・・と言っても、武器のテストなんだが、シャルの意見を聞きたいんだ」

「そう・・・。僕はいいよ」

「ありがとう」

そうして、二人は席を立て、食堂を出た・・・

第五アリーナ・・・

レイとシャルはISを展開し、アリーナ内にいた。

レイはファントムを展開していたが、装備はいつもと違う。

両肩にはシールドを装備して、両肩上部にはキャノンがあったが、以前のものと異なり、形状が若干異なっている。両足側面のアタッシメントにはミサイルコンテナが装備されていた。背中には新規のミサイルコンテナが二つ装備されており、形状は四角で前より大型化されていた。両腕も今回の装備に従い、三連マシンキャノンを装備したものに換装されており、完全射撃戦仕様のファントムだ。

「今回のファントムの装備って、学年別トーナメントの時の装備と似ている？」

「まあそうだろうな。あの時の装備はこのガンナーパッケージ・・・通称『タイプC』をメインに構成した装備だからな」

一学期の時にあった学年別トーナメントでファントムに施した装備・・・通称『特別装備その一』は、このガンナーパッケージを主に使用した装備だ。

ちなみに、ストライクパッケージの通称は『タイプG』であり、それぞれタイプCとタイプGとレイは呼んでいるらしい。

「・・・でも、なんでテストを行うの？もうテストはしているはずじゃ・・・」

「まあ確かにもうタイプCのテストは行ったけど・・・今回はアップグレードしたガンナーパッケージのテストだ」

「アップグレード？」

「ああ。一定の戦闘を行ったから経験値が溜まったから、いくつかの装備がパワーアップしてな。特にタイプCは大幅に装備がパワー

アップしたんだ」

「へえ……。そういえばキャノンの形状が前より少し違うし、両腕の装備も違うね」

「ああ。だからシャルにはいくつか武器のテストを行うから、見ての意見を聞きたいんだ」

「うん。わかったよ」

「よし。じゃあまずはキャノンからだ」

と、レイはキャノンを展開すると、砲身が少し伸びて、以前と異なりミドルバレル仕様になっていた。

そして、前方に現れた仮想標的に向けキャノンを発射した。

発射されたエネルギー弾は狂いもなく的の中心を撃ち抜く。

それから連続キャノンを放ち、的の中心を撃ち抜いていく。

「凄い……。全部のど真ん中に命中させている……。」

「まあ、このくらい造作もないさ。それで、どうだった？」

「うーん……。確かに前より威力は高くなっているし、命中精度も上がっていると思うよ」

「そうか……。まあ以前より性能が上がっているのは確かだな……。じゃあ次、と」

と、レイはキャノンの砲身を収納すると、次は背中のミサイルコンテナのハッチを開く。

前には新しく動く仮想標的が複数現れ、縦横無尽に動いていた。

「・・・ロック完了・・・。いけえっ！」

そして、コンテナから無数のミサイルが発射され、すべて仮想標的に命中した。

「・・・動く標的に狂いもなく命中させているなんて・・・。ロックオンシステムも向上しているみたい」

「・・・ふむ・・・。中々のものだ・・・。それでどうだった？」

「・・・うーん・・・。確かに凄いいけど・・・。ちょっと多すぎない？」

「・・・まあ・・・。確かに多い気がする・・・。じゃあ今度はアップグレードした武器、と」

そしてレイは右手にイグゼキューショナーを展開した。

すると、モニターに「アップグレードしましたので、性能が向上し『イグゼキューショナー』は『サドデスX』となりました」と表示された。

「・・・ふむ・・・。こんなに性能が向上するものなんだ・・・。シャル」

「どうしたの？」

「今からアサルトライフルで上に向けて発砲してくれないか？」

「え・・・？ どうして？」

「こいつの性能を試すからさ。どれだけ精密度が上がったかのテストだ」

「・・・分かった」

と、シャルは右手にアサルトライフルを展開し、上に向けて発砲した。

すると、その瞬間サドンデスXの銃口から火が噴き、そのまま弾丸は突き進み、シャルのアサルトライフルから放たれた弾丸を弾き飛ばした。

「えっ!？」

これにはシャルは驚いた。

ただでさえ銃は早く弾丸を撃ち出すというのに、それを狂いもなく命中させた・・・。レイの射撃の腕は尋常じんじょうではない。

（あんな小さな・・・しかも音速で飛んでいるものに一発で命中させるって・・・。ありえない・・・）

「・・・ほう・・・。前より狙いやすくなっているし、弾速も早いな」

と、レイはサドデスXを収納した。

「まあとりあえず大体のテストはこれくらいでいいか・・・」

「そう・・・。じゃあこれで終わり？」

「・・・いや・・・。後一つぐらいするか・・・」

「なにをするの？」

「シャル・・・。今から模擬戦の相手をやってくれないか？」

「えっ？・・・模擬戦？」

「ああ。よりいいデータを得るにはより実戦に近いほうがいいからな。いいか？」

「・・・うーん・・・。レイが言うなら・・・いいけど」

「よし。じゃあどちらかのシールドエネルギーが尽きたら負けだ」

「いいよ」

そして、二人は一旦距離を置く。

「言っておくが、俺が相手だからって、手加減はなしだ」

「それはこっちの台詞。僕が相手だからって、手加減はなしだからね」

「ああ」

そして、少しして二人は同士に動き出した。

シャルはアサルトライフルとアサルトカノン《ガルム》を展開し、レイに向け放つ。

レイは攻撃を回避しながら、両腕のマシンキャノンをシャルに向け放つ。

シャルはシールドで攻撃の一部を防ぎながらも『高速切替』を使ってサブマシンガンを展開してレイに向け放つ。

「くっ！」

レイは左肩のシールドで弾丸を防ぎ、右手に『マグナ・ビームライフル』を展開し、シャルに向けて放つ。

その内二発がリヴァイブの左肩に直撃して、一瞬バランスを崩す。

「くっ！」

レイはその隙を逃さずキャノンを展開し、シャルに向け放つ。

「まだだよ！」

と、シャルは『瞬間加速』イグニッションブーストを掛け、弾丸を避けながら向かっていき、ファントムの懐に入る。

「なにっ!？」

そして、シャルはショットガンを展開して、至近距離で放つ。

「ぐっ！」

着弾の衝撃でファントムは少し後ろに下がるが、すぐに左腕のマシンキャノン放つ。

シャルはとっさに回避したが、一部の弾丸は避けきれず命中した。

そしてレイは左手に『アサルトAR3』を展開し、マグナ・ビームライフルと併用して砲撃する。

シャルは避けながらも右手のショットガンを収納し、アサルトライフルを再度展開して、放つ。

「・・・さすがだ・・・。でも・・・」

そしてレイはアサルトAR3でシャルの動きを牽制して、マグナ・ビームライフルを放つ。

弾丸はまっすぐ突き進み、シャルがレイに向けていたアサルトライフルの銃口に弾丸が入り、アサルトライフルの銃身が破裂した。

「えっ!？」

シャルは驚きながらもアサルトライフルをとっさに捨てる。

「じゅ、銃口に命中させるなんて・・・」

シャルはレイの命中率の尋常さを改めて認識した・・・。

標的が動いて、しかも小さい穴に口径が大きい銃の弾丸をずれずに命中させた・・・。

「あ、ありえない・・・。」

かなりの離れ業にシャルは咄然とするも、すぐにサブマシンガンを展開して、レイに向けショットガンと併用して放つ。

レイはシールドで防ぎながら両手の武器を収納して、キャノンを放つ。

シャルはシールドで防ぐと、そのシールドをパージした。

「いくよ！」

そして、シャルはショットガンを連射しながら一気にファントムに接近した。

「くっ！」

レイはシールドで防ぎ、シールドを除けると、シャルが目の前にいた。

「しまっ・・・！」

「この距離なら・・・外さない！」

そして、シャルはグレー・スケールをファントムの胴体に向け突き

出す。

だが、レイはとっさにシールドを前に出して、グレー・スケールを防ぐ。

直後、シールドにグレー・スケールが叩きつけられ、ファントムに衝撃が走る。

「ぐっ！」

レイはその衝撃で顔を苦め、後ろに下がる。

「・・・俺も同じ武器を持っているとはいっても・・・さすがに威力があるな・・・」

シールド表面にじゅう、と蒸気が上がり、穴が開いた。

「さすがだね・・・。あれは確実に入ったと思ったんだけどね・・・」

「俺もそう思ったよ・・・。でも土壇場^{どたんば}の判断ってやつかな・・・」

「・・・ふふ・・・。そうかもね」

「・・・まあ、このくらいなら、いいデータが取れたよ」

「そうなの？それはよかった」

「ああ。シャルのおかげだな」

「そ、そうかな・・・？僕はただ手伝っただけなのに・・・」

「別に謙遜けんそんしなくていいんだぞ。シャルのおかげはシャルのおかげなんだよ」

「・・・そうなのかな・・・」

どうも誰かの名言に似ているような・・・

「とりあえず・・・これでテストを終えるか」

「そうだね」

そして、二人はISを解除して、アリーナ内にそれぞれ戻っていく。

その次の日・・・

朝からでも女子の会話トークは絶えずあるものだ。

「ふわあああ・・・」

レイは大きなあくびをする。昨日久しぶりに提出用のISのデータ入力を行ったので、データを打ち終えたのが朝だったので、睡眠が取れたのは本の二時間半だと言う・・・

(さてと・・・今度どつかでアップグレードした『ストライクパ
ッケージ』のテストをやらないとな・・・でも相手は・・・)

レイはテストの相手を考える・・・。

さすがに連続でシャルに頼むのは迷惑だろうと思った。一夏は論外。
箒は悪くないが、どうも箒とは馬が合わない。セシリアは射撃戦に
特化しているので、データ収集の当てにはならない。鈴は確かに条
件ははまっているが・・・腕の割合が合わない。だからラウラか神
夜が候補だぐやな・・・

すると、山田先生が教室に入ってきて、生徒はすぐに席に座る。

「みなさん。おはようございます」

山田先生は教卓に着くとあいさつして、生徒全員も「おはようござ
います」とあいさつする。

「ではSHRを始めますね。・・・その前に、皆さんにお知らせが
あります」

と、生徒全員の頭の上には『?』と出た。

「実は今日、この一組に転校生が来ました」

山田先生が言うと、教室がどよめく。

「こんな時期に転校生って・・・」

「しかも転校生ってつい最近きたばかりなのに・・・」

と、女子生徒のほとんどは疑問の言葉を漏らす。

「・・・ええと・・・。本当なら隣のクラスに転校してきた楠舞さんと一緒に入って来る予定だったのですが、どうも向こう側の事情があって、今日にずれたそうです」

（・・・なるほど・・・）

「・・・では、入ってきてください」

と、山田先生が声をかけると、教室の扉が開き、一人の女子生徒が入ってきた。

（・・・な・・・に・・・？）

レイはその女子を見て驚く・・・。なぜらな・・・知り合いだからだ・・・

その女子は、オレンジ色の髪をしており、髪は腰より少し上まで伸ばし、その根元を黒いリボン結んでおり、その髪型はポニーテールだった。スタイルは低くない、高くない・・・つまり中間より少し上と言う感じだ。

IS学園の制服はカスタム自由なので、その女子の制服も改造されている。上のほうは基本いじってはいない・・・いわゆるオーソドックスなものだが、下はスカートではなく、丈がかなり短いグレーのズボン・・・いわゆるホットパンツで、両足に白いニーソを穿き、ひも付きの少し短いブーツを履いている。

女子は教卓の横まで歩いていき、生徒に方へ向き直る。

「この学園に転校してきました『フィオナ・ランスター』です。これからもよろしくお願いします」

と、その女子・・・フィオナは頭を深く下げて挨拶する。

「ランスターさんはあるＩＳ研究所のテストパイロットで、データ収集を兼ねての入学だそうです」

「え・・・？それじゃランスターさんは専用機持ち？」

「ええそうです」

と、教室の驚きの声が響く。

まず専用機持ちの数が以上だ・・・このクラスだけでも六人おり、これで七人、そして隣のクラスを足すと一年だけで九人・・・いや、一応全部で十一人いる・・・らしい。

「では、みなさん。仲良くして下さいね」

「はい」と生徒は返事をする・・・一人を除いて

「・・・」

フィオナはレイと目が合うと、少し微笑む。

そして時間は過ぎて昼休み・・・

レイは屋上におり、自販機で買ったサイダーを飲んでいた。

(・・・しかし・・・なぜあいつがここに・・・)

レイは考えていると・・・

「・・・それにしても・・・。久しぶりに会ったのに・・・そんな反応じゃ私も気が引けるよ」

と、ココア缶を持ったフィオナが来た。

「・・・・・・」

「・・・久しぶりね・・・。七年ぶりかしら」

「・・・よくそんなことが言えるな・・・あの時何も感じていなかったのか」

「・・・まああの時は悪いと思ったわ・・・。でも、あの時はあれしかなかったことは、あなたもわかっていただでしょ？」

「・・・それはそうだが・・・だが・・・」

「・・・でも、あなたが無事なのは、よかったって思っているわ」

「・・・・・・・・・・」

レイはしばらく黙り込んで・・・

「・・・一体どういう風の吹き回しなんだ・・・」

「聞かなかったかしら？私とはあるＩＳ研究所からデータ収集を兼ねて、ここに入学してきたの・・・」

「・・・本音は？」

「・・・・・・・・ふっ・・・相変わらず勘が鋭いわね・・・私からは数少ないＩＳを扱える男子・・・ってことに興味があったの」

「・・・ふーん・・・」

「でも、あなたがその内の一人ってことは驚いたわ・・・」

「・・・・・・・・・・」

「ところで、健造さんは元気？」

「ああ。元気だよ・・・有り余るほど・・・」

「ふーん・・・本当に元気な人だね」

「・・・まあな」

「・・・でも、あなたは変わったわね・・・昔は人間嫌いだったのに・・・」

「・・・人は変わるものさ・・・。どんなにひねくれたやつだって・・・」

「・・・そう・・・。でも――」

すると、フィオナはレイの顔に大胆に近付き、鼻先五センチまで来た。

「・・・そういうの・・・嫌いじゃないわよ」

「・・・」

「・・・まあ暇な時があったら、何か言ってね・・・」

と、フィオナは屋上から出た・・・。

「・・・」

レイはしばらく黙り、サイダーを飲む。

放課後・・・

フィオナは建物の陰に隠れると、携帯を取り出してどこかに掛ける。

「・・・・・・・・」

『俺だ・・・』

「私よ・・・レックス・・・」

『フィオナか・・・どうだ？ IS学園は』

「まあまあね。嫌な要素はほとんどない・・・。いい要素のほうがいい」

『そうか・・・。それで、対象に接触はできたのか？』

「ええ・・・。まあ前より少し変わっていたけど・・・」

『・・・では、今後対象の調査を行え・・・。無論イノベーターの刺客しかくだと言うことを悟られないように、だ』

「・・・・・・・・はいはい・・・。言われなくても分かっている・・・」

『それと、緊急時はお前の判断に任せるが・・・。限度をわきまえろよ・・・』

「・・・・・・・・了解・・・」

『・・・では、幸運でも祈るかな・・・』

そして、電話が切れる。

「・・・限度をわきまえろ・・・ねえ・・・」

と、フィオナは携帯を閉じて、鞆に入れる。

「・・・そういうの・・・苦手なんだよね・・・。でも——」

そして、フィオナは建物の陰から出ると、光がオレンジの髪に反射して輝く。

「・・・別に限度をわきまえることができない・・・ってわけじゃないわ」

そうして、フィオナは寮に向かう・・・

Story 31 学園祭開催

そして、学園祭当日……

一組では準備であわただしかった。

「しかし……。こんなに人気があるもんだな……」

と、一夏は執事服を着ており、店の準備をしていた。

一組の学園祭の出し物と言うのが……『ご奉仕喫茶』である。

女子の一部はメイド服を着ており、その一部と言うのがセシリア、シャル、ラウラ、そして以外にも箒だ。

男子である一夏とレイは執事服で接客するというものだが、今のところ一組にはレイの姿がなかった。

……ちなみに、この出し物の発案者はラウラだという……

「……ところで織斑さん……レイの姿が見えないのはなんですかしら？」

と、メイド服姿のフィオナが一夏に聞いてきた。

髪型はポニーテールではなく、横でリボンで髪を結んだツインテールにしていた。

「さあ……。たぶん楯無さんと一緒じゃないですか」

「……。ふーん……。その楯無さんとレイはどのような関係なのかしら？」

「ええと……。楯無さんは生徒会長で、レイはその助手です」

「……。へえ……。あのレイが助手ねえ……」

と、くすつとフィオナは笑う。

「どうしたんですか？」

「……。いや……。こういう関係を嫌っていたレイがここまで変わっていたことが少し驚きかな」

「はあ……」

「まあでも、レイの執事姿も見てみたいね……」

と、フィオナ手にしていた台拭きでテーブルを拭く。

（……。なんていうか……。どうもフィオナさんと話す時の流れが分かりにくいな……）

一夏はそう考えながら、準備を進める……

一方・・・IS学園の校門では企業側や研究所の職員らしき人が学園に入って行く。

「・・・・・・・・」

その中に、一人の男性がいた。

黒いスーツを着て、その上に黒いコートを羽織っており、黒いサングラスを掛けていた。

「すみません」

と、男性は女子生徒に呼び止められた。

その女子生徒と言うのが、生徒会のメンバーであるのほほんさんの姉・・・『布仏虚^{うつほ}』であった。

「申し訳ございませんが、どちらから来られましたか？」

と、こんなことを聞くのも、安全のためらしい。怪しい勧誘とか、ISの装備の販売などなど・・・・。そんなことを防ぐためだ。

「・・・私はここのものです」

と、男性はコートのポケットから名刺を取り出して、虚に見せた。

「……日本特殊IS研究所の職員……『レオン・レイオス』さん……ですね……。ではお通り下さい」

「ども」

と、男性は名刺をポケットに戻すと、IS学園に入っていく。

（……しかし……。レイの様子を見るために学園祭の時に来るって……。なんか変なような……）

男性はそう考えながらも、辺りを見ながら学園内を進んでいく。

ちょうど同じ頃……

「それにしても、今日は学園祭にぴったりの天気ねえ……」

「そうですね……」

と、なぜかメイド服姿の楯無さんと執事服姿のレイは廊下を歩いていた。……しかし……。相変わらず例は執事服が似合っている……

「……ん？」

すると、楯無さんは窓からとある人物を目撃する。

「どうかされましたか・・・お嬢様？」

と、レイはその様子を見て聞く・・・。ちなみに今日だけはこうして呼ばないといけならしい・・・

「・・・まあ今日は一緒にいるのはこのくらいでいいわ・・・。
あなたは一旦自分のクラスに戻ってもいいわよ」

「・・・？・・・はあ・・・」

「じゃあ、また」

と、楯無さんはウインクして、立ち去った・・・

「・・・とりあえず・・・戻るか・・・」

レイはゆつくりと歩いて、一組に戻っていった・・・

そして、一組の隣のクラスの二組の前に来ると・・・

「あら・・・。レイさん」

と、神夜の呼ぶ声がして、レイは一旦立ち止まる。

レイは声がしたほうを向くと、そこには和服姿の神夜の姿があった。

「神夜か……。やっぱり和服が一番似合っているな」

「そうですか？」

と、神夜は言うが、本当に似合っている。

「どうしたの、神夜……？」

と、二組からチャイナドレス姿の鈴が出てきた。

「って……。レイ……？」

鈴はレイの姿を見ると、なぜか顔が赤くなった。

「おっ……。鈴か」

「あ、う、うん」

「そういえば、二組は中華喫茶をやっているんだったな」

「そりゃ、私の格好を見れば分かるでしょう」

と、鈴は胸を張る。……。張る胸はないけど……

「いや、神夜の格好を見たらそうと思わんだろ」

まあ中華喫茶で和服だと、ミスマッチな気がする……

「仕方がないでしょ……。だって神夜に合うチャイナドレスのサイズがなかったんだから……」

「・・・ふーん」

と、レイはある程度理由は分かった様子……。いや、誰でもわかるだろうな・・・

「で、あんたは今一組に戻ろうとしているの？」

「ああ。楯無さんから戻っていいって言われたからな」

「ふーん……。じゃあ後でここに来るの」

「・・・まあ、時間があればな」

と言って、レイは一組に向かい、教室に入る。

「あつ、ラングレン君だ！」

と、入った瞬間に注目を浴びる。

（・・・まあ大体予想はできたけど・・・）

レイは考えながら、おなじみのメンバーの元に向かう。

「あつ、レイ・・・」

「もう生徒会長から離れたのですか？」

と、シャルとセシリアはレイに声をかける。

「ああ。何か用事が出たみたいだ……。それで一旦一組に戻ったんだ」

「へえ……。でもよかった・・・」

と、シャルは安堵の息を漏らす。

「なにが？」

「一夏が中学の頃の友達を迎えに行ったの……。だからお客さんから一夏がいないことのクレームが出始めたの」

「で、俺が代わりに接客をするのか？」

「うーん……。そうなるね」

「・・・なるほど」

と、レイは本当かどうかは分からないが納得した・・・。

（・・・レイさんの執事服姿……。中々似合っていますわね……。こんな執事がいたら不自由がないですわね……。）

（・・・うーん……。以外に執事服が似合っている……。・・・しかし、一夏のほうが似合っているぞ……。）

（・・・やっぱりレイの執事服姿って……。似合っているなあ……。ぼ、僕は変じゃないよね……。？）

（・・・隊長の執事服姿・・・。さすが隊長・・・何を着ても似合っている・・・）

（ふーん・・・。レイって執事服がよく似合っているんだね・・・）

と、セシリア、箒、シャル、ラウラ、フィオナはレイの執事服姿を見て色々と考えていた。

その他の女子も同様に考えているのだろう・・・

それでもって、お客のクレームは耐えないので、一夏を呼び戻した。

そしてしばらくして・・・

「休憩していいんですか？」

「ええ。どうせ店を立て直すのに時間が掛かるだろうし、一時間弱ならいいよ」

「そうですか・・・」

「どうせなら、この際に部活動でも見ていけば？」

「・・・悪くないな」

「そうだなあ・・・」

すると、一夏の腕を誰かが引っ張る。

「では、一夏さん。わたくしと参りましょうか」

どうやらセシリアのようだ。

「一夏！私と行くぞ」

と、箒はその反対側の腕を引っ張る。

「行くぞ、一夏」

と、ラウラが目の前に来る。

「・・・俺は——」

「僕と一緒に行こうよ。レイ」

と、レイの隣にシャルが立った。

「・・・そうだな・・・じゃあ一夏。先に行っているぞ」

と、レイとシャルは先に教室を出た・・・

その頃・・・

「・・・ふう・・・」

と、男性はコーヒーを一口のみ、一息つく。

あんまり人気が少ないところにいた。

そんなときに・・・

「・・・それにしても、博士がここに来られるのは珍しいですね」

と、楯無さんが建物の角から出てきた。

「・・・更識か・・・。久しぶりだな」

「普通に名前で呼んでもいいと前に言ったはずですがね・・・」

「・・・そうだったな・・・。楯無」

「ええ。そうです」

「・・・しかし、よく俺がここに来たことが分かったな・・・」

「あなたいつかここに来ることは大体予想はできました・・・。あ
る者を確認するために・・・」

「・・・お前は昔から勘が鋭いな・・・」

「ええ・・・。でなければ最強の称号『生徒会長』に相応しくありま
せんから」

「そうか……。最強の称号ねえ。」

「あなたもそうでしょう？……かつて存在したはずだった事件……『黒騎士事件』……その事件の名前の由来となったIS……『黒騎士』の操縦者にして、ISを始めて動かした男性……。そして篠ノ之博士を越える技術者……。『ロイ・ラングレン』……。博士」

と、楯無さんはことの真相を話した……。

「……。ふっ……。それは昔の話さ……」

「そうでしょうか……」

「……」

「……。レイ君は……見ましたか？」

「……。いや……。まだだ……」

「……。せっかく息子を見に来られたと言うのに……。見らずに帰るのですか？」

「……。そんな権利があるのかねえ……。俺に……」

「……。あると思いますわよ……？」

「……。そうかねえ……」

と、男性……。ロイはコーヒーのカップをゴミ箱に捨てて、歩

いていく。

「・・・こんなことを言うのもなんだけど・・・レイを見てやってくれないか・・・」

「・・・ええ。・・・少し前から見ていますよ・・・。訓練も兼ねて・・・」

「・・・そうか・・・」

そして、しばらく立ち止まって、それからどこかへ行った・・・

「・・・本当に・・・親子って似るものね・・・」

楯無さんはそうして学園祭に戻っていった・・・

その頃・・・レイとシャルは部活動を見学するために学園内を回っていた。・・・注目を浴びながら・・・

「でも、レイって本当に何でもできるよね・・・」

と、シャルは言うが、さっき三つほど部活動体験をやっていた。

一つ目は卓球部で、レイは卓球は得意なスポーツらしく、卓球部部长と対戦して圧勝をした。って、得意ってレベルじゃないな・・・それ・・・

ちなみに、臨海学校で泊まった旅館にも温泉卓球があり、そこでレイは織斑先生と勝負をして、激戦を繰り広げ、フルセット満点で一発勝負まで来たが、球が最後の最後で割れてしまったので、引き分けとなった・・・らしい。

二つ目は料理部で、多少興味がわいたのか、シャルは部活に入る候補に入れたらしい。

三つ目はクレ－射撃部で、レイはそこで相当な実力を発揮した。十発中すべて、ど真ん中を撃ち抜き、普通に大会で優勝できるほどあるらしい・・・。

（・・・そりゃあ・・・あんなに射撃の腕がよかったらあのくらい造作もないよね・・・）

シャルはレイの射撃の腕を知っているので、大体予想はついていた。

「・・・でもなあ・・・俺は部活動に入れないからな・・・いくつか興味はあったんだけど・・・」

レイは生徒会長の助手・・・つまり生徒会に入っているも同然なので、部活動には入れないのだ・・・

「・・・なんだか・・・惜しいって感じがするよね・・・それ」

「ああ・・・」

レイはどちらかと言うと運動系で、なんとなくじつとして入られないタイプ・・・らしい。

「・・・しかし、早めに戻るとするか・・・」

「・・・そうだね・・・」

と、二人は歩くスピードを上げる。

なぜならさっきから視線が気になるのだった・・・。

そして、二人が教室に戻ると、楯無さんがいた。

「あら？少し早かったわね」

「楯無さん・・・」

「今日はお嬢様って呼ぶの」

「うう・・・お嬢様」

・
どうもレイの数少ない苦手な人物なんだろうな・・・楯無さんって・・・

「そ、それより・・・用事は済んだのですか」

「ええ・・・」

「・・・それで、なぜここに・・・」

「あら？レイ君って知っていてわざわざ聞くんだねえ・・・」

「・・・・・・・・・・」

「まあ一応言うけど・・・生徒会の出し物・・・『演劇』を手伝って欲しいの」

「演劇？」

一夏は楯無さんに聞く。

「そうよ・・・でもって、あなた達二人はその重要な役割をやってほしいの」

「ええ・・・。それはちょーーーーー」

「答えは聞いてない」

「ええ」と心の中で突っ込む二人・・・

S t o r y 3 1 学園祭開催（後書き）

また最近感想が少ない・・・

Story 32 硝子女子の透色和音

そして、レイと一夏は楯無さんにつれられて、第四アリーナの更衣室にいた。

普通ならISスーツに着替える場所なんだが・・・

「・・・・・・はぁ・・・・・・何でこんなことに・・・・・・」

と、レイは衣装に着替え終わって出てくると、その衣装と言うのが・・・・・・いわゆる『王子様』だ。

隣では着替え終わった一夏がおり、少しデザインは異なるが、王子様の衣装を着ていた。

「中々似合っているわよ・・・・二人とも・・・・。はい、王冠」

と、楯無さんは二人の頭にシンプルな王冠を被せた。

第四アリーナはアリーナいっばいに凝ったセットが作られ、かなりリアルで豪勢だった。

「・・・・しかし、脚本とか台本は一度も見えていないんですけど・・・

」

「大丈夫。こっちでアナウンスするから、二人はそれに合わせて動けばいいよ。あ、台詞はアドリブでね」

「・・・分かりました」

「・・・了解・・・」

と、物凄く乗り気じゃない二人は、幕を潜って、ステージに出た。セットからして、よくある城下の町並みって感じだ。若干迷路のようになってる。

（・・・劇の内容は『シンデレラ』らしいが・・・あの人のことだ・・・何かありそう・・・）

と、レイは相変わらず勘の鋭いことで・・・。本当に後にそうなった・・・

「むかし、むかし、あるところに、シンデレラと言う少女がいました」

（・・・内容は普通・・・）

「否、それはもはや名前ではない。幾多の舞踏会を抜け、群がる敵兵をなぎ倒し、灰燼を纏うことさえいとわぬ地上最強の兵士たち。彼女らと呼ぶに相応しい称号・・・それが『灰被り姫』！」

はい・・・？

「今宵もまた、血に飢えたシンデレラの夜が始まる。双子の兄弟の

王子様の王冠に隠された軍事機密を狙い、舞踏会という名の死地に少女たちが舞い踊る！」

（俺たち双子の設定かよ！）

と、心の中で同じ突っ込みをする……。って、双子の設定はさすがに無理がありすぎだ・・・

「でりゃああ！！」

しかし、そんなことはお構いなしに、誰かがこっちに飛んできた。

それは、シンデレラのドレスを身に纏った鈴だ。

「おわっ!？」

一夏はとっさに鈴が投げ飛ばした中国の手裏剣『飛刀』をかわし、レイは右側に跳ぶ。

「こ、殺す気かよ!？」

「殺さない程度に殺すわよ!」

わけが分からん！

そして、鈴は両手に飛刀を持つと、次にレイに向かっていく。

「くっ!」

レイはとっさに横に跳ぶと、落ちてあった鉄パイプを拾い上げ、鈴

の攻撃を防ぐ。

「あ、あつぶねえな！」

「うるさい！さつさとよこしなさいよ！」

「な、なにを！？」

と、鈴は次々と攻撃を加え、レイは鉄パイプで防いで行った。

「・・・？」

すると、何かが遠くから伸びてくるのが見えた・・・。

「・・・！まずい！」

そして、レイは鈴を弾き飛ばすと、とっさに身をかがめた。

すると、その上を弾丸が通り過ぎていった。

「スナイパーライフル！？・・・ってことはセシリアか！」

どうもスナイパーライフルにサイレンサーをつけているようで。発砲とマズルフラッシュが見えない。

そして、レイはひとまずここから逃げることを優先にし、一夏も同じくそこから逃げる。

（外してしまいましたわ……。さすがレイさん……）

と、撃鉄を引き、空薬莖を排出し、次の狙撃ポイントに向かう。

（何が何でも……。今回は勝たせてもらいますわ！）

と、なぜ女子一同がこんなにあの二人を追うかというと……。一夏とレイが被っている王冠を取った暁には『その王冠の持ち主の男子の部屋に泊まれる』というものらしい。

普通ならこういうのはいけないのだが……。楯無さん曰く『生徒会長権限』で成り立ったらしい。

（そう！勝つべきときに勝つものこそが真の勝者なのですわ！）

そして、次の狙撃ポイントに着き、ライフルを構える。

「く、くそっ！セシリアのやつめ！」

と、レイはセシリアの狙撃を回避しながら無茶苦茶広いセットの中を逃げていた。

そして、壁のセットの影に入り込んだ。

「ふう……。助かつ——」

と、言い終える瞬間、レイの隣でセットがダァンツ、と音を立てて一刀両断された。

「はいっ!？」

レイは驚いてそこを見ると、ドレスを身に纏い、レイに向かっていく神夜がいた。

「なあっ!?! 神夜!？」

レイはとっさに後ろに跳ぶ。

「レイさん! その王冠は貰います!」

と、自身の丈以上の長さを持つ日本刀をレイに振るう。

「おわっ!・・・あ、あぶなっ!」

レイは神夜の正確な斬撃を避けながら後ろに下がっていき、かわしきれないものは鉄パイプで防いだ。

しかし、その日本刀がかなり重いのか、もしくは神夜のバカ力なのかはこの際どうでもいいが、刀身が地面に叩きつけられるたびに地面が盛り上がる。

「くそっ!」

レイは鉄パイプを巧みに使って、神夜を弾き飛ばして、身軽な動きで建物のセットの上に上がっていく。

「ふう・・・ここなら——」

「・・・安心はできないよ？」

「なっ!？」

と、レイはとっさに横を向くと、その向かいの建物のセットの上にはドレス姿のフィオナの姿があった。

「その王冠・・・いただく！」

そして、両手に持つサブマシンガンでレイに攻撃を掛ける。

「おわっ!・・・あ、あぶっ！」

レイは必死に攻撃を避けていき、建物の右側に下りる。

「はああああ！」

と、一難去ってまた一難・・・今度は両手にタクティカル・ナイフを持ったドレス姿のラウラが向かってきた。

「ら、ラウラ!？」

レイは着地の衝撃で動きが鈍り、膝をついた状態で鉄パイプを上により、ラウラの攻撃を防ぐ。

「隊長の王冠・・・私がいただきます！」

そして、ラウラはそのままレイを押していく。

同時にナイフが鉄パイプに食い込んでいく。

(まずい……。さすがにこれ以上は……。持たない……。！)

と、レイは危機感を感じて、そのまま強引にラウラを押し返す。

「くっ！」

すると、ラウラは左手のナイフを捨てると、ドレスをひるがえして、太ももにつけていたホルスターからハンドガンを取り出して、レイに向ける。

「だぁあっ！銃はだめだろが！」

と、レイはとっさに足を上げ、ハンドガンを蹴り上げた。

「くっ！さすがです……。しかし！」

ラウラはそのままナイフを突き立てるが、レイはそこから前に飛び込み、ラウラが捨てたナイフを拾い、そこから振り返りながらラウラの攻撃を防ぐ。

「やるな……。だが……。！」

レイはそのまま強引にラウラを押し返し、蹴り上げて落ちてくるハンドガンをキャッチすると、ベルトにねじ込み、そのまま走って逃げる。

「逃がさない！」

と、ラウラはそのままレイを追いかける。

「く、くそっ・・・！」

レイはセットを利用しながらラウラから逃げようとするが、さすがに昔同じところにいたもの同士、セットの壁をけりながら前に進んでいくのもお手の物のようだ。

しかも建物のセットの上が上がって飛び移っていつでもラウラはしつこく追いかける。

「ラウラだけなんでこんなにしつこいんだ!？」

と、レイは建物のセットの上を次々と飛び移り、ぐるぐると回っていると・・・

「・・・そのままでもいいのかな・・・？」

「・・・!？」

と、レイはとっさに声がしたほうを向くと、そこには再びフィオナの姿があった。

しかもさっきと違い、今度はロケットランチャーを手に使っていた。

(威力が小さいやつ)

「な、何してんだお前！」

「こういうことよ!」

と、フィオナはランチャーを構えると、そのまま発射した。

「うわっ！」

レイはそこからジャンプして回避したが、着弾した弾が爆発し、その爆風でレイは少し飛ばされる。

「のわぁあっ！」

バランスを崩して落ちていつていると、セシリアのスナイパーライフルのレーザーサイトが見えた。

「くっ！」

レイはとっさにラウラから奪ったハンドガンを抜き取ると、そのままセシリアに向けて発砲し、弾丸が一直線に向かっていく。

（もらいましたわ！）

と、セシリアは勝利を確信した。

あの状態ではレイでもさすがに回避は出来ない……。確実に王冠を取れる。

そしてライフルのトリガーを引く。

だがその瞬間、ライフルに振動が走る。

「!?!」

セシリアは一瞬驚き、その直後にライフルの銃身が大きな音と共に破裂した。

「きゃあぁっ!？」

その衝撃でセシリアはしりもちをつく。

「な、なにが・・・」

セシリアは何が起きたのか理解できなかった。

さっきレイがハンドガンで狙ったのは、セシリアのスナイパーライフルの銃口で、1mmのずれもなく、銃口に直撃し、そのときにセシリアはライフルのトリガーを引いたので、弾が発射され、銃身内で詰まったハンドガンの弾丸と当たり、そのまま爆発して銃身が破裂したのだ。

「・・・ま、まさか・・・」

セシリアはすぐに事態を理解して、驚く。

「・・・あ、あんなに離れているのに・・・しかもハンドガンであんなに小さい標的に当てるなんて・・・」

ありえない・・・。セシリアに頭にはその言葉しか浮かばなかった。

レイとセシリアの距離はかなり離れていた・・・。そこからレイはハンドガンでライフルの銃口にむけ発砲したが、明らかにハンドガンの有効射程距離を大きく離れていた。しかもレイは落ちながら言うバランスが悪い体勢で、しかも狙いを付けずして、ライフルの銃

口に直撃させた……。これが偶然でなければ、あまりにも人間離れした技だ……。

「……さ、さすがですわね……」

と、セシリアはこんなこともあるのかと用意した予備のスナイパーライフルの組み上げに入った。

「ふげっ!？」

そんなもって、レイはそのまま落ちていって、背中から地面に叩きつけられる。

「い、いてて……。フィオナのやつめ……。加減の言葉すら知らないのか……?」

と、愚痴って、背中を押さえながら立ち上がる。

「……まあでも、ラウラから逃げれたけど……」

レイはハンドガンを捨てて、辺りを見回すと……

「のわあああ!!」

と、向こうから一夏が走ってきた。

「はぁ……。何でこっちに來たんだよ……!」

その後ろには日本刀を持ってドレス姿の箒が追ってきており、レイはそこから再び走り出す。

「逃がしませんよ！隊長！」

と、レイの前のセットからラウラが飛び出てきた。

「のわっ！？・・・お前いつの間に・・・！」

よく見ると、ラウラのドレスが若干こげているように見えた・・・。

「はあああ！！！」

そして、ラウラは予備のナイフを持っていたのか、また両手にナイフを持ってレイに向かう。

「くっ！」

レイはとっさにしゃがむと、同時に一夏が前に豪快にこけて、ラウラのナイフと箒の日本刀が交じり合う。

「邪魔をするな！」

「お前こそ・・・。ちょうどいい、ここで排除してやる！」

「望むところだ！」

と、箒とラウラは勝手に勝負を始めた。

「ええいくそっ！寝ている暇はないぞ！」

と、レイは一夏の首根っこを掴んで、そこから逃げ出す。

「わ、わりい・・・」

一夏は立ち上がると、レイと一緒に逃げる。

しかし・・・

「まてええっ！！」

と、今度は鈴が追ってきた。

「かああっ！しつこいな！」

と、レイと一夏は脱兎の如く逃げ去るが・・・

「はああああっ！！」

と、神夜が日本刀で岩のセットを一刀両断にして向かってきた。

「なんでこうまで来るんだよ、まったく！」

レイは建物のセットに置かれてあった合金製のシールドを持つと、神夜の攻撃を防ぐ。

「一夏！鈴のやつを引き付けろ！」

「お、おう！」

と、一夏はそこから別方向に走り出し、鈴はその後を追う。

だが・・・

「前はそうでも、後ろは無防備ね・・・」

と、上からフィオナが下りてきて、手にはアサルトライフルがあった。

「な、なにいつ!?!」

さすがにレイもこの状態では危機感を感じる。

神夜の攻撃を防ぐのにやっとな状態だ。後ろは丸裸だ。

「もらった!」

そして、アサルトライフルの銃口から火が噴く。

「くっ!」

すると、レイの後ろに誰かが割り込み、弾丸を防いだ。

「レイ!」

それは、対弾シールドを持ったシャルロットだ。他のメンバーと同じドレスを着ているが、どうも金髪の女子はドレスが似合うなあ・・・どうしてだろ・・・

「シャルか！・・・助かった・・・！」

レイはそのまま神夜を強引に押し返す。

「しかし、結構遅れての登場だな」

「まあね・・・。ちょっと広いもんだから迷ってた」

「・・・そうか・・・。だが、きてくれると信じていたぜ」

「そ、そうなの・・・！？」

と、シャルは頬を赤らめる。

「・・・いい雰囲気のところ悪いけど・・・」

と、いつの間にか移動したフィオナはまたロケットランチャーを構える。

「邪魔させてもらおうよ」

そして、ランチャーを放った。

「くっ！」

「うわっ！」

レイとシャルはとっさに横に跳び、回避した。

直後弾はセットに当たり、爆発を起こす。

「・・・本当にあいつは手加減がないなっ！」

と、レイはとっさに起き上がると、反対側に跳んだシャルの元に行く。

「大丈夫か！」

「う、うん・・・。大丈夫・・・」

「そうか・・・。・・・シャル・・・後でまた会おう」

と、レイはその場から一気に走り去った。

「・・・は、速い・・・」

シャルはその速さに呆然とした・・・。

「よう一夏！」

「レイか！」

レイは逃げていると、別方向に逃げていた一夏と合流して、一緒に逃げる。

今のところ追っ手はないが、どの道すぐに見つかるだろうな・・・

「・・・しかし・・・。なんで俺たちを追うんだよ・・・」

「・・・さあな・・・」

実は、この二人には王冠の秘密を知らされていない。

「・・・と、とりあえず・・・休憩しようぜ」

「・・・ああ」

と、セットの陰に背中を預ける。

「・・・しかし、どうするんだ？」

「・・・さあな・・・。このまま追われるのも疲れるだけ出しな・・・」

「そうだな・・・。・・・うわっ・・・」

「・・・？一夏・・・？」

と、レイが隣を見ると、いつの間にか一夏の姿がなかった。

「なっ！？あいつどこにいった・・・！？」

しかし、驚くレイだが、すぐに追っ手が来たことを感じて、とりあえず逃げることにした。

そして、なにやら地響きが聞こえてきた。

「なんだ・・・？」

「さあ！今からフリーエントリー組みも参加です！皆さん王子様の王冠を目指して頑張って下さい！」

「な、なんですとっ!？」

レイは驚いて表に出ると、前には数十人のドレス姿の女子が迫ってきており、それからどんどん増えていく。

「・・・おいおい・・・。冗談きついで・・・。」

レイはそのまま脱兎の如く逃げる。

（・・・しかし・・・一夏のやつどこにいったんだ・・・？）

レイは一夏が突然いなくなったことに疑問を持つ・・・

Story33 亡国機業

そして、一夏は誰かに手をつかまれて、セツトの下を通過して、更衣室に入った。

「着きましたよ」

と、そこには見知らぬ女性だった。

黒い髪は背中まで伸ばしており、二十代後半・・・っぽい？

「はぁ・・・はぁ・・・。し、しかし・・・なんで巻紙さんが・・・？」

と、一夏は女性の名前を知っているかと言うと、レイが教室に来る前に、この女性が現れて、ISの装備の商談を持ち込まれていたのだ。

しかし、白式は相変わらず他の装備は完全拒否・・・ってわけなので、一度は断ったのだったが・・・」

「ええ・・・。白式を貰いにきたのです」

「・・・え？」

一夏は一瞬わけが分からなかった。

「さっさとよこせていってんだよ、ガキが」

と、さっきまでの口調とは程遠いぐらいに口調が荒れているが、顔はまだニコニコしていた。

「ええ・・・と・・・冗談で言っただけですか？」

「冗談でガキと話していると思っているのか！」

と、巻紙さんは一夏の腹に蹴りを入れ、一夏は後ろのロッカーに叩きつけられる。

「ぐっ・・・！？」

背中から伝わる衝撃で一瞬息が詰まる。

「あーあ・・・。顔が元に戻らなくなったじゃねえか・・・」

すると、巻紙さんの顔は悪役の雰囲気のような笑みを浮かべていた。

「あ、あなたは・・・何者ですか・・・」

「私か？企業の人間に変装した悪役の美女だよ！」

と、再び蹴りを入れるのを見て、一夏はとっさに避ける。

そして、目の前の人は敵だということを身体が感じた。

「くっ！・・・白式！」

一夏はとっさに白式を呼び出し、緊急にISスーツも呼び出す。

服は量子変換されて保管され、後に再構築するようになっていたが、この際にエネルギーを大きく消耗するが、この非常時に四の五の言っではいけない。

「待っていたぜ……。それを使うのをなあ！」

すると、目の前の女性のスーツが裂けて、背中から蜘蛛の足のような足が出てきた。

「なっ!？」

「くらえっ！」

そして、蜘蛛の足の先端が開いて、そこから銃口が現れ、攻撃を行ってきた。

「くっ！」

一夏は脚部スラスターを最大噴射して、天井付近まで上昇して攻撃を避ける。

「ほう……。やるじゃねえか！」

と、女性は完全にISを展開状態にして、一夏に迫る。

「な、何なんだよ……。あんたは！」

「ああん？ しらねえのか？……。悪の組織の一人だっつうの！」

「ふざけん——」

「ふざけてねえよガキが！秘密結社『亡国機業』ぼうこくきぎようが一人、オータムさまっていえばわかるかつ！」

と、その女性・・・オータムは蜘蛛の足から一夏に向け実弾射撃を行ってくる。

「くらえっ！」

そして、8門の集中攻撃を行うが、一夏はスラスターを巧みに使い、狭い更衣室内を縦横無尽に動き回って回避し、そのままオータムに突っ込んでいくと同時に右手に『雪片式型』を展開して、オータムに切りかかる。

（もらった！）

「甘えっ！」

と、オータムは蜘蛛の足で雪片を挟み込んで防ぐ。

「くそっ！」

一夏は何とかしようともがくが、雪片はがっちり挟み込まれ、どうにもならなかった。

そうしている内に、オータムは手にマシンガンを展開し、一夏に向けて放つ。

シールドバリアを貫通したいくつかの弾が一夏の身体に襲う。

絶対防御があっても、痛みまでは消せない。

(こ、これ以上はまずい・・・)

と、一夏はいったん武器を手放し、そこからウイング・スラスターを噴射し、後ろに宙返りをして攻撃を回避し、それから武器を蹴り上げると、雪片を手にとって取り返す。

「ハハハ！やるじゃねえか！この『アラクネ』を相手にしてちょこまかと！」

「うるせえ！」

そして、一夏は雪羅をクロウモードにしてオータムに攻撃を掛けるが、オータムは複雑な動きで避けていく。

(くそっ！・・・このままじゃラチがあかない・・・。だったら・・・)

「そうそう・・・。一つだけ言っておくよ！第二回モンド・クロッソでお前を拉致したのはうちの組織だ！感動のご対面だな！」

「なにっ!？」

そして、一夏の沸点は一瞬にして頂点を越えた・・・

だったら・・・

「だったら・・・。ここで借りを返してやらああっ!!！」

「はっ！ やっぱりがキだな！ こんな真正面に突っ込んでくるとはな・
・・よおっ！」

と、指先でやり取りしていた糸を一夏に投げると、それは一夏の前で弾け、網のようにして一夏を白式諸共包み込む。

「くっ！ ・ ・ ・ この ・ ・ ・ ！」

一夏はもがくが、糸はもがく度に白式に絡みつく。

「ハハハ！ 蜘蛛の糸を甘く見るからそうなるんだよ！」

と、オータムは四足を持つ謎の装置を身動きが取れない一夏に取り付ける。

「さてと、お別れは済んだか」

「なんのだよ ・ ・ ・ ？」

「決まっているだろ ・ ・ ・ お前のISとなあ！」

「なにっ！？」

すると、一夏の身体に電流に似たエネルギーが走る。

「ぐあああああ！ ！」

一夏の身体に激痛が走る。

「・・・さてと・・・これで終わりだな」

と、オータムは装置を一夏から外すと、蜘蛛の糸が取れる。

(今だ・・・！)

と、一夏はオータムに殴りかかろうとする・・・だが・・・」

「はっ！ISの装備がないお前になにができるっていうんだよ！」

と、オータムは一夏に回し蹴りを加える。

そして、一夏はその痛みではっと気付く。

「・・・！？白式がない！？」

一夏は自分の身体を見ると、白式のアーマーはなく、残されたのは量子変換されたISスーツだけだった。

「お前の探し物はここにあるぜ！」

「なに！？」

一夏はとっさにオータムの手を見ると、そこにはひし形をした白式のコアがあった。

第二形態になったので、輝きが増したそれはオータムの手の中にあった。

「今のはな『^{リムーバー}剥離剤』っていうんだよ。ISを強制解除できる秘密兵器だぜ？生きているうちに見れてよかったな！」

と、オータムは一夏に二度続けて一夏にけりを入れる。

一夏はダメージでふらふらになるが、それでもオータムを睨むが、その顔をオータムは踏みしめる。

「かえ・・・せ・・・」

「ああ？聞こえないな」

「返せ・・・てめえ、ふざけんなあ！」

と、一夏は足を払いのけて、オータムに向かっていくが・・・

「はっ！遅いつてんだよ！」

と、オータムは一夏の横腹にけりを入れる。

「ぐはっ！」

一夏は壁に背中から叩きつけられ、息が詰まる。

「く、くそ・・・」

「この際だ・・・。お前をついでに殺してやる！」

と、蜘蛛の足の銃口を一夏に向ける。

だが、その瞬間に更衣室のドアが吹き飛ぶ。

「な、なんだあっ！」

とオータムはとっさに振り向き、ドアのほうを向く。

しかし、そこは砂煙のようなものが舞い上がり、何も見えなかった。

だが、誰かが歩いて近付いてくる・・・。

そして、その砂煙の中から光が出てきた。

「な、・・・この光は・・・」

「・・・俺の仲間には手は出させない・・・！」

そして、グランプラズマカッターを抜き放ち、刀身を展開すると同時に砂煙を払う。

「な、なにっ!？」

「れ・・・レイ・・・」

そこには、ファントムを身に纏うレイの姿があった。

「・・・馬鹿な・・・『黒き亡霊』だと・・・!？」

オータムは初めて驚きの表情を見せる。

「・・・・・・」

しかし、すぐにそれは悪の笑みに変わる。

「ふ、ふふふ・・・はっはっは！こんなところで黒き亡霊と出会うとはなあ！ちようどいい！お前も手土産にしてやらあっ！」

と、蜘蛛の足から実弾射撃を行う。

レイはすぐにグランプラズマカッターを前に出すと、そのまま手首を回転させて、弾丸を弾き飛ばす。

「おらおら！」

と、オータムはそこから飛び出し、複数の蜘蛛の足でファントムに攻撃を掛けてきた。

「くっ！」

レイはとっさにもう片方のグランプラズマカッターを抜き放ち、二刀流でオータムの攻撃を受け流す。

そして隙あらば、レイはオータムの腹にけりを入れる。

「くっ！このガキがあっ！」

オータムは八つの蜘蛛の足を一齐に突き出すが、ファントムはグランプラズマカッターで受け流して、ギリギリのタイミングで避けると、そのままオータムを蹴り上げる。

「ぐっ！」

そして、レイはグランプラズマカッターを振るうと、アラクネの蜘蛛の足一本の一部を切り落とす。

「ちっ！かわしたか・・・」

レイはそこから背部スラスターを噴射して、オータムと距離を置く。

「くっ・・・。やるじゃねえか・・・。さすがは『あの人』が作ったISだぜ」

「・・・なんだと・・・？」

「ああ？しらねえのか？そいつを使っておいて何もしらねえとはな。これは傑作だ！」

と、オータムは笑い出す。

「何がおかしい・・・」

「そいつはなあ！かつて天才技術者だった『あの人』が『例の物』のデータを使って作り上げた最初のISなんだよ！」

「・・・『例の物』・・・だと？」

「ああ！とんでもない代物から作り出されたんだよ・・・。だから亡国機業もその技術を欲してんだよ！」

と、オータムは蜘蛛の足から実弾射撃を行い、ファントムに向かっていく。

「ちっ！」

レイはグランプラズマカッターを回転させ、弾丸を弾いていく。

「はっ！遅せんだよっ！」

と、オータムは蜘蛛の足でファントムを突き、その衝撃で後ろに飛ばされ、床に倒れる。

「ぐっ！」

「もらったあっ！」

そして、オータムは手にしていた剥離剤をファントムの胴体にくつつける。

「・・・レイ・・・！気をつけろ！・・・それは・・・！」

「もう遅い！」

そして、オータムは剥離剤を起動させる。

「ぐう・・・！ぐあああああ！！！」

レイの身体に電流に似たエネルギーが流れ、レイは激痛に襲われる。

「はっはっは！・・・これで黒き亡霊も・・・」

「-----」

と、ファントムのバイザーが発光すると、胴体のハッチを開き、ニ
ュートロンプラスターを発射した。

「な、なにっ!？」

それによって剥離剤は破壊され、エネルギー弾はそのままオータム
を襲った。

「ぐっ・・・な、なぜだ・・・!? 剥離剤は確かに効いたはず・・・」

その間にも、ファントムは立ち上がる。

「ぐう・・・。やってくれるな・・・」

レイは激痛に耐えながら、グランプラズマカッターを構えなおす。

「・・・ま、まさか・・・こいつには剥離剤が効かないのか!？」

剥離剤は一度使用したISには耐性が付くので、二度目はない・・・。
しかし、ファントムには確かに効果が現れたが、効いていない・・・。

「どうやら失敗のようだな・・・。ならばっ!」

と、レイは飛び出して、オータムにグランプラズマカッターを振り
上げる。

「っ!？」

すると、ファントムはグランプラズマカッターを振り上げたまま、
オータムを通り過ぎて、そのまま床に倒れる。

「ぐっ……。く……。う……。こんな時に……」

レイに右目から激痛が襲い掛かっていた。

「……はっ！　どうやら剥離剤の効果は聞いていないってわけじゃないなあ！」

と、オータムはファントムを蹴り上げる。

「ぐっ！」

そして、ファントムは壁に叩きつけられると、オータムはファントムの肩を掴んで正面に向かせると、そのまま殴りかかる。

「おらおら！　どうした！　さっきの威勢はどこにいったんだあっ！」

そして、蜘蛛の足も使い、ファントムをメッタメッタに殴りつける。

「……………」

そして、ファントムの腕がぐったりと垂れ下がる。

「……ようやく気を失ったか……。なら……」

と、オータムは右手にブレードを展開した。

「機体だけ残して……。逝っちまいなっ！」

と、ブレードをファントムの胸部に突こうとした。

「――――」

すると、ファントムのバイザーが発光し、ブレードを手で掴んで防いだ。

「なにっ!？」

オータムが驚いている間にも、ファントムはブレードをへし折ると、そのままオータムを蹴り上げる。

「くっ!」

オータムは実弾射撃を行うが、ファントムはグランプラズマカッターで防ぎながら突き進み、アラクネの蜘蛛の足を二本切断する。

「・・・このガキがあっ!」

すかさずオータムは蜘蛛の足で攻撃を掛けるが、ファントムは足を上げてその軌道をずらすと、直後にグランプラズマカッターでその蜘蛛の足を切断する。

「こ、こいつっ!・・・さっきまでと動きが違う!？」

オータムはその動きに違和感を覚える。

ファントムの動きはさっきまでと違う……。まるで別人だ・・・

「――――」

そして、ファントムは狭い空間にも関わらず『瞬間加速』を掛け、オータムに急接近するとアラクネの残りの蜘蛛の足を一瞬のうちに全て切り落とす。

「ば、ばかなあっ!？」

「————」

そして、ファントムはそのままオータムを蹴り、そのまま壁に押さえつけると、オータムの右手に持つ白式のコアを掴み、そのまま振り向くと一夏に投げ渡す。

「あっ!」

一夏はダメージから回復し、とっさに立ち上がると、白式のコアをキャッチする。

「……来い!白式!」

そして、一夏は白式を呼び、アーマーを纏うと同時に雪片を展開して、オータムに向かっていく。

「く、くそっ!」

オータムは何とか動こうとするがファントムはすかさずオータムの頭を掴み、一夏に向け投げる。

「零落白夜……フルパワーで発動!」

そして、一夏は零落白夜を発動させて雪片を展開して、オータムに

切りかかる。

「くっ！」

オータムは何とか避けようとするが、ファントムから放たれたグラ
ンスラッシュリッパーによって動きを阻止されて、そのまま白式の
一撃を受ける。

「ぐはっ!？」

白式渾身の一撃でオータムはそのまま後ろに勢いよく飛ばされ、壁
に強く叩きつけられた。

そしてそのまま倒れると、壁はめり込んで、穴が開き向こう側が隙
間から見える。

「————」

すると、ファントムはオータムにゆっくりと近づくと、アラクネの
左肩を掴み、押さえ込む。

「くっ……。ここまでか……」

そして、オータムはISを解除した。

「————」

すると、ファントムはとっさにそこから飛び出し、一夏の前に行き、
両腕をクロスさせて防御体勢に入る。

その後、ISが大爆発した。

「うわぁ！」

一夏はその爆風で吹き飛ばされる。

「――・・・」

そして、ファントムのバイザーの光が消え、ファントムはそのままのめりに倒れる。

「う・・・くう・・・」

一夏は頭を押さえながら、半身を起こす。

ISのシールドバリアと絶対防御があったので、さほど痛みは感じないが、衝撃はあった。

「・・・そうだ・・・。レイ！」

一夏はとっさにファントムの元に向かう。

「・・・・・・」

しかし、レイから返事はない・・・

「おいっ！しっかりしろよ！」

と、一夏はファントムを揺さぶる。

「・・・大丈夫よ」

「・・・?」

一夏はとっさに入り口のほうを向くと、楯無さんが立っていた。

「楯無さん」

「レイ君はただ気を失っているだけだから・・・。それより・・・」

と、楯無さんは辺りを見回す。

「あの女性は逃げたようね・・・」

「・・・あの自爆の時に逃げたのか・・・」

「そのようなね・・・」

「・・・しかし・・・この有様は少しひどいかな」

と、楯無さんは滅茶苦茶になった更衣室を見てそう言う。

「・・・す、すみません・・・」

「いいのよ・・・。これでチャラにするから」

と、楯無さんの手には、一夏が被っていた王冠があった。

「え・・・?それで・・・?」

「そう。これを獲得したものは、その王冠の持ち主と同室に居られるっていうおまけ付」

「はあっ!?!?・・・じゃあ女子たちが俺たちを追いかけていたのはそれで!?!?」

「ええそうよ。レイ君の王冠も同じだからね」

「はあ・・・。俺と泊まったって、面白いことってないですよ?」

「それでもいいの」

「・・・ちなみに聞きますけど・・・レイの王冠は誰が取ったんですか?」

「うん?・・・なんだか面白いことになったのよねえ・・・」

「・・・?どういうことですか?」

「・・・それは秘密」

「・・・」

「当分の間、よろしくね、一夏君」

一夏はもうどうでもよくなって、背中から倒れる・・・

（くそっ！・・・ふざけやがって・・・！）

学園から逃げたオータムは学園から離れた公園におり、そこにある水飲み場で水を飲んでいた。

（何が簡単な仕事だ！あのガキめっ！）

オータムはこの仕事を言った人物を思う。

（それに、剥離剤が効かないISがいるなんて聞いてないぞ！）

リムーバーはどのISにも効果を発揮するように作られているが、それでも聞かないというのは耐性を持ったISと言うことになるが、あの時は明らかに効果を発揮していた。

（・・・しかもそれが黒き亡霊だったなら、この先どうやって鹵獲しろってんだっ！）

その黒き亡霊こと、ファントムには亡国機業が欲する技術が使われており、その技術はもうファントムにしかない。

剥離剤は耐性がなくても、効かないことが発覚して、力で倒さないとけない。

(・・・だが・・・)

オータムはあの時のファントムの動きを思い出す・・・

確かにあの時操縦者は確実に気を失っていた・・・にもかかわらずファントムは自動で動いた・・・

(・・・あのガキ・・・必ず借りを返してやる！)

と、水を飲んでいると、異変が起きた。

(・・・なんだ？壊れているのか？)

突然水が途切れて蛇口を見ると、ありえないことが起きていた。

「なあっ!？」

すると、蛇口から出ている水は途中で途切れ、弾かれていた。

その水しぶきはオータムの服を濡らす、オータムはそんなことはどうでもよかった。

「まさかこれは・・・A I Cか!？」

オータムはそこから飛び退こうとするが、着地の直前でA I Cによって止められ、慣性に従い背中から倒れる。

「くっ！貴様ドイツのISだな！？」

「その通りだ『亡国機業』」

そこには、ISを展開したラウラの姿があった。

「動くな。既に狙撃手がお前の眉間を狙っている」

「くっ・・・」

逃げようとしたオータムは大人しく動きを止める。

「話してもらおうか・・・お前たちの組織について」

と、AICを維持したままラウラはオータムに近付く。

「お前が使用したISはアメリカの第二世代型だな・・・ハーケン殿によって調べはついている・・・どこで手に入れた？」

「言うわけねえだろ！」

「・・・そうか・・・。ならば長い尋問になりそうだな」

と、さらに近付こうとした瞬間・・・

『ラウラさん！もう一機来ますわ！』

プライベート・チャンネルにてセシリアの声が響く。

「なにっ!？」

ラウラがセンサー領域を拡大した瞬間、右肩が撃ち抜かれる。

「くっ!」

ラウラは眼帯を外して、ハイパーセンサー補助システム『ヴォーダ
ン・オージェ』を起動させるが、攻撃を避けるのがやっとだった。

『下がって下さい!ここはわたくしが!』

と、セシリアは『スターライト・MK-?』を構えて、ビームが飛
んできた方向から場所を割り出してISを確認した。

『そんな……まさか!?』

ロングレンジズームによって映し出されたのは、セシリアも見たこ
とがある機体だった。

BT二号機……『サイレント・ゼフィルス』

シールド・ビットを試験的に搭載したイギリスの第三世代型IS・
。それにはセシリアのBT一号機『ブルー・ティアーズ』のデー
タも使われている。

「何をしている!?!早く撃て!」

「くっ!」

セシリアは驚いて反応が一瞬遅れるが、すぐにサイレント・ゼフィ

ルスに向け狙撃を行う。

だが、ゼフィルスはシールド・ビットを展開して攻撃を防ぐ。

「ならばっ！」

セシリアはビットを展開するが、その直後にゼフィルスによって撃ち抜かれてしまう。

（超高速機動での射撃！？……しかもこの連射速度って……）

相手の技量に驚くセシリアを置いて、ゼフィルスはビットを展開して向かってくる。

「それならっ！」

セシリアはミサイルビットを真下に向け放ち、迂回しながらゼフィルスに向かっていく。

……だが、その直後に信じられないことを目にする。

「なっ！？」

ゼフィルスの『スター・ブレイカー』から放たれたビームが突然弧を描いて曲がり、ミサイルビットを撃ち落とした。

（あれは……BT兵器の高稼働時に可能な偏光制御射撃！？……そんなことが……）

目の前のことが信じられず、棒立ちになってしまい、それを逃さず

ゼフィルスはセシリアに向け狙撃を行う。

「何をしている！回避しろ！」

「っ！？」

セシリアはラウラに突き飛ばされ、ビームをセシリアの代わりにラウラが受ける。

飛散するラウラのISの装甲を見て、セシリアは我に返る。

その間にもゼフィルスはピンクに発光するナイフでAICを切り裂き、オータムを救出する。

「助けに来たぞ・・・オータム！」

「て、てめえ！呼び捨てにするなっ！」

そして、ゼフィルスは接近するラウラを寄せ付けないようにビットで牽制する。

「・・・この程度か・・・ドイツの遺伝子強化素体」
アドヴァンスド

「なっ・・・なぜそれを・・・！？」

「答える必要はない・・・ではな」

と、ゼフィルスはそのまま飛んで行き、もと来た方へ飛翔する。

「くっ・・・。ラウラさん！すぐにIS学園に連絡を。わたくしは追

跡をします」

「・・・だめだ。相手の技量は分かったはずだ・・・」

「・・・・・・・・」

セシリアは悔しかった・・・。

（・・・なぜ・・・こうもわたくしは・・・）

と、セシリアは拳を握り締める。

（・・・私が・・・弱いだけに・・・）

こんな時に役に立てない自分を恨むのだった・・・。

『-----』

そのセシリアの姿を何者かが見ていた。

『・・・私の器に相応しいか・・・もう少し様子を見る、か』

と、その者は背中の翼を展開して、その場を一瞬で飛び去った・・・。

・

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

レイは何か感じていた・・・

(・・・なんだろう・・・この感覚・・・)

気を失ってから、ファントムはレイの意思無しで、勝手に動いた。
レイがIS装着時は、そのISのAIは起動しない・・・もちろん、
その状態から操縦者によるAIの起動もできない。そもそもレイは
気を失ったので、起動させる術がない。

しかし、ファントムはレイのピンチに反応して、行動を起こした・・・。

そう・・・それはまるで・・・

レイを守るかのように……

(……なんだか……懐かしいような気がするな……)

レイはその感覚に懐かしさを感じていた……

「……………う、うう……………」

レイはしばらくして、目を覚ます……。

空はオレンジ色に染まり、時間帯は夕方だろう……

「……………ここは……………」

レイはどこなのかを確かめるために半身を起こすが、どうも身体が重いと感じる。

「……………」

レイは身体を見ると、あれからずっとISが解除されないままだったので、ファントムは装着されたままだった。

しかし、ファントムはISの自爆をもろ受けたので、損傷は軽微で

はない・・・

「・・・・・・・・・・」

そして辺りを見回すと、ISの格納庫で、ファントムはISを運ぶのに使う台車の上に寝せられていたようだ。

（・・・・・・・・操縦者が気を失っても、ISは強制解除されないようになってるのか……。でも、なんで……。？）

レイは考えながら、ISを解除した。

「・・・・・・・・うつ・・」

ISを解除した途端、体中に痛みが走る。

「・・・はあ・・・」

と、レイは台車から下りる。

「・・・・・・・・」

レイはISのコンソールを開くと、データを見る。

（・・・・・・・・やっぱり・・・何かあるのか……。？・・・・ファントム・
・・）

ファントムはここ最近に来て、稼働率がかなり上がっており、今では半分以上にまで上がっている。他二機はまだ半分ちょっと下ぐらいだ。

(・・・それに・・・ファントムに意思があるのか?)

ISのコアにも意思はあるが、表面上に出ることはまずない。
しかし、ファントムは自らの意思があるように見える。

(・・・まさか、な・・・)

レイはコンソールを閉じると、とりあえず保健室に向かうことにした・・・

(・・・でもなんでここに置かれたんだ?)

と、レイはここに安置されていたことに疑問を抱く・・・

S t o r y 33 亡国機業（後書き）

・・・感想って少ない方なのかな・・・。
せめて一言だけでも書いてほしいものです・・・。

Story 34 『ものがたり』の始まり

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

IS 学園から離れたビルの屋上に、ロイは端末のデータを見ていた。

ロイはサングラスを外して、左目に眼帯を付けていた。

（・・・・・・・・亡国機業・・・・。本格的に動き出したな・・・・）

端末には、亡国機業が動き出したことが記されていた。

（・・・・と、なると・・・・・・・・準備を早く進めないといけないな・・・・）

と、端末の電源を切って、ポケットにしまうと・・・・・・・・

「・・・・・・・・もう出てきたらどうだ？」

ロイは誰かに声をかける。

「・・・・・・・・さすがに気付いているよね・・・・」

と、ロイの後ろにあった屋上の建物の陰から、一人の人物が出てき

た。

「・・・お前もしつこいな・・・」

ロイは振り向かずとも、誰なのかはわかっていた。

その人物は、体つきからして、少女なのだが・・・その顔は誰かに似ている・・・いや、瓜二つだ・・・

「そうかな？・・・『お父さん』・・・」

それは、レイと瓜二つの顔を持つ少女だった。
右目にはレイと同じ眼帯が付けられていた。

「・・・そこまで俺のことが気に入らないか・・・？」

「そう・・・。あなたの存在は気に入らない・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・だから・・・！」

と、少女は飛び出すと、左腕にISアーマーを集中展開してロイに襲い掛かる。

「・・・・・・・・」

しかし、ロイは振り向くと同時に左腕にISアーマーを集中展開して、左腕に装着されているブレードシールドで攻撃を防ぐ。

「・・・へえ・・・。まだ勘は鈍ってないんだ・・・」

「・・・まだ現役でな・・・」

「・・・なら・・・!」

と、少女が反動で下がると、その直後に両者はISを展開した。

ロイは全身装甲の黒いIS・・・黒騎士を展開して、背中に装着されている鞘からブレードを抜き放つ。

少女もISを展開すると、両腕よりビームカッターを展開する。

少女のISは黒がほとんどで、各所には血のように紅いディテールが施されており、両肩にはISの半分ほどの丈ぐらい長さがあるシールドを装備して、両腰にはアンカーが二基ずつ搭載されている。ISのデバイスは額にV型のアンテナと、右目を覆うバイザーと耳のアンテナだ。その機体形状には『シュヴァルツェア・レーゲン』のラインが見て取れる・・・

そして展開した直後に両者は一気に接近して刃を交える。

「ふーん・・・。中々パワーはあるんだね・・・。第一世代の旧型なのに・・・」

「・・・そうかな・・・。こいつはまだ現役で働けるほど性能は高いのでな・・・」

と、ロイは少女のISを弾き飛ばす。

「くっ！」

少女は両肩のシールドの先端を前に向けると、そこにあるキャノンで黒騎士に向け砲撃する。

ロイは背中のマントを前に出すと、それでキャノンのビームを拡散させた。

「ちっ！」

直後に少女は両腕のビームカッターを基部から黒騎士に向け射出した。

「くっ！」

ロイはエネルギー状のワイヤーで変幻自在に動くビームカッターをブレードで防ぎながら、後方へ飛翔する。

「逃がさない！」

少女はビームカッターをワイヤーで操りながらも、両肩のキャノンを放つ。

ロイはブレードでビームカッターを弾くと、直前でビームを避ける。

「旧型でよく頑張るよね・・・このドイツの第三世代型IS相手に」

「ふっ・・・。ISの性能の違いが戦力の決定的でない差でないときさ！」

と、ロイはブレードを構えると、少女のISに向かっていく。

「そんなもので・・・」

少女は両腰よりアンカーを射出した。

「いくぞ！」

「アタックフアンクション！大真空斬！」

ロイはブレードを振り上げると、そのまま高速で宙を数回切ると、刀身から衝撃波を発し、アンカーを切り裂いた後、残りが少女に向かっていく。

「・・・無駄なことを・・・」

と、少女は右手を前に出すと、衝撃波を直前で止めた。

「・・・A I C・・・」

「そう・・・。停止結果って呼ぶこともあるかな・・・」

そして少しすると、衝撃波は消滅した。

「さて・・・。そろそろ終わらせるよ・・・」

と、少女はビームカッターを構える。

「・・・」

ロイもブレードを構える。

「・・・・・・・・・・？」

すると、少女のISのプライベート・チャンネルが開く。

『レナ……。もうエムとオータムは帰ったからあなたも遊んでないで帰ってきなさい』

「・・・スコール・・・」

と、少女……。レナは一旦ロイを見る。

「・・・・・・・・分かったよ・・・」

レナは洩々と命令に従い、ビームカッターを切ると、そのまま後ろを向いて飛んでいった・・・

「・・・退いたか・・・」

ロイはブレードを背中の鞘に収める。

「・・・・・・・・・・」

そして、ロイもどこかに飛んでいった・・・

「・・・と、いうことだから・・・。しばらくの間・・・よ、よろしくね」

「あ、ああ・・・」

と、シャルは少し恥ずかしそうにあいさつをしてレイの部屋に入る。

その肩には荷物が入ったバックがかけられていた。

なぜそんなことになったかと言うと・・・。王冠争奪戦の時に、レイの王冠を手にしたのはシャルであるからだ。あれからレイは大量のシンデレラ達から必死に逃げていて、それから一夏を探すために王冠を投げ捨てて、それに気をとられているうちに逃げたと言う・・・。そんなもって、その王冠を取ろうと女子たちが手を伸ばすが、王冠はその上を転がっていき、最終的にシャルの頭にすっぽりと被ったと言う・・・。それでシャルがレイの部屋に泊まると言うことが決定した・・・という。

「・・・」

「・・・」

しばらくして、二人はベッドに座っていた。

寝る前と言う感じで、レイは寝る格好で、シャルも猫パジャマを着ていた。

「・・・ねえ・・・レイ」

「な、なんだ・・・？」

「・・・その・・・怪我は大丈夫なの？」

「あ、ああ。少し打撲があるくらいだよ」

「そ、そっか・・・。よかった・・・」

と、シャルはホッと息をつく。

「・・・でも・・・よかったな」

「・・・え・・・？なにが・・・？」

「・・・そりゃあ・・・シャルが俺の部屋に泊まることだな」

「えっ!？」

「だって、知らない女子と止まっても、面白くないからさ」

「・・・そうだよね」

と、シャルはがっかりしたように頭をガクツと下げる。

「・・・まあでも、シャルが泊まることになったのが嬉しいのは本当だけどな」

「・・・・・・・・」

シャルの機嫌は直らない

「・・・・・・・・ええと・・・何か悪いこと言った？」

「・・・レイ・・・言葉って刃物とか銃器などの凶器より恐ろしいって、知ってる？」

シャルの顔は笑顔だが・・・額には血管マークが浮かんでいる。

「・・・本当にすみませんでした」

と、レイは深く頭を下げる。

「・・・・・・・・プツ・・・」

と、シャルは突然吹き出す。

「もういいよ・・・でもレイが冗談をいうのって珍しいから・・・」

「・・・そ、そうか・・・」

と、レイは心の中で一安心するが、シャルからは怒りが見えていたのは気付いた。

「もう遅いから、寝る？」

「そうだな」

と、レイとシャルはベッドに寝転んで、布団をかける。

「あっ・・・レイ」

「なんだ？」

「一つ伝えることがあるの」

「伝えること？」

「うん。楯無さんが明日から忙しくなるって」

「・・・忙しくなるねえ・・・」

「そういうことだからね」

「ああ。分かった」

「・・・じゃあ、おやすみ・・・レイ」

「おやすみ」

と、レイは電気を消して、目を閉じる・・・

そして翌朝・・・

「では、学園祭の投票の結果発表を行います」

体育館では楯無さんが学園祭での織斑一夏の争奪戦の結果発表を行っていた。

「投票数が多かったのは・・・生徒会の出し物『シンデレラ』でした！」

「「「え・・・？」」」

女子一同は一瞬分からなかったが、すぐに我に返り、大ブーイングが起きた。

「卑怯！ずるい！イカサマ！」

「なんで生徒会よ！おかしいわよ！」

「私立ち頑張ったのに！」

うわぁ・・・これは凄いブーイングだ・・・。今までで一番大き
いかな・・・

「劇の参加条件は『生徒会に投票』よ。でも私たちは強制したわけじゃないので、立派な民意よ」

（・・・かなりずるい条件だな・・・こりゃ・・・）

レイと一夏の部屋に泊まれると言うのは、かなりおいしい条件で、参加条件が生徒会に投票って、これじゃ明らかに一方的な条件だな・・・絶対前者を選ぶだろう・・・

そんなもんで、生徒のブーイングが消えるわけがなかった・・・

「織斑一夏君。副生徒会長着任おめでとう！」

「おめでと〜」

「おめでとう。これからよろしくね」

楯無さん、のほほんさん、虚^{うつほ}さんの順で言うと、盛大にクラッカーが鳴る。

「はぁ・・・。何でこんなことに・・・」

一夏はため息をつく。

「そういうな……。俺もこんな感じだったからさ」

と、レイは一夏の肩をポンと叩く。

レイは生徒会長の助手になってからもう生徒会に入っていることになっている……。

ちなみに前にも言ったが、生徒会長助手は生徒会内では二番目の地位だと言う……。

「しかし……。本当に考えましたね……。これだったら部活の面々は文句を言わずに済むということですね」

楯無さんは一夏を生徒会に入れたが、今後抽選で部活動に派遣するようにしたと言う。

「その通り。さすが私の助手ね。様になってきたじゃない」

「……様ですか……。正直喜んでいいのか……」

「……まあでも、今後二人はここに放課後に集合するように。しばらくしたら一夏君は派遣先の部活動にいつてね」

「……分かりました」

「レイ君はいつもの通りお願いね」

「……了解……」

「……さて、今日は一夏君が生徒会に入ったことを祝って、レイ

君にケーキを焼いてもらいました」

「おお。レイがケーキを焼いたの？」

「・・・まあな」

レイは少し照れくさそうに答える。

「へえ・・・。ラングレン君ってケーキも作れるんですね」

虚さんは意外そうな感じで言った。

「そうよ。レイ君のケーキはとってもおいしいの。本当なら私がやろうと思っただけ、

試しにレイ君にやらせてみたら、おいしかったのよ」

二回も楯無さんはおいしいと言うほどに高評価のようだ。

「さて、本音ちゃんは取り皿を取って」

「はい」

「では私はお茶を用意しますね」

と、三人は手際よく準備をして、レイは冷蔵庫からケーキが入った箱を取り出して、のほほんさんが並べた皿の上にケーキを載せていく。

そのケーキは本当においしそうだった・・・

「それでは・・・乾杯！」

「かんぱーい」

「乾杯」

「・・・乾杯」

「は、はは・・・乾杯・・・はあ・・・」

そうして、一夏の生徒会所属が決まったのだった・・・

「てめえ！どういうことだよ！？」

時間は夜になり、ここはとある高層マンションの最上階・・・

オータムはサイレント・ゼフィルスの操縦者の少女・・・エムに詰め寄る。

「・・・・・・・・・・」

「何とか言いやがれっ！このガキがっ！」

オータムはエムを壁に叩きつけると、腰に付けていたナイフを突き立てる。

「・・・・・・・・」

「その顔を切り刻んでやる！」

「そのくらいにしたら？・・・・オータム」

と、後ろにあったソファーに寝転ぶレナがいた。

「怒りすぎるとしわが増えるよ」

「何だどこのガキっ！そもそもお前もだ！何であの時援護に来なかったんだよ！」

「はあ？・・・そんなこと誰が言ったっけ？」

「っ！・・・ふざけんなっ！」

と、オータムはエムを離すと、レナにナイフを突き立てる。

「・・・！？」

そして、オータムは動きを止める。

手にしていたナイフはいつの間にか無くなり、それは自分の頸動脈

に当てられていた。

一瞬の動きでレナがオータムからナイフを奪い、すぐさま後ろに回りこんでナイフを頸動脈に当てたのだった。

「誰が言っただけ？・・・私は知らないんだけどねえ・・・勝手に言わないでよ」

レナの表情には笑みが浮かんでいたが、オータムには死神の宣告のように感じた。

「そこまでにしないで・・・。レナ」

と、バスルームから出てきたのは美しい容貌の女性だった。

「・・・スコール・・・。冗談だよ・・・もし本気ならオータムは今頃あの世行きだよ」

と、レナはオータムの頸動脈からナイフを外すと、オータムのナイフが元あった手に戻して、後ろに下がる。

「くっ・・・」

オータムは悔しそうにレナを見る。

「やめなさい・・・オータム」

「・・・スコール・・・。こんなことになるのは知っていたのか・・・」

「ええ・・・。『あの人』のことだからリムーバーの対策は施していることはある程度推測していたけど・・・」

「なら、なんで言わなかったんだよ！推測でも分かっていたんなら・・・」

「でも、間違いをあなたに教えるわけにはいかなかったもの・・・」

「うつ・・・」

オータムは言葉が詰まる・・・

「・・・さあ、いらっしゃい。髪を洗ってあげるから。今日は疲れたでしょう」

「あ、ああ・・・」

と、オータムはスコールに連れられて、バスルームに入る。

（・・・下らない・・・。下らないな・・・）

エムはつまらなく見て、部屋を出ろうとする。

「エム。ISの調整をして頂戴。『サイレント・ゼフィルス』は奪って間もないものだから、再度調整が必要よ」

「わかった」

そして、エムは部屋を出た。

「ふん・・・」

レナはしばらくそれを見てから、窓際に立つ。

そこから見える夜景はきれいだった・・・

（亡国機業とか、イノベーターとか・・・。私はそんなことはどうでもいい・・・ただ・・・）

と、レナは窓に手を当てる。

（私は・・・会いたい・・・。私の目指す目標であり、私の原点に・・・。）

そしてレナは笑みを浮かべる・・・

（・・・レイ（兄さん）・・・）

レナはその後のことを思うのだった・・・

Story34 『ものがたり』の始まり（後書き）

今回初登場したキャラのISなのですが・・・一応候補としてはありますが、決まっていない・・・
なので、どれがいいか皆さんの投票で決めたいと思います。
ちなみに候補というのが・・・

?レクイエム

?ジェネシス

?Schwarzes Massaker（後半のスペルが読めなかったorz・・・ちなみに意味は日本語からドイツ語に訳すと

『黒い殺戮』ドイツ語から日本語に訳すと『たちの悪い大虐殺』）

?Schwarzer Schnee（これも後半のスペルが読めなかった。意味は『黒い雪』）

?Schwarzer Donner（以下同文・・・意味は『黒い雷』）

ちなみに、このISはシュヴァルツェア・レーゲンとは系列があるというオリジナル設定です・・・。

Story35 すべての始まり

そこは夜に包まれていた・・・。

ここは北アメリカにある大型のIS研究所・・・通称『テスラ研』・
・
・

軍事関係者でも知る人は少ないところで、銃声が響いていた・・・

「ぐわああっ！」

銃を持った兵士は敵の攻撃を受けて、後ろに飛ばされる。

目の前には青い装甲をもつIS・・・『サイレント・ゼフィルス』
であった。

「・・・・・・・・・・」

エムは『スター・ブレイカー』の実弾射撃で護衛兵士を次々と倒して
いくが、今のところ誰も殺していない。

そもそも、スコールから『ISで殺人はしない』とされている・
。もし命令違反したら、体内に入れられた監視用のナノマシンが脳
の神経を焼き切るようになってる。

(・・・殲滅すれば楽なものを……。面倒だ・・・)

と、エムは進んでいくと・・・

「目的は何だ・・・この施設に攻撃してただで済むと思うなよ!」

と、エムに向け護衛の兵士が怒鳴るが、エムは予想外なことを言っ
た。

「この研究所の地下に封印されているIS・・・『アークゲイン』
をいただきに来た」

「な、なんだとっ!？」

それは、誰もが知る機体ではない・・・。

「・・・邪魔だ」

と、エムは護衛の兵士たちをスター・ブレイカーで急所を外して撃
ち抜いていく。

「・・・・・・・・・・」

そして、エムは大きな入り口がある建物の前に来た。

「・・・ここだな」

と、ライフルを入り口に向ける・・・

「警告！上方よりIS出現！」

「・・・！」

エムは警報を聞くと、すぐに後ろに下がる。

すると、さっきまでエムが居たところに衝撃波が直撃し、地面に切込みが入った。

「ふーん・・・あの攻撃を避けるなんて、中々のものね・・・」
ファントム・タスク
『亡国機業』」

「・・・お前は・・・」

と、エムの前にISを身に纏った女性が下りる。

ショートヘアーの白銀に輝く髪をして、碧眼であった。年齢は十代後半と言ったところだろう。

そして身に纏うISは、黒をメインに金が各所にある豪華さがうかがえるISで、デバイスは三本の角がある王冠型で、両肩も王冠に似た形状で、サイドアーマーはスカートのように下に伸びていた。手には刀身の幅が広いブレードで、根元にはリボルバー式の弾倉らしきパーツがあった。

「私の名前は『アリス・イラストラス』・・・このテスラ研のテ

ストパイロットよ。そしてこのISは……」

「……第三世代試験型IS……『ジャッジメント』……」

「ちょっと……。人の前口上を奪うのはよくないよ……」

「……」

「まあいいわ……。でもここに来たのが運のつき……。さあ、あなたの罪を数えなさい！」

と、アリスはブレードを構えると、エムに向かっていく。

「……ちようどいい。それもいただくとするか」

エムは急速後退して、スター・ブレイカーでジャッジメントに攻撃を掛ける。

ジャッジメントは素早い動きでエムの射撃を次々と避けていく。

「ちっ……」

エムはシールド・ビットを展開して、アリスに猛攻を掛ける。

さすがにアリスも避けるので精一杯で、近付く余裕がなかった。

「くっ……。さすがに近接武器だけじゃ不利ね……」

「……」

「……なんて思った!？」

と、ブレードの先端をエムに向けると、刀身が下に折りたたまれて、そこから銃口が現れ、弾丸が発射された。

「……!」

エムもさすがに意表を突かれ、避けきれずに弾丸が左肩に直撃する。

「これはただに剣じゃないの……。『ガンブレード』……覚え
て」

アリスはシールド・ビットの攻撃を避けながら、ガンブレードでエムに攻撃をかけながら、左腕に『ジャッジ・シールド』を展開して攻撃を防いでいく。

「くっ……」

エムは体勢を立て直すと、スター・ブレイカーのエネルギー射撃でジャッジメントの左肩に直撃させる。

そしてそれを始めに次々とジャッジメントに直撃させる。

「ちっ! ……やるわね……。だけど……!」

と、アリスはジャッジメントの背部スラスターを展開すると、そのまま爆発的な『瞬間加速』をかけ、攻撃を受けながらゼフィールスに接近する。

「……」

だが、エムは焦る様子を見せずに、機体前方にシールド・ビットを展開して、壁を作る。

「このおっ！」

アリスはガンブレードの刀身を展開させると、そのままシールド・ビットに突き刺す。

「切り裂いて・・・撃ち抜く！」

そして、ガンブレードのトリガーを引き、シールド・ビット内で弾丸を爆発させ、シールド・ビットを破壊した。

「・・・！」

エムはとっさに後方に下がり、ジャツジメントと距離を置く。

「・・・？」

すると、プライベート・チャンネルが開く。

『エム。撤退しなさい。せっかくに機体を失うわけにはいかないわ。ISの奪取は後続部隊に任せましょう』

「・・・了解・・・」

そして、エムは後ろを振り向くと、そのまま急加速を掛けて現戦域から離脱した。

「逃がすさないわよ！」

と、アリスも後を追おうとするが・・・

『待ちたまえ、アリス君』

「・・・!？」

オープン・チャンネルで、研究所から通信が入る。

『今のジャッジメントはまだ調整中だ。無理は禁物だ』

「・・・しかし・・・研究所を襲ったやつを見逃すわけには・・・」

『気持ち分かる・・・。だが、君に万が一のことがあったらどうする?』

「・・・・・・」

『戻りたまえ・・・。どの道ジャッジメントの稼働時間はもう僅かだ』

「・・・了解・・・」

と、アリスは渋々と研究所の格納庫に向かう・・・

エムは高速飛行で撤退していた。

（・・・システムの実験機である性能・・・。操縦者はかなりの強者、か・・・）

ジャッジメントとはあるシステムの実験機で、まだ課題となる問題が多いらしい・・・

「・・・・・・・・・・」

エムは今はどうでもいいと、そのまま進んでいく・・・

だがその直後・・・

「警告！右側から攻撃あり」

「・・・・・・・・！？」

突然右側から複数の弾丸が飛んできて、エムはとっさに回避した。

（待ち伏せか・・・）

エムは臨戦態勢に入り、攻撃が来たほうを向く。

・・・だが、そこで予想もしない機体が居た

(・・・なん・・・だと・・・?)

エムの表情が初めて焦りを見せる。

そこにいたのはISだったが、問題はそこではない。

そのISは『全身装甲』で、どっしりとした感じであり、頭の額には一本の鋭利の刃物の角があり、後ろに伸びる耳があり、両肩はかなり大きく、前面にハッチがある。左腕には先ほどの攻撃に使用した『五連チェーングン』があり、右腕には大型のパイルバンカーがある。

「・・・ゲシュペンスト・・・MK-?だと・・・!?!?」

そのMK-?と呼ばれる機体はPICで宙に浮くと、肩のテスラウイングと背中のフレキシブル・スラスターを展開した。

その姿は、レイが使用する『アルトアイゼン・ナハト』に酷似していたが、カラーは青ではなく、赤であり、ツインアイは緑だった。

「くっ・・・」

エムは戦闘を避けるために、そこから離れようとしたが・・・

「警告! 後方よりISが接近中! 攻撃が接近中」

「・・・!？」

エムは後方を見ると、エネルギー弾が接近しているのに気づき、とっさにシールド・ビットを後ろにやり、エネルギー弾を防ぐが、シールド・ビットはそのエネルギー弾に耐え切れず、撃ち抜かれた。

「ちっ・・・」

エムはハイパーセンサーでその機影を見た。

「・・・なに・・・!？」

接近してくるISも、エムは予想もしないものだった・・・

ISはエムの前に来ると、宙に浮いて動きを止める。

そのISも『全身装甲』で、白がメインで、各所に青いラインが施されていた。背中には大型のテストラウイングがあり、それを大きく広げていた。右手にはISの丈を超える長さを持った銃身を持つスナイパーライフル『アトラス・ランチャー』があり、左腕には三連ビームガンが搭載されていた。

「ゲシュペンストMK-?・・・だと!？」

そのMK-?の姿も、レイが使用する『ヴァイスリッター・アーベント』に酷似していたが、オレンジの部分が青に変わっている。背中テストラウイングもアーベントよりも長い。

ちなみに、あの時いた者はこのISだ。

「警告! 左側からISが出現!」

「・・・!？」

更に追い討ちを掛けるかのように、左側の下から、一体のISが出てきた。

「・・・ゲシュペンストMK-?・・・!？」

新たに現れたMK-?は、エムの左側の宙に浮いて動きを止める。

機体色はほとんどが黒で、各所に銀と少し赤があり、バイザーの色は赤。『全身装甲』であり、背中には大型のブースターパックがあり、客部にも追加ブースターがあり、背中のブースターパック両側にアタッチメントがあるので、右側には折りたたみ式のキャノンを装備し、反対側にはミサイルポッドが装備されていた。更に両腕には三本の棒が装備されていた。

その姿はハーケンが使用する『ゲシュペンストMK-?』と姿が重なるが、装備の量が違う。

「なぜ・・・こいつらが・・・!？」

エムは状況を把握できなかった・・・。

周りには現れること自体予想もしていなかった三機のISだ。完全に囲まれて、ISは臨戦態勢をとっていた。

「くっ・・・」

エムはいくら技量が高い自分でも、明らかに自身が不利と言うこと

を悟る・・・

さっきの戦闘もあるので、消耗して、なお三機のISに囲まれているのだ・・・。

『どうしたの、エム・・・？』

と、プライベート・チャンネルでスコールの声がする。

「・・・敵に囲まれた」

『敵・・・？』

「ああ・・・。しかもゲシュペンストMKー？、MKー？、MKー？だ」

『・・・・・・』

スコールは一旦黙る・・・

このことはさすがに計算に入れていなかったようだ。

『エム・・・。戦闘はできるだけ避けて。せつかくのISを失うわけにはいかないもの』

「・・・言うほうは気楽でいいな・・・。」

『・・・でも、もしものことがあるから、レナを向かわせるわ。到着まで逃げ続けるのよ』

「・・・・・・・・了解」

エムはシールド・ビットを展開して、戦闘体勢に入る。

『・・・・・・・・我らのイレギュラーを――』

『・・・・・・・・抹消する――』

『・・・・・・・・それが我らの使命――』

と、機械的な声を三機から出るが、どこことなく意思を感じさせるものだった。

そして、三機は同時にエムに仕掛けるのだった・・・・

その頃・・・・とある施設・・・・

「・・・・・・・・・・」

ロイは自身のIS『黒騎士』の調整を行っていた。

（さすがにこいつもロートルか・・・・。性能は今でも第三世代と同

等に戦えるぐらいあるが・・・やはりパーツの旧式化は逃れないか・・・)

ロイはそれから隣に止めている台のスイッチを押すと、複数のアームが出てきて、黒騎士のパーツ交換を始めた。

「やっぱり根本的からアップグレードをするしかない、か・・・」

と、ロイは後を機械に任せて、壁に設置されているモニターを見る。

「・・・最近活動がやたらと活発だな・・・?」

モニターには、世界地図があり、そこにいくつか赤い点々が点滅していた。

このモニターはとあるISたちを監視するもので、点滅の具合によってはどんな状況かが分かる。

そんな中に三機が固まっているところもあった・・・。

(・・・これは・・・『アルトアイゼン・リーゼ』と『ヴァイスリッター・ツヴァイ』に『ゲシュペンストMK-?・パスワード』・・・か・・・?今戦闘を行っているようだが?)

ロイはその三機の点滅からして戦闘していることを察知する。

「最近は大人しくしていると思えば、やっぱりこいつらは『器』を求めているようだな」

ロイはその三機のISたちが何をしているかは、その大体予想はつ

く。

（『器』・・・つまりは『パートナー』を求めているんだな・・・。
他のやつらより意思が強いつてことか・・・。まあ作った本人が言うのは何だけど・・・）

このモニターに映るすべてのISは、ロイが作り出した無人のISなのだ。

しかも、すべてのISのコアはロイが製作したものだというのが、ISのコアは篠ノ之博士しか作れないが、そこは束^{たばね}を超える科学者『あの人』こと、ロイ・ラングレン。ブラックボックス化していたコアを独自で解析した結果、最初に出来上がったコアを元に、量産型のISコアの開発に成功した。そのコアは従来のコアより性能に限がかかるが、コストが抑えられているので、量産に向いている。そして従来のものより高性能なコアの開発もついで行ったが、コストがかなり高いこともあり、数を数えるぐらいしか作ってない。

（まあ、『はぐれIS』が生まれてしまったのは、想定外だったけどな・・・）

モニターに映るISは、自らの意思を持ったIS、通称『はぐれIS』・・・

原因は不明だが、突然一部のISが意思を持って、ロイの研究所から脱走し、それから世界各所に潜伏したのだが、なぜ脱走したかはいまだに不明だが・・・

（こいつら三機は器となるパートナーを求めている・・・。だがなぜそこまで必要とするのかは俺もさっぱりだがな）

と、ロイは一息吐く。

「・・・・・・・・・・」

ロイは一旦格納庫から出た・・・

そして、ロイは長い階段を下りていった。

「・・・・・・・・・・？」

そんな最中、携帯がなった。

ロイはポケットから取り出すと、電話に出た。

「ハーケンか」

『はい』

「何の用だ？」

『先ほど、テスラ研が何者かに襲撃されたと言う情報がありました』

「テスラ研が？」

『ええ。しかも襲撃者の目的はテスラ研に封印されている『アーク
ゲイン』を奪取することだったそうです。これは護衛の兵士からの
証言です』

「・・・・・・・・・・」

『・・・このことを知っているのは・・・』

「・・・・・・・・『亡国機業』・・・もしくは『イノベーター』だな」

『俺もそう思っています。監視カメラの映像からイギリスから奪取
された第三世代型ISが映っていたことから、亡国機業のものと思
われます』

「・・・・・・・・そうか……。やはりやつらが・・・」

『・・・それと、その襲撃者はテスラ研のテストパイロットの奮闘
によって撤退しましたが・・・』

「どうした？」

『その後、何者かに襲われていたそうです』

「・・・・・・・・なに？」

『機影からして、あなたが作製したIS三機だと思われます』

（・・・・・・・・やつら……。亡国機業のISと戦っていたのか……。だ
がなぜ・・・？）

『……どうしたんですか?』

「……いや、なんでもない……。とりあえずやつらの動きが気になる。調査を頼む」

『OK・マスター』

そして、電話が切れる。

(本格的に行動を起こしたか……)

ロイは携帯をポケットに入れると、そのまま最下層に向かう。

そして、ロイは最下層につくと、大きな扉の多重ロックを解除していく。

「……………」

そして最後のロックを解除すると、扉が大きな音と共に開いていく。

ロイはその中に入っていく。

中はガランとしているが、唯一、その中央に天井に伸びる水槽があった。

水槽の中には黒い色をしたロボットが眠っていた。

横に伸びる肩、背中にある二つの翼、左腕に三本の棒、後ろに伸びる耳と、その顔にある赤いバイザー……。

その姿はハーケンが使う『ゲシュペンストMK-?』と酷似していたが、何かが違う。

それもそうだ……。この機体は『IS』ではないのだ……

(……。今思い出せば……。ここから始まったんだよな……。)

ロイは目の前のロボットを見ながら、昔のことを思い出す……

今から十五年前のことだ……

束がまだISの開発をしていた頃だったな……。

その時の俺は大学生で、そのときから天才と呼ばれていた。

そんなもって、幼馴染の束と、織斑千冬と大学内では色々やったもんだな(問題事……)

そして、ある日のことだ・・・

「・・・はぁ・・・」

ロイはため息をついて、夜空を見上げる。

「束が言っていたIS^{インフィニット・ストラトス}って、確かに性能は凄いが・・・可能なものか・・・あの性能って・・・」

ロイは束からISの開発を手伝うことになったが、理論上からして可能なものかと疑問を持つ。

「そもそも、仮に完成したって、これを信じるやつはいないだろうな・・・」

その性能から、既存兵器を圧倒するものだったが、これを信じる人はいない・・・。

「・・・？」

すると、携帯になる。

ロイは白衣のポケットから携帯を取り出して、誰からなのかを見る。

「・・・リイルか・・・」

リイル・・・後のロイの妻だ・・・

そしてロイは電話に出る。

「もしもし」

『ロイ……。まだ研究所に居るの?』

「ああ。まだやることがあるからな」

『そうなの……。でも、もう午前の一時よ。帰るなら早めに帰ってね』

「わかっているよ。君を心配させたりはしないさ」

と、ロイは携帯を切る。

「心配性だな……。あいつも……」

ロイは携帯をポケットに戻す。

「……。さてと……。もう少しやってから帰るか……」

と、ロイは背伸びして、研究所内に入ろうとした。

……。だが、その直後……

「……。?!」

ロイは空がピンクに光ったのに気付き、とっさに振り向いた。

「なんだ!?!」

ピンクの光は雲の中で起こり、そして光が消える。

その直後に、雲から何かが落ちてきた。

「・・・・・・・・」

そしてそれは研究所の裏の山に落ちていった。

「・・・・・・・・あれは・・・・・・・・」

ロイはとっさにそこに向かおうとする。

そして、ロイは研究所にある作業用のワークローダーを使って、さっきの落下地点に向かう。

「・・・・・・・・あれか」

山道をしばらく進んでいくと、地面に大きな凹みでき、そこから煙が上がっていた。

ロイはその凹みの近くにワークローダーを止め、外に出た。

「・・・・・・・・これは・・・・・・・・」

ロイが目にしたもの・・・・・・・・それは凹みの中央で横たわる一体のロボットだった。

墜落の衝撃で各所が破損していたが、それほど大きな破損はしてい

ない。

落下時に摩擦熱で、機体の装甲からは蒸気のような煙が上がっていた。

ロイは慎重に近付いていく。

「・・・なんなんだ・・・これ・・・」

そのロボットは推測でも二メートルか、二メートル半はあるだろう。

ロイはそのロボットを周りから見て、驚いていると同時に、興味が沸く。

「・・・先を越されないように、手早く研究所に持って帰るか」

と、ロイは凹みから出ると、ワークローダーに乗り込んで、アームを使ってロボットを掴む。

「・・・こいつ・・・さほど重くないのか・・・」

二つのアームでロボットを固定すると、研究所に持ち帰った・・・

そして、研究所の地下にそれを収容して、そこで解析をはじめた。

「・・・凄いな・・・。あの落下の衝撃で損傷はあまりない・・・。それにこれは・・・」

解析していると、機体の周りには何らかのシールドが展開されており、それが落下の衝撃を緩和したのだろう。

「それに・・・これは・・・反重力装置か？」

機体は今も常に浮いた状態で、今は固定した状態だ。

「・・・凄い・・・これは・・・」

と、ロイの口角が釣り上がる。

「ふ・・・ふふふ・・・ふっはっはっは！！・・・これだ・・・こんな展開になるとはな！」

と、ロイは高らかに笑い出す。

「そうだ・・・こいつを解析して、様々な発明品を出すぞ・・・それで俺の実力を世間に見つけてやる・・・」

ロイの顔は邪悪な笑みが浮かんでいた・・・。

「・・・そうだ・・・東にも見せてやろう・・・そうすればあいつのISの開発が短縮されるだろうな・・・そうすれば・・・くっくっく・・・」

と、ロイは静かに笑い出す・・・

「俺の・・・俺の時代だ・・・！」

地下室に、ロイの笑い声が響くのだった……

「……ふっ……」

そうして、今に至るのだった……

このロボット……後に『ゲシュペンスト』と名付けたこれから、様々な技術が解析して出てきて、ISの大半の技術もこのゲシュペンストを解析して出てきたものだった。

「でも、それが……若さゆえの過ち……だったな……」

そう、ロイがこのゲシュペンストから出てきた技術を使って発明品を生み出したその時から、すべてが始まったのだ……

（俺は……その後束が開発したIS……それに興味を持って、あいつが製作したコアを解析した。最初はうまくいかなかったが、数ヶ月の時間を経て、完全とはいえない、いわば『擬似コア』と呼ばれるコアを作り上げた）

そして、その器となるISも、ゲシュペンストから得たデータを用いて作り上げた究極のISであった。

（理論上ではそうだった……。だが……）

そのISの実験で、ISの性能は理論上の性能を遥かに超え、そして擬似コアが暴走を起こし、そのまま自爆を起こし、実験場所だった研究所を消滅させた……

（……そのつもりはなかった……。いや、あんなことになるなんて思っていなかった……）

この事故で、ロイは自分の過ちに気付いたのだった……。

つまり、自分はパンドラの箱を開けてしまったのだ……。

（……それから俺は、研究をやめて、密かに暮らすことにした……。だが……）

それで傷が癒えるわけではない……。

数百人の命を奪ったのだ……。一瞬で……

「だから……。そんな過ちを繰り返さないように……。俺は……」

そして、ロイはその後、束のコアを再度解析し、擬似コアから得たデータを用いて、ほぼ完璧なISのコアを作り上げた……。

そのコアを用いて作り上げたIS……。それが『黒騎士』だ……

（その後……。俺が生み出した技術を基にして作り上げた無人IS『アークゲイン』が暴走を起こした……）

ロイは自分によって生み出されて罪をはらうべく、戦うことを決意する。

ISは女性にしか反応しなかったが、ロイが男性でありながらもISを起動させることができたので、自身が作り上げた黒騎士で、アークゲインを撃破した。

（・・・でも、それで終わりじゃなかった・・・）

その後、亡国機業がロイのISの技術を狙って追ってきたのだ。

それに続き、一度は解散した組織『イノベーター』もロイが生み出したとある技術を狙ってきたのだ。

（俺が引き起こしたこの事態のせいで・・・多くの人を巻き込んでしまった・・・）

そして、その逃亡の最中で、妻のリイルを失ってしまった。

（・・・そして・・・レイも・・・）

自分の子供・・・レイもそれに巻き込んでしまった。

巻き込むつもりはなかった・・・だが、あの時・・・

（俺のミスで・・・レイがあんなことに・・・）

それは二年前に起きた旅客機墜落事故・・・それは原因不明の事故だとされていた・・・だが・・・真実は違う・・・

（もっと、俺が注意していれば・・・）

イノベーターはロイから奪った量産型のコアと量産型のISのデータをを用いて、無人ISを作り上げて、ロイに襲い掛かってきた。

そして、ロイは黒騎士と、その際につれていた三機のISと共に戦闘を行っていた。

性能からこっちが圧倒だった・・・だが・・・イノベーターのISのうち一機がそのまま下に落ちていき、そしてそこにいた旅客機に衝突したのだった。

（不覚だった・・・）

それによって、旅客機の乗客は全員死亡した・・・。巻き込まないといいつつも、自分は何も分かっていなかった・・・。

だが、その旅客機の中で、唯一生きていたものが居た・・・。それがレイだった。

（だが・・・あの時のレイは・・・もう瀕死の状態だった・・・。いつ息が絶えるかわからない状態だった・・・）

ロイは苦渋の決断をして、レイにつれていた三機のISをレイにフイティングをさせたのだった。

もちろん、これは無謀な賭けだった。

（いくら俺の息子だとしても、ISが使えるわけじゃなかった・・・

）
これに遺伝性があるというわけじゃなかった・・・。

しかし、賭けは成功した・・・

三機のISはレイとフィッティングして、レイは一命を取り留めたのだった。

ロイは一安心した・・・。

「・・・だが・・・」

その後、とんでもないことが判明したのだった・・・。

レイの身体で通常ではありえないことが起きていた・・・

「あんなことになるなんて・・・俺だって分からなかった・・・」

それは今でもレイの身体の中で進行し、今ではもう最終段階に入っているだろう・・・

（いつ起こるかわからない状態だ・・・そんなことになったら・・・）

恐ろしい事態を引き起こすだろう・・・

（だからこそ・・・これは・・・俺がやらないといけない・・・例えこの身が減んでも・・・）

ロイは振り向き、その部屋を出て行った・・・。

Story35 すべての始まり（後書き）

ロイはこの物語では重要なキャラクターです……。今後驚くべき事実が発覚していきます……。ちなみに今回現れた三機のISは、後に重要な役割を持っています。

それと、ジャッジメントはLBX『ジャッジ』をイメージしたISです。

あ、それと、おそらく分かるネタが入っている……

Story 36 嫉妬

「ふーん……。一夏の誕生日は今月中にあるのか」

「ああ」

と、寮でいつもの面々夕食を取っていた。

「それで、いつなの？」

と、シャルが訊いてくる。

「九月の二七日だよ」

「ふーん……。日曜か」

レイは確認するとカレーうどんの麺をすする。しかしカレーの汁がなぜか飛び散らないのはなぜ？

「それにしても、誕生日を教えないやつが居るもんだな」

「いや……。そんなに重要じゃないかなあって」

「……重要ねえ……。しかし、知っていて教えないやつもいるこ

とだしな」

ぎくっ、ぎくっ

と、レイが言うところファースト幼馴染こと箒とセカンド幼馴染こと鈴は固まる。

「そ、それはだな……。訊いて来なかったからだぞ」

「そ、そうよ。訊かれもしないのに教えるなんて、KYじゃないの」と、どうも言い訳じみている……。って、KYって古いな……

「そういうもんかね……」

レイは別に深く聞こうとはしなかった。

「まあとりあえず、日曜日だな」

「一夏さん。その日は予定を空けて置いて下さいね！」

と、セシリアは一押しのように言う。

「ああ。でも当日あれがあるから……。四時だな」

「そういえば……」

その日にあるもの……。それはISの高速レース『キャノンボール・ファスト』

国際的に行われるものらしいが、IS学園では少し事情が違う・・・学園の生徒はほとんど参加で、もちろん訓練機と専用機では差があるので、それぞれの部門で行われるらしい。場所は市のISアリーナだという。

「そういえば、明日からキャノンボール・ファストに向けての高機動調整を行うんだよな。あれって具体的に何をするんだ？」

「恐らく高軌道パッケージのインストールとかだろうな・・・まあお前の白式には関係ないことだがな」

「そうだよな・・・じゃあその場合ってどうなるんだ？」

「たぶんスラスターの出力の調整とか、駆動系のちょうせいとかじゃないかな」

と、シャルが説明に入る。

「そっか・・・でも高機動パッケージといったらセシリアのブルー・ティアーズにもあるよな」

「ええそうですわ！わたくしセシリア・オルコットのブルー・ティアーズには高機動戦闘を主眼に置いた装備『ストライク・ガンナー』が搭載されておりますわ！」

と、いつもの腰に手を当てるお決まりのポーズをする。

（・・・最近何か元気がなさそうだったが、問題はないようだな・・・）

レイはつい最近のセシリアの様子を見てきた。

放課後一人黙々と訓練に励んでおり、その原因としては学園祭の時に敵を逃したことからしい。

（・・・『亡国機業』・・・何十年前からその存在はあり、民族、信仰、思想は持たず、その目的と存在理由は不明・・・。そのためその規模も不明・・・。だがここ最近のやつらの標的はIS・・・。まあ、今考えたって何もない、か）

レイはとりあえず亡国機業のことは置いておいて、キャノンボール・ファストの話に戻る。

「そうになると、セシリアが有利だよな。今度超音速機動について教えてくれよ」

「・・・申し訳ございません・・・それはまた今度・・・」

と、セシリアはにっこりと微笑むも、どうも表情が曇っている。

「そっか・・・。でもレイはなんのISで行くんだ？やっぱりアーベントか？」

「いや。調整を施したナハトでレースに挑むつもりだ」

「え？なんでナハトなんだ？アーベントのほうが・・・」

「確かに速いだろうな・・・。だが、レースには不向きだ」

「そうなのか？」

と、箒が訊いて来る。

「ああ。アーベントは直線ではどのISより速いだろうな。でもレースとなるとその速さが仇になるんだ」

「ふーん……。逆に速すぎてむしろ不利になるってわけね」

と、鈴はすぐに理解したようだ。

「その通りだ。だからスピードでは安定しているナハトでいくんだ」

「でもナハトって、逆に危ないんじゃないかってっけ？」

ナハトはレイが持つ三機のIS中、二番目に速いが……。無理な加速を掛けるとISのGの緩和する能力を持ってしても全て相殺はできず、操縦者には負荷が起こる。それによって肋骨の何本かにひびが入ったことがあった。

「少し前まではそうだったが、今じゃG・キャンセラーが新しくなったから、その心配はない」

「ふーん……」

「まあ普段のままじゃちょっと遅いから、以前使用した増加スラストーを装備して挑むさ」

「そうなんだ」

「そういえばシャルも増加スラスターで挑むのか？」

「うん。リヴァイブは第二世代の後期だから専用の後付装備がないんだよ」

「そうか・・・」

と、レイは確認すると、辺りを見回す。

「そういえば・・・ラウラの姿が見当たらないが・・・？」

「・・・確かに・・・いつもなら俺たちと一緒に居るはずなんだがな・・・」

「うーん・・・」

と、レイが考えていると・・・

「聞いた？第さんアリーナで専用機持ち同士が模擬戦を行っているって」

「うそ！いくいく」

と、後ろで話していた女子が食堂を出て行く。

「・・・嫌な予感だ・・・」

レイは箸を置くと、席を立って食堂を出る。

「・・・俺たちも行こうぜ」

「ああ」

「わかった」

「うん」

「わかりましたわ」

一夏、箒、鈴、シャル、セシリアはレイの後を追った・・・

そしてここは第三アリーナ・・・

「ぐああっ！」

ラウラは攻撃を受けて後ろに飛ばされる。

「・・・もう諦めたら？」

と、ラウラの前には、ISを身に纏ったフィオナの姿があった。

紅と黒のボディーをして、直角系の姿をしたISで、右手には中型のパルスガンを持ち、背中のブースターパックにあるアタッチメントの右側にはロケットランチャーが装備され、左には折りたたまれたキャノンが装備されていた。デバイスは上半分を覆うヘルメット

型で、目の部分は赤いバイザーで覆われていた。そして左肩にはビリヤードの九番ボールをイメージしたマーキングが施されていた。

「くっ……。まだまだだ……。！」

ラウラは立ち上がると、右肩のキャノンを放つ。

しかしフィオナはそこから少し横に動いて弾を避ける。

「ふっ……。！」

そして右のロケットランチャーをラウラに向け放つ。

「くっ！」

ラウラはとっさに攻撃を避けるが、フィオナの正確無比の射撃で、最後の一発が命中した。

「動きはいいけど……。それじゃねえ……。！」

フィオナは左腕の装甲下部を開くと、レーザーブレードを展開して、それを二回振るって、ラウラに向け光波を射出する。

「……。！」

ラウラをとっさに右手を前に出し、A I Cによって光波を止める。

「それじゃ動きが止まるよね」

と、フィオナは右手のパルスガンをラウラに向けると、トリガーを

引く。

すると銃口から一回に三発のパルスビームが発射された。

「・・・！」

ラウラはAICを展開しているのでとっさには動けず、そのパルスビームを受けてしまい、そして止めていた光波も受けてしまう。

「ぐはっ！」

複数の攻撃を受けてラウラは動きを止めてしまう。

「・・・終わりね」

と、フィオナは左のキャノンの砲身を伸ばすと、ラウラに向け砲撃する。

「！」

だが、その両者の間に誰かが割り込み、そしてフィオナが放った弾を上弾き返し、弾は上空で爆発した。

「・・・」

それは、レイのナハトで、左腕のシールド型の展開装甲を展開していた。

「・・・アルトアイゼン・・・」

そして、レイはシールドを戻すと、ラウラを見る。

「大丈夫かラウラ？」

「・・・た、隊長・・・」

ラウラの無事を確認したレイはフィオナの方を向く。

「フィオナ・・・・・・・・」

「レイ・・・」

「お前・・・やっぱり昔から——」

「・・・言っておくけど、私は勝負を挑まれて、それに応じただけよ」

「・・・なに？」

「この勝負はラウラが持ち込んだものよ」

「・・・ラウラが・・・？」

「ええ」

と、フィオナはISを解除した。

フィオナの専用スーツは黒をメインの赤のラインが入っている。

「まあでも『ナインボール・P』の戦闘データを取れたからね・・・
じゃあ」

と、フィオナはアリーナを出て行く。

「・・・・・・・・・・」

レイもISを解除した。

ラウラもしばらくしてISを解除した。

「ラウラ」

「は、はい」

レイはラウラの前に立つ。

「どうしたんだ・・。なぜフィオナに勝負を挑んだんだ」

「・・そ、それは・・」

ラウラは答えることができなかった・・

「・・・・・・・・・・」

レイは深く聞こうとはせず、そのままラウラから離れる。

「あっ・・」

ラウラは呼び止めようとしたが、レイはもう遠くに居た。

「・・・・・・・・・・」

ラウラは深く反省したかのようにしゅん、とする。

(・・・いえるわけが・・・ない・・・)

ラウラがなぜフィオナに勝負を挑んだかと言うと・・・それはあまりにも個人的なことだった・・・

(・・・氣に入らなかった・・・あの女が・・・)

ラウラはフィオナがレイに何度か二人で話しているところを見てきた・・・その度に胸がもやもやして、不愉快になった・・・
・・・つまり嫉妬からこの勝負を挑んだのだ。

(・・・でも・・・敵わなかった・・・)

フィオナの強さはレイと同等かそれ以上だった・・・隙がない動き、的確な射撃、そして攻撃のコンボが強い・・・なので、フィオナには攻撃は僅かしか与えることしかできなかった。

(・・・)

ラウラは心が痛んだ・・・

(・・・だた・・・負けた姿しか見せることになった・・・こ、こんな・・・)

ラウラは地面の土を握る。

(・・・こんなじゃ・・・レイを・・・守ることが・・・できな

い・・・)

自分の弱さにラウラは悔やむのだった・・・

そのラウラの姿を、何者かが見ていた・・・

しかし、その姿はステルスで透明になっていたが、若干そのシルエットはあの『ゲシュペンストMKー?』のように見える・・・。

『・・・俺のパートナー・・・。もう少し様子を見てみるか・・・
・』

そして、音もなくその者はその場を去った・・・

「うーん・・・」

シャルは静かに唸りながら、寮の廊下を歩いていた。

（・・・どうしようかな・・・でも・・・。うーん・・・）

どうやら何か悩んでいるようだ。

（レイを誘って・・・で、それから・・・）

と、シャルは妄想する・・・

「・・・・・・・・」

そして、顔が真っ赤になる。

（いやいや！・・・今のはなしなし！・・・れ、レイがそ、そんなことをするわけがないし、そ、それに・・・）

何を妄想したんだ？

しかし、あまりにも深く考えすぎて・・・

「あっ！」

シャルは階段を下りている途中で、段を踏み外して、バランスを崩し、前に倒れる。

そしてそのまま下に落ちていく。

「ふげっ!？」

すると、誰かとぶつかって、そのまま床に叩きつけられた。

「ぐはっ！」

シャルにぶつかった人はそのまま床に直接背中を叩きつけられてしまい、シャルはその影響は受けなかった・・・

「ご、ごめんさない・・・！」

シャルはとっさに顔を上げる。

「い、いや・・・こっちもすま——」

「え・・・？」

「・・・う？」

と、目の前に居たのは、レイだった・・・。

どういう状態かというと、シャルは階段から落ちて、階段を上っていたレイがシャルとぶつかって、そのまま後ろの床に倒れて、レイが下で、シャルはその上に乗る形になっていた。

両者の顔はかなり近く、息がかかるほどだった。

「・・・・・・」

「・・・・・・」

そして、両者の顔は真っ赤になって、一瞬頭の中が真っ白になった・

「……って、なにしてんのよ、あんたらっ!？」

しかもその場面を鈴が目撃した。

「わああ!？鈴、勘違いするなよ!？」

「そ、そうだよ!？か、勘違いしないで!？」

と、二人揃って立ち上がると、声が重なる。

「うるさい!」

と、鈴は右手に甲龍のISアーマーを集中展開して、レイに襲い掛かる。

「わああ!ご、誤解だっ!？」

レイは必死に止めようとするが、鈴はお構い無しに向かってくる。

「どりゃああ!」

そして、鈴の鉄拳がレイに向かっていく。

しかし、その間に誰かが割り込んで、右手にISアーマーを展開して、そのまま前に突き出す。

「うっ!？」

鈴は宙で止められた。

「・・・・・・・・・・」

それは、A I Cを起動させて鈴を止めるラウラだった。

「隊長に・・・何をしている！」

「ぐっ・・・。ラウラ・・・」

鈴は悔しそうにして、レイを睨む。

「・・・お前たちこそ・・・何をやっている・・・」

びくっ・・・と、ラウラは集中が切れて、宙に浮いていた鈴はそのまま落ちる。

そして、ギギギ、と声がしたほうを向くと、そこには仁王立ちしている織斑先生の姿があった。

「学園内とは言えど、I Sの無断展開は国際条例に違反すると言うことを忘れたか」

「い、いえ・・・きよ、教官・・・」

ぐすっ、ぐすっ、とラウラと鈴の頭に鋭いチョップが入る　うわぁ・・・。痛そう・・・

「今からグラウンドでI Sを装着して十週だ。もちろんP I Cと補助動力を切ってやるのだぞ・・・。早く行け！」

「は、はい！」

と、ラウラと鈴はグラウンドに向かって行った・・・

「・・・それと、ラングレン、デュノア・・・」

「は、はい」

「な、なんでしょうか」

「・・・こういうところではやらないほうがいいぞ」

と、言うのと、二人の顔は一気に赤くなる。

「ちょ、ちょっと！？お、織斑先生！？誤解ですって！？」

と、レイはかなりあわてて織斑先生に問います。

「・・・ふっ。冗談だ・・・」

と、織斑先生は歩いていった・・・。

（本当に冗談で言ったのか？）

レイはまだ不安があった。

「れ、レイ・・・。そ、その・・・ごめんね・・・。なんだか誤解を生んじゃって・・・」

「・・・別にいいんだよ・・・。それに普段の俺だったらあんな風にはならなかったんだ・・・」

「・・・どうしたの？」

「ちょっとな・・・。深く考え事をしていたんだ・・・。だから周りが見えなかった」

「・・・そ、そうなんだ・・・」

シャルは自分と同じ状態だったことに少し驚く。

「何を考えていたの？」

「・・・あの時・・・ラウラには、何か悪いことをしたって思っていたんだ」

「え？ラウラに？」

「ああ・・・。本当なら普通に訊くべきなんだが・・・。どうも苛立ちがあったから、刺々しく訊いてしまったんだ・・・。それに・・・深く訊こうともしなかった・・・」

「本当なら優しくしないといけないところだった・・・。だが、苛立っていたせいでそれができなかった・・・。八つ当たりもいいところだ・・・」

「・・・だから、ラウラにどう言えればいいか考えていたんだ・・・」

「・・・そうなんだ」

シャルはレイにどう言えばいいか悩む。

「……様子を見てから言うのってどうかな」

「……様子を見て、か……」

レイはしばらく考える。

「……その方がいいかもしれない……。どうも言いにくいかな」

「……そうだね」

「……ところで、シャルは何であんなことになったんだ？」

「え!？……あ、い、いや、そ、それは……」

「？」

「……れ、レイ」

「なんだ？」

「しゅ、週末に駅前で買い物に、い、一緒に行かない？」

「……買い物か……」

「二夏の誕生日プレゼントをかうのも兼ねていくつもりなんだけど……」

「・・・なるほどな・・・。・・・いいよ」

「ほ、本当に・・・？」

「ああ。俺も少し買うものがあるからな」

「そっか・・・。じゃあ、約束ね」

「ああ。約束だ」

と、二人は約束を交わすのだった・・・

その頃・・・グラウンドでは・・・

「はぁ・・・はぁ・・・き、きつい・・・」

鈴はISを装着して、PIC無し、しかも補助動力無しで結構重いISアーマーを動かしてグラウンドを走っていた。

ガシヨン、ガシヨンと金属音を鳴らして、もう八週目に入った・・・

「どうした・・・。それでバテては情けないぞ」

と、同じくISを装着したラウラがスタート地点で立っていた。

ラウラは昔こういうことは日常茶飯事なことなので、もう既に走り終えていた。

「あ、あんたねえ．．．なんで邪魔したのよ．．．」

「当然だ。隊長をお守りするのは私の役目だ」

「．．．くう．．．」

それでもって、鈴はそのまま走り続けた．．．。

「．．．．．．．．」

ラウラは考えていた．．．

（．．．あんなんで．．．許してもらえないわけが．．．ない、か）

ラウラはあの時罪滅ぼしの感じでレイを守ったが、それで許してもらえないわけではない。

（．．．強くなっても．．．私に本当の強さは．．．ない．．．）

力こそがすべてだったときと比べると、確かに自身の強さは上がっている．．．。だが、それでもレイには敵わない．．．。

（．．．でも．．．力を求めても．．．）

ラウラはレイの言葉を思い出す．．．

『力を求める者の果ては・・・破滅だ』

その言葉は最初どうでもよかった・・・だが・・・

(・・・あんな・・・醜い姿になってまで、力を・・・求めない・・・)
VTシステムで暴走を起こし、醜い姿となって力を得た・・・。だが、それはだたの欲望に過ぎない・・・力でもなんでもない・・・

(・・・どうすれば・・・教官のように・・・隊長のように・・・強くなれるのか・・・)

誰かを守りたい・・・それが織斑先生の強さ、そして一夏の強さ・・・そしてレイの強さ・・・。

(・・・シュヴァルツェア・レーゲン・・・。私の戦友^{とも}よ・・・。
どうすればいい・・・)

ラウラは心の中で、パートナーに問いかける・・・

ISには意思はある・・・。だが、それは会話ができるぐらいはない・・・

(・・・お前も・・・わからないか・・・)

しかし、今のラウラには・・・声が聞こえたのかもしれない・・・

「・・・!!」

ラウラはとっさに後ろを向く。

しかし、そこには何もなかった・・・

(・・・気のせいか・・・)

ラウラはそのまま前を向く・・・。

(・・・しかし・・・。さっき金属がかすれる音がしたような・・・)

ラウラはしばらく考える・・・

しかし、本当にラウラの後ろには、誰かがいた。

しかし、姿は見えない・・・。ステルスによって・・・

『・・・この女・・・私の器に相応しい・・・だが、まだ時ではない・・・』

そして、その者は音を立てることなく飛び去っていった・・・

Story36 嫉妬（後書き）

・・・だいぶフラグが立ってきましたね・・・。
ちなみに、ナインボール・Pの『P』は、プロトタイプのことです。

Story37 古き鉄の巨人

翌日・・・

「悪いなシャル・・・。テストに付き合ってくれて」

「いいんだよ。僕もリヴァイブの調整を行いたいからね」

レイとシャルは放課後の第四アリーナにいた。

テスト内容は、キャノンボール・ファストに向けての調整だ。

レイはレースで使用するナハトに装備と調整を行っていた。

ナハトは背中にフレキシブル・スラストと、両肩にテスラウイングを装備したものに、新たに脚部にファントムが装備する追加ブースターを装着していた。

レイのIS三機の装備は専用のものでなければ、共有できるようになっている。

一方、シャルはリヴァイブを展開していたが、まだ増設ブースターは装備していないノーマルの状態だ。

「でも、本当に大丈夫なの？前よりブースターの数が多いと問題が起こりそうなの・・・」

「大丈夫だ。今じゃ負担が起こるのは『瞬間加速』を掛けた時のみになったから」

「・・・へえ・・・。でもやっぱり問題は残るもんだね・・・」

「まあ、こいつは中々のじゃじゃ馬だからな・・・。だが、それがいいんだ」

「・・・？どういうこと？」

「・・・つまり、俺好みなんだ。ナハトの性能は」

「・・・へえ・・・。『一撃に掛ける戦法』・・・レイにしては以外だね・・・」

「まあな。・・・でもシャルもその戦法は似合うと思うぞ？」

「そうかな？・・・あつ・・・もしかしてとっつき繋がりで？」

「・・・まあ・・・そうかな・・・」

「・・・・・・」

うつ・・・。嫌な沈黙だ・・・。

「・・・でも・・・。なんだか悪くないな・・・」

「え・・・？」

「最近ね、戦法を変えようと思っているの・・・。だから、この際に変えてみようかな」

「・・・そうなのか？」

「うん・・・。でも、リヴァイブの推進力じゃ、アルト並みの突進力は得られないんだよね」

「・・・そっか・・・。俺のは特注品に近かったな・・・」

アルトアイゼンは例の『あの人』が作ったワンオフ機ですからねえ・・・。

「増設ブースターをつけても突進能力はいまいちなんだよね・・・。リヴァイブは第二世代だから・・・。これが限界なんだろうね・・・」

「・・・そうだよな・・・」

「うーん」とレイは悩む・・・。

「・・・」

すると、レイは上を見上げる。

「どうしたの？」

シャルは不思議そうに訊く。

「……悪い……。テストは中止だ」

「え……?」

理解できなかったシャルをおいて、レイは左腕の五連チェーンガンを上に向けると、アリーナの上に向け放つ。

シャルはとっさに後ろを向くと、弾丸が何もないところで弾かれた。

「……!?!? あそこに何かいる!?!」

そして、その景色が歪む……。

「ビンゴだな……。さっきから妙な気配があったんだ……」

「気配って……。姿形も見えないのに……」

レイの勘はISのハイパーセンサー以上に鋭いと、シャルは思った。

「さあ、出て来い!」

そして、姿を消していたものが姿を現す。

「なっ!?!」

レイはその姿を見て驚いた。

なぜならば、そこにいたのは自身のISと酷似したISがいたのだ。

いくつかの形状と色は違うが、その姿形は、間違いなくアルトアイゼンだった・・・。

それは、はぐれISこと『アルトアイゼン・リーゼ』だった。

「アルト!?!」

シャルも驚いているようだ。

『・・・・・・・・』

リーゼはしばらくすると、ISアリーナ内に下りてきた。

「ど、どうということ・・・あれ!?!」

「お、俺にもわからん・・・」

状況を把握し切れてない二人をおき、リーゼはゆっくりと近付いてくる。

「くっ・・・・・・・・」

レイはとっさに臨戦体勢に入る。

「何者だ・・・・・・・・」

『・・・・・・・・』

レイはリーゼに問いかけるが、返事はない。

（・・・どういうことだ・・・。なぜナハトと似ているんだ・・・）

『・・・ナハト・・・。我が兄弟よ・・・』

「・・・!？」

すると、リーゼから声が発信される。

機械的な声だが、どこことなく意思を感じる・・・

（・・・兄弟・・・？やはり同じ・・・いや、それより・・・）

「レイ・・・」

「どうした？」

「・・・あのISって・・・。人が乗っているのかな・・・？」

「なに・・・？」

「なんだか・・・そんな感じがする・・・」

「・・・まさか・・・」

レイはとっさにナハトのセンサーでリーゼをスキャンする・・・

「・・・これは・・・!？」

「前方のISに操縦者無し。無人機と断定」

「無人機・・・なのか・・・」

「え!？・・・でも、さっきの声は・・・」

シャルは無人機だとわかると、それよりも驚くことがわかった。

「・・・まさか・・・。いや、そんなはずは・・・」

レイは目の前のISはどんなものか予想はついた・・・が、ありえないことだ・・・

「・・・何かわかったの・・・？」

「・・・自分の意思があるのか・・・あいつに・・・」

「自分の・・・意思？」

ISには確かに意思は存在する・・・。だが、ここまではっきりと意思があると言うことは、通常ならありえないことだ。

『そうだ・・・』

「!？」

再びリーゼが喋りだす。

『我は意思を持つ・・・。それ故、さまよい続ける無の鎧・・・』

「さまよい続ける・・・鎧・・・」

『そして、何にも属さない・・・故に・・・我は何でもない・・・』

「・・・そのお前がここに来た目的はなんだ・・・？」

『・・・我は・・・『器』を探している・・・』

「器？・・・どういことだ」

『・・・すなわち・・・私のパートナーを・・・探している・・・』

「パートナー・・・だと・・・？」

『・・・そうだ・・・。そして・・・その女・・・』

と、リーゼはシャルに指差す。

「ぼ、僕・・・？」

『そうだ・・・。お前が・・・私の器に等しいものか・・・それを確かめるべく・・・我と戦え・・・！』

と、リーゼは臨戦態勢を取る。

「なに・・・？シャルと戦うだと・・・？」

レイは一歩前出る。

『ナハトよ・・・。この戦いに入ることにはできない・・・手出しは無用だ』

「・・・くっ・・・」

すると、シャルはナハトの前に出る。

「シャル・・・？」

「レイ・・・。ここは僕に任せて」

「だ、だが・・・」

「相手の目的が僕と戦うのみなら、回りの被害は出ないと思う」

「・・・しかし・・・」

「大丈夫・・・。少し異なる箇所はあるけど、ナハトとの戦いを応用すれば、何とかいけると思う。・・・だから、心配しないで」

「・・・シャル・・・」

レイはゆっくりと後ろに下がる。

「シャル・・・。分かっていると思うが、機体の形状からナハトとは同じコンセプトと思われる・・・。だから普通での実弾攻撃はほとんど効かない・・・。だから関節部を集中的に狙えば、ダメージを与えられる」

「分かった・・・」

「それと・・・。。。。無理をするなよ」

「・・・ありがとう・・・」

シャルはレイのほうを一旦向いて、再びリーゼに向き直る。

『・・・では、始めるぞ・・・』

と、リーゼはフレキシブル・スラスターを展開すると、シャルに向かって来た。

「くっ！」

シャルはとっさに横に飛ぶと、アサルトライフルとアサルトカノン《ガラム》を展開してリーゼに向け放つ。

反転している途中のリーゼに弾丸は命中するも、火花を散らして弾かれる。

「・・・硬い・・・。だけど・・・！」

シャルは距離を保ちながらリーゼの周りを飛びながら攻撃する。

リーゼも弾を回避するが、シャルの正確な射撃でほとんど命中している。

しかし、弾丸は弾かれるだけで、ダメージは皆無だろう。

（やっぱりこの武器じゃダメージは薄い・・・。なら・・・！）

シャルは武器を収納すると、ショットガンを両手に展開する。

同時にリーゼは左腕の五連チェーングンでシャルに向け攻撃する。

「くっ！」

シャルは攻撃を回避しながら、リーゼに接近する。

（右腕の武器はナハトと同じ武器……。その威力も絶大だろうね……。でも、当たらなければ！）

そして、シャルはリーゼの目の前に来た。

すると、リーゼは右腕のバンカーをシャルに突っ込ませる。

「ここだっ！」

シャルは直前でバンカーを避けると、シャットガンをリーゼの顔面と胸部に突きつける。

「いくら硬いっていても、この至近距離なら！」

そして、シャルは至近距離でショットガンを放つ。

それによってリーゼに衝撃が走り、そのまま後ろに数歩下がる。

『……………』

リーゼは撃たれた箇所が痛むようなしぐさを見せる。

（さすがに効いたみたいだね……。なら！）

そして、シャルはショットガンを構えて、リーゼに向かっていく。

『・・・・・・・・』

すると、リーゼは両肩のテスラウイングを展開して、さっきまでの機動力とはまるで違う速さでシャルの後ろに回りこむ。

「え・・・・・・・・？」

シャルはその速さに一瞬反応が遅れる。

（・・・・・・・・しまっ・・・・・・・・！？）

シャルはハツとしてすぐに振り向くが、既にリーゼはバンカーを構え、シャルに突き出した。

「っ！？」

そして、シャルの腹部にバンカーの杭が叩きつけられ、一発叩き込まれた。

「ぐはっ！？」

絶対防御でも相殺しきれなかった衝撃がシャルの身体に走り、シャルは後ろに飛ばされた。

（ぐっ・・・・・・・・。な、なんて威力なの・・・・・・・・。シールドエネルギーが四分の一持って行かれた・・・）

シャルは叩き込まれた腹を抑えながら、立ち上がる。

（・・・確かにダメージは与えることはできたけど・・・あれじゃ倒すのに程遠い・・・。やっぱり・・・）

と、シャルはリヴァイブの左腕を見る。

リヴァイブ最強の武器・・・『グレー・スケール』

リーゼやナハトの武器と同じものだが、グレー・スケールの杭は他の二つより口径が小さい・・・。だが、威力が高いことに変わりはない。

（・・・やるしかない・・・）

シャルはショットガンを握り直すと、リーゼに向かっていく。

リーゼは左腕の五連チェーングンでシャルに攻撃を掛けるが、さほど命中率はいいわけではないので、シャルが弾を回避するのは簡単だった。

シャルはショットガンを至近距離で放つと、とっさに後方に下がる、ヒットアンドウェイの戦法を取って、リーゼにダメージを与えていく。

「くっ・・・」

しかし、しばらくするとショットガンの弾が切れた。

シャルはショットガンを収納した。

（・・・もう・・・これしか残っていない・・・）

シャルに残された手は・・・グレー・スケールのみ。

（確実に当てないと・・・と、なると・・・）

シャルは頭をフル回転させて、戦法を素早く考える。

（・・・危険な掛けになるね・・・でも、分の悪い賭けは嫌いじゃない・・・）

そして、シャルはサブマシンガンを右手に展開して、リーゼに向かっていく。

リーゼはシャルに向かっていくと、バンカーを構えて、シャルに突き出した。

「ここだっ！」

すると、シャルはサブマシンガンをリーゼに投げつけて、バンカーの杭に突き刺さると爆発して、煙が目の前を遮る。

「でりゃああっ！」

そして、シャルは右手にナイフを展開して、リーゼに切りつける。

だが・・・リーゼは角にプラズマを纏わせた。

「えっ!？」

そして、リーゼはシャルのナイフをプラズマを纏わせた頭部の角で防いだ。

（しまった……。ナハトと同じタイプならこんな武器があってもおかしくない……）

シャルは判断ミスに気付き、額から冷や汗が出る。

そして、リーゼは角でシャルを弾くと、バンカーをシャルに向け突進してくる。

「くっ!？」

シャルはとっさに身体をずらして避け、バンカーの杭はリヴァイブの背部スラストーをかすり、そのままリーゼはシャルを通り過ぎる。

「今だ!」

シャルはチャンス逃さなまいと、身体を捻って方向転換し、そこから『瞬間加速』をかけると同時に左腕のシールドをパージし、グレイ・スケールを出した。

「撃ち貫けええっ!」

そして、振り向いた直後のリーゼの腹部に、グレイ・スケールの杭を叩きつけた。

『……!？』

その直後に、連続でグレー・スケール六発全部を叩き込んだ。

これにはさすがにリーゼもダメージは無視できず、後ろに下がる。

「やった！」

シャルは確実に手応えを感じた。

『・・・・・・』

だが、それもつかの間だった・・・

「・・・！？」

すると、こんな短距離でリーゼは一瞬『瞬間加速』をかけ、シャルの懷に一瞬で入り込む。

そして、シャルの腹部にバンカーを叩きつけた。

「っ！？」

バンカーから四発叩き込まれ、シャルは直後に腹部に激痛が走り、そのまま後ろに吹き飛ばされる。

「ぐっ！？」

そして、シャルはアリーナの壁に叩きつけられ、一瞬息が詰まる。

「うっ・・・・」

シャルはそのまま地面に座り込む。

『・・・・・・・・』

リーゼは何にもなかったかのようにしており、そのままシャルに近づいていく。

腹部には確かにグレー・スケールの杭の後があったが、その傷は浅かった。

(・・・・・・・・やっぱり・・・・・・・・)

シャルは一瞬で理解した・・・。

あの時本来ならリーゼの装甲でも貫けるはずだった・・・。だが、あの時後一押しが足りなかった・・・。その原因は・・・。

(あの時の・・・・・・・・攻撃で・・・・・・・・)

あの時バンカーの杭がスラスターをかすれたが、その時にスラスターの伝達系統が一部やられ、推進力が下がってしまい、突進力が不足していたのだ。

(・・・・・・・・やっぱり・・・・・・・・リヴァイブの推進力じゃ・・・・・・・・後一押しが足りない・・・・・・・・)

そう考えているうちに、リーゼは目の前まで来ていた。

『・・・・・・・・』

その無機質な目はシャルをじっと見ていた。

（・・・もう・・・打つ手がない・・・）

グレー・スケールは弾切れになり、残っている武器ではリーゼにダメージを与えることはできない。

『・・・・・・・・・・』

そして、リーゼの手がシャルに伸びる。

「・・・・・・・・・・」

シャルはとっさに目を閉じる。

しかし、リーゼの手はリヴァイブの肩に触れた。

「・・・・・・・・・・？」

シャルはゆっくりと目を開ける。

すると、リーゼの手の中が光り出した。

「・・・な、なにを・・・」

『・・・・・・・・・・』

シャルの問いにリーゼは答えなかった。

しばらくして、リーゼの手の中の光が消えて、リーゼは手を離す。

『・・・いずれ・・・分かる 때가来る・・・』

「え・・・？」

直後、リーゼは真上に『瞬間加速』をかけて飛び上がり、天井の遮断シールドを残ったバンカーの一発で撃ち抜き、シールドを破壊した後に上空に出て、どこかに飛び去った・・・。

「・・・一体・・・なにを・・・」

シャルは何とか立ち上がるも、腹部から痛みが走る。

「うつ・・・」

その痛みにシャルは倒れそうになる。

しかし、シャルは近付いてきたレイによって支えられ、倒れずに済んだ。

「大丈夫かシャル？」

レイはナハトのマスクを外した状態でシャルに問いかける。

「・・・う、うん・・・。大丈夫・・・。まだ少し痛みはあるけど・・・」

シャルは大丈夫だと言うことをレイに伝える。

「よかった・・・」

レイは安堵した。

『・・・ラングレン君！デュノアさん！大丈夫ですか！？』

と、アリーナの放送室から山田先生が声をかけてきた。

『あ、はい！大丈夫です！』

レイはシャルをいったん離すと、山田先生に大丈夫だと伝えるために手を振る。

「————以上です」

しばらくして、レイとシャルは織斑先生と山田先生から事情聴取を受けていた。

「・・・そうか・・・。しかし、よくあの状況で戦おうと思ったな・
」

「・・・相手の要求が私と戦うことですから、要求を聞けば余計な被害を出さずに済むかと思いましたから」

「・・・お前もそれを了承したのか」

「・・・はい。最初は反対しましたが・・・相手を挑発して余計な被害を出すわけにいかないと思ひまして、シャルの案に賛成しました」

「・・・そうか・・・。とりあえずこのくらいにしておこう。では、解散」

と、織斑先生は手を叩いて、解散となった・・・

その頃・・・

「・・・どういふことだ・・・？」

ロイはモニターのある点に悩んでいた。

それは例の三機の点だが・・・問題は今いる場所だ。

「三機ともIS学園にいるってどういうことだ？」

『アルトアイゼン・リーゼ』『ヴァイスリッター・ツヴァイ』『ゲシュペンストMK-?・パワード』はIS学園内にステルスを展開して潜伏している。

（・・・あいつらの考えはわからんな・・・それとも、器を見つけたのか？）

ロイは「うーん」と唸る・・・

（IS学園といえば、近々『キャノンボール・ファスト』が開催されるはずだったな・・・それに伴ってやつらが攻めてくる可能性も否定できんな・・・）

ロイは身体を上げると、首に掛けているメダルがチャリン、と鳴る。

（やつらが攻めてくるのなら・・・かえってちょうどいいかもしれない・・・。ちょうど黒騎士もバージョンアップを終えた後だからな・・・）

と、ロイは首に掛けているメダルを手にする。

黒と白銀の二枚のメダル・・・。それが『黒騎士』の待機状態だ。

（『黒騎士MK-?』・・・『黒騎士 R^{リベア}』を改修して、第三世代型ISと同等の機能を得たIS・・・。我ながらいい出来だ）

と、ロイは自画自賛の感じで黒騎士を評価する。

（・・・久しぶりに店に行くか・・・情報収集を兼ねて・・・）

ロイはそのまま準備をする・・・

Story37 古き鉄の巨人（後書き）

ここまで来るとさすがに今後の展開が分かるはず・・・。

本当ならアルトアイゼン・ナハトVSアルトアイゼン・リーゼの対決も書こうと思ったのですが、今回は見送りにしました・・・。

それと・・・未だに投票なし・・・。しかも感想がまた減っている・

Story38 第二の黒き亡霊

「やべえ！遅れる！」

と、レイは慌てた様子で街中を走っていた。

今日はシャルと約束をしていた日で、今日に限ってレイは時間に遅れそうになっていた。

しかも……

「待てやゴラ！このガキッ！」

と、強面のお兄さんたちから追われていた……

（よりによって面倒なことになった！）

レイは走っている途中でぶつかっており、追われているのもそれが原因……

（今はそんな暇はねえんだよ！）

まあそんな感じでレイは待ち合わせ場所の駅前まで走っていく……

(うーん……。前髪変じゃないかな……。?)

と、シャルはこれで十二回目となる前髪チェックに入る。

約束の時間より二十分近く早く来ており、結構待っていた。

(……。いまいち決まらないなあ……。)

シャルは「うーん」と唸る。

(……。やっぱり早く来すぎたなあ……。これじゃ結構待っていないな
いといけないなあ)

「はあ……。」とシャルはため息をつく。

そして数分経ち、シャルはそわそわし始めた。

(……。そろそろだね……。?……。レイが遅れるのかな……。)

と、シャルは腕時計を見て、時間を確認する。

時間帯から駅前では人も多くなってきた……。。

「ねえねえ、カノージョ♪」

「今日ヒマ?どこかに行こうよ」

と、見るからに『遊び人』と言った感じの男性二人にシャルは絡まれた。

「約束がありますから」

シャルはさらりと受け流す。

「えー？ いーじゃん いーじゃん。俺たちとどこかに行こうぜ」

「俺の車があるそこに停めてあるからさ・フランス車の馬力全開の車だぜ」

と、フランスの言葉にシャルがぴく、と反応する。

「日本の公道で燃費が悪いフランス車ねえ……。ふーん」

と、拒絶100パーセントを表して、男性は少したじろぐ。

（あーあ……。やんなっちゃうなあ……。）

と、シャルは横に振り向くと、男性二人は『脈あり』と感じて、シャルの肩に手を置こうとした。

「いででででっ!？」

しかし、触れられる直前でシャルはかわして、男性の腕をねじ上げる。

「触らないでもらえます?・・・そのきつい香水が移ると困りますの

で」

「な、なっ!？」

「おい! 離し——」

と、もう片方の男性がシャルに殴りかかろうとした、その瞬間・・・

「ぶっ!？」

横から大きい体格の男性が飛んできて、男性は吹き飛ばされた・・・

「へ・・・?」

シャルは一瞬理解できなかったが、男性が飛んできたほうを向くと、そこでは・・・

「俺の連れに・・・なにしてんだ!」

と、数人いる男性を倒していたレイの姿を目撃した。

どうもレイは面倒と思い、追ってきた強面のお兄さんたちを返り討ちにして、人混みの間からシャルが絡まれているところを目撃して、締め上げていた男を背負い投げの要領で投げ飛ばした・・・と言う感じだ。

「レイ・・・!」

シャルはレイを呼ぶ反動で、男性の腕を更に引っ張ってしまい、男性の腕からポキッと脱臼する音が響く。

「ぎやあああつ!？」

そして駅前で男性の悲鳴が響くのだった……

「いやぁ……。ありがとうね……。この暴力団には手こずっていったんだよ……。ようやくお縄を頂戴できたよ……」

と、中年男性の警察官がレイを追っていた男性陣とシャルを勧誘していた二人の男性を警察署に連行した。

その様子をレイとシャルは見ていた。

「すまんなシャル……。ちょっと面倒なことになっていたからさ……」

「いいんだよ……。それに……。助けてくれてありがとう」

「当たり前だろ？」

と、レイは微笑む。

(……。本当に……。かつこいい……)

シャルのその姿に見とれる。

「それで、シャル」

「うわい!？」

シャルは見とれていたのとつさに返事をしたため噛んでしまった。

「ど、どうしたんだ……。そんな声出して……」

「あ、い、いや。なんでもないよ!？」

「……そっか……。ならいいんだが」

「ど、ところで、なに？」

「ああ……。最初どこに行くんだ？」

「あ、う、うん……。駅前のショッピングモールを回ろうよ。それから一夏の誕生日プレゼントを買おうよ」

「そうだな。じゃあ行くか」

と、レイはショッピングモールに向かって歩き出し、シャルはその隣を歩く。

「あ、あの……。レイ」

「ん? どうした？」

「そ、その……。手を繋いでもいいかな?」

「・・・あ、ああ・・・」

と、レイはシャルの手を握る。

そうして、二人はショッピングモールを歩く・・・。

その頃・・・IS学園では・・・

「くっ！」

「そこです！」

第三アリーナでは、セシリアと神夜が模擬戦を行っていた。

セシリアはブルー・ティアーズに高機動強襲パッケージ『ストライクガンナー』を装備した状態で、神夜と戦闘を行っていた。

一方の神夜の斬月には、新装備が施されていた。

斬月の背中に追加ブースターに上下に開く二つの翼があり、両方で計四枚あり、後ろ腰には薄いアーマー型のスラスターを装備していた。

斬月が作られた研究所から送られた斬月の高機動パッケージ『飛翔^{ひしょう}迅雷^{じんらい}』である。

セシリアの大型B Tレーザーライフルから放たれたビームを神夜は斬冠刀で切り払い、そのまま『瞬間加速』を掛けてセシリアに接近する。

「はあああ！」

「!？」

そして、神夜の一撃がセシリアに決まった・・・

「はあ・・・はあ・・・さ、さすがですわ・・・」

セシリアはI Sを解除すると、手を膝に置いて息を整える。

「それほどないですよ・・・でもセシリアさんの射撃の腕は凄いですよ」

神夜もI Sを解除してセシリアに言う。

「・・・射撃の腕・・・ですか・・・」

と、セシリアの表情は曇り、神夜もそれに気付いた。

「あ、すみません……。悪いことを言って……」

「あ、い、いいんです……。別に」

「そ、そうですか……」

「今日はありがとうございました。訓練に付き合ってください」

「これくらいいいですよ。私もこの装備のテストを行いたかったで
ありますから」

そして、二人は話しながらアリーナのピットに戻る……

「はぁ……。しかし……中々みつからないもんだな……」

「そ、そうだね……」

と、レイとシャルはベンチに座って休憩していた。

あれからいくつか店を回るも、中々プレゼントにぴったりなものが
見つからない……

「……………」

すると、シャルはブルつと震える・・・。

今日はいつもより冷え込んでいるので、肌寒かった。

「大丈夫か？」

「だ、大丈夫だよ・・・。このくらい・・・。へ、へっくしゅっ！」

と、言っている内にくしゃみが出る。

「大丈夫じゃないだろ」

「う、うん・・・。今日は少し肌寒いからかな」

「そうだろうな・・・。今日はいつもより冷え込んでいるからな」

と、レイは辺りを見回す。

「この辺りになにかないかな・・・。」

しばらく見回すと・・・。

「・・・おっ・・・」

レイはある店を見つける・・・。

「あの喫茶店に行くか？」

「喫茶店？」

シャルはレイが指す方を見ると、そこにはクラシックな喫茶店があった。

「へえ……。結構クラシックな喫茶店だね」

「そうだな……。俺はああいうクラシックなところが好きなんだ」

「へえ……。そうなんだ」

「じゃあ行ってみるか」

「うん」

二人はベンチから立ち上がると、その喫茶店に向かって歩き出す。

そして二人は喫茶店前まで来た。

「開いているみたいだな。じゃあ入るか」

と、レイは扉を開けて、シャルもその後をついていく。

中に入ると、店内はクラシック調な内装で、テーブルがいくつか並べてあり、その奥にバーがあった。

「へえ……。やっぱりいいな……。こういう感じ」

と、レイは店内を見回す。

「・・・ええ・・・と、店の人は・・・」

と、シャルが店員を探していると・・・

「いらっしやい」

と、店の奥から店の人が出てきた。

格好から、この店のマスターと思えるもので、この店の店長だろう。

赤っぽい茶色の髪をして、左目に眼帯を付けていた男性だった。

その人物は・・・意外にもロイだった・・・

「お客は二人かい？」

「あ、はい。そうです」

「では、こちらに」

と、ロイがバーの席を勧めて、レイとシャルはその席に座る。

「メニューとがありますか？」

「こちらに」

ロイは二人が座る席の左側にあったメニューが書かれたスタンドを持って、シャルに渡す。

「・・・ええと・・・レイはどうするの？」

「・・・うーん・・・。こうも多いと悩むなあ・・・」

温かいメニューを頼もうとするが、メニューの数は結構多かった・・・。

「・・・コーヒーにする？」

「そうだな・・・。でも一番多いな・・・。何を頼もうか・・・」

「うーん・・・。そうだねえ・・・」

ここは温かいコーヒーを頼もうとするが、コーヒーが一番多かった。

「・・・じゃあ、お勧めでいいかな？」

「・・・それがいいな・・・」

「すみません・・・」

「何でしょうか？」

「ここのお勧めのコーヒーってありますか？」

「ええ。ございます」

「じゃあ、それを二つお願いします」

「かしこまりました。ではしばらくお待ちください」

と、ロイは奥のキッチンにある箱からコーヒー豆をすくって、豆を隣にある機械の中に入れて豆を砕き、そして中でお湯を注いでコーヒーを作り、カップに注ぐ。

しばらくしてカップ二つにコーヒーを入れ終わった。

「お待たせいたしました」

と、ロイは丁寧な手つきでコーヒーが入ったカップを二人の目の前に置く。

「ありがとうございます」

と、シャルはお礼を言って、コーヒーを一口飲む。

それに続いてレイも一口飲む。

「お、おいしい・・・」

「ああ・・・これは・・・うまい」

コーヒーのおいしさに二人は少し驚く。

程よい苦味が口の中に広がり、それもしつこさはなく、あっさりともしている。

「このコーヒーっておいしいですね」

「ああ。私がブレンドした特製のコーヒーです・・・」

「へえ……。こんなにブレンドが合うコーヒーがあるんだな……」

と、レイは一口飲む。

「気に入ってもらえてよかった……」

ロイはコップを取ると、布巾で磨き始めた。

「……。君たち……。IS学園の生徒かい？」

「え……。？は、はい……。そうですけど……」

シャルは不思議そうにした。

「やっぱりな……」

「何でわかったんですか？」

レイは怪訝けげんそうに訊く。

「……。勘だよ」

と、ロイは笑みを浮かべる。

「勘で……。凄い……。でも、どうしてレイがその生徒だっ
思ったのですか？ ISっていえば……」

「女性にしか反応しない……。でも、最近世界で始めてISを動
かした男子が現れたって言うニュースがあったからな……。っ

いっても、君の左腕の腕輪がISの待機状態だろ？」

と、ロイはレイの左腕にあるISの待機状態の腕輪を指す。

「えっ!?!?・・・わかるんですか!?!?」

以外にも当てられて、レイは驚く。

「なんとなく・・・だな・・・。ちなみに、君の首に掛けてあるネットレスもISの待機状態だな」

「え!?!?・・・それもわかるって・・・」

「まあ、私は少しISに詳しいほうですから・・・」

「そ、そうですか・・・」

二人はIS学園の生徒で、しかも専用機持ちだと言うことも見破られて、啞然とする。

「そういえば、近々IS学園じゃ、『キャノンボール・ファスト』があるらしいな」

「え・・・?は、はい・・・そうです・・・」

「まあ一年も参加するかはわからないが、もし参加するのならば、頑張ってくださいね」

「は、はい・・・頑張ります」

「それでいい・・・」

と、ロイは二人が飲み終えたカップを下げると、炊事場に置いた。

「・・・それじゃあ・・・いくらですか？」

と、二人は財布を取り出してお金を取ろうとした。

「いや、今回お金はいいよ」

「え・・・？で、でも・・・」

「私からの奢りです・・・」

「は、はあ・・・」

「でも、次来る時は、お金を払ってもらいますよ。こちらも商売ですから」

「・・・そうですね・・・では、また来ます」

と、レイとシャルは頭を下げてあいさつして、店を出た・・・

「・・・」

ロイは二人が店を出てしばらくして、カップを洗い出した。

(・・・大きくなったな・・・レイ・・・)

正直のところ、レイがこの店に来るのは予想外だった。

ロイは店の奥で店入り口の監視カメラを見てみると、レイが入ってきたのに驚いた。

(・・・しかし・・・)

と、ロイは「くつくつく・・・」と静かに笑う。

(・・・親子って・・・経歴まで似るもんなのか?・・・。俺もこの時期ぐらいでリイルと出会って、よく町に遊びに行ったもんだ・・・)

と、ロイは昔のことを思い出すのだった・・・

「うわぁ・・・。あのコーヒーを飲んでから、身体がポツカポツカしている・・・」

「そうだな・・・。さっきまでの肌寒さがうそのようだ」

レイとシャルは再びショッピングモールを歩いていた。

「・・・・・・・・・・」

すると、レイは何か考えていた。

「・・・どうしたの？」

「あ、いや・・・。どうもあの人が気になるんだよね・・・」

「どうして？」

「・・・なんていうか・・・。どうも初めて会った気がしないんだ・・・」

「そうなの？」

「ああ・・・。なんだか・・・前にも会ったことがあるような気がするんだよね・・・。初めて会った人なのに・・・」

「ふーん・・・。不思議なことがあるんだね・・・」

「そうだな・・・」

レイは特に深く考えないことにした・・・

所戻って、IS学園……

「……………」

時間帯は夕方になり、ラウラは第二アリーナでISの訓練を行っていた。

ラウラは右肩のキャノンを構えて素早く動く仮想標的に狙いをつけていた。

「……そこだ！」

と、ラウラはキャノンを放ち、弾は標的をかすれた。

「ちっ……」

ラウラは再度狙いを付け直して、再び放つ。

今度は標的の隅を弾き飛ばしただけだった。

「くっ……」

ラウラはキャノンを上に上げて、一息吐く。

（……だめだ……。隊長ならこのくらい命中できる……。なのに……。私は……）

ラウラは頭をゆっくり下げる。

（・・・まだ未熟だ・・・。もっと、もっと強くならなければ・・・
・レイを守ることなんてできない・・・）

ラウラは再びキャノンを上げて、仮想標的に狙いを付ける。

「強くなる・・・。仲間を守るぐらいに・・・！」

と、ラウラは標的に向けキャノンを放つ。

だが、仮想標的に当たる直前で弾が弾かれた。

「!？」

ラウラは一瞬分からなかったが、すぐに理解した。

弾が弾かれたところの景色が歪み、そして何かが現れた。

「何者だ！」

ラウラは臨戦態勢に入る。

そして現れたのは・・・『ゲシュペンストMK-?・パスワード』だった。

『・・・その望み・・・叶えてやろう・・・』

と、MKー？・パスワードはラウラに問いかけた。

「な、なんだと・・・？」

『・・・だが・・・我を倒せば・・・だがな』

と、MKー？・パスワードは右手に大型のショットガンを展開して、左手にグレネードランチャーを展開した。

「くっ・・・」

ラウラは臨戦態勢から戦闘態勢に入った・・・

「・・・何とかプレゼントは決まったな」

「うん・・・。でも選ぶのに結構時間が掛かったね」

レイとシャルはようやくIS学園に帰ってきた。

「・・・これなら一夏も喜ぶだろうな」

「そうだね」

と、話していると・・・

ドオオン・・・・・・・・！

「!?」

レイはとっさに爆発音が聞こえた方に向いた。

「この方角にあるものといえば・・・・」

「第二アリーナ！」

「行こう！」

二人はとっさに爆発音がしたほうへ向かう。

「くっ！」

ラウラはキャノンをMK-?・パワードに向け放つが、すぐに回避して右手に持つ大型のショットガンでラウラに向け攻撃する。

「このくらい！」

ラウラはAICを起動させ、ショットガンの弾を止める。

「・・・・！」

しかし、ラウラは以前の失敗を思い出し、A I Cを解除して上に急上昇した。

その直後にパワーードは左手のグレネードランチャーを放ち、弾はさつきまでラウラがいたところに直撃して、爆発した。

「・・・あの女に・・・借りができたな・・・」

ラウラはプラズマ手刀を展開すると、パワーードに向かって『瞬間加速』を掛けて急接近した。

「はあああ！」

そしてラウラはプラズマ手刀をパワーードに向け突き出す。

だが、パワーードは左腕の三本の棒を前に出し、プラズマを纏わせて、プラズマ手刀を防いだ。

「ぐっ・・・」

直後、パワーードは右手の大型ショットガンを収納し、小型のグレネードランチャーを展開し、ラウラに突きつける。

「!!」

そして、グレネードランチャーを放った・・・

「一体何が・・・！」

レイはアリーナの観戦席に着いて、アリーナ内を見た。

「・・・！・・・ラウラ！」

レイはラウラが謎の敵と戦闘を行っているところを目撃する。

ラウラのISは右肩のキャノンを失っており、ワイヤーブレードとプラズマ手刀を使って戦闘を行っていたが、相手は豊富な武器で戦闘を行っているのでラウラは不利だ。

「くっ！」

レイはとっさに向かおうとするが、遮断シールドが展開されており、中に入れなかった。

「くっ・・・。どうすれば・・・。」

レイはしばらく考え・・・あることを思いつく。

「・・・やってみるか・・・」

「え？」

と、レイは左腕を前に出すと、ISを起動させた。

「来い！ナハト！」

そして、レイの周りに光が纏い、そしてナハトを身に纏う。

「やってやる・・・！」

そして、レイはそこから飛び出し、右腕のリボルビングブレイカーを遮断シールドに叩きつけ、そこから連続で五発叩き込むが、それだけでは遮断シールドは破壊できない。

「必殺フアンクション！」

「アタックフアンクション！スマッシュブレイカー！」

ブレイカーの弾倉が激しく回転し始め、そして弾倉が止まった瞬間にとてつもない衝撃が前方に叩きつけられ、遮断シールドを破壊した。

「ラウラから・・・離れろおおっ！！！」

そして、そのまま『瞬間加速』を掛け、ナハトは物凄い勢いで突進する。

「ぐっ・・・！」

それによって、相殺し切れなかったGがレイに襲い掛かる。

しかし、レイはそんなことに構わず、MK-？・パワードに体当たたりする。

『！？』

それによってMK-？・パワードは横に吹き飛ばされ、アリーナの

壁に叩きつけられた。

「ぐはっ……」

レイは少量の血を吐く。

「た、隊長……？」

ラウラはゆっくりと立ち上がり、レイの元に向かう。

「……だ、大丈夫か……ら、ラウラ……？」

「は、はい……大丈夫です」

「そ、そうか……。よ、よかった……」

レイはふらつきながらも、何とか立ち上がる。

そんな頃に、パワードは立ち上がり、武器を構える。

『……ナハト……。邪魔立ては無用だ！』

と、パワードは両手の武器をラウラに向け放つ。

だが、レイはとっさにラウラの前に立ち、左腕のシールドを前に出して、展開した。

「隊長……？」

そして、レイは攻撃を受け続けた。

「ぐっ・・・」

展開装甲で展開されたエネルギーフィールドで弾丸は弾かれるものも、衝撃だけは全て相殺できなかった。

しかし、弾丸は機体の目の前で弾かれるものだが、弾丸はナハトの装甲に弾かれていた。

『・・・硬いな・・・。ならば・・・！』

と、パワードは両手の武器を収納すると、ナハトに向かって突進する。

『パワープラスマステーク・・・セット』

パワードは両腕を構えると、三本の棒に膨大なプラズマが纏った。

『ぬうんっ！』

そして、パワードは右のステークをナハトのシールドに叩きつけると、先端から大きな衝撃が叩き込まれた。

「ぐっ!？」

レイはその衝撃で腕が上に上がってしまった。

『ジェット・パワーマグナム!』

そして、左のステークをナハトの腹部に叩きつけた。

「っ!？」

その直後に大きな衝撃が叩き込まれ、ナハトは後ろに飛ばされそうになるが、スラスターを噴射して踏ん張ったが、直後に膝を着いた。

「隊長！」

ラウラはすぐにレイの元に寄り、パスワードを睨みつける。

「……くっ……。貴様ああっ！」

ラウラは怒りを露にして、パスワードに向かっていき、ワイヤーブレードを一斉展開してパスワードに襲い掛かる。

『……メガ・プラズマスライス』

と、パスワードの腕にプラズマが纏い、ワイヤーブレードを全て切り裂いた。

「な、なにっ!？」

ラウラはまさかのことには驚く。

『……メガ・ブラスターキャノン』

その直後に、パスワードの胸部が開き、ラウラに向けビームを発射した。

「!！」

だが、ラウラにビームが直撃直前に、ナハトがラウラを庇った。

「ぐああああっ！」

ナハトの背後にビームが直撃し、レイの悲痛な叫びが響く。

「れ、レイっ！」

ラウラはどさくさにまぎれて、レイの名前を叫ぶ。

「ぐっ……」

ナハトの背中からは、煙が上がっていた……。

「な、なぜ煙が……？」

ラウラは理解できなかった。

ISはシールドエネルギーで守られている。なので、こんなことは起こるはずがない……

「ら、ラウラ……。だ、大丈夫か……？」

「……た、隊長……」

ラウラは半泣き状態だった……

すると、ゲシュペンストMK-？・パワーはそれ以上何もせず、そのまま飛び去っていった。

「くっ! あいつ．．．!」

「ラウラ．．．。もういい．．」

「し、しかし．．．」

「ラウラ!」

「．．．．!?!」

ラウラはキョトンとする．．．

「．．．．うつ．．．」

そして、レイは気を失って倒れた．．．。

Story38 第二の黒き亡霊（後書き）

ゲシュペンストMKー？・パスワードのイメージとしては、『ゲシュペンストMKー？ タイプSA改』の黒くなったのがイメージ。
・・・せめて一言だけでも書いていただければこちらとしてはうれしいのですが・・・

Story39 本当の思い

「うう……」

レイはしばらくして、目が覚めた……

「……………」

レイは辺りを見ると、そこは保健室であった。

「……うう……」

半身起き上がると、体中に痛みが走る。

身体には包帯が巻かれており、特に背中に集中して巻かれている。

「……やはり……無理があったか……」

レイは何でこうなったかは、使用する自分がよく知っている。

ナハトの最大の必殺技『スマッシュブレイカー』は絶大な威力を誇るがその代償にISのシールドエネルギーをブレイカー先端に一点集中させなければならないので、使用した後はシールドエネルギーを失ってしまうのだ。

なので、攻撃後は丸裸の状態になり、後はISの装甲のみで攻撃を

防ぐことになる。

それは、白式の『零落白夜』に似ているものだった。

そのため、あの時の攻撃はすべて装甲のみで受け止めていたので衝撃は全て身体に伝わり、そしてその衝撃と熱で身体に害が出たのだ。

「・・・・・・・・・・」

レイは辺りを見回すが、人影はない・・・

「・・・・・・・・もうこんな時間か・・・」

時計を見れば、時間は10時を過ぎたところだった・・・

レイはベッドから降りて立ち上がると、それによって身体の痛みが少し増した。

「うう・・・・。あいつの攻撃・・・・相当なものだな・・・・」

そして、レイは台に置いてあった上着を取って着ると保健室を出て、寮に向かう・・・・

それからしばらくして、レイは寮の自室がある階に着いた。

「うう・・・・。いてえな・・・・」

歩きたびに痛みが襲ってきて、レイの顔は引きつる。

そして部屋より少し離れたところで・・・

「あっ・・・」

「・・・た、隊長・・・」

部屋より少し離れたところに、ラウラが立っていた。

「どうしたんだ・・・？ラウラ」

「・・・そ、その・・・あなたを・・・待っていました」

「待っていたって・・・。俺が帰らなかったら、どうするんだ」

「・・・そ、それでも・・・待っています」

「・・・何か話したいようだな」

「は、はい・・・」

「まあいいや・・・。とりあえず入れよ」

と、レイはゆっくりと歩いて部屋の鍵を開けて部屋に入る。

それに続いてラウラも入っていく。

「とりあえず、ベッドに座っていてくれ」

「は、はい」

と、ラウラはゆっくりとベッドに腰掛ける。

「・・・・・・・・・・」

どうもラウラは落ち着かない感じだった。

レイは着替えるために上着を脱いだ。

「・・・・！」

ラウラはその背中を見てビクツとする。

「・・・・・・・・」

そして目を逸らす。

「さてと・・・・」

と、レイは着替え終わって、ラウラの目の前にベッドに腰掛ける。

「・・・・話って何だ？」

「そ、その・・・・今日は・・・・申し訳ございませんでした・・・・わ、私のせいで・・・・隊長に怪我を負わせて・・・・」

「・・・・別に謝らなくても・・・・」

「し、しかし・・・・私がつとしっかりしていれば・・・・」

「ラウラ」

「は、はい？」

「そうやって自分ばかり責めるな……。俺の判断でこの怪我を負ったんだ」

「……………」

「でも……お前が無事で何よりだな」

「……隊長は……自分がどうなってもいいのですか？」

ラウラは聞きにくそうに訊いてくる

「……………」

「では……どうして危険な真似ができるのですか……」

「……もし、自分の命を惜しんで、助けられた命を見捨てることになったら……俺は一生後悔する……」

「……………」

「そんなことになったら……と、思うから、命を掛けて戦える」

「……命を掛けて……」

「だから……俺は仲間を守りたいのさ。……俺にとっては……命より大切なものだ」

「……仲間……」

「ラウラも……あのときから変わったな……」

「……そうですか？」

「ああ……。最初は全然そんな感じじゃなかったが、俺が忠告してから、変わってきたな」

「……そう言ってもらえて……。嬉しいです」

「……だから、以前の強さと違って、お前は強くなったよ」

「……強く……。ですか……」

ラウラはしゅんとする。

「どうした？」

「……そう言ってもらえて……。私は嬉しいですけど……。でも……」

「でも……？」

「……私は……。強くない……。決して……。教官や……。一夏……。それと……。隊長には……」

「……そうでもないさ」

「え．．．？」

「ラウラは強いさ．．．。ずっと前から．．．」

「．．．ずっと前．．．？」

「．．．あの施設にいた頃から．．．お前は強かったさ」

「．．．隊長．．．もしかして覚えていたのですか？」

「ああ．．．。最初っからな」

「．．．．で、では、なぜ今まで言わなかったのですか．．．」

「．．．正直．．．再び会ったあの時の状態じゃ．．．お前は俺のことを覚えていないだろうと思ったからさ」

「．．．隊長．．．まさか．．．私が記憶を書き換えられていることを．．．分かって．．．？」

「．．．俺がああ施設から追放された後に恐らく俺に関する情報は全て消去するだろうと思っていた．．．だから、俺はあえて何も言わなかった．．．」

「．．．隊長．．．」

「ん？」

すると、ラウラは飛び出すとレイに抱きついた。

たぶん、レイの体に痛みが走っただろうな……。レイの顔が少し引きつった・・

「・・覚えてくれたんですね・・私の事を・・私・・てつきり・・」

と、ラウラはレイの胸の中で泣き、レイは優しくラウラの髪を撫でる。

「・・当たり前だろ・・。俺にとって・・お前は・・初めの友達だからさ」

「友達・・？」

「・・あの時の俺は・・一人だった。俺が有能だと言うことは誰もがわかっていた。でも・・俺の周りには・・誰もいなかった」

「・・・・・」

「・・・孤独感が毎日襲ったさ・・。もうどうでもいいと思った時もあった・・。でも、そんな時に・・君と出会ったんだ」

「・・・あの時・・」

「そう・・。君が動けなくなったところを俺が見つけて・・。助けたんだっただな」

「はい・・。あの時は・・ありがとうございました」

「いいんだよ……。当たり前のことをしただけさ……。それから……。たまに会うことになったんだっただな」

「……はい……。僅かの間でしただけ……。私にとっては……。その間が楽しかったです……」

「ああ……。俺もそんな時が……。一番楽しかった」

「……。隊長……」

「……。俺のことは……。もう普通に名前で呼んでもいいんだぞ」

二人は一旦顔を見つめた。

「……。し、しかし……」

「……。あの時……。どさくさにまぎれて名前で呼んだだろう」

「あ……」

「本当のところ……。名前で呼びたかったんだろ……」

「そ、それは……」

「俺を尊敬してくれるのはいい……。でも、そうして本当の気持ちを押さえ込んで、俺はあんまりいい気持ちはしないんだ」

「……。本当の……。気持ち……」

「……。素直になっただろうだ」

「・・・で、では・・・れ、レイ・・・」

「・・・それでいい」

「・・・レイ・・・」

「・・・ん？」

すると、ラウラの唇がレイの唇に触れた。

「っ!？」

レイは驚いたが、それからしばらくして、唇が離れた。

「・・・これが・・・私の気持ちです」

「・・・ラウラ・・・。・・・水を差すようで悪いが、お前には嫁がいるんじゃないか？」

「・・・それとこれは別です・・・」

「はぁ・・・つまり、俺はお前の『愛人』とでも言いたいのか？」

「・・・そうです」

「・・・お前・・・色々とずれているぞ・・・」

「よく言われますよ」

と、ラウラはいたずらな笑みを浮かべる。

「・・・はぁ・・・」

と、レイはこれで三度目のため息を吐いて、ラウラを優しく抱いて、髪を撫でる。

しかし、レイの顔は嫌と言うわけでもなく、満更でもないようだ・・・

その頃・・・

『————で、どうだ？ ナインボール・Pの性能は・・・』

「中々の出来ね・・・。あれなら完成品が期待できるわね」

と、寮の屋上でフィオナはレックスと連絡を取っていた。

『そうだろうな。なにせイノベーターの最新技術を惜しみなく使って開発したISだ』

「かもね……。それより、完成型はいつ来るの？」

『お前がPを送ったのが昨日だ。恐らくキャノンボール・ファスト当日に渡されるだろう』

「つまり……。私は競技には参加できないって事？」

『まあそういうな。その分完成型の出来は保障する』

「……。まあいいわ……。それで、襲撃もその当日に行うわけ？」

『ああ。新型を投入するほか、『例』の機体も投入する』

「……。『秒殺の皇帝』……。もういいの？」

『実戦データは十分に取り入れた。性能も従来のISを上回るだろう』

「……。そうね……。それと、例の件はどうなったの？」

『それもじきに終えるだろうな』

「そう……。もう遅いから……。じゃあ」

と、フィオナは電話を切る。

「……。さて……。どうなるのやら……」

フィオナは携帯をポケットに入れると、寮内に入ってしまった……

そんでもってそんな頃……

「……………」

ロイは研究所に戻っており、データの打ち込みをしていた。

（……やはりデータが不足しているな……。まあこっちは前例となるデータが不足しているからな。……だが、これが無いと……）

モニターにはファントム、アーベント、ナハトの図面が表示されていた。

それに何かを加えているような感じだが……

『ちやお♪』

と、いきなりモニターの端に、東が現れた。

「・・・東か・・・」

『おひさだね。ロイ』

「お前から通信を掛けてくるとは・・・珍しいこともあったもんだな」

『そうかな？ 私はいつでもこんな感じだよ』

「・・・まあそれはいいとして・・・何のようだ？」

『ふふ♪・・・幼馴染の困った時に私が何をしてやると思う？』

「・・・さあな」

『とうっ！』

と、東はモニター越しでスイッチを押す。

「・・・？」

すると、モニターに何かが送られた。

「・・・何だこれ？」

『私が送ったそのデータ・・・大いに役に立つでしょ？』

「まだ見てない」

と、ロイはそのデータを開いて見る。

「・・・これは!?!」

ロイはそのデータを見て驚く。

「束・・・。このデータを一体どこで!?!」

『ふふふ♪そこは天才科学者束さんだよ。そんなことは昼飯前の朝飯前だよ』

「・・・そんなんはどうでもいい」

『まあまあそんなに怒らないで・・・。白式を開発した研究所のコンピュータにハッキングして、わざわざ手に入れたんだよ?・・・白式の第二形態「雪羅」の試験データ』

「・・・第二形態・・・」

『それがあれば、君のISの第二形態のインストールデータを作成できと思うよ』

「・・・・・・・・束・・・お前ってやつは・・・」

多少呆れた感じだが、嫌みはない

『じゃあ、できることを祈っているよ。じゃあねえ♪』

と、通信が切れた。

「・・・・相変わらずだな・・・・。あいつ・・・」

ロイはそのデータを見る。

（第二形態に関するデータ・・・・。確かにこれがあれば・・・・『あいつら』のインストールデータができる・・・・）

そして、ロイは作業に取り掛かろうとした・・・

プルルル・・・・

「・・・・？」

すると、今度は携帯が鳴る。

ロイはポケットから携帯を取り出すと、相手を確認する。

「・・・ハーケンか・・・」

ロイは電話に出る。

「どうした？」

『ロイ！大変なことになった！』

「・・・・一体何が？」

『さっき掴んだ情報によれば・・・テスラ研から『アークゲイン』が奪取された』

「な、なんだと!？」

ロイは驚きを隠せなかった

「どういうことだ!？」

『どうやら以前の襲撃者はあくまで先行攻撃のようなもんだっらしい。その後にイノベーターの後続部隊が襲撃したようだ』

「・・・イノベーターが・・・」

『その当時テスラ研のISは調整中だったらしく、反撃ができなかったみたいだ』

「・・・つまり・・・先行攻撃は消耗を目的にしていた・・・考えたな」

『・・・アークゲインを奪った後、特に何もせずに立ち去ったようだ』

「あくまでアークゲインの奪取が目的、か・・・」

『どうする?』

「・・・ハーケンは調査をしてくれ。こっちも準備を済ませる」

『わかった』

そして電話が切れる。

「・・・イノベーターめ」

ロイは携帯を閉じると、ポケットに戻る。

（・・・ここを襲われるのも時間の問題か・・・）

ロイはすぐさま準備を進めるのであった・・・

Story 39 本当の思い（後書き）

・・・今言うのもなんですけど・・・以前に聞いたISの名前なんですけど・・・あれから急にいい名前が浮かんだので、それにすることをしました。

ちなみに名前は『シュヴァレツェア・ウインド』・・・。独語で『黒い風』を意味します・・・。

それと、今後登場させてほしい機体があったら、教えてください。参考にさせてもらい、もしいい案だったら採用としましょう。（ダンボール戦機の機体メインで）。

Story 40 消滅した者

「……本当に……それで大丈夫なの？」

「大丈夫だ。問題ない」

ここはIS学園の第六アリーナ……

レイは新しくISの調整を行うために、シャルとラウラと共にいた。

ナハトはあの時の戦闘でスラスターの一部が損傷して、キャノンボール・ファスト当日まで修理が終わらないらしい。

そのため、レイは急遽ISのパーツを流用してキャノンボール・ファスト仕様の装備を作ることになって、今回そのテストを行うのだった。

(……来い……ファントム)

レイは心の中でファントムを呼び、ISアーマーを展開した。

光が晴れると、ファントムの姿は若干異なっていた。

特に背面の装備は異なっており、ブースターの基部から別の装備に換装されており、そのブースターはナハトのブースターであった。損傷したのはナハトのフレキシブル・スラスターのスラスターとその基部となるブースターであり、ナハトのブースターは使えるが、

そのブースターではナハトは空中能力が下がってしまうので、ブースターはファントムに流用して、更にその両サイドにファントムの追加ブースターを装備した、かなりゴテゴテした装備になった。しかし、もともと想定しない装備なのでバランスが若干悪いが、ナハトと同等の推進力をファントムは得た。

「・・・かなり大掛かりな装備ですね・・・レイ」

「まあこの際仕方がないだろうな・・・」

と、レイは数歩前に出る。

「とりあえず、どんなものか見てくれないか？」

「分かった」

「了解です」

そして、レイは背面スラストを噴射させて、空に舞い上がる。

その勢いは確かにナハトと同等だが、バランスが安定しないのか機体はふらつく。

（・・・凄い・・・。推進力は確かにナハトと同等だけど・・・。やっぱりバランスはいいとはいえないね）

（それでも、レイは細かな調整で機体制御を行っている・・・。ま

だ怪我は完全に治っていないのに・・・)

二人はモニターに映るファントムの動きを見て、その評価をする。

(・・・でも・・・)

(しかし・・・)

チラッと二人はお互いを見る。

(・・・最近ラウラ・・・機嫌がいいみたいな気がする。それにレイを以前まで隊長って呼んでいたのに・・・最近じゃ普通に名前で呼んでる・・・。どうしてなのかな・・・?)

(・・・シャルロットもレイが好きなのうだが・・・。。いや・・・ライバルとして見るのではなくてな・・・うーん・・・)

二人は心の中で唸る・・・

『なあ二人とも』

「「ふえいつ!?!」」

いきなり呼ばれてシャルとラウラは息ピッタリに声が裏返って返事をしてしまう。

『な、な、何だよ・・・。そんな返事してさ・・・』

レイは少し引いたようだ。

「あつ、な、なんでもないよ!？」

「そ、そうです!？」

と、あわてて二人は何でないことを言い張る。

「・・・?なら、いいんだけど・・・。まあそれはともかくとして、どうだ、動きとしては？」

「う、うん・・・。ファントムのスピードは中々だと思うよ。機体の安定もよさそうだし」

「しかし、やっぱりバランスが若干悪い気がします」

『やっぱりそうだよな・・・。元々機体にあつた装備じゃないから、ほとんど無理矢理って感じかな・・・』

「確かに、そうだよね」

『それに追加ブースターは少し無理矢理くっつけた感じだから、あんまりマッチしていないのもそれがあるかも』

「・・・本当にそれで出場するの・・・レイ？」

『それしかないだろう。アーベントじゃ速すぎるし、ナハトは修理中だしな』

「しかし、もしミスを犯したら・・・レイは・・・」

『心配はないよ、ラウラ。若干バランスは悪いが、行けないわけじ

やない』

「・・・そういうものでしょうか」

ラウラはどうも不安のようだ。

『とりあえず、ある程度慣れれば大丈夫だ。後は妨害時の動きをするから、その際相手をよろしく』

「う、うん」

「分かりました」

そして、レイはそのまま動きに慣れるためにブースターの出力を上げた・・・

そしてしばらくして・・・

「・・・うう・・・」

レイは自室で唸っていた・・・

どうも訓練で傷がうずいたようだ・・・

痛みは特に背中と頭の傷から来ている。未だに包帯は取れていないので、付けたままだった。

「・・・こんなに痛みって残るもんなんだなあ・・・」

レイは痛みに堪えながら、パソコンをしていた。

（・・・なんていうか・・・どうもあれだな・・・）

内容はレイのISのデータだった。

（・・・どうにもあれから進展がないな・・・。武器も開放されていないし、機能も新しいのがあるわけでもない・・・。このままずっと変わらないのかな・・・）

最近どうもISに変化が現れなくなってきた。まだ開放されていない武器もあるが、新たに開放されてはいない。

（特殊な条件とかがあるのかな・・・）

ISの開放、もしくは特殊な敵と遭遇・・・などなどの特殊条件は過去何度もあった・・・。

「うーん・・・」

レイはしばらく悩んでいると・・・

コンコン・・・

「……ん？」

すると、ドアのノックが聞こえた。

「誰だろう？」

レイは席を立つと、ドアを開けた。

「こんばんは……レイさん」

そこにいたのはセシリアだった。

「セシリアか……。どうしたんだ？」

「その……レイさん夕食はまだですよ？」

「うん？」

レイは部屋の中の時計を見た。

時計の針は七時を指していた。

「もうこんな時間か……。そういえばまだだな」

「でしたら、わたくしとご一緒に参りませんか？」

「そうだな……。じゃあ行くか」

「はい！」

そして、二人は一緒に食堂に向かう・・・

少しして二人は食堂に着き、それぞれ料理を頼んで空いている席に着く。

レイはステーキ丼を頼み、セシリアはトマトのリゾットを頼んだ。

「・・・レイさんって、たまにそういうものを食べるんですね」

「・・・そりゃまあ、俺だってたまに肉は食べるさ・・・。まあ食いすぎるといけないから、たまにしか食べないんだがな」

「へえ・・・。そうなんですか」

「ああ」

そして、二人はそのまま料理を食べ始めた・・・

「・・・なあ、セシリア」

「な、何でしょうか？」

しばらくして、レイがセシリアに訊いてきた。

「最近どうもセシリアの元気がないな」

「そ、そうでしょうか？」

「ああ。何か悩み事でもあるのか？」

「わ、わたくしに・・・な、悩み事なんてありませんわよ？」

（・・・ビンゴ、か）

レイは的を射たことを確信する。

（うう・・・相変わらず勘が鋭いですわね・・・）

セシリアは的を射られたことにちよつとショックを受ける。

「そうやって自分ひとりで悩みが解消されると思っているのか？」

「そ、それは・・・」

「ないだろう？」

「・・・は、はい」

「まあ、力になれるかは分かんが、とりあえず言ってくれないか？」

「は、はい・・・。実は————」

そしてセシリアは学園祭後のことを話した・・・

「なるほどねえ……。亡国機業に自分よりBT兵器を使いこなしているやつがいたことにショックを受けた……。だから毎日放課後特訓をしているってわけか……」

「はい……」

「そんなに落ち込まなくていいんじゃないか？」

「そういうわけにはいきませんわ……」

「……お前はプライドが高いのは知っているが……自分が一番だってことを思い上がっているんじゃないか」

「そ、そんなことは……」

「……あるだろ……。そうじゃないんならそうやって落ち込むことはない」

「……」

「絶対自分より上はいる……。そういうもんさ」

「……レイさんは……そうなんですか？」

「……そうだな……。少なくとも、俺より強いやつはいることかな……。完全無欠な人はいないもんだ」

「・・・やっぱり・・・そうですね・・・」

セシリアは落ち込む・・・

「・・・まあ、アドバイスになるかは分かんが・・・たまには考えるより先に動いてみたらどうだ？」

「考えるより？」

「ああ。ためらわず、いざってときには迷わず行動してみたらどうだ？」

「・・・迷わずに・・・。ようは・・・吹っ切れ、と？」

「そういうことだ」

と、レイは右手でグツとする。

「・・・吹っ切る・・・」

セシリアは右手を顎に当てて考える・・・

「・・・まあ、吹っ切れてみるか、自分の考えで押し通るかは、セシリア次第さ」

と、レイはいつの間にか食べ終えており、席を立つと井をカウンタ―に返した。

「キャノンボール・ファスト・・・お互いに頑張ろうな」

「・・・ええ。この勝負は必ず勝って見せますわ」

「その意気だ」

と、レイは再び右手でグツとして、食堂を出た・・・

その頃・・・

「・・・よし・・・。何とか出来上がったな・・・」

ロイは額の汗をぬぐうと、完成したデータを自身のISにインストールする。

（これで・・・あいつらを更に進化させることができる・・・）

すると、ロイの表情は曇る・・・

（・・・でも・・・そこまでしてレイを戦わせるのか・・・俺は・・・）

自分の行いは明らかにいいことではない・・・。逆に言えばレイに

戦わせることを続けてもらいたいと言う意味が見える。

（……だが……これもあいつらに隠されている『秘密』を守るため……）

複雑な心境の中、データのインストールが終了し、ロイはすぐさま準備に取り掛かる。

（とりあえず、キャノンボール・ファストの会場にてやつらの動きを見るか……。状況次第じゃ俺が行く必要があるな……。それと――）

ロイは窓の向こうにいる整備中の『オーデイン』、『フェンリル』、『パンドラ』を見る。

（もしものことがあるからな……。こいつらの出撃準備もしておくか）

と、ロイは窓側にある台の上にあるキーボードをめちやくちや早く打ち込んで、三機を起動させた。

（さて……。行くか）

そしてロイは研究室から出た……

所変わって・・・ここはとあるエリア・・・

そこにはとてつもなく大きなクレーターがある・・・。

だが、それは隕石が落ちてできたものではなく、かつてそこで行われていた実験による事故によってできたクレーターであり、今では何にもない・・・

しかし、そこで異変が起き始めていた・・・

クレーターの中心で、ボヤーと何かが光り出した。

そしてそれは徐々に形を形成して、やがて人型の形になった・・・

『・・・コ・コ・ハ・・・ド・コ・ダ・・・？』

量子によって形成されたそれは、今にも崩れそうだった・・・

『・・・ド・コ・ダ・・・ワ・レ・ノ・・・コ・ア・ハ・・・』

それは宙に浮かびだすと、ゆっくりと進みだした。

『・・・ド・コ・・・ダ・・・？』

そして、それは辺りを見回し始め、ある方向に止める。

『・・・コ・ア・・・ソ・コ・カ・・・』

レイはベッドを支えにして立ち上がって時間を見る。

もう午前二時半だった・・・

「全く・・・冗談きついで・・・こんなのはな・・・」

そして、レイはベッドに寝ると、布団を被った。

（・・・しかし・・・こんなことは今までになかったのに・・・）

そう考えて、レイは目を閉じた・・・

すると、レイの左腕の待機状態のISの腕輪が僅かに点滅していた・
・・・

そして、その表面にボヤーと何かが浮かんだが・・・次の瞬間には
消えた・・・

Story 41 キャノンボール・ファスト

そしてキャノンボール・ファスト当日……

「おお……。今日はよく晴れたな……」

レイは目の上に手を置いて空を見上げる。

会場は活気に満ちて、その席は超満席で、その一部を企業側の人間や国のお偉いばかりだ。

プログラムとしては、まず二年生のレースが行われ、その後一年の専用機持ちのレースで、次に訓練機によるレースで、最後に三年生によるエキシビジョンマッチになっている。

「それにしても……。本当に大丈夫なのか？」

と、一夏がレイの隣に立つ。

レイの怪我は結局完全に治っていないので、頭に包帯が巻かれて、背中を覆うように上半身に包帯が巻かれているので、ISスーツの肌が出ているところに包帯が見えている。

「心配はないさ。別に戦闘を行うわけじゃないんだ」

「・・・そりゃそうだな・・・。そういえば・・・フィオナさんって今回のレースに出場しないんだよな？」

「ああ。どうやらISの調整と改装をするために一旦研究所に戻ったらしい」

相変わらずフィオナとの仲は改善されず、今も仲は悪い（レイのほうから嫌っているが・・・）

「そうなのか・・・」

「さてと、行くか」

「おう」

そして二人はアリーナのピットに向かう・・・

「相変わらず・・・ここは活気に満ちているな・・・」

ロイはアリーナの一角にいた。

以前のコート姿で、サングラスを掛けていた。

その隣には、もう一人男性がいた。

「・・・・・・・・・・」

その男性は二十代前半で、髪は黒だが、前髪の一部が白であり、瞳の色は赤。背はロイより少し低い。格好はスーツ姿で、企業の間人と思わせるものだった。首にはネクレスが掛けられており、紫と黒のツートンカラーだ。

「すまん。ジン……。忙しいときに来てもらって……」

「いえ。別に問題はありません……。義兄さん^{にい}」

彼の名前は『海道ジン』……。昔日本の内閣にいた『海道義光』の孫で、今はIS関連の企業に入っている……。海道義光がある時に亡くなり、ロイはある時にジンと出会って、面倒を見るためにしばらくジンを研究所に引き取っていたので、その間に義兄弟の仲になった。ちなみに、その素質と言うのがISに関連しているのだが、ある特殊なことでジンもISの操縦者なのだ。

「それで……。『イノベーター』が再び動き出したと言うのは本当なのですか？」

「……。さすがに伝わるのが早いな……」

「八神さんから聞きました」

「そうか……。確かにお前の言う通りイノベーターが再び動き出した」

「イノベーター・・・」

ジンは表情を陰しくする。

「もうあんな悲劇は繰り返してはいけない・・・。そして、おじい様のような人を作り出してはいけないんだ・・・」

「その通りだ」

そして、二人はアリーナに目をやる・・・

「さて・・・。そろそろだな」

と、レイはファントムを展開して、準備をした。

そして、ファントムの機体状況をモニターに出す。

（・・・ブースターの同調率は68%か・・・。このくらいなら出来なところか・・・。だが操縦性の悪さは確かだな・・・）

レイはデータを閉じるとみんなの元に向かう。

もうみんなもISを展開していた。

「ついに来たわね・・・」

「ああ。そうだな」

鈴は今回のレースに合わせて高機動パッケージ『風』^{フエン}を装備しており、セシリアも強襲高機動パッケージ『ストライクガンナー』を装備していた。

「お怪我は大丈夫なのですか・・・レイさん？」

と、神夜が心配そうに聞いてきた。

神夜の斬月も高機動パッケージ『飛翔迅雷』を装備していた。

「ああ。そこまで激しいもんにはならないだろう」

「うーん・・・そうだいいんですが・・・」

「まあとりあえず、行くか」

そして、みんなは山田先生の指示に従って、スタートポイントに着く。

「・・・・・・・・・・」

スタートポイントに着いた瞬間にレイは多くの視線を感じた。

それはそうだ・・・。レイのISは他とは違い『全身装甲』なので、他のISとは異彩を放っているので、注目をされるのも仕方がない。

（何もなければいいが・・・）

レイはどうも嫌な予感がしていたが、すぐに考えを切り替える。

『それではみなさん！これより一年生の専用機持ちによるレースを行います！』

アナウンスがアリーナに響く。

そして、各機はスラスターを点火させて構えると、シグナルランプが点滅し始める。

3・・・2・・・1・・・GO！

ブザーが鳴り、各機は一斉に飛び出す。

「くっ！」

一番スタートダッシュに成功したのはファントムで、爆発的な加速でトップに出たが、その隣をセシリアが抜く。

「お先に行きますわよ！」

「やるな・・・。だが・・・！」

あっという間に第一コーナーを通り過ぎたレイは左手に『アサルトAR3』がグレードアップした武器『アサルトカービン』を展開して後ろに放つ。

後ろには一夏が迫ってきており、レイはそれに向けて弾丸を放つ。

「くっ！」

一夏は両腕を前に出して弾丸を防ぐ。

だがその間に鈴がレイの隣を通り過ぎた。

「お先に！」

「あっ！」

そして、鈴は横に向けていた衝撃砲を前に向けると、セシリアに向けて放つ。

「俺も黙ってはいられないな！」

レイはブースターの出力を上げて、鈴に肉薄する。

「抜かせはさせないよ！」

と、鈴は左肩の衝撃砲をレイに向ける。

「そう来ると思ったよ！」

レイは右手で『グランプラズマカッター』を抜き放つと、そのまま高速で回転し始める。

その直後に鈴は衝撃砲を放つが、その弾丸を回転しているグランプラズマカッターの刀身で弾かれた。

「ちっ！やるわね・・・」

「どこを見ている・・・」

「!?!」

すると、後方からラウラが右肩のキャノンで鈴に向けて放った。

鈴はとっさに回避したが、完全にはかわしきれず、コースを逸れてしまう。

「やるな・・・」

レイはラウラが迫ってきて来るのを感じて、とっさに回避行動を取るとラウラからの攻撃が来た。

「やりますね・・・レイ!」

「そう簡単には落とされるかよ」

「しかし・・・スピードは落ちましたよ!」

と、ラウラはそのままトップに出た。

「レイ・・・お先に」

と、レイの隣をシャルが通り過ぎた。

「ふっ・・・まだだ!」

レイは一気に飛び出すとトップ二人を追う。

「・・・！」

レイは後ろから攻撃が来るのを感じて、横に避けると隣を三日月形のチャクラムが飛んできた。

（この攻撃・・・神夜か・・・！）

レイは後ろにカメラを向けると、かなりのスピードで迫ってくる斬月の姿があった。

「だが・・・これ以上抜かれるわけにはいかないんでね・・・！」

レイはブースターを一瞬爆発的に噴射させると、トップ二人に迫る。

レースは二週目に入り、順位は一位・・・ラウラ、二位・・・シャル、三位・・・レイ、四位・・・神夜、五位・・・鈴とセシリアと一夏と箒ということになっている。

「くっ・・・！」

レイはブースターの細かな調整をしながらトップ二人に迫る。

やはりブースターのバランスと同調率は悪く、一瞬のミスがブースターの出力低下に繋がり、事故に繋がりがねない。

（やっぱり調整が難しい・・・。だが、この程度で怖気ついては・・・！）

レイはコーナーをドリフトのように曲がり、曲がり終えた瞬間に脚部の追加ブースターを噴射させてターボを掛ける。

「くっ！」

レイは再び後方から来る神夜のチャクラムによる攻撃を避けながら、左手に『フォークラスターⅡ』を展開すると前に向けて発射した。

発射されたミサイルは大きく弧を描いて後ろに飛んで行き、後方にいる神夜を牽制する。

するとその直後に鈴とセシリアの二人が四位に入る。

「さすがに高機動パッケージを使っていると追いつくのが早いな・・・。だが抜かれる気はない！」

レイは更にブースターを噴射させると、トップ二人と並ぶ。

「レイ！」

「悪いが抜かせてもらおうぞ！」

レイはそのまま追い抜こうとするが・・・

「させません！」

と、ラウラがワイヤーブレードでレイに攻撃を掛けてきた。

「そう来ると思ったよ！」

レイはとっさにフォークラスターLを収納すると、今度は『マグナムキャノン』と呼ばれる大型のハンドガンを展開して、ワイヤーブレードの先端に向け放つ。

先端に直撃したワイヤーブレードは軌道がずれてファントムをかすめた。

「くっ・・・！」

そしてその直後にラウラに向けマグナムキャノンを放つ。

「ふっ・・・」

ラウラは笑みを浮かべると、A I Cを起動させて弾丸を止める。

「やるな・・・」

「レイも・・・」

そして、ラウラはA I Cを解除すると同時にワイヤーブレードを放つ。

「ちっ！」

レイはとっさに後ろに下がってワイヤーブレードを避ける。

「さすがだ……。だが・・・！」

すると、レイは右手のグランプラズマカッターを前に出すと、その

まま前に突き進んでいく。

「そう簡単には抜かせはさせないよ！」

と、シャルは左手にマシンガンを展開してレイに向け放つ。

レイは前に出していたグランプラズマカッターを持つ右手首を高速回転させてマシンガンの弾丸を弾く。

「このまま突っ切る！」

そしてレイはブースターを一気に噴射させると、再びシャルとラウと並ぶ。

しかし、レースが三週目に入ったそんなところに、異変が起きる。

「・・・・・・・・・・」

突如何者かが上空に現れた。

「!?!」

レイはいち早く気付いて、スピードを落としたが、その者の攻撃が早くきて、シャルとラウに直撃して、レイもその攻撃を受けた。

「ぐっ！」

その衝撃でファントムはバランスを崩し、地面に叩きつけられるよ

うに墜落して、そのまま地面を削りながら滑るようにして進んでいく。

そして、レイはとっさに上を見ると、そこには蒼い色をしたISが浮いていた・・・

S t o r y 4 1 キャノンボール・ファスト（後書き）

皆さんは今後どんな展開に期待しますか？聞いてみたいです。
それと、質問とかがあったら言ってください。

Story 42 魔術師のイリュージョン

「ちっ！……やはり現れたか……」

襲撃者が現れて会場はパニックに陥り、そんな中でロイはアリーナの一角からその襲撃者を見る。

蒼いボディーをしたIS……『サイレント・ゼフィルス』

「『亡国機業』の差し金でしょうか」

「そうだろうな……」

ロイはサングラスを外すと、左目に眼帯を付ける。

「行きますか？」

「いや……。今出てもやつらの思うつぼだ……。しばらく様子を見る」

「……わかりました」

（……無事でいてくれよ……レイ）

ロイとジンはしばらく様子を見ることにした・・・

「く、くそっ！・・・やってくれるじゃねえか・・・」

レイは頭を押さえながら起き上がる。

「ちっ・・・。さっきの攻撃で追加ブースターがやられたか・・・」

レイはナハトのブースターの両サイドに装着している大きく破損した追加ブースターをパージした。

そしてアリーナの壁に激突したシャルとラウラの元に向かう。

「・・・・・・・・」

レイは額と背中中に湿った感じがするのを感じた。　どうやらさっきの衝撃で傷口が開いて、血が出ているのだろうが、レイはそんなことに構わなかった。

サイレント・ゼフィルスにはセシリアと鈴で応戦しており、一夏と箒と神夜は観客席に攻撃が来ないように流れ弾を防いでいた。

「シャル、ラウラ！・・・大丈夫か！？」

そしてレイは攻撃に注意しながら二人の元に来た。

「う、うん……。大丈夫だよ……」

「は、はい……。大丈夫です……」

「そ、そうか……」

レイは一旦安堵の息を吐く。

「……しかし……。損傷状態から直接戦闘に参加はできません」

ラウラのISの状態は結構ひどく、スラスター系はほとんどだめだろう……

「シャルは？」

「スラスターが完全に死んでいるよ……。PICで動けるけど……これじゃ相手の機動力にはついていけないよ」

と、シャルは増設スラスターをパージして立ち上がる。

「……そうか……。なら……ラウラは後方から援護射撃を行ってくれ」

「了解」

「シャルはラウラのフォローを頼む。場合によっては援護射撃も行ってくれ」

「わかった……。気をつけてね」

「分かっているさ」

レイはグランプラズマカッターを抜き放つとサイレント・ゼフィルスに向かっていく。

途中で一夏と箒と神夜と合流してゼフィルスに向かっていく。

「でりゃああ！」

レイはグランプラズマカッターをゼフィルスに向け振るう。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ゼフィルスの操縦者・・・エムはライフルの先端につけている銃剣で応戦する。

「・・・・・・・・『黒き亡霊』・・・・・・・・オータムが取り逃がしたやつか・・・・・・・・」

エムは独り言のように言うと、シールドビットでファントムに向けて放つ。

「くっ！」

レイはとっさに回避するが、ビットから放たれたビームはファントムに一発直撃する。

（くそっ・・・・・・・・。やはりパーツの相性が悪い・・・・・・・・！）

ファントムの動きはノーマルのより悪い。ファントムの出力とナハトのブースターの出力が合わないのだ……。

レイは仕方がなく攻撃を回避するのではなく、グランプリズマカットで切り払って防ぐことにした。

「うおおおお！」

そしてレイの隣から一夏が飛び出し、雪片でエムに切りかかる。

「目的は何だ！……『亡国機業』！」

一夏はエムに向け叫ぶ。

「……茶番だな」

「なにっ!？」

エムは雪片を受け流すと一夏にけりを入れる。

「ぐっ！」

一夏はそのまま後ろに飛ばされる。

「死ね……！」

そしてゼフィールのライフルが開いて最大出力で放った。

「させるかっ！」

一夏にビームが当たる直前でレイが間に入り込み『大剣モード』にしたグランプラズマカッターの刀身でビームを受ける。

すると、グランプラズマカッターの刀身に受けるビームが刀身に吸収されている・・・？

「・・・・・・・・？」

そしてビームの照射が終わると、レイはグランプラズマカッターを構える。

その刀身にはさっきのビームが溜め込まれていた。

「お前のビーム……。そっくりそのまま・・・返すぜ！」

そしてレイはグランプラズマカッターを振るうと、刀身からさっきのビームをワイドカッターに形成した斬波を放った。

「・・・・・・・・」

しかしエムは冷静にシールドビットを前に展開して斬波を防いだ。

「ちっ・・・・・・・・。やるな・・・」

レイはグランプラズマカッターを構え直す。

「・・・ふーん・・・。亡国機業にあんなに強いやつもいるものね・・・」

と、アリーナの特別観客席からフィオナは戦闘を見ていた。

彼女は研究所に行った・・・というのは嘘・・・。しかしレースに参加できないのは本当で、今の彼女にはISはない。

「・・・時間から・・・そろそろね・・・」

フィオナは時間を見て、再びアリーナ内を見る・・・

「くっ！」

レイはゼフィルスにグランプラスマカッターを振るうが、相手の機動力に翻弄され、シールドビットによって一撃も加えられていない。

「こいつ・・・。只者じゃない・・・！」

レイは少し焦りの色が出ていた。

「・・・この程度か・・・『黒き亡霊』・・・」

エムはシールドビットで射撃をするとそのまま銃剣をレイに突き立てる。

「ぐっ・・・！」

シールドビットから放たれたビームを避けていると、エムの銃剣が直撃し、レイは体勢を崩してしまう。

それを逃さないエムはファントムにライフルを向ける。

「くっ！」

「やらせませんわ！」

と、その間にセシリア入り込み、ゼフィルスに体当たりをした。

「セシリア！」

レイの呼ぶ声に反応せず、セシリアはそのままスラスターを噴射してアリーナの遮断シールドにゼフィルスを叩きつける。

そして四回叩きつけて遮断シールドが割れた。

「貴様・・・」

「このBT一号機の実力を見せて差し上げますわ！」

そしてそのままセシリアとエムは市街地に飛んでいく。

「セシリア・・・」

レイは体勢を立て直して、すぐに追いかけてようとした・・・

だが、その直後・・・

「警告！上空より熱源探知！」

「なにっ!？」

モニターに警告が出て、その直後に天井の遮断シールドが多数の強力なビームによって撃ち抜かれた。

「くっ！」

レイはグランプラスマカッターで防ぐが、相手の出力が大きいため、そのまま後ろに飛ばされる。

「な、なんだ!？」

その直後にその穴から多数の機影が進入してきて、地面に墜落するように着地する。

「な、なんなの!？」

鈴はレイの隣に立ってそこを見る。

さっきのビームによって爆煙が上がっていたが、その中から赤い光が次々と光り出した。

「・・・こいつらは・・・！」

そして煙が晴れると、そこから複数の機体がいた。

それは『デクー』や『デクー改』『インビット』などの無人ISだった……。

さらに、その中央には見慣れない機体がいた。

細身のボディーをしており、黒と黄色のカラーリングをしており、右手には大きな湾曲し赤と黒の刃を持つ鎌を持っていた。その姿から、ランプの『ジョーカー』を思わせる姿だった……。

「くそっ……。こんな面倒な時に……」

レイはグランプラズマカッターを構える。

「レイ……こいつらって……」

鈴は双天牙月を展開して構える。

「ああ……。以前に現れたやつだな……」

そして一夏と箒と神夜も合流する。

「くそっ……。このままじゃセシリアが……」

「彼女なら大丈夫だ……。だがここで一機でも減ると面倒だ……」

「どうする気だ……?」

「・・・一夏と箒、神夜は多数いるISと戦ってくれ・・・。俺はあいつを引きつける」

レイはジョーカーに狙いを定める。

「・・・俺たちはあれ以外のやつと戦うのか？」

「ああ・・・。やっかいなやつは俺が引き受ける・・・」

「だけど・・・」

「言う通りにしろ」

「・・・あ、ああ・・・」

レイに言い通られて、一夏は従う。

「・・・・・・」

「出血レベルがAに達しました」

と、モニターに警告表示がされた。

出血は少量とは言えど、あれから止まらずずっと出ている。もしこのまま出血が続くと危険が及ぶ。

（・・・だが・・・ここで引き下がるわけにはいかない・・・）

レイは警告を無視してジョーカーに向かってくと、ジョーカーもレイに向かっていく。

そして両者の武器が交じり合うと、両者はそのままその場を離れていく。

「レイさん……」

「神夜さん……。レイなら大丈夫ですよ」

レイを見る神夜に一夏が声をかける。

「……はい」

そして、残りのメンバーは他の無人ISに向かっていく。

「くっ……」

ラウラはキャノンで一夏たちの援護を行うが、距離が離れていることもあり、中々当たらなかった。

そして向こうもこっちに向かって攻撃してくるが、シャルがシールドで防御して、牽制してくれる。

（……こんなときに……何もできないのか……私は……）

ISの損傷状態から、戦闘に参加はできない……。それはシャルも同じだ。

（こんな時こそ・・・レイの力になるはずなのに・・・。なのに・僕は・・・）

後ろから援護しかできないほどに無力になっている自身が憎かった・

（・・・こんな時に・・・私は・・・）

（・・・僕は・・・僕は・・・！）

いくら憎んでも、今の自分たちには何もできない・・・

すると、上空で二つの光が点滅する・・・

「ちっ！」

レイはグランプラズマカッターを振るうが、ジョーカーは素早い動きで攻撃を避けていた。

これで何度目だろうか・・・ジョーカーには一発も攻撃が当たらず、相手は攻撃を掛けてこない。

（くそっ！・・・攻撃が当たらない・・・）

レイは攻撃が当たらないことに苛立ちと焦りが出始めていた。

しかもあんな細身でありながらも、パワーは高く、鎌で攻撃を防いだ後ファントムを弾き返していた。

それに、機体バランスが悪いので動きが若干鈍い・・・

(・・・どうする・・・)

レイはどうするかを考えていると、ジョーカーのカメラアイが光り、何かをし始めた。

「・・・！？何をする気だ・・・？」

そして、ジョーカーはバク転して後ろに下がると、機体が三体に分身した。

「な、なにっ！？」

これにはレイも驚いた。

分身した直後にジョーカーは攻撃に転じた。

「くっ！」

そして次々とジョーカーは攻撃を掛けてきて、レイはグランプラズマキャッターで防いでいくが、同時に来る三体の攻撃を全て防ぎきれず、一発はファントムに直撃する。

「ぐっ！」

衝撃で傷口に響くが、レイは何とか後ろにジャンプした。

「分身とは・・・なんてやつらだ・・・。だが、こっちは一体足りなくても、機体を増やすことはできる！」

と、レイはアーベントを展開しようとした。

だがその瞬間、ジョーカーのカメラアイが点滅して、何か異変が起きた。

すると、光の玉までできていたアーベントが急に弾けてばらばらになった。

「なにっ!?!? どういうことだ!?!?」

「警告! 敵ISより妨害電波が発せられ、ISの展開に障害発生!」

「なに・・・。妨害電波だと・・・?」

レイは驚いていても、ジョーカーはお構い無しに攻撃を掛けてきた。

「くっ!」

レイはとっさにグランプラズマカッターを振るうが、ジョーカーは紙一重でかわし、そして三方向から同時に攻撃を掛けてきた。

「ぐはっ!?!?」

攻撃が直撃すると、身体に痛みが走る。

（・・・痛み・・・。・・・!?まさか・・・）

ISの絶対防御が働いていない・・・しかし、レイはそんな経験を前にしたことがある。

（・・・ISの展開のほかに・・・。絶対防御の妨害も含まれているのか!?）

レイは相手の妨害電波が複合型のものと推測する。

「くそっ!・・・なんて厄介なものを・・・」

そしてお構い無しにジョーカーは攻撃を掛けてくる・・・

「くっ!」

神夜は斬冠刀でデクーに切りかかるが、デクーは左腕に装着しているシールドで受け止める。

「硬い・・・ですが・・・!」

シールドの硬さにめげず、神夜は斬月のスラスタを全開にしてシールドを無理矢理切り裂いた。

「はああああっ!」

そしてそのままデクーを切り裂き、撃破した。

だが、その直後、斬月の後ろからインビットが飛び込んできた。

「・・・！？・・・しまっ・・・」

神夜は一瞬反応が遅れた。

「うおおおおおっ！」

その間に一夏が入り込み、左腕の雪羅のクロウモードでインビットの胴体に突き刺し、そのままクロウを無理矢理開いて切り裂いた。

「大丈夫ですか！神夜さん」

一夏は後ろを向いて神夜を見る。

「・・・は、はい」

無事を確認すると、一夏は別の機体に向かっていく。

「・・・・・・」

神夜はその一夏の姿をみて、頬を少し赤らめる。

「・・・はっ・・・。い、今はそんなところじゃありません！」

神夜は頭をぶんぶん振ると、斬冠刀を構え直して別の無人ISに向かっていく。

「く、くそ……」

レイは息を荒くして、前を見る。

ジョーカーに攻撃は当たらず、自分だけがダメージを受けていた。

「……このままじゃ……」

そして、ジョーカーは三体同時に飛び上がり、ファントムに攻撃を掛けてきた。

「くっ！」

「————」

すると、ファントムのバイザーが発光し、グランプラズマカッターをジョーカーに向け思いっきり振るう。

そして大きな衝撃波が走り、ジョーカーを吹き飛ばした……

「……ファントム……お前……」

「————」

ファントムは答えたかのように唸る。

そして、砂煙が晴れて、ジョーカーの姿が現れた。

「な、なに・・・？」

レイはその光景に驚いた。

三体に分身していたジョーカーから、電流が流れていた。

分身しているのならこんなことはない・・・

「こいつら・・・。三体に見えるんじゃない・・・本当に三体いたのか!？」

それならば、さっきまでの違和感の辻褄が合う。

本体を捉えるために地面をグランプラズマカッターでえぐって砂煙を上げて、本体を捉えたはずだったが、ジョーカーは別方向から攻撃を掛けてきたのだった・・・。

「・・・だが、それが分かってても・・・むしろこっちが不利なのは変わらない・・・いや、更に悪くなったな・・・」

どれもが本体のなら、三体同時に相手をしないといけない・・・。

（それにファントムも消耗している・・・。戦闘が長引けばこっちが不利だ・・・）

そしてジョーカーはショートから回復して、ファントムに襲い掛かる。

「くっ!」

鎌で攻撃してくるジョーカーにレイはグランプラズマカッターで防いでいく。

(・・・これは・・・)

レイはジョーカーの攻撃を受け流していると、あることに気付く。

「・・・・・・・・・・」

そしてそれからジョーカーの動きを見る。

(・・・なるほどな・・・)

そしてジョーカーの動きを見て、レイは確信した。

(・・・動きにパターンがあるわけじゃないが……。こいつらには一定の動きがある)

レイはグランプラズマカッターを地面に突き刺すと、両手に『グランスラッシュリッパー』を展開して、ジョーカーに向け投擲する。

ジョーカー三体はグランスラッシュリッパーを鎌で弾いて、レイに向かっていく。

レイはジョーカーの攻撃を避け続けて、ある時を待つ。

そして、ジョーカーは上空に飛び上がると、鎌を振り上げてファントムに向かっていく。

「1・・2・・3・・4・・5！」

レイは五つ数えると、後ろに下がり、ジョーカーの攻撃を避ける。

ジョーカー三体は密集した状態になっていた。

「それを待っていた！」

そして、レイはあるものに念じた。

すると、動き出していたジョーカーの背後から何かが当たってきた。

それは、さっき飛ばしたグランスラッシュリッパーだった。

それによって後ろにいたジョーカーが前のジョーカー二体にぶつかりごちゃごちゃな状態になる。

「いけっ！」

そしてレイは両腕の『グランプラズマサイス』を飛ばし、それを二つずつ連結して、ジョーカーに向かっていく。

そしてグランプラズマサイスはジョーカー三体を捕らえるように挟み込み、そして先端を繋げて捕らえた。

それによつてジョーカーは動きを止めた。

「こうすれば、一気に仕留められる！」

そしてレイは地面に突き刺していたグランプラズマカッターを取る。

「これで終わりだっ！」

「アタックファンクション！ライトニングスラッシュ！」

右手首を高速回転させてグランプラズマカッターから大きな光波を
発射する。

そして光波はジョーカー三体を切り裂き、そして爆発した……。

「はぁ……はぁ……」

レイは息を整えながら、一夏たちを見る。

一夏たちも無人ISを全て撃破したようだ。

レイは一夏たちと合流する。

「みんな無事だな？」

「まあね……。でも、以前より動きが違うから手こずったけどね」

鈴は双天牙月を肩に置いた。

「そうか……。よし、今からセシリアの援護に向かうぞ」

そして、レイ達が向かおうとした……だが……

「警告！上空より高速で接近する物体あり！」

「なにっ!？」

レイはとっさに上を見上げた。

すると、上空に何かが隕石のように降下してくるのが見えた。

「……みんな、散開しろ！」

レイの叫びにみんなばらばらになろうとしたが……

「アタックファンクション！Ωエクスプローション！」

そしてそれは手にしていた大型の武器で物凄い勢いで地面に叩きつけた。

その瞬間に強力な衝撃がドーム状に広がり、辺りを蹴散らし、爆発を起こしたのだった……

Story 42 魔術師のイリュージョン（後書き）

以前にアンケートで取って決まったのは『ジョーカー』でした。

本当なら三体を一気に貫くという倒し方にしたかったのですが、ア

リーナにはそうするための場所がなかったので、別の倒し方にした・

・・。

そして次回で『秒殺の皇帝』が登場。

Story 43 皇帝現る

「・・・！？一体何が・・・？」

市街地でサイレント・ゼフィルスと戦闘をおこなっていたセシリアはアリーナの方から爆発音を聞き、振り向く。

アリーナから煙が上がっていた。

「レイさん・・・」

「・・・よそ見をしている場合か・・・」

と、エムは容赦なくセシリアにライフルで攻撃してきた。

「くっ！」

セシリアはとっさに避けるが、エムによる『フレキシブル偏光制御射撃』によってビームは曲がってブルー・ティアーズの左脚部をかすれる。

「偏光制御射撃・・・。ですが・・・！」

セシリアは高出力BTライフルで応戦するが、エムは高速回避で避けていく。

（・・・無事でいてください・・・。皆さん・・・）

セシリアはみんなの安否を気にするのだった・・・。

「・・・ついに・・・来たようね・・・」

フィオナはさつき襲撃したその機体を見た。

「・・・ジ・エンペラー『皇帝』・・・その性能を見せてもらおうわ・・・」

そしてフィオナは微笑むのだった・・・。

「うう・・・。一体何が・・・」

レイはよろつきながらも立ち上がる。

衝撃波によって地面は大きく削られており、でこぼこになっている。

「・・・！鈴・・・！」

レイは地面に倒れている鈴の姿を見て、とっさによる。

「鈴！・・・しっかりしろ！」

レイは鈴を揺さぶるが、返事はない・・・

（・・・さっきの衝撃波で気を失ったのか・・・これはまずい・・・）

レイは辺りを見回した。

シャルとラウラは遠くにいたので被害はあまりなく、警戒していた。
一夏と箒と神夜は何とか立ち上がっていた。

「大丈夫か！みんな」

レイは鈴を抱えて合流する。

「ああ・・・俺は大丈夫だ・・・それより鈴！」

「心配するな・・・気を失っているだけだ」

「そうか・・・よかった・・・」

「それより、それぞれ状態は？」

「・・・俺はさっきの衝撃で雪羅のシールドエネルギーが尽きてしまった・・・」

「・・・なんてことだ・・・箒は？」

「私は何とか戦える・・・」

「そうか・・・。神夜は？」

「私も何とか戦えます」

「・・・まとも戦えるのは三体・・・。だが・・・最初は二機だけだな・・・」

「どういうことだ？」

箒は怪訝そうに聞いてくる。

「箒、お前はなんとかして『絢爛舞踏』を発動して白式の補給をしてくれ」

「『絢爛舞踏』・・・だが、まだあれは・・・」

「この状況だ・・・。何とかして戦えるやつは使いたい・・・。だから頼む」

「・・・私もそうしたいが・・・完全に・・・」

「・・・だったら、初めて発動したあの時を思い出せ」

「・・・あの時・・・」

「発動するまでは神夜と時間を稼ぐ。いいな」

「・・・分かった」

「よし・・・じゃあ行くぞ、神夜」

「はい！」

そして、二人は新たに現れた襲撃者が着地したところに向かう。

「次々と攻めて来やがって・・・。一体何者だ・・・」

そこは砂煙で見えなかったが、次第に晴れていくと・・・

「・・・！・・・あいつは・・・」

そしてレイはその中で見覚えがあるISを目撃する。

頭には三本の角があり、機体色には紫と黒のツートンカラーで、各所に鋭利な形状があつて、胴体にはコアのようなものがある。背中には風でなびくマントがあり、右手には四枚の刃を持つ斧があつた。

『レイ・・・。あいつって・・・』

一夏から通信が入る。

「ああ・・・。間違いないな。クラス対抗戦時に襲撃したやつと似ている・・・。いや、発展機だろうな・・・」

そんな中で、エンペラーの後ろから多数の機体が現れた。

推測でも十数機はおり、その半分に『デクーエース』、残りで『ア

ヌビス』という編成だった。

「増援とは・・・準備がいいと言うか・・・どうかな・・・」

レイは右手にある碎け散った刀身のグランプラズマカッターを見る。膨大なエネルギーを放出した直後の刀身は非常に脆くなる。先ほどの衝撃波で碎け散ったのだろう。

レイはグランプラズマカッターを分離させると、元あった両腕に装着した。

（エネルギー充填までしばらく時間が掛かる・・・。それまでは・・・）

レイはしばらく考えて、右手にある武器を呼び出した。

（・・・グレイヴディガー・・・）

そして右手に結構長い武器が展開された。

武器の半分以上を刀身で占めており、刀身は四枚あり、先端はドリルのように尖っていた。

根元には刀身を回転させる機構があり、ドリルとして使えるようだった。

ドリルの機構を持つランス『グレイヴディガー』

（初めて使うが・・・。やってみるか）

ファントムはグレイヴディガーを回転させて、一回振るう。

「神夜……。お前にはすまないが多数いるやつらと戦ってくれないか？」

「……。いいですけど……。私一人で？」

「そんなわけないだろ。少しすれば一夏たちが合流する。俺はあいつと戦って引き離す」

「しかし……。その状態では……」

「……心配ないさ」

そして、レイはエンペラーに向かっていく。

『ターゲット確認……。排除開始』

エンペラーのカメラアイが発光し、ファントムに向かっていく。

そして両者の武器が交じり合い、衝撃波を起こす。

「始まった……」

アリーナの隅で、ラウラとシャルは戦闘を見ていた。

機体状態から直接戦闘に参加できないので、ただ見ているしかない・

「・・・情けない・・・。こんなときに戦えないとは・・・」

「・・・でも、戦いに参加できないのなら・・・せめて援護だけは・
」！」

シャルはアサルトライフルを展開して、神夜の援護に入る。

「・・・せめてでること・・・」

ラウラはキャノンを前に向けると、援護射撃を行う・・・

「くっ！」

レイはエンペラーの攻撃をグレイヴディガーの刀身で防ぐ。

（前よりパワーが上がっている・・・！・・・それに・・・）

レイはモニターを見る。

（さっきのやつのは放ったのは妨害電波じゃなくて妨害粒子だったのか・・・？）

未だにISの展開はできない。どうやらジョーカーの放ったのは妨害粒子のようなもので、アリーナ内にまだ少量漂っている。

「だが、状態とか相手がどうだろうとなあっ！」

レイは強引にエンペラーを弾き飛ばす。

その直後にグレイヴディガーの刀身を回転させる。

「俺は諦めない！」

そしてレイはグレイヴディガーをエンペラーに突き立てる。

先端で火花が散ってシールドエネルギーを削っていく。

だが、エンペラーは斧でグレイヴディガーを弾くとファントムを叩き飛ばす。

「ぐっ！」

レイが着地した直後に、エンペラーが猛攻を掛けてきた。

「こいつっ！」

レイはエンペラーの攻撃に防戦一方だった。

そして、エンペラーは強力な一撃をファントムに掛ける。

「ぐはっ!?!」

その直撃を受けて、ファントムは物凄い勢いでアリーナの壁に叩きつけられた。

「あっ！」

神夜は一瞬レイのほうを向く。

アリーナの壁に叩きつけられて砂煙が上がってファントムを包み込む。

「警告！敵機が前方より接近中！」

「！？」

神夜ははっとして前を見ると、前方からブレードを持ったアヌビスが向かってきた。

「くっ！」

神夜はとっさに斬冠刀を振るうが、アヌビスはその斬冠刀を弾き飛ばした。

「しまっ！？」

アヌビスがブレードを振り上げた瞬間……砂煙から何かが飛び出てきた。

そしてそれはアヌビスの胴体に突き刺さり、後ろに返される。

「！」

それは、ファントムが持っていた『グレイヴディガー』だった。

「レイさん!？」

神夜はとっさにレイのほうを見る……

砂煙の中で、異変が起きていた。

「アドバンスド……∞（インフィニティー）・ドライブ！」

そして砂煙が一気に晴れる。

そこには、気を放出するファントムの姿があった。

「全く……。こんな土壇場で発動するのかよ……」

レイはモニターを見る。

「システム開放。新システム『アドバンスド・システム』……。開放に伴いアドバンスド

『∞・ドライブ』が発動。さらに『クイック・チェンジ』が発動」

（こんなものがまだあったとはな……。それに、これを待ってい

た)

そして、レイは数歩前に出る。

「チェンジ！・・・ナハト！」

すると、機体周辺に光が現れて、ファントムをバックパック以外包み込んだ。

そして光が晴れると、ファントムからナハトへISをチェンジした。バックパックはナハトのもので、これでバランスは平常になった。

「いくぞ！」

そしてレイはすべてのスラスタを一気に噴射させてエンペラーに向かっていく。

「ナハトの切り札を見せてやる！」

レイは左腕の『五連チェーンガンで』でエンペラーに攻撃を掛けて牽制する。

エンペラーは攻撃を回避するが、その直後にナハトは一気に飛び込んでいき、エンペラーの横腹に蹴りを入れる。

エンペラーはそれによって横に飛ばされる。

「これで抜けない装甲はない……。全弾持つていけ！」

そしてエンペラーに向かっていくと同時に再度五連チェーンガンを放つと、今度は両肩のクレイモアを一斉発射して一度上に飛び上がる。

体勢を崩したエンペラーはチェーンガンの攻撃を受けると、直後に多数のクレイモアのベアリング弾を受ける。

その直後にナハトは降下すると同時に頭の『ダライズ・ホーン』でエンペラーに切りつけて、至近距離でシールドクレイモアをエンペラーに加える。

「撃ち貫けえっ！」

そしてエンペラーの腹部に『リボルビング・ブレイカー』を叩きつけると、連続で六発叩き込む。

そしてエンペラーはその衝撃で思いっきり後ろに飛ばされ、アリーナの壁に叩きつけられた。

「どうだ……。？」

レイはブレイカーの弾倉を展開すると空薬莖は排出し、予備カートリッジの弾を装填して、弾倉を閉じる。

エンペラーが叩きつけられた壁は大きくめり込み、砂煙を上げていた。

しかし、砂煙を払ってエンペラーが現れた。

「ちっ……。前より頑丈になっているのか……」

レイは構えて警戒する。

すると、エンペラーのカメラアイが点滅し始めた。

「……何をする気だ」

しばらくそれが続くと、エンペラーのカメラアイが一旦消えると、カメラアイが赤く輝いた。

そして、エンペラーは『瞬間加速』を掛けたかのようにナハトの目の前まで一瞬で来た。

「なっ……」

レイが気付いた時には、エンペラーは斧でナハトを殴りつけた。

「ぐっ！」

レイが後ろに飛ばされていると、一瞬の速さでエンペラーが後ろに先回りして更にナハトを殴りつける。

「ぐはっ!？」

更にエンペラーは前に回りこんでナハトを殴りつけ、そしてまた後ろに回りこんで殴りつけて、一方的に猛攻を続けた。

「な、何なんだ!？……こいつの動きは……!？」

レイは相手の動きが理解できなかった。

そしてエンペラーは強力な一撃をナハトに叩きつけた。

「ぐっ！」

そしてナハトは後ろに飛ばされて、地面に叩きつけられて溝を掘りながら滑っていく。

エンペラーはゆっくりと地面に着地した。

「な、なんて・・・やつだ・・・」

レイはよろつきながら立ち上がる・・・

すると、エンペラーは斧を両手で持つと刃を後ろにやって構える。

「・・・？」

すると、地面が揺れだした。

「これは・・・。あいつが・・・起こしているのか・・・!？」

膨大なエネルギーをエンペラーが放っていた。

「アタックファンクション!・・・インパクトカイザー!」

そしてエンペラーは斧を振り上げると、そのまま地面に叩きつける

と、地面から炎が噴出してナハトに向かっていく。

それはまるで・・・地獄の業火のようだった・・・

「・・・!？」

レイはとっさに回避ができなかった・・・

「————」

すると、ナハトが左腕を前に出して、シールドを展開した。

そして、地獄の業火はナハトに襲い掛かって、大きな爆発を起こした・・・

「・・・!」

ロイはアリーナの一角でその光景を目にした。

「ジ・エンペラー・・・」

ジンはかつての愛機の名前を言う・・・

「このままでは・・・」

「いや・・・これでいい・・・」

「え？」

「・・・鋼鉄の孤狼の・・・覚醒だ」

ロイは爆煙の方を見る。

「レイ！」

ラウラはレイの名前を叫ぶ。

「・・・？・・・あれは・・・？」

シャルはあることに気付いた。

そして、煙が晴れると・・・

「あ、あれは・・・？」

ラウラの視線の先には、あの攻撃を凌いだナハトの姿があったが、問題はそこではない。

ナハトの色が・・・変わっている・・・

さっきまでの夜のような青ではなく、真っ赤な色に変わっており、

赤かったセンサーも緑色に変わっていた。

（こ・・・これは・・・？）

「ナハト専用のアビリティ『オーバードライブ』・・・発動！」

「オーバードライブ・・・。ナハト・・・これがお前の力か・・・」

ナハトは左腕をのけると、前を見る。

「・・・・・・・・」

しかし、レイの視線はぼやけてきていた。

（あれから出血が止まっていない・・・。だから貧血を起こしているのか・・・？）

モニターには「出血がレベルBに達しました」と表示された。

ここまで来ると少し危険な状態だ。

「・・・だが・・・ここでやめるわけには・・・」

レイは顔に額から流れる血を感じながらも、エンペラーに向かっていく。

ナハトのスピードはさっきまでの三倍ぐらい上がっており、エンペ

ラーのスピードについていった。

「レイ・・・」

「ラウラ！」

ラウラはシャルに呼ばれてはっとして、前を見るとデクーエースとアヌビスがこちらに向かってきていた。

「くっ！」

ラウラはキャノンをデクーエースに向けて放つが・・・

ガキンッ！

「な、なにっ！？・・・弾切れ！？」

モニターを見れば、キャノンの残弾数はゼロになっていた。

そんなことにはお構い無しにデクーエースが大型の斧でラウラに襲い掛かってきた。

「ラウラ！」

両者の間にシャルが入り込んで、左腕のシールドを前に出す。

だが、パワーは向こうのほうが大きいために、シャルは後ろに飛ばされた。

「うわあああっ！」

「シャルロット！」

ラウラはとっさにシャルロットを受け止める。

「だ、大丈夫だよ・・・ラウラ」

「・・・くっ・・・。貴様ああっ！」

ラウラは怒り、シャルを置くとプラズマ手刀を展開してデクーエー
スに切りかかる。

だが、その間にアヌビスが入り込み、左腕のシールドで防がれた。

「なにっ!？」

そして弾き飛ばされると右手に持つナックルでラウラを殴りつけた。

「ぐあっ!？」

ラウラは衝撃で後ろに飛ばされる。

「うぐ・・・」

ラウラとシャルは半身を起こす。

「こ、こんなところで・・・」

「ぼ、僕たちは・・・」

無人IS二体はゆっくりと近づいてくる。

「・・・こんなところで・・・倒れては・・・レイを守ることなんて・・・できない・・・。だから――――」

「・・・僕は・・・こんなところで・・・」

そして、デクーエースとアヌビスは二人に襲い掛かる。

「「負けられないんだあっ!」」

すると、上空から何かが急降下してきて、アリーナ内に侵入してきた。

そして、その二体はデクーエースとアヌビスに攻撃を掛け、撃破した。

「「!?!」」

それは・・・『アルトアイゼン・リール』と『ゲシュペンストMK-?・パワード』であった・・・

そして少し前では……

「くっ！」

セシリアはゼフィルスからの攻撃を避け続け、BTライフルで応戦するが、相手は軽々と全て避けていた。

あれから互いに一步も譲らない交戦を行っていたが、徐々にセシリアが押されていき、体力の消耗も普通ではない……

（しかし……。例えどのような状態だろうとも……！）

セシリアは『インターセプター』を展開してエムに切りかかるが、射撃戦寄りの戦いをするセシリアでは動きが鈍い。

「……遊びもこれまでだ」

「……！」

そしてエムはシールドビットを一斉展開すると、セシリアに向け一斉射撃を行った。

「くっ……！」

セシリアは何とか避けようとするが、かわしきれずほとんどの攻撃

を受ける。

そしてエムはライフルの先端にある銃剣をセシリアに突き立て、ブレードはセシリアの二の腕を貫通した。

「あああああっ!!」

耐え難い痛みが走り、その悲鳴を聞きエムの口元は邪悪に歪む。

「うう・・・くう・・・」

セシリアは痛みに耐えてライフルを持ち上げようとするが、その力も無くなりだしていた。

「一号機・・・所詮この程度か・・・」

エムは更に刃を食い込ませる。

「うっ・・・!」

痛みは更に大きくなった。

「・・・そ・・・それでも・・・」

痛みを絶えながらセシリアはエムを睨みつける。

「・・・諦めない・・・。まだ・・・負けたわけでは・・・ありませんわ」

「・・・戯言ざれごとを・・・死ね」

と、セシリアの周りにシールドビットが配置され、先端にビームを充填し始めた。

しかし、セシリアの顔には絶望の色は無い。

(・・・それでも・・・私は・・・！)

そして、シールドビットが発射された。

だが、その瞬間、上空からビームが出てきて、セシリアの周りにいたシールドビットを全て撃ち抜いた。

「なにっ!？」

そしてその直後にそれは猛スピードでこっちに向かってきて、ゼフイルスを蹴り飛ばした。

「うっ!」

それによってエムは後ろに飛ばされ、セシリアの二の腕に突き刺さっていたブレードは一気に抜かれた。

その瞬間にISの応急処置で傷口は塞がれた。

セシリアは何とか体勢を保ち、見上げた。

「あ、あれは・・・」

セシリアの視線の先には、長く大きなテスラウイングを展開して、

自身の丈より長いライフルを携えた白き墮天使の姿があつた・
・
・
・

S t o r y 4 3 皇帝現る（後書き）

ここから若干オリジナル展開になります。

そして次回では器を認めたはぐれ I S 達が自身の大いなる力をパートナーに託し、その力が発揮される・・・

Story 44 大いなる力

「・・・・・・・・リリース・・・・・・・・パスワード・・・・・・・・。なぜやつらが・・・・・・・・？」

ロイは新たに現れた『アルトアイゼン・リリース』と『ゲシュペンス
トMKー?・パスワード』の出現に困惑していた。

「・・・・・・・・!・・・・・・・・そうか・・・・・・・・そういうことか」

ロイはしばらく考えて、二体の目的を見抜いた。

「・・・・・・・・どういふことですか？」

ジンは怪訝そうに聞く。

「・・・・・・・・やつら・・・・・・・・目的を果たす気だな」

「え？」

ロイは二体を見た・・・

「お、お前たちは……」

ラウラとシャルは突然現れた二体のISに驚いていた。

リーゼとパスワードは無人ISを撃破した後、二人の前に立っていた。

「何しに来た！」

ラウラは警戒していた。パスワードは前に現れて、ラウラを襲ってレイに怪我を負わせたからである。

「……」

シャルは黙ったまま二体を見る。

『……お前たちの勇気と決意……。見せてもらった』

と、リーゼがしゃべりだした。

「……な、なに……？」

『我らの器に必要だったもの……。お前たちは我らが求めるぐらいそれを持っていた』

次にパスワードがしゃべった。

「……」

『そして……。試練を越えたお前達に……。今こそ我らの大いなる力を……。託そう』

「大いなる・・・力・・・？」

『そう・・・。我々を創造した博士が残した力だ』

「・・・博士？」

シャルは疑問に思うが、今はそんなことはいいとして考えるのをやめた。

「・・・僕たちにその力を託すって言ったけど・・・具体的にどうなるの？」

『・・・我らの体は量子変換され、お前たちのISと融合する』

フュージョン

「融合・・・だと？」

『それによって・・・お前たちのISに我々の大いなる力が宿るだろう』

「・・・そんなことが・・・」

こんなことは・・・ありえない・・・

『お前たちの常識ではありえないだろうが・・・我らの創造主はそれを可能にした・・・。そして、大いなる力を我らに残して・・・』

「・・・それって・・・僕たちにリスクってあるの？」

『・・・ない・・・。我らはお前たちのISと融合するだけだ』

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

シャルとラウラは一旦顔を見合わせた。

そして、二人はうなずくとIS二体に向き直る。

「・・・今・・・あなたが僕たちの力になるのなら・・・」

「私は・・・それを求める・・・」

二人は決意したようだ。

『・・・・・・・・ならば・・・・・・・・』

と、二体のISは右手を差し出す。

「・・・一体何を・・・？」

『我らの手を取れ・・・。そうすればデータインストールをして融合^{フュージョン}を開始して、我らの力はお前たちのものだ』

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

そして、二人はリーゼとパスワードの手を握った。

その後、握手した手から光が出てきた。

「うっ・・・」

「くっ・・・」

すると身体に痛みが少し走る。

そして二人のISに光が回路を通して通っていく。

『・・・そして・・・唱えよ・・・我らの名を!』

そして二人の頭の中にデータが流れた。

「・・・アルトアイゼン・・・リゼ!」

「・・・ゲシュペンストMKー?・・・パスワード!」

二人が名前を叫ぶと、そのまま光が包み込んだ・・・

そしてアリーナから離れたところでは・・・

「あ、あなたは・・・一体・・・?」

セシリアは前にいる機体に問いかける。

セシリアを助けた機体・・・それは『ヴァイスリッター・ツヴァイ』であった。

ツヴァイはその無機質な目でセシリアを見つめる。

「ば、ばかな・・・。なぜMK-？が助けた・・・!？」

エムは理解できなかった。

「・・・な、なぜ・・・わたくしを・・・？」

『・・・あなたの勇気・・・見せてもらいました』

「・・・勇気・・・？」

『あなたの決意と勇気は・・・私の器に相應しい・・・故に、私はあなたを助けた』

「・・・器・・・？」

『・・・そして・・・私のパートナーに相應しい・・・。私の大いなる力を・・・授けるのにも・・・』

「大いなる力・・・」

『・・・どうするかは・・・あなた次第ですが・・・』

と、ツヴァイは左手を差し出す。

「・・・・・・・・」

『どうしますか？』

セシリアはしばらく考えて・・・

「・・・本当に・・・わたくしの力に・・・なるのですね・・・？」

『ええ・・・。私の体は量子変換されて、あなたのISと融合して、
あなたは大きいなる力を得ます』

「・・・・・・・・」

「・・・それがわたくしの力になるのなら・・・わたくしは・・・それを望みます・・・」

そして、セシリアはツヴァイの手を握った。

その瞬間に手に光が出てきた。

『・・・これで・・・あなたは大きいなる力の継承者になります・・・
そして・・・私の名前を・・・唱えて下さい・・・』

そして手を通してデータがインストールされ、頭の中にデータが入る。

「……おいでなさい……ヴァイスリッター・ツヴァイ!」

セシリアは名前を叫ぶと、両者は光に包まれた……

そして所戻って……

「……!?! シャル・ラウラ……?」

レイは後ろから感じる膨大な光に、後ろを振り向く。

そしてしばらくすると、光が晴れていき、二人の姿が現れた……

「……あ、あれは……?」

レイはその姿に驚いた。

シャルのリヴァイブは、その姿を大きく変えていた。

脚部はリヴァイブのものからリーゼのものになっており、重厚なイメージになり、腰にはリーゼのサイドアーマーとフロントアーマーとリアアーマーが追加され、左腕には『五連チェーンガン』を内蔵したリーゼのものに変わっており、右腕はリーゼ最強の武器『リボルビングバンカー』を内蔵したリーゼのものに変わり、両肩にはリーゼの『アヴァランチクレイモア』とテスラウイングが搭載されたものが新たに追加され、背中にはリーゼのバックパックが新たに追

加され、その両サイドにリヴァイブのスラスターが搭載され、そのスラスターの下部にリーゼの『フレキシブル・スラスター』が追加された形になっていた。頭のヘッドバンド型のデバイスには新たにリーゼの『プラズマホーン』とチタンガードが追加されており、耳には新たに後ろに伸びるリーゼの耳が追加された。ISのカラーリングはリーゼのものに変わっている。

シャルのISはアルトアイゼン・リーゼとラファール・リヴァイブカスタム？を掛け合わせた姿になっていた。

その隣には、同じく姿を大きく変えたラウラのISがあった。

脚部はシュヴァレツェア・レーゲンのものだが、その側面にパワードの追加ブースターが追加され、腰にはパワードのサイドアーマーが追加され、両腕はパワードの腕がそのまま入れ替わって装備された感じで、両肩に新たにパワードの一部のアーマーが装備され、背中にはパワードのブースターパックと翼、そして追加ブースターが新たに追加され、その両サイドに武装が施され、右側にはシュヴァレツェア・レーゲンのレールカノンに口径が大きくなり、砲身が長くなった『レールカノン？』を搭載し、左側にはミサイルランチャーが搭載されていた。更に両肩のアーマーにはワイヤーブレードが搭載され、新たに二基追加されて計八基のワイヤーブレードを搭載していた。頭のデバイスは耳に新たにパワードの耳が追加されていた。

ゲシュペンストMKー？・パワードとシュヴァレツェア・レーゲンを掛け合わせた姿になっていた。

「これは・・・？」

シャルは自身が纏うISを見る。

同じくラウラもISを見る。

「本当にISと融合したのか・・・」

「そうみたい・・・」

そして、二人のモニターには様々な表示がされていき、しばらくしてすべての処理が完了した。

「・・・行くよ・・・ラウラ」

シャルはラウラのほうを見る。

「ああ・・・。みんなを守るために・・・」

そして、シャルは背中のスラスターと両肩のテスラウイングを展開して、ラウラはブースターを点火させる。

「・・・行くよ・・・アルト！」

「パスワード・・・行くぞ！」

そして二人は同時に飛び出し、無人ISと交戦している一夏たちのところに向かう・・・

所戻り、アリーナの外……

「くっ……。一体何を……」

エムは光から腕で目を庇い、しばらくして光が晴れて腕をのけると・
・・

「な……。なに……。!?」

エムは目の前で信じられないものを見た。

そこには、新たな姿を得たセシリアであつた。

脚部はブルー・ティアーズのものにヴァイスリッター・ツヴァイの側面のパーツが追加されており、腰にはサイドアーマー、リアアーマー、フロントアーマーが追加されており、両肩にはツヴァイの肩パーツを縮小したアーマーが装備され、左腕には『三連ビームガン』を内蔵したツヴァイの腕で、右もツヴァイのものに変更されている。背中にはツヴァイのバックパックが追加されており、テストラウイングは今は下に下ろしているが、大きさと長さから白いマントのように見える。右手には『アトラス・ランチャー』をベースに高出力Bトライフルを取り込んだ『ピアーズ・ランチャー』を携えていた。頭部のデバイスは新たに耳にツヴァイの耳が追加されていた。両肩の浮遊ユニットにはスラスターに回していた『ブルー・ティアーズ』が元通りに装備されていた。カラーリングはブルー・ティアーズの青と黒ではなく、ヴァイスリッター・ツヴァイの白と青をイメージさせるものになっていた。

ISはブルー・ティアーズとヴァイスリッター・ツヴァイを掛け合
わした姿になっていた。

「ばかな・・・ISがISに融合フュージョンしただと!?!」

エムは多少驚いているようだ。

「わたくしにもよく分かりませんが・・・これでわたくしは・・・
まだ戦えます・・・!」

そして、セシリアはテスラウイングを展開して『ピアーズ・ランチ
ヤー』をエムに向ける。

「・・・さあ!・・・勝負はこれからですわ!」

「くっ!」

そして両者は一気に勝負に出た・・・

所戻ってアリーナ・・・

「くらえっ!」

ラウラはキャノンを前に向け、無人ISに放つ。

アヌビスはシールドで防ぐが、キャノンの弾丸はシールドを貫通し、アヌビスの胴体を撃ち抜いた。

「凄い……。キャノンの攻撃力、貫通性能、射撃の精密度……。どれも以前より数倍上がっている……。！」

ラウラは性能に驚きながらも、他の無人ISに向かっていく。

「はあああつ！」

そしてラウラは左腕の『パワープラズマ・ステーク』を作動させて構える。

「ジェット・パワーマグナム！」

そしてアヌビスの胴体にステークを叩きつけて、その直後に衝撃を叩きつけて、アヌビスを撃破する。

「これならば……。いける！」

そしてラウラはレイの元に向かう。

「いけえ！」

その近くではシャルは左腕の『五連チェーンガン』でデクーエースに放って牽制し、右腕の『リボルビングバンカー』でデクーエースの腹部に突き刺し、一発叩きつけた。

その直後にデクーエースは吹き飛ばされ、腹部に風穴が開く。

「・・・！」

シャルは横から来るアヌビスの攻撃に反応して回避する。

そしてそのままスラスターを噴射させ、一気にアヌビスの懐に入るとバンカーを叩きつける。

「・・・凄い・・・。突進力に推進力・・・反応速度・・・安定性・・・すべてがリヴァイブを上回っている・・・。それに・・・」

シャルはアサルトライフルとアサルトカノンを展開すると前にいるアヌビスとデクーエースを撃ち抜く。

「リヴァイブの武器の性能も上がっている・・・」

シャルは機体の性能だけではなく、武器の性能が上がっていることに驚く。

「これなら・・・いける・・・！」

そしてシャルはレイの元に向かう・・・

「す、すげえ・・・」

一夏たちは残った無人ISを撃破して、二人の動きを見ていた。

「ISとISが融合・・・し、信じられん・・・」

箒はどうも信じることができないようだ。

「・・・でも、現に目の前で起きていることですね・・・」

神夜は多少驚いていた。

「・・・だが・・・」

「とりあえず、今残っているISを全て撃破しよう。それからレイ達を援護するぞ」

「・・・ああ」

「分かりました」

そして三人は残った無人ISに向かっていく。

（・・・凄いな・・・）

レイは二人の動きを見て、驚いていた。

（融合するとは・・・。あの二体にそんな力があつたとはな・・・
フュージョン

）

赤く変化したナハトはエンペラーと互角の戦いを見せていた。

・・・しかし・・・レイは何もしていない・・・

（ナハト・・・ISの中でお前が一番意思が強いんだな・・・）

レイは貧血の影響で意識が朦朧として、力があまり入らない。

（でも・・・俺もじっとしたままにはしないさ・・・）

レイはなんとか意識を保って、前を見る。

エンペラーは素早い動きでナハトに攻撃を掛けていくが、ナハトはそれを受け流してブレイカーの杭で攻撃する。

『・・・！』

そしてエンペラーはナハト後方から来る攻撃に気付き、一気に後ろに下がって回避した。

その攻撃はラウラのキャノンのものだった。

「シャル・・・ラウラ・・・」

「大丈夫、レイ？」

シャルはナハトの隣に来る。

「俺なら・・・大丈夫だ」

レイは少し弱々しく答えるが、何とかいつも通りにしゃべる。

「・・・よかった・・・」

と、シャルは安堵の息を吐く。

「それで、どのような状態なのですか？」

ラウラはシャルの反対側に来た。

「・・・相手の性能は強大だ。・・・だが、何とかなる」

「な、何とかなるって・・・。一体どうする気なの？」

「・・・あいつ・・・一定の時間だけはああして動きが止まる」

「え？」

二人はエンペラーを見ると、確かにこうしている間でも襲ってこない。

「どういことかは分らんが・・・やつに攻撃を続ければ何かが起こる可能性があるな」

「・・・それって・・・」

「まあ、百聞は一見に如かずだ。一気攻めるぞ！」

「分かった！」

「了解！」

そして三人はエンペラーに向かっていくと、エンペラーは再起動し、三人に向かっていく。

レイは左腕の『五連チェーンガン』で攻撃し、シャルは連装ショットガンで攻撃して、ラウラは右手にグレネードランチャーを展開してエンペラーに攻撃を仕掛ける。

エンペラーは素早い動きで攻撃を回避していくが・・・

「それならば！」

ラウラは左のミサイルランチャーを展開すると、エンペラーに向け放つ。

ミサイルはエンペラーに向かっていくが、エンペラーは素早く細かく動いてミサイルを回避していった。

「ふっ」

と、シャルは待っていましたかのように『ラビット・スイッチ高速切替』でアサルトルカノンを展開してエンペラーに向け放つ。

弾丸はエンペラーの胴体に直撃し、体勢を崩す。

「撃ち貫く！」

と、レイは猛スピードでエンペラーの左側から突進し、ブレイカーをエンペラーの横腹に叩きつける。

「シャル！」

「任せて！」

と、シャルは反対側から突進してきて、バンカーをエンペラーの横腹に叩きつける。

そして両者同時に横腹に叩きつけ、エンペラーはその衝撃で後ろに飛ばされる。

「もらった！」

その直後にラウラが『瞬間加速』イクニッション・ブーストをかけてエンペラーの懐に入り、右腕のステークを叩きつけ、その直後にA I Cでエンペラーの動きを止める。

そして右のキャノンをエンペラーの胴体に向けて、至近距離で連続発射した。

それによってエンペラーは後ろに飛ばされるが、何とか踏ん張った。

『……』

エンペラーは素早い動きでラウラに向かっていくが、その間にシャルが入り込む。

「この距離でクレイモア……貫ったよ！」

と、シャルは両肩のハッチを開き、無数のクレイモアを発射する。

エンペラーは急にはかわしきれず、クレイモアを受けた。

「止めといくか！」

と、レイはシャルの後ろから飛び出し、ブレイカーを構える。

すでに『スマッシュブレイカー』を発動させた状態だ。

『・・・・・・・・』

するとエンペラーはハンマーを構えると、先端にエネルギーを集中させる。

「アタックフアンクション！・・・インパクトクラッシュ！」

そしてエンペラーはそのまま渾身の一撃をナハトに向ける。

「面白い・・・！」

向かっていくレイもブレイカーをエンペラーに向け突進する。

そして両者の武器がぶつかり、衝撃波を起こして、両者は吹き飛ばされた。

「ぐっ！」

その衝撃でレイは傷からの激痛に襲われる。

そして何とか体勢と保って、地面に着地する。

「ど．．．どうだ．．．？」

レイが前を見ると、エンペラーはまだ立っていた。

しかし、スマッシュブレイカーの攻撃でエンペラーのハンマーは半分が砕け散っていた。

「くっ．．．。なんてやつだ．．．。」

ザアアア．．．．

「．．．．？」

しかしその直後にレイはある音を聞く。

「．．．この音は．．．ノイズ．．．？」

レイはエンペラーからノイズを聞く。

そしてエンペラーはハンマーを上にかけて、力を溜める。

「くっ．．．。またあれをやるつもりか．．．！」

レイはいつでも避けれるようにする。

そしてエンペラーがハンマーを振り下ろそうとした瞬間、エンペラーのカメラアイが消えた。

「……?」

そのままエンペラーは動きを止めた。

「どういことだ……?」

レイは警戒したが、エンペラーは一向に動き出す気配を見せない。

「……どうするの……?」

シャルはナハトの隣に立つと、ナハトの色が元の青に戻っていった。

(時間切れか……)

レイはアビリティーの限界時間だと察知した。

「……動きが止まったのなら……警戒をしながらやつを捕獲する」

「捕獲をするのですか?」

ラウラはレイの隣に立つと聞いてきた。

「それしかないだろ……。さっさとすませてセシリアの救助に向かう」

と、レイが近付こうとした瞬間……

「チェストオオオオオオオオ！！」

と、上空から何かが降下してきた。

「!？」

レイはいち早く気づき、とっさに後ろに下がる。

するとレイがさっきまでいたところに馬鹿でかい大剣が叩きつけられ、地面が割れた。

「な、なんだっ!？」

レイは驚きながらも前を見ると、そこには一体のISがいた。

全体白いカラーで、姿から日本の武將を思わせる姿で、背中には黄色の輪があり、緑の光を放っていた。両手で持っているのはかなり大きな大剣で、先ほどの攻撃に使われたものだ。

「こ、こいつは・・・」

レイは臨戦態勢に入るが、前にシャルとラウラが出る。

「レイは下がって!」

「だ、だが・・・」

「その状態ではあなたは戦えないでしょう!」

「・・・・・・・・」

ラウラの言うことは最もだ。スマッシュブレイカーを使った後はシールドエネルギーが尽きている。しかもレイの状態から無理は禁物だった。

「レイは先にセシリアを助けに行って！」

「だ、だが・・・二人だけじゃ・・・」

「俺たちもいるぜ！」

と、無人ISを全て撃破した一夏たちが合流した。

「一夏・・・」

「ここは私たちに任せろ」

「ですから、レイさんはセシリアさんを！」

「・・・・・・・・みんな・・・・・・分かった」

と、レイは後ろを振り向く。

「チェンジ！アーベント！」

と、走り出すと同時に光がナハトを包み込み、そしてアーベントに切り替わった。

「・・・・うつ・・・・い、いくぞ・・・・！」

と、レイは一瞬くらむが、なんとか耐えてアーベントのウイングを展開してアリーナの外に向かった・・・・

「ブルー・ティアーズ・・・行きなさい！」

と、両肩の浮遊ユニットからビットが切り離され、ゼフィルスに向けて砲撃する。

「くっ！」

エムは回避しながらシールドビットで防ぐ。

セシリアはそのままビットで攻撃しながらエムに向かっていく。

（・・・ブルー・ティアーズの弱点が・・・融合によって改善されているなんて・・・）

ブルー・ティアーズは止まっていないと操作ができないと言う欠点があったが、ツヴァイと融合したことでシステムが改善され、このように操作しながら移動ができるようになった。

「調子に乗るな！」

と、エムはライフルでセシリアに向け放つが、セシリアはさっきまでのスピードを凌駕するスピードで避ける。

「ば、ばかな・・・！？これほどまでの力を得たと言うのか！？」

エムは前の相手がさっきまでと全く違うことに驚く。

そしてセシリアは右手に持つ『ピアーズ・ランチャー』の『Bモード』でエムに向け放つ。

「だが、それだけは・・・」

と、エムが回避しようとした瞬間・・・ビームがエムに向かって曲がる。

「な、なにっ！？」

そしてビームはエムに直撃する。

（先ほどの想いで・・・『フレキシブル偏光制御射撃』を会得しましたわ・・・。それと融合でそのサポートまで作られるなんて・・・凄いですわ）

と、セシリアは『Eモード』でエムに向け攻撃する。

「くっ！」

エムは回避するがさっきまでの射撃とはまるで別人と思わせる精密なものになっていた。

「ば、ばかな・・・。ISと融合フュージョンしただけで・・・なぜだ！？」

「あなたには・・・一生分かりませんわ！」

と、セシリアは左腕の三連ビームガンを向けると、ビットとランチヤーを向けて、一斉射撃を行った。

「ぐっ！」

エムは高速回避とシールドビットで攻撃を回避するが、シールドビットはピアーズ・ランチヤーの貫通性能に負け、ビームはビットを貫通した。

「くっ！」

エムは歯を食いしばると、猛スピードでセシリアに向かっていく。

だが、その直後にエムに向かってビームが放たれた。

「・・・！」

エムはとっさに避けて、ビームが来たほうを見る。

「な、なに・・・！？」

それは、『パルチザン・ランチヤー』を構えて、高速で向かってくるヴァイスリッター・アーベントであった。

「アーベント……。レイさん！」

「あれは・・・？」

レイは向かっていくと、セシリアの姿に驚く。

（ヴァイスリッターのパーツ……。ってことはあれ以外にもヴァイスリッター型のISがいたのか……。まあ、あの二体が居るとこれがいってもおかしくはないか……。いや、それ以前にセシリアも器に選ばれていたのか……）

レイは考えながらもセシリアの近くで止まる。

「待たせたな」

「結構な遅刻ですわよ？」

「・・・すまんな……。あっちでもどんぱちやっていたんだよ」

「・・・まあでも、わたくしに何かお礼をしてくだされば、許してあげますわよ？」

「・・・ははは・・・条件付きか……。まあそれは付き物か……。いいだろう。あの時貰った懐中時計のお礼を兼てでな」

「そ、そうですか・・・」

と、セシリアは若干頬を赤らめる。

「とりあえず、この場を片付けるが先決だ」

「そうですわね」

と、白き墮天使二体はエムに向き直る。

(・・・ゲシュペンストMKー？が・・・二体だと・・・？)

エムは驚きを隠せなかった。

「・・・・・・・・？」

すると、通信が入った。

『エム……。直ちに帰還しなさい』

相手はスコールからであった。

「・・・・・・・・」

『こちらからモニターしているわ。その状況ではあなたが不利なだけよ』

「・・・・・・・・分かった・・・」

と、エムは後ろを振り向くとそのまま猛スピードで立ち去っていく。

「！・・・今度こそ逃がしませんわ！」

と、セシリアはランチャーを構える。

「アタックファンクション！・・・ホーミングショット！」

ピアーズ・ランチャーの二つの銃口から弾丸が二発ずつ発射され、計四発の弾丸がエムに向かっていく。

「くっ！？」

エムは猛スピードで逃げていく。

「無駄ですわ！」

セシリアが叫ぶと、弾丸はエムを追いかけていった。

「・・・！？」

エムは複雑に動いて弾丸を撒こうと思ったが、弾丸はその複雑な動きに対応してエムをしつこく追いかける。

「ちっ・・・！」

エムは最後の手段として、残りのシールドビットをパージして、ライフルを捨てた。

そして追いかけていた弾丸は捨てられたそれに直撃して、爆発した。

エムはそのまま猛スピードで離脱した。

「あっ！」

セシリアは追いかけてしようとしたが、レイはそれを止めた。

「今から追いかけても、どの道追いつけないだろう・・・」

「・・・そ、そうですわね・・・」

「アリーナに急ごう・・・。まだどんぱちやっているはずだ」

「はい！」

そして、二人はアリーナのほうへ飛んでいくが、アーベントが一瞬揺れる。

（・・・うう・・・まだ・・・耐えてくれ・・・）

レイの意識はいつ消えるかわからない状態だった・・・。

それでもなんとか意識を保って、レイはアリーナに向かっていくのだった・・・。

S t o r y 4 4 大いなる力（後書き）

なぜかフュージョン・・・と聞くと何か思い出してしまう・・・。

Story45 かつての者

レイがセシリアを助けに行った直後でのアリーナでは……

「どりゃあああっ！」

一夏は雪片を白いISに切りつけるが、ISはでかい大剣で防ぐ。

「ぐっ！」

白いISはそのまま白式を押ししていく。

「何て力だ……。だが、こっちだって……！」

と、一夏はウイングスラスタを噴射させて白いISを押ししていく。

「ふん……」

白いISの操縦者は一瞥すると、強引に白式を弾き飛ばす。

「うっ……！」

一夏が弾き飛ばされ、白いISが向かおうとするが、その後方にシ

ヤルがアサルトライフルを構えていた。

「いけえっ！」

そしてアサルトライフルの銃口から弾丸が飛び出した。

「……………」

しかし白いISは素早い動きで弾丸を避けた。

「は、速い……。けど！」

シャルは『高速切替』でアサルトライフルを収納し、新たに右手に連装ショットガンを展開した。

「まずは私からだ！」

と、シャルの後方からラウラが飛び出し、右のキャノンを白いISに向け、砲撃する。

しかし、白いISは今度は大剣で弾丸を弾いた。

「くっ……。！ならば！」

と、今度は左のミサイルランチャーを展開して白いISに向け放つ。

白いISはそのまま大剣でミサイルを防ぐ。

「動きが止まったな！」

と、ラウラは『瞬間加速』をかけて、左腕のステーキを起動させる。そして煙が晴れたときには、ラウラは白いISの大剣の刀身の腹にステーキを叩きつけた。

「ジェット・パワーマグナム！」

そして衝撃を叩き込むが、大剣の刀身に損傷を与えたわけではなく、白いISはただ少し後ろに下がっただけだった。

「くっ・・・！」

そして白いISは大剣を振り払おうとした。

「ラウラ下がって！」

と、後方からシャルが接近して、連装ショットガンを白いISに向けて放つ。

白いIS肩に弾丸が直撃し、それによって動きが鈍る。

「すまん！シャルロット」

ラウラはとっさに後ろに下がりながらキャノンで牽制する。

「・・・・・・」

白いISは大剣を一旦振るって、キャノンの弾丸を切り裂き、シャルに向かっていく。

「くっ！」

シャルは左手にアサルトカノンを展開して、白いISに向け放ちながら距離を保つ。

白いISは大剣を軽々と操って弾丸を弾いていく。

そして、白いISがシャルの攻撃をかわして一気に飛び出してきた。

「・・・かかった！」

すると、シャルは連装ショットガンを白いISに向け投げ放った。

白いISはショットガンで大剣で切り裂くと、ショットガンが爆発して煙を上げた。

「いけええっ！」

そしてシャルはスラスタを一斉噴射して白いISの懐に入った。

「・・・！」

白いISは視界を遮られていたので、反応が遅れた。

「撃ち抜けっ！」

そしてシャルは右腕の『リボルビング・バンカー』を白いISの腹部に叩き込む。

ガキンッ！

しかし、三発目に入ると、鈍い音がした。

「!?!?・・・弾切れ!?!」

シャルは激しい戦闘でバンカーの残弾数を忘れてしまった。

「・・・・・・・・」

そして白いISは左の拳でシャルを殴りつけた。

「ぐっ!」

シャルはそれによって後ろに飛ばされて、体勢を崩す。

「・・・・・・・・!」

しかしシャルの後方から箒によるブレードからの光波による攻撃で、白いISは回避行動に入る。

「推して・・・・参ります!」

その直後に神夜が白いISに向かっていく。

そして斬冠刀と大剣が交じり合い、衝撃波を起こす。

「・・・・・・・・この動き・・・・・・・・おもしろい・・・・・・・・!」

白いISは神夜を強引に弾き飛ばすと、大剣を横に振るう。

神夜はすぐに斬冠刀を横にやって、白いISの斬撃を防ぐ。

その直後に神夜は斬冠刀を強引に振るい、白いISを弾き飛ばした。

「そこです！」

そして神夜は高機動パッケージ込みの『瞬間加速』をかけて、白いISに斬冠刀を振るう。

「・・・ふっ」

しかし、白いISはすぐに大剣を前に出して、神夜の斬撃を防ぐ。

「くっ・・・！」

そして、白いISはそのまま神夜を弾き飛ばすと、その直後に大剣を振り下ろす。

神夜はとっさに斬冠刀を振るい、大剣を弾くと、そのまま振り上げる。

しかし、白いISは大剣を地面に叩きつけると、その反動で後ろに下がった。

「やりますね・・・。しかし！」

神夜は斬冠刀を両手で持って構えた。

「秘儀！・・・月華乱舞！」

神夜は斬冠刀を舞うように三回振るい、三発のピンクの光波を射出した。

「・・・奥義・・・斬艦刀・・・疾風怒濤・・・！」

すると、白いISは斬艦刀と呼ばれる大剣を地面に強く叩きつけた。そしてそこから巨大な衝撃波が発せられ、光波を簡単にかき消した。

「この動き・・・まさか・・・!?!」

神夜はその動きに見覚えがあった・・・

「・・・・・・・・」

すると衝撃波はそのまま神夜のほうへ突き進んでくる。

「くっ・・・！」

気を取られていた神夜はその衝撃波を受けてしまい、後ろに飛ばされた。

「・・・・・・・・」

しかし、白いISはそれ以上神夜に襲い掛かろうとはしなかった。

（・・・潮時か・・・）

と、白いISは後ろに下がると、ハンマーを振り上げたまま止まっているエンペラーの腕を掴むと、そのまま上に飛んでいった・・・

「・・・逃げていく・・・？」

シャルは撤退する白いISを見上げた。

「あくまであの機体の回収、か・・・」

ラウラは相手の目的をある程度推定した。

「・・・・・・？」

すると、何かが接近するアラームが鳴る。

「・・・あれは・・・」

ラウラはそれが接近してくるほうを見ると・・・

「・・・レイ・・・。それに・・・」

シャルはセシリアのISの姿に驚いた。

「どういことだ・・・？セシリアのISが変化している・・・」

「セシリアも僕たちと同じく、他のISと融合フュージョンしたの」

「・・・だが、セシリアは他のISに襲われたとは言っていないが・・・？」

「・・・・・・」

そしてセシリアとレイは一夏たちと合流した。

「あら・・・シャルロットさんとラウラさんもわたくしと同じ事になっていたんですね」

「そのようだな」

「それより、どうしてセシリアもそうなったの？」

「実はですね————」

セシリアはすべてを話した・・・

「なるほど・・・。お前が危機に陥ったときにそれが現れたのだな？」

「ええ。それからわたくしを器として認めて、わたくしのブルー・ティアーズと融合フュージョンをしました」

「・・・なんだか・・・僕達のとくと比べるとあっさりしているよね」

「・・・？　どういうことですか？」

「僕たちのときはなんだか戦いを挑んできたんだよね」

「ああ。結果的にはこのようにして融合を果たしたのだから」

「・・・そういえば、前にシャルロットさんとラウラさんはISに襲われたって言っていましたわね」

「そうだ・・・。その時にレイは私を庇って・・・」

と、ラウラの表情が曇る。

「ラウラ・・・。もういいんだ・・・」

と、レイはラウラの肩に手を置く。

「レイ・・・」

「もう過ぎたことだ。それに・・・そいつはもうお前のものなんだろう?」

「・・・そうですが・・・」

「なら、問題はないはずだ」

と、レイは近くで倒れている無人ISの残骸に近付き、胴体に突き刺さっていた『グレイヴディガー』を抜き取って、収納した。

「・・・そ、それより・・・」

すると、レイは若干ふらつく。

「み、みんな・・・怪我はないな・・・?」

「・・・？・・・うん・・・。僕はないよ」

「私ありません」

「俺もないぜ・・・。っていつても、ISのほうは傷だらけだけだな」

一夏の白式の装甲表面は傷だらけだった。

「私もそれといった怪我はない」

「私もそれほど大きな怪我はありません」

「わたくしは・・・。右腕を負傷しましたわ・・・」

セシリアの右の二の腕にはブレードによって貫かれた後があり、I
Sの能力で止血はされているが、傷口は結構深い。

「そ、そうか・・・よかった・・・」

すると、レイのふらつきはどんどん大きくなる。

「・・・どうしたの？」

シャルはその異変に気付く。

「・・・うつ・・・」

そしてレイは後ろに倒れる。

「あっ！」

シャルはとっさに飛び出し、レイを抱える。

「どうしたの!？」

「じゃ、シャル・・・」

すると、レイのISが解除された。

「っ!？」

シャルは絶句した。

レイの額の傷口からは血がにじみ出て、レイの顔左半分の流れ出ていた。

そして背中 of 傷口からの出血もひどかった。

「ど、どうしたの!？そ、その血は!？」

シャルはあまりにもひどい状態に混乱していた。

そして他のメンバーも急いで寄る。

「・・・あ、あいつが襲撃して墜落した時に・・・その衝撃で・・・傷口が開いてな・・・」

「ま、まさか・・・そんな状態で戦っていたの・・・!？」

「・・・ま、まあな・・・」

「どうして!？」

「・・・お、俺だけ・・・休んでいるわけには・・・いかなかったかな・・・」

「・・・な、なんで・・・」

と、シャルの目からは涙がこぼれる。

「・・・仲間を・・・守るために、だ」

「・・・?」

「・・・・・・」

そしてレイは氣を失った。

「れ、レイ!」

すると、ラウラがとっさに状態を見る。

「・・・大丈夫だ・・・。氣を失っているだけだ・・・。だが・・・状態はかなりまずい・・・」

「い、急ごう!」

そして、シャルはレイを抱えたまま急いでアリーナの室内に向かうのだった・・・

「・・・凄いな・・・」

と、ロイは戦闘の一部始終を見ていた。

「・・・まさかIS同士による『融合』フュージョンを行うとは・・・。俺の考えを超えているな」

ロイは苦笑いしてそれらのことを言う。

「ジ・エンペラー・・・どうやらあの動きにプロトタイプのシステムじゃ追いつかなかったようだな・・・」

「そうですね・・・。私のときとほぼ同じ流れでしたね」

ジンは過去に同じ経験を体験したらしい・・・

「・・・しかし・・・『月光丸』を投入してくるとは・・・。やつらも本気ではじめてきたようだな」

「・・・月光丸・・・」

ジンは白いIS・・・月光丸の名をぼそりという。

「・・・どうやら俺たちの出番はなかったようだな・・・」

「・・・そうですね」

「・・・すまんジン。呼んでおいてなにもなくて」

「いいんです。それはないほうがいいと言ったことありますから」

「・・・そうだな」

そして、ロイとジンはアリーナを出るのだった・・・

（・・・そういえば・・・）

アリーナから出てしばらくして、ジンと別れたロイは自分の喫茶店で準備をしていた。

（・・・なんとなく・・・あいつのことを思い出したな・・・）

ロイはとある人物のことを思い出した・・・

その人物はロイにとっては娘のように慕っていた人物で、ロイが作ったISのテストパイロットをしてくれた人物であった。

（・・・あれからもう四年経つのか・・・）

ロイはその人物と最後に別れた時を思い出す。

（・・・ティファ・・・元気でいてくれよ・・・）

ロイはその人物を思うのだった・・・

S t o r y 4 5 かつての者（後書き）

月光丸の操縦者は・・・大体分かるはず・・・。
ちなみに、最後の場面では新しい展開がありそうです・・・

Story 46 もう一つの存在

「せえの」

「一夏、お誕生日おめでとうっ！」

と、鈴の合図と共にクラッカーが次々と鳴っていった。

「お、おうサンキュー。」

時刻は夕方五時・・・場所は織斑家である・・・

「・・・でも・・・なんだよ、この人数は・・・」

一夏はリビングにいるメンバーを数える。

箒、セシリア、鈴、シャルロット、ラウラ、レイいつものメンバーに加え、一夏と鈴の中学時代の友達であった五反田弾・・・その妹の蘭・・・更に加えて生徒会メンバーの楯無さんとのほほんさん、虚さんという大勢であった。

なので、リビングはパンク状態だった。

「ところで・・・レイ」

「ん？」

しばらくして、一夏はレイの元に行く。

頭の包帯は新しいものに変えられており、真っ白だった。

「大丈夫なのか？なんかすごいことになっていたけど・・・」

「ああ・・・大丈夫だ」

「大丈夫って・・・あんなに出血していて・・・そうやってピンピンしてられるのかな・・・」

レイは気を失って、数十分後には目が覚めて、今のように元気でいたと言う・・・

「でも・・・なんだか信じられないよね・・・。あんなに出血していても・・・ないなんて・・・」

シャルは心配そうにレイの元に寄る。

あの時点での出血レベルは『C』に達しており、本当なら生命維持に危険が及ぶレベルらしい・・・。それでもレイはこんなに元気だと言う・・・

「まあ俺もさすがに危ないと思ったけどな・・・」

「そんな軽いノリって・・・」

シャルは半分呆れた感じであった。

「さすがに山田先生や織斑先生から色々と言われたな。怪我が問題ないぐらい治るまで大人しくするように言われたんだよな・・・。まあ、ISのほうも修理に専念しないと少しまずい状態なんだよな」

アーベントは特に問題はないが、ほか二機はそうとう損傷があるらしく、しばらく展開は無理だと言う・・・

「・・・そこまで元気なら・・・大丈夫だよね」

「・・・そうだな・・・ところでシャル」

「なに？」

「・・・ISはあの後どうなったんだ？」

「・・・この通りだよ」

と、シャルは紐を引っ張り、服の内側にあったペンダントを出した。

「・・・色が・・・変わっている・・・？」

リヴァイブの待機状態はオレンジのペンダントなのだが・・・シャルの手には赤をメインとして、黒と白が施されたものだった。所謂アルトアイゼン・リーゼカラーになっている。

「どうやら一時的じゃないみたいで、これからもこうしているみたい」

「・・・ふーん・・・。じゃあセシリアとラウラも同じなのか？」

「ええ。わたくしのはこうなっておりますわ」

と、セシリアは髪をのけると、左の耳につけているブルー・ティアーズの待機状態のイヤークアフスを見せる。

青と黒が以前のだが、今は白と青のカラーリングになっていた。

「へえ・・・。こうなっているのか。ラウラは・・・たぶん変わっていないんだろう？」

「・・・まあ・・・そうですね」

シュヴァレツェア・レーゲンの待機状態はレッグバンドで、機体色が同じと言う事で融合後外見に変化はないとのこと・・・

「しかし・・・。あの後三人はどうしたんだ？」

「あの上に多少事情聴取を受けたんだけど・・・」

「言葉だけでは分からないと織斑先生はおっしゃったので・・・」

「後日学園内の研究所で精密な検査を行うことになりました」

と、シャル、セシリア、ラウラの順で言った。

そもそもISとISが融合すると言うこと自体前代未聞の現象であり、その貴重な例として研究に役立てられるらしい・・・。余

談だが、束さんが見たら相当興奮しそうな気がする……

「なるほど……」

と、レイは納得した。

「ところで……名前はとうするんだ？」

「名前？」

シャルは疑問に思った。

「せっかく融合して新しくなったのに、同じ名前のままって何かつまらんだろ？」

「……うーん……」

シャルは顎に手を当てて考えた。

他二人も同じようにして考える。

「……そうだね……。せっかくだし……考えてもらおう？」

「……そうですわね」

「そうだな」

と、三人は承諾した。

「それで、どういう名前にするの？」

「・・・そうだな・・・。シャルは『アルトアイゼン・リーゼ』って名前のISとだから・・・差し詰め・・・『アルトアイゼン・リヴァイブ』か『ラファール・リーゼ』ってどうだ？」

「『アルトアイゼン・リヴァイブ』・・・『ラファール・リーゼ』・・・」

シャルはレイが言った名前を繰り返す。

二体のISの名前の一部から取り、どちらとも直訳すれば『古い鉄の再誕』『疾風の巨人』となる。

「まあどっちがいいか、考えてくれないか？」

「うん・・・。そうするよ」

「それで・・・私はどうですか？」

と、ラウラが訊いてきた。

「うーん・・・そうだな・・・。ゲシュペンスト系統のISだから・・・」

レイはしばらく考えて・・・

「・・・差し詰め・・・『ゲシュペンスト・レーゲン』か『ゲシュペンスト・シュヴァルツ』っていうのはどうだ？」

「・・・ふむ・・・」

ラウラは名前を心の中で繰り返す。

直訳すれば『亡霊の雨』『黒き亡霊』となる。

「まあ、どっちがいいか考えてくれ」

「わかりました」

「それで・・・わたくしのはどうですか？」

と、最後にセシリアが聞いてきた。

「・・・うーん・・・セシリアの場合・・・」

レイはしばらく考えたが・・・

「・・・どうもピンつと来るのがないんだよなあ・・・ブルー・テイアーズとヴァイスリッターとじゃ名前が中々かみ合わないような気がするんだよな・・・」

「そ、そうですか・・・」

「・・・もう少ししたら・・・いいのが浮かぶかもしれないから、それまで待ってくれるか？」

「・・・仕方ありませんわね・・・では、いいのが浮かびましたら、言って下さいね」

「ああ・・・。ところで、怪我のほうを大丈夫なのか？」

セシリアの右の二の腕には包帯が巻かれていた。

「ええ。少し痛みますが・・・問題はありませんわ」

「そうか・・・それはよかった」

レイはとりあえず一安心した・・・

そうして、誕生日会は盛り上がっていった・・・

その頃・・・

「ふう・・・もうこんな時間か・・・」

ロイは店の時計を見ながらグラスを磨いていた。

「・・・」

そして少しすると店の扉が開く。

「……………」

ロイはそのお客に警戒した。

蛍光灯で輝く金髪で、ドレス姿のスタイル抜群の美女だった。

「お久しぶりですわね……博士」

「……………スコール……………」

「……そう警戒しないで下さい。別に襲うわけではありませんから」

「……………素直に信じているのか？」

「まあ、そう簡単に信じてはもらえませんか。・しかし、拳銃は持って来てはいませんわ」

と、両手を上げて何もなかったことをアピールする。

「……………まあ、いいだろう」

「どうも」

と、スコールはバーの席に座る。

「……………それで、何がいいんだ？」

「……そうね……………。じゃあいつもの」

「……………常連ならそれでいいが……………」

「あら・・・。私は常連だったけどね・・・。昔の店では・・・。」

「・・・・・・・・」

ロイは黙ったまま、コーヒーを入れる。

少ししてコーヒーをスコールの前に置く。

「ありがとう」

と、スコールはコーヒーカップを持つと、コーヒーの香りを一旦嗅いで、一口飲む。

「・・・昔と変わらないおいしさね・・・。それが一番気に入っているところだけだね」

「・・・そりゃどうも」

スコールは再度一口飲むと、一旦カップ受けに置く。

「・・・それで、一体何の用だ・・・。っていつでも、大体言うことはわかるけどな」

「・・・そう・・・」

「・・・俺は戻る気はないぞ・・・。あそこでは嫌と言うほどに嫌な思いをしたからな」

「・・・あなたには・・・正直申し訳ないと思っているわ・・・。あ

なたに研究を急がせた結果が、あの惨事を引き起こしたものの・・・」

「・・・分かっていたのなら・・・なぜ・・・」

「それはわかるでしょ？・・・あなたはかつての天才科学者を越えた科学者・・・。亡国機業はそれを求めた・・・」

「・・・その求める技術っていうのが・・・絶望の方にするのか・・・」

「・・・そう・・・。かつてイノベーターが求めた発明品・・・『エターナルサイクラー』・・・。それをも超えるあなたの究極の発明品・・・『エターナルドライブ』・・・両者も使い方を誤れば、絶望にもなる・・・」

「・・・それを求めるお前たちの考えが・・・分かんない・・・」

「・・・亡国機業は悪の秘密結社・・・。それ故・・・選ぶのも絶望になるものを選ぶ・・・」

「・・・」

「・・・そういえば・・・。リイルのことは・・・残念だったわ」

「・・・」

ロイは拭き終わったグラスを置く。

「・・・私だって親友の死は悲しいわよ・・・。でも、夫のあなたのほうが・・・一番悲しいわね・・・」

「・・・それが・・・俺への罰なのかな・・・。禁断の箱を開けた・・・罪なんだろうな・・・」

「・・・・・・・・・・」

しばらく沈黙が続き・・・

「それじゃ・・・私はこれで・・・」

と、スコールは席を立つと、出口に向かう・・・

「・・・言っておくが・・・俺の考えは変わらないぞ・・・」

「そう・・・。でも、亡国機業はいつまでもあなたを追い続けるわよ・・・」

そして、スコールは店を出た・・・

「・・・俺の贖罪は・・・どこまで続くのだろうか・・・永遠と続くこの命で・・・」

ロイは静かに残ったグラスを磨きだした・・・

所戻って……

「……………」

レイは一夏の家から一旦出て、外を散歩していた。

夏も終わり、夜の風は少し肌寒いものだった。

レイはしばらく歩いて自販機の前に立つとポケットから小銭を出し、自販機に入れてコーラー缶を買った。

「……ふう……」

缶を開けて、レイは一口飲んで、一息つく。

「それにしても……………」

レイはコーラを多く飲むと、考えた……

（…………あのIS……なぜ俺を襲い掛かったんだ……？……理由が分からん……）

最初にジョーカーで、その次にジ・エンペラーと、次々とレイに襲い掛かってきた……。

しかし、襲い掛かる理由は不明だ……。

（ある意味運がないのか・・・それとも・・・）

レイはコーラを一気に飲み干して、ゴミ箱に投げ入れた。

「まあ、今考えたって・・・何も浮かんでこないか・・・」

と、数歩前に歩き、空を見上げた。

「それにしても・・・今日の満月はきれいだな・・・」

いつもより少し輝きがある満月はうっすらと地面を照らしていた。

「・・・そうだね・・・。今日の満月は本当にきれいだね」

「!？」

レイは左側から声がして、とっさに振り向く。

「誰だ!」

「・・・そんなに驚かなくてもいいのに・・・せっかくのご対面が台無しじゃない・・・」

「なに・・・?」

そして、影に隠れていたその人物が近付いてきて、月の光に照らされた。

「な、な．．に．．？」

レイは自分の目を疑った．．．。

目の前にいるのは．．．自分だった．．．

いや、背は自分より低いとは言えど、その顔は鏡に映った自分の顔までに瓜二つだった。

「な、なぜだ．．？．．なぜ．．俺の顔と同じなんだ．．？」

レイは若干混乱していた。

「それは当然だよ．．．。兄さん」

「な、なに？」

「あなたは私．．私はあなたなんだよ？．．．私のオリジナル」

「．．オリジナル．．だと？」

「そう．．．。私の名前は．．．『レナ・ラングレン』．．」

「な、なんだと．．？」

「．．．兄さんのパーソナルデータを元に作られた．．．完全なクローン．．」

「く、クローンだと．．．？」

「そう……。兄さんはあの『施設』最強の称号『レジェンド』を持つ最強の兵士……。それからできたクローン計画の中で生み出された……。唯一の成功品……。それが私」

「……なに……？」

「……でも、こうして生で会うのは……。これが初めてだけどね」

と、レナは自販機にもたれかかる。

「……そのクローンが何のようだ……。オリジナルを倒しに来たのか」

「……倒す？……。尊敬して、敬愛している兄さんを倒す……。まあ、最初のところはそう言われていたっけ？」

「……なに……？」

「……でも私は……。そんなことはどうでもいいの……。兄さんに会いたかった……。ただそれだけ……」

「……」

「それに、兄さんに会うまで……。相当な苦労があったんだよ……。亡国機業に入っているのも……。その一環だよ」

「なに！？お前……。亡国機業のメンバーか！」

と、レイは臨戦態勢に入る。

「まあまあそんなに警戒しないでよ……。私はただ兄さんに会いに来ただけだから……」

と、レナは両手を上げて何もないことをアピールする。

（……確かに敵意は感じないが……。いや、畏かもしれない……）

レイの警戒は緩まなかった。

「……そもそも……。亡国機業とかイノベーターとか……。私にはどうでもいいことなんだよね……。ただ兄さんに会いたかっただけだから」

「……イノベーター……。？」

「知らないの……。今日のキャノンボール・ファストの第二襲撃隊と第三襲撃隊は、イノベーターの無人IS隊だよ」

「なに……。？」

「でも……。それを知っても、それから何ができるかは知らないけどね……。？」

「……。どういことだ……。？」

パンツ！

「！。？」

すると銃声が響きレイはとっさに音がしたほうを向く。

「銃声だど!?!」

「おや?・・・ここに来たのは私だけだと思ったけど・・・どうやらもう一人いたみたいね・・・」

「・・・お前・・・!」

「言っておくけど・・・私にはめていないから・・・」

「・・・!」

レイはとっさに飛び出し、レナを取り押さえようとした。

「おっと・・・!」

と、レナは軽やかなジャンプでレイを飛び越えた。

「なっ!?!」

「そういえば、兄さんのISはあの戦闘で相当損傷したんだっけ?」

と、レナは音を立てずに地面に着地した。

「くっ・・・! ISがどうにもなければ・・・!」

「・・・まあ・・・それでも私はそう簡単には捕まらないよ?・・・だって兄さんのクローンだもん」

と、レナは首に掛けているドッグタグを輝かせ、『シュヴァレツェ
ア・ウインド』を展開した。

「なにっ!？」

そしてレナはA I Cでレイの動きを止める。

「くっ・・・A I C・・・だと・・・」

「そうだよ・・・。言っておくけど、このA I Cは通常と異なって、
この場に残すことができるんだよ?」

と、レナが手を離してもA I Cはそこに留まった。

「・・・お、お前・・・」

「少ししたらそのA I Cは自動的に解除されるからね・・・。じゃあ
ね」

と、レナはそのまま猛スピードで上空に上がって、そのまま消えて
いった。

しばらくしてA I Cが解けて、レイは膝を着いて座る。

「・・・くっ・・・」

そして、レイはレナが消えたほうをじっと見るのであった・・・。

Story 46 もう一つの存在（後書き）

これの外伝ストーリーを同時に掲載し始めたので、そちらも見て下さい。

ちなみにこのストーリーと同じ世界観です・・・

それと、シャルロットとラウラのISの名前なんですが・・・どっちがいいですか？それと、セシリアのISなんですが・・・どうもいいのが浮かばないので、考えてくれたら参考にできます・・・。

Story 47 新たなる力

「なにっ！昨日襲われただど！？」

「あ、ああ・・・」

そして後日・・・IS学園の寮の食堂で、レイは昨日起きたことを聞いた。

どうやら一夏が昨日外にいたときに襲われたようだ。

「どうも亡国機業のものだったらしい・・・でも、そのときにラウが助けてくれたから、なんとか無事でいられたんだ」

「そうか・・・」

「そういえば、レイもそのときって外にいなかったっけ？」

シャルが訊いてきた。

「ああ・・・。確かそのときに銃声があったが・・・まさかそれとは・・・」

「・・・そういえば・・・何かあの時飛んでいなかったか？」

「・・・え？」

レイは少し反応する・・・。

レイは自身のクローンであるレナのことは言っていない。

「・・・いや・・・。俺は見えていない」

「そうか・・・」

一夏は深く聞こうとはしなかった・・・。

しばらくして、レイは自室に戻ると、ベッドに腰掛ける。

「はぁ・・・」

レイはため息つくと、制服の上着を脱いで、ベッドに放り投げる。

首辺りの肌が見えているところに背中にも巻かれている包帯が見えていた。

「・・・」

そしてベッドから立ち上がると、テーブルの上に置いてあるノートパソコンを開く。

「・・・・・・・・」

そしてISのデータを見ています・

「・・・・？何だこれ・・・」

レイはあるものを見つけた。

「・・・・データ受信・・・・だと？」

それは、あて先不明のデータであった。

「・・・・受信されたのは・・・・昨日の二時半・・・・。キャノンボール・ファストがあっている時じゃないか」

データはキャノンボール・ファストが行われている間に受信されていた。

「・・・・しかし・・・・あんなドンパチやっている間に・・・・一体誰が・・・・」

あの時アリーナにいた人は全員避難したはずだった・・・・。しかしあの状況でまだ人がいた・・・。

「・・・・しかし・・・・一体誰が・・・」

レイはそのデータを開いてみた。

『このデータは必ず役に立つだろう・・・・。活用してくれ・・・・』

科学者『R』

「・・・科学者・・・『R』・・・」

データを開いて見ると、データの説明文も一緒に入っており、そして実行プログラムも入っている。

「・・・しかし・・・一体何のプログラムだ・・・？」

使い方としては、ISにインストールすることでプログラムが作動するようになっていて・・・と書かれている。

「・・・ISにインストールして、か」

レイはしばらく考えた。

（・・・信憑性が伺えるが・・・しかし・・・）

そして、レイはコードを取り出し、左腕にある待機状態のISに繋いだ。

「・・・・・・・・」

そうして・・・レイはプログラムを実行した。

すると、データがISにインストールしていった。

そしてデータインストールが終了した。

「・・・しかし・・・。一体何のデータなんだ・・・？」

レイは再度ISを開いてみると・・・

「・・・・・・・・・・！」

レイは驚いた・・・

「ISの全体のシステムのアップグレードが完了しました・・・。
『ファントム』『アーベント』『ナハト』の三機は『セカンドシフト第二形態移行』
したISとほぼ同じようになりました・・・」

「・・・セカンドシフト第二形態移行・・・だと!？」

第二形態移行・・・ISと操縦者のシンクロ率が一定の率まで上がった時に発動する現象。その際ISの形状も変化し、システムなどもかなり進化する。

「・・・そんなことが・・・」

にわかに信じがたいことだが・・・

「・・・・・・・・いや・・・本当の第二形態移行・・・じゃないな・・・」

ほぼ同じようになった・・・というだけだ・・・。

「・・・だが・・・本当にそうだったのか・・・？」

実際のところ・・・本当なのかここでは分からない・・・

(・・・明日・・・調べてみるか・・・)

レイは明日確かめることにして、今日はもう寝ることにした・・・

そして翌日・・・

レイは一人で第三アリーナに来ていた。

「・・・といっても・・・今のところ問題なく展開できるのは・・・アリーメントのみ、か」

そうしてレイはアリーメントを展開した。

アリーメントは戦闘に参加していないので、損傷は皆無なので、今のところ活動ができるのはこれのみ。

しかし、いつもと姿が異なっていた。

(・・・ドラグーン・ストライカーがバージョンアップした上、基本装備になったのか・・・)

遠距離操作兵器である『ライフルビット』は以前と比べると若干小型化しており、さらに新たな装備が施されていた。

(・・・新規装備に『シールドビット』が追加されたのか・・・)

新たに背中に背負うように六基のシールドビットと、リアアーマーの上から付けているようにして四基装備されていた。

(一気すれば重装備だが・・・以外にも機動力は損なわれていない・・・。不思議なもんだな・・・)

そうしてレイは右手にパルチザン・ランチャーを展開した。

(パルチザン・ランチャーも性能がアップしているな・・・。とりあえず使ってみるか・・・)

レイはパルチザン・ランチャーを構えると、激しく早く動き回る仮想標的に狙いを付ける・・・

「・・・・・・・・」

そしてレイはトリガー引くと、下の銃口からエネルギー弾が発射され、動き回る仮想標的に命中した。

その後次々と発射し、仮想標的に次々と命中させた。

そして、仮想標的が止まると、撃った弾すべて仮想標的のど真ん中を撃ち抜いていた。

「・・・以前より精密度が上がっている上に、弾速と威力も上がっている・・・」

レイはモニターに映る「命中率100%」を見ながらランチャーの性能アップを確かめた。

「アーベントでこのくらいだから・・・ファントムとナハトは相当性能が上がっているはず・・・」

レイは他二機に期待がこみ上げた・・・

「あら、レイさん・・・」

すると、セシリアがアリーナ内にやってきた。

「・・・セシリアか」

レイはアーベントのフェイスマスクを収納して振り向いた。

「どうしてここに居られるのですか？」

「ちょっとな・・・。機体のテストを行っていたんだ」

「そうなんですか・・・。そういえばアーベントの装備が違いますね」

「まあな……。それより、セシリアはどうして来たんだ？」

「ええ……無理はできないんですが……新しくなったISの動きになれておきたいんです」

「なるほど……確かにヴァイスリッター系の機体は速いからな……」

「はい」

そしてセシリアはISを展開した。

「ちょうどいいや……。ついでだから俺も少し手伝うよ」

「いいのですか？」

「ああ……。ちょうど同じ系統の機体同士だからな……」

「そ、そういえば……」

「じゃあ……まず何からやるんだ？」

「そ、そうですわね……。最初は動きからですわね……。ブル
ー・ティアーズの時より速さが全然違いますからね」

「そうか……。じゃあ行ってみるか」

と、レイは背中の特スラウイングを展開して、飛び上がると、セシ
リアも続いて特スラウイングを展開して後に行く。

「くっ！」

しかしセシリアはISのスピードを持て余しており、操縦が少し危
うい。

『セシリア・・・足のスラスタをもう少し噴かしてみろ・・・そ
れからウイングの баланサーを調整しろ。そうすればバランスが
よくなるはずだ』

「や、やってみますわ・・・」

セシリアはISの脚部のスラスタを少し噴射させて、テスラウイ
ングを細かく動かしてみた。

すると、先程よりはマシになった。

「・・・バランスがよくなりましたわ・・・」

『そうか・・・じゃあ今度は一気に飛ばすぞ』

そしてレイはテスラウイングを展開して、光の翼を出してスピー
ドを上げた。

「速い・・・。ですが・・・わたくしも！」

セシリアはスピードを上げて、レイに追いついた。

（速いな・・・。だが・・・）

レイは更にスピードを上げて、アリーナ内を飛び回る。

「さすがですわね……。あのスピードでこんな狭い空間で飛び回れるなんて……」

セシリアは力量の違いを知るのだった……

「それで、そうだったか？」

レイとセシリアは一旦下に下りていた。

「うーん……。さすがにすぐにはいきませんわね……」

「そりゃそうだな……。まあ努力すれば……。よくなるだろう」

「……そうですわね……」

「……それで、次は射撃でもやるのか？」

「はい……。せっかく新しくなったのにわたくしが不十分ではいけませんわ」

「そうか……。じゃああれぐらい命中させないとな」

と、結構離れたところに激しく動き回る仮想標的が現れた。

「あ、あれをですか……。しかし、やってみないとわかりませんわ……！」

セシリアは右手に『ピアーズ・ランチャー』を展開して構えた。

融合時にブルー・ティアーズが持っていた高出力のBTライフルを『アトラス・ランチャー』をベースに取り込んだので、グレーがメインだったアトラス・ランチャーにブルーが追加され、さらにエネルギー弾が発射される下の銃口にBTライフルの先端が追加されていた。更に付け加えれば、ピアーズ・ランチャーの銃身の長さはパルチザン・ランチャー並みに相当長く、ISの丈より長い……

「……………」

セシリアは何とか狙いを付けて、エネルギー弾を放った。

しかし、エネルギー弾は仮想標的に当たらないと思ったが……

「そうはいきませんわ！」

と、セシリアは念じると、ビームがぐにやりと曲がり、仮想標的に命中した。

「……そういえば……『偏光制御射撃』っていうのをあの時に習得したんだっけ？」

「そうですね。BT兵器の稼働率が高くなったときに起こる現象ですわ」

「BT兵器でねえ……。それだけで起こるものなのか？」

「そ、それは・・・今のところは・・・」

「ふーん・・・。まあそれはいいとして・・・」

と、レイは命中結果を見る。

「・・・その割には命中率はさほどよくないな」

仮想標的の中央右を撃ち抜いていた。

「うっ・・・」

「セシリアの場合・・・動き回る敵に対して命中率が悪いな」

「そ、それは・・・」

と、レイはパルチザン・ランチャーを片手で構えると、激しく動き回る仮想標的に向け放つ。

弾丸は右下のほうに向かっていくが、仮想標的がその場所に向かって行き、弾丸はそのまま仮想標的に命中した。

「凄い・・・先読みしての射撃・・・」

そして仮想標的のど真ん中に命中していた。

「しかも真ん中に命中させるなんて・・・」

セシリアはただ凄いと思えなかった・・・

「どうやったら・・・そんなに射撃がうまくなれるのですか？」

「・・・うーん・・・俺はただ狙っているだけなんだがな・・・」

「ふ、普通に狙っているだけって・・・」

「・・・まあでも、セシリアも結構狙いはいいと思うぞ」

「そ、そうでしょうか・・・」

セシリアは自分の命中率を見て「うーん」と唸る。

「・・・それで、これでいいのか？」

「・・・で、では・・・最後に一つやりたいことがありますわ・・・」

「なんだ？」

「『ブルー・ティアーズ』の動きにも慣れたいんです」

「・・・ビットの？」

「ええ。以前は止まっていけないと操作ができなかったのですが、今では動きながらも操作が可能になりましたから、その動きに慣れたいんです」

「なるほど・・・じゃあ俺が相手になろう」

「えっ！？そ、そういうわけでは・・・」

「なあに、軽い模擬戦を行うつもりでビットの操作になれるって感じだ」

「し、しかし・・・それではレイさんの怪我が・・・」

「・・・それは、セシリアも同じだろ」

「・・・・・・」

セシリアはしばらく考えて・・・

「・・・わかりましたわ・・・でも模擬戦といっても完全に手を抜くわけにはいきませんわ。程々で本気でいきますわ」

「・・・程々にねえ・・・」

レイはセシリアから離れると、ウイングを展開した。

「では、いきますわ!」

セシリアはフロントアーマーと両肩に装備している『ブルー・ティーズ』を展開し、アーベントに向かわせた。

それと同時にセシリアも向かっていき、『ピアーズ・ランチャー』を展開してアーベントに向けて放つ。

「いきなりそう来るか・・・!」

レイは素早く動き、ビットとピアーズ・ランチャーの砲撃を回避していく。

「そこですわ！」

そしてセシリアはエネルギー弾を発射すると、そのまま『偏光制御射撃』を行い、エネルギー弾はレイに向かっていく。

「くっ！」

レイは猛スピードで距離を保つと、左のサイドアーマーから『プラズマカッター』を抜き放ち、エネルギー弾を切り消した。

「・・・ぐっ！」

しかし、その直後に後方からビットの攻撃を受けた。

「もらいましたわ！」

そして、セシリアはピアーズ・ランチャーを構えると、上下の銃口から実弾とエネルギー弾を発射した。

「しまっ・・・」

回避しようと思ったがもう遅く、実弾はアーベントの右脚部に命中し、エネルギー弾は左肩に命中した。

「これで・・・！」

そしてセシリアはブルー・ティアーズをアーベントの周りに配置し

て、ピアーズ・ランチャーを放つと同時にブルー・ティアーズの一斉射撃を行った。

バランスを大きく崩したアーベントはもう回避しても間に合わなかった。

「・・・！」

そして、ビームはそのままアーベントを・・・撃ち抜いた（・・・・）

「え!？」

すると、アーベントが消えていった。

「ど、どういうこと!？」

セシリアは辺りを見回す。

「・・・さすがに・・・今のは危なかったな・・・」

「!？」

後ろから声がして、セシリアが振り向くと・・・

「・・・え!？」

セシリアはアーベントの姿に驚いた。

アーベントのオレンジのカラーが・・・セシリアのISと同じ青に

変わっていたのだ・・・
そしてカメラアイも赤から緑に変わっていた。

夕日をバックにしているので、半透明の光の羽が輝いていた。

「い、色が変わ化している・・・!?!」

（・・・アーベントの変化したところは・・・ここにもあったのか・
・）

「アーベント専用アビリティー・・・『超音速加速』発動」

（・・・あまりの速さに分身しているように見える、か）

先ほどのあまりの速さでできた残像であった・・・

「くっ!」

セシリアはピアーズ・ランチャーを構えると、そのまま放つ。

しかし、それもまたアーベントの残像であり、エネルギー弾はそのまますり抜けていく。

「また残像!?!」

セシリアはとっさに辺りを見回す。

「俺はこっちだよ」

「えっ!？」

セシリアが後ろを振り向くと、目の前にはプラズマカッターの刀身の先端が突きつけられていた。

「なっ・・・」

セシリアはあまりの速さに呆然とした・・・

「・・・最後の最後であれはズるいですわよ」

結果的にはセシリアの負けで終わり、二人はISを解除していた。

「仕方がないだろ・・・あの状況じゃあれ以外で回避できる方法はない」

「・・・だからと言っても・・・あの速さは・・・」

「まあ、俺もあれは初めて使ったんだ・・・。まだまだだよ

「・・・あ、あれで・・・」

セシリアは半分呆れていた。

「・・・しかし・・・結構いい戦法だったよ・・・。まあ後は地道に慣

れていくしかないな」

「・・・そうですわね・・・」

セシリアはシュンと気持ちが沈む。

「まあそう落ち込むなよ・・・俺だってアーベントに慣れるのに一週間ちよつとかかったんだ・・・まだ慣れないのは仕方がないさ」

一週間ちよつとって・・・それ短い気が・・・

「・・・ですが・・・あの時はうまく使えたはずなのに・・・」

「・・・人って言うのは・・・あれだ・・・土壇場じゃうまくなるもんさ」

「・・・そうでしょうか？」

「そういうものじゃないか？」

そうして、二人はそれぞれ更衣室に歩いていった・・・

その頃……

「……凄いな……アーベントでもこれほどの性能アップを見せた、か」

ロイはモニターに映るアーベントのデータを見た。

「……まだあいつらでは本当の『第二形態移行』はできないが……。擬似的にはできるって、な……」

ロイは席を立つと、その部屋を出た……

そしてロイはとある部屋に入った。

そこは薄暗く、妙に冷え込んでいるが奥ではうつすらと光があった。

ロイはそのまま部屋の奥に進んで行き、それを見た。

形状はカプセルであり、上の部分では透明になっており、中が見えるようになっていた。

「……やはり……君を目覚めてまでじゃないと……この事態

には対処できない・・・のか・・・」

ロイは覗き窓から中を見る。

「・・・フリーダ・・・」

そこには、一人の女性が静かに眠っていた・・・

Story 47 新たな力（後書き）

・・・どうも最近また感想が減ったような・・・。
今頃って感じがしますが、ヴァイスリッター・ツヴァイのイメージとしてはヴァイスリッターにアルトアイゼンの一部のデザインなどが入っている（角ばった脚部など。）

Story 48 不幸なのは生まれつきさ

「ふわああああ・・・」

レイは大きなあくびをして、起きた。

今は朝の七時である。

「・・・あーあ・・・久しぶりによく寝たなあ・・・」

と、レイは首を鳴らして、ベッドから起き上がった。

「・・・っていても・・・逆にまだ眠いな・・・」

レイは目をこすりながら制服に着替えた。

「・・・さあて、と・・・」

そしてレイはちょっとふらついた足取りで自室から出た。

「ふわああああ・・・。眠気が覚めないな・・・」

寮の食堂に向かうためにあくびをしながら廊下を歩いていた。

「何かないかな・・・」

と、階段を下りようとする・・・

「・・・って、おわっ!？」

寝ぼけたあまり、階段を踏み外し、そのまま落ちていった。

「あぶなっ!」

しかしそれで一瞬で目が覚めて、レイは落下直前で両手を床に付き、起き上がった。

（・・・たすか——）

と思った瞬間・・・

「ふげっ!？」

階段の角に落下は避けられたが・・・代わりに下の壁に真正面から叩きつけられた。

「・・・ついてない・・・」

そのままずるずると滑って、床に伏せた・・・

「・・・あー、いてえ・・・」

なんとかレイは食堂に着くと、朝からそばを頼んで、それを食べていた。

しかし、まだぶつかった箇所が痛い様子・・・

そうしてそばの麺をすすっていると・・・

「お、おはよう・・・レイ」

すると、コッペパン定食を持って鈴が来た。

「よう鈴」

レイは手を挙げてあいさつする。

「・・・ここに座っていい？」

「・・・別にいいぞ」

そうして鈴はレイの向かい側の席に座る。

「・・・ねえ・・・レイ」

「なんだ？」

「今日の放課後・・・予定はないの？」

「・・・予定ねえ・・・特にない」

「・・・じゃあ・・・あたしの訓練に付き合ってくれない？」

「訓練？」

「うん・・・新しい戦法を取り入れようと思っているの・・・でもその戦法を使っているのってあんたしかないからさ」

「・・・ふーん。・・・で、何の戦法だ？」

「・・・素手による格闘戦よ」

「素手による格闘戦だと？」

「うん。『双天牙月』や『龍砲』だけじゃ戦力的に不十分な気がしてきたの。でもこれ以上の武器の増強はできないから、素手による格闘戦を覚えたら結構いいと思ったの」

「なるほどね・・・。万が一武器を失っても戦闘続行を可能にできるからな・・・」

「だからさ・・・。素手で戦えるレイにある程度付き合ってもらいたいのよ」

「・・・大体分かったが・・・今日は無理だな」

「な、なんでよ！さっき予定はないって言ったでしょ！」

と、鈴は勢いよく立ち上がる。

「確かに予定はないが、まだ俺のISの修理は完全に終わっていない」

「うっ・・・」

「まあ修理が終わったときなら、訓練に付き合ってもいいが・・・」

「・・・わ、わかったわよ・・・。それまで待つてあげるわ」

鈴は席に座り直した。

「すまん・・・」

「い、いいの・・・。別に謝らなくても・・・」

と、若干鈴の頬が赤くなったのは気のせいかな？

そうしてレイは麵をすするのであった・・・

「では、これよりISの実習訓練を行う」

それから時間は経って、昼を過ぎて五時限目・・・

今回は一組のみによるISを用いた実習訓練だ。

「今回お前達には訓練機を用いて軽い模擬戦を行ってもらおう。これまで習ったことを生かして戦え・・・いいな」

「はい」と生徒一同は返事した。

「その前に専用機持ちによる見本を見てもらう・・・」

と、織斑先生は専用機持ちを見回す。

（誰を選ぶんだろう・・・）

レイは一応行く用意はする。

と言っても、今のところ活動が可能なのはアーベントのみだ。相手によっては少し状況が変わる。

「・・・では、ラングレンと・・・ランスターに軽く戦ってもらおう」

「え・・・？」

レイは少し驚く。

すると、周りでも少しひそひそとしゃべりだした。

「ラングレン君とランスターさんって、意外な組み合わせね」

「そういえば、ランスターさんが自分のISを使うのって、私はじめてみるよ」

「静かに……。ラングレン、ランスター……。前に出ろ」

レイとフィオナは列の前に出た。

「意外なところで初戦を迎えたわね」

「……そうだな……」

ちなみに、二人が戦うのはこれが初めてなのだ。

（……来い……。アーベント）

レイは心の中で念じて、ISを呼び出してアーマーを展開した。

「……ナインボール」

フィオナがISの名前を呼ぶと、光を纏い、ISアーマーを身に纏う。

フィオナのISの形状は以前より結構異なっていた。

全体のラインは前と似ているが、少し角ばった箇所が多くなり、肩アーマーの形状が以前とは異なり、頭のデバイスは以前と異なり二段のバイザーになり、色も赤から青に変わっている。武装は右手に

はパルスビームガンではなく、実弾を高速発射するリニアライフルで、内臓式だったレーザーブレードは外に装着式になり、流形線の多い形状であった。背中のバックパックの武装も左は以前と同じグレネードランチャーだが、右はロケットランチャーから、今ではミサイルランチャーに変更していた。さらに新規に背中のバックパック上部中央に自立型の自動兵器が搭載されていた。

「前より形状が違う・・・？」

「そう・・・『ナインボール・P』のデータを元にして新たな技術を取り入れて製作された『ナインボール』よ」

「・・・ナインボール・・・」

「では、戦闘開始！」

織斑先生が手を叩いたと同時に開始になり、両者は同時に上空に上がるとすぐに戦闘を開始した。

「ちっ！」

レイはパルチザン・ランチャーでフィオナに向けエネルギー弾を放つ。

フィオナは素早く避けて、リニアライフルを放つ。

弾丸は高速で向かってきて、レイはとっさに回避する。

「速い！・・・だが・・・」

レイは続けてパルチザン・ランチャーの実弾による射撃を行う。

弾丸はいくつか避けられるも、その内一発がナインボールの右脚部をかする。

「さすがね・・・。でも・・・」

フィオナは余裕であり、右のミサイルランチャーを展開して放つ。

「そう来たか！」

レイは両肩のライフルビット四基を展開すると、パルチザン・ランチャーとビットを同時に砲撃してミサイルを全て撃ち落した。

「ふっ・・・」

すると、フィオナはブレード『月光』を展開しながらリニアライフルを放つ。

「くっ！」

レイはパルチザン・ランチャーを収納すると、弾丸を回避しながらライフルビットを元に戻して『シシオウブレード』を展開して鞘から抜き放ってフィオナに向かっていく。

そして両者のブレードが交じり合うと、一旦離れて、再度ブレードを交じり合わせ、それを交互に繰り返した・・・

「凄い・・・」

シャルはその光景を息を吞んで見た。

「レイと・・・互角・・・」

ラウラも息を吞んで見ていた。

以前ラウラはフィオナと戦ったことがあるので、その強さを思い知って、尚レイと互角だと言うことに驚いていた。

「フィオナさんって・・・あんなに強いのか・・・」

「わ、私に聞くな」

生徒一同はそのまま二人の戦闘を見た。

しかし、しばらくして織斑先生が・・・

「二人とも・・・。それ以上続きをやりたいのなら・・・別の日でやれ・・・。これ以上時間は取れんぞ」

と、二人の闘いを止めた。

戦闘開始から十五分経過しており、実習は六時限目も含めているが、これ以上やっては時間配分が狂うのである。

『・・・分かりました』

『・・・はい』

そして二人は戦闘を中断し、下に下りてきて、ISを解除した。

「・・・まあ少し長引いたが・・・こんなものだ・・・お前達にこんな戦闘をやらせるわけじゃない・・・軽く戦うだけだ・・・いいな」

「はい」と生徒一同は返事した。

そうして、時間は夕方の五時半に回り、レイは寮に帰っていた。

（・・・しかし・・・さすがにフィオナは強いな・・・。しかもIS自体もかなり高性能だな・・・）

レイはフィオナとの戦いを思い出していた。

隙のない動きと精密な射撃・・・そしてフィオナ自身の力量もかなりのものだ。

（・・・今後戦うことになれば・・・注意しないとな）

そう考えていると・・・

「レイ・・・」

と、後ろから呼ぶ声がしたのでレイが振り向くと、走ってくるシャルの姿があった。

「シャルか」

レイは一旦立ち止まって、シャルを待った。

「料理部は終わったのか？」

「うん・・・。レイはどうしてこの時間までいたの？」

「・・・生徒会長助手だから・・・生徒会の仕事をしていた」

「そうなんだ・・・大体どういう仕事をしているの？」

「・・・まあ・・・学園での色々なことをまとめたりとか・・・最近じゃ『キャノンボール・ファスト』での襲撃事件のまとめとかがあるな」

「へえ・・・」

そう話しながら二人は寮に歩いていった。

「でも、レイは生徒会長助手になってなにかいいことってあったの？」

「・・・あんまりないな・・・。でもまあ生徒会長助手は生徒会長の権限をほとんど使えるらしいからな・・・。そこには困らないな」

「・・・そうなんだ・・・」

そして寮前のため池の橋を渡っていると・・・

「危ないっ!」

と、後ろから大きく声がした。

「なんだ?」

レイが振り向くと・・・

ゴンッ・・・!

「ふげっ!?!」

レイの額にソフトボールのボールが直撃し、後ろに倒れそうになる。

「あっ!」

シャルはとっさに手を差し伸べて、レイの手を取る。

しかし、シャルの力と体重ではレイを支えるわけがなく、そのまま引っ張られる。

そして二人はそのままため池に落ちた・・・

「はぁ・・・朝からついてない・・・」

レイはため息を付いて、制服の洗濯が終わるのを待っていた。

ここは寮の洗濯するところであり、最新式の洗濯機がずらりと並んでいた。

レイはあれから着替えて服はいつも寝る際のシャツと短パンであった。

「・・・本当に・・・運がないんだね」

シャルも制服からジャージに着替えており、同じく洗濯が終わるのを待っていた。あと髪を結んでいたリボンも洗濯しているので、髪をおろしている。

「・・・不幸なのは生まれつきさ」

「・・・自覚・・・しているんだ・・・」

「・・・ああ・・・。俺は昔から不幸なことばかりで、いいことなんかほとんどなかったし、あっても年に一度一回あるかないかな・・・」

「・・・ちゃんと数えているんだ・・・」

律儀と言うか・・・なんと言うか・・・

最近では不幸も大分収まってきているが、それでも一日一回は不幸な目にあっている・・・らしい・・・

「それでも・・・悪運は強いんだよな・・・」

運がめちゃくちゃ悪く、悪運はものすごくある・・・というアンバランス的なものだな・・・こりゃ・・・

「それに、ゴメンなシャル・・・。俺のために助けようとしてずぶ濡れにして」

「別に謝らなくてもいいんだよ・・・。僕の意味でやったことだし・・・責任は僕にあるから」

「・・・そうか・・・」

「・・・・・・」

「・・・・・・」

そしてしばらく沈黙が続く・・・

「・・・ねえ・・・レイ」

さらにしばらくして、シャルが訊いてきた。

「な、なんだ？」

「その・・・前から聞こうと思っていたんだけど・・・」

と、シャルは落ち着かない様子だった・・・

「・・・レイは・・・その・・・最初の時は・・・僕のことをどう思っていたの？」

「・・・どうって？」

「・・・僕が女の子だってことがばれたときだよ・・・レイはそのときから気にしていたって言っていたよね」

「・・・まあ・・・そうだな・・・」

「・・・どのくらい・・・だったの？」

レイは少し考えて・・・

「・・・最初は少し気になるって程度だったな・・・」

「気になる・・・程度・・・」

「まあ・・・当時はシャルにどう言おうか・・・なんとなく思いつかなかったんだよね」

「・・・そうなの・・・？」

「・・・ああ。だからあの時あんまりシャルと話さなかったんだ・・・。
いや、話せなかった・・・」

「・・・そうなんだ」

「・・・なんていうか・・・俺って不器用だよな・・・って前に言っただけど・・・」

「・・・レイは・・・不器用じゃないよ・・・。ただ・・・心の傷がまだ癒えていないから、コミュニケーションが取りにくいってことだよ」

「・・・シャル・・・」

「・・・それに・・・レイの心の傷を治すって言った僕も・・・責任はあるからね」

「・・・心の・・・傷、か」

「・・・それで、あれからどう変わったの？」

「・・・思うことはできる・・・。だけど・・・」

「だけど？」

「・・・やっぱり・・・心の奥じゃそう思っていない・・・。まだなんだ・・・」

「・・・そう・・・」

「・・・なあ、シャル」

「なに？」

少ししてレイが口を開いた。

「……シャルは……学園を出たらやっぱりどうするんだ」

「……それは……まだ分からないよ……。でも……」

「でも……？」

「前にも言ったよね……。もう両親とは決別したって言っても、僕は戸籍を偽っていた……。今は学園にいるからどうにもないけど、学園を出たら僕は本国に連れ戻され、代表候補から下ろされて、裁判に掛けられると思う」

「………」

「……最終的には牢獄行き……になる……」

「……今はただ……防ぎがあるからどうもない、か」

「……でも……まだ時間はあるから、その時間で僕は見つけ出すよ……。答えを……」

「……そうか……」

「……レイも言っていたよね……。僕になら答えを見つけ出せるって……」

「……そうだな……。シャルなら答えを見つけ出せるよ」

「うん・・・」

「・・・・・・・・もし・・・」

「・・・・・・・・？」

「・・・もし・・・シャルの答えが見つからなかったら・・・その・・・」

レイは少し黙って・・・

「・・・俺が・・・匿うよ・・・君を・・・」

「・・・・・・・・レイ・・・」

「・・・例え・・・一つの国を敵に回そうとも・・・君は・・・俺が
守る」

「・・・・・・・・」

すると、シャルの目じりに涙が浮かぶ。

そして、シャルはレイに抱きついた。

「・・・・・・・・レイ・・・・・・・・ありがとう・・・」

そしてレイの胸の中で泣いた。

「・・・・・・・・いいんだ・・・」

レイはシャルの髪を優しく撫でる。

「・・・レイ・・・」

すると、シャルは顔を近づけた。

「・・・ちよつと待ってくれ」

しかし、レイは右手でシャルの顔を押さえた。

「な、なんで・・・？」

「・・・ここでやるのは・・・ちよつと・・・」

「・・・だめ・・・なの？」

「いや・・・だめと言うわけじゃないが・・・」

「ならどうして？」

「・・・ここでやって、誰かに見られたりしたら・・・ちよつと面倒なことになりそうだから・・・」

「・・・そう・・・だね」

と、シャルはなんだか残念そうにした・・・

しかし・・・

「やれやれ・・・結構汚れてしまったな・・・って・・・？」

「うっ・・・？」

「えっ・・・？」

その現場に一夏が入ってきてしまった。

「・・・」

「・・・」

「・・・」

沈黙が続く、レイとシャルはゆっくりと離れる・・・

「・・・わ、わりいな・・・続けて・・・いいぞ」

と、一夏はそのまま後ずさりして出て行った・・・

「・・・ちよつと待て一夏！！今のは誤解じゃないが、行くなあ！」

一夏が出て行った直後、レイはとっさに一夏を追いかけた・・・

「あ・・・」

シャルはその場に残された・・・

「一夏!!」

レイは物凄い勢いで一夏を追った。

「うわっ!？」

一夏はそのままレイに壁に叩きつけられた。

レイは必死の形相だった。

「今の見たのか!？」

「あ、ああ・・・ちよつとな・・・」

「今見たのは、誰にも言うなよ」

「お、おう・・・」

レイに脅されて、一夏はこくこくとうなずく。

「・・・絶対に言うなよ」

そしてレイは手を離す。

「・・・な、なんでそこまで・・・」

「・・・面倒なことは起こしたくない」

そうしてレイは戻っていった・・・

「・・・・・・・・」

・ 一夏は少し呆れた感じでため息をつき、一旦部屋に戻っていった・

そうしてレイとシャルは制服が洗い終わり、その後乾燥機で乾かして、自室に制服を戻して、シャルはレイの部屋に来ていた。

「・・・・・・・・」

シャルはレイの部屋を見回していると・・・

（・・・何をしているんだろう・・・レイって・・・）

机の端にはなにやら小さな機械のパーツが置かれてあった。

その隣には夏祭りの時に獲得した戦車のプラモが完成して飾っていた。

「・・・・・・・・」

そしてしばらく見回していると・・・

「お茶が入ったぞ」

と、お茶が入ったコップを持ったレイが寄ってきた。

「あ、ありがとう・・・」

シャルはレイから出されたコップを受け取る。

「・・・・・・・・・・」

シャルは一口お茶を飲む。

「・・・ねえ、レイ」

「なんだ？」

少ししてシャルが聞いてきた。

「・・・さっき言っていたことだけど・・・。前も冗談で言わなかったっけ？」

「・・・そうだったっけ？」

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

しばらく沈黙が続く・・・。

「・・・・・・・・ここだったら・・・やってくるの？」

「・・・・・・・・うつ・・」

レイは少し戸惑った・・・

「・・・まあ・・・ここだったら・・・」

「・・・・・・・・」

すると、自分で言っておきながら、シャルの顔が少し赤らむ。

そして二人は寄り添った。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

少しの間見つめ合いつて、二人の顔が近付く。

そして唇が触れようとしたそのとき・・・

プルルルル・・・

「「!!」」

二人は電話の音に驚き、とっさに飛び退いた。

レイはすぐに携帯を取ると、電話に出た。

「もしもし」

『久しぶりじゃのお！レイ』

「・・・じっちゃん・・・」

相手は健造であつた・・・

『なんだか残念そうな感じじゃのう・・・。なにかやっていた途中じやつたか？』

「・・・そんなところ・・・」

『そうか・・・。それはすまんかつたのう』

「・・・で、何の用・・・？」

『・・・レイは今度の連休はどうする気じゃ？』

「・・・連休か・・・」

特になにもない・・・

『もし何もすることがなかったら、一度家に帰らんか？』

「・・・家に？」

『ああ・・・。久しぶりに家で色々と話したいんじゃ。それにお前さんの料理も食べたいからのう』

「・・・そうなんだ・・・」

『どうじゃ?』

「・・・そうだな・・・。今度の連休に一旦帰るよ」

『そうか・・・。じゃあ待っているぞ』

と、電話が切れた・・・。

「・・・。」

レイは携帯を閉じると、シャルに向き直る。

「・・・と、いうわけだ」

「・・・う、うん」

なぜかシャルはうなずいた。

「連休中に帰ってきてくれたとさ・・・。まあ俺にとってはむしろ暇が省けるけどな」

「そうなんだ・・・」

そしてしばらくして・・・

「・・・僕も・・・行っていいいかな?」

「シャルも?」

「う、うん……。レイのおじいさんを見ておきたいから」

「……。見ておく、か……。まあ、別にいいけど……」

「いいの？」

「ああ……。賑やかなほうがいいからな」

「ありがとう。それでいつ出発するの？」

「……。そうだな……。連休は今週の土曜から始まるからな……」

ちなみに言うと、普通なら土曜日は授業があるのだが、今週の土曜は特別に休みになっているらしく、月曜は祝日なので、今週は三連休なのだ。

「……。時間も考慮して……。九時に出発して、それからしばらく歩けば……。十時ちよつとで家に着くかな」

「そうなの……」

「……。予想ではな……。とりあえず九時前には寮の入り口で集合な」

「うん！」

そうしてしばらく話が続く……

「・・・・・・・・・・」

隣ではラウラが壁に耳を当てて会話を聞いていた。

「・・・九時に出発だな・・・それからこっそりと尾行して・・・それから・・・」

ラウラは作戦を立てるかのようにして考案する・・・

（レイのおじいさんと会って、好印象を付ける。・・・そうすれば・・・）

ラウラはなにやら妄想してテンションが少し上がる。

しかし・・・

「あら・・・結構楽しそうね」

「なっ!?!?」

ラウラはとっさに振り向くと、そこにはいつの間にか進入して意地悪く微笑む楯無さんの姿があった・・・

Story48 不幸なのは生まれつきさ(後書き)

鈴が素手による格闘戦を覚えるというのは、とあるフラグですね・
・。

Story49 黒騎士の力

そして・・・ここはとある施設・・・

「・・・ふう・・・これでいいな・・・」

ロイはさつきからとある作業を行って、ようやく終えた様子・・・

目の前には、窓越しだが二体のISがあった。

左には全体白いISであり、形状は『パンドラ』に似ていたが、各所の形状が異なっており、背中にはウイングスラスターが搭載されていた。

右側には『ゲシュペンスト』に酷似したISであるが、機体色であったシルバーが無くなり、全身真っ黒だが、機体各所に紫が施されていた。

「・・・後は最終調整をするだけだな・・・」

そしてロイは調整をコンピューターに任せて、別のモニターに向かう。

「・・・よし・・・とりあえず配置には付いているな・・・後は
――」

そして、ロイはとあるところに目をやる。

モニターに映ったのは、ISの特別格納庫であった。

そこには四体のISが待機していたが、なにやら異様な雰囲気を出
していた・・・

「・・・しかし・・・こいつらを出すまでは・・・ないことを祈りた
いな・・・」

なにせ、この四体は異常なまでに暴れん坊なのだ・・・まあ
今では少しマシ・・・らしいが、それでも結構危ないとのこと・・・

「・・・」

そして別のところを映す。

そこは、あのカプセルがあるところであった。

（・・・さすがに冷凍睡眠から目覚めるのには時間が掛かるか・・・。
しかし、何もなくて起きるとは限らんからな・・・後遺症がなけれ
ばいいが・・・。）

それからしばらく考えていると・・・

ビイイイイイ！！

「!？」

すると、研究所の警報が鳴り響いた。

ロイはとっさにレーダーを見た。

「・・・ちっ!・・・予想より早く動いたか！」

レーダーには物凄い数の敵が映っていた。

「・・・な、なんて数だ・・・。ざっと見て三万近くいるだろ!？」

敵の数はもう点々ではなく、赤一面になっていた。

「・・・くっ・・・。やはりこいつらも出さないといけないか・・・」

ロイはとっさにその四機を起動させた。

「・・・Oチーム、Pチーム、Fチーム、戦闘態勢を取れ」

ロイはすでに配置していた部隊に連絡を取る。

「・・・俺も出るか・・・」

ロイは急いで研究室を出た・・・

そして外では……

「よし……。各機は配置に付いたな」

と、ピートはハイパーセンサーに映る部隊の配置を確認した。

ピートの後ろには、物凄い数の無人ISが臨戦態勢に入っていた。

「……どうだ？『W06』……。『マスターコマンド』の調子
は」

『問題はありません』

と、隣にいたW06ことカルディアは返答する。

カルディアのISは以前の『アヌビス』から、新しいISに変わっていた。

カラーリングは暗いグリーン系の色が多く、少しほっそりとした形状で、デクー系統のISと同じく赤い一つ目のカメラアイを持つ。
右手には三つの砲身があるガトリング『キラーガトリング』を装備していた。

「……W05……。そちらはどうだ？」

『……問題は無い』

ピートのIS『ジェネラル』の左側には、月光丸がいた。

「そちらはどうだ？」

『こちらも問題は無い』

と、上には一体のISが浮かんでいた。

全体的色は白く、細身のボディーをしており、頭には二本の角があり、背中には透明のピンクの羽があった。天使でもあり悪魔でもあるIS『ルシファー』である。

「・・・時間だ・・・。全部隊・・・攻撃開始！」

ピートが命じると、無人ISは研究所がある山へと向かって行った。

物凄い数の無人ISが空を埋め尽くすほどあり、山へと向かっていく・

「アタックファンクション！ステインガーミサイル！！」×3

すると、山にある岩の陰から多数のミサイルが飛んできた。

「なにっ!？」

そしてミサイルはいくつかの無人ISを撃破した。

『W03・・・岩の陰に熱源を感知!』

「分かっている」

すると、岩の陰から三機のISが出てきた。

「あれは・・・」

三機のISは、どれも獣型のISであった。

中央には『フェンリル』がおり、左には『ハンター』と呼ばれる狼型のISで、背中にはスパイク状のパーツがあり、手には『ハンターライフル』と呼ばれるスナイパーライフルを持っていた。右にはハンターの強化発展機である『ハンター?』であり、ハンターと似ているが細部が異なり、背中のパーツはパイプ状のパーツに変更されて、手にはハンターライフルと同型のスナイパーライフルを持っていた。

「すでに部隊を配置していたとは・・・。しかしたった三機で何が・・・」

しかし、その直後で右翼に異変が起きた。

「・・・!?!」

右翼では、三機のISが無人ISと交戦し、撃破していていた。

そのISは後ろに下がると、山にある岩の上に着地した。

中央には赤い『パンドラ』であり、左にはアシェンが使用していた『クノイチ式』のピンクバーションであり、右にはクノイチ式式の以前のバージョンである『クノイチ』であり、手には緑のエネル

ギー刃を持つクナイ『コダチ』を両手に持っていた。

更に、左翼でも異変が起きた。

「今度は何だ！」

左翼では、三機のISが無人ISと交戦し、次々と撃破していった。

そして三機は山の上にある岩に着地した。

中央には『オーディーン』であり、左には古代ローマ戦士を思わせる姿のIS『アキレス』であり、右には『アキレスランス』を持ち、左腕には円形のシールドを装備して、背中には赤いマントが風でなびいていた。右にはアキレスの強化発展機である『アキレス?』であり、細部が異なっているほか、背中のマントが帯状になっており、武器とシールドはアキレスと同じである。

そして九機はそれぞれピートを睨みつけるかのように見てきた。

「・・・たった九機で迎え撃つとは・・・我々もなめられたものだ・・・」

『そうだね・・・まあ、今はどのくらいのものか・・・見物というか』

と、ルシファアが指サインで無人ISに命令して、無人ISは九機に向かって行った。

すると、フェンリルとほか二機は散開して、山の上にそれぞれの場所に着くと、それぞれの得物を構えて、狙撃を開始した。

フェンリルはエネルギー弾を放ち、ハンター、ハンター？は実弾を放ち、精密な射撃で次々と無人ISを撃破していった。

右翼ではパンドラ他二機が素早い動きで無人ISを翻弄して、次々と自身の得物で切り裂いていった。

パンドラは『ホープ・エッジ』でインビットのメインカメラを切り裂くと、インビットの後ろに着地して、そのまま後ろに突き刺した。クノイチ式式は見かけによらない素早い動きでアヌビスを翻弄して、クノイチは更に素早い動きでデクー改を翻弄して、それぞれ『コダチ』で次々と敵機を切り裂いていった。

左翼ではオーディーンが『リタリエイター』を回して、デクーのサブマシンガンの弾丸を弾いていた。

その間に後ろからアキレスが飛び出し、アキレスランスでデクーの胸部に突き刺し、そのまま押していき、後ろにいたデクーも巻き込んで撃破した。

隣ではアキレス？がランスで次々とデクー改やデクーエースを撃破していき、インビットのクロー攻撃をシールドで防いだ。

そして、オーディーンに月光丸が接近していた。

「チエストオオオオッ！」

そして斬艦刀を振り下ろした。

ガキンッ・・・！

しかし、刃はオーディーンには届かなかった。

「な、なんだと・・・」

オーディーンと月光丸の間には、漆黒のISがいた。

そして漆黒のISは月光丸の斬艦刀を弾き返した。

そして、背中 of 赤いマントが風でなびいた。

『全身装甲』のISのボディーは漆黒で、各所に白いところがあり、全体の形状は直角のラインが多く、顔に当たるパーツには白い仮面のようなものを装着しており、背中には新品同様な赤いマントが風でなびき、右手には背中に装着してある鞘から抜き放った長い剣があり、左腕にはブレードとシールドの両方を掛け合わせた『シールドブレード』を装備していた。その姿は黒い騎士・・・つまりはロイの『黒騎士MK-?』である。

『黒騎士R』を改良したもので、両肩のアーマーなどが新規パーツになっており、以前より横に伸びるデザインになっていた。更に応急修理されていた膝と太もも、両前腕も新規パーツと交換されていた。

「まさか・・・このISは・・・」

W05は驚いていた。

「・・・黒騎士・・・まさかあなた自身が戦場に出てくるとは・・・」

すると、ジェネラルが接近してきた。

「・・・そんなに以外かな・・・俺が戦場に出るのが」

「・・・しかし・・・これで手間が省けるものです・・・」

そして、ピートは右手のライフルをロイに向ける。

「・・・博士・・・。イノベーターはあなたの技術が必要なのです・・・。ですから、我々のところを来ていただきたい」

「・・・それで俺がOK、とでも言うと思ったか」

「もちろんそう言ってもらえないとは思っています・・・。では、力づくでも来ていただきます！」

そしてライフルのトリガーに指を当てる。

しかしその瞬間、山のほうにいるフェンリルが狙撃した。

「なにっ!?!」

そしてライフルは撃ち抜かれて、爆散した。

「悪い・・・」

ロイはそのままブレードを横に振るった。

しかし、月光丸が間に入り込み、ブレードを受け止めた。

「お前の相手はこの俺だ・・・」

「・・・面白い・・・」

すると、ロイはそのまま月光丸を押していった。

「な、なに!?!」

W05は月光丸のパワーで押し返そうとするが・・・

「・・・こいつはそこらじゅうのISとはわけが違うんだよ!」

そしてロイはそれ以上のパワーで月光丸を押していった。

「ば、馬鹿な・・・この月光丸のパワーを上回るだど!?!」

そしてロイは強引に月光丸を押し返して、ブレードを勢いよく振るう。

すると、ブレードは分厚い刀身を持つ斬艦刀を真っ二つにした。

「ば、馬鹿なあっ!?!」

そして、そのままロイは月光丸の横腹に回し蹴りを加えた。

「ぐはっ!？」

月光丸はそのまま横に吹き飛ばされた。

「何やっているんだW05！」

すると、今度はルシファーが黒騎士MK-?に接近した。

「はああああっ！」

「ふん！」

そして両者のブレードが交じり合い、衝撃波を起こす。

「そんな旧世代並みのISでこのルシファーに勝てると思っているのか」

「・・・言っておくがな・・・。こいつはお前が思うほど以上の力を秘めているんだな」

そして、ロイはルシファーを弾き飛ばすと、ブレードを鞘に戻した。

「ZⅡジャベリン、ZⅡスプレッダー！」

ロイは右手にZⅡジャベリン、左手にZⅡスプレッダーを展開した。

「おりゃあっ！」

そしてジャベリンをルシファーに振るう。

「くっ！」

ルシファーもブレードで応戦するも、ロイは容赦ないZⅡジャベリンによる突き攻撃とZⅡスプレッターによる射撃を繰り返した。

「調子に乗るなあ！」

と、ルシファーはブレードを振るう。

しかしロイは宙返りのようにして斬撃をかわした。

その間にZⅡスプレッターで攻撃すると、ZⅡスプレッターを収納した。

「ZⅡトマホーク！」

そしてZⅡジャベリンを左手に移すと、右手にZⅡトマホークを展開した。

「はああああっ！」

ロイは異なる武器を交互に操って、ルシファーに攻撃を掛ける。

「くっ・・・違う武器をこうもうまく操るとは・・・。。だが！」

すると、ルシファーは黒騎士MK-?から離れた。

「必殺ファンクション！」

「アタックファンクション！セラフィックウイング！」

すると、ルシファアのウイングが大きく展開して、そこから無数のビームが放たれた。

「ちっ！」

ロイはとっさに後ろに下がると、背中のマントを前にやり、防御体勢に入る。

そして無数のビームは黒騎士MK－？を飲み込むと、そのまま辺りをなぎ払っていった。

「ふっ……。他愛もないな……」

ルシファアは背中のウイングを元の大きさに戻した。

「……これならISは行動不能に……」

と、言いかけた瞬間……

「……！？な、なに……！？」

砂煙が晴れると、そこには……

「あれは……」

黒騎士MK－？の周りには、四体のISがいた。

前の右には、『青龍』を模したIS『セイリユウ』であり、前の左には『白虎』を模したIS『ビヤッコ』であり、後ろ右には『朱雀』を模したIS『スザク』であり、後ろ左には『玄武』を模したIS『ゲンブ』がいた。

どれも昔から伝わる『四神』を模したISであった。

「いけ・・四神たち！」

そして、四機は無人ISの群れに向かって行った。

セイリユウは右手に持つブレードでアヌビスを次々と切り裂いていき、ビヤッコ素早い動きでデクーエースを翻弄して両手に持つ『ドラゴンネイル』でデクーエースを細切れにしていき、スザクは右手に持つ『薙刀・斬鉄』でデクー改二機を切り裂くと、すぐに後方を向き左手に持つ『四神銃スザク』でデクーを撃ち向いていき、ゲンブは右手に持つ『ゲンブキャノン』を両手で持ち、インビットに向けてキャノンを放っていく。

「くっ！」

カルディアはキラーガトリングで応戦するも、セイリユウは素早く動きながら接近して、そのままブレードでキラーガトリングを切り裂いた。

「しまっ・・」

カルディアはとっさにガトリングを捨てて、ブレードを展開して、セイリユウの攻撃を防いだ。

その間に他九機も次々と無人ISを撃破していった。

「くっ！」

ルシファーはロイの攻撃を受け続けて、地面に叩きつけられた。

「さて・・・そろそろだな・・・。各機・・・必殺ファンクションだ！」

すると、十三機のカメラアイが発光した。

「アタックファンクション！ホークアイドライブ！」

「アタックファンクション！ホーミングショット！」

「アタックファンクション！バスターボール！」

山岳地帯にいたファンリルは機体前方にターゲットサイトを展開して、三発連続で放ち、弾丸はデクーやデクーエースなどのISを貫いていき、ハンターはハンターライフルから四発の弾丸を発射して、デクー改を四機同時に撃破して、ハンター？はライフルから黒い球体を発射して、球体はデクーエースに直撃すると大きく爆発して、周りにいたインビットなども巻き込んだ。

「アタックファンクション！蒼拳乱撃！！！」そうけんらんげき

「アタックファンクション！旋風！」

「アタックファンクション！地獄乱舞！」

右翼にいたパンドラは両手にエネルギーを集中させて、アヌビスや

インビットに向け無数のエネルギー弾を放ち、撃破していき、クノイチはコダチを交互に振っていき、デクーを切り裂いていき、クノイチ式はコダチを物凄い勢いで殴るようにしてデクー改やインビットなどを切り裂いていった。

「アタックフアンクション！グングニル！」

「アタックフアンクション！ライトニングランス！」

「アタックフアンクション！グロリアスレイ！」

オーデューンはエネルギーを溜めると、上空に舞い上がり、背中
の翼を展開して、リタリエイター先端にエネルギーを集中させて、
それを前に放ち、インビットやアヌビスを次々と貫いていき、アキ
レスはアキレスランスを高速で回すと、充填したエネルギーを前に放
ち、デクーやデクー改を貫いていき、アキレス？上空に飛び上がる
とランスに衝撃波を纏わせて、そのままランスを振るい、アヌビス
やデクーエースを撃破していった。

「アタックフアンクション！大青龍斬！」
だいせいりゅうざん

セイリウはブレードに真空波を纏わせて、何度か衝撃波を放ち、
インビットやデクーエースを切り裂いていった。

「アタックフアンクション！猛虎爪撃！」
もうこそうげき

ビヤッコは身体を一旦反らすと咆哮し、ドラゴンネイルを異常なま
でに速く振るい、アヌビスやデクー改などを次々と細切れにしてい
った。

「アタックフアンクション！もうきんじゅうげき猛禽銃撃！」

スザクは上空に舞い上がると、右手の薙刀・斬鉄を収納し、左手と同じ武器を展開して、そのまま身体を拘束で回し始めると、銃をあたり一面に雨の如く放ち、デクーやデクー改、更にはデクーエース、インビット、アヌビスを次々と撃ち抜いていった。

「アタックフアンクション！げんぶだいいつは玄武大裂破！」

ゲンブはホバーの脚部からラッティングギアを出し、ゲンブキャノンをしっかりと構えると、キャノンから膨大なエネルギー弾を放出し、無人ISを消し去った。

「くっ！・・・このタイミングで必殺フアンクションを一斉に放つとは・・・。しかし・・・」

すると、更に後方から増援が来て、数は最初より少ないが、それでも相当な数になった。

「必殺フアンクションを放った後では、まともには戦闘はできまい」

「・・・・・・・・・・」

しかしロイはあわてた様子を見せなかった。

「・・・それで勝ったつもりか・・・。愚かな・・・」

「なに・・・？」

「・・・Zシリーズ・・・一斉展開」

すると、ロイの前にZⅡトマホーク、ZⅡスプレッダー、ZⅡジャベリン目の前に浮いた状態で展開された。

「・・・合体・・・ユニオンソード！」

そして、Zシリーズは上空に舞い上がると、トマホークは柄が縮み、刀身が縦に割れて、スプレッダーはトリガーが真っ直ぐになって、ジャベリンは柄が収納されて、縦二つに割れた。そしてトマホークの割れたところにスプレッダーが入り、その両サイドにジャベリンの刀身が横着されて、大剣『ユニオンソード』になった。

「・・・一体何を・・・」

そしてロイは上空に飛ぶと、ユニオンソードを掴み取り、両手持ちして構えた。

「こいつを使い気はなかったが・・・この際仕方がない」

すると、ユニオンソードの各所にエネルギーが充填し始めた。

「行くぞ、必殺ファンクション！」

「アタックファンクション！メガサンダークロス！」

そしてロイはユニオンソードを天に向け上げると、エネルギーが溜

まったところから膨大なエネルギーが放出され、眼前に広がるすべてのものをなぎ払った……

「ば、ばかな……」

ピートの目の前には、さっきまで動けるはずだった無人ISたちだったが今では撃破されて残骸も同然な状態になって倒れていた。

それもさっきの増援と残っていた戦力を含めて全て……

「全滅!?!……たった十四機のISに……3万體以上いた無人ISが……たった五分で……」

ピートの表情は見えないが、絶望の表情だろう……

「……侮っていた……。たった十四機だと思ったばかりに……」

イノベーター陣はもう戦闘続行ができるISはいない……

「……くっ!……残ったものは今すぐに撤退だ!」

ピートは撤退を知らせる信号弾を上空に発射して、撤退していき、それに続きルシファーを脇に抱えた月光丸と各所のアーマーが破損したマスターコマンドと、かろうじて生き残った無人IS少数であった……

「……ふん……。所詮その程度さ……」

ロイはユニオンソードを肩に担いだ。

「無人ISに使われている量産型のコアは所詮純正品とは桁が違うのさ」

そうして、ロイはユニオンソードを収納して、他のISと共に研究所に戻っていった・・・

「やれやれ・・・結構疲れるな・・・」

ロイは研究所に戻り、ISの整備に入った。

「・・・さすがだな・・・。オーディーンやパンドラ、フェンリルの前代と試作機にも新規にコアを搭載して実戦配備して正解だったな。それぞれ連携が取れているな・・・」

そして、別のモニターを見ると・・・

「・・・うわぁ・・・」

見ると、そこはセイリユウなどを収容する特別格納庫であり、なにやら唸り声が聞こえた。

「・・・やはり四機同時にはなったら不満が溜まるか・・・戦い足りない、と」

この四機は戦闘に特化させており、AIも闘争本能を向き出した状態でセツトさせている。

「・・・やはり今度からは最大でも二機までだな・・・。じゃないと研究所を壊しかねない・・・」

一度この四機は研究所を破壊しそうになったことがあった・・・らしい・・・

「・・・・・・・・」

しばらく作業をしていると・・・

「・・・・・・・・?」

すると、アラームが鳴った。

「・・・ようやくお目覚めか・・・」

ロイはあの部屋に向かうのであった。

そしてロイはその部屋に入った。

カプセルの横の折れ線グラフが覚醒段階に入っていた。

「・・・さて・・・どうなるのやら・・・」

ロイは最終チェックに入り、カプセルを解除した。

「・・・フリーダ・・・」

カプセルから煙が出て、カプセルの蓋が開いた。

中には、銀色の長い髪をした女性であり、二十代前半と思われ、左目には眼帯がされていた。

「・・・・・・」

すると、女性・・・フリーダはゆっくりと目を開けた。

「・・・お目覚めだな・・・フリーダ」

フリーダはゆっくりと首をロイのほうに向ける。

「・・・ロ・・・イ」

「・・・フリーダ」

ロイは優しくフリーダを抱きしめる。

「・・・私・・・今まで・・・どのくらい・・・眠っていたの・・・？」

「・・・十年・・・ちょっとだな・・・」

「・・・そう・・・。でも・・・どうして・・・あなたは・・・あのときから・・・変わって・・・いないの・・・？」

「・・・気にするな・・・。とりあえず・・・君が無事に起きてくれて・・・よかった・・・」

「・・・ロイ・・・」

「・・・まあ・・・とりあえず・・・これを着てくれ・・・。そのままじゃ・・・」

ロイは近くに置いていたバスローブをフリーダに渡した。

「あ、ありがとう・・・」

「・・・それで・・・立てるか？」

「・・・や、やってみる・・・」

フリーダはバスローブを着て、ゆっくりと立ち上がった。

足はおぼつかず、ふらついていた。

（やはり十年間も寝ていると・・・身体は鈍っている・・・か）

ロイはフリーダを支えながら一緒に歩いた。

「とりあえず・・・ゆつくりと身体を慣らそうな・・・」

「うん・・・。・・・それと、今の世界ってどうなっているの？」

「・・・長くなるから・・・まあ、後で話そう・・・」

「・・・そう・・・。それと・・・。レオンは・・・どうなっているの・・・？」

「・・・無事だと思う・・・」

「・・・そう・・・」

そして、二人はゆつくりとそこを出た・・・

Story 49 黒騎士の力（後書き）

なんだか今回はぐだぐだになった気が……。

ちなみに黒騎士は結構なチート性能を有しています……。

そういえば、ダンボール戦機に新しく『ダンボール戦機BOOST』が出るみたいです。作者はもちろん買います。

しかも新主人公機に『イプシロン』という新LBXも登場するなど、中々期待を膨らませる要素がぎっしりですね……。今後こういうネタも入れていこうと思います……。

Story50 過去

「・・・いい天気だな・・・」

と、レイは住宅街を歩いていた。

土曜日の午前十時を回り、レイとシャルはレイの家に向かう・・・はずだったが・・・

「・・・で、なんで二人もついてきたんだ・・・」

レイの隣にはシャルがいるが、更に隣にはラウラ、そして楯無さんがいた。

「・・・私ひとりで来るつもりだったのですが・・・この女が勝手についてきたんです」

と、ラウラは楯無さんを睨む。

どうもこの二人は犬猿の仲（といっても、ラウラが一方的に嫌っている）だという。

「もう、そんな顔をしないでラウラちゃん」

「ちゃん付けで呼ぶな！」

いつもこんな感じである……

「はぁ……ラウラならまだしも……なんで楯無さんまでくるんだろう……」

レイはため息をついた。

「さぁ……。レイのおじいさんにあいさつにでも行くのかな」

「……なんでそれをする必要が……」

レイはどうも分からず、そのまま家まで歩いていった……

「さて……着いたぞ」

しばらく歩いて、レイの家に到着した。

「ここがレイの……家……」

シャルはレイからある程度聞いていたとはいえ、家の状態に少し啞然とした。

相変わらずボロボロな外装の家で、各所には補強された箇所があった。

「・・・こんな家に・・・住んでいらっしゃったのですか？」

「・・・まあな」

そしてレイは先に家に入った。

「じっちゃん・・・ただいま」

「おおレイ。よく帰ってきたのう」

家の奥から、健造が出てきて、レイをハグした。

「待っておったぞレイ。・・・ところで外で待っておるものたちも入ったらどうじゃ？」

健造は外で待っているシャルたちに気付いていた。

そして先にシャルとラウラが入ってきた。

「は、初めまして・・・シャルロット・デュノアです・・・」

「ラウラ・ボーデヴィツヒです」

二人は丁寧にあいさつする。

「おお・・・中々可愛い子達じゃのう・・・お前さんも中々やるの

う」

「って、何言っているんだよじっちゃん！」

健造が言ったことにレイは慌て、シャルとラウラは少し恥ずかしそうにした。

「・・・まだ外に居るじやろう？はよ入って来い」

「・・・そうですわね・・・」

と、遅れて楯無さんが入ってきた。

「おや？中々珍しいお客じやのう・・・楯無君」

「お久しぶりです・・・健造さん」

と、楯無さんはお辞儀した。

「・・・ええと・・・二人は知り合いなの・・・？」

「そうじゃ。そもそも更識家とは昔から縁があつてのう。だから楯無君を知っているのじゃ」

「・・・そうなんだ・・・。それは以外・・・。って何でそれを言ってくれなかったのですか？」

「フフフ・・・そこは企業秘密ってやつだからね・・・。いくらレイ君でも、教えることはできないからね」

「・・・はあ・・・そうですか」

「しかし、楯無君がレイと知り合いとは、なにかと縁はあるのう・・・」

「そうですね・・・。やっぱり昔から会っていると、どこかで再び会うものですね」

「そうじゃのう」

「・・・え？昔から会っているって、どういうことですか？」

「レイ君は覚えていないの？私は昔からレイ君と会っているのよ」

「・・・いや、覚えていません・・・」

「・・・そう」

すると、楯無さんの表情が曇る。

「・・・まあいいわ。じゃあ私はこれで」

と、楯無さんは家を出ろうとする。

「もう行くのですか？」

「ええ。私は健造さんに久しぶりにあいさつをするために来ただけだから」

「そうですか・・・」

「では、また会いましょう」

「そうじゃのう」

そして、楯無さんは家を出て行った……

「……お前さん本当に覚えておらんのか？」

「……うん……。会っているなら初めて会ったときに会った気がするけど、そんなことはなかったから……」

「……そうか……」

そして健造はしばらく考えた……

「まあ、あまり別に気にすることじゃないのう」

「……そうだね……」

「……じゃあ、まずお前さんたちには――」

そして、レイ達は家の掃除をさせられていた。

レイは天井を雑巾で拭き、シャルとラウラは床や壁を雑巾で拭いていた。

「すまんなシャル……。このために誘ったわけじゃないんだが・・」

「ううん。別にいいんだよ」

「私はただついてきただけですから」

と、それぞれ答えた。

「そうか・・」

そして三人は家の掃除を続けた・・・

「うむ・・・結構きれいになったのう・・」

しばらくして、健造が来て部屋をチェックした。

「じゃあ、レイ。お前さんはごみ捨てに行ってくれんかのう。ここ最近行っていないくて結構溜まっておるんじゃない」

「ごみ捨てって、結構遠いんだよな」

「まあそういうな。それともこの二人にやらせるのか？」

「・・分かったよ・・」

そしてレイは結構溜まっているゴミ袋を全部持つと、ここから結構

離れたゴミ捨て場に向かう・・・

「さてと・・・」

と、健造はレイが出てしばらくして、シャルとラウラに向き直る。

「お前さんたちは何かわしに聞きたそうじゃのう」

「え・・・？何のことですか？」

「フッフ・・・。隠そうとしても無駄じゃよ。さっきからお前さんたちはわしのほうをちらちらと見ておって、それからレイがどこかに行かないか見ていったじゃろ？」

「う・・・」

「そ、それは・・・」

シャルとラウラは凶星だったようだ。

「わしは何でもお見通しじゃよ・・・。それで、何を聞きたいんじや？」

「・・・ええと・・・。では、一つ聞いていいですか？」

「ああいいとも・・・」

「・・・その・・・いいにいいかもしれませんが・・・レイの過去について・・・教えてくれませんか？」

「・・・レイの・・・過去じゃと・・・」

すると、健造の表情が曇る。

「・・・シャルロット・・・なぜそんなことを？」

ラウラは怪訝そうにして聞いてきた。

「・・・レイの心の支えになりたい・・・でもレイの過去は知らないからどうすればいいかわからない・・・だから、少しでも知っていれば、いつかレイの支えになれる・・・」

「・・・シャルロット・・・」

「・・・レイのことが気になるようじゃな」

「・・・は、はい・・・」

「・・・いいだろう・・・わしが知っている限りで教えてやろう」

「・・・お願いします」

「・・・まあ少し長くなるだろうが・・・まずレイと最初に出会ったのが・・・まだレイが生まれて間もない頃じゃったな・・・」

「生まれて間もない頃・・・？」

「ああ・・・ある日のことじゃった・・・。レイの両親が突然来てな、わしのところに生まれて間もないレイを連れてきて、ワシに

預けたんじゃ」

「預けるって・・・じゃあレイは捨てられて・・・」

「いや。レイの両親はＩＳの技術者だと聞いておる・・・。しかし何らかの危険な研究でとある組織に追われる身になったんじゃ」

「・・・とある組織・・・？」

「どんな組織かは言わなかった・・・。レイの両親は最後にこう言った・・・」

『俺たちはある組織に追われることになってしまった・・・。だから・レイを頼む・・・』

『待つんじゃ！なぜ生まれて間もないこの子をわしに・・・！』

『・・・その点は承知しています・・・。しかし、俺たちが引き起こした事態に巻き込まれて命を落とすことになったら・・・一生後悔します・・・』

『・・・じゃが・・・』

『・・・では、レイを頼みます・・・』

「そうしてレイの両親は組織から逃げていき、以後一切の連絡を絶つたんじゃ・・・」

「・・・そうだったんだ・・・」

「では・・・ラングレンと言うのが・・・」

「・・・ああ。・・・レイの両親の名字じゃ・・・。じゃが、レイの両親は記録などを一切わしのところに残さなかったから、あいつは両親の顔を知らないんじゃない・・・」

「・・・・・・」

「・・・・・・」

シャルとラウラの表情が曇る・・・

「・・・それからわしはレイを育てていったが・・・レイが七歳の時じゃったかのう・・・。わしだけでは限界が来てな・・・正直あそこだけには連れて行きたくなかったのじゃが・・・結局そこに連れて行ったんじゃない・・・」

「・・・そって・・・」

「・・・『特殊兵士育成所』じゃ」

「・・・ッ！？特殊兵士育成所！？」

ラウラは声を上げた。

「・・・お前さん知っておるのか？」

「・・・はい・・・。私も・・・その施設にいました・・・」

「なんじゃと・・・？・・・そういえば・・・お前さんの名前はラウ・ボーデヴィツヒじゃったな」

「そうですが・・・？」

「・・・そうか・・・思い出した・・・。レイが言っておったの・・・お前さんが一番最初の友達だとな」

「・・・レイが・・・。・・・しかし、あなたはなぜその施設のことを・・・」

「・・・わしもかつてはその施設の職員じゃったからのう・・・」

「・・・そうなんですか・・・。どうりでどこかで見た顔だと・・・」

「・・・どういう施設なんですか・・・？その『特殊兵士育成所』ってというのは・・・？」

「・・・簡単に言えば・・・あの施設では最強の兵士を作り出すというものじゃった」

「最強の兵士・・・」

「その施設にいる者の大半は私のような者だった」

と、ラウラが付け加えた。

「ラウラみたいって・・・」

シャルはラウラのことを思い出した。

ラウラは遺伝子を強化して生まれた試験管ベイビーであったことを・
・・・・

「ラウラ君の言ったとおり、その施設ではそういうように遺伝子強化試験体がほとんどじゃった・・。そんな中ではレイは数少ない普通の人間じゃった・」

「・・・でも・・なんでそんなところに・」

「・・その施設では設備が十分にあった・・。生活には不十分はなかった・・。」

「・・じゃが、ただそれだけで入れようとしたわけではない」

「どういことですか？」

「・・レイは生まれながらにして、天才的な才能があった」

「天才的な才能？」

「そうじゃ・。レイはその時から身体能力が成人男性を大きく上回っていてな、しかもとても物分りがよくてな、一度教えた事は忘れず、すぐに身に付けておった・」

「・・凄い・・七歳の時でそんなに・」

「そして間もない頃で、レイはその才能を発揮してな、最初に入れた部署ではトップになったんじゃ」

「・・入ってすぐにトップに・。やはり凄い・」

「・・・それからレイは才能を発揮していつて、ついにはその施設最強の称号『レジェンド』を得たんじゃ」

「・・・そこまで凄かったとは・・・私が知っていることなどまだ表面ぐらいだったのか・・・」

「・・・じゃが・・・最強の称号を得たといっても、レイはいつも孤独じゃった・・・」

「・・・どうして・・・？」

「・・・あいつの周りには人が寄り付かなかったんじゃ・・・。その部署のものは全員認めておらんかったのじゃ」

「認めていない・・・？」

「・・・ただに人間だったからじゃろうな・・・。他の人間はほとんど遺伝子を強化されたものばかりだったから、尚更のこと」

「・・・」

「・・・そんなときに、レイはお前さんと会ったんじゃな。どういう出会いだったのじゃ？」

「・・・怪我をして動けなくなったところに・・・偶然レイが通にかかったのです・・・。それで私はレイにおぶられて自分の部署まで送ってもらいました・・・」

「そうか・・・。・・・じゃがお前さんとレイの部署は違うのじゃろ

「？」

「はい……。それからレイとは数回ほどしか会えませんでした」

「……。そうか……。じゃが、レイにとっては友達ができて嬉しかったんだろうな」

「……。そうなんですか？」

「……。青の時のレイの笑顔は忘れもせんよ。施設に入ってからはいんなに嬉しそうな顔をしたのは初めてじゃったからのう……。よっぽど友達が欲しかったんじゃない」

「……。そんなに……。嬉しかったんだ……。友達ができたことに……」

「……。じゃが……。それも長くは続かなかった……。」

「……。何があったのですか？」

「……。レイが八歳になった頃じゃったな……。レイは危険分子にされて、施設から追放されたんじゃない」

「そ、そんな……。どうしてそんなことに……」

「……」

健造はしばらくして……

「……。レイは……。施設の職員一人を……。殺しているのじゃ」

「ッ!？」

シャルとラウラは絶句した。

「・・・じゃが、レイは何もないで人を殺すことなどない・・・。その後調べてみると、その殺された職員がレイの同僚に暴力を振るっておったんじゃない」

「・・・まさか・・・」

「・・・レイはその子を守るためにその職員に飛び掛って、その子から職員を剥がしたのじゃろうな」

「・・・仲間を・・・守るために・・・」

「レイはそのつもりだったのじゃろうな・・・。じゃが、怒りで力の制御ができず、その職員の首を力強く絞めて、その職員はまもなくして死亡した」

「・・・」

「ただでさえレイは『レジエンド』の称号を持つておる。一人人を殺しているとなると、暴走しかねないと上は判断して、レイを危険分子にして、追放したんじゃない」

「・・・そんなことが・・・」

「それから施設はレイに関する情報を秘匿するために情報をすべて破棄して、レイに関わったものすべての記憶を書き換えたのじゃ。」

お前さんもそうされたのじゃろ？」

「・・・はい・・・。そして植えつけられたのが・・・レイが憎むべき敵だと言うことでした・・・でも実際はレイの抹殺が真の目的でした・・・」

「ラウラ・・・そんなことが・・・」

「・・・・・・」

ラウラの表情が曇る。

「・・・そして私はレイの持つ『レジェンド』の称号を得るためにレイを倒そうとした」

「・・・でも、レイがその施設を追放されたなら、その称号も無効になるはずじゃ・・・」

「・・・いや、『レジェンド』の称号は得た本人が死ぬまで持つものなんじゃ・・・。つまり追放されてもレイは死ぬまでその捨てようにも捨てることができない忌まわしき称号を持たないといけないんじゃない」

「・・・・・・」

「・・・それで、レイはその後どうなったのですか？」

「・・・あれからわしはその施設をやめて、レイの捜索を行った・・・。そして施設から数キロはなれたところでレイは行き倒れておった」

「・・・行き倒れていたって・・・」

「・・・わしが近付いてみると、レイは物凄くやせ細っていた・・・。顔には涙が流れた後があつて、その瞳はもう絶望に満ちていた・・・」

「・・・・・・・・」

「わしはそれから責任を感じて・・・レイを責任持って育てることにしたんじゃない・・・」

「・・・その後は・・・どうなったのですか？」

「・・・それからわしはこの家でレイを育てたのじゃが、レイをすぐに社会に適応させるのは難しいと思って、しばらくは家で少しずつ慣らしていったんじゃない」

「・・・そうですか」

「・・・そしてしばらくして、レイを学校に通わせることにしたんじゃない・・・。まあ最初は問題がなかったのじゃが・・・新しい問題が起きたんじゃない」

「・・・一体何が・・・？」

「・・・レイは物凄い不幸の持ち主でな、学校では彼の回りでは不幸なことが頻発していたんじゃない」

「・・・・・・・・」

「それでレイは『疫病神』などといじめを受けるようになったんじゃない

や」

「そんな・・・レイのせいでもないことなのに」

「・・・じゃが、レイを唯一助けたのが・・・神夜君じゃった」

「神夜さんが？」

「ああ・・・あの子はいじめられているレイを見つけるといつも助けに入って、レイを慰めておったんじゃ・・・。その学校では唯一の友達じゃったろうな」

「・・・神夜さんが・・・」

「・・・じゃが、レイの批判は学校だけに留まらなかった」

「・・・え？」

「・・・近所でも事故が多発し始めて、どっかの馬鹿がレイのせいだと決め付けおって、それからレイは近所から嫌われ者になってしまったんじゃ」

「・・・そんな・・・」

「・・・あまりにも・・・ひどすぎる・・・」

「そして、恐れていたことが起きてしまったんじゃ・・・」

「一体何が・・・？」

「・・・レイが中学一年の中間になった頃に、レイは精神的にかなり危険な状態に陥ってしまったんじゃない」

「精神的に・・・」

「・・・それはいつ崩壊するか分からない状態じゃった・・・」

「・・・・・・」

「それからわしと神夜君とで何とか支えてやって、レイは何とか立ち上がったんじゃない」

「・・・よかった・・・」

「・・・それから普通じゃった・・・じゃが・・・」

「・・・まだ・・・あったのですか？」

「・・・お前さんたちも知っていると思うが、二年前に起きた旅客機墜落事故を」

「・・・レイが言っていた・あの事故・・・」

「確か唯一の生存者がレイだけだって言う・・・」

「そう・・・その事故じゃ・・・。しかし・・・わしは驚いたんじゃない」

「なにをですか？」

「・・・なぜレイがその旅客機に乗っていたのかがわしには分からない」

いんじゃ」

「え・・・？」

シャルは一瞬理解できなかった・・・レイが言っていたこととは違うのだ・・・

「どういことですか・・・」

「わしにもわからないんじゃ。しかもレイはアメリカに行く途中だった、と言っていたんじゃ」

「・・・私も・・・そう聞きました」

「じゃがわしはレイをアメリカに送った覚えはない。それ以前にそんなお金を出せる余裕すらなかったのじゃぞ？」

「・・・じゃあ、なんでレイは・・・」

「・・・わからん・・・。事故の後、レイは日本の大きな病院に入られて、わしは行ってみればレイは集中治療室にいてのう。それから病院でレイを見守っているところに一人の男性が来てのう、わしに謝罪したのじゃ」

「謝罪？ 一体どうして・・・」

「その男性はアメリカ北部にある『テスラ研』の所長じゃったのじゃ」

「テスラ研？」

「知っています。確かI S研究所の中では大規模の研究所で、I S研究を始めて行ったといわれる研究所ですね……。しかしなぜ謝罪に？」

「・・・レイがアメリカに行くようになったのはその所長が誘ったようじゃ」

「誘った？でもなぜ・・・？」

「理由は極秘な内容だからわしも聞かされておらんが、その所長は謝罪とレイの見舞金に数百万円をわしに渡したんじゃ」

「・・・そんなことが・・・」

「それからして、レイに変化が現れてきたんじゃ」

「変化？」

「一つ目はレイに左腕にあの白い腕輪があつたのじゃ」

「白い腕輪・・・」

「医師によれば腕輪はレイから剥がせないようになっていたそうじゃ。じゃが、今思えばそれがI Sだったなら、話しはつく」

「・・・そうですね・・・」

「その後レイは目を覚ましたのじゃが・・・その右目には驚いてしまった」

「右目？」

シャルは首を傾げるが、ラウラの表情は曇る。

「・・・レイの右目が金色に変化しておったんじゃ」

「え・・・？金色って・・・どういうことですか・・・」

「医師でも全く原因は不明だそうじゃ。まあ人体に影響はないとされたのじゃが・・・それでもなにか異様な雰囲気を感じたんじゃ」

「・・・だから・・・レイはいつも右目に眼帯を・・・でもラウラも・・・そうだよね？」

「・・・私も確かにそうだが・・・同じものではない」

「・・・そうだよね・・・」

「・・・それからレイは事故にあってもすぐに回復して、その後中学を無事に卒業したんじゃ」

「・・・無事に卒業はできたんだ」

「・・・それからレイは高校に入らず、一年間ずっとわしのためにバイトに励んだんじゃ」

「そういえば・・・レイもいろいろ言っていたね」

「そうして、今年の四月辺りじゃったな・・・。レイはISを起動

させたんじゃ」

「そんな時期に……ってことは……レイは入学式一週間前でI
Sを起動させて……それでIS学園に入学した……」

「……かなり異例なことだな……」

「まあそうじゃな……。……とりあえず……わしが知っているの
はこれくらいじゃ」

と、長々とした話が終わった……

「ありがとうございます……。レイのことを結構知ることができま
した」

「いいんじゃないよ。まああいつは一人で思いを背負うことが多いから
な。あいつの支えになってあげてくれ」

「はい」

「ただいま」

と、ようやくゴミ捨て場からレイが帰ってきた。

「ゴミ捨て場に行ったにしては遅かったのう」

「ごみを捨てたついでに買い物に行ってきた」

と、レイは台所のテーブルに買ったものを入れたビニール袋を置いた。

「そうか……。じゃあレイの料理が久しぶりに食べれるのう」

「そっか……。レイっていつも料理を作っていたんだね」

「まあな……。それで二人はどうするんだ？」

「……どうするラウラ？」

「……うーん……」

二人はしばらく考えて……

「じゃあ僕たちも一緒に食べていいかな？」

「では、私も」

「ああいいよ。食事は賑やかなほうがいいからな」

レイは食材を出すと、台所に置いて料理の準備をした。

「僕も手伝っていいかな？」

「……そうだな……。じゃあジャガイモの皮を剥いてくれるか？」

「いいよ」

「わ、私も手伝います。何をすればいいですか？」

「・・・ラウラは玉ねぎの皮を剥いてくれ」

「わかりました・・・」

「・・・ねえレイ・・・。食材からして今日はカレーなの？」

「ああ・・・。大人数ならそれがいいだろう？」

「そうだね」

と、シャルはにこつとして、ジャガイモの皮を剥き始めた・・・

「いいのう・・・」

健造は三人のやり取りを見て、安心した。

（レイも大丈夫そうじゃな・・・あの子達ならレイを支えてくれるだろう・・・）

健造は安心して安堵の息を吐いた。

（・・・こうしていられるのが・・・一番いいのう・・・）

健造は今後もこうしていられることを思うのだった・・・

S t o r y 5 0 過去（後書き）

感想がやたらと最近少ない・・・

Story 51 羅刹機対地獄の破壊神

そして次の日のIS学園では……

「はっ！ せいっ！ でりゃあっ！」

IS学園内の第三アリーナでは、鈴が一人訓練を行っていた。

・・と言うよりは・・・武道の練習？

「・・・・はあ・・・だめだこりゃ・・」

と、甲龍を身に纏った鈴はため息をつく。

「やっぱり自分の勘じゃ全然動きが掴めないや・・・やはりレイに教わるしかない・・・っていつでも・・」

鈴はどうも機嫌が悪い・・・

「こういうときに限ってレイがいないなんて・・・どういうことよ・・」

なぜかその瞳は据わっており、いわゆる『ヤンデレ』？

「ククク．．．．．いつも．．．．．いつも！」

と、鈴は地面を強く殴りつけると、衝撃波でクレーターができた。

「いっつも必要な時にいないんだからっ！．．．．．」

そして鈴は肩をガクツと下げた。

「はあ．．．文句言ったって、あいつに届くわけないか．．．」

そうして鈴はピットに戻ろうとした．．．

『なら．．．力を欲するか？』

「．．．え？」

鈴は後ろから声が来て、とっさに後ろを向いた。

すると、そこには．．．．

「な、なんなの．．あれ．．！？」

そこには、異様な姿のISが立っていた。

頭の後ろには、地面に着くほど長い白い髪のようなものがあり、全体の形状はすらっとしており、つま先には爪のようなものがあり、生物的な感じがした。カラーリングは黒をメインに紅いラインが各所の縁に施されて、両腕には龍の頭を模した籠手みたいなものがあった。

『そなたは力を欲するか?』

と、ゆっくりと歩いて鈴に近づいていく。

「い、一体何が目的よ!」

鈴はとっさに臨戦態勢に入る。

『私の試練を受け、それを成しえたのなら・・・そなたに力を与える』

「・・・なに・・・?」

『・・・私と戦い・・・それに打ち勝つことができれば・・・だがな』

「・・・力・・・でもいくらなんでも話がうますぎない?・・・
本当の目的は何なのよ」

『・・・さっきから言っている・・・。お前と戦い・・・そして確かめる』

「確かめる?」

『・・・そなたが・・・私の器に相応しいかを・・・』

「器・・・？」

『・・・どうする・・・？』

「・・・意味が分からないわね・・・。器ってどういうことよ」

『・・・器・・・すなわち・・・我のパートナーだ』

「・・・パートナーねえ・・・。最初っからそう言えはいいいじゃないの」

『・・・・・・』

「・・・まあいいわ・・・。あたしに勝負を申し入れるって言うのなら、受けて立つわよ」

『・・・では・・・しよう——』

『待てえええ！！』

『「！？」』

すると、目の前のIS・・・アルクオンの後方より何かが迫ってきて、右手にしていたものを振り上げた。

アルクオンはとっさに前にジャンプして、それが地面を叩きつけたその間に後ろを向きながら着地した。

『抜け駆けは許さねえぞ!』

と、新たに現れたそれはアルクオンに向け叫ぶ。

全体的にずっしりとしたイメージで、黒がメインで、オレンジ、関節などにはグレーが施され、動物のような頭で、両側面には角があり、胴体には二つの砲門があり、両肩には上下に開くバインダーがあり、右手にはエネルギー刃を持つチェーンソ『絶・破岩刃』が握られていた。

『そいつは俺が先に目え付けていたんだぞ!』

と、アルクオンに向け叫ぶIS……ハカイオー絶斗

『何を言うか! 私が先だ!』

と、さっきとは話し方が違う……

『俺が先だ!』

『私だ!』

『俺だ!』

と、本当に火花を散らして二体のISは言い争っていた。

その間鈴は放置されていた

「……あの……?」

『『引っ込んでろ!』』

「ひっ!」

鈴が聞こうとすると、二体は息を合わせて叫び、鈴はびくつとした。

「・・・勝手に喧嘩始められてもなあ・・・」

鈴は邪魔にならないように後ろに下がろうとすると・・・

『じゃあこいつにどっちがいいか決めさせようじゃねえか!』

『いいだろう!そなたはどっちがいい!』

と、急に二体は鈴に聞いてきた。

「はっ!?!な、なにを・・・!?!」

『決まっているだろ!どっちと戦うかをだ!』

『どうする!』

「・・・え、ええと・・・」

鈴はどうしていいか分からなかったが、次の瞬間頭の上の電球がひらめいた。

「・・・強いほうとなら、いいわよ」

と、言う・・・

『なら、俺とだな』

『お前が強いだど？笑わせるな』

『何だとテメェ！お前こそ強いって言うのか！』

『ああそうだ！私のほうが貴様よりは断然強い！』

『言ってくれるじゃねえか！だったらここで決めようじゃねえか！』

『望むところだ。貴様とは決着を付けたいと思っていたところだ！』

と、二体は臨戦態勢に入った。

「はっ！？ちょ、ちよつと！」

鈴はまさかの展開に慌てた。

『行くぞっ！』

『おうっ！』

そして両者は地面を強く蹴り、一気に接近した。

『うおおおおっ！』

『はああああっ！』

そして両者はぶつかり、衝撃波を起こした。

『くらえっ！』

ハカイオー絶斗は絶・破岩刃を振り下ろすも、アルクオンはバックステップで避けた。

『でりゃっ！』

その直後にアルクオンは前に飛び出し、連続でハカイオー絶斗に拳を叩きつける。

『らせつれんげき羅刹連撃！』

そして最後の一撃を腹部に叩きつけようとした。

『調子に乗ってんじゃねえぞ！』

すると、ハカイオー絶斗は左手でアルクオンの拳を受け止めた。

『どりゃあっ！』

そしてそのまま横に放り投げると、絶・破岩刃をアルクオンの胴体に切りつけた。

『ぐっ！』

アルクオンは切られた箇所を押さえながら着地した。

『まだ行くぞ!』

「アタックフアンクション! ちようガオーキャノン超我王砲!」

と、ハカイオー絶斗は足を踏ん張ると、胴体にある二門の砲門にエネルギーを充填させて、膨大なエネルギーをアルクオンに向け放った。

『くっ……。行けっ!そうはりゅう双覇龍!』

アルクオンは両腕の籠手の先端を開き、銃口のようなものを出すとそこからエネルギーを放出し、龍の形になって超我王砲のエネルギー弾に向かって行った。

そして両者のエネルギーはぶつかり大爆発を起こした……

「わぁ……。ド派手にやるわね……」

鈴は遠くから二体の戦闘を見ていた……

「……あたしはどうすればいいの……」

そうして鈴はしばらくこの戦いを見届けた……

そんなドンパチがあっている一方寮では・・・

「はぁ・・・」

と、セシリアはため息をつきながら廊下を歩いていた。

「レイさんに動きを見てもらいたかったのに・・・どうして今日に限っていらっしやらないのかしら・・・」

セシリアはようやく『ヴァイスリッター・ティアーズ』の動きに慣れてきたので、その動きをレイに見てもらおうと思っていたのだが、レイは自宅に一時帰宅しているので留守だった。

「・・・といっても、フィオナさんに見てもらうのも悪くはありませんが・・・」

しかし、フィオナの雰囲気からどうも頼みにくかった・・・

「・・・どうでしょうか・・・」

と、考えていると・・・

「おや？」

すると、セシリアは何かに気付いた。

それは、今はいないレイの部屋の前で、誰かがいた。

水色のショートヘアをした女子で、眼鏡を掛けていた。

「誰なのかしら？」

と、近付こうとすると、その女子はセシリアに気付くと、とっさに逃げ出した。

「・・・何なのかしら・・・」

セシリアは別に追いかけようとはせず、そのまま自分の部屋に戻っていった・・・

「————じゃあ、今後もそれで・・・」

と、フィオナは携帯を切ると、ベッドの上に置いた。

「ただいま帰りました」

と、神夜が部屋に帰ってきた。

「用は終わったの？神夜」

「はい」

そして神夜は机の上に置いてあるお茶パックを取ると、急須に入れ

てお湯を入れた。

もう分かるだろうが、神夜とフィオナはルームメイトなのだ。
最初は神夜のみだったのだが、後からフィオナが入ってきたのだ。

「ところでフィオナさんはさっき何を話されていたのですか？」

「研究所の職員とよ。ナインボールの新装備を送ってくるみたい」

「そうなんですか」

「神夜は研究所から装備品とか送ってこないの？」

「うーん・・・そういうのはあまりないのですが・・・。研究所で新しく機能を加えた斬冠刀を発注しているんです」

「ふーん・・・でも何の機能を入れるの」

「それは秘密です」

「・・・そりゃ・・・そうよね」

と、フィオナとこういう風に接することができるのは、恐らく学園内では神夜のみだろう

「ところで、フィオナさん」

「なに？」

「ずっと聞こうと思ったのですが・・・どうしてレイさんはフィオ

ナさんを嫌っているのですか？」

「ああそれね・・・」

と、なぜか懐かしそうにした。

「明らかにフィオナさんの前では他の人と違うんですね・・・どうしてなんですか？」

「・・・・・・・・・・」

フィオナはしばらくして・・・

「・・・そうね・・・あれは確か二年前かな・・・」

「二年前？」

「レイがあの事故に遭ってから二カ月後のことだったかな・・・。中学からの付き合いだから仲はよかったのよね・・・当時は」

「え？昔は仲がよかったのですか？」

「ええ。そういえば神夜は中学一年の時に学校を辞めないといけないうことになったんだっけ？」

「はい。お父様の仕事の都合で一時期北海道へ行っていました・・・。それで戻ったのが中学の終わりのときですね」

「そう・・・。話は戻すけど、当時は周囲でも仲が物凄くいいって言

うので評判だったわね」

「そうなんですか・・・」

神夜はどうもその様子のイメージが湧かなかった。

「でも・・・私も引越さないといけない時があったのよね」

「え？」

「でもレイに言いにくかったから、引越しの話は黙っていたのよ」

「・・・・・・・・」

「・・・そして私はレイに黙ったまま引越したのよ・・・でも当時は後悔したかな・・・」

「・・・それとこれとどう関係があるのですか？」

「それからよ・・・。私は引越してから少しして、レイに電話を入れたのよ」

「それで？」

「・・・レイはこう言ったわ————」

『なんで・・・なんで黙って行ったんだよ・・・。俺のことが嫌いになったのかよ！』

『ち、違うわ!・・・わ、私はただ・・・あなたを悲しませないため

に・・・』

『黙ったままのほうがよっぽどつらいんだよ!』

『・・・!』

『・・・俺は・・・俺は――――』

「・・・まあ、その後何を言ったのか聞こえなかったわ・・・」

「・・・はあ・・・」

「それからレイはもう私に電話を掛けてこなかったわ・・・。私から掛けても、電話には出なかったわ・・・」

「・・・・・・」

「・・・正直言えば・・・レイは私と失恋したから・・・私の事を嫌いになったかもね」

「・・・ええ・・・」

あまりにも意外な事実には、神夜は哑然とした。

「まあ、そういうことがあって、今に至るってわけ」

「・・・そう・・・なんですか・・・。でもフィオナさんはどうだったのですか?」

「・・・そうね・・・。・・・私は・・・」

と、珍しく歯切れが悪い・・・

「・・・好き・・・だったかな・・・」

フィオナは少し頬が赤かった。

「・・・そうだったのですか・・・。フィオナさんもそういうところがあるんですね」

「・・・誰にも・・・言わないでよ」

「はい！」

そして少しは賑やかになった・・・

その頃・・・

「・・・凄い・・・」

ロイは訓練場でISを動かすフリーダに驚いていた。

あれからフリーダは戦うといって、ロイは完成させた『パンドラM

K—?』を彼女に託して、今に至る・・・。

（わずか半日でISの基本動作を覚え、武器の扱いも数時間で覚え
た上、模擬戦もこうも簡単に行えるほどになっていいなんて・・・
）

ロイはフリーダの才能に驚いていた。

（昔から凄かったが・・・ISでも才能を発揮するか・・・。全く・・・
姉弟は似るものだな・・・）

ロイはフリーダの弟にISを与えたが、そのときも凄かった・・・

「・・・さて・・・これはいいとして・・・これはどうするかな・・・」

と、ロイは訓練場のモニターから目を離して、ISの開発所を見た。

そこには一体のISが自動アームで製造されていた。

「・・・こいつのテストパイロットはどうするか・・・」

ロイは頭を掻いて悩んだ。

「・・・とりあえず・・・探してみるか」

そうしてロイは別のモニターに行って、キーボードを叩いた・・・

Story52 再会

ガキンッ……！

IS学園の第四アリーナに金属音に酷似した音が響いた……

「凄いな……」

と、IS学園に帰ったレイはまず修理が終わったファントムの稼動テストを行っていた。

レイは今日日曜日の朝でIS学園に帰り、夕方ごろでテストを行っていた。

ちなみにシャルとラウラは昨日先にIS学園に帰っていた。

「これほどまで性能が上がるとはな……」

ファントムのその姿は以前とは若干異なっていた……

大きく違うのはまず脚部で、装甲前面に新たに展開装甲が搭載され、両腕にも展開装甲が搭載され、更に背中には『ストライクパッケージ』で装備される追加ブースターが搭載されていた。そのブースター

ーの側面にはグランショットガンとは異なるライフルが装着され、
グランスラッシュリッパーはサイドアーマーに装着されていた。

プログラムによってバージョンアップした『ゲシュペンスト・ファ
ントムB2』である。

「しかも武器も新規にできるとはな・・・」

レイの右手には、新たな剣が握られていた。

全長はファントムを超えて、柄だけでもファントムの半分ほどあり、
刀身は物凄く長い。刀身は大剣モードのグランプラズマカッターと
同じエネルギー体で形成されているが、それよりも強度が増し、エ
ネルギー量も増えている。グランプラズマカッターの弱点をほとん
ど無くした新たな武器『グランメガプラズマブレイド』である。

（これを手に入れた代わりに、グランプラズマカッターの大剣モー
ドが無くなったんだよな・・・でもむしろいいか・・・）

レイはプラズマブレイドを収納して、背中ของブースターに装着して
いる二丁のライフルを取り出す。

「『グランビームライフル』か・・・。ショットガンよりも使い勝
手がいいな」

形状はグランショットガンと比べると厚さが薄くなり、銃身も若干
長くなっていた。

そしてレイは右のグランビームライフルを前に出てきた仮想標的に
向け、発砲した。

銃口から出たエネルギー弾は一直線に仮想標的のど真ん中を撃ち抜いた。

「なるほど・・・照準の精度も上がっているな・・・」

レイはすべての性能アップを実感した。

「ふう・・・」

レイは更衣室で制服に着替えながら一息ついた。

時間帯からもう誰もいなかったので、この辺りはガラーンとしていた。

「・・・さてと・・・」

レイは着替え終わって、更衣室を出た・・・

（うーん・・・やはり以前と違うからなんとなく感覚が違う・・・
もう少し慣れる時間が必要だな・・・）

と、レイは考えながら寮へと帰っていた。

グランメガプラズマブレイドは大剣モードのグランプラズマカタ
ーと比べると刀身の長さが違うので動きが少し鈍いのだ。

（まだあれは実戦じゃ無理か・・・）

と、考えていると・・・

「・・・ん？」

レイは目の前であるものを見た。

それは一人の女子生徒がしゃがんだ状態で何かを探していた。

「・・・？」

レイは女子生徒に寄った・・・

「どうしたんだ？」

「・・・！」

すると、女子生徒はゆっくりとレイのほうを見ると、なぜかビクッ
とした。

水色のショートヘアで、眼鏡をかけていた。

「・・・」

「探し物か？」

「・・・う、うん・・・」

「そうか・・・。じゃあ俺も一緒に探そう」

と、レイは女子生徒と一緒に探し物をした。

「・・・?」

しばらく探して、レイはコンクリート通路横の草むらに何かを見つけた。

(これか?)

レイは草むらを探してみると、一つのキーホルダーがあった。

今テレビでやっている特撮ヒーローのキーホルダーだった。

「探しているのはこれか?」

レイはキーホルダーを手にして女子生徒に見せた。

「・・・それ・・・」

「これか・・・。見つかってよかったな」

と、レイはキーホルダーを女子生徒に渡した。

そしてレイはその女子生徒を見て「ん？」と首をかしげる。

（はて・・・？誰かに似ているような・・・）

目の前の女子生徒が誰かとそっくりだった。

「あ・・・あの・・・」

すると、女子生徒が聞いてきた。

「あなたの・・・名前は・・・？」

「俺か？・・・一年一組のレイ・ラングレンだ」

「レイ・・・ラングレン」

「君は？」

「・・・四組の・・・更識・・・簪・・・」

「更識簪・・・？」

レイは女子生徒・・・簪の名字に引っかけた。

「・・・あんまりいいことじゃないかもしれないが・・・更識楯無の妹か？」

「・・・知って・・・いるのですか・・・あの人を・・・」

「そりゃ・・・生徒会長助手だからな。嫌と言うほど知っているよ」

「・・・生徒会長・・・助手・・・」

（・・・どうも姉妹の仲は悪いようだな・・・姉をあの人呼ばわりしていることは）

と、レイは更識姉妹の仲が悪いことに気付く。

（そういえば楯無さんは妹のことをあまり言っていないな・・・これがあるからか）

レイは一旦頭を掻いた。

「まあ・・・キーホルダーが見つかってよかったな更識」

「・・・いや」

「ん？」

「名字で呼ばれるのは・・・いや・・・。名前で・・・いい」

「・・・？そうか。あとだな、簪」

「・・・？」

「前にも会わなかったか？」

「・・・会って・・・ない」

「そうか。変なことを聞いたな……。じゃあな……。簪」

そうしてレイは簪に手を振って寮へと向かう……

「あ……………」

簪はレイに手を差し伸べて止めようとするが、もう届かなかった……

「……………」

簪は胸に手を当てた。

（レイ……ラングレン……。ようやく……。知ることができた……）

簪は会っていないと言ったが……。実際は会っていた……

（……………）

そして簪は忘れもしないあの日を思い出した……

ちょうど一年前ぐらいだった……

簪とはある町に行って買い物に行っていたのだが、お目当てのもの

がなかったので渋々と家に帰っていたのだが・・・

「かわいいねえ・・・お嬢ちゃん・・・」

「・・・・・・・・」

と、簪は住宅街のコンクリートの塀の角に追い込まれていた。

目の前にはチャラ男が数人いた。

「おじさんたちと楽しいところへ行こうぜ」

「・・・・・・・・いや・・・」

と、簪は大きな声で叫ぼうとするも、恐怖のあまり声が出なかった。

「そんなこと言わずにさ」

と、簪の右肩に手を置く。

「・・・・・・・・」

簪は恐怖のあまり泣き出しそうになる・・・。

そして心の中ではただこう叫んでいた・・・

助けて・・・！

しかし心の中で叫んでも誰にも届くはずもなかった・・・

それでも心の中で叫ぶ・・・

助けて・・・！

すると・・・

「ぐわああああっ！？」

突然チャラ男Aが悲痛な叫びを上げる。

簪の右肩に置いている手とは反対側の腕が後ろにやられ、締められていた。

「何をしている」

チャラ男Aの後ろには一人の男子がいた。

簪と同じぐらいの男子で、右目には眼帯が付けられていた。

見ると周りではその男子によってか、他のチャラ男達が地面に倒れていた。

「は、離してくれ！」

「ああ。その子の肩に置いている手を除ければな」

「わ、分かったから・・・離してくれ！」

と、チャラ男Aが簪から手を離すのを確認して、その男子・・・レ

イはチャラ男Aの腕を離した。

「てめえっ！」

チャラ男Aは腕を離された瞬間レイに向かって殴りかかった。

「・・・・・・・・」

しかしレイはひらりとかわすと、チャラ男Aの腕を掴む。

「でりゃあっ！」

そしてそのままチャラ男Aを背負い投げして地面に叩きつけた。

「まだやるのか？」

と、レイは手をポキポキと鳴らした。

「に、逃げろっ！」

そしてチャラ男たちは必死に逃げていった・・・

「やれやれ・・・今時ああいいうやつがいるんだな・・・」

と、レイは手をはたくと、簪に向き直る。

「君、大丈夫か？」

「・・・・・・・・」

簪はまだ怯えていた。

「・・・まあ怯えるのも仕方がないか」

と、レイは「はぁ・・・」とため息をつく。

「とりあえず、今後は気をつけろよ。まだあんなやつらが多いんだからな」

「・・・う、うん・・・」

「・・・おっと。もうこんな時間か・・・。じゃあ気をつけろよ」

と、レイは簪に手を振って走っていった。

「あ・・・」

簪は止めようと手を伸ばすが、もう姿が見えなくなった・・・

「・・・名前・・・聞けなかった・・・」

簪はしばらくレイが走っていったほうを見つめた・・・

「・・・・・・」

そうして簪はレイと再会した。

まさかIS学園で再び出会うことになるとは思っていなかった。

「・・・レイ・・・」

簪はレイの名前を言う・・・。

あの時のレイの姿はまるで自身が理想とするヒーローだった。

困った人を見捨てず、自身の危険を顧みずに助ける・・・それが簪の理想とするヒーロー像だった・・・

「・・・」

そうして簪は寮へと戻っていった・・・

「ふう・・・」

そして時間は夜の八時半を回り、レイはシャワーを浴びてさっぱりした。

「明日はナハトのテストを行うか・・・」

と、お湯を沸かしてお茶粉が入ったコップに注いだ。

すると・・・・・・・・

コンコン・・・

と、ドアのノックが聞こえた。

「はいはい」

と、レイはドアを開けると・・・

「ちやお」

と、楯無さんがいた。

「楯無さんですか・・・」

「おや？　なんだか私があることを予想していたみたいないないかただね」

「慣れましたよ・・・あなたの行動パターンが」

「ふーん・・・。レイ君も様になってきたわね」

「・・・とりあえず話があるのなら中で聴きましょう」

「そうするわ」

と、楯無さんはレイの部屋に入っていく。

「お茶です」

と、レイはさっきお茶を入れたコップをベッドの上に腰掛ける楯無さんに渡した。

「本当に私が来ることを予想しての準備だね・・・」

と言いながらも楯無さんはお茶を一口飲む。

「ところで、話は何ですか？」

レイは楯無さんが座っているベッド横のベッドに腰掛けた。

「内容は今度行う『専用機持ちタッグマッチ』のことよ」

「専用機持ちのタッグマッチ？」

「そう。二週間前のキャノンボール・ファストの事件から専用機持ちのレベルアップを行うために出された行事なの・・・。」

「なるほど・・・」

クラス対抗戦・・・学年別トーナメント・・・福音事件・・・学園祭・・・キャノンボール・ファスト・・・そこで起きた事故での経験からの行事なんだろう・・・

「それだけを話すために来たのですか？」

「そうじゃないんだけど・・・」

「・・・？」

と、楯無さんには珍しく歯切れが悪い・

「その・・・お願い！」

と、楯無さんは両手を合わせてレイに頭を下げた。

レイは意外なことに呆然とする。

「私の妹をお願いします！」

「・・・へ？」

レイは一瞬理解できなかった・・・

「はぁ・・・つまり楯無さんは俺に妹と組んで欲しい・・・。と、言いたいのですか？」

「まあ・・・そうなのよ」

「しかし・・・なぜ俺が？」

「それはあれよ・・・私の最も信頼が置ける人物だからね・・・君は」

「・・・嘘ですね」

「うつ・・・」

あっさりと嘘を見破られてか、楯無さんは言葉が詰まる。

「実際のところどうなんですか」

「・・・妹を・・・何とかして欲しいのよ」

「・・・どういことですか？」

「その・・・ネガティブというか・・・なんていうか・・・そのあれなのよ」

「あれ？」

「暗いのよ」

(うわー・・・ばっさりと言った)

「まあでも実力はあるから代表候補生で専用機持ちなんだけど・・・」

「だけど？」

「・・・専用機がないのよ」

「・・・はい？」

専用機持ちなのに専用機がない・・・どういこと？・・・

「専用機がない理由は・・・一夏君にあるのよ」

「一夏が？」

「一夏君の白式が開発されたのは倉持技研なのよ」

「そういえば言っていたな・・・それはつまり・・・」

「そう・・・白式の開発に人員を奪われて、専用機の開発が遅れているのよ・・・」

「なるほど」

なら簪が今までの行事に出ていないことが分かる・・・

「しかしそれでなぜ俺が？」

「フッフ・・・とぼけなくてもいいのよ・・・一年生の中ではいち早くISの整備を習っているらしいじゃないの」

「それは・・・」

ちなみに言うとう一部を除いてISの整備を本格的に習うのは二年生から・・・らしい

「それも・・・相当な腕らしいじゃない・・・ほとんど自分の腕でISを調整しているって聞いているわよ」

「・・・」

そのためレイは学園の整備員には任せず自分でISを調整したり、カスタマイズを行っている。

「って、虚ちゃんが言っていたわ。そもそもISの整備を虚ちゃんに習っていたらしいじゃないの」

「まあ・・・そうですけど」

「君も意外と勉強家だね」

「・・・・・・・・」

「まあ・・・そのレイ君の腕を買ってのお願いなの」

「だとしても・・・俺はIS自体を作り上げるとかまでの腕は・・・」

「ないわけじゃないでしょ？聞いているわ・・・何だって学園にある訓練機の『打鉄』と『ラファール・リヴァイブ』の両方のパーツを使ってISを組み上げたんだよね」

「うつ・・・それは・・・」

実はというと・・・レイは一週間前ぐらいにIS学園の第二格納庫に保管されていた訓練機を勝手にいじって、カスタム機を作り上げていた・・・。

もちろんその後には織斑先生にこっぴどく説教された・・・。

しかし製造国が違う両機をうまく具合に調整して組み上げているの

でかなりの高性能機が出来上がっていたことが後に分かったので、
織斑先生のご厚意で重い処罰は免除された・・・が、反省文はどっ
さりと書かされた・・・

「・・・分かりましたよ・・・どの道生徒会長助手にとって生徒会
長の命令は絶対ですからね」

と、レイは降参したように両手を上げた。

「それでよろしい・・・まあ、妹のことはお願いね」

「・・・楯無さんらしくありませんね・・・あなたが頭を下げてま
で俺に頼みに来るなんて」

「・・・まあ・・・色々ね・・・」

「とりあえず、何とかしましょう」

と、レイは承諾することにした・・・

しかし、その会話を何かが聞き取っていた。

それは机に下においてあるケースの中にあるジライヤであった・・・

「なるほど・・・楯無君の妹の専用機か・・・」

と、ロイはジライヤを通してその会話を聞いていた。

そもそもジライヤはロイが作り上げているので、当たり前のことだ。

「・・・ちようどいいかもしれないな・・・こいつのテストを行うのに・・・」

と、ロイの目の前には、グレー系統のカラーリングをしたISがあった。

「さてと・・・どう送るかな・・・」

と、ロイはどうやって送り込むか考えた・・・

Story52 再会（後書き）

皆さんに聞きますが・・・仮面ライダーネタを入れてもいいでしょうか？

今考案中なのですが、皆さんの意見が聞きたいので、少しの間聞かせています。

Story53 代償

ここはとある喫茶店・・・

「どうしてロイはここで店をやっているの？」

と、フリーダはコーヒーを一口飲んでロイに訊いた。

ここはロイがやっている喫茶店だった。

「情報収集とかが大半だな・・・。まあ趣味っていうのもあるけどな」

「そうなんだ・・・」

と、ロイはグラスを布巾で磨いて、棚に戻した。

「でもこんな渋い感じもロイらしいよね」

「そうか？」

「だって、前の店もこんな感じだったし」

「・・・そうだったな」

と話していると……

「よう、マスター」

と、店に入ってきたのは、ハーケンだった。

「久しぶりだなハーケン」

「そうだな……。おっ、フリーダももう起きていたのか」

と、ハーケンはフリーダを見る。

「ええ……。最近ようやく目が覚めたわ」

「相変わらずその美貌は変わっていないな」

「あなたも……。随分と変わったわね……。最後に見たときは確かまだ少年ぐらいだったわね」

「ははは……。確かにそうだったな」

と、ハーケンはフリーダの隣の席に座った。

「ところで、仲間のほうはどうした？」

ロイはハーケンにコーヒーを渡す。

「どうも……。アシエンは今零児と行動を共にしている。俺は別行動を取っている」

「そうか」

「ねえ・・・ロイ」

「ん？」

しばらくしてフリーダがロイに訊いてきた。

「あんまりいいことじゃないかもしれないけど・・・話を聞かせてくれない」

「話？」

「そう・・・あなたにとっては思い出したくないことだけど・・・あの時の事を聞きたいの」

「・・・あの時、か」

するとロイの表情が曇る。

「あれか・・・もう六年経つのか。時が進むのは早いな」

「ああ・・・まるでつい昨日のことだと思うよ・・・」

「ロイ・・・」

「確かに思い出したくないが・・・お前とリイルは親友だから・・・」

聞いておいたほうがいいかもしれないな」

「ゴメンね……。本当に思い出したくないことなのに」

「別にいいんだ……。――――」

そうしてロイは忘れもしないあの悲劇を語った……

今から六年前のことだ……

ロイが作り出した技術を狙い、イノベーターが追いかけていた頃だ・
・

「くそっ……。しぶといやつらだ」

ロイは物陰から追っ手を見張っていた。

「これからどうするの……ロイ」

と、ロイの後ろには一人の女性がいた。

ロイより少し背は低く、白銀に輝く髪を腰より少し上まで伸ばし、碧眼だった。

年もロイより下のようで、服装は動きやすい格好だった。

「こうなると強行突破もやもえないか・・・」

「でも、それじゃ相手があれを・・・」

「恐らく投入してくるだろうな・・・。だが、力ずくでも突破する」

「・・・ロイらしいね」

「ああ・・・。行くぞ！」

そうして二人は物陰から一気に飛び出した・・・

「はぁ・・・はぁ・・・はぁ・・・これでどうだ・・・」

二人は荒野まで逃げて、追っ手を振り切っていた。

「さすがにここまで来れば・・・」

と、思った矢先・・・

「!」

すると、上空に多数の影が現れた。

「くっ……。やはり現れたか」

「分かりきっていたけどね」

「・・・そうだな……。なら・・・」

「やることは一つ・・・」

そして二人は影に向かっていく。

「黒騎士!」

「ゲシュペンスト・ハーケン!」

二人はISの名前を叫ぶと、ISアーマーを身に纏う。

リイルのISは後の『ファントム』の全身装甲じゃないイメージだろうか、胴体など各所の装甲が省かれた、従来のISと同じ規格であった。

左腕には『グランプラスマカッター』一本と『グランプラスマサイス』二本があり、背中には『グランスラッシュリッパー』が二つ背負われていた。

「行くぞ!」

「ええ!」

そして二人は向かってくる多数の影に突っ込んでいった……

「ほう……。逃げることを諦めて抵抗するか」

と、遠くで一人の男性が見ていた。

顔の半面には機械のパーツが露出しており、双眼鏡を手にしている左腕も手袋をしているが義手である。

「しかし……。いくらISとはいえど、いつまで耐えられるかな」

と、男性……。レックスはコートを翻してその場を去った。

「く、くそっ！」

ロイはブレードで無人機を撃破するも、数は減る様子を見せない。

「はぁ……。はぁ……。はぁ……。くっ……。さすがに修復が完全に終わっていないと……。動きが……」

ロイの操る黒騎士はあのとときの戦いからまともな修復を行っていないので、破損箇所には応急処置が施されているが、その動きは鈍い。

「ぐはっ!？」

そしてロイの一瞬の隙を狙い、後方から無人機が攻撃してきた。

「ロイ！」

リイルは『瞬間加速』を用いてロイの背後にいる無人機をグランプラズマカッターで切り裂いた。

「大丈夫？」

「ああ・・・なんとか・・・。だがこれ以上の戦闘は・・・」

黒騎士は『全身装甲』なのでロイの表情は見えないが、声から明らかに疲労が見える。

それに破損状態の黒騎士ではまともな戦闘もできない上、エネルギー残量も少ないだろう。

「・・・・・・・・」

リイルはしばらく辺りを見回しながら考えた。

敵はこちらに集結しつつあり、これ以上の戦闘は持久戦になる・・・。そしてまともに戦えるのはリイルのゲシュペンスト・ハーケンのみだが、それもエネルギー残量が少ない。

そしてリイルはある決断をした・・・。

「ロイ・・・話を聞いて」

「何だ・・・こんな時に」

リイルは腹に決めてこう言った・・・

「ロイ・・・あなたはここから逃げて」

「な、なんだと!？」

ロイが驚愕している間も・・・

「あなたにはもう戦う力が残されていない・・・。エネルギーもここで無駄に消耗させるわけにはいかないわ」

「だ、だからって、君を置き去りにしているわけにいくか!」

「ここであなたが捕まったら・・・それこそ世界はどうなるの!」

「・・・!」

「ロイ・・・あなたは生きて・・・。生きて・・・世界を救って・・・」

「リイル・・・」

すうと、リイルは向かってきた無人機をグランプラズマカッターで

切り落とした。

「・・・ロイ・・・顔を見せて」

「・・・?」

「早く」

「わ、分かった」

ロイは黒騎士のマスクを収納して、顔を見せた。

「・・・」

リイルはロイに近付いて顔を見つめて、顔に手を当てる。

「リイル・・・」

そしてリイルは顔を近づけて唇をロイの唇に重ねた。

「・・・!??」

いきなりのことにロイは戸惑った。

そしてリイルは唇を離す。

「愛しているわ・・・ロイ」

そしてリイルは敵の群れに向かって行った。

「・・・リイル・・・。くっ・・・」

ロイは少し見て、後ろを向いてその場から飛び去っていく。

「・・・ごめんね・・・。ロイ」

リイルは涙を流して、飛び去っていくロイを見る。

「・・・あなたと会えて・・・よかった・・・」

そしてリイルはISの最終手段を発動させた。

それは、ISにとっては最強の手段であり、命と引き換えに発動するものだった・・・

「・・・さようなら・・・」

そして、ISから光が漏れ出てきて、光が集結する。

「・・・くう・・・ああああああっ!!」

そして光はリイルを飲み込み、そして一気に爆ぜた。

それによって、光は物凄く広範囲に広がり、そこにいた無人機を全て飲み込んでいった・・・

「・・・！？あれは・・・」

ロイは後ろから来た光に気付き、とっさに振り向く。

そこでは、光がドーム状に広がり、すべてを飲み込んでいった。

「・・・まさか・・・そんな・・・！」

ロイはそのまま光のほうへと向かっていく・・・

「あ・・・ああ・・・」

ロイがそこについたときには・・・すべてが無になっていた・・・

物凄い数が残っていた無人機は全て消滅して、地面は大きくえぐれていた・・・

「・・・そ、そんな・・・」

そしてロイはクレーターの中央に着地して、膝をつく。

そこには、ISのコアが残されていた。

それは・・・リイルのIS『ゲシュペンスト・ハーケン』に搭載されていた、束がISのコアの試作品として作ったゼロナンバーのコアである。そして、それ以外・・・何も残されていなかった・・・

「リイル・・・なんで・・・なんで・・・こんなことを・・・」

ロイの間からは涙が大量にこぼれる。

「・・・うう・・・うわあああああ・・・！！！」

そしてロイの叫びがあたりに響くのであった・・・

「・・・そんなことが・・・あっていたなんて・・・」

「・・・・・・」

「それで、その後はどうしたの？」

「・・・リイルの言葉通りに・・・俺はイノベーターから逃げ続けた・・・。俺はその間に・・・ISのコアを修復した」

「コアを？」

ロイはあの後にコアを回収し、修復を行った。

「ああ……。そのコアは『ゲシュペンスト・ハーケン』のデータを元にして『黒き亡霊』を改良した……。『ゲシュペンスト・ファントム』に搭載した」

「……。じゃあ……。ファントムには……。リールのISのコアを使用しているのか」

「ああ……」

「……。偶然と言っても……。親から子に……。コアは受け継がれたのね」

「……。だが、親がISを使えるからって、子供までもが使えるわけじゃない……。まして東が作った女性にしか反応しないISのコアだぞ……。いくら試作品でも適合するとは限らない……。」

「でも……。そのコアはレイを受け入れたんだよね」

「……。ああ。あの事故のときに……。適合したんだ」

それはあの旅客機墜落事故のことだ。

「……。別に俺は……。そのコアにリールの意思が宿っていると、そんなことは思っていない」

「……。……」

「それはともかく、レイが持つISの他二体はどうなんですか？」

「・・・実はと言うと・・・レイが持っているナハトとアーベントは・・・ファントムが作り出したレプリカに過ぎないんだ」

「レプリカ？」

「ああ。ファントムはオリジナルのナハトとアーベントのデータを元にして、自ら二つのコアを生成して、三位一体としてナハトとアーベントを作り出したんだ」

「ISが・・・ISを作った・・・そんなことって」

「・・・普通ならありえないことだ・・・。だが、ファントムはそれを行った」

「・・・だから、レイは通常ではありえない三体のISを持つことができるのか・・・。三つで一つのISだから・・・」

「そういうことだ」

「・・・でも、ナハトとアーベントのオリジナルは・・・どこにいったの？」

「・・・オリジナルは・・・行方不明になっている」

「行方不明・・・？」

「ああ。あの二体は意思を持って、俺のところから離れたんだ」

「・・・つまり・・・『はぐれIS』ってことですね」

「そうだ・・・」

「・・・では、今後はそのはぐれISの調査を行いましょう」

「・・・そうか・・・。なら、頼む」

「任せてください」

そうして、ハーケンは店を出た・・・

同じ頃・・・IS学園では・・・

「・・・しかし本当に無茶ぶり言うよなあ・・・あの人は・・・」

レイは部屋でどうするかを考えていた。

「しかし・・・どうするかな・・・」

と、考えていると・・・

コンコン・・・

「ん？」

するとドアのノックが聞こえた。

「こんな時間に誰だ？」

レイはイスから立ち上がると、ドアを開けた。

「……………」

そこには、鈴がいた。

「鈴か……。こんな時間にどうしたんだ？」

「…………話したいことがあるの」

「…………そうか……。まあここで聞くのもなんだし、入れよ」

「う、うん」

そして鈴はレイの部屋に入った。

「そういえば——」

レイは冷蔵庫からお茶が入ったペットボトルを取り出すと、ベッドに腰掛けている鈴に投げ渡して、鈴はキャッチした。

「珍しく髪を下ろしているんだな」

鈴はいつものツインテールではなく、髪を下ろしていた。

「ま、まあ・・・たまには髪型ぐらい変えるわよ・・・」

「そうか・・・まあいつもツインテールだから少し新鮮な気がするな」

「よく・・・見ているんだ・・・」

「そりゃ・・・昔からの付き合いだからな」

「・・・」

「ところで、一体何の話だ？」

レイは椅子に座って鈴と向かい側になる。

「・・・前にも言ったでしょ・・・。素手による格闘戦のことよ」

「あああれか・・・。俺もある程度言ったが、どうだった？」

「・・・全く」

「そうか・・・。しかしどうしてそこまで新しい戦法を取り入れようとするんだ？」

「・・・そ、それは・・・」

鈴はしばらく黙って・・・

「・・・あたし・・・置いていかれるのが・・・嫌なのよ」

「置いていかれる？」

「だって、セシリアとシャルロットにラウラは別のISの力を得たし、一夏と箒は第四世代のISを使っている・・・。そんな中あたしだけ何もできないし・・・置いていかれている気がするの・・・」

と、鈴は落ち込む。

「・・・別に気にすることでもないだろ」

「え・・・？」

「ISの性能ですべてが決まるわけじゃない・・・。鈴は強いじゃないか」

「・・・お世辞は・・・いらないわよ」

「別にお世辞じゃないさ・・・。鈴は強いさ」

「・・・その根拠はどこから来るのよ・・・」

「・・・勘だよ」

「・・・はあ・・・。あんたって・・・」

鈴は呆れたが、嫌みではない。

「とりあえず、頑張ってみろ。努力をすれば成し遂げるさ」

「努力ねえ……。まあ・・・頑張ってみるよ」

「その意気だ」

そうしてしばらく二人は話しをした・・・

一方その頃・・・

「これは・・・どういふことでしょうか」

「わからん……。だが・・・」

I S 学園の第二格納庫で、織斑先生と山田先生がいた。

別に珍しいというわけではないが、今回は少し事情が違う・・・

二人の目の前には、一つのコンテナがあった。

「とりあえず・・・ラングレンには明日ここに来させろ」

「わかりました」

（・・・まさか、な）

織斑先生は何やら心当たりがありそうだった・・・

S t o r y 53 代償（後書き）

ところで、みなさんは何か希望することはありますか？あつたら言
ってください
。

設定その二（前書き）

今回はネタばれがあります。

設定その二

フィオナ・ランスター（17歳）

二期のIS学園に転入してきた女子。レイとは昔からの仲らしいが、仲は凄く悪いので、ライバル関係でもある。あんまり感情を面に出さない性格で、冷たい感じなので彼女に寄り付こうとする女子は少ないが、唯一ルームメイトである神夜とは仲がいい。その正体は世界征服を目論む組織『イノベーター』の一員で、リーダーであるレックスの側近でもある。しかしレイとは昔はある意味恋人に近い関係だったらしく、当時は仲がよかったが、フィオナがレイのためと言って何も言わずに引越したことでレイとは仲が悪くなったが、まだ密かにレイのことを思っている。ISの操縦技術はかなり高く、ラウラでさえ手も足も出ない結果にするほどであり、事実上レイと同等かそれ以上だといわれている。しかし最近レックスのやり方に疑問を感じている・・・

使用IS…ナインボール・P ナインボール

アリス・イラストラス（18歳）

北アメリカにあるIS研究所『テスラ研』に所属するテストパイロット。亡国機業の一員であるエムと対等に戦うほどに操縦技術は高い。IS学園には二歳年下の妹がいるらしい。

ちなみに口癖は『あなたの罪を数えなさい』

使用IS…ジャッジメント

アシェン・ブレイデル （二十代ぐらい）

ハーケンと共に行動する女性。性格はおしとやかだがかなりの毒舌家であり、ISに搭載されている『コードDTD』を発動すると性格が明るくなり、口調も変わる。

使用IS…クノイチ式

有栖零児 （25歳）

ハーケンと共にしている情報捜査員。ISの操縦技術は高い。ちなみに言うと、彼には相棒がいるらしいが・・・？

使用IS…Gレックス

ロイ・ラングレン （外見年齢二十代後半？）

東曰く『あの人』といわれている天才科学者。レイの父親。イノベーターに追われる身であり、同時に亡国機業からも追われている。外見は二十代後半と見えるが、本当の年齢は不明。唯一篠ノ之博士の他にISのコアを作ることができる人物である。ISの操縦技術は物凄く高く、イノベーターのエースチームでさせ手も足も出ず圧倒的な強さを持っている。現在とはある場所にある研究所に潜んで、レイを陰ながらサポートを行っている。情報収集（とあるが、本人は趣味でもある）のためにとある町で喫茶店をやっている。

使用IS…黒騎士MK-1？

レックス （年齢不明）

イノベーターのリーダーと思われる人物。身体の半分がサイボーグ化しており、かつて世界に恨みを持って滅ぼそうとしたが、とある人物に阻まれて、その罪を償うために命を絶とうとしたが、死ぬことができず今に至る。そして再び世界を滅ぼそうとしてイノベーターを再び立ち上げた。

ピート・ペイン （二十代ぐらい）

イノベーターの指揮官。常に冷静であり、戦闘では部隊問わずに指揮官としている。

使用 I S…ジェネラル

カルディア・バリッサ （二十代ぐらい）

ピートの直属の部下である。ハーケンと共にいるアシェンとはライバル関係に近いようで、彼女を敵視している。

使用 I S…アヌビス・・・マスターコマンド

リイル・ラングレン （享年27歳）

ロイの妻であり、レイの母親。故人。イノベーターの追跡に会っている最中に、無人機の群れに襲われてロイと共に I S で戦うも数的に不利と判断して、苦渋の決断をしてロイを逃すために『自爆』に値する最終手段を命と引き換えに行って、死亡した。

使用 I S…ゲシュペンスト・ハーケン

フリーダ・エスグラン ド （外見は二十代だが、本年齢は四十代ぐらい）

冷凍睡眠カプセルで眠っていた女性。とある事故に遭い、そのため十年以上冷凍睡眠カプセルで眠っており、外見は眠りに入った当時から変わっていない。幼い頃に左目を失い、それからずっと左目を隠すようにして眼帯をつけているらしい。ロイ曰く『昔から凄い』
といっており、その才能はISでも発揮されており、すでにベテラン操縦者クラスまでに腕を上げている。外伝で登場する『レオン・エスグラン ド』の姉である。

使用IS…パンドラMKⅡ？

レナ・ラングレン （17歳と思われる）

亡国機業に属する少女。外見はレイと瓜二つであるが、背丈は若干低い。その正体はレイのパーソナルデータを元にして作られたクロインである。しかしクロインであるのになぜ性別が女性かと言うと『ISを扱うため』だという。オリジナルであるレイに対しては敬愛しており、亡国機業に属しているのもレイに会うためだと言っており、組織への順応はない上、元々の目的である『レイの抹殺』も無視している。しかし他の人には冷徹な性格であり、人を殺すのもなんとも思わない。レイの父親であるロイに対してなぜか強い憎しみを持っており、殺そうとしている。

使用IS…シュヴァレツェア・ウインド

ISの設定……

ゲシュペンスト・ファントムB2

ロイが作成したプログラムによってバージョンアップしたファントム。『^{セカンドシフト}第二形態移行』とは異なるが、それに近いようになっている。変更点としては『ストライク・パッケージ』を常時装備になり、背中には追加ブラスターを搭載し、脚部と前腕に『展開装甲』を新規に装備している。更に新しい武器として『グランメガブラズマブレイド』とグランショットガンの代わりに『グランビームライフル』を装備している。専用アビリティとして『∞（インフィニティ）・ドライブ』が使えるようになっている。
必殺ファンクション…『ギガクラッシュ』

グランメガブラズマブレイド

ファントムが戦闘で得た経験から新たに作り出した大剣。刀身はグランプラズマカッターの大剣モードよりも強度が増し、刀身の幅は狭まったが、長さは更に増している。ちなみに形状のイメージとしては『スパロボOG』のスレードゲルミルの斬艦刀に近い。

グランビームライフル

グランショットガンの代わりに装備されたビームライフル。能力は普通だが、ショットガンより使いやすくなっている。

展開装甲

新規に脚部と腕部に搭載されているが、紅椿のものとは異なり、機能は限定されており、ファントムのは攻撃に特化しているので、防御には適していない。脚部の展開装甲は足蹴り時に使用して、腕部のは切りつける時に使用する。

その他の武器

基本既存武装に大きな変化はないが、グランプラズマカッターの大剣モードが無くなっている。

ヴァイスリッター・アーベントB2

バージョンアッププログラムによってバージョンアップしたアーベント。新規に『ドラグーン・パッケージ』を常時装備となり、更に専用アビリティーとして『超音速加速』が加わり、戦闘能力が増している。このアーベントはファントムが作り出したレプリカであり、オリジナルは行方不明だという。

必殺ファンクション…『フルビットバースト』

超音速加速発動時

アビリティー発動時はカラーが変わり、オレンジが青に変化して、カメラアイも赤から緑に変化して、アビリティー発動によって残像ができるほどにスピードが増し、それを使って分身をしているかのように残像を作り出すことができる

アルトアイゼン・ナハトB2

バージョンアッププログラムによってバージョンアップしたナハト。各スラスターの出力が向上し、両肩のレイヤード・クレイモアの装弾数が増えて二回使用でき、リボルビング・ブレイカーの予備カートリッジが一基から二基に増えたので計十八回使用できるようになった。更に専用アビリティーとして『オーバードライブ』が使える

ようになった。ちなみにこのナハトはファントムが作り出したレプリカであり、オリジナルは行方不明だという。
必殺ファンクション…『スマッシュブレイカー』

オーバードライブ発動時

アビリティ発動時にはカラーが変わり、メインカラーである青が赤に変化して、センサーカラーも赤から緑に変化している。発動時はすべての出力が向上し、通常時の三倍に性能が上がる。しかしアビリティを維持できないので制限時間がついているので、タイムオーバーすれば強制解除される。

ちなみに上記三機の『B2』はバージョンアップしたことで追加された記号みたいなもの。

斬月

神夜が使用する第三世代型の試作IS。神夜の父親が持つIS研究所にて『打鉄』をベースに開発されたが、打鉄とは別のものになっている。そのIS研究所は『倉持技研』と関わりがあるので、欠陥機だった頃の『白式』のデータを一部使用しているので、若干似た箇所があるので白式とはある意味兄妹機ともいえる。基本近接戦闘に着眼した設計なので、近接武器しかない。それと頭のデバイスにある赤い髪のようなコードにはビームコーティングが施されているので、それを使ってビームを防ぐことができる。ちなみに、機体のモーターとしては『歌舞伎』がモデルだといわれている。更に高機動パッケージとして『飛翔迅雷』が新規に搭載され、機動力がアップしている。

必殺ファンクションではないが『月華乱舞』と呼ばれる技が入っている。

待機状態…三日月のキーホルダー

斬冠刀

斬月のメイン武器にしてたった一つの武器。ISの丈ほどある大剣だが、神夜はこれを難なく使いこなしている。片方に刃があり、反対側には『月輪』と呼ばれるチャクラムがあり、それを使って中距離戦闘を行うことができ、刀身を四分割して飛ばす戦法もある。

イノベーター陣のIS

デクー

イノベーターの量産型の無人IS。組織の中では最も数が多い。

デクー改

デクーをベースに改良が加えられた無人IS。性能はデクーより高い。

デクーエース

デクー系統の中では上位機種に入る無人IS。性能は高いのでイノベーターでは多く使われている。

ジェネラル

W03ことピート・ペインが使用するIS。将校用にカスタマイズされており、デクー系では高性能機に属するが、故に扱えるものが少ない。

インビット

イノベーター内では特殊な機体であり、両腕はクローになっており、中央にハンドガンが搭載されている。装甲は並みの武器では破壊できないほどに頑丈であるが、両肩にあるメインカメラが弱点。

アヌビス

ピエロのような姿をしたイノベーター内では最新鋭のISであり、性能も高い。

マスターコマンド

カルディアが使用したIS。試作機に辺り、性能は試験的なものが多いので高い。

ジョーカー

キャノンボール・ファストにて使用された試作無人IS。細身のボディとは裏腹の破壊力を持ち、更に三体に分身できる能力を持つが、それはステルスで隠れている他二体が現れてそれらしく見せているだけであった。しかし無人機故にパターンがあり、レイにそこを突かれて三機同時に撃破された。

ジ・エンペラー

プロトエンペラーのエータを元にして開発されたエンペラーの完成機。性能は高く、レイのISを圧倒し、危険になると内蔵されているシステムによって性能がアップする。その際にカメラアイが赤くなる。基本武装は四枚の刃を持つ斧『テイルタニアス』。しかしその性能故に機体のコンピューターが追いつけず、システムエラーを起こしている。

必殺フランクション『インパクトカイザー』 『Ωエクспロージョ
ン』

月光丸

W05が使用するIS。イノベーターのエースチームに属し、その性能もかなり高い。基本武装は『斬艦刀』と呼ばれる大剣。その剣の動きには神夜は見覚えがあるらしいが・・・？

ルシファー

イノベーター内では今のところ一番性能が高いとされるIS。天使と悪魔の二つの顔を持つ性能だが、初登場時では黒騎士MK-？に手も足が出せなかった。ちなみに操縦者は不明

必殺フランクション…『セラフィックウイング』

ナインボール・P

フィオナが使用するイノベーターが開発した試作型IS。第二世代型だが、ラウラのシュヴァレツェア・レーゲンを圧倒するほどに性能は高い。基本武装は右手に持つパルスビームガンと左腕に内臓式のレーザーブレードと背中のバックパックに装備しているロケット

ランチャーとグレネードランチャーを装備している。

ナインボール

ナインボールを改良して出来上がった第三世代型の完成機。基本武装は右手のパルスビームガンはリニアライフルに変更され、左腕の内臓式のレーザーブレードは外装に装着するように変更された。背中のバックパックの武装は右のロケットランチャーがミサイルランチャーに変更され、新規に自動攻撃武装『E・Oビット』を搭載している。

はぐれIS

アルトアイゼン・リーゼ

アルトアイゼン・ナハトに酷似したはぐれISの一つ。シャルロットを器の候補にして戦いを挑んできた。一度はシャルロットに勝つたものも、諦めないシャルロットの思いを受け入れ、融合を果たす。ちなみにリーゼは元々赤き鋼鉄の孤狼こと『アルトアイゼン』の強化プランの一つであり、ナハトのほうが採用されたが性能が高いこともあり、強化プランを元に新規に製造された第三世代型IS。亡国機業からは『ゲシュペンストMK-?』と呼ばれている。

ゲシュペンストMK-?・パワー

ゲシュペンスト・ファントムに酷似したはぐれISの一つ。ラウラを器候補にして戦いを挑み、レイの妨害があったものも、ラウラに

勝利したのも、彼女の思いを受け入れて融合を果たす。見かけはゲシュペンストMKー？であるが、背中には追加ブースターを搭載して、ブースターの右側にグレネードキャノンと、左側にミサイルランチャーを装備しており、元々はとあるカスタム機を元にして第三世代型IS。亡国機業からは『ゲシュペンストMKー？』と呼ばれている。

ヴァイスリッター・ツヴァイ

ヴァイスリッター・アーベントに酷似したはぐれISの一つ。セシリアを器候補にしていたが、上記二機とは異なりセシリアに戦いを挑んでいないが、ツヴァイは昔からセシリアを見ており、それでセシリアを器に相応しい存在と認識して、融合を果たした。元々は白き墮天使こと『ヴァイスリッター』の強化プランの一つであり、アーベントのほうを採用されたが、性能が高いことからプランを元にな新規に製造された第三世代型IS。アーベントのように展開するテストラウイングを持たないが、アーベントより大型であるテストラウイングを搭載しているので機動力は高い。亡国機業からは『ゲシュペンストMKー？』と呼ばれている。

アルクオン

『羅刹機』と呼ばれているはぐれIS。鈴を器候補にしている。従来のISと比べるとスマートであり、髪が生えているなど異様といえる姿である。武器を使用せず素手による格闘戦を行い、両腕にある龍の頭を模した籠手から龍を模したエネルギーを放出する。ハカイオー絶斗とは仲が悪く、戦う時だけ口調が激しくなる。

ハカイオー絶斗

『地獄の破壊神』と呼ばれているはぐれIS。アルクオンと同じく鈴を器候補にしている。結構ずっしりとした姿であり、重量系のISと思われる。アルクオンとは仲が悪く、いつも戦いをしている・・らしい。基本武装は『絶・破岩刃』と呼ばれるチェーンソと、胸部に搭載されている『超我王砲』である。

必殺フアンクション…『超我王砲』

融合IS

アルトアイゼン・リヴァイブ

シャルロットの想いに応え、アルトアイゼン・リーゼがラファール・リヴァイブカスタム？と融合した姿。リーゼのパーツがほとんどだが、背中のバックパックにリヴァイブのスラスターアームとスラスターが搭載され、リーゼのフレキシブル・スラスターはそのスラスターの下部に搭載されて推進力がアップした。そのため通常時でも『瞬間加速』と掛けたと同じぐらいのスピードが出る。しかしリヴァイブより重武装に見えるが、意外と重くないらしい。操縦性はISの中では結構悪いが、シャルロットはうまく使いこなしている。

ちなみに融合によって第三世代型にランクアップしている。

必殺フアンクション…『ハイパーステイング』

待機状態…リヴァイブと同じだがリーゼカラーになっている。

リボルビング・バンカー

リーゼに搭載されている最強の武装。リーゼのものだが、リヴァイブの『グレー・スケール』の連射性能の早さが新たに追加されてい

る。しかし威力はブレイカーを上回っているので、一発で物凄い威力を発揮するため、別に連射する必要がない。

プラズマ・ホーン

リヴァイブの頭部のデバイスに追加された刃を持った角。切れ味は物凄くいいらしいが、頭にあるのである意味危険な武器らしい・・・

五連チェーンガン

ナハトに搭載されているものと同型。

アヴァランチ・クレイモア

新たに両肩にリーゼのクレイモアが搭載された。パーツ自体は大きい、別に動きの阻害にはならないという。

この他にもリヴァイブの武装もあり、それらはバージョンアップして性能が上がっている。

ゲシュペンスト・シュヴァルツ

ラウラの想いに応えたゲシュペンストMK-？・パワー드가シュヴァレツェア・レーゲンと融合した姿。基本はレーゲンと同じだが、脚部と前腕にはパワーDのものになっている。

背中にはパワーDの追加ブースターが搭載され、機動力がアップして、両肩の浮遊ユニットの左側にミサイルランチャーが新たに追加され、ワイヤーブレードも新たに二基追加された。

必殺ファンクション『ヘッジホッグフレア』
待機状態…レーゲンと変化無し

レールカノン？

融合によって砲身が長くなって、口径が大きくなり威力が向上して照準精度も上がっている。更に砲身が上下に展開する機構が追加されているが、何のためにあるかは今の所不明。

パワープラズマ・ステーク

両腕部に搭載されている武装。プラズマ・ステークを強化したもので、威力は物凄いが、扱いが難しい上、反動が凄いので並の人間では肩を脱臼しかねないが、ラウラは問題なく使いこなしている。

メガプラズマスライス

両腕部に搭載されている特殊格闘武装。前腕全体にプラズマを纏わせることで切断能力を得る。更にプラズマ手刀と連動することで腕全体を刃物として使える。

16連装ミサイルランチャー

浮遊ユニットの左側に新たに搭載された武装。威力も高く誘導性も高いので使用頻度は高い。

この他にもワイヤーブレードと、パワードの大型ショットガンにグレネードランチャーを持っている。

ヴァイスリッター・ティアーズ
セシリアの思いに応えたヴァイスリッター・ツヴァイがブルー・ティアーズと融合した姿。

カラーリングはツヴァイのものになり、両腕と脚部の一部がツヴァイのものとなり、背中にツヴァイのバックパックと大型のテスラウイングを新規に追加され、両肩にツヴァイのものを縮小したものを装備している。機動力はブルー・ティアーズの『ストライク・ガンナー』を上回っているので、最初は使いこなしにくかったが、今では使いこなしている。

必殺ファンクション…『ホークアイドライブ』
待機状態…ブルー・ティアーズと同じだが、カラーが白と青になっている。

ピアーズ・ランチャー
融合時に持っていた『ブルー・ピアス』とツヴァイの『アトラス・ランチャー』が融合して出来上がった武装。アトラス・ランチャーをベースにエネルギー弾を発射する下の銃口にブルー・ピアスの銃身先端が追加され、カラーリングもブルーをメインに変化している。

三連ビームガン
ツヴァイの左腕に搭載されていた武装。主に牽制として使われている。

ブルー・ティアーズ？

融合によって強化されたブルー・ティアーズ。カラーが白と青に変わったほか、システムも改善されて、止まっていなと指示できなかった欠点が融合によって無くなっており、今では動きながらも操作可能になった。

その他のIS

黒騎士 R リペア

黒騎士に応急修理を施したもの。そのため性能は若干下がっているが、それでも第三世代型のISに引けを劣らない。各所に包帯のようなものが破損箇所リペアに巻かれているのと、先端が千切れた感じになったマントが特徴。黒騎士事件からこの状態だといわれている。

待機状態…黒と白のメダル

黒騎士MKー？

元々性能が高いとはいえ、第一世代型であるので旧式化が進んでいたリペアので、新たに改良を加えて出来上がった機体。R時の破損箇所を新規パーツに交換したほか、両肩のパーツを変更したほかあまり変わっていないが、第三世代型になり、性能も他のISを凌駕するほどになっている。基本装備は背中に背負っている『ブラックソード』と左腕に装着している『ブレードシールド』である。更にZシリーズと呼ばれる武器を新たに装備して、それらを合体させた『ユニオンソード』を持っている。

待機状態…黒と白のメダル

必殺フランクション…今のところ不明 ユニオンソード時…『メガ

サンダークロス』

ゲシュペンストMKー？

ハーケンが使用する第二世代型のIS。通常は青いカラーリングなのだが、ハーケンのは黒に変更されている。

待機状態…黒いペンダント

Gレックス

零児が使用する第三世代型のIS。紅い竜を模した姿をしており、少し異様といわれている。基本装備は『バーンナックル』とハンドガン二丁と刀を数本だという。

必殺ファンクション『地獄乱舞』

待機状態…赤い腕輪

オーデイーン

ロイが開発した無人IS。ISでは今のところ唯一飛行携帯に変形できる機構を持ち、高速戦闘を行える。基本装備は双槍『リタリエイター』。

必殺ファンクション…『グングニル』『JETストライカー』

アキレス

古代ローマ戦士を模した姿をした無人IS。元々はオーデイーンに搭載されているコアはこの機体に搭載されていたが、新規に製造したコアを搭載している。旧式に当たるが性能は高い。

必殺ファンクション…『ライトニングランス』

アキレス？

アキレスのデータを元に再設計し強化発展機。形状に差はないがカラーリングとマントの形状が異なる。

必殺ファンクション…『グロリアスレイ』

フエンリル

ロイが開発した後方支援機としての無人IS。北欧神話の『フエンリル』を模しており、特殊なISともいえる。基本装備は『ドミニオンライフル』と呼ばれるスナイパーライフル。

必殺ファンクション…『ホークアイドライブ』 『ステインガミサイル』

ハンター

狼の姿を模した無人IS。旧式だがその狙撃能力は新型に引けを劣らない。フエンリルのコアの前代である。ちなみにロイはこれと同じ姿をしたLBXを所持している。

必殺ファンクション…『ホーミングショット』 『ステインガミサイル』

ハンター？

ハンターの強化発展機。姿が若干異なるだけだが、性能はハンターより上。

必殺ファンクション…『バスターボール』 『ステインガミサイル』

パンドラ

ロイが開発した高速戦闘型の無人IS。高速移動によるかく乱戦闘を得意とする。基本装備はクナイ型の武器『ホープ・エッジ』である。

必殺ファンクション…『蒼拳乱撃』

クノイチ

女性忍者をモチーフにした無人IS。パンドラのコアを搭載した前代である。旧式とは言えど、その機動力は引けを劣らない。

必殺ファンクション…『旋風』

クノイチ式

クノイチの強化発展機。ロイのところにあるやつと、アシェンが使用するやつと二種類ある。両機ともカラーリングと武装が異なるが、アシェン機だけは特殊システムとして『コードDTD』が搭載されている。

必殺ファンクション…『地獄乱舞』アシェン機…『旋風』
待機状態アシェン機のみ…黄緑の腕輪

シュヴァレツェア・ウインド

レナが使用する第三世代型IS。元々はドイツで開発されていた『シュヴァレツェア・レーゲン』と『シュヴァレツェア・ツヴァイク』の試作三号機であるので『AIC』を搭載しているが、開発途中だったウインドを亡国機業が奪取し、未完成だったので亡国機業側が完成させている。そのため本当の完成図とは若干異なるらしい。基本装備は両肩に搭載されている荷電粒子砲と両腕にビームカッターとそれと腰のアンカーである。

待機状態…黒いドックタグ

パンドラMK-？

フリーダが使用するIS。パンドラのデータをベースに開発されており、カラーリングは赤から白に変更されている（ちなみにいうとパンドラは元々このカラーリング）。更に機体各所には『展開装甲』を搭載しており、特に背中 of 展開装甲は展開すると翼のようになる。基本装備は片手剣『マスターブレイド』と盾の『マスターシールド』となっている。

待機状態…白いチョーカー

ジャッジメント

テスラ研で開発されて、アリスが使用する第三世代型試作実験ISである。基本武装は『ジャッジメントソード』と呼ばれるガンブレードで、左腕に『ジャッジメントシールド』を装備する。しかし、このISはあるシステムの実験機だと言うが・・・？

ゲシュペンスト・ハーケン

リイルが使用していた第一世代型のIS。ゲシュペンスト・ファントムのベースになって機体であるので相似点が多い。リイルは『自爆』に値する最終手段を行ったので、コアを残してすべてが消滅している。その後コアはファントムに受け継がれた。ちなみにいうとコアは篠ノ之束が試作品として作った『ゼロナンバー』のコアである。しかし通常なら行えるはずの初期化がなぜかこのコアにはでき

ず、他の人から使われるのを拒絶する不可思議な現象があったものも、レイだけには拒絶反応がない。一説にはリイルの意思がコアに宿っているからではないかという説があるが、もちろん仮説に過ぎない・・・

用語設定

はぐれIS

世界のどこかに潜んでいる無人ISの名称。元々はロイが作り出したISであり、原因は不明だが自らの意思を持って、研究所から逃げ出している。当初活動目的は不明だったが、器となるパートナーを探していたと言うことが判明した。現在確認されているのは五機だが、全部で十機存在しており、その内三体がパートナーを得ている。元々は有人機仕様だが、なぜ無人で動けるのかがいまだに判明していない。

量産型コア

ロイが設計したISのコア。篠ノ之束が作ったISのコアを元にして、いくつかの機能をオミットしたことで大量生産を可能にしたコア。しかしオミットした機能の中には『絶対防御』などの人体保護の機能が多くあるので、無人機での使用が前提である。過去にロイはこの設計データをイノベーターに奪われたので、今このコアはイノベーターの無人ISに使用されており。このコアは設計図があれば誰にでも作れるコアである。

全対応型コア

ロイが設計したISのコア。より深くISのコアを解析したことで、女性にしか反応しない部分を改善することができて、男性にも扱えるようにしたコア。今もロイは生産しているコアの一つ。しかしオリジナルよりは性能が劣っている。

全対応型高性能コア

全対応型コアを更に設計を見直して、独自の技術を取り入れてオリジナルより性能を上げたコア。しかしコストがめっちゃくちゃ高くなり、今でも数えるほどしか作られていない。

ちなみにこれの生産第一号は黒騎士のコアである。

ゲシュペンスト

ロイ曰く『すべての元凶』となっているもの。外見はロボットであるが、機構からしてパワースーツの一種だと推測されている。これを解析して出てきた技術はまずこの世界のものではないのが多く、中にはISの技術の原型になったものもある。しかし中には人類の絶望になるものも含まれている。ちなみにゲシュペンストMK-?の形状はこれを元になっている。今もロイの研究所地下深くに厳重に保管されている。

フュージョン 融合

ISとISが融合する現象。しかし普通ならありえない現象だが、三機のISで行われている。融合時には人体に影響はなく、元になるISには相手のISの能力が追加されたり、新たに性能を得るなどの結果が出る。その力は『大いなる力』と呼ばれている。

今後登場するIS ネタバレ注意

エクストラ
EX

簪の新たなIS。実は凄く高性能機だったりする

じんらい
迅雷

『打鉄』にかわる次期量産機候補

カイザー（言っておくが『AX-02』のことではない）
詳細不明だが、ロイ曰く最凶のISらしい・・

エンペラーM2

ジ・エンペラーの改良機

ジャッジ

特殊システムを積んだ無人IS

エンペラーM3

エンペラーM2の強化発展機

らせつおうこりゅう
羅刹王甲龍

詳細不明

白雪 しらゆき

はぐれISの一つ。紅桜と共にいる

紅桜 べにざくら

はぐれISの一つ。白雪と共にいる

アークゲイン

そろそろ出てきそう？

エターナル

詳細一切不明・・・

ゼノン

普通のISとは少し違う？

ゲシュペンスト・FM2

FM2とは『ファントムMK-？』の略。名前からしてファントムと関係がありそう？

アルトアイゼンナハト・デストロイ

ナハトと関連がありそうなIS。その名の通り、破壊を行う機体・・・らしい

ラインヴァイスリッター・アーベント

アーベントと関連がありそうなIS。悪魔の如くの力を持っている・・・らしい

設定その二（後書き）

今後登場するISはこのほかにもまだあります・・。期待してください。

Story 54 EX (エクストラ)

「では、これでSHRを終わります」

と、いつもの通りに帰りのHRが終わった・・・と、思ったら・・・

「ラングレン君」

すると、山田先生が呼んできた。

「は、はい」

レイはすぐに教卓の前に行った。

「織斑先生がこの後に第二格納庫まで来るように言っていました」

「織斑先生が？」

「はい。なんでも見せるものがあるそうです」

「見せるもの？」

「はい。早めに行ったほうがいいですよ」

「分かっています」

と、レイはすぐに第二格納庫に向かった・・・

そして第二格納庫に着くと、織斑先生が格納庫の奥で待っていた。

「遅いぞ」

「すみません・・・。急いできたつもりですが・・・」

と、レイは息が荒れていた。

「・・・まあいい」

「それより、見せるものとは一体？」

「これだ」

と、織斑先生が後ろを振り向くと、そこにはコンテナが一つ置いてあった。

「コンテナ？」

「一体何のコンテナだと思う」

「一体何のって言われても・・・」

「送り主は不明だが・・・お前宛に来ている」

「え・・・？」

レイは一瞬理解できなかった。

「じ、自分宛にですか？」

「そうだ。お前・・・何か変なところに首を突っ込んではいないな？」

「いえ。そんなことは・・・。しかし一体何が入っているのですか？」

「・・・コンテナの表記には・・・ISと書かれていた」

「あ、IS・・・！？」

驚くのも無理はない・・・。ただでさえ少ないISが送ってきたのだ・・・。しかも三体持つレイに・・・

「信憑性があるが・・・とりあえず開けろ」

「え？開けていないのですか？」

「このコンテナは本人認証がなければ開かないようになっていて。もし無理矢理にでもあけようとすればデスロックシステムが働くようになっている」

「デスロックシステムが？」

簡単に言えば中身のデータを守るためのシステムである。無理矢理

こじ開けようとする者に死を与えるシステムである。

「ああ」

「・・・分かりました」

レイは少し不安を抱きながらも、コンテナの前に来る。

「・・・・・・・・」

そしてコンテナの壁にある手を置く場所に手を置いた。

すると、機械がレイの手をスキャンした。

『本人認証を確認・・・コンテナハッチオープン』

そしてアナウンスの声がして、コンテナが開きだした。

「これは・・・」

そしてコンテナの中から一体のISが出てきた。

全体のカラーリングはグレー系がほとんどで、直角のラインが多く、頭の辺りにはバイザーのようなものがあつた。一見すればシンプルな形状のISであつた。

「本当にISが入っていたのか・・・」

レイは興味津々で見ていると、ISの隣からIPODのようなデータ端末が出てきた。

「データ端末か・・・」

「ラングレン。データの内容を読んでみる」

「え？・・・は、はい」

そしてレイはデータを読み出した。

「コードネームは『EX』エクストラ・・・第三世代型の試作ISだそうです」

「ふむ」

「使い方次第では大きな戦力になる・・・と記されています」

「・・・なるほどな」

「このISはどうするのですか？」

「なんにせよ、このISの所有権はお前にある。まあこちらである程度調べるが、これをどうするかはお前次第だ」

「自分・・・次第ですか」

「これに何も用がないのなら、IS学園が所有する。もし何かに使うのならお前のものだ」

「・・・」

「それと、そのデータ端末内で分かるものを全てコピーするか、レ

ポートで明日の朝提出だ」

「げっ・・・明日の朝までにですか」

相変わらず無茶な課題を出す人だ・・・

「当然だ。ただでさえ出所が不明のISだ。分かることがあればすぐにでも知る必要がある」

「・・・まあ、そうですけど」

「とにかく、明日の朝までにレポートを提出だ。そのついでにこいつをどうするかを考えていろ」

「わ、わかりました」

そうして織斑先生は先に格納庫を出た・・・

「・・・」

そしてレイはEX^{エクストラ}を見た。

（・・・それにしても・・・なんだか未完成って感じがするのは気のせいかな？）

よく見ればEX^{エクストラ}の一部が未完成のように見える。

「・・・とりあえず・・・帰ってこれのコピーでもしますか」

と、レイは寮に帰った・・・

「・・・はぁ・・・これはきつい・・・」

そして時間は過ぎて夜の八時・・・

レイはデータのコピーをしようとしたものも・・・

「コピーができない上・・・何だよこのデータ量は・・・」

データ端末に記されていたデータは結構あり、いくつかはプロテクトが掛かっているのだから見ることができなかった。

「こりゃ久しぶりに徹夜になりそうだ」

そうしてデータの打ち込みを開始した・・・

コンコン・・・

「ん？」

しばらくすると、ドアのノックが聞こえた。

レイは席を立つと、ドアを開ける。

「失礼します、レイ」

そこにはラウラがいた。

「ラウラか……。どうしたんだ？」

「少し話しがたくて・・・」

「そうか……。まあ入っていいぞ」

と、レイはラウラを部屋に招き入れた・・・

「しかし・・・名前で呼ぶ仲になっても、敬語は変わらないんだな」

レイはラウラをベッドに座らせてレイは机のイスに座る。

「そ、それは・・・」

「・・・まあいいや。別に気にしているわけじゃない……。ところ
で何を話すんだ？」

「・・・折り入った話です」

「ふむ」

「その・・・今度の専用機持ちのタッグマッチのことですが・・・」

「・・・・・・・・」

「レイがよければですが・・・私と組んでくれませんか」

と、ラウラが言ったのはタッグを組んで欲しいと言う願いであった・

（これか・・・。格納庫の帰りにシャルからそう言われたばかりなんだよなあ・・・）

第二格納庫の帰りにシャルロットとあって、そう言われていたのだ。まあレイは組む人が決められているので丁重に断った・・・

「・・・すまんが、ラウラ・・・もう決まっているんだ・・・」

「・・・・・・・・え？」

うわぁ・・・めっちゃ嫌な空気だ・・・

「だから・・・もう相手は決まっているんだ」

「・・・そう・・・ですか」

すると、やけに素直にラウラは引き下がった・・・

「・・・その人は誰ですか？」

「・・・いや、その・・・って、何で聞くんだ？」

「人によりますが・・・代わってもらいます」

「ちょっと待て。どうやってやる気だ？」

「実力行使で」

「ちょっと待てっ！何考えているんだラウラ！」

「！」

すると、ラウラはレイに怒鳴られてびくつとした。

「す、すみません・・・私・・・何を・・・」

そしてラウラはシュンとした。

「もしそんなことをしたら・・・組む気はなかったぞ」

「・・・・・・・・」

「とりあえず。組む相手はいるからな」

「・・・分かりました」

そうしてしばらく沈黙が続いた・・・

ピロロロロ・・・

「「！！」」

いきなりレイの携帯が鳴り、二人は同時にびくつとした。

「悪いラウラ・・・」

レイは携帯を取ると、電話に出た。

「もしもし?」

『よう。久しぶりだなレイ』

相手はまさかのハーケンだった。

「へ?・・・ハーケンさん?」

レイが名前を言うと、ラウラが「え?」と言うような感じに振り向いた。

「お久しぶりですね・・・って、何で電話番号を知っているんですか!?!」

『おいおい。健造から聞くって手があるだろ?簡単じゃないか』

「そ、それはそうですけど・・・。と、いうより、何で電話を・・・」

『ああ。実はな――』

「まさか、ハーケン殿か!?!」

するとラウラがレイから携帯を奪い、ハーケンに聞いてきた。

「ん?その声は少佐殿か?」

「ああ。ラウラ・ボーデヴィツヒ少佐だ。なぜレイと知り合いなのだ？」

『そういう少佐殿もレイと知り合いとは以外ですね』

「うっ・・・」

『それにレイのそばにいたとは・・・仲がいいんですね』

「な、何を言うか！た、確かにレイとは仲はいいが・・・」

『まあまあ落ち着いてくださいよ、少佐殿』

「だ、誰のせいで落ち着けないでいる！」

「・・・そろそろ説明してくれないかな」

と、放置されていたレイが言い出した。

「あ、そうですね・・・。ハーケン殿は私がいた『シュヴァレツェ・ハーゼ』でよく雇っていた情報捜査員です」

「なるほどね・・・。だからラウラと知り合いなんですね」

と、レイはハーケンの声が届くように携帯に顔を近づけたが、同時にラウラの顔と急接近した。

それによってラウラの顔が赤らむ。

『まあそうだな。よく俺は少佐殿から調査を依頼されている。まあそれほど腕がいいって事だな』

「それ・・・自分で言いますか？」

『おいおい・・・。そう言うなよ・・・』

「言いますよ」

「あ、あの・・・」

「ん？」

すると、ラウラの声がして横を振り向くと、ラウラの顔が目の前にあった。

距離は物凄く至近距離で、息が当たるほどであった。

「おっと・・・すまない」

レイはとっさにラウラから離れた。

『いい雰囲気ですね・・・少佐殿』

「うっ・・・い、言い過ぎだ・・・」

『おっと、そいつは申し訳ない・・・でも少佐殿がいるのなら・・・
ついでに言っておくか』

「な、何を？」

『つい最近であなたの妹さんと会いましたよ』

「な、なにっ!? ティファと!?!」

『ええ。元気でいましたよ』

「・・・そう・・・ですか」

「・・・?」

レイは話についていけなかった。

「・・・しかし・・・生きていたのか・・・」

『・・・相当会っていないんですね・・・』

「ああ・・・ずっと・・・会っていない」

『そうですか・・・でも、仲間と一緒にいましたよ』

「・・・そうか・・・」

『・・・いつかまた会えますよ・・・』

「・・・そうだな。そう願いたい」

『そろそろレイに代わってくれませんかね?』

「そ、そうだな・・・」

そうしてラウラレイに携帯を返した。

「・・・なんだか、色々あったみたいですね」

『まあな。それより言っておくことがある』

「何でしょうか？」

『今度ある専用機持ちのタッグマッチのことについてだ』

「タッグマッチについて？」

『ああ。IS学園じゃ過去何度も襲撃事件にあっている・・・。今度のタッグマッチも何も起こらないとは限らない・・・。警戒しておいてくれ』

「はあ・・・。でもそれはあまりにも心配のし過ぎでは？」

『甘いぞレイ。事態はいつどこで起こるかわからないことだ・・・』

「・・・」

『とりあえず、伝えたぞ・・・』

そうして電話が切れた。

「・・・」

レイは携帯を閉じると、机に置いた。

「なあラウラ」

「な、何でしょうか？」

「さっきの話だが……。そういえばラウラに妹がいたな」

「え、ええ……。双子の妹がいます。名前はティファといいます」

「そうか……。やっぱりラウラと同じ……」

「……はい。妹は私と同じ遺伝子強化試験体です」

「やっぱり……。そういえば施設じゃ妹と会っていないな」

「そうですね……。私とティファとは同じ部署ですが……。レイと出会っているのは私だけです」

「そうか……。まあたまに会っているはずなんだが……」

「……」

「でもどうもさっきのは生きていたのかって感じだったが……。なぜだ？」

「……ティファは……。レイが施設から追放される前に……。追放されています」

「な、なんだと？なんで……」

「ティファはどういうわけか私とは違って実力が発揮できなかったのです……。そのために施設では『欠陥品』と言われ……。施設から追放されたのです」

「……………」

「もう生きていないと思っていました……。でも……………」

「でも？」

「最近クラリツサに連絡を入れたところ、ティファがシュヴァレツエ・ハーゼと接触していたことが分かりました」

「なるほど……………」

「接触していたのは学年別トーナメントから少し経ったときのようにです」

「ふむ。でも生きていてよかったな」

「はい。しかもティファは仲間を得ていたんです」

「そうか……。一人じゃなかったんだな」

「はい……………」

「会ってみたいな……。ラウラの妹に……。双子だからやっぱりそっくりなのか？」

「ええ・・・施設では間違われるほどでした」

「そんなにか・・・」

レイは二人のラウラの姿を予想した・・・

「ふう・・・」

しばらくしてラウラは部屋を出て、レイは再びデータの打ち込みを開始した。

「・・・そういえば・・・」

レイはデータを見ながらとあることを思い出した。

「簪のIS・・・確か未完成だったよな・・・」

どこまで完成しているかは分からないが、それでもレイにある提案が浮かんだ。

「・・・EX・・・俺に所有権があるのなら・・・使えるな」
エクストラ

そしてレイはある決断をした・・・

そうして次の朝。レイは職員室にいた織斑先生にレポートを提出に
来ていた。

「・・・織斑先生・・・これで全部です・・・」

結局データ打ち込みは朝のギリギリまで続き、一睡もできなかった
ので物凄く眠かった。

「ごくろうだったな・・・」

織斑先生はレイからレポートを受け取る。

「それで、あのISはどうするのか？」

「・・・一度はIS学園にやるつもりでしたが・・・使うことにな
りましたので、使わせていただきます」

「そうか・・・まああれはお前のものだ。学園側も無理いじりはし
ないさ。それにあのISを一応調べておいたからな」

「何か分かったのですか？」

「いや、うかつに触れることができないからあんまり判明したところ
はない。ただ、あのISにはコアが搭載されていなかった」

「コアが？」

「ああ。ただデータだけは物凄く膨大な量がある。恐らく別のISに使うためのものだろうな」

「・・・・・・そうですか」

「まあ、お前が使うと言うのなら、それでいいさ」

「織斑先生・・・」

「さてと、もう朝のSHRの時間だがゆっくりしていいのか？」

「え・・・？・・・あああっ！？」

レイが職員室の時計を見ると、後数分しかなかった。

「ダッシュッ！」

そしてレイは職員室内は少し早歩きで出て行くと、そこから猛ダッシュして教室に向かった・・・・・・

そしてその夜・・・・・・

「・・・・・・・・」

千冬は学園内にあるとある木に持たれかかって満月を見ていた。

いつもの満月と比べると少し明るさがあるように見えた。

（しかし・・・お前はいつになったら姿を現すんだ・・・？）

と、千冬は右手に掛けている白いブレスレッドを見た。

シンプルな形状だが、それはただのブレスレッドではない。

「・・・まあいいさ・・・。いつかはお前は姿を現すんだろ・・・。それまで待つさ」

そうして千冬はしばらく満月を見つめた・・・

Story55 師弟関係

そして次の日……レイは簪を探していたのだが……

「……はぁ……四組にいないのなら……どこにいるんだよ……」

レイは簪を探すのに苦戦していた。

今は学園の屋上におり、ここに来てみたものも簪の姿はなかった・

「仕方がない……第二格納庫にでも行ってみるか……。あんまり期待してないけど……」

と、レイは行こうとすると……

「あのー……」

「ん？」

すると後ろから声がして、レイは振り向くと、そこには一人の女子がいた。

白銀の髪を腰より少し上まで伸ばしており、顔は高校生にしてはまだ幼い感じがしていた。背丈はレイの胸辺りまでぐらいしかなくしかもそれに似合わず胸が結構大きいと言うアンバランスな姿であった……って何言ってるんだよ……

「何のようだ？」

「ええっと……レイ・ラングレンさんですよ？」

「……そうだが……」

すると……

「やっぱり！」

すると、さっきまでの緊張した様子はなくなり、表情もぱっと明るくなった。

それにレイは少し引いた。

「な、何だ……？」

「やっぱり噂通りだ！これならいい！」

「あの……？」

「あっ……紹介が遅れましたね……。私の名前は『マリ・イラストラス』といいます！一年三組です！」

「いや……別にそれを聞きたいわけじゃ……」

「もうそんなに照れなくてもいいのに……。やっぱり初対面だと恥ずかしいですよね」

と、マリはどんどん話を進んでいった。

「あのな……」

「ああそれと、三組の中で唯一の専用機持ちです」

「な、なに？」

レイは予想外の事を聞き少し驚く。

「三組に専用機持ちがいるとは聞いていないぞ」

「そりゃ……なんていうか……今まで評判が上がらなかったで、影が薄くなっているんですよ……」

（なんだそれ……）

「でも、それなりに操縦技術はあります！」

「……だったら、今までどうして行事で見えていないんだ？」

「うっ……。そ、それは……」

と、マリは視線を泳がす……

「……で、何のようだ……。さっきも言ったが……」

「あ、そうでした……。私を弟子にしてください！」

「はっ!？」

レイは一瞬理解できなかった。

「私を弟子にして鍛えて下さい！」

「なっ、なにを勝手なことを……。それに弟子を持つほど俺は……」

「謙遜ですね、分かります……。噂どおりですね……。師匠」

「謙遜って……。ていうより師匠!？」

「はい!弟子入りしたらこういう風に呼ぶって言うのが決まりなんですよね日本では……」

誰だよ……。間違った知識を吹き込んだのは……。というよりラウラも同じだったよな……

「あのな……。まだ弟子にするって言うわけでもないのに師匠って呼ばれる筋合いはない」

「いや、そんなに照れなくても……」

（くっ……。調子が狂う……）

「まあせめて私の動きを見てくださいよ。そうすれば少しでも考え

が変わるでしょう」

「・・・変わらん」

「そんなこと言わずに・・・」

「・・・」

「見てくれますよね師匠・・・」

「師匠じゃない・・・はぁ・・・見るだけだ・・・。ただし、明日の放課後にな・・・」

「はい！絶対にいきます！」

と、マリはそのまま走っていった・・・

「何なんだ・・・一体・・・」

レイは大きくため息をつく、簪の搜索を再開した・・・

レイは格納庫に行くために一旦更衣室でISスーツに着替えて、第二格納庫に入った。

そこではISの調整などの作業が行われていた。

「相変わらず賑やかだな・・・」

そしてレイは中を歩いていると、格納庫の隅に置かれているEXの
近くで誰かが見ているのを見た。

「・・・あつ」

それは簪であった。

「EXエクストラを見ていたのか・・・」

そしてレイは簪に近づいた。

「よう、簪」

「・・・！・・・れ、レイ・・・」

簪はいきなり声を掛けられたので少し驚いたが、ゆっくりと振り向いた。

「こんなところでどうしたんだ」

「・・・ISの・・・組上げをしていた」

「組み上げか・・・」

「うん・・・私のIS・・・完成してないから・・・」

「そうか・・・。それで、これを見ていたのか？」

「・・・うん。今日来てみたら・・・あったから・・・」

「なるほどな・・・そりゃ興味を示してもおかしくないか」

「・・・知っているの？」

「まあな。俺宛に送られたISらしい」

「・・・レイ・・・宛に？」

「ああ。といっても、俺は別に必要ないんだがな」

と、レイは左腕にあるIS待機状態である腕輪を見せた。

「そう・・・。・・・レイは・・・どうしてここに？」

「簪を探していたからさ」

「私を・・・？でもどうして・・・？」

「そりゃ・・・色々と聞くことや何かあるからな」

「・・・え？」

「まあお前がいいのならだが・・・今度のタッグマッチ・・・俺と組まないか？」

「・・・え!？」

簪もさすがに驚いていた。

「どうして・・・私と・・・？」

「・・・興味があるから、かな・・・」

「興味？」

「ああ。って言っても簪のISが見たいとかそんな簡単な考えじゃなくてな、色々興味があるからさ」

「・・・・・・」

「まあ、どうする？」

「・・・私とで・・・いいの？」

「ああ」

「でも、私のISは・・・まだ完成には・・・遠いよ」

「心配ないさ・・・。こう見えても俺は自分のISは自分で調整したりカスタマイズしているからな」

「・・・そうなの？」

「ああ。だからISのことについては結構詳しいほうさ」

「・・・凄い」

「どうだ。俺と組むか？」

「・・・うん」

「なら、決まりだな。早速だが簪のISはどこまで完成しているんだ？ 場合によっては作業の目処が変わるからな。見せてくれるか？」

「・・・うん」

そして簪はISを展開した。

簪のISは『打鉄』に似たISであった。

「ふむ・・・いろんなところが打鉄と似ているな・・・でも少し違う？」

「うん・・・『打鉄式』って言うの」

「なるほど・・・でも機体は完成しているのか。武装も」

外見では完成しているように見える。

「・・・でも、データがかなり不足しているから・・・実戦は無理」

「そうか・・・だから未完成ってわけか」

レイは納得して、エクストラEXに近付いてコンピューターを作動させた。

エクストラ(EXのコアはなかったな・・・。だがデータだけは豊富にある・・・。つまりはコアを入れればいつでも起動可能、か)

そしてデータを見ていると・・・

（・・・でも、各所がまだ未完成か・・・でもこの程度なら別のISのパーツを流用すれば問題ない・・・と言うことは・・・）

レイは簪の式式とEXを見比べた。
エクストラ

（・・・式式はデータ不足で戦闘は不可能だがパーツは揃っている・・・。
エクストラ EXはコアが無いから動くことすらできないが、データは豊富にあるからコアがあればすぐにでも戦闘は可能・・・）

そしてレイはとあることを考え付いた・・・

「なあ簪」

「・・・？」

「お前が良ければだが・・・このEXを・・・エクストラ使ってみるか？」

「え？・・・で、でも・・・それって・・・」

「このISの所有権は俺にあるからな・・・だからこれをどうするかは俺次第さ。これを簪の式式と組み合わせようが、俺の自由さ」

「・・・式式と・・・それを・・・組み合わせる？」

「ああ。両方とも抜けているところがある。しかもそれは両方とも持っていないのをそれぞれ片方ずつ持っている」

「・・・でも、私にそんな高度な技術は・・・」

「大丈夫だ。パーツの組み合わせは俺に任せてくれ。前にもこういうことがあったからな」

「そう・・・なの？」

「ああ。簪も式式をここまで組み上げるほどの腕があるのなら、手伝えてくれ」

「・・・・・・う、うん」

「よし。まず構成としてはEXをベースにする。^{エクストラ}それに式式のパーツを流用してISを完成させる。どうだ？」

「・・・・・・いいけど・・・・・・でも・・・時間は・・・」

「それなら大丈夫だ。今日から少しずつでいいから始めていこう。時間はまだあるが、完成したISに慣れる時間も必要だからな」

「・・・・・・ありがとう・・・」

「別にいいさ・・・」

そうしてレイは早速作業に取り掛かった・・・

所変わって、ここは学園内の第八アリーナ・・・

ここでは飛行テストが行える場所であった。

そこで、シャルロットはテストを行っていた。

「くっ！」

シャルロットは『アルトアイゼン・リヴァイブ』の飛行テストを行っており、背面のスラスター全て使っているので物凄い勢いでアーナ内を駆け抜けていった。

しかしアルトの推進力は以前のリヴァイブとは比べ物にならなかった・・・

（最近慣れたけど・・・やっぱりGは凄い・・・）

アルトのスラスターによる推進力でシャルロットの顔は引きつる。

（レイも・・・いつもこんな感じなんだね・・・）

シャルロットはレイの苦しさを改めて体感するのであった・・・

しばらくしてシャルロットは地面に着地して止まった。

「はぁ・・・結構きつい・・・」

シャルロットは若干息が荒れていた。

「でも『瞬間加速』を掛けずにしてもそれ以上の推進力を得ているなんて……。アルトの力はやっぱり凄いや」

そしてシャルロットは一旦背伸びした。

「でも、こんなに装備しているのに動きやすいなんて……。本当に不思議……」

両肩にはリーゼのクレイモアコンテナを搭載したパーツを新規に付けられているが、見た目によらず動きやすいのだ。

「……………」

そしてシャルロットはあることを考えた……

（……レイは別の人と組むってことになっているけど……………でも……）

正直に言えばレイに断られたのはショックだったが、それが生徒会長命令なら仕方がないと思っているが……。それでもショックはある。

「……さて、もう少しやっておこうかな」

そしてシャルロットは頭を切り替えて両肩のテストラウイングと背中フレキシブル・スラストを展開して、アリーナ内を駆け抜けて行った……

そして第三アリーナ・・・

「はあああ！」

神夜が斬冠刀を振るう。

「ふっ」

フィオナは左腕のブレードを展開して攻撃を防ぐ。

「さすがに太刀筋はいいわね・・・さすがは楠部家の令嬢ね」

「お褒めいただきありがとうございます・・・でも・・・」

そして神夜はそのままフィオナを押し返した。

「それで手を抜きませんよ！」

「そうね・・・」

そうして二人は激戦を繰り広げた・・・

「さ、さすがですね・・・フィオナさん・・・」

しばらくして二人の戦いはフィオナの勝利に終わった。

「神夜も・・・近接戦闘じゃ私も苦勞するわ」

「そうでしょうか？」

「ええ。少なくとも私についていけるほどの腕ね」

「そうですか・・・。感謝極まりないです」

「そう・・・」

「しかし、フィオナさんが私と組んで欲しいって言うなんて以外です
すね」

「そうかしら？まあ他の人に言いにくいから」

「そうなんですか・・・。それと、一つ気になっていることがある
のですが・・・」

「なに？」

「フィオナさんはレイさんと組もうと思っていなかったのですか？」

「・・・・・・・・・・」

フィオナはしばらく黙って・・・

「・・・あいつのことだから、多分組まないでしょうね・・・。まあ

元カノから組もうって言われてもいい気分じゃないだろうしね」

「そうでしょうか？」

「そういうものよ」

そしてフィオナはISを解除して、それに続いて神夜もISを解除した。

「とりあえず、タッグマッチじゃよろしくね」

「はい。こちらこそよろしくお願いします」

そして二人は握手を交わす・・・

その頃・・・

「・・・・・・・・・・」

とある高層ビルの最上階の窓からレナは景色を見ていた。

（・・・兄さんに会うことはできた・・・もうここにいる必要はないね・・・）

と、考えていると・・・

「ほう・・・君がそうか・・・」

すると、後ろから男性の声がした。

「・・・？」

レナは振り向くと、一人の男性が近付いてきた。

男性が歩く度に左足の義足が金属音を立てた。

「・・・あなたは・・・」

「初めてだね・・・レナ・ラングレン。俺はレックス・・・。まあ本名は檜山・漣・・・だな」

「レックス・・・。スコールが言っていたイノベーターのリーダー・・・」

「その通りだ」

（こいつがレックス・・・。本当に身体の半分がサイボーグになっている・・・）

レックスの左半身はほぼサイボーグに近かった。

「で、何のよう？」

「一言あいさつを言っておこうと思ってね」

「あいさつねえ．．．それだけ？」

「ああそうだ．．．この後にスコールと話があるのでな．．．失礼する」

と、レックスは振り返るとそのまま部屋を出て行った．．．

「．．．って言っても．．．もう私には関係ない．．」

レナはしばらくして、部屋を出て行った．．．

そうしてレナはビルから出て、それから最上階が見える場所まで歩いた。

「さようなら．．．スコール．．．エム．．．オータム．．．まあまあ面白かったかな」

そしてレナはどこかへと行った．．．

その頃．．．別の場所では．．．

『．．．あれが．．．IS学園か．．』

上空高く、それはいた。

白と紅の色をしたISが二体いた。

『あそこには・・我らが求める器がいるのか』

『そうだろうな・・・。まあ前のやつよりは腕の立つやつがいるだろう』

『・・では、参ろう』

『ああ』

そうして二体のISはIS学園へと向かって行った・・・・・

S t o r y 5 5 師弟関係（後書き）

今年中には原作は出そうにありませんね・・・年明けに出ることを祈りましょう。

Story56 隠れた才能

そうして次の日・・・レイは簪に用があると言って、第三アリーナに来ていた。

用はと言うと、マリのことであった・・・

「はぁ・・・なんでこうなったんだろ・・・」

レイはため息ついてアリーナ内へと入る。

既にマリが準備万端でいた。

「来ましたね師匠」

「師匠と呼ぶな・・・」

そうしてレイはマリの前に立った。

(・・・それにしても・・・)

レイはマリから視線を逸らす。

なぜかというと、マリは制服の時点で相当大きな胸だったので、I

S スーツになつては更に胸が強調されているのだ。大きさでは箒より大きいかな・・・って、何言つてんだよ・・・

「では師匠。早速始めましょう！」

「だから師匠じゃない」

レイはため息をつく・・・

「・・・ん？」

レイはマリのとあることに気付く。

それは、マ리에左腕と右足であつた。

妙に肌の色がおかしい。二の腕と太ももの後ろは普通の肌なのだが、その後は肌の色より不自然に白い。

「・・・」

「・・・師匠？」

「・・・いや、なんでもない」

そうして、レイはファントムを展開した。

それと同時にマリもISを展開した。

「わぁ・・・。これが師匠のISなんですわ・・・。全身装甲に浮遊ユニットがない・・・。従来のISと比べると特殊なところが多いで

すね」

と、マリは興味津々に見ていた。

「師匠じゃない……。それに……」

レイはマリのISに見覚えがあるものも、何かが違う。

「……それは『打鉄』のカスタム機か？」

「うーん……少し違いますね……。これは『迅雷』……打鉄に代わる日本での次期量産機候補です」

「次期量産機だと？」

「はい。といっても、製作されたのはテスラ研っていうIS研究所なんですよ」

「テスラ研だと？」

「はい。ちなみに言うところ姉ちゃんがテストパイロットとして働いているんです」

「……それより、それは打鉄をベースにしているのか？」

「はい。元々は打鉄のデータを元にして新規に製作したISなんですよ。でも直接の系列機体じゃないんです。ちなみにいうとこれまだ一機しかないんですよ」

形状は確かに打鉄と似ているものも、両肩の浮遊ユニットと両足な

ど各所のパーツが異なっていた。カラーリングは打鉄を元にした黒鉄色であった。背中には日本刀型のブレードが鞘に納められていた。

「・・・別に詳しく聞きたいとは言っていないが？」

「あ、すみません・・・。私どうも口がすぐに動いてしまうんですよ」

「・・・まあいいや・・・。とりあえずお前の動きを見せてみる」

と、レイはシシオウブレードを展開して、鞘から刀身を抜き放った。

「日本刀ですか・・・。でも、私も！」

すると、マリは背中に背負っていた日本刀型のブレードを抜き放った。

「・・・そっちも同じ武器か」

「はい。これは鬼神斬破刀きじんざんぱどうと言いまして。かつて鬼を殺したとされる太刀をモチーフにしたそうです」

「・・・どうも説明癖があるのか？」

「いやぁ・・・。私にも分からないんですよ・・・。でも、気持ちは切り替えます」

そしてマリは斬破刀を構えた。

同時にレイもシシオウブレードを構えた。

「いきますよ・・・師匠！」

「師匠じゃない！」

そして両者は一気に飛び出し、ブレードが交じり合い火花を散らす。

「くっ！」

レイはマリをそのまま押し返すも、マリは弾かれた瞬間に『ターンブースト』を行いレイに向かっていく。

「であああああ！」

マリはブレードを次々と振るう。

「突っ込むのはいいようだな・・・。だが・・・」

レイはブレードでマリを再度弾くと、ターンブーストするマリに突っ込んでいく。

「しまっ!?!」

「動きが単調だ！」

そしてレイのブレードが迅雷を切った。

「ぐう！」

マリは何とか体勢を立て直してレイと距離を取った

「さ、さすが……。しかし……」

マリは斬破刀を鞘に戻す。

「ブレードアロー！」

そしてマリは右手に弓矢型の武器を展開した。

「弓矢だと？」

「ただの弓矢ではありませんよ」

と、マリはエネルギーの弦を引くと、それを手放してエネルギーの矢を放った。

「しかし……。そんな直線的なものが……」

と、レイは横に避けようとする……ぐにやりとビームの矢がレイの避けたほうに曲がった。

「なにっ!？」

さすがにレイは予想もしないことで、攻撃を受けてしまう。

「くっ……。い、今は……『偏光制御射撃』か……?」

「うーん……。ちょっと違いますね……。私だからこそできる業かな?」

「……。なに?」

「でも、手は止めませんよ師匠！」

と、マリは次々と矢を放った。

「さっきは意表を突かれたが・・・」

と、レイは横に避けると弓もそれについていって曲がる。

「そう何度もくらわん！」

そしてレイはブレードを振るい、ビームの矢をかき消した。

「なっ！？ビームの矢を！？」

マリは驚いた様子であった。

「隙だらけだ！」

と、レイは『瞬間加速』を掛けてマリに接近して、ブレードを振るう。

「きやあああ！」

そして斬撃は迅雷の装甲に当たり、マリは後ろに飛ばされた。

「・・・く、くう・・・」

マリはゆっくりと立ち上がる。

「・・・・・・・・」

レイはブレードを構える。

「ま、まだ・・・まだです・・・・・・。っ！」

すると、マリが一瞬ふらついた。

「・・・・・・・・」

そして、マリが顔を上げると、瞳に光が無くなっていた。

すると、マリは突然斬破刀を抜き放つと同時に『瞬間加速』を掛けてレイに接近した。

「な、なにっ！」

レイはとっさにブレードで攻撃を防いだ。

しかしマリはそのまま刀身を滑らせて、それに乗ってファントムの横腹に蹴りを入れた。

「ぐっ！」

そしてそのままマリは斬破刀を振るう。

「・・・！」

レイはとっさに右足を前に出すと、展開装甲を開いてビームの刃を出して斬撃を防いだ。

しかしそのままマリは右足でレイに蹴りを入れた。

「このっ！」

そして左腕のプラズマステークをマリに叩きつけた。

そして棒の先端から衝撃が飛び出し、マリはそれによって後ろに吹き飛ばされた。

「・・・！・・・しまった・・・！」

レイははっとしてマリの元へと向かう。

「マリ！大丈夫か？」

「・・・う、うう・・・師匠・・・」

と、マリは何とか立ち上がった。

その瞳には光が戻っていた。

「すまない・・・。つい・・・」

「いえ・・・いいんです・・・」

すると、マリに息が荒れていた。

（・・・なぜだ？戦闘はそこまで長引いていないし、ましても激しい戦闘をしていない・・・）

レイはマリが息を荒くしていることが分からなかった。

「・・・もういい・・・。動きは大体分かった」

「・・・そうですか・・・」

と、マリはしゅんとする。

（・・・それにしても・・・あの動き・・・）

レイはさっきの一瞬だがマリの動きに疑問を感じていた。

（まるで別人だ・・・）

さっきの動きは明らかにマリとは違う・・・。

「・・・」

そしてその後、休憩室にレイとマリはいた。

「・・・マリ」

「な、何でしょうか・・・師匠？」

「さっきから気になっているんだが・・・お前の右足と左腕のその肌の色違い・・・どうしてだ？」

「・・・・・・・・」

すると、マリの表情が曇る。

「・・・いや、すまない・・・。嫌な事を聞いてしまったな」

「い、いえ・・・。そういうわけでは・・・」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・これ・・・本当の腕と足に見えますが・・・人工的に生成したものです」

「な、なに・・・？　どういうことだ」

「・・・私・・・前に左腕と右足を失っているんです・・・。それと左目も」

「なんだと？　だが左目は・・・」

「・・・これも、人工的に生成された眼球です」

「っ!？」

「よく見てください。右目と違いが分かります」

レイはマリの両目を見比べると、よく見れば左目は輝き方が少し違う。

「気がつかなかった・・・」

「そうでしょうね。とっても精巧にできているんです」

「しかし・・・そんな高度な技術は今の医学にあるのか？」

「いえ・・・ありません」

「なに！？・・・だったらどうして・・・」

「・・・話は変わりますが。三年前に私がテスラ研にいた頃に、I
Sのテスト中に大きな事故が起こったんです・・・。そのISのテ
ストパイロットは私でした」

「・・・・・・」

「それによって、私は左腕と右足と左目を失いました・・・」

すると、マリは後ろを向くと、ISスーツを脱ぎ始めた。

「な、なにを！？」

「背中にも・・・癒えない傷があります」

「・・・！？」

そしてマリが背中に掛かっているISスーツを脱ぐと、そこには大
きく焼けた後のような傷があった。

「・・・・・・」

レイは何も言えなかった・・・

「・・・それからです・・・事故から数週間経った時です」

と、マリはＩＳスーツを着直すと、レイに方に向き直る。

「テスラ研にとある科学者が訪れました」

「科学者？」

「はい・・・その科学者はまだ世界に発表していない最新技術の医療機器を持ってきたんです」

「一体・・・どういうものだ？」

「結構大きなものでした・・・特殊な溶液が入った試験管のような形状の水槽の中に私が入って、それから数週間その中に眠っていました」

「それで・・・再生したのか」

「はい・・・再び目が覚めたときに左腕と右足が生えていました。最初は動かしにくかったですが、すぐに慣れました」

「・・・だが、左目はどうしたんだ」

「左目は右目の細胞から別の水槽で生成したものを後に移植したんです」

「・・・そんな再生医療があつて・・・まだ世界に知れ渡っていない・・・」

「そうですね・・・。その科学者も私を治した後どこかへと行ってしまいました」

「・・・その後はどうなったんだ」

「・・・少しの間リハビリをした後、再びISのテストです」

「・・・治ってすぐに・・・」

「私は・・・嫌でした・・・。またあんなことになるかもしれないのにまたISに乗らないといけない・・・」

「だったら、なぜ今の乗り続けているんだ」

「・・・そうしないと・・・。私たち姉妹は生きることができない」

「な、なに？　どういうことだ？」

「・・・姉ちゃんと私は幼い時に両親を失いました。それからテスト研に引き取られてずっとテスト研で暮らしてきました」

「・・・それとこれはどういう関係が」

「偶然にも姉ちゃんと私は適正が高かったから、ISのテストパイロットにされました。でも・・・」

「でも？」

「・・・私は昔から病弱なんです。だから体力も少ない」

「なに・・・？」

だったら、さっきのは理解できる

「・・・それなのに、どうして」

「・・・私の適正が・・・異常に高いからです」

「・・・どのくらいだ？」

「・・・今は『S』が一番高いのですが・・・私は・・・『SS』なんです」

「・・・！？」

レイはこれには驚いた。

一番高いのが『S』で、それを持っているのは『ブリュンヒルデ』と『ヴァルキリー』しかない。しかしそれを上回るのがいるともう未知の領域だ。

「なので、私は特殊な能力が使えるんです・・・。例えば先ほどのようにエネルギー兵器を操ることができます」

「・・・そうか。あれは適正が高いことでできたことか」

「はい」

（SSはそんな能力があるのか……。だが・・・）

「・・・だから、私は病弱でもやらないといけないんです」

「・・・・・・・・・・」

レイはしばらくして・・・

「お前は・・・それでいいのか？」

「良いも悪いも・・・私が決めれることじゃないんです。でも、私は・・・嫌です」

「・・・それでもなぜ俺のところに弟子入りしようとした？」

「前まではそんな事を思わなかったのですが・・・。でも・・・」

「・・・でも？」

「テスラ研が襲われてから・・・そんなことを言っていられないんです」

「テスラ研が襲われたのか？」

「はい。何者かは分かりませんが、姉ちゃんが襲撃者を退けたのですが・・・その後に更に襲撃にあったんです」

「・・・・・・・・・・」

「こんなことがあっているのに。私だけがのんびりしているわけにはいかない・・・」

「だから、俺のところに来たのか」

「はい・・・。師匠は仲間思いだと聴いていますから、私は教わりたいんです」

「・・・・・・・・」

「でも、私なんかじゃ、師匠が迷惑なだけですよね・・・」

マリは笑みを浮かべるものも、笑みと言うのに程遠い・・・

「だから・・・別の人を探しますね・・・。それだったら迷惑にならないし」

「・・・・・・・・」

レイはしばらくして「はぁ・・・」とため息をついた。

「・・・・・・・・仕方がないな」

「え？」

「・・・お前がそこまで言うのなら・・・」

「い、いいのですか？」

「ああ。だが、俺の訓練は厳しいぞ。ついてこれるのか？」

「・・・・・・・・」

マリは少しして・・・

「・・・はい！どんなに厳しかろうが、私は師匠についていきます！」

そしてマリの顔に明るさが戻ってきた。

「そうか・・・。なら早速・・・体力作りからだな」

「にゃ？」

マリの顔が固まった。

「体力が少なすぎる。だから毎日グラウンド五週と寝る前に腕立て腹筋スクワット十回ずつやるんだ」

「え、ええ！？そんなにですか！？」

「言っただろ。俺の訓練は厳しいとな」

「うう・・・。分かりました・・・。どんなこともやってのけます！」

「その意気だ。少し休憩してからグラウンドを走って来い」

「はい！」

そしてマリはグラウンドに向かって行った・・・

「・・・やれやれ・・・なんでこうなったんだろうな・・・」

レイはため息をついて、しばらくそこにいた・・・

その頃・・・

「くっ！」

山岳地帯の中腹でロイはブレードを横に振るうと、インビットを切り裂いた。

「はああああ！」

隣ではパンドラMK-？を身に纏ったフリーダが右手に持つ『マスターブレイド』を振るうと、アヌビスの右腕を切り落とした直後、胸部に突き刺した。

「ちっ！」

そして後方から接近するデクーエースに脚部の展開装甲を展開して

ビームの刃を出してその場で回転してデクーエースの胴体に回し蹴りを入れ切り裂いた。

「ロイ・・・」

「こっちは大丈夫だ。・・・しかし・・・」

ロイは前を見ると、まだ無人ISが残っていた。

「さすがにここまで来るときついな」

「ええ・・・。これでもう二時間以上は戦っているわ」

「そうだな・・・。体力の消耗もそうだが・・・」

ロイは黒騎士MK-?のモニターを見る。

（エネルギー残量は35%ってところか・・・。これ以上長引けばまずいな）

そしてロイはパンドラMK-?をチラッと見る。

（パンドラMK-?の展開装甲はエネルギーを食う・・・。だからエネルギーはこっちとさほど変わらないところか）

「ロイ・・・どうするの」

「やれるところまでやるさ・・・」

「それしかないようね」

と、動き出そうとした瞬間……

「警告！接近するISあり」

「何？」

ロイはとっさにレーダーを見る。

「こんな距離まで来ないと探知できなかっただ？一体……」

ロイはISが接近してくるほうにハイパーセンサーを向ける。

「……！……あれは……」

接近してくる機体を見てロイは驚いた。

「……『RV』なら、こんな距離までじゃないと探知できないか」

そしてその機体をロイは知っているようだった。

その機体『全身装甲』で漆黒のカラーをして、背中には複数の翼があり、右手には大型のビームランチャーを持っていた。その形状は『ゲシュペンスト』に酷似していた。

その機体は接近すると両手で持っている武器をロイ達の前にいる無人ISに向けた。

「メガバスターキャノン」

そしてトリガーを引くと、銃口から膨大なエネルギーが発射されて無人ISを撃破していった。

その中で二体のアヌビスが飛び出てきた。

「・・・行け・・・MKー？」

すると、その機体の隣に光の玉が形成され、そこから一体のISが出てきた。

カラーリングは横の機体とほぼ同じだが、形状は『ゲシュペンスト』とほぼ同じであった。

そしてMKー？は左腕にある三本の『プラズマカッター』の一本を右手に持って抜き放ち、そのまま一体のアヌビスに突っ込んでいく。アヌビスは手にしていたブレードで切りかかるも、MKー？はひらりとかわすとそのままプラズマカッターを振り下ろしてアヌビスを切り裂いた。

そして隣で漆黒の機体がメガバスターキャノンで残り一体を撃破した。

「あれって・・・」

フリーダは驚いて漆黒の機体を見ていた。

漆黒の機体はMKー？を収納すると、ゆっくりとこっちに向かってきた。

「珍しいこともあったもんだな・・・」

「どういうこと?」

「まあ、見ていれば分かるよ」

そうして漆黒の機体はロイたちの前に来ると、ISを解除した。

ISの中には、一人の男性がいた。三十代ぐらいで、紫の長い髪をして、長い前髪で右目を隠している。服装は黒いコートをしていた。

「久しぶりだな・・・ギリアム」

と、ロイはISを解除して、フリーダもISを解除した。

「ああ。久しぶりだ・・・ロイ」

そして二人は握手した。

「そちらの方は?」

と、ギリアムはフリーダのほうを向く。

「ああ。前に言ったが、冷凍睡眠カプセルで眠っていたフリーダだ」

「そうか、ではあの時の・・・俺は情報捜査員の『ギリアム・イーガー』だ。よろしく」

「ギリアム・イーガー・・・。私は『フリーダ・エスグランド』」

よ。こちらこそよろしく」

と、二人は握手した。

「しかし、お前がここにいてるって事は・・・何か追っているのか？」

「ああそうだ。今回はかなり大物だ」

「そうか・・・」

「お前のほうはどうだ？」

「まあ、最近は結構大変だ」

「そうか・・・」

「・・・」

「フリーダ。少し辺りを見ていてくれないか？まだいるかもしれないから」

「え？・・・いいけど・・・」

と、フリーダはその場を離れた・・・

「・・・それにしても・・・」

しばらくしてロイが口を開いた。

「お前がこの世界に来てからもう六年か・・・」

「ああ・・・時間が経つのは早いな」

「今思えば不思議な話だよな・・・。お前のゲシュペンストがこの世界に来て、俺がそこから得たデータで作った『クロスゲート』から・・・お前がこの世界に来た」

「全くだな・・・。偶然なのか必然なのか・・・今となってはどうだろうな」

「そうだな・・・」

「・・・あれからクロスゲートは機能していないのか？」

「いや、二年前に突然動き出して、俺はしばらく別の世界に飛ばされたよ」

「そうか・・・。しかし無事に戻れたのは良かったな」

「ああ。それからクロスゲートはもう動いていないよ」

「そのほうがいいだろうな・・・。次元を旅すると言うのは危険が伴う。それゆえに次元を壊すことになりかねない」

「そうか・・・。やはり近々にクロスゲートを破壊する必要があるな。まあその前にお前の元いた世界に帰するのが先決だな」

「……いや、俺は……もうあの世界に帰らない……。いや、帰る資格などない」

「そういえば言っていたな……。お前……確かその世界で大罪を犯した……」

「ああ。だから俺は……罪を償うために……平行世界を彷徨う宿命を……背負ったのだ」

「宿命ねえ……。でも誤解が解けるって言うこともあるんじゃないか？」

「……」

「……まあ、人それぞれかな……。俺は罪を償うために生きている……。のかな……」

「そうか……」

「ところで、『ゲシュペンストRV』はどうだ？」

「中々いいものだ。かつての愛機のように自在に操れる」

「そうか……」

そしてギリウムはポケットからUSBメモリーを取り出してロイに渡した。

「しばらく溜まっていたデータだ」

「そうか・・・。しかし、『偵機システム』はどうだ？」

「ああ。たまに多数の敵を相手にするときがあるからな。これのおかげでかなり助かっている」

「そうか・・・。まだ試作品だが、有用性は高いようだな」

偵機システム・・・それはレイが使用するISの能力を元に擬似的に再現したものである。コストは試作品なので高いものも、レイのように三体のISを持つのはできないが、無人IS一体に支援システムを導入して空き容量バスロットに入れることでISの交換はできないが、実質上二体のISを持つことができる。無人ISには操縦者の性格に合わせて成長していくAIを搭載しているので、戦闘能力が高いISができる。

「・・・ところで・・・まだあれは残しているのか？」

あれとは、ロイの研究所の近く深くに保管されている『ゲシュペンスト』のことである。

「・・・ああ。できれば残しておきたくないものだが・・・あれはお前のものだもんな」

「・・・そうだな・・・。いずれまた・・・元の世界に戻るときには、あれを返してもらう」

「そのつもりだ。俺には手が余るものだ」

「そうか・・・」

そうしてギリアムは歩き出した。

「もう行くのか？」

「ああ。イノベーターが本格的に動き出している今、世界各地にあるやつらの基地を探し出さないといけない……。それには協力するものが必要だ」

「そうか……。同じ目的で動いている情報捜査員もいるから、それに協力を申し入れたらどうだ？」

「……。ハーケン君か？」

「そうだ」

「……。会えれば、そうしたいな」

「そうか……。また会おう……。ギリアム」

「ああ。達者でな……。ロイ」

そうしてギリアムは立ち去った……。

「もう行ったの？」

しばらくしてフリーダが戻ってきた。

「ああ。まだ調べることがあるんだとさ」

「ふーん」

「・・・そういえば・・・ティファたち・・・元気だったな」

「ええ・・・。レオンも元気で何よりだったわ」

「それに、多くの仲間を持っていたな・・・」

「そうね・・・。レオンは一人じゃなかったのね」

「ああ・・・。ティファもな」

そうして二人はしばらく話して、研究所にへと戻っていった・・・

その頃・・・

ドコンッ・・・！

鈍い音が辺りに響き、それは機能停止した。

それによって飛び出てきたオイルがその者に返り血のようにして付着した。

そしてその者は右腕のパイルバンカーの杭を引き抜いた。

それによって杭に付着したオイルが滴り落ちた。

『・・・・・・・・』

その者は辺りを見回す・・・

・ 辺りにはイノベーターの無人ISの残骸が無残にも転がっていた・・・

『・・・噛み砕け・・・』

そうしてその者・・・・ゲシュペンストMKー？は背中のスラスタ
ーを一気に噴射させてどこかへと消えていった・・・

そして同じ頃・・・・・・・・

ズガンッ……！

無人ISの胴体に大きな風穴が開き、無人ISは後ろに倒れた。そこには長いライフルを携えた者がいた。

『……』

その者は辺りを見回すと、辺りにはさっきと同じくイノベーターの無人ISが多数無残な姿で転がっていた。

『……破壊する……すべてを……』

そうしてその者……ゲシュペンストMKー？は背中のテスラウイングを展開して、光の翼を出し、空に舞い上がり、どこかへと消えていった……

Story 56 隠れた才能（後書き）

ヒーロー戦記よろしくこと、ギリアムさん登場……。ヒーロー戦記からの世界から直接の登場です。

それと、いつかは今は未定ですが、次の作品を書こうと思っています。内容は基本二つの案が浮かんでいます。ちなみにその内容は・・

？この作品の登場キャラをムゲフロ・・・ではなく、そのドラマCD（スパロボOGという向こう側）の世界を舞台にしたストーリー。向こう側ということでシャドウミラーとの戦いもあります。それと意外な人と対決するかも・・・

？完全新作ストーリーだが、一部前の設定を使っている。クロスは前のほとんど変わらないが、『ムゲフロ』が『スパロボOG』に変わり、スパロボOGのキャラクターが多数登場予定。ちなみにダンボール戦機の設定は一応使用する予定・・・

以上です。最終的にどうするかは作者が決めますが、皆さんの意見も聞いてみたいです。

Story57 白と紅

それから数日たったある日……

「うおおおおお！」

「はあああああ！」

IS学園の第三アリーナでは、一夏と箒が模擬戦を行っていた。
白式・雪羅と紅椿のブレードが激しくぶつかり、火花を散らす。

「はぁ……はぁ……。もう箒は紅椿を使いこなしているな……」

「まだ完全とはいえないが、まあ使いこなしているな。『絢爛舞踏』も今では任意に発動できるようになった」

と、誇らしげに言う箒。

「しかし・・・白式の燃費も少し改善できたと思ったんだがなあ・・・
やっぱりだめか」

白式の燃費の悪さは相変わらずで、すぐにエネルギー切れを起こしやすいが、今では少しよくなったほうだと言う・・・

「なあに、私と組んでいる以上、その心配は無用だ。絢爛舞踏で白式のエネルギー補給を行おう」

「そうだな・・・。本当に助かるよ、箒」

「そ、そうか・・・。なら、まだ訓練を続けるとするか」

と、少し顔を赤らめて、箒は言う。

「ああ。タッグマッチまでまだ時間はあるといっても、色々することがあるからな」

そうして二人は訓練を再開しようとした・・・

しかし・・・

「警告！九時方向に所属不明のISを確認！」

「なに！？」

一夏と箒はとっさにそっちに向くと、そこに二体のISがいた。

「な、なんだ・・・あれ・・・？」

「わ、私に聞くな・・・私だって分からん」

混乱するのは当然である・・・目の前のISはどうやって侵入してきたのが分からず、まして今までなぜ反応になかったのが不明だからだ。

「・・・だけど・・・あのIS・・・」

一夏はそのISに少し疑問を感じた。

そして自分のISと箒の紅椿と目の前の二体のISを見比べた。

「なあ箒・・・あのIS・・・俺たちのISと似ていないか？」

「なに？」

箒も自分のISと一夏の白式と目の前のISを見比べた。

「・・・た、確かに・・・似ている」

目の前には、白式と紅椿に酷似したISで、全く違う点としては『全身装甲』のみだろう。

そして目の前のISはゆっくりと一夏と箒に近づく。

「お前たちは何者だ！・・・どうやってここに・・・」

一夏は臨戦態勢を取り、二体のISに問いかける。

『・・・白き者よ・・・』

「・・・？」

『・・・紅き者よ・・・』

「・・・なに？」

『我の名は『白雪』・・・』

「白雪・・・？」

『我が名は『紅桜』・・・』

「紅桜・・・？」

『我らは・・・お前達に勝負を挑む』

「なん・・・だと？」

「ということだ」

『言っている通りだ。お前達に勝負を申し入れる』

「・・・嫌だと言えば・・・どうする気だ？」

『・・・余計な被害を出す気はない・・・。だが我らの申し入れを

断るのであれば・・・』

『我らはここを破壊する』

「・・・くっ・・・」

『どうする?..』

『・・・どうする筈?..』

『・・・被害を出さないためには・・・勝負を受け入れるしかないだろう』

と、一夏と箒はプライベート・チャンネルで話し合う。

「・・・分かった・・・お前たちの申し入れを・・・受ける」

『そうか・・・ならば、お前が私の相手になってもらおう』

と、白雪は一夏を指差す。

『なら、我はお前と戦う』

と、紅桜は箒を指差す。

「ああわかった」

「私もそれでいい」

そして一夏は雪片式型を展開して、箒は雨月と空裂を展開する。

そして白雪と紅桜もそれぞれの武器を展開した。

「な、なに!？」

一夏は白雪が展開した武器に驚く。

形状は多少違う点があるとは言えど、姿はまるで雪片とそっくりであつた。

そして紅桜は六本の日本刀型のブレードを展開すると、それを指の間に挟みこんで持った。

「ろ、六刀流だど？」

箒はブレードの多さに少し驚く。

『行くぞ!』

そして先に白雪が雪片を構えて攻めてきた。

「うおおおおお！」

その直後に一夏が飛び出し、雪片式型を振り上げ、両者がぶつかる直前で両者がそれぞれのブレードを振り下ろし、火花を散らしてブレードがぶつかる。

「このっ！」

一夏はそのまま白雪を押し返すと、左腕の雪羅の荷電粒子砲を放つ。しかし白雪はブレードで粒子ビームを切り消すと、背中より二門の荷電粒子砲を展開して一夏に向けて砲撃する。

「くっ！」

一夏はとっさに雪羅の零落白夜のエネルギーシールドを展開して防いだ……

「はあああああ！」

近くで箒は紅桜と交戦していた。

箒は雨月と空裂による二刀流で紅桜に猛攻を掛けるものも、紅桜は六刀流によるブレードを器用に操って攻撃を防いでいく。

「くっ……ならば……！」

そして箒は力をこめた一撃を紅桜に叩きつけると、右足の前面展開装甲を展開して、ビームの刃が出た足を紅桜に向け蹴る。

『……………』

すると、紅桜は左腕を前に出すと、装甲を展開してビームの刃を出した。

「な、なにっ!？」

箒が驚いている間にも、箒の一撃は紅桜の左腕のビームの刃に止められた。

「馬鹿な・・・展開装甲だど!?!」

それは紛れもなく、紅椿に搭載されている展開装甲だった。

その間にも紅桜は左腕を前に押し出して箒を弾くと、今度は自分も右足の前面展開装甲を展開してビームの刃を出し、そのまま箒を蹴り上げた。

「ぐっ!」

箒は上に舞い上げられるも、何とか体勢を保持して紅桜を見る。

「こいつ・・・外見だけではなく、内部も同じだと言うのか!?!」

『・・・・・・・・』

そして紅桜は両脚部の後部展開装甲を展開して、箒に向かっていく。

「くっ・・・・・・・・」

箒はブレードを握り直すと、紅桜に向かっていく・・・・・・

「くっ・・・・・・・・このおおお!」

一夏は雪羅のクロウモードと雪片式型を併用して白雪に攻撃を掛けるものも、白雪はブレードと軽やかな動きで攻撃を避けていく。

「くそっ・・・なんてやつだ・・・」

そして一夏は雪片を構えるとすぐに白雪に向かっていく。

しかし白雪はそのまま一夏を飛び越えた。

「かかったな！」

すると、一夏は急速旋回して、そのまま『瞬間加速』イグニッションブーストを掛けて白雪に向かっていく。

「うおおおおお！」

そして一夏は白雪の真後ろに着くと雪片を振り下ろす。

『・・・・・・・・』

すると、白雪はその場で回転すると一夏に回し蹴りを加える。

「ぐっ!？」

一夏はそのまま飛ばされるものも、何とか体勢を保った。

「くっ・・・・・・・・」

そして前を見ると・・・

「な、なんだと!?!」

一夏が見たものは……白雪の右足の前面装甲が展開してビームの刃が出ていた。

「まさか……紅椿のように展開装甲があるのか!?!」

そして白雪は展開装甲を閉じると、ブレードを構える。

『それで瞬間加速とはな……。遅いぞ』

「な、なに!?!」

すると、白雪はすべての展開装甲を展開してすべてを後方に向ける。

『瞬間加速とは……。こういうものだ!』

そして白雪はまさに一瞬のスピードで一夏の懐に入る。

「なっ!?!」

一夏が気付いた時には、白雪がブレードを振り上げて白式を切りつけた。

「ぐっ!」

そして一夏は後ろに飛ばされ、そのまま地面に溝を作りながら滑っていく。

「な、なんて・・・速さだよ・・・」

ハイパーセンサーでもその動きを捉えることができなかった・・・。
距離は開いているのにもかかわらず、まさに一瞬だった・・・

「くっ・・・まずい・・・」

一夏は起き上がると同時に、白式のエネルギー残量が少ないことに
気付く。

（どうする・・・。今のあいつに攻撃をかけたって、すぐ避けられ
てしまうの・・・。零落白夜は当たらない・・・）

そうして考えている間も、白雪はブレードを展開して、ビームの刃
を出した。

「くそ・・・。式型と同じ構造かよ・・・」

一夏も雪片を構えると、白雪が向かってきた。

「くっ・・・」

すると、両者の間に何かが割り込んできた。

『くっ・・・』

白雪はとつさに後ろに下がった。

「あれは・・・紅椿の背面ユニット？」

そしてそれは地面から抜き出ると、そのまま持ち主の元に向かう。

「一夏！」

箒は既に絢爛舞踏を発動した状態で来ていた。その後ろから紅桜が向かってきていた。

「くっ・・・お前は引っ込んでろ！」

そして箒は雨月を振るい、エネルギー刃を射出して紅桜を牽制する。

「受け取れ、一夏！」

そして紅椿の手が白式の手に触れると、紅椿のエネルギーが白式に入っていく。

「すまない、箒！」

「礼には及ばん」

そして箒はそのまま紅桜に向かって行った。

「よしっ！」

そして一夏は雪羅の荷電粒子砲で砲撃する。

『エネルギーが回復したところで、変わりはない！』

白雪はブレードを振るい、粒子ビームを切り払っていく。

(・・・やるしかないな・・・捨て身の戦法と行くか・・・)

と、一夏は雪片を一振りすると、白雪に向かっていく。

「どりゃあああっ！」

そして一夏は白雪に次々と雪片を振るっていく。

しかし白雪はそれらを全て回避していく。

『何度やっても・・・同じ事だ』

そして白雪はブレードのビームの刃で一夏を切りつけた。

「ぐう・・・まだまだだ！」

一夏はウイングスラスターを噴射させてそのまま白雪を押し切った。

『くっ・・・』

白雪は煩わしく思い、左足で一夏を蹴り上げた。

「ぐはっ・・・。くっ・・・まだだ！」

そして一夏はそのまま雪片を振るい、白雪を切りつけた。

『くっ・・・我に攻撃を・・・』

白雪はそのまま後ろに下がると、背中の荷電粒子砲を展開して一夏

に向ける。

『食らうがいい!』

そして白雪は粒子ビームを一夏に向け放った。

「くっ・・・」

一夏は雪片を前に出して、粒子ビームを受けた。

『馬鹿め・・・受け続けたらどうなるか分かっているのか!』

と、白雪は粒子ビームをそのまま照射した。

「ぐう・・・」

一夏は耐えた・・・

『終わりだ!』

と、出力を上げた瞬間・・・

「うおおおおお!!」

そして一夏は白雪の粒子ビームを使い、『零落白夜』を発動させた。
その直後一夏にオーラが纏う。

『な、なにっ!?!』

「肉を切り裂き・・・骨を・・・絶つ!」

そして一夏は粒子ビームを受けながらもウイングスラスターを全開にして『瞬間加速』を掛けた。

「うおおおおお!!」

そして一夏は雪片を前に出して粒子ビームを切り裂いていった。

『こ、こんな馬鹿な・!?!』

白雪は動揺して動きが一瞬遅れた。

「どりゃああっ!!」

そして一夏は白雪に渾身の一撃を叩きつけた。

『ぐはっ!?!』

白雪はそのまま後ろに飛ばされ、地面に叩きつけられた。

「く、くう・・・」

一夏は地面に着地するも、身体はふらついていた。

なにせ粒子ビームを受け続けていたのだ。白式の装甲から煙が上が
り、少しひびが入っていた。

一夏を支えるようにして箒が寄り添う。

同じくして、ゆっくりと起き上がる白雪を紅桜が支えた。

白雪の胸部には切られた後があり、中に機械の部品が見えていた。

「無人機・・・だったのか・・・」

『・・・・・・・・』

「まだ続けると言うのか」

箒は敵意を白雪と紅桜に向ける。

『さすがだ……。やはり・・・お前が我の器に・・・相応しい』

「器・・・だと？」

「一体何のことだ？」

『器・・・すなわちはパートナーのことだ・・・』

「パートナー？」

『そう……。だが・・・まだ『その時』ではない・・・』

「その時だと？」

『そう……。それまでに、更に力をつけるがいい』

と、白雪は紅桜に支えられて空に舞い上がる。

「待て……。どこに行くんだ？」

『我らは更に力をつける……。そして、また会おう……。織斑一夏……。』

『……。どこかで会おう……。篠ノ之箒……。』

そうして白雪と紅桜は遮断シールドを破壊せず、すり抜けるようにしてそのまま消えていった……

「あいつら……。どうやって遮断シールドを……。」

「……。分かん……。だが、破壊されていなかったのもこれで分かった……」

そうして、しばらくして教師部隊が到着した……

その頃……

「……。白雪と紅桜も活動を開始したか……」

ロイははぐれISの動きを掴んでいた。

「しかし・・・まだ活動を開始していないやつもいるか・・・」

今まで活動しているのは七体で、後三機いるのだが、それらはいまだに活動していない。

「・・・・・・・・・・」

ロイが考えていると・・・

『ちょお♪』

と、いきなり天才科学者こと篠ノ之束がモニターに現れた。

「束か・・・」

『むう・・・最近驚かなくなってしまったな』

「そりゃそうだろ・・・。一体何百回やったと思っている」

『てへっ・・・。そうだった』

「・・・で、一体何の用だ？」

『うん？まあちょっとばかり話があるかなあって思ってる』

「・・・それだけか？」

『話すのに理由って要るかな？』

「・・・・・・・・」

『まあそれは置いて、ロイは最近大変だね・・・』

「そうだな・・・最近じゃやつらから攻撃を受けているよ」

『そっか・・・まあ大変なら私から増援でも出してあげようか?』

「別に必要ない。人では足りている・・・無人ISと言う名のな」

『ふーん。まあいいか・・・それにしても最近じゃ色々問題があるねえ』

「そうだな・・・最近だけでも不可解な事件が世界各地で起きている」

『そうだねえ・・・それと、最近ロイが作ったISが少し問題になっているよ』

「なに?」

『うーん・・・名前は確か・・・『ゲシュペンストMK-?』と『ゲシュペンストMK-?』だったかな?』

「なに?・・・どういことだ!?」

『まあまあ落ち着いてよ。その二体が世界各地で度々目撃されているって話だよ』

「・・・お前なあ・・・。だが、何であの二機が・・・」

『まあ今のところ事情者は出ていないけど、何だか特定の施設を破壊したり、何かしているらしいよ』

「・・・・・・・・・・」

『まあ、これは教えたからね』

「・・・お前・・・何をしようとしている・・・」

『んー？何もないよ』

「・・・まあいい。とりあえず情報提供どうも」

『どういたしまして・・・。じゃあねえ』

と、モニターが消えて通信が終わった。

「・・・やれやれ・・・」

と、ロイはとあるデータを開くためにキーボードを叩く。

「・・・？おかしな」

と。ロイはとあることに気付く。

「確かこの辺りに保存していたはず・・・」

ロイは隅々まで探したものの、データが見つからない・・・

「・・・まさか・・・」

と、ロイはとあることに気付くと、そこを見た。

「・・・・・・・・・・」

「ハッハッハッハ・・・データは貰っていくよロイ・・・。これは前のお返し☆

篠ノ之束

」

「・・・だああああ！！束のやつめえっ！」

ロイは叫んだ・・・

「まだあれに根を持っていたのかよ・・・」

と、ロイはガクツとうなだれた。

「くそ・・・いつの間に・・・って、さっきの会話の時に・・・」

ロイはスリも驚く手早さに呆れた・・・

「しかも・・・俺が最近設計した新型の無人ISの設計図を・・・しかもコピーじゃなくて丸ごとって・・・」

ロイは深くため息をついた・・・

「おお！凄いいい！・・・さすがロイが設計したISだねえ」

と、どこにあるか分からない研究所で東は取ったばかりの設計図を見ている。

設計図にはこれまでに見たことのないISが載っており、その性能は表記されているデータだけでもかなり高い。

コードネームは・・・『e^{イフシロン}p s i l o n』と記されていた。

「第三世代型でも第四世代型のISと同等の性能かぁ・・・でも・・・」

と、東はいたずらの笑みを浮かべる。

「この私の手に掛ければこれも第四世代型のISに・・・。そうすれば最強だね」

と、東は設計図の一部をいじった。

「よし・・・。今から製作に取り掛かろう！」

と、東はモニターのキーボードを叩き始めた。

すると、東の後ろから一人の少女が来た。

背は低く、外見は十二歳ほどで、流れるように伸ばした銀髪は太く

三つ編みにされていた

「束さま」

「やあくーちゃん。今日は何を作ったの？」

「・・・カレーです」

と、くーちゃんと呼ばれる少女はおそろおそろトレーを束の前に差し出す。

しかし、見た目は・・・少し不気味で、何より通常より余計にドロドロとしている。

「うーん。うーまーい」

しかし、束はそれを平気で食べて、おいしそうに食べる

「うそです。まずいに決まっています」

と、少女はあっさりと否定する。

少女はこの研究所に入ってから、その目を閉じているが、とある特異性を持つてすれば、目を閉じていても問題はない。

「・・・では、失礼します」

と、少女は振り返るとそのまま歩いていった。

「・・・まあでも、色々とあれだね」

と、束はモニターにとあるところを映した。

「・・・でも、どうしてこれを改修しているんだろう・・・」

そこには、とある武器に改修を施していた。

大剣のそれは白銀の刀身を持ち、つばには一対の白い翼が施されていた。今は最新技術を投入して改修が施されていた。

「・・・これを持つべきISはもうこの世にいないのにねえ・・・」

その武器は、とあるISのために用意したものである。

「まあでも、いつか戻ってくるかもしれないからねえ・・・『白き皇帝』がね」

白き皇帝・・・正式名称『カイザー』・・・かつてロイが作り出した究極のISとなるはずだったIS・・・。しかしそれは暴走を起こして消滅した・・・今改修を施しているのはその白き皇帝のため。の剣といえる。

「さあてと、これの改修作業と新型の開発をしますか・・・。忙しくなるぞお・・・」

と、束は作業に入った・・・

S t o r y 5 7 白と紅（後書き）

今のところ一つしか意見がありませんが、もしこのまま意見が無いのなら新作の方面で行こうと思っています。

Story58 裏での展開

それから数日が経ったある日……

「ふう……ようやく完成したな」

「……うん」

レイと簪は完成したISを見た。

そこには、エクストラ打鉄式式とEXを掛け合わせて出来上がったISがあった。

あれからマリの訓練に付き合いながらも、簪のISを組み上げていき、ようやく完成したのだ。

「基本EXをベースエクストラにしているが、式式のパーツを一部流用して、背中の武装は式式のミサイルと荷電粒子砲を掛け合わせて作った複合武装を搭載している。エクストラまあこいつの名前は……『打鉄・EX』エクストラならいいけど……まあEXのほうがいいな」

「……それでも……いいよ」

ちなみに言うと、ほとんどの作業はレイが行っており、簪はそのサ

ポートを行っていた。しかしレイ一人でここまでやるのだから驚愕している。

「・・・今からでも・・・動かせるの？」

「ん？・・・まあ動かせるが・・・まだ調整が完全じゃないけどな」

「・・・でも・・・ある程度なら動かせるでしょ？」

「・・・そりゃ動くが、調整を行ってからのほうが・・・」

「お願い・・・」

「・・・・・・」

レイはしばらく考えて・・・

「・・・あんまり無理はしないでくれよ」

「うん」

そして簪はEXエクストラの装着作業に入った・・・

そしてレイと簪は飛行テストに向いている第二アリーナに来た。

「ファントム・・・展開」

エクストラ
「EX・・・」

そしてレイと簪はISを展開した。

展開すれば、^{エクストラ}EXの全貌が明らかになった。

基本的に^{エクストラ}EXをベースにしているのでほとんど^{エクストラ}EXのパーツで構成されているが、脚部の膝と両肩の浮遊ユニット先端に式式のパーツが使われ、背中のユニットには式式のミサイルユニットと荷電粒子砲を組み合わせた複合武装を搭載していた。

カラーリングはグレー系がメインで構成されており、頭のデバイスには額に短いV型アンテナとその下にバイザーが装着されていた。

「とりあえず、簡単に動いてみてくれ」

「うん」

そして簪はその辺りを歩いてみたり、手足を動かしてみたりと、簡単な動きをして見せた。

「どうだ？」

「・・・式式より・・・なんだか身体に馴染む・・・だから、動かしやすい」

「そうか。操縦系統に関して問題はない、と。じゃあ軽く飛んでみるか」

「う、うん」

そして二人は同時に上空に飛び上がり、飛行した。

（・・・P I Cの調子が悪い？・・・もう少し調整しないと・・・）

簪は投影型のキーボードでP I Cを調整した。

その簪の後ろについていくレイはE Xエクストラの動きを見ていた。

（とりあえず動きは大丈夫のようだな・・・心配している箇所も今のところないようだな）

そしてレイはしばらくE Xエクストラの動きを見た・・・

「・・・ん？」

レイは異変に気付いた。

E Xの背面スラスターの様子がおかしかった。

毎秒二秒の間でスラスターが途切れていた。

「ま、まさか!？」

レイが気づいた瞬間、スラスターが爆発した。

「え、え!？」

簪は何が起きたのか理解ができず、そのままEXは操作不能になつて墜落していった。

「簪いいいい!!」

レイはスラスターを全開に噴射すると、そのまま『瞬間加速』を掛けて簪の前に回りこみ、簪を受け止めるものも、そのままアリーナの壁に激突した。

「ぐっ……うう……」

壁に激突して息が一瞬つまり、衝撃で痛みが背中に走っていた。

「れ、レイ……」

簪は少し怯えていた。

「だ、大丈夫か……簪……?」

「う、うん……」

「そうか……よかった……」

レイはゆっくりと起き上がるついでに簪も起き上げた。

『その生徒大丈夫なの!?!こっちじゃアリーナの壁が損傷した警報が鳴っているけど!?!』

と、あわてた様子で教師が監視塔からアナウンスで言ってきた。

「だ、大丈夫です！ただの事故です・・・こちらは一年一組のレイ・ラングレンです」

「・・・い、一年四組の・・・更識簪です」

『じ、事故！？け、怪我とかないよね！？』

「は、はい！」

『よかった・・・あ、後でこっちに来てね』

「分かりました」

そうしてレイと簪はISを解除して監視塔に向かった・・・

そして事情聴取をしばらく受けてから、二人は第二格納庫に来了た。

二人はEX^{エクストラ}の修理調整を行っていた。

「ご、ゴメン・・・レイ・・・私のせいで・・・」

「いや・・・俺が悪いんだ・・・俺がもっと注意深く気をつけていればこんなことには・・・」

「・・・私がいけないの・・・まだ調整が終えていないのに・・・無理に言ったから」

「簪・・・」

「・・・・・・」

「・・・とりあえず、パーツ交換をやった後に、スラスターの調整を行うよ。それと再度精密検査をやっておくよ」

「・・・う、うん」

「これで何とか完全な状態になったら・・・色々やることが多いな」

「・・・・・・」

そして二人はEX^{エクストラ}の調整に没頭した・・・

そうしてその夜・・・

「はあ．．．疲れたな．．今回は．．．」

レイは自室で腕を回すと、ベッドに腰掛けた。

（とりあえず調整は何とか安定したな．．後は．．）

レイは右手に持っていた端末に映るEXのデータを見る。
エクストラ

（色々とプロテクトが掛かっているな．．．まるで俺のISと同じだな）

そうして端末をベッドに置くと、ベッドから立ち上がって冷蔵庫から水が入ったペットボトルを取り出した。

「色々と忙しくなるな．．．マリの訓練や簪のISのことなど．．
・何だかんだで俺のところに色々と来るんだな．．．」

そしてペットボトルのふたを開けて水を飲む。

コンコン．．．

「ん？」

ドアのノックが聞こえて、レイはペットボトルを机に置いて、ドアを開けた．．．

「レイ」

そこにはシャルロットがいた。

「シャル？どうしたんだ？」

「・・・少し・・・いいかな？」

「まあ・・・いいけど」

そうしてレイはシャルロットを部屋に入れた。

「一体・・・何の用だ？」

レイはお茶をコップに入れて、ベッドに腰掛けたシャルロットに渡した。

「・・・その・・・タッグマッチのことなんだけど・・・」

「・・・」

「他の人と組むって言ったけど・・・どうしてなの？」

「・・・俺はシャルと組みたかったけど・・・楯無さんからの指名があつたからな」

「楯無さんが？」

「ああ。組む相手は楯無さんの妹なんだ」

「・・・妹が・・・いたんだ」

「俺も・・・いるとは思っていなかったけど・・・」

「・・・・・・・・・・」

すると、シャルロットの表情が少し険しくなった。

「最近・・・レイ・・・変だよ」

「へ、変？・・・俺が？」

「うん。楯無さんの助手になってから、ずっと・・・」

「・・・・・・・・・・」

「生徒会長助手は生徒会長の命令は絶対って言っているけど・・・だからといって・・・そのままでもいいの？」

「・・・そ、それは・・・・・・・・。でも、どうしてそれを？」

「・・・なんとなく」

「な、なんとなくって・・・」

「・・・・・・・・・・」

そしてシャルロットは何も言わずにベッドから立ち上がると、コップを机に置いてレイの前に立つ。

「じゃ、シャル？」

するとシャルロットはレイに抱きつく。

「!？」

「・・・レイ自身は・・・どうなの？」

「・・・本心は・・・命令に絶対に従うって言うのは少し何があるな・・・。でも、助手である以上・・・聞かないといけない」

「・・・そう。でも、絶対に聞くてわけじゃないんだね」

「ああ。そこまで忠実ってわけじゃない・・・。個人の考えはある」

「それを聞いて安心した・・・」

「どういうことだ？」

「なんだかね・・・レイが少し遠ざかっていくような気がしたの・・・だから・・・少し不安になっていたの・・・」

「・・・シャル」

「レイ」

二人はしばらく見つめ合うと、ゆっくりと顔を近づけた。

そして二人の唇が触れようとした瞬間・・・

コンコン・・・

「「!」?」

レイとシャルロットはドアのノックにびっくりして、とっさに離れた。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

シャルロットは残念そうな顔をして、レイは気まずい感じで頭を掻くど、ドアの方へ行き、扉を開けた。

「少しよろしいでしょうか・・・レイ」

そこにはラウラの姿があった。

「ラウラか・・・」

「どうしたのですか? なんだか不自然に汗が出ているように見えませんが?」

レイの額には若干汗が出ていた。

「そ、そうか?」

「はい・・・」

そしてラウラはレイの横から部屋の中を見た。

「や、やあ・・・ラウラ」

シャルロットはラウラに少し不自然に手を振るう。

「シャルロット？なぜレイの部屋におるのだ？」

「そりやあ・・・話をしていたただけだよ？・・・ねえレイ？」

「あ、ああ。そうだな」

と、明らかに動揺している様子で話していた。

「・・・？そうですか・・・」

ラウラは何か引つかかっているのか少し怪訝そうな表情をする。

「まあ、とりあえずラウラも一緒に話すか？」

「はい。そうします」

・
そうしてラウラはレイに部屋に入って、それから色々話した・・・

その頃・・・

「・・・・・・・・・・」

ロイは研究所のとあるフロアにいた。

目の前には何かの機体と思われる機体が寝かされていた。

それはボロボロの状態で、各所には何かを通った後のようなものがあり、更に破損した箇所になぜか銀色のメダルが出ていた。形状としては角ばった箇所が多く、頭にはクワガタの大あごのような形状の角があり、カラーリングはグリーンになっているものも、パーツの一部の塗装が剥げて下の白いカラーが露出していた。

「・・・・・・・・まさか・・・あの世界のやつがこの世界に来ていたとはな・・・」

ロイはそのISに触れる。

「・・・・・・・・しかしこんな形で帰ってくるとはな・・・少し悲しいな」

そのISはロイが開発して、その後自らの意思を持って逃走したはぐれISの一つ・・・・・・・・『スタッグビートル』と呼ばれるISである。

（もしメダルが他のはぐれISに寄生していたら・・・・・・・・まずいな）

そうしてロイは台の上に転げていた銀色のメダルを一つ手に取る。

「まさか・・・・・・・・ここで役に立つとはな・・・」

そしてロイは部屋の端に行き、そこに設置された台の上にある物を手に取った。

それは一見すればベルトのように見えるが、中央に何かあった。

「・・・黒騎士MKー？」

そしてロイは黒騎士MKー？を展開して、そのベルトを腰より少し上のところに装着した。

「・・・・・・・・『バースシステム』・・・発動」

そして銀色のメダルをベルトの中央にあるものに入れた。

すると、アーマー各所に別のアーマーが展開されて、装着して、赤いマントが収納された。

「さて・・・行くか」

そしてロイは一旦黒騎士MKー？を収納すると、研究室から出た・・・

Story58 裏での展開（後書き）

新作の方は物語の構成が大体出来上がったのでそろそろ書き始めようと思っています。それと、もう決まっているのですが、主人公機をどれにしようかと色々と考えて、いくつか候補がありました。

ちなみにその候補は・・・

? ヒュツケバインEX

? R-1

? アルトアイゼン

? ゲシュペンスト

・・・です。この中に主人公機が一体あります。

それと、参考になる意見を出してくれたらこちらとしては助かります。

Story59 決戦前夜

そうして時間が過ぎて、タッグマッチ前日になった……

「……おい、簪……。今日はもういいだろう」

と、レイが呼ぶと、簪はレイの元に向かう。

「……どうでしょうか……？」

「……うーん。調整は完璧になって動きも良くなったけど……システムはどうなんだ？」

「……まだ……全然出ていません」

「そうか……。明日だっていうのにまだ開放されていないか……。こいつは戦闘中に解放するしかないか」

と、レイは小さくため息を吐く。

「でも……。それでも出なかったら……」

「心配はない……。その時は俺が何とかするよ。その際には簪には後方援護を行ってくれ」

「う、うん……」

「まあまだ残るのなら、残っていいが……。俺は他にやることがあるからな」

「……。それって……レイの弟子のこと？」

「ああ。あいつ誰と組むのか分かっていないんだが、とりあえず前日だから最終確認として見てくるよ」

と、レイはアリーナから出た……

そうして時間は過ぎて午後の八時半……

「はあ・・・いよいよ明日か・・・」

レイは寝間着姿になってベッドに腰掛けた。

「マリも最初と比べると発達したな・・・。それと体力もな」

あれから筋トレを入れていたのでマリは体力がついていた・・・が、それでも常人より少し低い・・・

「・・・それにしても・・・EXのシステムはなんでまだ発動しないんだ？もう何か一つぐらい出てもいいはずだがな・・・」

エクストラ

調整を終えてそれからテストを行ってきたのだが、これといった変化はない。

「とりあえず・・・明日は簪のフォローを入れて戦うか」

と、レイはベッドから立ち上がったときだった・・・

コンコン・・・

「ん？」

するとドアのノックが聞こえて、レイはドアのほうに行って扉を開けた。

「ちやお♪」

と、そこには楯無さんがいた。

「楯無さんですか……。何のようですか？」

「そりゃあ、明日がいよいよ専用機持ちのタッグマッチだからよ。だから、色々と話があるの」

「話ですか……。まあ立ち話もあれですし、入ってください」

と、レイは楯無さんを部屋に招き入れた……

「で、一体何の話なんですか？」

と、レイはお茶を入れて楯無さんに渡した。

「ところで……簪ちゃんはどうかなの？」

「簪ですか？……まあ、操縦技術はそこそこありますね。それにISに関する知識も結構ありますね」

「そう……。ところで私は誰と組んだと思う？」

「……。誰ですかね……。一夏は箒と組んだって言ったし……。セシリアは鈴と組んで、シャルとラウラが組んで、神夜とフィオナが組んで……。となると、誰ですか？」

「フフフ……。あなたもよく知っている人物よ」

「……………」

「・・・あなたの弟子よ」

「・・・なんですと？まさか・・・マリと組んだのですか？」

「ええ。まあマリちゃんには口止めしておいたのよ。あつ、組んだのは一週間前ね」

「そんな時から・・・。以外なやつと・・・。」

「でも、レイ君もちょうどよかったでしょ？」

「・・・何のことでしょうか」

「とぼけなくてもいいのよ。弟子の力を極めるためにあえて敵にするって思っていたのでしょうか？」

「・・・本当に・・・あなたには隠し事はできませんね・・・。」

と、レイはこんなことを考えていた。

マリの操縦技術はかなり進歩した。しかしその最後の一仕上げには、師匠であるレイを倒すことで、一人前にしようとレイは考えていた・・・。

「しかし・・・レイ君も優しいのね・・・。弟子のためにあえて敵対して成長を見届ける・・・。」

「・・・そうですね・・・。あいつの才能はまだ開花していませんが、それを開かせるためですよ」

「そう……。いい師匠ね」

「……。そうですね……。まああなたもですね……」

「なにが？」

「俺に簪と組んで欲しかったのは……。楯無さんと簪の仲を浴するため、そしてマリを俺の弟子にするようにしたのは……。楯無さん……。そうですね」

「なんのことかしらね」

「とぼけなくてもいいのですよ？マリと俺が師弟関係になれば、それなりの理由はできる。そして楯無さんと組むことで俺と簪……。つまりは戦うべき相手と会うことになる……」

「……。ふつ……。さすがね……。私の助手なだけはあるわね。いつ気付いたの？」

「確信を得たのは三日前です。あなたとマリが話しているところを目撃しましたからね。それまでは少し疑っていましたが……」

「あら……。あれを見られていたなんて……。私も無用心になってしまったわね」

「そうですね……」

「その通りよ……。そもそもマリちゃんのお姉さんからお願いがあったのよ」

「マリの姉さんが？」

「ええ。マリちゃんのお姉さん・・・アリスちゃんとは知り合いなのよ・・・。それで私はマリちゃんのコーチをするはずだったけど、その時は忙しかったから教える暇がなかったのよね」

「それで俺のところに言って弟子にしてもらうように仕向けた・・・と言うことですか」

「そう・・・。でもレイ君でもそれを了承するかは賭けだったけどね」

「賭けですか・・・。その賭けに負けたらどうする気だったのですか？」

「そこはそのときに考えるようにしていたわ」

「はあ・・・行き当たりばったりですね」

「そうわね・・・」

「本当に・・・あなたと言う人は・・・抜け目がありませんね」

「そう・・・」

すると、楯無さんはもじもじし始めた。

「・・・？どうしたのですか？」

「・・・な、何でもないわ・・・」

と、なぜか歯切れが悪い・・・

「じゃ、じゃあ・・・これで私は失礼するわね」

と、楯無さんは立ち上がると、部屋から出ろうとした。

「・・・明日・・・相手になったときは・・・全力で行きます」

「・・・それでいいわ・・・。お互い手加減抜きで・・・正々堂々勝負
しましょう」

そうして楯無さんは部屋を出て行った・・・

「・・・何だか・・・最近楯無さんの様子がおかしいような・・・
まあいっか」

と、振り向いた瞬間・・・

「あっ。忘れるところだった」

と、いきなり楯無さんがドアを開けてきた。

「うわっ!?!?・・・な、なんですか!?!?」

レイはまさかのことに驚いて振り向いた。

「これを渡すように言われたのよね・・・」

と、楯無さんはセーターと制服の間から一通の封筒を取り出す。

「これは？」

「ある人からの贈り物よ……。まあ中身は聞いていないけど、あなたには今後必要になるものでしょうね」

と、楯無さんはレイに封筒を渡す。

中には何か入っていた。

「それじゃあね」

と、楯無さんは手を振って、部屋を出た……

「贈り物ね……」

レイは机のイスに座ると、封筒を見る。

「とりあえず……中身を見るか」

と、レイは封筒を開けて、まず中に入っている何かを取り出した。

「……なんだこれ？」

それは一見すればUSBメモリーに見えた。しかしUSBメモリーにしては一回り大きく、接続端子が若干異なり、全体黒であり、表面には大きく『J』と描

かれて、接続端子より少し上に小さなスイッチみたいなのがあった。

「USBメモリー・・・じゃない？」

レイはそれを一旦机に置くと、封筒に入っている手紙を取り出した。

『レイ・・・これは恐らく今後大いに役に立つものだ・・・。大事に保管してくれ。それとISに封筒と一緒に入っているSDメモリーカードを挿入したまえ。そうすれば中に入っているプログラムでIS自身が変化してそのメモリーに対応するようになる。』

科

学者『R』

』

「・・・また・・・科学者『R』か・・・」

そしてレイは封筒を逆さまにしてSDメモリーカードを取り出す。

「これか・・・でも一体何が起きるんだ？」

どうも信憑性があったが、科学者『R』には以前にバージョンアッププログラムを受け取って、ISの性能アップができた・・・。

「・・・やってみるか」

そしてレイはSDメモリーカードを手にとって待機状態のISに近づけると、IS自身がカードの挿入口を開けた。

「IS自身は分かっているのか？」

レイは疑問に思いながらもカードを差し込んだ。

すると表面が閉じて、そのまま電子音がしばらく鳴って、ISに光の線が走った。

「……これで終わりなのか？」

そしてしばらくすると、待機状態のISの表面が変化して、何かの差込口ができた。

「……これか？」

レイはメモリーを手にとって接続端子とISの接続部を見比べると、差し込めるようだ。

「……でも、今はいいか……」

そしてレイはメモリーを机の上にある小物入れに入れた。

「……こうか？」

レイはISを触っていると、変化した箇所が再び元の形状になった。

「……しかし……一体何のメモリーなんだろう……。でも試している暇はないか」

・
レイは大きく背伸びをすると、そのままベッドに寝転がった……

その頃……

「……専用機持ちによるタッグマッチか……」

ロイはモニターの端に映るタッグマッチを見ていた。

（でもそれが何も起きないことは分からんな……。今までの流れじや恐らく何か起こりそうな予感だな……）

と、ロイは考えながらも、とある物の制作を行っていた。

それはISの設計図であった。

形状は今までのISと比べると結構違う点が多く、何より特異性が見て取れる。

コードネームは……『ペルセウスPERUSEUS』と記されていた。

（全く……。東にイプシロンの設計図を盗られるとはな……。まあでもこれの設計に集中できるんだがな……）

そうしてロイは途中経過を保存して、背伸びした。

「さて・・・フリーダにはここの守備を任せて・・・俺はIS学園に行くか。タッグマッチを見るために・・・」

と、ロイは研究室から出た・・・

Story59 決戦前夜（後書き）

ダンボール戦機の新作の発売まであと少しですね……。次回から専用機持ちによるタッグマッチですが、波乱の予感があります……。さて、新作の方は近々投稿する予定です……。

Story 60 襲撃

そしてタッグマッチ当日……

「うわぁ……結構人がいるなあ」

レイはアリーナに向かう途中で観客の多さに少し驚いていた。

「さてと……対戦表を見に行くか……」

対戦相手は当日にならないと分からないようになっており、レイも今日の相手は聞かされていない。

「……ん？」

歩いている途中でレイは何かを見つける。

「……フィオナ？」

レイは木の影で誰かに連絡を取っていたフィオナの姿を見つける。

「……そう……。じゃぁ予定通りね」

と、フィオナは電話を切ってポケットに入れた。

「誰と電話していたんだ？」

「！」

フィオナはいきなり声を掛けられて珍しく驚いていた。

「・・・れ、レイ・・・？・・・な、なんでもないわ・・・。研究所の人よ」

「そうか？・・・だったら、なんで予定通りとか言っていたんだ？」

「・・・そ、それは・・・予定表のことよ」

「・・・予定表ねえ・・・。でもなんだかおどおどしているように見えるが？」

「な、なんでもないわよ」

と、フィオナは顔を隠すように顔を下げてその場を去った・・・

「・・・フィオナがあんなにするなんて・・・。昔を思い出すな」

レイはそうしてアリーナに向かう・・・

そうしてアリーナ外壁の投影型ディスプレイに対戦表が表示された。

「・・・いきなり本命か」

第一回戦目と言うのが・・・

「レイ・ラングレン 更識簪VSマリ・イラストラス 更識楯無」

「かなり重いな・・・まだEXは完全じゃない・・・。なるべく簪のサポートを行いたいな・・・マリの相手をしないとイケない・・・かなり厳しいな」

レイは顎に手を当てて考える。

（後はおなじみの面々か・・・）

そうしてしばらく考えた・・・

同じ頃・・・

「本当に賑やかだな」

ロイはサングラスの位置を直して学園内を歩いていた。

「何も起こらなければいいんだが・・・恐らく何か起こりそうだな」

と、ロイは人気がないところまで来ると振り向かず後ろにいる人物に声を掛けた。

「ああ・・・。私もそう思うよ」

そこには千冬の姿があった。

「久しぶりだな・・・千冬」

「そうだな・・・ロイ」

ロイは振り向いて千冬を見る。

「それにしても、自分の子供が心配なら直接会えばいいだろ」

「あのな・・・簡単に会えない理由があるって知っているだろ」

「ふっ・・・そうだったな」

「・・・相変わらずだな」

「お前もな・・・」

「・・・それにしても、俺が渡したあれはまだ起動できていないのか？」

「・・・ああ・・・。そうだな」

と、千冬は右手にある白いブレスレットをロイに見せる。

「しかし・・・私には『あれ』がある・・・。別に必要なわけではない」

「そうか・・・。まだ『あれ』は使えないんだろ？」

「・・・ああ・・・その通りだ」

「なら、それはいつか役に立つさ」

「・・・そうだな」

「・・・それにしても、今回のタッグマッチ・・・なにかありそうだな」

「ああ・・・これまでのことを考えれば、何か起こりそうだな」

「そうだな・・・クラス対抗戦の襲撃・・・臨海学校での福音事件・・・学園祭での亡国機業の内部襲撃・・・そしてキャノンボール・ファストでの亡国機業の襲撃・・・それと――」

「・・・イノベーターの襲撃、か」

「ああ・・・」

「・・・亡国機業とやつらが絡んでいる話は本当か？」

「ああ・・・恐らくな」

「そうか・・・」

「・・・俺はとりあえずやつらの動きに警戒しておく・・・。まあそれはもう少しすれば目覚めるはずだ・・・」

「・・・わかった」

そうしてロイはどこかに行った……

「……どうするかな」

レイはアリーナに向かいながら考えていた。

（結構ハードルが厳しい……）

と考えていると……

「レイ・ラングレン君かね？」

「え？」

後ろから呼ばれてレイは振り向くと、ビクツとした。

驚くのも無理はない……その男性の顔半分が機械になっていたからだ。

「驚いたかね？」

「す、すみません……。しかし顔半分がサイボーグだなんて……」

「いや、左半身すべてがサイボーグさ」

「そ、そうなんですか・・・」

レイはぞっとした。

「まあ、とあることでこうなってしまったのさ」

「・・・ところで、あなたは？」

「・・・檜山漣だ。ISの研究員をしている」

「そうなんですか・・・。しかしなぜ自分の名前を・・・？」

「なぜかって？・・・ふっ、ISを使える男子を知らないはずがないだろ？」

「そりゃ・・・そうですね」

と、レイは苦笑いしていると・・・

ドオオオオオオン・・・！

「！？」

するとアリーナの方から爆発音が響いてきた。

「アリーナのほうから？・・・！まずい・・・簪が先に行っているんだっ！」

レイはとっさにアリーナのピットに走っていく……

「……………」

すると、檜山漣ことレックスは左顔面のカメラアイでレイを見る。

「……なるほどな……結構成長しているな」

レックスはカメラのスクリーンでレイの体内にある『あるもの』を見た。

「……この戦いで……見せてもらおうか」

そうしてレックスはコートを翻してその場を去った……

「く、くそっ！」

鈴は双天牙月を振り下ろすものも、それは右腕のブレードで受け止めた。

そしてそのものは強引に鈴を弾き飛ばした。

そのものは、右腕に一体化した大型のブレードを持ち、左腕には大型の熱線口が搭載されていた。姿こそ以前現れた『ゴーレム?』に

酷似しているものも、巨人と言う感じであったゴーレム？だったが、目の前の『ゴーレム？』は女神と言う感じであり、『全身装甲』を備え、不規則に配置されていたカメラアイもバイザー型に変わっていた。

「鈴さん！横にずれて下さい！」

と、鈴が横にずれると、後方で待機していたセシリアがピアーズ・ランチャーを放ち、エネルギー弾を『偏光制御射撃』によってエネルギー弾を曲げるとゴーレム？の左側に向かっていく。

しかしゴーレム？は左側を向くと、左腕を前に出して、エネルギーシールドを展開してエネルギー弾を防ぐ。

「くっ……。これではダメージは……。それにここではヴァイスリッターの機動力が生かせない……」

ここはアリーナのピット内……。セシリアの『ヴァイスリッター・ティアーズ』が得意とする高機動戦闘はできない。

「ならば……。鈴さん！」

「なに？」

「敵機を何とか止めていただけませんか」

「なっ……。簡単に言ってんじゃないよ！ただでさえあいつのパワーは物凄いつて言うのに！」

「お願いします」

「・・・くっ・・・。ああもう！分かったわよ！何とかしてやるわよ！」

そして鈴は双天牙月を回してゴーレム？に向かう。

『—————』

ゴーレム？は右腕のブレードを振るうと、鈴も同時に双天牙月を振るった。

「くっ！」

衝突によって腕に衝撃が走る。

「このっ！」

そしてそのまま左足で右腕を蹴った。

「くらえっ！」

そしてすでに充填した衝撃砲を近距離でゴーレム？に向けて放つ。

衝撃を近距離で受けたゴーレム？はそのままピットの壁に叩きつけられた。

「ついでにおまけよ！」

と、鈴は双天牙月をゴーレム？に投擲して、ゴーレム？の動きを鈍らせた。

「セシリア！」

「待っていましたわ・・・この時を！」

「アタックファンクション！　ホークアイドライブ！」

そしてセシリアの前方にターゲットサイトのようなものが展開して、そこからピアーズ・ランチャーの下の銃口から強力なエネルギー弾が三発連続で発射された。

発射されたエネルギー弾はゴーレム？に全部直撃して大爆発を起こした。

「どうだ！？」

「これならば・・・」

しかし・・・

「なっ！？」

「くっ・・・」

煙が晴れるとゴーレム？が何事もなかったかのように立っていたが、装甲には若干濃いこげができていた。

「何て頑丈さなのですか・・・！？」

「そうわね・・・それに――――」

と、ゴーレム？は左腕を鈴たちに向けて充填し始めた……

「結構威力がありそうね……」

「くっ！……くそっ！」

ラウラは大型ショットガンを展開するとゴーレム？に向けてトリガーを引く。

しかしエネルギーシールドを展開したゴーレム？には効かず、そのまま左手でラウラを掴む。

「ぐっ……！」

ゴーレム？はそのままラウラを持ち上げると、手の力を入れていく。

「ラウラ！」

と、その横からシャルロットが入ってきて、右腕の『リボルビング・バンカー』をゴーレム？の左腕に叩きつけて三発叩き込んだ。

それによってゴーレム？はラウラを手放して横にずれていく。

「大丈夫？」

「あ、ああ……。なんとかな……。それより……」

ラウラはゴーレム？を見ると、バンカーが叩き込まれた箇所が大きく凹んでいた。

「何て固さなの……。バンカーでも貫けないなんて」

「……。前のやつよりかなり変わっている……。」

ラウラは以前にも同系列の機体と戦ったことがあるので、性能アップに少し驚かされていた。

その間にもゴーレム？が左腕の熱線を放ってきた。

「くっ！」

ラウラはキャノンに向けて砲撃して、シャルロットは左腕の五連チエーンガンに向けて放つ。

ゴーレム？は見かけによらない素早い動きで攻撃を避けていき、そして左腕の熱線を放った。

「くっ！」

「ラウラ！」

と、シャルロットはラウラを横から押し出して助けるが、熱線はアルトの右肩のコンテナに直撃する。

「うわぁあっ！」

それによってコンテナのハッチが破壊された。

「シャルロット！」

「だ、大丈夫……。ハッチが壊されただけだから」

「くっ……。許さんぞ……。貴様あつ！！」

と、ラウラは左目の眼帯をむしり取ると、そのまま『瞬間加速』を掛けてゴーレム？ノ目の前まで来るとA I Cをフルパワーで掛けた。それによってゴーレム？の動きがピタリと止まる。

「アタックファンクション！ヘッジホッグフレア！」

「碎け散れえっ！！」

ラウラは右肩のキャノンをゴーレム？に向けると、A I Cを掛けた状態で後ろに下がるとキャノンから赤い熱を帯びた弾丸を連続して発射した。

赤い弾丸はゴーレム？に次々と直撃すると炎を上げて爆発した。

「どうだ！」

しかし……

「っ！？」

すると炎の中からゴーレム？が飛び出てきて右腕のブレードを振り

上げた。

「ば、馬鹿な！？・・・そ、それに——」

そしてブレードの刃にピンク色のビームの刃が纏った。

「この武器は・・・！？」

そしてゴーレム？のブレードはラウラの身体を切り裂いた。

「ラウラ！！」

「く、くそっ！」

一夏は雪片式型を振るうが、ゴーレム？は右腕のブレードで防ぐ。

「一夏！」

その後ろから箒が飛び出し、ブレードを振るう。

するとゴーレム？は一夏を弾き返すとそのまま後ろに急後退した。

「ちっ！」

攻撃が外れて、箒はとっさに一夏の元に向かう。

「箒・・・このままここで戦ってもこっちが不利だ」

「どうするというのだ？」

「俺の攻撃で遮断シールドを破壊する・・・それでこいつを外に追い出す」

「その後に『絢爛舞踏』を発動すればいいのか？」

「ああ。その通りだ・・・行くぞ！」

「ああ！」

そして二人は同時に向かっていく・・・

「はああああ！！！」

神夜は斬冠刀を振り下ろすが、ゴーレム？は急後退して斬撃を避けて、左腕の熱線を発射する。

「くっ！」

神夜は斬冠刀を前に出して熱線を防ぐ。

その後ろからフィオナがリニアライフルを放ち、高速で発射された弾丸がゴーレム？に直撃する。

「ちっ・・・こんなの予定になかったはず・・・」

「予定？」

「・・・な、なんでもないわ」

フィオナはそのまま右肩のグレネードランチャーを展開してゴーレム？に向けた。

『――――』

すると、ゴーレム？がその場から飛び出してフィオナに向かっていく。

「なにっ!？」

フィオナはとっさに左腕のレーザーブレードを展開した。

しかしゴーレム？のパワーで勢いよく振られたブレードでフィオナは弾き飛ばされた。

「ぐはっ!？」

そしてピットの壁に叩きつけられ、痛みが全身に走る。

「・・・な、何かがおかしい・・・。・・・ま、まさか・・・!？」

フィオナはある違和感を感じていた。

その間にゴーレム？は左腕の熱線口をフィオナに向けるとそのまま発射した。

「っ！」

そしてそのまま熱線は動きが一瞬遅れたフィオナに直撃した。

「フィオナさん！」

神夜は後ろを向いているゴーレム？に向かっていく。

「このっ！」

神夜は斬冠刀を勢いよく振るうと、刃の反対側にある月輪を放つ。

しかし振り向きながらゴーレム？はブレードで月輪を破壊した。

「そ、そんな・・・」

神夜は啞然とするが、すぐに斬冠刀を構えた。

「くらないさいっ！」

と、楯無はランスに内蔵されている4門のガトリングを展開してゴーレム？に攻撃する。

しかしゴーレム？は左腕のシールドエネルギーを展開して防ぐ。

「マリちゃん！」

「分かりました！」

と、ブレードアローを構えたマリが楯無の合図と共にエネルギー矢を放ち、大きく迂回してゴーレム？の背面に直撃させた。

「このっ！」

そしてマリはブレードアローを収納すると背中に納めている鬼神斬破刀を抜き放ってゴーレム？に向かっていく。

「はあああ！」

そして斬破刀を振るうが、ゴーレム？は右腕のブレードで防ぐとそのまま強引に弾き飛ばした。

「くっ・・・！なんてパワーなの・・・」

体勢が崩れたマリに追撃を掛けようとしたゴーレム？に楯無はランスでブレードを受け止めると、左手に蛇腹剣を展開してゴーレム？に切りつけた。

「アタックフアンクション！ シャークブラスト！」

楯無はランスを回してランス刀身に水を纏わせると、そのままランスをゴーレム？に突き出してドリルのように回転する水をゴーレム？に撃ち出した。

それによってゴーレム？はピットの壁に叩きつけられた。

「大丈夫、マリちゃん？」

「は、はい……。大丈夫です」

マリは何とか立ち上がる。

「で、でも……。こんなやつをどうすれば……」

「そうね……。『奥の手』を使うしかないわね……」

「え？」

そして楯無はプライベートチャンネルでマリに作戦を伝えた。

しかし、あまりにも無謀で、危険な作戦だった……

「……。あ……。あ」

簪は何が起きているのか分からなかった……

そしてゆっくりと近づいてくるゴーレム？に逃げるように後ろに下がっていく……

「・・・っ!？」

そうしてピットの壁に背中がついてしまった。

簪は怯えながら前を見る。

ゆっくりと歩いてゴーレム?は簪に近付いてくる・・・

「い・・・いや・・・」

簪の目からは涙がこぼれる。

とても恐ろしい恐怖が迫ってきている・・・

(た、助けて・・・)

心の中でそう願う・・・そうすればヒーローが来てくれる・・・。

だが、現実アニメのようにはいかない・・・

『————』

ゴーレム?は簪のISを見つけると、さらに近付いてきた。

「・・・い・・・いや・・・た、助けて・・・————」

震えながらも、その名を呼ぶ・・・

「助け・・・て・・・れ————」

そして……

「助けて……レイ！」

簪は大声でレイを呼んだ。

すると、ピットの壁にひびが入りだし、そして壁が砕け散ると、そこから大きな拳が飛んできて、ゴーレム？を弾き飛ばした。

「大丈夫か、簪！」

そしてそれに続いてファントムを身に纏ったレイが入ってきた。

「れ、レイ……」

簪はレイが来たことに安心感が少し生まれる。

レイは簪の近くに着地すると、さっきの巨大な拳を右手に戻した。

ファントムの両腕にはファントムの二倍近くの大きさを持つ巨大な腕が装備されていた。その名も『ギガント・ナックル』……

「早くISを展開しろ……。俺がフォローする」

「う、うん……」

簪は涙を拭くと、エクストラEXを展開した。

ゴーレム？は立ち上がると左腕の熱線をレイに向け放つ。

レイは左のギガント・ナツクルを前に出して熱線を防ぐ。

「くっ！・・・威力が前と違う・・・やはり改良機か！」

レイは床を蹴ってゴーレム？に向かっていくと右腕を突き出した。

ゴーレム？も左腕を前に突き出して両者の拳がぶつかる。

「な、何てパワーだ！？」

ファントムは徐々に押されていく。

『—————』

すると、ゴーレム？は右側から攻撃を受けてバランスを崩す。

それは、EXの背中エクストラの複合武装に搭載されている荷電粒子砲を簪は放っていた。

「簪・・・ナイスフォローだ」

「ありがとう・・・。レイ・・・一旦下がつて・・・」

そして簪は砲身を後ろにやると、今度はコンテナを展開した。

「・・・マルチトレースミサイル・・・発射」

そしてコンテナから無数のミサイルが発射されてゴーレム？に向かっていく。

レイはそのまま強引にゴーレム？を押し返して後ろにバックする。

そして無数のミサイルはゴーレム？に全て直撃した。

「これなら・・・」

「いや、まだだ」

すると、煙からゴーレム？が何事もなかったかのように出てきた。

「・・・まずいな・・・。ここじゃアーベントとナハトを展開できない・・・。外に追い出すには・・・」

レイはギガント・ナックルを見る。

「・・・やるしかない」

と、レイは拳同時をぶつけて、ゴーレム？に向かっていく。

「簪、俺の合図と共にもう一度ミサイルを発射してくれ」

「え？・・・で、でも」

「頼む！」

そしてレイはギガント・ナックルでゴーレム？に殴りかかる。

ゴーレム？はレイの攻撃を避けていき、ブレードでレイに攻撃してきた。

「くっ！」

レイはとっさに左腕を前に出すが、ゴーレム？のパワーで押し返された。

「今だ・・・ブーストナックル！」

押し返されたレイは右腕を突き出すと、そのまま右腕を射出した。

ギガントナックルはゴーレム？を弾き飛ばした。

「今だ、簪！」

「は、はい」

そして簪はミサイルを再度発射した。

ミサイルはゴーレム？に直撃すると爆発して煙をあげた。

「よし・・・。いけえ！」

そしてレイは両方のギガントナックルを射出すると、ギガントナックルはゴーレム？を掴んで外に繋がる遮断シールドに叩きつけた。

「・・・ブースター出力最大・・・『コードATA』・・・発動！」

するとギガントナックルから警報が鳴り出した。

「伏せろ、簪！」

「え？」

レイはとっさに簪を掴むと、床に伏せた。

その直後、ギガントナックルが光り出して、大爆発を起こした。

「だ、大丈夫か・・・簪？」

少ししてレイが簪から離れる。

「う、うん……。大丈夫……。でも今のって？」

「コードATA・・・強力な爆薬を爆発させる・・・まあ自爆装置だな・・・おかげで遮断シールドを破壊できたな」

そして立ち上がると、遮断シールドが破壊されて外が見えていた。

「行くぞ・・・。他のみんなも外にいるようだ」

「う、うん」

そして簪が先に出て、レイが外に出ろうとした瞬間だった・・・

突然残骸から手が出てきてファントムの左足を掴んだ。

「な、なに!？」

そしてそのまま左足をつかまれて、地面に叩きつけられて、残骸からボロボロになったゴーレム?が出てきた。

「こ、こいつ・・・まだ生きていたのかよ!？」

レイが驚いている間にゴーレム?がファントムの左足を掴んだまま右腕のブレードを振り下ろした。

「くっ!」

レイはとっさに両腕を前に出すと、腕側面の装甲を展開して、ビームの刃を展開してブレードを受け止めた。

するとゴーレム?はそのままレイを押しついき、地面に押し込んでいく。

「くそっ!・・・やれてたまるかよっ!」

と、レイは右足の前面装甲を展開してビームの刃を出して、そのまま横に蹴ってゴーレム?の右腕を切り落とした。

そしてそのままブースターを噴射させてアリーナ内に入っていった・・・

Story60 襲撃（後書き）

さすがに三作同時に書くとなると結構時間がかかりますね・・・。
これならば時間をかせ・・・あつ、なんでもありません・・・。

Story 61 絶望

レイがアリーナ内に入ると、そこでは激しい戦闘が繰り広げられていた。

「くっ……。なんてことだ……」

「……………」

「いけるな……簪？」

「う、うん」

「よし……。行くぞ！」

そしてレイは仲間の安否を確認するために仲間の元に向かう……

「セシリア！ 鈴！ 大丈夫か！」

最初にセシリアと鈴の元に向かった。

「れ、レイさん……」

「まあ、なんとかね」

二人は無事のようなが・・・ISはそうではない。

セシリアのヴァイスリッター・ティアーズの装甲には少しひびが入っており、攻撃を何度も受けていたことを物語る。

一方の鈴もセシリアより破損がひどく、左肩の浮遊ユニットの一部が消失して、装甲にはヒビがたくさん入っていた。

「二人ともISの損傷がひどいな」

「ええ・・・。先ほど遮断シールドを破壊して外に出たのですが・・・」

「むしろ相手の思う壺だったみたいね・・・」

「そうか・・・。・・・っ!」

すると右からゴーレム?が接近してブレードを振るってきた。

レイはとっさに左腕の展開装甲を展開して受け止めた。

「ちっ!・・・ジェットマグナム!」

そしてそのまま右腕のプラズマステークをゴーレム?の腹に叩き込み、それによってゴーレム?は後ろに吹き飛ばされた。

「なんとか耐えてくれ・・・。俺はシャルとラウラのほうに向かう」

「分かりましたわ」

「後でちゃんと援護に来なさいよ」

「ああ……。分かってる」

そしてレイはシャルロットとラウラの元に向かった……

「ぐっ！」

シャルロットはバンカーの杭でゴーレム？のブレードを受け止めると、その後ろからラウラが接近してきた。

「メガプラズマスライス！」

そして右腕全体にプラズマを纏わせ、ゴーレム？の背面を斬った。

しかしゴーレム？はなんともないかのようにラウラの方を振り向いた。

「くっ……」

そしてゴーレム？が左腕の熱線砲をラウラに向けた。

「くらえっ！ブレイカー！」

その直後にナハトを纏ったレイが瞬間加速でゴーレム？の横腹にブレイカーを叩きつけ、三回叩き込んだ。

それによってゴーレム？は横に飛ばされた。

「「レイ！」」

二人は同時にレイを呼ぶ。

「二人とも大丈夫か？」

「僕は平気だけど・・・ラウラが・・・」

「!？」

レイはラウラを見ると、ラウラの身体には血が流れ出ていた。

「ラウラ・・・大丈夫なのか!？」

「は、はい・・・。ISの治療で傷口は塞がっています・・・。です
が痛みまでは・・・」

「・・・それで済んだのなら運がいいか・・・。シャルは？」

「うん・・・アルトの右肩ハッチが破壊されているけど、戦闘に支障はないよ」

「そうか・・・。くれぐれも・・・無茶だけはしないでくれ」

「わかつているよ」

「・・・私もそのつもりです」

レイは二人を再度見てうなずくと、一夏と箒の元に向かう・・・

「くっ！」

一夏は雪片式型を振るうが、ゴーレム？のブレードに阻まれた。

「一夏！」

その後ろから箒が来て、雨月を振るい、ビーム刃を発射した。

『――』

しかしゴーレム？は左腕のエネルギーシールドで防いだ。

「くっ・・・！」

そしてそのまま熱線口を向けた。

しかしその直後、左腕の横からエネルギー弾が飛んできて左腕を撃ち抜いた。

「一夏、箒、無事か！」

今度はアーベントを身に纏ったレイが二人の元に来た。

「レイか」

「どうやら大丈夫のようだな」

「ああ・・・何とかな・・・」

「だが、こっちの消耗は激しい・・・」

「そうだな・・・。何とか一撃で仕留めることはできないのか」

「やろうと思っているんだが、やつらに隙がない」

「ああ。それに『絢爛舞踏』もそう何度も使える代物じゃない」

「・・・そうだな。なんとか耐えてくれよ」

「わかった」

「そのつもりだ」

そしてレイは神夜達のところに向かう・・・

「はあ・・・はあ・・・はあ・・・」

神夜は斬冠刀を前に出して、ゴーレム？のブレードを受け止めた。

しかし、斬冠刀にひびが入り、刀身が砕け散った。

「くっ・・・！」

「神夜！」

そしてゴーレム？の左側からフィオナが接近して、左腕のレーザーブレードを振るい、ゴーレム？を切りつけた。

しかしゴーレム？はそのまま右腕を振るい、フィオナを切りつけた。

「ぐっ！」

そしてゴーレム？は追撃をかけるため更にブレードを振り上げた。

「アタックファンクション！ ライトニングスラッシュ！」

すると右側から巨大なエネルギー刃が飛来してゴーレム？の右腕のブレードを切り落とした。

「！？」

フィオナはエネルギー刃が飛んできたほうを見ると、グランメガブラズマブレードを構えて向かってくるファントムが見えた。

「大丈夫か！神夜、フィオナ！」

「・・・れ、レイさん・・・」

「・・・レイ」

神夜とフィオナはレイの元に来た。

「・・・私は・・・大丈夫ですが・・・」

と、神夜は右手に持つ折れた斬冠刀をレイに見せた。

「そうか・・・。フィオナはどうだ」

「・・・見ての通りよ」

見れば、ナインボールの装甲は焼け焦げた箇所が多く、グレネードランチャーも破壊されていた。

「戦えるのか？」

「はい・・・。旧式ですが前の斬冠刀を使用します」

「破壊されたのはグレネードランチャーだけよ。私はまだ戦える」

「そうか・・・。後で援護に来るからな」

「わかりました」

「・・・」

「無茶はするなよ・・・フィオナ」

「・・・・・・・・!!」

そしてレイはその場を去った……

「それにしても……楯無さんの姿が見当たらない」

「……そういえば」

「まさか……まだピット内にいるのか？」

と、辺りを見回していると……

ズドオオオオオン!!

「!?!」

すると破壊されていないピットの遮断シールドが派手に爆発した。

「な、なに……!?!」

「ま、まさか……」

レイと簪はすぐにそこへ向かった……

すると、濃い煙から咳き込みながらマリが出てきた。

「マリ！」

「し、師匠・・・」

「マリ、楯無さんはどうした？」

「そ、それが・・・楯無さんが・・・」

するとマリは半泣きになった。

「楯無さんがどうしたんだ？」

「・・・あいつを破壊するために・・・最後の切り札を使ったんです」

「な、なに・・・？最後の切り札だと！？」

レイはとっさに煙を払いのけて進んでいくと・・・

「っ！？」

そこには、ミステリアス・レディーの装甲が散らばり、地面にうつぶせて倒れていた楯無の姿があった。

「楯無さん！」

レイはとっさに楯無の傍に寄った。

「……………」

そして簪もその姿を見て、衝撃が走る。

「…………気を失っているだけか……。しかし、装甲に使っている水のナノマシンがない……。それを使ったのか……」

そしてレイは前を見ると、そこにはその攻撃で大破したゴーレム？が地面に倒れていた。

「…………お、お・姉ちゃん……」

すると、簪は楯無の近くに来ると涙を流した。

「…………簪」

「師匠！」

「！」

すると、一体のゴーレム？がこっちに向かってきていた。

「くっ！」

するとマリがその前に立ちはだかつて、背中に背負っている斬破刀

を抜き放ち、構えた。

「マリ！」

レイはとっさにマリの前に来ると、グランメガプラズマブレイドを前に出してゴーレム？を受け止めた。

「師匠・・・」

「マリ・・・。お前は楯無さんを守ってくれ」

「し、しかし・・・師匠一人では」

「俺を誰だと思っている・・・。弟子と生徒会長は守って見せるさ」

「・・・分かりました・・・師匠も頑張ってください」

そしてマリは楯無の傍に向かった。

「・・・」

レイは前を向くと、ゴーレム？を押し返した。

「この先には行かせんぞ！」

そしてレイはグランメガプラズマブレイドを構え直すとゴーレム？に向かっていく。

『-----』

ゴーレム？は左腕の熱線をレイに向け放っていく。

レイはグランメガプラズマブレイドを振るい、熱線を切り裂いていき、そのままゴーレム？の目前まで来た。

「くっえ！」

そしてレイはグランメガプラズマブレイドを振り上げた。

しかしゴーレム？は右腕にブレードで受け止めた。

「くっ・・・！」

そしてゴーレム？はそのままレイを押し返すと、左腕の熱線を放った。

レイはとっさに熱線をグランメガプラズマブレイドで防ごうとしたが、衝撃は緩和できずそのまま後ろに飛ばされた。

「くっ・・・。やるな・・・」

と、体勢を立て直そうとすると・・・

「！・・・しまった！」

ゴーレム？の横を別のゴーレム？が通り過ぎて行った。

「くっ！」

そしてゴーレム？の前にマリが立ち、斬破刀を構えた。

『――』

ゴーレム？は左腕の熱線を放つと、その瞬間に瞬間加速を掛けてマ
リに接近した。

マリは熱線を回避するが、その直後にゴーレム？が目の前まで来て、
ブレードを振るう。

「くっ！」

そしてマリは斬破刀を前に出すが、ゴーレム？のパワーに弾き飛ば
された。

「簪！」

「！」

そしてゴーレム？は楯無の傍にいる簪の元に向かう。

「くっ・・・」

簪はとっさに荷電粒子砲とミサイルを発射して応戦するが、ゴーレ
ム？は左腕のエネルギーシールドで防ぎながら簪に接近する。

そしてゴーレム？はブレードを簪に振り下ろした。

「！！！」

簪は両腕をクロスさせて防御体勢に入った。

しかしブレードは簪に届くことはなかった。

「・・・？」

簪は腕をのけて前を見ると・・・

「！！！！」

簪の前にはゴーレム？の攻撃から簪を守るように楯無が立っていた。

しかしシールドエネルギーが尽きていたので楯無の背中からは血が吹き出た。

「————」

そして楯無は簪にもたれかかるように前に倒れる。

「お・・・お姉ちゃん・・・」

「ふふ・・・そう呼ばれるのって・・・何年ぶりかしら」

楯無は意識がもうろうになりながらも簪を見る。

「・・・な、なんで・・・？」

「・・・妹を助けるのに・・・理由が要るかしら」

「・・・・・・・・！」

「・・・・・・・・」

そして楯無は意識を失い地面に倒れた。

「お姉ちゃん！」

簪は涙を流して楯無を揺さぶった……

「・・・・・・・・ぐっ・・・・・・・・」

レイはそれを見て歯を食いしばる。

「な、なんで……俺はいつも……」

しかし、それが命取りになった……

「っ！？」

するとさっきのゴーレム？が後ろからファントムの胴体にしがみ付いて来た。

「な、なにっ！？」

レイは何とか振りほどこうとするが、ゴーレム？のパワーに負けていた。

「何のつもりだ・・・!?」

更に前から簪を襲ったゴーレム？がレイの前から来てしがみ付いて来た。

「くっ・・・このまま締め殺そうって気か！」

だが、その予想はハズレ、更にひどいものだった・・・

『『デストロイ!』』

「っ!？」

するとゴーレム？二体から警報が鳴り響き、ゴーレム？の胴体から熱があふれ出てきた。

「こいつら・・・まさか自爆する気か!？」

レイは何とか逃げようともがくが、もうどうすることもできなかった・・・

「・・・!!」

そしてゴーレム？は光を放つと大爆発を起こした・・・

Story 61 絶望（後書き）

今回ぐだぐだな気がするのは、この話を書いている時期がテスト期間中でしたので、なかなか書く暇がなく、手が抜いているところがあるかもしれない・・・。

それと、最近感想が少ない・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0819v/>

IS－インフィニット・ストラトス－三種のISを操る者

2011年12月3日17時48分発行